
天と地をつなぐ都

稲村恵子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天と地をつなぐ都

【Nコード】

N0866Q

【作者名】

稲村恵子

【あらすじ】

紀元前5世紀 イエスもムハンマド（マホメット）もまだこの世界に誕生していなかつた時代 エデンの園があつたといわれる文明の発祥地「メソポタミア」帯は世界帝国を初めて樹立したペルシア人（イラン系アリア人）によってに支配されていた。その領土は西アジア全域に加えて東はインドのガンダーラから西はバルカン半島やエジプトにまで至つていた。帝国内の部族も多岐にわたり、肌や目の色もさまざまだった。信じる神も、旧約聖書の神・ヤハウエを信ずるイスラエルの民（ユダヤ人）をのぞいては神は唯

一の絶対的存在ではなかった。多くの部族は、神話と宗教がひとつに溶け合った世界に生きていた。ギリシア神話にみられるように戦いの勝敗も、神々の手によってなされるものと信じられていた。この物語は、後世の歴史家に「歴史はシュメールからはじまる」と言わしめたシュメール人の末裔・ヤマトとその仲間が苦難の末に東の果ての国（天と地をつなぐ都）に至るまでを、当時の歴史にそって描く。

序章

漆黒の空が赤く染まる。

真昼のような明るさだった。

城門のそばの聖塔シクフットの先端が闇の中に浮かび上がって見える。

ペルシア帝国の冬宮は火炎に包まれていた。

赤い竜のような火柱が、レバノン杉の屋根の上でのたうっている。ザクロス山麓から吹きつける折りからの強風をうけて、またたくうちに燃え広がり、王族や貴族を恐怖に陥れた。

帝国の礎を築いた英明な王・ダレイオス？世の建造した壮麗な王都シュシャン（スサ）の宮殿はバビロニアの都バビロンから東に徒歩で12日の行程（約350？）にあるエラムに位置し、西に広がる町を見下ろす石の基壇アハダナの上に建っていた。

「なぜだ、なぜなのだ……」

妻妾のいる王宮ハイレムの北の丘にある拝火壇へと、大王の孫「アルタクセルクセス王はおぼつかない足どりで向かっていく。

「陛下、お待ちください！」

屈強な兵士らを引き連れた親衛隊長は大声で言上した。

「放火に、まちがいありません」

宦官長の裏切りを告げようとするが、王はピラミッド型の拝火壇の頂上をひたすらめざす。神官マユスや宦官の一団、王族らも後を追う。

「宦官長の捕縛を、ただちにお命じください」

「父上とともに、過ぎした宮殿は火の神の生け贄となるのか……」

腹部が円形で、両肩から大きな翼が伸び、鳥の足をもつ髭づらの彫像「有翼円盤に救いを求めるしか、年老いた王には思いつかないようだ。

「この51年間、余は怠惰であったことも臆病であったこともない。恭順をしめさぬ国々には果敢に戦いを挑み、つき従う国には多大な恩恵を与えた。そして何よりも、29の部族からなる20州の民に

は平和と秩序をもたらした」

ダレイオス？世を祖父に、クセルクセス？世を父にもつアルタクセルクセス？世は18歳で王位を継いでのおち、インドのインダス川からエジプトのナイル川に至る広大な領土を半世紀にわたって治めてきた。

「後の世の者たちは、余の行いをなんと伝えるのであろう。余は、メソポタミアを平定したキュロス大王にならない、異国の者たちの信ずる神々にも寛容であった。そうだとも！ 父上の破壊したバビロニア人の神殿を建て直し、ユダヤ人を憐れみ、書記官にすぎないエズラを行政長官に任じ、金銀をもたせてエルサレムに帰還させ神殿の再建を許した……」

頂上に達した王は、炎の彼方を見つめ、
「雪をいただき、銀白色に光る岩山には一木一草もない。獲物となる動物も生息していない。わがアケメネス王家の歴代の王たちは奇形の山を好み、険しい高地に都を建てた」

張り出した塔をもつ堅固な城壁で囲まれた宮殿と町は城壁の外側に灌漑水路が巡らされ、荒々しい山肌に浮かぶ小島のようにであった。
「陛下、一刻の猶予もありません！」

「われわれの祖先は人を寄せつけぬ地にこそ、あまたの神々の中でも最強の神・アフラマスタが宿り、われわれをご加護くださるものと、祖父も父も余も信じたのだ」

王は、バビロニア人の神官に命じ、麝香と大麻の種子を燃え盛る拝火壇に投げ入れさせると、銀製の酒杯を手にした。

「アルタクセルクセス、偉大なる王、諸王の王、諸邦の王、王ダレイオスの子なるクセルクセスの子、アケメネスの裔^{すえ}」

もう一つの王都ペルセポリスの謁見の間にいるかように宣言した。
「多くの者どもの、ただ1人の王である」と。

新年の式典に訪れる服属国の君主や外交官、武将たちは天に届くような楼門をくぐり、1万人を収容できる大広間^{アバタイナ}で王と謁見する。
「メディアア州に行けば、ペルセポリスがある……。いや、だめだ」

インドからは砂金が、エチオピアからは象牙が、スキユタイからは馬が　毎年、多くの国からさまざまな貢ぎ物が献上された。いまこの瞬間も、王の権威と帝国の威信に揺るぎはない。しかし、眼前で起きている災厄は栄華に翳りの見える兆しではないのかと、王は疑心暗鬼にかられる。

「ペルセポリスには住めぬ……」

黄金の王冠ティアアラを被った王は激しく首をふり、猫背を屈めて紫の王衣の中に長い右手を入れた。首飾りを取り出し、首にかけた。

「あの女が……いまも余を呪っているやも……」

王は瘦けた頬に歪んだ笑みを見せる。半狂乱の愛妾と茫然自失の息子・セシディアノス（クセルクス？世）を振り返った。

「安堵せよ。アフラマズタの神聖な炎により、卑しき者どもの野望はかならず打ち砕かれる。相違ないな」

王は、気に入りの宦官に同意を求めた。

相手は低頭し、ぬめりのある声で言った。

「王家の安寧と陛下の治める国家が未長く繁栄するようにと常に祈っております」

「余は、うぬらに欺かれたのだッ」

王はまなじりをあげ、有翼円盤にむかつて祈りを捧げた。

「あまたの神の中で最大者なる、偉大なるアフラマズタ　この世界を創世し、人の子をつくり、余を王にし、よき馬とよき戦車を授けたもうた神よ、余を、余の王家を守り給え」

親衛隊長は兵士らに命じ、身を震わせる宦官らの周囲を固めさせると、帯剣を抜き、いくつもの頭上に振りおろした。

石の床が血の海と化した。

王は親衛隊長に銀杯を下げ渡した。

「ありがたき幸せに存じます」

親衛隊長は、杯に血を満たし、善なる神「アフラマズタ」に捧げた。王は、虚ろな眼差しを星々のまたたく冬の夜空に向けた。

「海の王子にして、青竜の子、ティアマトよ、お前は今頃、海を渡

り、東の果ての国で王になっているだろうか。なぜ、お前を行かせたのだろう。時を遡らせることが可能なら……お前とともにこの国を治めたであろうに「

1話

ごつごつした岩山のつらなる溪谷の斜面に太陽が沈む。

アルタクセルクセス王の治世八年（紀元前467年）、イヤルの月のはじめ（4月中旬）。雨の降らないこの乾季　パレスチナ南部は灼熱地獄と化す。

ヨルダン川をわたった突風は昼と夜をわかたず、熱砂をはこび、大地を砂塵のうねりに変える。

四肢をかばってくれるものは影すら見えない。肩かけに似たマントで全身をおおった少年は、ひと固まりの枯れ草まで這って進む。

山羊皮の袋を口にくわえた。

白く汚れた顔がゆがむ。水は昨夜のうちに飲みつくしていた。血がにじむほどひび割れた唇をかみしめる。

「もう1歩も歩けない」

少年は皮袋をなげ捨てると、顔を上げた。

日没とともにあらわれた雲の塊は天の星をかくし、北の方角を見定められない。波打つ流砂に膝を折り、肩に担いだえびら（矢と弓を入れて背中に負う武器）をおろす。

… 姉さん。

少年は砂の上にマントを敷き、突っ伏した。

水も、食糧となる獲物も見つけられず、ひたすら歩きつづけた10日余りの出来事が少年の頭をかけめぐった。

… 疲れたよ。

少年の住む村が、なんの前ぶれもなくベドウインの掠奪に遭わなければ、ジャツカルやハイエナも棲めない荒野をさすらうことはなかった。定住地をもたない流砂の民・ベドウインは近隣の部族から砂漠の秃鷹と恐れられていた。パレスチナ南部やヨルダン川の東やシナイ半島などの砂漠に暮らす彼ら遊牧民の多くが天幕に住むアラブ人だった。家畜の食む草が枯れる乾季に入ると、大麦の刈り入れ

を終えたばかりのイスラエル人（ユダヤ人）の村々をおそう習わしがあった。しかし、ユダ地方の山地の集落は低地の大きな集落と比べると、安全だと思われていた。

11日前。

ベドウィンがこちらに向かっているという噂を聞きつけた村長は村人を脱穀場に集めた。

「どうして、やつらにここが知れたのだらう。内通する者がいるのか。老人と女子供ばかりで鉄製の武器を使える者が少ないことも、知っているようだ」

「われわれの神・ヤハウエの怒りをかったのだ」長老は吐き捨てた。「どこの誰ともわからぬ子供らが村にきた日から、いずれ、こうなることはわかっておった」

父の妻にあたる女は、2度と家にもどるなと言った。

村長は災いの元となった少年とその姉を村の広場に引き出し、防護壁の外へ追い出そうとした。が、その前に、乾いた山道を登ってくるラクダの足音を耳にした村人たちは武器を取りに急ぎ家にもどった。

姉は少年の手を引っ張り、きゅうり畑の番小屋に逃げこんだ。

「僕も戦う！」と言う少年に、「お前に、人は殺せないわ」と姉は言った。

「父さんから弓を習ったから大丈夫だよ」

姉と弟が言い争っている間にも、防護壁を越えてくるベドウィンの奇声が耳に飛びこんできた。

「僕が囷になる」

少年が外へ出ようとすると、

「お前は海の王子なの。海の水の神・ティアマトの子なのよ。だからいつか、7つの頭をもつ青い竜となって国を建てるわ」

そう言って、姉は首飾りを見せた。

「鎖も、大きな青い石の縁飾りも黄金なのよ。夜空に輝く星のようでしょ。この首飾りには、青い竜の力が宿っているの。かならずお

前を守ってくれるわ」

姉は正気をなくしたのだと、少年は思った。

「お前が、ティアマトの子である証しなのだから、けっしてなくしてはだめよ。王子と呼ばれる日まで、誰にも触れせないでね」

姉は、首飾りを小さな皮袋に入れると、嫌がる少年の首にかけた。

「父さんや兄さんたちと会っても首飾りを見せてはだめよ」

少年は、えびらを背負い、姉の手をつかむと、ここに潜んでいるようにと言った。

「あの男は父さんじゃないわ。だから、探すのよ、ほんとうの父さんを」

父親のイサは、妻の産んだ3人の息子とともに乾季のくるずっと前に旅立っていた。この村の男たちは、聖なる都・エルサレムに詣でるついでに働きに出ていた。

「自分が何者なのか、お前は知らなくてはならないわ」

「姉さん……!？」

「お前には使命があるの、忘れないで」

「それなら、どうしてずっと黙っていたんだよ」

姉は少年の頬に触れた。

「なんていとしいの！ お前の心がまっすぐで汚れのことは瞳を見ればわかるわ。何もわからないまま旅に出なくてはならないなんて

……」

「旅って？」

「召使だったアヤイナが話してくれたの。わたしもお前も尊い方から生まれたそうよ。育てられない事情があつて離れ離れに暮らしたそうだけれど、いつか、かならず、迎えに来てくれるんですって」

「何を言ってるのか、少しもわからないよ」

姉は潤んだ眼差しになった。

「遠い遠い昔に、傲慢で残酷な民が神々の住む世界にもぐりこんできて、天空の美しい都を滅ぼしてしまったの。その時から、わたしたちの旅ははじまったの。だからティアマトの子であるお前がもう

1度、国を失ったわたしたちシュメール人のために天と地をつなぐ都を建てなくてはならないのよ」

「シュメール人　？」

羊やラバの啼き声にまじって、村人の叫び声が耳をつんざく。

姉は弟の手を固く握りしめと、目を閉じるように言った。少年が従ったとたん、姉は弟を麦わらでおおい隠していた坑あなの中に突き落とした。

「姉さんっ」

少年の落ちた坑は身の丈よりずっと深かった。よじのぼろうとしても手が滑って届かない。矢尻で、こつこつ土を掘って足場をつくるしか方法がない。

少年は懸命に手を動かした。

その間も、ベドウインの雄叫びと人々の苦しみの声が果てしなくつづいた。

突然、恐ろしい静寂がやってきた。

なんとか暗闇から這い出た少年の目にした光景は想像を絶するものだった。父の妻と一族の骸はすぐに見つかった。蛇の脱け殻のように焼けただれて縮んでいた。少年は声をかぎりに姉の名を呼んだが、風の音しか返ってこなかった。

乾いた頬に涙が流れる。

……ずっと一緒だと思っていたのに……。

喉の渇きと砂の重みとで、手足の力がしだいに失われていった。

……僕は、どうすればいいんだよ。

砂漠の夜は寒い。耳元でこぼれる砂塵の音が、少年には姉の囁く声に聞こえるような気がした。

まどろみがやってきた。

誰かが、少年の名を呼んでいる。

「ヤマト……ヤマト……目を覚まして、いつかきつと会えると信じてるわ」

少年は頭をもたげた。弓なりの月が見てとれる。砂に埋もれた半

身を起こした。

目を上げる。

明けの明星が彼方にまたたき、月光とともに行く手を指し示していた。

「かならず会えると信じるよ、姉さん」

ヤマトはサンダルの紐を結び直した。

仄かな灯りの下、姉のナンナは夜毎、土間に座り、すいた亜麻で機を織りながら、不思議な物語をアラム人の言葉で語った。

「遠い遠い昔、天空の都に住んでいた人たちがいたの。でも、大きな洪水があつて、地上に降りてきたのよ。神のなさったことよ。どうしてなのかしらね？」

ヤマトは手白で小麦を挽きながら耳を傾けた。

「生き残った人々は大きな川を下つて、ウルクというところに塔を建てて聖なる場所としたのよ。そして大いなる神に祈つて、自分たちを救つてくれる英雄を与えてくださいと祈つたの。きっと苦しいことがたくさんあつたのね。想像がつくわ。それで、生まれたのが、ギルガメッシュよ。彼は大いなる神に創られたの。だから3分の2は神で、3分の1が人間だったのよ」

「そんなの嘘だよ」

「ほんとうよ。賢くて、強くて、姿も美しく、彼に勝る者はいなかったの。武器をとつても並ぶ者はいなかったつてそうよ。人々は、彼にひれ伏したでしょうね」

「強いと、人々は崇めるの？」

「でも、ウルクに城壁を築いて、王となつたとたん、彼は人々を苦しめるようになったの。気に入った女がいれば思い通りにしたのよ。人妻であつても、ね。がっかりするわ。大いなる神は、天空の女神にギルガメッシュと競う者を創らせたの。女神は自分の姿に似せて、エンキドゥを創つたのよ。」

女のような波打つ髪をもつた彼は山に住み、獣の皮を身につけ、

動物たちと暮らしていたそうよ。ウルクの人々は彼を怪人と呼んで恐れたの。それを聞いたギルガメツシュはおびき出すために、神殿に仕える美しい女をエンキドゥのもとに送ったの。神殿娼婦と呼ばれていた女よ」

「何それ？」

「身分の高い男たちの思い通りになる女のことよ。ぞつとするわ。ねえ、ヤマト、お願いだからそんな女を好きにならないでね。もし、お前がエンキドゥのように淫らな女に夢中になったら許さないわ」
ヤマトが笑うと、

「女と戯れるエンキドゥを見た動物たちは彼のもとを去ってしまったのよ。彼は追いかけてよとしたけど、以前のように走れなくなっていたの。あたり前よね。もう彼は森の住人ではなくなってしまったんだもの。」

嘆き悲しむ彼女に女は囁くの。あなたは人間なのになぜ、獣たちと野原をうろつきまわるのかって。女にはエンキドゥの住む世界の素晴らしさがわからなかったのよ」

「僕も野山にいと、心が満たされるよ」

「黙って！ 女はね、ギルガメツシュのことをエンキドゥに話すの。どんなに彼が魅力にあふれているかってね。動物たちを愛する心を失ったエンキドゥは嫉妬にかられて、ウルクに行くことを決心するの。裸だと恥ずかしいから、女の衣を半分に裂いてもらい、それを着るの。」

女に手を引かれて町に向かうのよ。ああっ、いやいや、エンキドゥなんて嫌い。お前はどんなことがあつとも、姉さん以外の女の言いなりになんてならないでね」

その頃、ギルガメツシュはエンキドゥの夢を見ていたと、姉は話しながらうつつとりした表情になった。

「2人の心は出会う前から繋がっていたのよ」

2話

灼熱の太陽が頭上にあつた。

金色の髪の少年は、黄灰色の砂漠の彼方に向かつて目を見開く。大きく澄んだ青い目はいつも前を見つめているような強い眼差しをしていた。

縞模様の額帯で押さえきれない、金色の髪は陽光に輝き、麦の穂のように風になびいている。

名はサライ。

高い鼻に白い肌は、ひと目でアリア系の白色人種だと知れる。神に選ばれしイスラエルの民（ユダヤ人）ではなかったが、預言者の記した律法書トラーに精通していた。アンモン人の母のつけた名前も、なぜかユダヤ人によくあるものだった。

「見つけたぞッ」

立ち枯れた雑木の中に、なつめやしの木を見つけると、背中を鞭打たれるような格好で突きすすんだ。ベエルシェバからヘブロンに向かう交易路からそれることに一抹の不安はあつたが、空腹には勝てなかった。

両手を地について、這つていったが、実はなつておらず、樹脂がしたたつていると見えたのは木の幹だった。

乾いた木肌に鼻を近寄せる。かすかに命のおいがした。砂礫の斜面をよじ登ると、丘の横腹に30ばかりの小さな家が建ちならぶ光景に出くわした。

「イスラエルの民に祝福を！」

サライはもつれる足で駆け出した。どろ煉瓦を積み上げた防護壁に突き当たった。出入口を探すが、ない。

「冗談だろ？」

住人は侵略者を怖れるあまりに一時的に出入口をふさいだようだった。ようやく探し当てた場所は子供も通れないような狭い入り口

だった。これを通り抜けるには、身をふたつに折らなければならぬ。餓死寸前の体を小さく束ねるのは、砂嵐を避けるよりも手間どった。

押し入ると、悪臭でめまいがした。男女の区別もつかない死骸がいくつも転がり、焼け焦げた家畜の骨が散乱していた。

耳を澄ますと、呻き声が聞こえる。

懐の短剣を握りしめ、声のする戸口に1歩づつ近寄った。

暗い屋内を見回す。

狭い部屋が一つあるきりだ。純白の下着姿の少女が麦わらの上に横たわっていた。

爪先立って、のぞきこむ。まぶたを閉じた額には大粒の汗がにじんでいたが、小さな顔のまわりに広がる黒い巻き毛はうなじに優美な影をつくっていた。これまで目にしたどの女よりも美しい顔立ちをしている。胸元にかけられた透きとおるシヨールからは臭いだことのない匂いがした。

耳や首や腕を飾る装飾品も、ユダヤ人の少女が身につける色や形のものではなかった。褐色の肌はなめらかで、うすく開いた唇はザクロの花のように赤い。

物音がした。

背の高い男が姿を現わした。斧を手にしている。土地の者でないことは一目で知れた。先の尖った帽子からはみ出た鉄錆び色の髪は毛羽立ち、肌は枯草のような色をしていた。切れ込んでいる目は男の酷薄な性格を現していた。

文字でしか知らない北方のスキユタイ人（サカ人）だろうか。馬の生き血を飲むと聞いていた。

「お前が殺ったのか」男はヘブライ語ではなく、アラム語を話した。サライは即座に首をふった。

男は片頬を歪めると、大腿に歩いてすぐそばにきた。そして、少女の首筋に指を当てた。血管に触れているようだった。

「まだ生きているな」

男は腰にぶらさげた皮袋から取り出した丸薬を少女の口に押し込んだ。

「この病に、効くとは思わんが」

男は後ろを見た。

部屋の隅にかまどがあり、銅製の盥がのせてあった。

サライは駆け寄った。

水が残っている。盥たらいを持ち上げ、一息に飲み干そうとした。

男の釣り上がった目尻がわずかに動いた。「やめる」

冷たい光を放つ斧が、空気を切り裂くような音を立てて耳元をかすめていった。

目のはしで斧の行方を追う。蛇が頭と胴体とに分かれ、どちらも死にきれずにうごめいている。

「鹿サカはともかく蛇やサソリを見ると殺したくなるんだ」

男は斧を拾い上げ、蛇の頭を踏んだ。毒蛇の血で、ぶどうの葉を浸すと貼り薬になると言った。そして、屋内を徘徊しながら、

「エジプトでは、何度も脱皮する蛇を神のように崇められているが、俺に言わせると、命がいつまでもつづくと思うだけで寒気がする」

とんがり帽子の男はそう言って、土器の中からナツメヤシの実をさぐり出すと、投げてよこした。

サライは無我夢中でかじった。しかし、草の根のように乾いた実を詰めこまれた胃袋は拒絶した。

「吐くか、食うか、どっちかにしろ」

男は、山羊皮の包みの中から凝乳チーズを取り出し、少年に与えた。

「年はいくつだ？」

「15」

「アラム語が話せるのか？ どこで習った」

「西……いや南……」

この山村とはかなり距離のあるユダの南端、砂漠の端に位置する町「ベエル・シェバ」で育ったが知られなくなかった。

「このあたりの山岳地帯は乾季になると一滴の水にも困るようにな

る。町を追われた者はベドウィンのように砂漠で生きるしかない」

男は板切れをかき集めると、別の皮袋の中から火打ち石を取り出し、壁に備えてあるかまどに火をおこした。

黒い煙が立ち上り、小さな窓から出ていった。サライはもくもくと口を動かしつつづける。

「食い物に勝てる奴なんて、この世にはいない。いるとすれば、それは化け物か、あるいは神の子か。いや、エズラがいるな」

ま、どうでもいいと呟いて、男はかまどの火で盥の水をわかった。「祭司エズラのことか」

「お前も、やつを神の子だと思ってるのか」

男は少女を抱きかかえ、火の傍に寝かせた。

「ちがうのか？」

「本人は、天の神の律法の写字生にして祭司エズラだと称している」
今から9カ月前 前年のアブの月（紀元前468年8月初め）

に、神のよい御手にしたがって囚われの地「バビロンからイスラエルの都」エルサレムに帰国したという書記官の話をも男は語って聞かせた。ラビ・エズラは、神の声をその耳で聞き、その手で、神の言葉を書き表わすと人々に噂されていると。

「若い王の心を動かしたのだからな。ユダヤ人もは、神の子だ、救世主だと騒いでいる」

青い瞳が輝いた。男への警戒心を解いたわけではなかったが、神の子の話に心が高ぶった。

「エルサレムに行けば、誰でもエズラに会えるのか」

「会ってどうする？」

「ペルシアの都・バビロンに行くついでに、天の神のなんとかにも会ってみたいんだ」

「名はなんという？」

「サライ」

「サライ、なぜ、お前が独りで旅しているなのか、俺にはわからないが、ペルシア軍の発行した通行証がないとバビロンにはまず行き

つけない」

「どうすれば、行きつけるんだ？」

「自分の頭で考えることだな。お前の名はヘブライ語で、争いを好む者という意味だろ？」

自ら戦って、己れの意志を貫くんだな」

「あなた、ペルシア人じゃないのか」

「砂嵐に吹き飛ばされてしまった民の子だ」

「そんな民があるのか」

「五万という。人間は土地をめぐって争う哀れな生き物だからな。

他部族の者には情け容赦しない。しかしお前は」

男は言葉をきり、

「いいことを教えてやろう。いま、バビロンの宮廷は、王の母親とユダヤ人の宦官が牛耳っている。宮廷に潜りこんだら、どんなことがあっても白人奴隷の子だと答えるな。ソグド人とユダヤ人の混血だと言え張れ」

「ソグド人？ 俺のような顔つきをしているのか」

「彼らは隊商キャラバンを組織し、俺たちが聞いたことも見たこともない東の果ての国まで旅している」

「ソグド人というのは、商人なのか？」

男は頷くと、たった今思いついたように、ペルシア人の中にも青い目の色をした者が大勢いると言った。

怪訝な表情をすると、

「ソグド人もペルシア人も、ここよりずっと北部の寒い地方で暮らしていた遊牧民だったのさ」

西の大陸に流れていった者たちとも同じ種族だと男は言う。

「お前の父親は、ヨーロッパの蛮族だと思ってまちがいない」

「ヨーロッパって、ギリシアのことか」

「ギリシアの都市国家ポリスはペルシアより古くからある。中でも、ペルシアを打ち負かしたイオニア人のアテナイと、ドーリア人のスパルタが近隣にその名を轟かせている」

「アテナイかスパルタに行けば、俺と似たような顔つきの連中ばかりなのか？」

「いや、アテナイの北にマケドニアがあつて、そのさらに北に野蛮な種族がいる。顔に刺青をし、獣の皮を身にまとい、熊の油を体に塗っているから臭い。言葉も通じない。当然、書物とは無縁な連中だ。青い目をしている者や金色の髪の毛の者がうじゃうじゃいる。トリア人はそれをつらを捕まえて、白人奴隷にしている」

「やっぱり白人奴隷の子なのか、俺は」

男は斧の刃に息を吹きかけながら、

「がっかりするな。ペルシアといえども所詮、文字も制度もメデアからの借り物だ。そう長くつづかないだろうよ。軍の力で他国民を隷属させても、今じゃ自国のために戦う将兵を集めることさえままならないんだからな。いつ白人の蛮族にとってかわられるか、わかりやしないさ」

サライは目を見開いて盥の水を飲んだ。

「ペルシアは、王とその一族郎等が権力を掌握している専制国家だ。ギリシアやローマの都市国家は違う。彼らの国はそれぞれが独立していて競い合っている。だから強い。馬を産するマケドニアには、どこの国にでも備われて戦う男たちさえいる」

「ギリシア人の拜める神のほうか、ペルシア人のアフラマスタより強いつてことなのか？ ギリシアの神はなんていう名前なんだ？」

ユダヤ人のヤハウエより強力なんだろうなあ」

「子供相手に話しても、しかたがなかつたな。聞かなかつたことにしてくれ」

「頼むからもつと教えてくれよ。ユダヤ人の巻き物メギッラーに書いてないいろいろなことを、俺は知りたいんだ」

男はくるりと背を向け、横になると寝息を立てはじめた。

焼けつくような昼間の日差しは藍色の闇に吸い取られていた。

冷気がサライの肺を充たす。

少女の呻き声はとつくに止んでいた。

翌朝、目を覚ますと、とんがり帽子の男も美しい少女も消えていた。

「どうして、黙って行ってしまっただよ」
盥を蹴飛ばした。

手のひらより小さい、四角い羊皮紙パピルスが舞い落ちた。
拾い上げる。

帝国内の通行を許可すると記してあった。青年が弓を射る絵柄の印章も押してある。

「通行証じゃん！」

ほころぶ口元を誰かに見られやしないかと、あわてて口を閉じた。
あばら家の外に出ると一面、霧に包まれていた。

やがて次の日の太陽が姿をあらわすと、曲線をえがく砂丘の尾根に虹色の閃光がさした。

道はどこまでもつづいている。

ベエル・シェバから北東に向かい、台地を上ってユダの山地へたどりついた。ここからヘブロンへ向かい、エルサレムへ行き、さらに北へ向かい“王の道”をたどればバビロンに至るはずだ。

3話

ヤマトは石灰岩におおわれた岩山を這い上り、白い峰に立った。眼下には、塩を吹いたような光景が広がっていた。

「これを下るなんて、できっこない！」

一足ごと歩みを止めた。このまま乾いて死ぬほうが楽だと思った。

全身をなげ出すように下降すると、白い稜線のふもとに低い囲いが見えた。

駆け出した。

えびらを肩からおろした。

「井戸だ！」

備えつけの、綱につるした革の手桶を投げ入れたとたん、黒木綿のターバンを頭に巻きつけたベドウィンの一団が、物陰から飛び出して来た。

一時でも弓矢を手離れた愚かさを悔いた。

男たちは腹と胸の中間あたりに幅広の派手な文様のベルトを締めていた。

垂直に挿した剣の鞘や柄に宝石を埋めこんでいるのか、きらきら光っていた。

濃い髭の男が怒鳴った。「誰の井戸やと思とるんや！」

左右の眉はつながり、額に毛虫が這っているようだった。彼らは、訛りのつよいヘブライ語を話した。

ヤマトは後ずさった。

髭男の真後ろにいた小男がひよいと顔をのぞけた。赤い毛織物を頭に巻きつけている。

「姉さんの肩かけだ！」ヤマトは駆け寄った。「どこで、それを

「

小男は2、3歩すすみ、頭を突き出すような仕草をみせた。思わ

ず手をのばすヤマトの顔面を、小男は殴りつけた。

「己れの頭の上の蠅も追えよーな小僧は行き倒れるか、売られるしかないんやでえ」

小男は髭男に向かって、

「おかしら、こいつは、じょうもんでつせ」

ヤマトは小男に飛びかかった。被っている赤い毛織物をむしり取るうとしたのだ。小男はヤマトの勢いに押され、尻餅をついた。

「なめんなよオ、小僧」

髭男はそう言うと、切っ先が月の形に曲がった短剣を鞘シヤンビユーアからぬき、頭の上に振りかざした。

威嚇するためなのだろう、一瞬静止した。

ヤマトは砂をひと握りし、顔面に投げつけた。

髭男はうつと叫び、短剣を落とした。「クソ餓鬼めッ」と頭を突き出して突進してくる。

ヤマトは髭男の股下を潜りぬけながら短剣を素早く拾いあげ、後ろ手で円を描いた。髭男の剥き出しの膨ら脛にできた裂け目から血がしたたった。

敵の人数を計算する。

……4人いる。

ヤマトは土煙をあげて駆け出した。盗賊のうちで、もっとも背の高い男が立ち塞がった。ぎらつく刃物を左手にささげ持ったまま両腕を大きく広げた。大ワシが翼を広げているようだった。

「こ、殺したらあかんぞ。売りもんにならんからな」

足に深手を負った髭男は引き止めたが、大ワシの剣はヤマトの頭のすぐ上を輪切りにした。瞬時に身を低めなければ、少年の首は宙を舞っていただろう。

「油断大敵やでえ」

小男がぶつかってきた。不意打ちをくらったヤマトは転倒した。

黒いターバンの大ワシは、その爪で小兎でも捕まえるように、少年の頭をわしづかみにしようとした。

その時だった。

風がうなり、くるくる回転する柄のついた武器が飛んできた。

断末魔の悲鳴があがった。

見ると、大ワシの頭に斧が突きたっていた。

「どないなつてんねんな」小男は突っ立っている。「やってられん」

ヤマトは短剣を捨て、弓矢を手にした。

ラクダを引き連れた男が姿を見せた。先の尖った帽子を被り、見たことのない衣を身につけていた。

ラクダには、薄絹のシヨールで顔を隠した少女が乗っていた。

「姉さん！」ヤマトは呼びかけた。

「どーゆーこつちゃねん……」小男は呟いた。「逃げるが勝ちや」

しかし、ヤマトの放った矢は、一目散に逃げようとする小男の肩を射た。

小男は情けない声を出した。「死んでもたら元も子もないがな」

髭男の足元には血が溜まっている。「退いたらあかんぞオ。みつともない帽子を見てみい。ペルシアの犬や」

「そつちは、ハゲタカじゃねえか」

男は嗤うと、とんがり帽子を脱ぎ捨てた。赤土のような色の髪があらわになった。

「地獄の炎で焼かれてまえ！」髭男はののしった。

「焼かれるのは、俺じゃねーぜ」

袖なしの短い上着を着た赤髪は絶命した大ワシの傍らに立つと、引き抜いた斧の峰で大ワシの頭を砕いた。

脳味噌の白と鮮血の赤が同時に飛び散った。

ヤマトはラクダに向かって走ったが、途中でナンナでないことがわかると、その場に膝を折った。

少女は、「だらしがないわね、しっかりしなさいよ」と言った。

赤髪は血のしたたる斧を手にし、細長い鋼のような眼差しで頭の潰れた死骸をしばらく見下ろしていたが、短い溜め息をつくど、上体をたわめた。銀色の刃で、風を切り裂くような動作だった。

「うぐう……」斧が命中した髭男は大の字に倒れ、地面を揺るがした。

2等分された顔面の眉は、2匹の毛虫になっていた。

ヤマトは小男を探し、姉の肩かけをどこで手に入れたのか問いただそうとしたが、小男はいつのまにか姿をくらましていた。なおも追いかけてよとするヤマトの前に、赤髪は立ちふさがり、ラクダに乘れと言った。

「あの男に用があるんだ」

「俺の気の変わらないうちに行け。でないとお前も俺の斧で死ぬことになる」

ヤマトが跨がるやいなや、赤髪は血を吸ったばかりの刃先でラクダの尻を刺した。

ラクダは気が狂ったように駈け出した。

少女は見事な手綱さばきで走らせた。

4話

小男は、盗賊の仲間が息絶えると、井戸のある場所に戻ってきてその場に座りこんだ。少年に射られた矢は肩口に刺さったままだ。

「サカ人専用の斧（サガリス）には、手加減ちゅうもんがないんか、ケバル」

ケバルと呼ばれた赤髪は声を出さずに嗤う。

「乾した肉と馬をどこかに隠してくれてるんだろ、ハシム」

「ジャミールはどないすんねん」

「あいつが自分で、小僧を監督官に引き渡すと言ったのさ」

「気が変わるとはわかとったけど、ああも気紛れやとついてけんワ」

ハシムは、赤い毛織物を脱いだ。ごわごわした獣の毛のような髪が現れた。

「バビロン総督の一個大隊が到着したらしいぜ」

ケバルはとんがり帽子を被りながら、

「エルサレムへ移動することになった」

「ほな御曹司は、喧しいインド犬も連れてきてるんか」

「父王の疎んじた、従兄弟のトリタンタイクメスを、ロンギマヌス（アルタクセルクセスの別名）は気に入っているからな。エルサレムに司令長官として派遣して、エズラが抵抗分子と結託しないように見張らせるつもりなんだ」

「ハゲタカと縁が切れたと思たら、ハイエナに逆戻りか」

「お前と一緒にだと、ジャミールは怠ける。かならず別行動をとれ」

ハシムは嘆息した。「親のないあの子が不憫やよってなあ」

「食い物の世話までやくなよ」

「『ユダヤ人じゃないから、パン種（酵母）の入ってないパンは苦手なの』なんて言われると、どないしてでも旨いもんを食わしてやりとうなるんや」

「あいつは、したたかだ」

ケバルは死骸のターバンをむしり取り、血糊のついた斧の刃をぬぐい、背負い紐についた革製の鞆に収めた。

「これと思う子供がいれば、お前がさらって、あいつが監督官に引き渡すのが仕事なのに、ぜんぶお前に押しつけているじゃねえか」

ハシムは引つ込んだ眼をしばたくと、

「さっきの小僧は何者やねん？」

「あれか？ わからんが、機敏な奴だな。使いようによっては役に立つ」

ケバルは掘り下げ井戸に歩み寄り、ヤマトが投げ入れた革の手桶を引き上げようとした。

「空井戸やでえ」

ハシムはうそぶき、片手で髭男の骸を突き動かし、懐から銀貨を取り出した。

「相変わらずだな」

「金は天下のまわり物や」

「肝心の情報は得たのか」

「ベドウィンを手なづけるやなんて、砂漠の砂粒を数えるほうがましやで。一味の仲間になって、ここら一帯を臭ぎまわったけどなあ」

「もとを正せば、お前もベドウィンじゃねえのか」

「わいはアラブ人や。それも、高貴な血筋のシャリフ（首長）や。

あいつらみたいにとカゲは食わへんし、あんたみたいに蛇やトカゲを目の敵にして殺さへん。ほんまサカ人は変わつとる」

「お前だつて、これと思う女を売ってるじゃねえか」

「わいが助けたらんと、ベドウィンの嫁にされてまうんやでえ」

「監察官に命じられた第一の仕事は、“契約の箱”を見つけたすことなんだからな」

「エジプト人の掘った銅山の跡も探したけど無駄足やった。なんぼ監察官のご命令でも、お宝探しは無理とちゃうか」

「たしかにな。モーセの10の言葉を記した2枚の石板が入っている“契約の箱”（アーク）はなくなつて2百年もたつ。大昔の言い

伝えでは、預言者のイザヤが砂漠に運んで隠したと言われている」

「恐ろしい箱やそうやないか。触ったもんはバツタリ倒れて死ぬらしいでえ。尻から血イを吹くちゅう話や」

「神の座る椅子だそうだからな、靈験あらたかなんदारうさ」

「この仕事もなあ、そろそろ、潮時やと思わんか。ヤバイことも、やり尽くしたでえ。いまにお天道さんのお怒りで黒こげになるんやないかと……」

ハシムは傷が痛むのか、毛羽立った眉をしかめると、カートと呼ばれる木の葉を噛んだ。

「あんたは、大王のお気に入りやったサカ人やから監督官のおおほえもめでたいやるけどなあ、わいような下っ端は名アもろくに覚えもろてへんし」

「サカで反乱が起きて、ダレイオス大王に鎮圧されなきや、俺もここにこうしていやしないさ。先祖の騎兵と弓兵と槍兵は皆、バビロニアに連行されて兵士にされたんだからな」

「わいのご先祖は、ベニヤミン族に男は皆殺しの目えにおうて、女と子供は奴隷以下にされたんや。ユダヤ人はベドウインを馬鹿にするけど、ベニヤミン族ももとは遊牧民や。同じ穴の貉なんや」

「この世は、弱い者にとつて無慈悲なのさ。己れと家族を守れないとみなされたとたん、血祭りにされる」

ケバルは腰帯に結んだ瓢箪を手に取り、口にふくむと、ハシムの傷口に吹きかけた。

「ラクダの小便のほう効くんやけどな」

ハシムは、太陽にむかって短い祈りを捧げ、固く目を閉じた。

ケバルはハシムの肩と矢に手をかけた。

「いくぞーッ」

「ちよつと待つてえな。そのうちカートが効いてくるさかい」

「そんなもの気休めさ」

肉の裂ける鈍い音がしたとたん、悲鳴があがった。

「ひえーっ。死ぬほうがなんぼか楽や」

矢を引き抜いたあとの傷口に、ハシムは噛んだカートの葉をのせようとしたが、ケバルはその手を払い、蛇の血が沁みこんだぶどうの葉を貼った。

5話

ふだんは歩みの遅いラクダだが、一旦、走りだすと、馬ほどではないが、人の足では追いつけない。追っ手を振りきったラクダは、いばらの茂みに突き進むと、脚を止めた。

ひからびて、刺のある草でもラクダは平気で食べる。

「ここまで追ってこないわ」少女はラクダから降り立った。

ヤマトもつづいた。

「名前は？」少女は訊ねた。

「……」

「あたしはジャミール。美しいって意味よ。メディア人とエチオピア人の混血なのよ。知ってる？ シバの女王とソロモン王の間には王子が産まれたの。あたしはその子孫なのよ。だから、敬意をはらってもらいたいわ」

ヤマトは首を傾げる。王女の子孫がなぜ、こんなところにいるのかと不思議に思ったのだ。

「舌がないの？」

「僕は……ヤマト」

「聞いたこともない名ね。どこの部族？」

少女の鳶色の瞳はくるくるとよく動いた。

「ねえ、ヤマト。あたしがその気になれば、いつしよに旅をしたいって言う男はいくらでもいるわ。断るのに困るほどよ」

「僕は、さっきの場所に帰りたんだけど……」

「このラクダはあたしのもものだから、あんたは歩いて戻るしかないわね」

少女は刺繍をした薄絹のシヨールを肩におろし、濃い褐色の髪をゆらした。髪を人前にさらすのは未婚の女だけだった。

ヤマトは踵を返し、歩き出した。

「待ちなさいよ」

「何……」

「あなた、いくつなの？」

「……12」

「あたしよりふたつも下じゃないの。独りでもどってどうしたいって言うのよ」

茶褐色の瞳がヤマトを睨む。

「さつき、僕を襲った男が姉さんの肩かけを頭に巻いてたんだ。あれは姉さんが大切にしていた、たった1枚の肩かけなんだ。きつとあいつらが姉さんをどこかに連れ出したんだ。どんなことがあっても姉さんを探しに」

ジャミールは弓形の眉をしかめた。

「あなたが歩いて戻るまで、ベドウィンが、じっと待っていてくれると思うの？」

ヤマトは下をむいた。

「さらわれたんなら、エルサレムに上って行くしかないわね。大きな奴隷市があるはずよ」

「奴隷市……」

「いっしょに行つてあげてもいいわ」

ラクダの尻の傷口はふさがっていたが、黒ずんだ血が後足にまでこびりついている。

「どうして、僕といっしょに？」

美しい少女と移動することは1人よりも危険が増す。

「弓矢もなくしたし、僕の力ではジャミールを守れないと思うよ」

「あたしも落ちぶれたもんね。嘴くちばしの黄色いあなたに守ってもらおうよ
うじゃ、明日から生きてけないわ」

「でも……」

「あなたの肩まである、まっすぐの黒い髪だけど、目立つわね。切つてしまえば？ いっそバビロンの書記官みたいにツルツルに剃つてしまいなさいよ。手伝つてあげようか」

「いらないっ」

「じゃあ、女の子に化けなさいよ。象牙色の肌もきれいだし、黒眼くろめもかわいいしさ」

「いやだよ」

「ベドウィンがそこら中にいるわよ」

「姉さんから聞いたけど、遊牧民は太陽とともに移動するそうだから、日の出から日没まではじっとしているほうがいいって」

「なんでも姉さんなのね。そんなに姉さんが好きなの？」

ヤマトはこぶしを固く握りしめた。

「あんたの大切な姉さんは、あんたが自分を探すことを望んでいないと思うわ」

「姉さんはかならず待ってる。僕にはわかるんだ」

「赤子同然かと思ったけど、まったくの弱虫でもないようね」

「君が僕に示してくれた親切は、一生忘れないよ」

そう言っただけで再び踵を返すヤマトを、ジャミールは呼び止めた。

「無駄だと思うけど、あんたの気のすむようにしてあげる」

6話

月は中天にあった。

ヤマトの姉、ナンナを乗せたラクダは月光の下を静かに歩む。

キャラバンの隊列は黄灰色の砂漠に黒曜石を並べたように点々と連なる。

腰のあたりまである長い髪もほっそりした体も敷物でおおわれ、ラクダの背に縛りつけられていたが、長いまつげのつぶらな黒い瞳は悲しみにくれることはなかった。

月の女神にちなんで名づけられたナンナは遊牧民に囚われたことも、彼らの手によってどこか遠くへ運ばれることもさほど苦にならなかった。自分たちきょうだいに課せられた運命だと思えば耐えられた。すべては、ヤマトがギルガメッシュのように天と地をつなぐ都を建てるまで日までの辛抱なのだから、と。

「ヤマト、どうか、無事でいてちょうだい」ナンナは、ヤマトを青竜の子だと固く信じていた。召使のアイナは繰り返し語って聞かせた。

「ヤマト様は、シユメール人の希望です。いまは隠れて暮らさなければなりません、いつか、その力を試される時がやってきます。その日のために、お嬢様は、ヤマト様にギルガメッシュの伝説をお教えしなくてはなりません」

そして、身分の証しだと言って首飾りをナンナに託した。

ナンナは心のうちで念じる。

「青い竜よ、どうか、ヤマトを守ってちょうだい」

5年前まで、ナンナとヤマトは多くの召使にかしずかれて何不自由なく暮らしていた。どこにも出かけることがなかった。そこでどこだったのか、知りようもなかったが、広い前庭と井戸があり、レモンの木があったことを鮮明に記憶している。

夏の終わりだった。

正体不明の一味がその家を襲った。アヤイナは隠してあった金貨を一味に与え、命乞いをしたが、アヤイナは殺された。しかし、残酷な首謀者は何を思ったか、故郷の貧しい村にナンナとヤマトを連れ帰り、家に住まわせ、自分を父と呼ぶようにと言った。そして、今までのような暮らしはできないが、命だけは助けてやると約束した。幼かったヤマトは衝撃で記憶を失っていたので、男を父親と呼ぶことに抵抗はないようだった。

その男イサには家族があった。ナンナは奴隷女のようにイサの妻に仕えた。ヤマトはイサから弓を射ることを執拗に仕込まれた。

イサは出稼ぎに旅立つ前日、ナンナが独りで見計らったようにやってきた。

「息子の中でも長子は頭がいい。1年ほどエルサレムで暮らして書士にでもなれば、お前1人を呼び寄せて嫁に思っている」

イサは3人の息子には村の脱穀場（集会所）に通わせ読み書きを習わせていた。神の子に会うために聖地に詣でるとも言った。

翌日からナンナは、水汲みの合間をぬってきゆうり畑の番小屋に通い、深い坑を掘った。

ベドウィンの掠奪はナンナにとって、境遇を変える絶好の機会だった。

弟を坑の中に突き落とし、もう1度、麦わらで坑を隠し番小屋の外へ飛び出した。

「わたしは、ユダヤ人じゃない！」

大声で叫んで、ベドウィンにわざとつかまった。目の前でイサの妻や村人が惨殺され、焼かれたがほんの少しの同情心も湧かなかった。

いまはただ、自分とはぐれてしまったヤマトが深い孤独感に苛まれ使命を忘れていないかと、そのことばかりが気懸かりだった。

7話

イヤル月の20日（5月初旬）、砂の檻を脱したジャミールとヤマトは埃っぽい砂利道をたどり　エルサレムの南南西（約30？）徒歩1日の道程　かつてのイスラエルの王「ダビデが都としたへブロン」の町を望める丘陵地に着いた。

「険しい山に囲まれたペルシアとは大違いよ。王様だって、季節ごとに宮殿に移動するんだから。冬はエラムのシュシャン、夏はメデアのエクバタナ、秋はすぐ近くのペルセポリスにいて、残りの日をバビロンで過ごすの」

眼前に忽然と現れたへブロンの町はユダの高地（海拔900？）にあった。

ジャミールは彼方を指差し、

「町を囲む四方の丘陵にはぶどう園やオリーブ畑があるのよ。遠くから眺めると、樹木のつらなりが、城壁に群がる大きな生き物のように見えるでしょ？」

目路のかぎり連なる緑樹の帯を横切り、ラクダを進めた。途中、遊牧民からもらった山羊の乳を飲んだ。

「水は魂の糧、乳は生活の糧と言うのよ」

ジャミールは、ヤマトの知らないことを惜しげなく教えた。

「ベドウィンに会ったら、家畜の値段をたずねるのが礼儀なのよ」

「あいつらに礼儀なんて……」

「彼らが掠奪を働くのは、農夫が土を耕すことと同じなのよ。いまにわかるわ。屋根の下で暮らすことを嫌う彼らに国の境はないの。国がないんだから、ギリシア人よりも自由の民といえるかもね」

「自由の民？」

「ギリシア人とベドウィンは馬とラクダの違いね」

ヤマトが首を傾げる。

「ラクダはとっても役に立つけど、馬のように美しくないわ。だか

ら馬は、ラクダの臭いを嗅いただけで逃げ出すのよ」

「馬という名の生き物はそんなに美しいの？」

「馬も知らないで、姉さんを探す気なの？ 信じられないわ」

駄獣の踏みならした坂道をたどり、鈍色に光る門の前に、2人は立った。石積み の 門 柱 に 支 え ら れ 、 真 鍮 を 叩 き 延 ば し た 板 で 補 強 さ れ た 大 き な 木 製 の 扉 は 左 右 に 開 い て い た 。

ジャミールは薄赤い紗の衣の内側を引き裂き、ヤマトの頭から顔にかけて巻いた。

「目だけしか見えないようにしてあげる」そう言って、留めピンを挿した。「監察官の兵隊は疑り深いんだからさ、アラム語しかしゃべっちゃだめよッ」

削った石を積み上げてつくった城壁は山よりも高く見える。人の力で、こんな巨大なものがつくれるのかと、ヤマトは茫然と見上げた。

「聞いてないのね？」ジャミールはヤマトの額を突いた。「なんて子なの！」

障壁には等間隔に高い塔があり、塔と塔の間は櫛形になっている。戦いになったとき、凹みから弓を射、石を投げるといふ。

「ダビデの築いた城壁だけど、今ではペルシア兵の役に立ってるわ。と言っても、監察官の兵士のほとんどは同盟国のメディアア人とエラム人の混成部隊だけだね」

「監察官って何？」

「子供に、どう説明すればいいのかしら。サトラップのお目付け役よ」

「サトラップって何？」

「そうくると思っただわ。総督のことよ。彼らは帝国に20人いるの。ジャミールは声をひそめる。「ペルシアの王様は戦ってぶん取った土地を20の大きな州に分けて、総督を赴任させてるの」

「総督は、州に住む人たちの中で1番えらいの？」

「それがね、そうでもないのよ。領地をもつ太守が全国に127人

もいるの。もともとその地を支配している豪族だから、王様も取り上げられないのよ。戦争になったら兵士を借りなきゃなんないしね」「総督と太守のどっちがえらいの?」

「雇っている兵士の数によるけど、土地をもつ太守かもね。税金を払わないでいい太守もいるくらいなんだから。王様も痛し痒しよね。味方につけておくためには機嫌をとらなきゃなんないし、かといって油断できないし……。だから、監察官に軍隊をつけて、方々に差し向けるわけよ」

「監察官は何をするの」

「王の目や耳の代わりをするの」

「目や耳?」

「裏切り者を捜し出す役目よ」

ユダヤはシリアとフェニキアとキプロスなど一つの州(サトラ)に定められている。

「ここにもサトラップがいるの?」

「いるわけないでしょ。もっと大きな町、シリアのダマスコ(ダマスкас)にいるわ」

「じゃあ、なんで監察官がここにいるの?」

「うるさいわね。そのうちわかるわよ」

2人はラクダを降りると、高い門の中に足を踏み入れた。家畜の鳴き声や人の声が雷鳴のように聞こえてくる。門の内側にもう一つ壁があり、二重構造になっていた。ペルシア軍が補修したという。

外壁と内壁の間に、兵士の待機する建物があり、入ってくる者を逐一取り調べていた。

「怪しまれないようにじっとしててよ」

遊牧民やイスラエルの民とは異なる身なりの男たちが門の内側に立っていた。顔の半分をおおうほど髭を生やしている。髭が立派な者ほど尊敬されるといふ。頭には羊毛フェルトの筒型の帽子をかぶり、身には色とりどりの袖つきの肌衣と鉄製の鎧をまとい、腰に革製のベルトをし、赤髪の男と同じような筒型のものを穿いていた。

「あれは何？」

「ズボンよ」

頭部だけ見ると兵士のようにではないが、短い槍をもち、1キュービット（長さの単位）に充たない剣（30？）を革製のベルトに吊している。従属した民を威嚇するのに充分だった。

「奴らの剣は、ひと突きで人を殺せるのよ。近頃は少々、錆びついでるっていう噂もあるけれどね」

ユダヤ人は男も女も頭からすっぽりかぶる筒型の簡素な衣服を身につける。下着などは縫い目もない一枚の布だ。警備のペルシア兵士の服装は華やかで機能性にも勝れ、戦闘に適しているとヤマトは思った。

「余所者だな。どこから来た？」と兵士は訊いた。

「川向こうよ」ジャミールは胸をそらし、腰に手を当てて答える。

「ヨルダン川を越してきたのか」

兵士の鼻はユダヤ人のように鉤鼻ではない。肌の色も遊牧民のように黒くない。髭を除けばユダヤ人と遊牧民を足して2で割ると、こんな感じの顔つきになるような気がした。

「南の村々では、疫病が流行っている。そこからやってきた連中は、町に入れんぞ」

「疫病を患っているように見える？」

兵士はじろじろ見た。「嘘をつけば即刻、処刑されるからな」

「監察官の兵隊さんに、踊りをお見せするためにわざわざやってきたのよ」

「しかし」「兵士の目が光った。「こいつは、なんだ」

ヤマトはじっと俯いていた。ジャミールから前もって聞いていなければ、軍服姿の彼らに対して怖じけづいたかもしれない。

「従者よ」

「通行許可証は持つてるだろうな」

「もちろんよ」

ジャミールは衣服の間から通行証を差し出した。

兵士は長い時間かかって、確かめていた。

別の兵士が少年の首にかけた皮袋に手をかけようとした。ヤマトが身を引く前に、ジャミールが兵士の手をつかんだ。

「通行税は、稼いだあとにしてくれない？」

「黙って出て行ったりしないだろうな」

「兵隊さんを騙す踊り子がいるかしら」

「よし。通れ。ただし ラクダは預かっておく」

内壁を出ると、そこにも兵士がいた。

「ラクダの預かり賃を出せ」

「ごめんなさい。お金がないの」

ジャミールは兵士の肩に手を触れて微笑む。

兵士は顔を近づけ、囁いた。「地下に貯水槽がある。飲んでいけ」

「そうさせてもらおうわ」

ジャミールはヤマトに、ラクダを連れて先に行くように言った。

ヤマトは暗い石段を降りた。

濁りのない水が石灰岩で囲われた水槽に満ちていた。

ヤマトとラクダは胃袋が張り裂けるほど飲んだ。

しばらくして、ジャミールが降りてきた。

「どんなに喉が乾いても、水飲み場にきたとたん、がぶ飲みするよ
うな男は立派な戦士になれないのよ」

きよとんとするヤマトに、

「タンバリンがいるわね」

「タンバリンって……何？」

「飛んだり跳ねたりするんだもの、楽器がいるでしょ？」

「飛んだり跳ねたり、どうしてするの？」

「あなたと話していると、何も心配しなくても生きていける気分にな
ってくるから不思議よね」

通用門を通り抜けると、別世界が広がっていた。村の家々とは比較にならない大きさの建物が、物売りで込み合う石畳の広場を囲むようにして建ち、赤や青のフェルトの日除けの下にはいくつもの店

が並んでいた。

「水市の立つ広場って、これのことなんだね」ヤマトは感歎の声をあげた。「すごい！」

物売りの声が反響し、天にも届きそうだ。

遊びに興じる子供たちや手持ち無沙汰の男たちが買物をする人々を遠巻きにしている。

容貌も肌の色もさまざまだった。

立ち話をしていた兵士らがこちらを見た。

少女の美貌に目を輝かす者もいたが、不審者を警戒する目の色もあつた。

「田舎者丸出しね」ジャミールの声は苛立っていた。「市場では、なんでも売ってるわよ。水と金貨さえあればなんだって買えるわ。ただし、市場税も取られるけどね。税金のかからないものなんて、砂漠の砂くらいよ。死骸にだって、墓穴に入れるのにお金がかかるんだから」

ジャミールはヤマトが首から下げていた皮袋を引きちぎるように引っ張った。

「……！？」

「貸しなさいよ」

「これは……」

「あんたが後生大事にぶらさげてるもんだから、眠っている間に見せてもらつたわ」

「姉さんのものなんだ」

「借りるだけよ。あたしがなんとかして稼がないとラクダを取られてしまうわ。エルサレムに行けなくなるのよ」

ジャミールはヤマトの皮袋を手にとると、ここで待つように言うて人込みの中に消えた。

ヤマトはその場に居たが、頭が焦げつくような暑さに負けて日陰に移った。

目の前に石造りの建物があつた。

ジャミールの話では、税として集められた穀物が貯蔵されているという。ペルシアから取り立てにやってくる軍隊は収穫の半分近くを取り上げるそうだ。

いい香り漂ってきた。焦げた肉にオリーブ油と香草を混ぜた匂いだった。

広場を迂回し、路地に入る。

高い建物のある広場の周辺と異なり、剥げおちた泥壁の家並みがひしめいている。道の幅も狭く、少し先さえも見通せないほど曲がりくねっている。雨水を貯める水路だろうか、排水溝だろうか、溝がある急勾配の狭い石段を登ると石造りの建物と塔があった。

建物の扉には、神の叡知を象徴する7本の枝が描かれ、魔よけの血の跡があり、ユダヤ人の会堂（ジナゴーク）だと知れた。

男たちが数人、建物の前でたむろしていた。

そのうちの1人が塔を見上げながら、ユダヤ人の先祖・アブラハムの一族を葬つてあると言った。

「見て行け」とヘブライ語で言った。

信仰心から申し出ていないことは、目つきでわかった。

「お代は、たったの銀貨1枚（約2？）だ」

1 シュケル（重さの単位）の銀貨は奴隷の3日分の賃金に等しかった。

「払えないのか」

ヤマトの肩をつかみ、顔を見せると言った。

口がきけないという身振りをすると、男は嘲るように言った。

「ぜひ、祈って行け。しゃべれるようになる前に、目が見えなくなるかもしれないがな」

他の男たちも野卑な笑い声をあげた。

「お前、まさか、エズラの弟子じゃないだろうな」

ヤマトは首を横にし、石段を駆け登った。

広い通りに出た。半円形のアーチがかかっているので太陽の光がさえぎられ、とても涼しい。

大勢の物売りが軒をつらねていた。

アラム語とヘブライ語に混じって聞いたことのない言葉が飛び交っている。

肉の焼ける匂いにつられて、衣の裾に青い房ベりのついた男たちの後について歩いていった。彼らは、門のある煉瓦造りの家の前で立ち止まった。その家の扉にも7枝が描かれていた。

匂いのもとはこの家にあるらしかった。

門の前でたたずんでいると、強い力で背中を押された。長身の若者が立っていた。縞模様の額帯をし、上等の亜麻布の衣を着ている。「ここは会堂じゃない。遠慮するな」と若者は言った。

門の中に入り、中庭を通って、煉瓦の石段を登り、屋上に出た。

葦でできた日除けが日陰を作っていた。7日に1度の安息日でもないのに、ひと目では数えきれないユダヤ人が狭い場所にひしめき合っていた。

「女と子供の席は後ろだ」

大柄な若者は葦の棧敷を指さした。布で顔を隠したヤマトはなんども首を横にふった。

「成人式をすませたのか？ それはわかるかった」

若者はユダヤ人によくある鼻梁の中段が突き出た鼻をしていたが、薄茶色の明るい瞳と産毛のような生え揃わない髭が、陽気で気取らない性格を印象づけた。

「いつしよに来ればいい」若者は最前列に向かって直進した。

箒のような髭をたくわえた年長者の視線にも臆するふうはない。

生まれながらの指導者のようだ。

ヤマトは引き寄せられるように若者のあとに従った。

屋上は、村の脱穀場と同じくらいの広さだった。太陽を背にした正面に、7枝をかたどった青銅製の燭台があり、犠牲いけにえの子羊の丸焼きが1頭供えられていた。

ヤマトは生唾を飲みこんだ。

布製の円い帽子を頭にのせた男たちは立ったままアラム語で話し

ていた。

月経のある女たちは少年の村と同様にここでも、男たちとは隔てられていた。人々の身なりは整っていた。ユダヤ人特有の青い房ベリの衣の上に青いひもが見える。それらは高価な布地で仕立てられていた。

長身の若者が、力づよい声で唱えはじめた。

「神に油そそがれし“その者”は、神の家をふたたび建てるために来た」

その場にいる者たちの気持が高まるような声の持ち主だとヤマトは思った。

供え物の向こうの垂れ幕の中から姿を現した“その者”は、杖を携えていた。

人々はヒソプ（神に似た植物）の枝を振って出迎えた。

若者は囁いた。「祭司長アロンの持っていた、アーモンドの木の杖なんだ」

「そんなものが、ここにあるはずがない」という囁きが背中から聞こえた。

……誰だろ？

振り向こうとしたとたん、隣の若者に頭を小突かれた。

眼前の“彼”は長身瘦躯。その眸は一点を見つめて輝き、微笑をうかべた眼差しは、寄り集まった人々の信頼を勝ち得るのに充分な思慮深さを示していた。裾に鈴とざくろの実をつけた青地の衣に楕円形のターバンをかぶり、イスラエルの12部族をあらわす12の宝石を縫い着けた亜麻布の上衣をまとい、金糸で縁取りをした腰帯を純白の長衣の前に長くたらしめていた。

「ヤコブの家の者たちよ、来なさい。神の光のうちを歩もう（イザヤ2：5）」

記憶をよびさますような美しい響きの声だった。長兄とさほどかわらない年齢に見受けられたが、柔和な物腰が彼に侵しがたい気品

を付与していた。反面、言葉にならない違和感を感じた少年は隣の若者に“彼”の名を訊ねた。

「祭司長アロンの家系である、祭司エズラだ」若者は畏敬の眼差しで答えた。

「ヤコブの家の者って誰のこと？」

若者は驚いた表情をした。「アブラハムの子がイサクで、イサクの子がヤコブだ」

「アブラハム、イサク……？」

背中で呟く声がまた聞こえた。「こんなバカが世の中にはいるんだなあ」

長老と数人の者たちによる祈祷がおごそかな調子ではじまった。

これもアラム語だった。

「ヤハウエよ。あなたのみ業はなんと多いのでしょうか。あなたはすべてのを知恵をもって造られました」

感情を押し殺した詠唱がいつ果てるともなく繰り返される。山羊や羊でさえ、もう少しいきいきと啼くのとヤマトは思った。小麦を運ぶ以外は、村の脱穀場に足を踏み入れることなどなかった少年にとって、祈りの言葉は聞き慣れないものだった。

エズラは語りかける。

「聞きなさい。イザヤの予言は成就されました。イスラエルの神は流刑の地バビロンより、われわれ聖なる者たちを“約束の地”にもどされました」

人々は頭をたれた。

「しかし、エルサレムの神の家（神殿の内部にある聖所）がわれわれのもとに戻ったわけではありません」

人々をかき抱くように両腕を大きく開いて胸のあたりに上げたエズラは、片腕をもう一方の純白の上衣の片袖をかけ、いきなり引き裂いた。

「おおっ！」人々はのけぞり、感動の入り交じった驚きの声をあげた。

エズラのそれは、怒りと悲しみを表すユダヤ人の習わしの挙動であつた。

「われわれは、罪科のうちに神のみ前にいます。贖罪が求められているのです。異国で捕囚の身となつた者、父祖の地で生き残つた者と立場はさまざまですが、誰もが、神の家に詣でて許しを乞わなくてはなりません」

他国に滅ぼされたのではない、神の掟に背いたゆえに国が滅んだとエズラは言う。そして、神の掟に背きつづけるゆえに異国の者たちが父祖の地に侵入してくる、と。

「何よりも、異国の妻をめとつた者たちに神は怒つておられます。これらの妻たちと、これらの女から生まれた者たちは1人残らず、われわれのもとから、ただちに去らしなさい」

戸惑いの空気が流れた。ヤマトの他にも、神の意にそわない者はいたようだった。長老頭と思われる、長い顎ひげの老人がたどたどしいヘブライ語で言った。

「バビロンからご一緒にもどつたわれわれはともかく、それ以前にもどつた者たちは、周辺の部族の者とも結婚しております」

エズラは黙つて聞いていたが、

「系譜に載つた者たち以外は受け入れてはなりません。われわれイスラエルの民と大いなる神との契約です。いかなる事情があろうと、ヤハウエに服さなくてはなりません。神の忠実なる下僕でなくてはなりません」

長老頭はにじり寄り、

「なにぶん年月が経っております。先に帰還し、この地に暮らす者ともある程度は混じりあわんことには暮らしていけません」

エズラは青いターバンを手にとり、またもや引き裂いた。そして、短く刈りこんだ褐色の髪をつかみ、草をむしるように引き抜いた。

棧敷の女たちは悲鳴をあげ、男たちが目を見張ると、さらに髪を引き抜いた。広い額に血がしたたり落ちた。

「これはモーセの五書（ペクタチューク）（巻頭の五つの書）です。過去と未来をつな

く書物です」

エズラは羊皮紙の巻き物を両手で開くと、ヘブライ語で朗読した。長身の若者が1章ごとにアラム語に訳した。

この場にいるほとんどの者は昨年、帰還したユダヤ人である。そのせいで、ヘブライ語が話せないらしい。

「わたしたちは約束の地を失いましたが、各地に散ったイスラエルの民は今も神に選ばれし、唯一の民なのです」

イスラエル人の祖先であるヘブライ人がファラオの国エジプトからモーセに率いられて脱出し、乳と蜜の流れる約束の地カナンに侵入した時から千年近い時が流れていた。

「いかなる苦難に見舞われようと、12の部族は約束の地に戻るという希望を失ってはならないのです。栄光の日まで、神はわたしたちを見捨てることはありません」

力に満ちた言葉に感動した男たちは先を競ってエズラの前にひれ伏し、その手に口づけ、自らの額にあてた。女たちは奇声を発し、涙を流し、体を前後にゆさぶりながら神の名を繰り返し口にした。

「ヤハウエこそ、まことの神！」

会衆は、もつとも敬愛するダビデとその民のように神の名を唱えた。神のみ名である、ヤハウエを讃える声が青空にこだました。

「わたしはあなたにむかって目をあげました。ああ、天に住んでおられる方よ。心弱い民にみ言葉を！」

エズラが手のひらを上に向けて両腕をのばして唱えると、人々も同じ仕草をして、目を宙に据えた。

「ともに光のうちを歩もう。われわれが唯一の神に固くつきしたがえば神は報いられる。神の手により、ダビデの栄光を取り戻すのです」

くすしき栄光が失われるに至った過去の過ちを思い起こせとエズラは言う。

「はるか昔（紀元前11世紀）、ダビデ王によってイスラエルは一つの国となりました。しかし、ダビデ王の子ソロモン王の死後、

栄華を誇ったイスラエル王国は北王国のイスラエルと南王国のユダの二つに分裂してしまつたのです。カナン人の信ずる、バアルやイシュタルを崇める背教の者たちが多数を数えるようになったせいです」

かつては、カルデア人の建てた国だつたバビロニア。その都バビロンで生まれ育つたエズラは父祖の苦難の歴史をつい昨日のことにように訴えかけた。

「ホシュア王の時代（紀元前722年）、アッシリア帝国（現在のシリアとイラクが領土）の軍隊が南下し、北王国のサマリアは征服され、国王も人民もメソポタミアとメディアに強制移住させられました。」

南のユダ王国もゼデキヤ王の第11年　タンムズの月の9日（紀元前609年6月下旬）にバビロニア帝国の王「ネブカドネザルの手に陥ち、3日間にわたつて神殿は破壊され、多くの民がバビロンに囚われの身となりました。」

このことは神のご意志でした。神はご自身の目的を進められるために、他の国々を用いて、罪人であるわれわれを懲らしめられたのです」エズラの声は嘆きを帯びることはありません。「わたしは有り難くも、ペルシアのアルタクセルクセス王のご聖恩を得て、ユダヤ州の行政長官という高位にのぼりましたが、一時もエルサレムの神殿再建を忘却したことはありません」

ふいに端正な顔の頬に涙が流れた。少年は自分の感じていた違和感の原因が何であつたのか、ようやく気づいた。エズラには髭がなかった。成年期に達したユダヤ人の男たちは誰もが髭を生やしている。遊牧民も同じだ。なめらかな頬の成人男子を、ヤマトをはじめて目にした。

「何もかも、戯言だ！」

その場にいる者たちが一斉に振り返つた。

胸の下まで白髪まじりの髭を生やした黒衣の老人が両目を血走ら

せて立っていた。老人の後ろには、会堂の前でヤマトにからんだ男たちが後に控えていた。老人はレビ人の祭司だと名乗り、ヘブライ語でののしった。

「律法学者か、行政長官だかしらんが、この地を見る。旱魃の年には草という草は枯れつくし、餓死するしかない」

「わたしは、バビロンに囚われた民の子孫です。そのわたしが今ここにいるということは、神が約束を果たされたという証しに他なりません」

「証しなどどこにある、ペてん師め！ 税が払えず妻子を売った者も大勢いる」

エズラは懐から羊皮紙の書状を取り出し、読み上げた。

「諸王の王たるアルタクセルクセス。天の神の律法の写字生である、祭司エズラに送る。今、わたしは命を下す（エズラ7：12）」

それは、ペルシア王からエズラに当てた手紙だった。その中で王は、シリア州を含む河向この州のすべての財務官に、神の家の再建にかかる費用を負担するようにと命じていた。また、エズラとその随員には税を課してはならないともしたためである。

「お前は、モーセが祭司となるべき者として定めたレビ人じゃない！」

「王はこうも命じておられる。あなたの神の律法および王の律法を守らない者を、きびしくその罪を定めて、あるいは死刑に、あるいは追放に、あるいは財産没収に、あるいは投獄に処せよ、と。（エズラ7：26）」

「百獣の長にでもなつたつもりかッ」

老祭司に付き従う男たちの1人が声を荒げた。

「あなた方は、神殿再建のために使わされたゼルバベルの偉業を忘れたのですか」

エズラは、乱入者の1人ひとりに語りかける。バビロニア帝国が新興国メディアとペルシアの連合軍に敗北するという新たな局面に至り、事態は一変したと。

「ペルシアのキュロス王は、宗主国であつたメディアから覇権を奪いとつたのちに、各国の捕囚を祖国に帰国させ、彼らがそれぞれの国の神々に復歸するのをお許しになられたのです。なぜでしょうか。ヤハウエがキュロス王の心に働きかけたからに他なりません」

この政策の恩恵を受けた民の中にユダヤ人もいた。そして、神殿の破壊から70年ののち（紀元前538年）、イスラエルの総督に任命されたゼルバベルと共に4万の民がイスラエルに帰還し、神殿の再建を試みた。

「しかし今や、神の家となる聖所の荒廃は目をおおうばかりです。平和の君ソロモン王が建立されたありし日の姿に一刻も早く戻すために、神殿を築き、焼燔の犠牲を捧げなくてはなりません。そして散り散りになつた民を呼び戻すのです」

老祭司はせせら嗤う。「バビロンに暮らす者たちの多くは土地に馴染んでいると聞いたぞ。好きこのんで戻ってきたあんたらとわしらとは言葉さえ通じん。同じユダヤ人じゃない！」

「王は並み居る重鎮たちの前で、わたしにお言葉を賜つたのです。」

『お前の望みのままに』と。神はこのように、ペルシアの王の心に働きかけられるみ業をおもちです。故国を遠く離れたイスラエルの民の心にも神のみ心はかならず伝わります」

「お前が神の子なら即刻、ペルシアの軛をなからしめてみよ。モーセのように海をふたつに分かち、天から食い物をふらしてみろ。ダビデのようにつるぎを持って他国の者と戦え」

「いつか約束の地が、われわれのもとに戻ることを宣べ伝えるためにわたしはこの地に使わされたのです」

ペルシアによるイスラエル占領がこの先、幾年つづくか定かでない、この時期に、侵略者の王から使わされたエズラは他国民との雑婚を戒めれば戦わずして、モーセに導かれて手中におさめた土地が戻ると同胞に明言する。

「神は約束を違えるお方ではありません。ソロモンの下僕の子らが父祖の地に戻り、神殿を再建することはもはや定められているので

8話

砂漠を越え、九死に一生の思いでサライはここまでやってきた。食べ物を恵んでもらうために被りもので顔をおおい、物乞いのふりをし、ユダヤ人の会堂を尋ねたが、扉は堅く閉じられ人の気配がなかった。

さ迷ううちにバビロンからの帰還者の集まるこの家にたどり着いた。思いがけずにエズラの説教が聞けたが、落胆した。

ベエル・シエバの帰還者たちと偏狭さにおいてはなんの変わりもなかった。

大切な何かが手のひらから零れ落ちていくような思いにかられ、このまま立ち去ろうとした直後だった。黒衣の老祭司と手下の男たちの乱入で押し合い圧し合いになり、いつのまにか被りものが頭の後ろへずれていた。

人々の動きが止まった。

金色の髪を目にした者たちは口論をやめ、死人を見たような表情になった。

「白人奴隷」と言う蔑みの声が出た。

ユダヤ人しか許されない場所に異形の少年が紛れこんでいることに憤っているのだ。

アラブ人との混血だと言う悲鳴のような声も聞こえた。ヘブロンのおすぐ近くにアラブという名の都市があり、その住人をアラブ人と呼んだのが部族名の由来だった。

「俺は、イスラエルの民だッ」

ユダヤ人祭司を父にもち、母親は、アンモン生まれのカド族だとサライは口から出まかせの系譜を言った。目の前のエズラは前をむいたままだった。髭のない顔に、怒りも見えなければ嫌悪の感情も見えない。

「血統の明らかでない者は、集会所から立ち去れ」

マラキの言葉に、サライは問い返した。

「血統　なんだよ、それ？」

そして、エズラの前に進み出ると、

「俺は、この目でラビ・エズラの顔を拝みたくて、はるばる旅をしてきたんだ。ほんもののメシアかどうか、たしかめたくてきた」

ラビは無言だった。

「偽物にきまつてんだろ」と乱入者たちが野次った。

サライは睨み返し、向き直ると、

「異国の女に生まれた者は、奴隷の身分でなくとも生まれながらの罪人だとラビは説くが、生まれる前のことを、どう責任をとればいいのか教えてほしい」

マラキは声高に言った。「会衆に属さぬ汚れた者が、説教者に尋ねることは許されていない」

「ヘブライ語で“助け”を意味するラビ・エズラは、預言者イザヤの述べる“彼”ではないのか」

サライが言いおわらぬうちに、マラキは、

「万軍の神ヤハウエは、ダビデの家とエルサレムに住む者たちの上にならず恵みをもたらすと律法書に記されている」

「ダビデは異国の女に子供を産ませてる。部下にもアラブ人や異国の者がいたことは誰もが知っている」サライは食い下がった。

エズラは静かに目を上げ、ふたたび天にむかって両手の手のひらを上に向けて高く差しのべた。

「怒るに遅く、愛と真実に満ちた神よ」

呼びかけに応じるように、祭服の胸に縫いつけられた12の宝石が輝き出した。

「託宣トクオンだーっ！」

マラキが絶叫した。「ラビ・エズラのたなごころをお聞き届けられた、ヤハウエがこの場に来ておられるのだ」

異兆を見ようと誰もが前へ前へと押し寄せてきた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな万軍の主、その栄光は全地

に満つ（イザヤ6：3）」

エズラの祈りに呼応するように、宝石は輝きを増した。

「ありえない……」

サライが呟いた、その時だった。

棧敷から飛び出してきた老女が、拳を固めて、サライに襲いかかってきた。

「この子は、バアルの悪魔だよ」

他の女たちも負けじとあとにつづく。石打ちの刑に処せと。

サライは怒鳴り返した。

「アンモン人の女から生まれたことが、罪なのか！」

「落ち着きましょう」

長身の若者は女たちとサライの間に分け入ろうとしたが、怒りをあらわにする女たちは、わけのわからない言葉を喚き散らし、泣き叫んだ。

「王の耳（密偵）だよ」

誰かが言ったとたん、傍観していた他の男たちも女たちに加勢して、サライを屋上から階段下へと追い出した。

9話

突然の騒ぎに驚いたヤマトは見咎められないように、会衆の間をすりぬけると足音を忍ばせて階段を降りた。

何が起きたのか、よくわからなかった。マラキとは何も話せずに屋外に出てきてしまった。通りに出ると、逃げるように広場に向かった。

ジャミールが待ちくたびれているにちがいなかった。

道の途中で、巡視兵らしいペルシア兵とすれ違った。怪しまれないうちに歩をゆるめる。聞くともなし彼らの話し声が耳に入ってきた。

「同じユダヤ人なのに、もともとこの土地に住んでいるユダヤ人はエズラを嫌ってるようだな」

「アム・ハーアーレツとか呼ばれてる連中らしい」

「なんだよ、それ」

「戦士という意味らしい。俺たちが来たから武器は隠したようだが、日頃は武装してるらしいぜ。ああいう若い奴らがほんとはもっとも危険なんだ」

老人に従って乱入した男たちがそうなのかと合点がいった。さつき、ジャミールが口にした戦士とはまた異なるようだ。

広場に戻ったが、彼女の姿が見えない。

金色の髪の少年がとぼとぼとこちらに向かって歩いてくる。

避けようとするど、

「待てよ」

ユダヤ人特有の額帯をした少年は、遊び仲間にならないうちにヤマトを呼び止めた。

「な……なんの用？」

ヤマトより背も高く、年長のようだ。

「お前さ、俺が助けてやらなきゃ、袋叩きにあつてたんだぞ。異国

の者だとバレてないと思ってたら大まちがいだ」

「ぼ、僕は……」

広場にいた兵士数人が、2人に目を止めた。武器を携帯していないので、巡視兵ではないようだ。

「おい、見ろよ」

兵士らは互いに目で合図し、近づいてくると2人を取り囲んだ。

中の1人がいきなり、ヤマトのかぶっている布をむしり取った。

「所有者は誰だ？」

奴隷の刺青を見せると頬に傷のある兵士がヤマトの手首をつかんだ。

「ない……」

別の兵士が煽るように、

「ここは、お前たち稚児の来るところじゃねえぜ。帰って、ご主人様の尻でも舐めな」

「目の中に藁が入ってんのか。俺たちのどこが、稚児に見えるんだ！」金髪の少年は黄金の柄の短剣を持ち出した。

「刺せるもんなら刺してみろッ」

兵士は腕を伸ばし、短剣を奪い取った。

「お前にはもつたいない剣だな」

兵士は剣を鞘から抜いた。取り返そうとする少年の細い足にヤマトは自分の足を引っ掛けた。助けるための窮余の一策だったが、地面に転がった少年を見て、兵士らは体を折って笑った。

少年はヤマトをののしった。「俺が出しゃばらなきゃ、お前なんか、どうなるか わかっているのか、バカヤロウ！」

頬に傷のある兵士が呟いた。「王の耳の中には子供もいるって噂だ……」

そして、少年の懐から落ちた1枚のパピルスを手にとると、「この通行証には、監察官の印が押してある」と言った。

他の兵士は一樣に怯えた表情になった。

「俺の一言で、てめえらの首が胴体からぶっ飛ぶからな」

「ちがつていたら、お前をぶつ殺すぞ」

「望むところさ」金髪の少年は通行証と短剣を取り返した。

「その台詞、忘れるなよ」兵士らは捨て台詞を残して立ち去った。

彼らの気配が路上から消えた瞬間、2人の少年は同時にその場にしゃがみこんだ。

金髪が先に声をかけた。「おい、腹がすかないか」

「うん……」

「俺はもう、死にそうだ。なんで、ラビ・エズラは供え物をひと口でも食わせないんだろ？ なア。もったいぶりやがって……」

エズラに会えさえすればその日から日々の糧を得る苦労などは消えてなくなると思っていた、と少年は悔しがる。

「あいつを、油そそがれしメシアと勘違いしてたんだ」

「メシア……？」

「お救いくださるお方のことだ。お前、マジになーんにも知らないんだな。文字は読めるのか」

「少しだけ」

「イザヤは預言している。『彼にはわれわれの見るべき姿もなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。』（イザヤ53：2-4）』。ラビ・エズラとは似てないだろ？」

少年は自らの問いに頷くと、

「食うものを、ほんとに持ってないのか」

「ないよ」

「あっさり言うなよ。しかし、なんで、異国の女の子供がいけないんだ。食わしてくれてれば、あいつを神の子だって信じてやるのになア」

少年は齒軋りをし、

「『さあ、渴いている者はみな水に来たれ。金のない者も来たれ。来て買い求めて食べよ。あなたは金を出さずに、ただでぶどう酒と

乳とを買い求めよ』(イザヤ55:1-4)」

過ぎ越しの祭りに歌われる流行り歌のように、金髪は聖句を口に
する。

「わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに
約束した変わらない確かな恵みを与える」

このほうが神のみ心に叶うような気分になると言っ、少年は笑
いながら、

「時には、神の過分のご親切によって、代価を払わずに食わしてく
れてもいいと思わないか。雷鳴のちに朝露に揺れるけしの花をお
造りになれる神様なら、こういう気分も了解してくださるはずじゃ
ないか」

「言葉を、いっばい知っているんだね」

「俺はこう見えても、並みの男じゃねーぜ!」

ヤマトは笑った。

「笑うなよ、本気で言っただから」

「ねえ、ロギオンって何?」

「平たく言えば、神のお告げだ」

「さつき、ラビの胸の宝石が光ったけど、あれのことなの?」

「あれか、あれは弟子の誰かが燭台の光を反射させたんだ。翡翠は
よく光るからな」

「じゃあ、お告げじゃないんだね」

「そうやすやすと奇跡はおきないさ」

「アム・ハーアーレツっていう戦士たちは、どうしてラビが嫌いな
の?」

「俺の町のアム・ハーアーレツも、レビ人の祭司と仲がわるかった」

「なぜ?」

「連中は、占領国のペルシアと戦いたいんだ」

「ペルシア?」

その時、呼びかける声が聞こえた。

「おーい。おーい」

長身の若者が石段を走って下りてきた。

「故郷に帰れ」

若者の第一声にヤマトは返す言葉に詰まり、ただじっと見返した。若者は人懐こい笑顔を見せた。「腹がへっっているのだな」

そう言つて、粗びき粉で焼いたパンとダレイコス金貨を1枚そえてよこした。生まれてはじめて金貨を目にしたヤマトはそれがどんな価値をもつものなのか、まったくわからなかった。

「せっかくだから、もらつとくよ」

金髪の少年が横から手をのばし、受け取った。

「俺は、ザドクという者だ」

名乗つた若者の双眸はふくろろの目のように明かるかった。

「2人ともこの辺りでは見かけない、目立つ顔立ちをしているな。どこから来たんだ？」

ユダの荒野に近い村の名を、ヤマトは言った。

「砂漠をこえて来たのか」

ヤマトは訊き返した。

「あの、さっき、おじいさんと喧嘩になつた人は、ラビの弟子なの？」

「マラキのことなら、たしかにエズラ先生に取り入つてるな。しかし、弟子と言えるかどうか不明だ」

「あの人の、お父さんのイサもいつしよにいるの？」

「知り合いなのか？」とザドクは頭を傾げた。「あいつの親父はエルサレムにいるんじゃないか」

金髪の少年が口をはさむ。

「あんたはもしかして、神から下される聖なる言葉を書き記す写字生なのか」

ザドクは腰帯に筆記道具を携えていた。

「見習いだがな」

「どうすれば、写字生になれるんだ？」

ザドクは言葉にすることすら愚かだという表情をした。

「まず第1に、イスラエルの民であることが証明できなくてはならない」

「血統がそんなに大事なのか」

「そもそも文字が読めるのか」

「決まってるじゃないか」

「それで満足するんだな」

「エルサレムに上って行けば、写字生になれる“学びの家”があると聞いた」

「あきらめろ、無駄だ。明日、俺たちはベツレヘムへ出発する」

「エルサレムへは戻らないのか」

ザドクはそれには答えず、ヤマトに目を向ける。

日はすでに傾いていた。

門が閉まるまでに、この町を出るようにザドクは言った。夜になると、子供だけでは身に危険がおよぶと言っただ。

「兵士が大勢うるついているだろ？俺たちが民衆を扇動しないと監視しているんだ。先生でさえ身の危険にさらされているんだから、身寄りのないお前たちがどんな目にあっても、誰も抗議できない」

「それでラビは、あんなふうな納得のいかない説教をしたのか」

少年の問いに、ザドクは、

「それはちがう。先生はいかなる時も偽りを口にされる方ではない」

エズラは、イスラエル各地で集会をひらくために行脚しているという。

「先生は、帰還者の礼拝のための会堂を各地に建てたいと考えておられるんだ。それが使命だと」

使命……ティアマトの子。

ヤマトは姉の言葉を思い出した。天と地をつなぐ都……。

「真意が他にあるなら、なぜ、異国の妻と子を去らせよ、なんて酷いことを平気で言うんだよ」

「モーセの10の戒めを知っているか」

「そんなに愚かに見えるか」

「わたしの他、何人も崇めてはならないと神はおっしゃっておられる」

「それと異国の妻とは関係ないはずだ」

「異国の女は、異国の神を持ちこむ。北部のサマリア地方を見ればよくわかる。フェニキアや他国の者との混血がすすみ、そのせいでカナン人の多くが信仰するバアルを崇拜するようになった者も少なくない。イスラエルの民でありながら子供の多くは割礼を受けていない。お前たちも無割礼だろ？」

ヤマトは頷いた。ユダヤ人の男子は陰茎に傷痕がある。おそらくイサは、ヤマトが13歳を迎えても割礼を施さなかったにちがいない。イサは、ヤマトを実子とは無縁の存在として扱った。

「神は“契約のしるし”として、ユダヤ人の先祖であるアブラハムとその子に割礼を義務づけ、律法となっている」

「なんでも律法、律法……。どうしてそんなにこだわるんだ」
読んだり書いたりしたいだけなんだ、と吐き捨てる金髪の少年を残して、ヤマトは踵を返した。

ザドクの、かならず帰れという声にも無言で応じた。

姉との約束に思いを馳せたヤマトは大急ぎで広場に引き返した。

ジャミールが見つからなければ先に旅立つつもりでいた。

……姉さんを探さなくては！

噂が広がっていると見えてすれ違う人々は少年から目を離さなかった。時おり、立ち止まって話しかける者もいた。蔑みの視線には馴れていたが、卑しい目つきの男たちから見つめられることには馴れていなかった。

「待てよ。俺の名はサライ」

金色の髪の少年はどこまでもついてくる。ヤマトは駆け出した。

サライの懐には、パンとダレイコス金貨が1枚（約128？）ある。物乞いの少年を追いかける必要などなかった。独り占めしたほうがいいに決まっている。食料だけに使うなら2、3カ月は食いつなげる。

「なんで、あいつは、半分よこせと言わねえんだろ？ おかしなチビだ」

砂漠の村で出会ったとんがり帽子の男は、食い物に勝てる奴なんていないと言っていた。食い物を、金貨に置き換えても同じことが言えるのではないか。

「野たれ死んでもいいってことだな。俺さまは獅子のように強く生き抜くぞッ」

サライはパンをかじりながら広場を右往左往した。住んでいたベエル・シェバと同じなら両替屋が近くにあるはずだ。1シケルの金貨を銀貨に換金すれば58枚になる。手数料をとられても40シケルにはなるだろう。「さてと どこにあるかだ」

人目につきにくい、入り組んだ路地の奥に両替屋は構えているはずだ。案の定、見つかった建物は隊商宿の裏手にあり、煉瓦の壁が崩れ落ちそうだった。

……欲の皮の突っ張ったユダヤ人の爺さんが商売してんだらうなア。扉を叩くと、半裸の大男が開けてくれた。用心棒のようだ。相手が子供と見ると、大男は腕組みをした。「物乞いのくるところじゃねえ」

客だと告げると、窓のない部屋に通された。オリブランプが灯っていたが、太陽に照らされた街路から入っていくと真夜中のように暗く感じた。

ギシギシ鳴る床板は踏みぬきそうだ。

両替屋の主人は壮年だったが、枯れ木のように痩せていた。重い

咳をしながら木製の古い台にむかつて座っていた。声をかけようとしたが、男の関心を引き寄せることはむずかしいようだった。

暗がりには、張り詰めた雰囲気は漂っていた。

炯々と光る目はちらりともこちらを見ない。口をつぐみ、目をこらした。台の上には、秤の他に小刀や金の純度を計るらしい黒い石などが乱雑に散らかっている。

明かりの届かない物陰からにじみ出るように、とんがり帽子が浮き上がった。

ユダの山村で会った男だ。帽子と斧を隠すためか、かぶり物とひと続きになった黒いマントをはおっている。

「客のようだぜ」と男は言った。

「かまうもんか」両替屋は二べもない。

秤のすぐ側に、光るものが見えた。首飾りのようだった。

「翡翠もだが、青い瑠璃（ラピス・ラズリ）の加工がとくに見事だ。鎖の金の純度も高い。これだけのものだ。どこにでもあるしろものじゃない」

「やはりな」

どう思う？ ととんがり帽子の男が訊ねると、両替屋はニヤリと笑った。

「これが、例のお宝の1部だと言える証拠はどこにもないが、違うとも言い切れまいよ。もし本物なら俺にもひとつ、かましてくれないか？ 昨日今日の付き合いじゃないんだからな」

「お前さんを、どこまで信じていいのか、わからねえからなア」

「信義にまざるのが、金だと思わんか」

アラム語しか話さないところを見ると、両替屋の男はおそらく最近、バビロンから帰ってきたのだろう。金品を携えて帰還した彼らは農夫や羊飼いにならず、潤沢な資金で両替屋もしくは金貸しになり、外国人だけでなく同胞からも暴利を得ていた。そして、貸した金や金利を支払えない者からは家や土地を取り上げるのだ。

バビロニアの服属国になったのちも土地を離れなかった農民や牧

羊者は、ゼルバベルとともに先に帰還した者たちやエズラに率いられてもどった者たちとの間にいさかいが絶えなかった。

「俺の見立てにまちがいがなけりや、フェニキアのビブロスで作られたものだろうよ。それも相当、腕のいい金細工職人が手がけている。あっちに行けば、詳しいことがわかるんじゃないのか」

「そうするしかないか」

とんがり帽子は首飾りを売る算段をしてるのではないらしい。

そろそろいい頃合だろうと、サライは彼らに近寄り、金貨を差し出した。

両替屋はわし鼻をサライに向けると、銀貨30枚を投げてよこした。

「たったこれだけかよ？ ペルシア王の刻印がある金貨は通常の重さの3割増しの価値があるはずだ」

「それだけありや、奴隷が1人買える。ありがたく思え」

「なめんじゃねえツ」

このまま黙って銀貨を受け取るほうが利口かもしれないと一瞬頭をかすめたが、金にものを言わし居丈高なユダヤ人にいいように扱われるのは我慢ならなかった。

サライは金貨を懐にもどすと、肩をそびやかしたまま、用心棒の前を素通し、扉の外に出た。

とんがり帽子が後ろからやってきた。彼は独り言のように呟いた。「金貨で小麦を買い取るだけ買ってても、運ぶ手立てがないし、売りさばくには市の立つ広場で税金を払い、どこかに陣取らなくてはならない。しかし、場所を譲ってくれる物売りはいないだろうな」

「それがどーしたんだよ」

「向こう意気だけは強いな。性根もすわってるようだ。場合によっては、手を貸してやってもいい。ただし、こっちの欲しい耳寄りな話を聞かせてくれなければだめだがな」

「なんの話だ？」

「エズラに賛同する者の中に、過激な考えの奴はいたか」

「ああ、マラキとかいったな」

「そうか」ケバルはサライに皮袋を手渡した。「とっておけ。銀貨が10枚、入っている」

「えっ、通行証ももらっているし……」

「俺の名はケバルだ。金はいくらでもやる。ただし、こんど会う時まで、エズラの弟子になっておけ。いいな」

返事をする前に、ケバルは路地からいなくなった。

「もしかすると……あいつは」

王の耳なのかもしれないとサライは胸のうちで呟いた。神の子と崇められるエズラからはなんの言葉も返ってこなかったが、ペルシアの密偵からは言葉を求められる。

「なんなんだ……」

子供の頃のことだが、昨日のここのように思い返される。町のどこにいても、白人奴隷という蔑みの言葉が聞こえた。気にしてはならないと母は言った。神に選ばれた民と称し、他の部族への敬意をまったく持ち合わせない彼らは、人のなさに欠けるのだと。

ユダヤ人は、全能の神ヤハウエは世界のすべての支配し、人間の理解をこえる存在だと言う。ということは自分のような異形の者も神のご意志でここにいるということにならないのか。

ダビデは言う。「神はわたしと永遠の契約を結ばれた」と。そして「その契約は朽ちることがなく、最終的なものであり、封印されている」と。しかし、生をうけた時から条件を充たさない者はどうなるのか。神に逆らうことはなくとも終わりのない時まで、投げ捨てられた茨のごときものなのか。

サライの母は、ラビ・エズラが糺弾する異国の女だ。母の一族はヨルダン川の東 ガド族の土地と接するアンモンの首都・ラバに居住する都市生活者だった。

古代、ヤボク渓谷に沿った盆地はユダヤの神からヘブライ人の口トの子らに分け与えられたものだった。しかし時代が下り、周辺の

部族との混血がすすんだ頃に、イスラエルを統一したダビデの軍勢に包囲された。戦いに敗れたアンモン人の男たちの多くは惨殺され、女と子供は奴隷にされた。ダビデは同じ祖先の者たちを撃つたことになる。

ダビデの後の時代、北王国と南王国に分裂し、パレスチナの全域の覇権を失ったユダヤ人にかわってバビロニア人がアンモンの地を支配した。生き残ったアンモン人は今度はバビロンへ連れ去られた。アラビアからダマスコに至る要衝路に位置する肥沃な土地を奪う征服者は切れ目なく現れた。

母にとって、ユダヤ人の英雄は憎むべき相手だった。文字は読めなかったが、一族の言い伝えでダビデを忌み嫌っていた。

皮肉なことに読み書きを習ったサライには、物語に登場するダビデは近い存在だった。鷲よりも速く、獅子よりも強かった友ヨナタンの死を悲しんで詠唱したダビデの歌にもっとも心を奪われた。

『わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためにわたしは悲しむ。あなたはわたしにとっていと楽しい者であった。あなたがわたしを愛するのは世の常のようではなく、女の愛にも勝っていた。ああ、勇士たちは倒れた。戦いの器は失せた。(サムエル下：1 - 26)』
この歌を口ずさむと母は怒り狂った。

ユダヤ人の奴隷となった母の祖先はイスラエルの南端ベエル・シエバに流れついた。奴隷は家畜と同じで、ご主人様の行くところについて行くしかない。

奴隷の子として生をうけた母は多くの多額の寄進で潤うレビ人の祭司に側女として売られたが老人の死後、たつぷり巻き上げた金で収税人を買収し、自由の民の身分を得た。そして自分と同じ、奴隷の焼き印のある女を数人買い求めた。表向きは交易路に面した隊商宿だったが、家業がなんなのか、サライは幼い頃から気づいていた。女たちだけでなく、母も客の相手をしていた。

客の人種も貴賤も母は問わなかった。そのせいか、サライの父親が誰なのか、母自身にもわからなかったようだ。だが、母は自らを

卑下しなかった。

「金に汚いユダヤ人に、商売のことで馬鹿にされてたまるかっての！」

「自慢にならないぜ」

「敵討ちなんだ」

ダビデ王の黄金の王衣も王冠もアンモン人の王から奪い取ったものだ、と母は言っていて譲らなかった。

「ラバの神殿にあった“マルカムの冠”は1タラント（約30？）の黄金で作られてたんだ。赤い大きな宝石（サードニックス）が王冠の真ん中についていたんだよ」

「大昔の話じゃないか」

「ユダヤ人は銀百タラントの他に大麦と小麦を、それぞれ1万ホメル（2千2百??）を、3年間も取り立てたんだ。言い草がいいじゃないか。アンモン人は、奴らの信じてるヤハウエの目に正しくないからだつてさ。お前、まさか、あんな酷い神を信じてないだろうね？」

「信じてないよ」

母は声をひそめると、

「マルカムの冠もだけど、ソロモンの黄金もエルサレムの宮殿のどこかに隠されているつて噂されてるんだけど、いまだに見つかっていないんだよ」

「黄金の冠だけじゃない。“契約の箱”だつて、皆が必死で探してるつて話だ」

「だからあたしや、一矢報いたいと思つてね、収税人をからかってやったんだよ」

「バビロニアの王が、ソロモンの神殿を壊してまで探しても見つからなかったものが、あるわけないだろ」

「昔、ある客に黄金の隠し場所を聞いたんだよ」

「なんて言つたんだ？」

「神殿にはないんだつてさ」

「そんなことなら誰にでも言えるよ」

「王の護衛長がバビロンの地下水路に隠したらしいよ」

エルサレムの陥落後（紀元前607年）、カルデア人のネブカドネザル王に代わって駐留軍を指揮していた王の護衛長「ネブゼラダ」ン將軍は神殿の宝物を検分したうえで、祭事に使用される金や銀の器や燭台は運び出し、精銅製の水盤や支柱は砕いて持ち去った。そののちに火を放ち、城壁を破壊し、エルサレム市内を灰塵に帰させたが、黄金も契約の箱も見つからなかったと伝えられている。

「でね、客からもらった地下水路の地図を、収税人にチラツと見せてやったのさ。目を皿のようにしてたよ」

母は事件の起きる少し前に、サライの額帯の中に地図を縫いこんだ。

「お前に預けておくから大切にとつとくんだよ。あたしになんかあつても、あんたには守り神がついてるからお宝を見つけ出せるよ。

これしてくれた男は、この地図のせいで自分は殺されるかもしれないつて言つてたから、あんたは誰にも話しちゃだめだよ」

朝な夕な奇怪な容貌の偶像に供え物をささげ、母は息子の将来と安泰を祈っていた。それが、さつき集会所で罵られたバアルの悪魔だと知つたのはいつだっただろう。

「それと この短剣なんだけどさ、男からもらつたんだ。あんたに渡しとくよ」

「黄金の柄じゃないかッ」

鞘には、キンバイカと記されていた。

「なんだよ、これ？」

「わからないよ。でも、あたしの形見だと思つてよ」

母はもしかすると、死を予感していたのか……？

「サタン、サタン」と囁かたてる子供たちの声と、飛びかう石が行く手をさえぎつた。ユダヤ人は悪魔のことを、反抗者を意味するサタンと呼ぶ。

子供の1人が紐のついた石を投げつけた。

……逃げ場はないのか。

手招きし、石を投げた子供の横っ面を叩いた。子供の顔には恐怖が貼りついている。

「サタンだから強いんだ」と教えてやった。

故郷では我慢していた。いつの日にか、モーセの五書を筆者する写字生になれるかもしれないと心のどこかで期待をしていたからだ。物心ついた頃から母の客だったユダヤ人書士に、ヘブライ語（アルファベット文字）の律法書の解釈とペルシアの公用語であるアラム語（楔形文字）の読み書きを教わった。ユダヤ人の集まる会堂に出入りできなかったせいだったが、モーセの五書しか学ばないユダヤ人の子供たちより多くの書物に触れることができた。むろん、写字生の筆者した本物の巻き物ではなく、書士が手書きで書き写したものを通してだったが。

訴訟や商いに必要な書類を代筆していた書士は母が大枚を払ったおかげで、ダビデの物語やイザヤの予言書も暗記するほど聞かせてくれた。

しかしサライは、どうしても本物が見たくて会堂に忍び込み、大切に保管されている巻き物を盗み見た。

巻末に“罪人メナハム”と写字生の名が記されていた。罪人であっても写字生になれると知って、天地が広がる気がした。

12歳を過ぎた頃からもっと多くの知識を得たいと切望したが、叶えられないと知った時、サライの心は荒んだ。限られた書物による読み書きだけの知識では満足できなくなっていった。ユダヤ人の子供たちは3歳から12歳まで会堂で学ぶと、それで不満はないようだったが、サライは狭い町の暮らしが息苦しかった。

そして、いつしか、ナバテア人のハーヌルから町の外の話を聞くことを楽しみにするようになった。彼は、防水性のある瀝青モルタルや高価な香油（バルサム）を運ぶ、キャラバンの隊長だった。彼の移動範囲は北はダマスコから南はアラビアにまで達していた。

ハーヌルは泊りにやってくるたびに、キャラバンに加われと言った。

「利口なお前なら将来はペルシアの書記官にもなれる」

ナバテア人の先祖はベドウィンと同じ遊牧民だったという。しかし、砂漠をさすらう掠奪者としてではなく、商人になることで莫大な利益を得るようになったらしい。

「船を造り、操って、大海（地中海）を自由に往来する海の商人・フェニキア人を見ならったんだ。フェニキア人はカルタゴやギリシアの島に植民地をもっていたこともあるんだ。いまじゃ、ペルシアの服属国だが、商いは認められている。同じように、シリアのアラム人も陸地での交易を許されている。保護されていると言ってもいい」

どうして彼らだけ特別なのかと訊くと、

「ダレイオス大王は、征服した国といえども言葉や習慣を尊重したんだ。ユダヤ人を帰還させただろ？俺たちナバテア人も、そのうち、昔のフェニキア人のように港を支配し、交易で国を建てて見せるぞ」

お前もこのままここにはだめだと、ハーヌルは言った。

「親子ともどもユダヤ人の収税人に首を刎ねられるぜ。あいつは金儲けのうまい異教徒に対して敵意を持っている。先手を打って逃げろんだな」

「おふくろは許さないよ」

「ペルシアでは、生まれがどこの国の者であろうと、どんな神を信じていようと能力のある者には相応の地位が与えられる。たとえ囚われ人の子であっても、王の側近くに仕えるユダヤ人さえいる」

ハーヌルからエズラの話をはじめて耳にした。

「いまじゃ、エルサレムの行政長官さまさ。総督にはおよばないが、財務官にならぶ地位だ。王に気に入られて庇護を受ければ恐いものなしさ」

ペルシア帝国は、ダレイオス王の時代にギリシアの都市国家のひ

とつ、アテナイと戦って敗れ、その子クセルクセス王の時代にもギリシアの連合軍と争って敗れている。しかし、ハーヌルはそのことには触れなかった。

「この先千年は、ペルシアを凌駕する国なんて現われっこないさ。祭事に使われるペルセポリスのでけえことと言ったら、比べるものがない」

アルタクセルクセス王の代になって、王はバクトリア（アフガニスタン北部）とエジプトの反乱を鎮圧し（紀元前465〜460年）、ふたたびギリシアとギリシアに服属する島々を版図に加えようと戦いの機会を狙っていた。

ペルシアに行ってみたいとサライは思った。写字生として名高いエズラにも会ってみたかった。

「こんな小さな町だから、この連中にはお前の価値がわからない」
そう言われ、さらに心が動いた。

しかし、

キャラバンについて行きたいと母に告げると、強く反対された。

「あの男の言うことなんか、信用できないよ。あいつはお前を売る魂胆なんだ。あんたは陶工か金細工職人になればいい」

「それなら、どうして読み書きを習わせたんだよ」

「わかりきったことをきくんじゃないよ。ユダヤ人に誤魔化されなためじゃないか」

黙って旅立とうと決意した直後に、母はユダヤ人の女たちに殺された。客に、手料理を食べさせたことが、その理由だった。ユダヤの神の教えでは、月経中の女は、料理をしてはならないことになっている。食物も家族とは別のものをとらなくてはならない。雇っている娼婦の密告で、母は禁を破ったとされた。異教徒の母が、ユダヤ人の法律で裁かれるいわれはないはずだが、レビ人祭司の側女であった過去のせいで、裁定をくだされた。ペルシア人は、ユダヤ人に同族の罪人を裁く権限を認めていた。

母は、町の門の前で石打ちの刑に処せられた。イザヤは、「みな

し子を正しく守り、寡婦の訴えを弁護せよ（イザヤ1：17）」と言ったが誰ひとり、母にかわって弁明してくれなかった。長年、母から賄賂を取っていた収税人は、家にある金目の物の一切合財を取り上げた。今から思うと地図を探すことが目的だったのかもしれない。

サライは無一文で町を追われた。

母の無残な死に様を目のあたりにした日から、どれだけの日数を経たのか、記憶が定かではない。杭くいに縛りつけられた母に向かって、女たちは石を投げつづけた。しかし、女たちの信仰に抗するように母の命の火は容易に消えなかった。しびれを切らした役人が、母の喉首を切り裂いた。

母の亡骸はいまどこにあるのだろう。

……いつか仇はとってやる。

この怒りは生きている限り、失われぬ。

黒衣の老祭司が喚きながら石段を降りてきた。

「いまに、ほんものの神の子が現われる！」

灰色の顎ひげの祭司はサライに目を止めると、異教徒めと罵声を浴びせた。そして、羊皮紙の巻き物をつきつけた。

「神はわれわれに戦士を与え、敵を撃ち滅ぼし……」と口尻に泡をため、救世主の到来をつげる。

「神の子は、戦うために来るのか」

老祭司は一瞬口ごもり、それから激怒した。「神が、邪悪な者たちを滅ぼさないでどうするんだ！ お前のように神に唾する奴をなんとしても」

「別のことを書いた巻物もあるが、知らないのか」とサライは言った。「人間の罪はひとりの正しいヤハウエの下僕の贖罪の死によってあがなわれ、すべての人間が救われるんだ。神の子は杭に掛けられると予言されている。爺さん、しっかり目を開けて読みなよ」

「お前は、戯言を信じるのか」

「イザヤは、爺さんたちがありがたがる預言者じゃないのか？」

老祭司はサライの言葉を打ち消した。

「神の子が何故、杭にかかるんだ。神の子は、わしたちを敵の手から解き放つためにやってくるんだ」と何かに取り憑かれたように口走る。「ダビデは、ユダ部族のライオンと讃えられたんだ。エズラのような臆病者が神の子であるものかッ」

老祭司の考える神と、預言者イザヤの語る神とは隔たりがあるようだ。人それぞれに利害に差があるように、神に対する考えも異なるらしい。

サライは、広場の人だかりに足をむけた。

石造りの建物は、天から落ちはじめた太陽の光で真っ赤に染まっていた。楽しいな歌声が聞こえる。

目を見張った。「生きてたのか……」

人々の輪の中心で、歌い踊っている少女からは病に伏していたことなど想像もつかない。見ている者は誰でも、ガゼル（鹿の一種）のような愛くるしい鶯色の瞳に見つめられているような錯覚を覚える。タンバリンを鳴らしながら足をあげるたびに、ちりん、ちりんと足首に結んだ鎖が音を立てた。

少女は身軽だった。地面を蹴ると、ふあつと宙に浮いて一回転して見せた。

見物人はどよめいた。

夢心地で見つめているうちに踊りはおわり、見物人がパンや硬貨を投げた。少女は口元に微笑を浮かべながら拾い集める。サライも腰をかがめて拾う。

「何すんのよ」

「手伝いたいと思って……」

「あんた何者なのよ」

「俺はサライ。覚えてないと思うけど、お前が病気で寝こんでるときに会ってるんだ」小さな嘘をついた。「もし、俺が水を飲ませてやらなきゃ、お前は死んでたかもしれな」。「ふふん」少女は嗤った。「甘くみないでよ。あたしはね、自分のことは自分で始末をつ

けられるんだ」

衣の裾をひるがして立ち去る少女を、サライは呼び止めた。

「ケバルの仲間なんだろ？ 実は俺も」

少女はいったん立ち止まったが、振りむきざまに目を泳がせ、大声を出した。

「ヤマトッ！」

少女の視線の先には、被りもので頭と顔をおおい、人々の後ろを隠れるように歩いている少年がいた。

「なんだ、なんだ、お前たち仲間なのか。それで、あいつはバカの振りをして探りをいれてたのか。俺が話しかけても知らん顔をするはずだ」

「何を言ってるのよ？」

「俺たち3人は不思議な絆で結ばれてると思わないか？」

サライは、ペルシア王の槍持ちか盾持ち（側近）となるメドが立つまでは、この2人から離れまいと決心した。

「助け合えるよな、俺たち」とサライは言った。「俺は、読み書きにかけては自信があるんだ」

少女には、人の目や心を引き寄せる類いまれな容姿がある。少年には人の警戒心をとく何かがある。王の耳の彼らと共にいて損はない。迷うことはない。与えられた運のままに進もう。神の良い御手に導かれなくとも彼らとともに試みる価値はある。

いきなり帯刀した数人のペルシア兵が群がり出てきた。彼らは木製の盾を携帯し、戦闘用の鎧を身につけていた。

広場にいた群衆は、強い風にさらされた木の葉のように散り散りに散った。

薪を背負ったロバが手綱をつよく引かれ、踏み止まっていなかった。

ヤマトはジャミールを置いて逃げられず、その場に立ちつくした。「なんなんだよッ」サライは齒向かう姿勢を見せた。「お前ら、さっきの仕返しなのか」兵士の1人が剣を抜いた。

「俺たちになんの用があるんだよ」サライが言ったとたん、兵士の剣はヤマトの被りものを切り裂いた。

「こいつにまちがいないのか」と兵士はジャミールに訊いた。ヤマトはジャミールを振りむいた。

ジャミールは兵士らが盾を使ってヤマトを取り囲むさまを冷めた目で見つめている。

「どーなってるんだよ!？」サライは戸惑いを隠せない様子だった。ジャミールは唇を噛むと、広場を横切り、家々の立ち並ぶ方角に歩み去った。

ヤマトは安堵した。自分ひとりならどうにでもなると思った。

藍色の夕闇が迫り、町中に不穏な空気が漂いはじめていた。もうすぐ、門にかんぬきがおろされる時間だった。

穀物倉庫となっている建物の中に連行されたヤマトは注意深く内部を見た。広場に面したもっとも大きな建造物は堅牢な造りだった。石畳の通路を通り抜けると、広い中庭があり、馬に引かせる戦車が数台、並んでいた。

帰還者の長老頭の言うように、たしかにここはペルシア人の支配する町のようなだった。大勢の兵士が焚火を囲んで酒盛りをしている。

ある者は胸を叩きながら意味不明の言葉を発している。またある者は娼婦と思われる女たちをなぶりものにしてている。そして、いくらかの兵士はしゃがみこみ、しきりに吐いていた。酔っているようにも見えるが、体調が悪いようだった。

男たちの吐き出す汚物で、中庭全体に臭気が漂い、そこら中が腐りかけているように思えた。

建物内に入ると、扉のない上部が半円の入り口がみつつ重なって見える。手前がもつとも小さい。大きさの異なる3箇所の入りを通り抜けると、大きなテーブルがふたつ並ぶ広い部屋に出た。幾何学模様の極彩色の織物が正面の壁を飾っている。四方に長椅子があり、テーブルの上には調理した食べ物が出たように積まれていた。が、誰もいない。

しばらくすると、部屋を隔てるとばり（カーテン）越しにこちらの様子をうかがっている気配に気づいた。

ヤマトは息をひそめる。

目の下にベールのある頭巾をかぶった男が獣の皮をかけた長椅子にゆったりと寝そべっている姿がほんやりと見える。青みかかった灰色の目がじつとこちらを見ている。

「お前のような顔立ちの一族はシュメール人と呼ばれていたそうだ。バビロンを倒したメディア人のキュロス王は、『余はキュロスである。世界の王、大王、力ある王、バビロンの王、シュメール、アツカドの王、四方世界の王』と布告したそうだ。キュロス王といえども、伝説の都を建てたシュメール人にあやかりたかったようだ」

ナンナの声が脳裏に蘇る。

「天空に都があったのよ。そこには黄金ばかりの宝の蔵があったの……」

男の声は低く聞き取りにくかった。

「ところで、お前が所持していた首飾りだが、姉のものだそうだな」
ヤマトは即座に首をふった。ナンナの身に災難が降りかからないようにするためだった。

男は忍び笑いをもらすと、暗やみに控えていた召使に命じ、とばりを巻き上げさせた。

「象牙色の肌といい、黒い髪に黒い瞳といい、伝説のシユメール人そのものだな」

縦の深い襷のある長衣をまとった男は身分の高さを誇示するように、腰まである上着の袖を跳ね上げるようにして腕をあげ、ヤマトの前にある長椅子に座れと命じた。

ヤマトは身動きしなかった。

……この男はなぜ、ナンナのことを知っているのだろうか。それに、どうやって首飾りを手に入れたのか。

「監察官の命令に背く者などこの世にいない」男の口調は冷ややかだった。「しかし、このわたしとて未来に起きる出来事は知りようがない。お前は己れの未来がどんなものか、知りたいと思わないか？」

宿命とは理不尽で不可解なものだと監察官は呟きながらもう一度片手を上げた。すると、後方に控えていた召使が平らな金属を捧げもち、打ち鳴らした。はじめて耳にする音の響きにたじろぐヤマトをさらに驚かすように、数人の召使が蓋つきの銀の大皿を手にはち現れた。

テーブルに並べられ、蓋がとられると、肉汁の匂いが部屋中にただよった。

食卓にのらない食べ物隣接する部屋の敷物の上に並べられた。すると、兵士の服装ではない男たちが幾人も待ちかねたように立ち現われた。帽子のある者やない者、口髭のある者やない者、顎髭のある者やない者、耳飾りのある者やない者など　どの顔も食欲への強い欲求で満ち溢れていた。

「さあ、皆の者、夜毎の宴だ」と監察官が言った。「食べるがいい」

飲み物が運ばれ、肌もあらわな女たちが男たちの傍らに侍った。給仕をする者たちは白い衣を着ている。

「王の晩餐とは華やかさにおいても規模においても比較にならない、ささやかな宴だ。しかし、食べ残したものは、給与の一部として百人の兵士たちに振る舞われる」青灰色の目がヤマトを見据えた。「卑しい身分のお前が一生かかっても、1度たりとも得られない食べ物ばかりだ。まずは、大麦でつくった酒（ビール）を飲んでみるか。残すと兵士らに飲まれてしまうぞ」

土器のコップが、立っているヤマトの前に運ばれた。乾いた麦の茎（ストロー）がさしてある。

首を横にふると、

「なぜだ？」

「僕は、兵士でも奴隷でもない」

「では、なんだ？」

シユメールの民と口にしかけて、自由の民だと言った。ジャミールから聞いた、言葉を口にしたのだ。

監察官は長椅子から身を起こし、高い笑い声をあげた。

「わたしと同じ名の軍人だった祖父が、ギリシアのマラトンで戦ったアテナイ人も自由という言葉をしば口にしたというぞ。神や王ではなく、自由のために戦うとな。身のほど知らずな者どもだ。選ばれた者たちで、まつりごとも行なうらしいが、そんな悠長なことをしては何事においても決断の時期を逸し、広い領土を維持できない」

尊大な男は話しながら目の前にきた。

「生きたまま剥ぐには惜しい、細い顎だな。いかにも幼い。どうだ？ わたしの部下にならないか」

「ならない」

「即断するのだな」

1度でも男の言いなりになればそのときはもう、いまの自分でいられなくなる気がした。「お前は差し出された好意は受けなくてはならない。なぜなら、今のお前には選択する意志など与えられていないからだ」

「僕は、誰の言いなりにもならない」

「お前は、一緒にいた女に売られたのだ。そんなこともわからないのか」

「売られた……？」

「どの国の奴隷であろうと銀貨30枚が相場だが、わたしは首飾りの代金も含めて金貨10枚をくれてやったのだ」

ヤマトは、ジャミールの生き生きと動く鳶色の瞳を思い浮かべた。「わたしの申し出を素直に受けるか、さもなければ両目を剝りぬぎ、両耳に熱い精銅を流し込むか、どうする？ 選ぶがいい。そのまえに、お前は自分が何者なのか、知っているのかどうかをまず聞かなくてはならない」

「何者って……？」

「知らぬと見えるな。それならそれでいいだろう。これも運命さだめだからな」

監察官が指を鳴らすと、部屋の外に待機していた2人の兵士が呼ばれた。兵士は監察官に何事が耳打ちした。

「皆の者、この少年は、王の耳だと称したそうだ」

男たちの笑い声が食卓を賑わした。

もう1人の兵士の頬には傷があった。路上で言い掛りをつけた兵士の仲間だ。ヤマトと目が合うとすぐに伏せた。

耳打ちした兵士に肩を押さえられたヤマトはすぐさま、部屋につづくテラスに引き出された。

食事を中断した男たちも、テラスに出てきた。

監察官は、傷のある兵士に命じ、ヤマトの手を背中にねじまげさせようとした。

「右の手が長いな。もしかすると、弓を引くのか」

ヤマトが首肯くと、監察官は傷のある兵士にテラスの手摺りを背にして立つように言った。

「よろこんで仰せの通りに」と兵士は答えた。

「松明を持って！」監察官は別の兵士に命じた。

見たこともないような大きさの弓がヤマトに手渡された。弓は少年の身長ほどの長さがあり、矢は葦でできていて、矢の元の部分には鳥の羽が取り付けられていた。

監察官は頬に傷のある兵士の頭の上に鳩の肉をのせさせると、それを射抜くようにとヤマトに命じた。

「勇猛果敢にして忠実なる下僕の、わがメディア軍の兵士は微動だにしない。安心して射るがいい」

弓を射るには相応の筋力がなくてはならない。姉のナンナが夜毎、穀物を挽かせたのはこの時のためだったのか……。

狙いを定めた。至近距離とはいえ、的まで長いさお（約3・1？）を3本、縦に並べたほどある。

放たれた矢はまっすぐに飛び、肉塊を板に吊した。

男たちから大きな歓声があがった。

「見事だ！」監察官は上機嫌になった。「ペルシアの男子は幼少より、弓を射、槍を投げ、馬を乗り回す術を学ぶと言うが、それはもともとメディア人に当てはめて言ったことなのだ。われわれメディア人は何より、真実を重んじる。たしかにお前は、奴隷ではない。腕がたつ上に美しい」

領地に連れ帰り、王にも仕えられるような宦官に育ててやろうと監察官は言った。

「宦官……？」

「エズラのように、思いもよらぬ栄華をその手にできる」

「僕は、宦官にならない」

監察官はうすく笑った。「去勢された者は過去に何者であっても王にはなれぬと知っているのか？」

決して頭巾をとらない監察官はもしかすると、エズラと同じように髭がないのではないかとヤマトは疑った。

「ならば、お前が的になるのだ」

ヤマトの疑念に気づいたかのように、監察官は口早に言った。

「この者に足枷をつけよ。座興に、わたしが射よう」

傷のある兵士に代わって、戸板の前に立たされたヤマトの頭には、ナンナの顔が鮮明にうかんだ。

……姉さん……。

仰せの通りにいたしますと声に出して言えば命だけは助かるのだらうか。しかし、喉がしめつけられて口が開かない。ヤマトは吐き気に襲われた。

頬に傷のある兵士はヤマトの細い足首に鉄の重りのついた鎖をつけながら囁いた。

「俺の傷は、監察官の矢のせいだ。何があっても絶対に動くな」

さっきは気づかなかったが、その声に聞き覚えがあった。どこで耳にしたのだらう。遠い遠い昔……。

「これも過去に定められた宿命なのかもしれないな」

監察官は弓を引きしぼり、一瞬のためらいも見せず矢を放った。

矢はハヤブサより早く飛んでくる。

一点を見つめた。

突然、ドラが鳴った。

思わず顔をそむけた。つぎの刹那、矢尻が青い光に包まれ、焼けるような痛みが両のまぶたを襲った。

12話

物陰に逃げ込んだジャミールは身を飾っていた装飾品をすべて外し、顔を汚し、衣を裏返しに着た。裏地は、ボロ切れで作られていた。

「こうするしかないんだよ　どうすりゃいいのさ」

ジャミールはヤマトを売った自分自身に腹を立てていた。

広い通りに戻ると、サライと名乗る少年が待ちかまえていた。

「踊り子から物乞いに変装したのか？　たいした早業だな。男か、女かもわからないよ」　ジャミールはサライの目の色が気に入らなかった。ヤマトの黒い目からは人の言葉を疑わない善意や意志の強さがまっすぐに伝わる。しかし、サライの青い瞳からは計算や自惚れが時おりかいま見える。そのくせ、他人を当てにする安易な性癖が感じられた。ジャミールが路地で寝ると言えば、自分も同じ場所で寝ると言っついてくる。

「旅は道連れっていうだろ。それに同じケバルの」

「あなた、文無しなんだろ？」

「宿賃はもってるよ。なんならお前のぶんも払ってやってもいいくらいだ」

「ぶん」

サライは立ち止まり、

「あいつ、わざとつかまるように、ケバルから命令されてたのか」

「そうじゃないわ」

「ペルシアの兵隊は、相手かまわず、ひつつかまえるのか」

「違うわ……」

ヤマトを監督官に引き渡すことは役目だった。こうなることは、はじめからわかっていたが、針で刺されたように胸が痛んだ。

「俺は、ラビ・エズラの弟子になって、写字生になることに決めたんだ」

「へえ」

「エルサレムにいつしよに行くだろ？」

「男なんだから、1人で行けばいいじゃないの」

「助け合ったほうがいいと思うけどなあ」

「それが狙いなものね」

ジャミールが野宿のできる場所を探していると、買物を手伝ってくれとサライは言い出した。

「何よ」

「長旅に必要なものがわからないんだ。頼むよ」

市場は昼間のうちに終わっていたので、隊商宿で買うことにした。食料、寝袋、替えのサンダル、水を入れる皮袋、水を汲むための皮製の折畳み式バケツなどを、ジャミールは買いそろえてやった。

「ついでにここに泊まるうぜ」

「そうするしかないわね」

壁を巡らした敷地内には、正方形の建物が建ち、家具のない部屋がいくつも並んでいる。

薄汚い部屋だった。暑さ寒さはしのげるが、体が痒くてたまらない。買ったばかりの寝袋にジャミールは潜りこんだ。

「荷物を盗まれないようにしなさいよ。油断できないんだからね」
サライはこっくり頷くと、幼い子供のように両足を抱えて床の上に寝転がった。

翌朝、臭気のためよう路地では、ペルシア兵の地面をつつ鞭の音が朝もやをはらうように響きわたっていた。

見ると、大勢の女や子供がうずくまり、それぞれの肩に袋や壺やかごが担がれている。戦いに破れ、占領下におかれると、女や子供は奴隷として売られることもめずらしくない。

ジャミールもエチオピア人の奴隷女から生まれた子供だった。母と自分を見るようだった。

広場を横切り、城壁まで行くと、門番の兵士が立っていた。ジャ

ミールとサライは買い求めたものを、物見の兵士に預けていたラクダの背に積み、薄暗い通路に出た。

まる一日休養をとったおかげで、ラクダの足取りは軽かった。町の門はかんぬきが外され、すでに開かれていた。

荷物を積んだロバを何頭もつれた、エズラと若者たちの集団が、軽装備の騎兵をいく人も従えて出て行くところだった。

先頭の険しい目つきの若者は唇を固くむすび、周囲の者を睥睨しながら進んでいく。

通路にいた女や子供が門の前に集められ、兵士の手で人数が確かめられていた。人々は一様に瘦せて、気を失っていた。家畜のように追い立てられ、門の外へ出て行く。

彼らと少し離れて、サライとジャミールもあとに従った。城壁の周囲は、なだらかな斜面を利用して、収穫の季節を迎えたぶどう園がひろがっている。奴隷の一群はここで働かされるのだろう。

ジャミールはラクダの首筋をかるく叩くと、ぽつりと言った。

「やっぱり、あの子を置いて行けないわ」

「どういうことだよ」

「ラクダは返してもらおうわ」

「これだけの荷物を、素手で運べるわけないだろ」

「わかった。何もいらぬわ」ジャミールはラクダから降りた。「タダであげるわ」

「待ってくれよ。お前はケバルの命令で動いているんだろ？ それだったら、こんなところで愚図愚図できないんじゃないのか？ それに1人じゃ、兵士を相手にどうにもならないって！」

「さっさと消えてくれる？」

「勝手にしろッ」

朝焼けを浴びながら去っていくサライの後ろ姿を見ながら自分でも、どうしてこれほどヤマトのことが気にかかるのかわからなかった。命の次に大事なラクダを手放してまで……。

弟を思い出すのかもしれない。

ジャミールの母はエチオピアの王族の出だった。ペルシアがエジプトと戦い、勝利したおりに戦利品として一族はペルシア軍に捕らえられた。異国の地にあつて、ペルシアの高官の側女となった母は、ジャミールと弟を生んだが、彼女が10歳のときに、高官の正妻に母は弟ともども殺された。彼女が生き長らえたのは父親である高官が、帝国の各州を偵察して回る監察官のティグラネスに娘を預けたせいだ。

肉親の死から4年余り、彼女は、ティグラネスの下で働くケバルとハシムとともに、命ぜられるままに王の目となり耳となって密偵の役目を果たしている。

人さらいの手伝いをするのも生きるためだった。監察官から相應の手当てをもらっていたがそれだけでは足りなかった。ケバルやハシムはともかく、ジャミールは変装に必要な装飾品や衣服に金がかかった。

「姉さんを売った一味の1人が、あたしだと知ればヤマトはどう思うだろう……」

ジャミールは生まれてはじめて、自分の置かれている状況にいたたまれないものを感じた。だからと言って、監察官の支配から逃げ出せるはずもなかった。もし裏切れば、ケバルに殺されるだろう。ケバルが手を下さなくとも監察官の配下の者がかならずジャミールを見つけ出す。そして、命を奪われる。

帝国内にいる征服奴隷と同じ身の上なのだ。命などあつてもないのと同然だった。ご主人様のご機嫌を損じれば、立ちどころに殺される。それもおどろくほど残酷な方法で。生きたまま皮を剥がれた裏切り者を幾人も目にしてきた。監察官はひと思いに殺さない死にゆく者の塗炭の苦しみを何日もかけて楽しむのだ。

「あいつには、涙なんてないんだ。考えることと言ったら、黄金のことだけ……」

メディア人の監察官はペルシア人の王の命令に服して、契約の箱を探索しているのではない。真意は計り知れないが、何事かを企ん

でいることはまちがいない。

ギリシアとの戦いで、不死隊と呼ばれるペルシア軍の精鋭部隊が敗れて以後、広範な領土内では反乱がしばしば起きていた。反乱を鎮圧するために、20州すべてに軍隊を配備しているが、彼らを統括する副王ともいふべきペルシア人の総督はかならずしも王の意向に添わなかった。彼らは彼らの利益を優先し、王の警戒心を刺激せずにはおかなかった。地元の豪族や功績のあった家臣を占領地の太守に任命したが、彼らは自らの軍にイオニア人やギリシア人の傭兵を加え、日毎に勢力を拡大していた。中には、10万を超える兵を擁する者さえいた。心中穏やかでない王は、太守や総督の動向を探る目的で全国の主要都市に監察官を送りこむ一方で、何万人もの命を奪うというユダヤ人の契約の箱を手中に収めたいと探索の指令を出していた。

王は、武器として契約の箱を求めているが、監察官はそうではない。ソロモン王が隠したと言われる黄金を浴している。しかし、どちらの望みも手がかりさえつかめなかった。そこで王は、エズラをエルサレムに帰し、契約の箱に関する情報を得ようと考えたようだ。監察官は王のたくらみを見越して、黄金を手に入れようとしている。メディアとペルシアは同盟国だが、内実は目に見えない欲望と陰謀とが至る所に張り巡らされている。ユダヤ総督の補佐役ともいえる行政長官に任命されたエズラとその一行の帰還は大帝国の弱体化と無縁ではなかった。

「あんたを助けるわ、ヤマト」

ジャミールは兵舎のある建物に急いだ。ヤマトの釈放を監察官のティグラネスに懇願しようと思った。直訴できる身分ではなかったが、兵士の中にはジャミールの誘惑にのって、取り次いでくれる者もいるかもしれない。監察官は冷酷な気質だと耳にしていたが、時には過剰とも受け取れる温情を示すことがあるとケバルから聞いたことがある。

ケバルがペルシア兵にまじり、駐屯する建物の中庭にいた。黒い馬に鞍をつけているところだった。いつものとんがり帽子を被り、斧を背負っている。

ジャミールは駆け寄った。「あの子を助けてほしいの」

「血迷ったのか」ケバルはジャミールの腕をつかみ、「どうしてエルサレムへ向かわない」と叱責した。

「もう、イヤなのよ。でも、あんたが、あの子を救ってくれるんだつたら、これからは言うとおりに働くわ」

「ほんとうだな？」

「誓ってもいいわ。あたし今まで誓ったことなんてなかったでしょ？」

「わかった」

何頭もの馬の前を横切り、兵舎へと2人は入って行った。

編んだむしろの上に、多くの兵士が寝ていた。眠っているのではない。患っているようだった。唸り声を発している者の中の1人に、ヤマトがいた。両目のまぶたがふさがり腫れあがっている。

「何をされたのよ!」

「監察官の逆鱗にふれたのだ」

「あたしのせいだわ」ジャミールは少年を抱きかかえた。

「お前のせいでもなければ、俺のせいでもない。こいつの運命だ」

「体が火のように熱いわ」

「疫病にも罹っているようだ」

「どうしてやればいいんだろ……」

「薬は服ませたが、危険な状態だ。こいつをここに運んできた兵士に死んだと伝えておく。すぐに立ち去れ。俺は今日明日にも、フェニキアのビブロスに向かわなくてはならない」

ケバルは鞍をつけたばかりの馬に少年を横倒しに乗せると、ジャミールを急かし、城壁の外へ急いだ。

「エルサレムまで馬なら半日もかからない」とケバルは言った。

「この町に医者はいないの？」

「エルサレムにしかない。金に困ったら、馬を売れ。銀150枚にはなる」

そして、旅の間はいつものように男の身なりをしるとつけ加えた。「この子を医者に診せたあとは、何をすればいいの？」

「エズラとトリタンタイクメスの動きを探れ」

「連絡は？」

「ハシムがお前を捜し出す」

ジャミールは、バビロン総督のトリタンタイクメスが、なぜエルサレムに軍を率いて駐留したりするのかと訊ねた。

「お前は見たまま、聞いたままを伝えればいい」

「そうね、あたしなんて、ゴミみたいなもんだもんね」

ジャミールは馬に鞭を入れた。メディアから連れてこられた馬は黒いたてがみをなびかせると、疾風のように走りだした。馬の背にくくりつけられたヤマトは微かに息をしている。一刻の早く、エルサレムに辿り着かなくては死んでしまう。

「母さん、お願い、ヤマトを助けて！」

なぜ、自らを助けることのできなかつた母に祈るのか、と胸に問いかける余裕さえなかつた。

南北を結ぶ交易路を目指す。

軍隊の移動を容易にするためにペルシアの歴代の王たちは帝国支配の要として、古くからある交易路の他にも通商のための道路を整備した。丸石と小石をのぞき、茨や野バラやヒカゲノカズラを刈り取り、道しるべとなる石塔を建てた。これらの道は税の徴収と情報収集を目的としていたが、東西文化の交流にも役立った。

道しるべが視野に入った。

帝国内に張り巡らされた“王の道”には111のアンガレイオンと呼ばれる宿駅が設けられ、交替の馬が用意され、御者が待機していた。ジャミールやハシムの集めた情報はケバルから監察官に伝えられ、そのうちのいくつかは伝令によって王に伝えられた。

ペルシアの冬宮・シュシャンからエーゲ海にもっとも近い都市・

サルデイスまで（全長2683？） 徒歩で3カ月かかるところを王の伝令は7日で移動する。帝国内のどこに逃げてもまたたくうちに捕らえられてしまう。

「死んじゃだめよ」

ジャミールは自分が涙を流していることにさえ気づかなかった。

「聞こえてる？ 聞こえてるよね？」

西方にのこぎり状の山塊が大きな輪形をなしてつらなり、雲のない青空にくつきりと浮かびあがっている。

「いつか、誰も行ったことのない国に一緒に行こうね」

山塊の果ては塩の海（死海）にまで達しているはずだった。

日没前、サライは防壁のある村落に行き着いた。

ラクダを降り、あたりの様子をつかがうと、たちまち防壁の影にひそんでいた住人らに取り囲まれた。

「どうぞあなたに平安があるように。あなたの家に平安があるように。またあなたのすべての持ち物に平安があるように。（サムエル上25：6）」

サライはダビデの言葉を引用した。先に、喉の渴きを訴えたかったが、そのことで危険にさらされなくなかった。

「皮膚病に、かかってないだろうな」

ユダとイスラエルの中間地帯に暮らすベニヤミン部族は土地を得るために死闘を経てきた者の常で警戒心が強い。浅黒い肌の族長は、ターバンをぐるぐる巻いて顔を隠したサライの風体をあやしんだ。

銀貨をちらつかせると、族長はようやく挨拶の言葉を返した。「イスラエルの民に祝福を」

宿をたのむと、族長は銀貨3枚を要求した。

法外な値あたいだった。

「明日、支払う」と渋ると、「荷を積んだラクダを預かる」と族長は言った。

言い値を払い、ラクダを連れて納屋の中に入ると、羊やロバが囲いの奥にいて、手前に藁が積み上げてあった。柵の横棒にラクダの手綱をくくりつけると、積み藁の中から何者かが起き上がった。黒いターバンの小男が土気色の顔を見せた。

「旅の者同士や、仲良うせえへんか」

他人の懐をのぞきこむような目つきをしていた。馴々しい口調も気に入らなかつた。どこから見てもベドウィンだ。

「わいは見ての通り、旅の商人や。心配せんでもええでえ。羊のようにおとなしいさかいな」と、男は黄色い歯をむいてへらへら笑う。

「わいな、ハシムゆーねん。兄ちゃんは？」

サライは口を真一文字に結んだ。用心にこしたことはなかった。地方によっては家畜を飼い田畑を耕すユダヤ人と、商人のアラブ人とは混在して生活していたが、町の娼館で育ったサライにとって砂漠を放浪するベドウィンは馴染み薄い存在だった。集団で行動するハゲタカがひとりであることにも気味悪さを感じた。

「辛気臭い兄ちゃんやなア。袖すり合うも他生の縁ゆーやる。子供は素直でないと可愛げがないんやで」

ハシムはそう言つと、手持ちの革袋から乾燥したナツメヤシの実を取り出し、しょぼしょぼ生えた口髭を撫でながら頬張つた。

「しかし、不思議なこともあるもんや。わいのラクダとそっくりのラクダがいてるとはなあ。世間は広いようで狭い」

口を開くたびにペチャペチャと舌を鳴らし、耳障りだった。

と、そのとき、囲いの向こうから声がした。

「うつせえ！ 静かにしろッ」

髭をぼうぼうと生やした大男の顔が柵の上につき出た。ダビデが戦つた、ペリシテ人のゴリアテと見紛う大男だった。

「眠れやしねえ！」

頭を丸くおおう白いターバンの形から、アラビア人だとわかつた。アラビア人はサライの住む町を訪れ、肉桂や乳香やカシアなどの香料を売っていたので、見分けがついた。

ハシムは首をすくめた。「おえらい、お方のお出ましや」

男はしかし、ハシムに一瞥も与えなかつた。定住し、交易に重きをおくアラビア人は掠奪部族のベドウィンを見下し、蔑んでいたが狡猾さにおいてはハゲタカに勝っていた。

油断のならない2人の同宿者につけこまれように、サライは息を殺して眠りについた。ペルシア兵に突きつけた短剣を、腹の上で握りしめた。

夜が更けると、天井に近い場所に小さな窓しかない家畜小屋には月明かりが一筋の光となって射し込んだ。

子供の悲鳴が聞こえた。

「金で買われたことを、忘れたのか！」

アラビア人の濁った大声が小屋の中に響き渡った。悲鳴は止まない。

カサカサと乾いた音がし、ハシムの起き上がる気配がした。

イヒヒヒ、とアラビア人は薄気味わるい声で笑っている。悲鳴の相手もがき苦しむさまをたのしんでいるかのようだった。

関わりをもたないようにと、サライは膝を折り背中を丸めたが、首だけは肩から上に伸ばし事のなりゆきを盗み見しようとした。

「嫌がつてるやんけ。年端もいかん子供に何をしようねん」ハシムが口出した。

「トカゲを食ってる下郎野郎は差し出口をはさむんじゃねえッ」とアラビア人は怒鳴った。

「ひよつとして、金ですむ話かいな？ それならそうとゆーてくれたら相談にのるがな。わいはこう見えても、太っ腹やよつてな」

アラビア人の声音がかわった。「こいつが胸苦しいとせつながらもんでな。背中をさすつてやつてたんだが、話によっては一晩くらいは止めてやつてもいいんだぜ」

「なんぼやねんな？」

「いくらなら出す？」

ラクダの手綱をわしづかみにしたアラビア人は柵を押し倒し、ハシムの前に立ちはだかった。

怪物のような影がサライの眼前に迫った。6 キュビット（約270？）の身の丈だったと伝えられているゴリアテにも勝るとも劣らないように見える。

「いまさら金がねえとは言わせねえぞ」

「アラック（ナツメヤシの実でつくった酒）があるんや。一杯どうや？」

「ベドウィンの不味い酒が飲めるか。馬鹿にすんじゃねえッ」

アラビア人はいきなりビュンビュンと手綱をふりまわし、ハシム

の寝ていたわら床を目茶苦茶にした。

家畜が騒ぎだした。

アラビア人は小柄なハシムにのしかかるように身を乗り出し、打ちつけた。

手綱の先がハシムの首にからまった。

ハシムはさつきまでとは打って変わり、みじめな声を上げた。「痛いかな。堪忍してえな」

アラビア人は手をゆるめない。手綱を引き絞る。

「わい、肩を怪我しとるんや」

わーわーと呻き声を上げるハシムを見兼ねたサライはアラビア人の足元に銀貨を一枚、ほおり投げた。どうしてそんな気になったのか、自分でもわからなかった。

アラビア人は地面に落ちた銀貨を目ざとく見つけると、巨体をさつと屈めた。素早く拾いあげ、前歯で噛んで本物かどうかを確かめた。

ハシムは天の助けとばかりにひれ伏した。「どうぞ、これにてご勘弁を」

アラビア人はほくそ笑み、「いいだろ。わしは慈悲深いたちでな。今夜は、静かに寝てやるよ」と言った。

その時、小屋の外から声がした。

「お前たち、ソドムの二の舞だぞ」

天の火で焼きつくされたという、ユダの都市の名を家畜小屋の主人は口走った。

月に雲がかかり、一瞬の暗やみが生じた。

アラビア人は鼻をならしたが、その表情に子供のような怯えの色がうかんだ。

ハシムは藁をかき集めると、寝床をつくり、アラビア人を手招きした。

「旨い酒なんや」

「ラクダの小便じゃねえだろうな。お前らベドウィンは、飲み水に

も薬にもするつていう噂だからな」

アラビア人は気がすすまないようだったが、ハシムの差し出す瓢箪をわし掴みにし、ひと口飲むと、「うめえや！」と声を上げた。

「どんどんやってや」と勧められると、喉を鳴らして飲み干し、くだをまく間もなく、ハシムの隣に身を横たえた。

「頭ン中同様、血の巡りの悪いやつちゃ」

ハシムは息を飲んで笑うと、ゆっくりと立ち上がり、柵の向こうで身を潜めている小さな影に声をかけた。

「もうだいじょうぶや。出てきてええでえ」 ぼろ布をまとった白い髪の少年が姿を見せた。月明かりが少年の青白い顔と灰色の目をあらわにした。

「なんちゆう名アや？」

「クスラ」

「どこそこのえらい書記官と一字ちがいの名あやな」

10歳だという少年は痩せこけていて、幼子にしか見えなかった。ハシムはクスラの尖った顎に手をあてがい、見つめていたが、半開きの口の中をのぞき込むと、ほおと感嘆の声をもらした。

「歯がないこの子は、お天道さんがわいに使わした、み使いかもしれへんなあ。目えにつかんとこで、ちよこまか動き回るには、ムダ口をきかん格好の口をしてるでえ」そして、大仰にうなずくと、「あんなしようもない奴の慰み者で終わりとくないやろ？ 弱いもんが踏みつけられるのが世の常や。ここはひとつ、世渡りのコツとやらを教えたらんなあ。わいの話がわかるか？」

クスラは上目遣いに首をまげた。頬の削げた横顔を見たサライは理由もなく寒気がした。

揺れる、揺れる、揺れる……。

ヤマトは自分がどこに運び去られているのか、はつきりとは意識できなかったが、馬の背が躍動するたびに遙かな時を遡っているような錯覚を覚えた。

姉のナンナの物語る声がどことも知らぬ彼方から聞こえる。

「とうとうエンキドゥはウルクに町に連れてこられてしまったの。夢にまで見て待つていたギルガメツシュは大宴会を催してエンキドゥを招いたの。でもエンキドゥは断ったのよ。女を盗られたくないこともあって、応じる気持ちになれなかったの。それどころか、宴会場の入り口でギルガメツシュを待ち伏せて、闘いを挑んだの。女にそそのかされたのね、きつと。

彼らは死力を尽くして戦って引き分けたそうよ。命がけで闘ったら、どつちかが死んじゃうと思わない？ ギルガメツシュは闘ううちに気づいたのよ。女とでは、分かち合えない絆が2人の間にはあるって。

かけがえのない友を得るために、ギルガメツシュはエンキドゥを呼び寄せたと、わたしは思ってるの。なぜって？ 彼はたぶん、王になる前の自分をエンキドゥの中に見てかったのよ。清廉で、勇気に満ちていた頃の自分自身を。

天真爛漫で人を疑うことを知らないエンキドゥはギルガメツシュの催した宴会の食卓について、みんなと同じものを飲み、動物の肉をたらふく食べたの。ギルガメツシュとの間に芽生えた絆のせいね。ずっと一緒に暮らしてきた動物を裏切ってまでギルガメツシュの愛に報いたかったのよ。無垢な動物と暮らしていた時のような安らかな気持ちには二度と得られないとわかっていたけれど、もう後戻りできなかったのね。女を知って、生涯の友を得て、エンキドゥは孤独を知ったのよ。だから、羊飼いたちにも気に入られようとライオ

ンや狼を殺して彼らを喜ばせるの。

こうしてエンキドウはウルクの人々に誉め讃えられたけれど、うれしかったかしら。ほんとは悲しかったと思うわ。だからギルガメツシュに、杉の森を守っている妖怪退治に行こうと誘われても拒んだのだよ。ちよつと前まで自分も野原に住み、怪人と呼ばれていたんだもの。

でもギルガメツシュは杉の森を切り払って、すべての悪を追い払おうと言うの。エンキドウは涙ぐむの。妖怪は彼自身だものね。でも、友との絆を失いたくなかった。だから森に住む者を悪だと決めつけるギルガメツシュに逆らえなかった。

ギルガメツシュは、2人の名を永遠のものにしたいと言ってエンキドウに悪の退治を迫るの。人間の生きる日数はしれているのだから名誉のために戦おうって。エンキドウは拒みきれなくなって、ついに承知するの。そして彼らは妖怪退治に出発するの……」

浮かび上がれない闇の底で、ヤマトは自分はギルガメツシュはおるかエンキドウにさえなれないと思った。仲間だった者たちを殺してまでも友でありたいと思う相手がこの世に存在すると思えなかった。

星々も眠りにつく真夜中、ハシムは眠っていたサライの耳元で囁いた。

「死んでるでえ」

寝呆け眼で、月明かりの先を見ると、大男が藁の中に沈んでいる。「寝てるだけじゃないのか」

サライは起き上がり、這って行ってアラビア人をゆすつたが、びくともしない。

「一服もってやってん」ハシムは平然としている。「罰は目の前ゆるやる。えげつないことをしたら、あつという間に報いを受けるんや」

「おっさん、冗談はやめてくれよ。俺は関わりたくないから、なけなしの銀貨を髭男にくれてやったんじゃないかッ」

「これもなりゆきや。いや、お天道さんの思召しやと思うてくれへんか」

「神なんぞ金輪際、信じちやいないよ。おっさんだつて、そうだろ？」

「わいは信じてるでえ。ユダヤ人の恐ろしい神サンはかなわんけど、毎日、飽きひんと昇ってきてくれはる、お天道さんはありがたいと思てるがな」

「俺は、俺自身とラクダの積み荷がどうなるのか、それだけを問題にしてるんだ」

「下手な考え休むに似たりゆるやんか。人生諦めが肝心や。なあ、兄ちゃん」

「逃げるしかないのか……」

宿屋の主人に黙って出発するしかない。同宿のアラビア人が不審な死をとげた以上、このまま無事でいられない。このさい、積み荷とラクダが無事ならそれでよしとしようという気持ちに次第に傾い

た。

サライはラクダを小屋の外に連れ出した。
ハシムとクズラもラバを連れて出てきた。

3人は足音を盗み、夜明け前の薄闇の中を街道に向かった。

村落の坊壁を越えたところで、泊まっていた家畜小屋から火の手が上がった。

「まさかッ」サライは棒立ちになった。「火をつけたのか……」

「はよ、逃げんとえらい目えに遭うでえ」ハシムの声は弾んでいた。慌てた様子は微塵も見えない。「わいは名アより命を惜しむよつてな」

家畜小屋は松明に火がついたように燃え上がった。村人の騒ぐ声が風によつて聞こえる。とんでもない道連れだった。一刻も早く別行動をとらなくてはならないと思い、サライはラクダの腹を蹴った。ハシムは両手を広げ、行く手に立ちはだかった。

「わいとクズラをラクダに乗せてくれへんか。兄ちゃんはひとりやから、わいのラバで充分やる？」

「なんで、俺が、おっさんらのためにラバに乗り替えなきゃなんないんだよ」

「事情は言えんけど、そのラクダはそもそもが、わいのもんやねん。そいつの鼻の頭に傷があるやる？ あれな、わいがつけた傷なんや。ほんまの話やで」

ハシムは貧相な身体の首を伸ばし、目の玉を上にした。

「ものは相談やけどな、どうしてもラクダを返してもらわれへんのがやったら、銭をはるうてもらわれへんか」

「お角違いもほどほどにしるよな。先に、タベの金を返すのが道理つてもんだろ」

「口のへらん、餓鬼やなあ」ハシムは苦笑すると「よっしゃ。あんたがラクダに乗り」

「それこそ自明の理つてもんだ」

クズラが、薄く嗤った。

「お前が笑うと、俺、身の毛がよだつんだよ。頼むから、こつちを向かないようにしてくれよな」

サライにそう言われても、クズラはだらしのない口元をもとに戻そうとせず、泣き顔のような笑顔のままだった。

しばらくの間、といってもわずか半日だったが、楽に旅ができた。ハシムは炎天下に木陰を見つけると、ラバに積んだ敷物を手早く広げ、午睡のための寝床をしつらえ、サライの持っている小麦粉でパンを焼いた。天日で焼いたのでまずかったが、食べる間、椰子の葉で編んだうちわで風を送ってくれた。

ところが、午睡から目覚めると、ハシムもクズラもいなくなっていた。懐の銀貨はもとより、通行証も短剣もターバンもない。ラバとラクダの足跡さえ残っていない。

「あのおっさん、こんど会ったらただじゃおかねーぞ」

地団駄を踏んで悔しがつているところへ、砂漠の彼方から死んだはずのアラビア人がラクダにまたがり、姿を見せた。

「俺の奴隷をどこへやった！」とゴリアテは喚き立てた。「白黒はつきりつけるまでは、ひきさがらねえぞ。覚悟はいいか。この白人奴隷め！」

「俺はなにも知らない。ほんとだつて！ 嘘じゃないつて」
「すんでのところ、焼き殺されそうになったんだ」

発作が起きたように喚く男に何を言っても無駄だった。同じ遊牧民であっても、ずる賢いハシムと直情怪行のゴリアテとは気質がまるでちがう。

「あんだ、毒を盛られたんじゃないのか」

「生つちろいツラをしゃがって、俺様をたぶらかそうたつて、そうは問屋がおろさねえからな」

「火をつけたのは、俺じゃない！」

「下衆野郎はどこへ行った？ お前らグルになって、俺様の奴隷を盗みやがったな。こうなったらお前を叩き売るしかねえ」

サライはとつさに石を探し、額帯でくるんだ。ダビデはこれを投

げて無敵のゴリアテを即死させたのだ。

「おとなしくこっちへこい！」

サライは力を振り絞って、石でふくらんだ額帯をゴリアテの眉間をめがけて投げた。

当たった！

「そんなやり方で、俺様がどつと倒れると思っただのか。馬鹿め！」

伝説は嘘だったのかと思う間もなく、ゴリアテは石をくるんだ額帯を頭の上で振り回し、サライに投げ返した。

胸の真ん中を一撃されたサライは息が止まるほどの衝撃で膝を屈した。

「小賢しいのは口だけか、そのザマじゃあ、投石兵にもなれねえな」アラビア人は苦もなくサライを縛りあげると、ラクダの鞍に縄の先をくくりつけた。

草木の枯れはてた砂塵の道を、サライは歩かされることになった。彼方に蜃気楼のような集落が見えるが、頭上には大ガラスが鳴き、不吉な影を落としていた。炒り殺されるかと思うほどの太陽の熱だった。喉の渇きが思考のすべてを支配し、他のことは何も考えられない。

『悪い者に平安はない。(イザヤ48:22)』と神は言った。ゴリアテを倒したダビデは羊飼いの身分からサウル王の道具持ちへと出世したが、ゴリアテに叩きのめされたサライは奴隷の身分に転落した。

……俺は、悪人ってことなのか。

東の空が紫色におおわれると、地平線に見えていた集落が次第に大きくなり、荒野は少しづつ茨の道にかわった。

ほこりをかぶった白っぽい椰子林が視野に入ると、アラビア人は髭面をほころばせた。「命だけは助けてやる。せいぜい愛想をふりまくんだな」

砂漠は不思議な場所で、砂の海を知り尽くした者には、点在する緑地オアシスを見つけたすことは容易であるらしい。

「つまんねー取り柄だよな」

「ぶつくさ言うな」

椰子の木の茂るオアシスに着くやいなや、アラビア人は縄つきの少年を人前に突き出した。我さきに水を求めて集まってくる旅人と家畜の群れが、サライを取り巻いた。

喧騒の垣根ができる。

アラビア人は大声で言った。「白人奴隷だ。いくらで買う」

騒がしさが一段と増した。

人垣の中から、「去勢してるのか」という声があがった。

アラビア人は首をふった。「手間をかけてねえぶん、安くしとくぜ」

とたんに値をつける声が乱れとんだ。

「銀貨で35枚」

もつとも高値をつけたのはナバテア人の隊長シエルフだった。人垣の中に聞き慣れた声を耳にしたサライはこれで助かったと安堵したのもつかの間、ターバンで顔半分をおおったハーヌルは家畜を値踏みするような目つきでサライを見つめた。

「あの男はお前を売る気なんだ」と言った母の声が耳元に蘇った。

「新しいご主人様にひざまずけ！」

代金を受け取ったアラビア人は額帯を返したついでに、サライの膨ら脛を蹴った。「お前とお前の神を怨むんだな」

「クソくらえッ」サライは喚き返した。

ハーヌルはサライを買い取ると、「これが、お前の運命だったんだ。どのみちユダヤの神から課せられたくひき軛からは逃れられないのさ」と言った。

「収税人に密告したのは、あなただったのか」

「俺がお前を連れ出したあとに、母親を刑死させる手筈だったんだが、収税人の言葉を信じた俺が浅はかだったよ。おかげで、大金をはらう羽目になってしまった」

「あんたの正体もわかんないようじゃ、いいようにされてもしょう

がないな」

サライはラクダに乘せられ、行き先がどこともわからない旅に出ることになった。

キャラバンを預かるハーヌルには誰にも話したことのない目論みがあった。野心といったほうがいいかもしれない。彼は、ユダヤ人のように、人が神の奴隷であるとか、下僕であるとか感じたことは一度もなかった。神ではなくごく一部の人間が大勢の人間を支配し、苦しみの下に置くがほとんどの人間は力のある者に抗えないと思っている。支配者から逃れるには自分が彼らに取って代るしかない。若い頃、盗賊の頭だったハーヌルはひょんなことから金持ちの雇い主に見込まれてキャラバンを任されるようになった。それ以後、盗みを働くよりも財貨を稼ぐ方法があることを知り、野心は一層強くなった。いつの日にか、雇われの身から脱し、亜麻布で織られたギダリス（ペルシア王が着用するターバン）を被るつもりだった。キャラバンの隊長ごときで生涯を終えるつもりは毛頭なかった。……じき30になる。そろそろ運が向いてもよさそうだ。今度こそ、のし上がって見せるぞ。

キャラバンは、エルサレムとヘブロンの中継地点にあたるベツレヘムに向かっていた。食糧と水を補給する目的だったが、かねてから目をつけていた美少年をようやく手に入れたのだ。企みを叶えられる機会を得たに等しい。これまでもこれほど思う少年を誘拐し、売ってきたが、小遣い稼ぎにしかならなかった。

……こんどこそ！

骨で固めたような石灰岩の荒涼とした景色がえんえんと続いたが、ハーヌルには天界を歩く心地だった。石灰岩に反射する太陽の光は眩しいが彼の行く手を祝福しているように感じた。山道をふさぐ木々さえも彼にとつては踏み越える壁ではなく未来へ向かって開かれた扉のように見えた。

一行は起伏の多いユダの山地を尾根づたいにゆっくりと移動した。ハーヌルは町に近づくに従い、積み荷を狙った盗賊に襲撃されない

ようにできるだけ物音を立てないように部下に命じた。

ベツレヘムはダビデ王の時代、ユダヤ人に敵対していたフィリスティア人の前哨基地であったが、現在は、ペルシア軍の部隊が駐屯していた。主要な街道に面しているだけでなく標高が高く（海拔777?）、石灰岩の山の背を見渡す場所に町が築かれているので防備に優れていた。

エズラとともに帰還した人々の中にもベツレヘムの出身者がいた。彼らはすでに到着しているはずだ。エズラ一行の訪れる町はどこもかしこもユダヤ人の不平分子が騒ぎを起こす。懐に短剣を忍ばせ、真昼であっても敵と見れば平気で殺人を犯しかねない連中がうようよいる。キヤラバンを率いる立場上、ハーヌルは無益な争いを好まなかった。商売に治安の善し悪しは重要だった。盗賊対策のために雇った男たちもいるが、もめ事が起きては元も子も失う恐れがあった。

町の門をくぐると、坊護壁とは名ばかりの塁壁の入り口付近に派遣部隊の兵士らが待機していた。重装備の彼らは一応に冗舌で、キヤラバンの男たちに話しかけてきた。男たちはハーヌルの命令に従い、石のように反応しなかった。目立たないように行動することで、彼は相手の動静を見極める。

兵士のほとんどが外国人の傭兵で組織されていた。小さな町に外国語が氾濫していた。しかし、ヘブロンに比べて、住人の人口は千人に満たなかった。

ハーヌルは、サライに少量のパンと飲み水を与えると、部隊を統括する徴税官のもとに引き連れていくことにした。抗う気力も失せたのか、少年はじかに肌につける短いチュニック（ゆったりした肌着）と腰巻きだけを着せられても抗わなかった。

ナバテア人のハーヌルは各地の権力者に巧妙に取り入る術を心得ていた。金品を浴する者には積み荷の一部を、それ以外のものを欲する者にはそれを差し出した。

徴税官は、州においては、総督、軍の司令官につぐ王の直属の高官だった。監察官と同じように軍隊に守られながら州内をまわり、本国のペルシアに送るための税を徴収していた。

7、8年前までユダヤ人の長老の屋敷だったところに徴税官は滞在していた。シリアのダマスコで、遠目に見かけただけが、頭巾をしている彼には鼻がないという噂だった。巷間に伝えられるところでは、大きな黒い穴があるだけだという。ペルシアの宮廷内で起きた、先代の王クセルクセスの暗殺事件に連座し、生き埋めの刑に処せられるところを鼻を削がれただけですんだらしい。現王の母后のとりなしがあつたと聞いた。母后アミティスの愛人だったという噂も耳にした。

どうしてもこの男を籠絡し、宮廷に信頼にたる部下を送り込まなくてはならない。

ハーヌルは引き連れたサライに言った。「ユダヤの神は、己れに反対する者たちすべてをいずれの日にか滅ぼすというが、滅ぼしたのは随分と退屈な世の中になると思わないか？ 俺やお前の知る悪とは別種の空恐ろしい無が、この世を支配することになるんだ。

奴らの恐れる悪には底知れない魅力がある。俺はその力を手にしたいんだ。賢いお前なら先刻承知だろうが、お前が俺に手を貸してくれば俺たちは思いもかけないほどの富と栄華を手に入れることができる。多少の犠牲と我慢はいるがな」

広い中庭のある2層の屋敷は広場に面し、住民の訴えを裁定する場所も兼ねていた。屋内の壁には漆喰が塗られ、床の敷石もよく磨かれていた。案内を乞うハーヌルに家令とおぼしき男は横柄に応じた。奴隷を使い、屋敷内を取り仕切る役目をおっている家令に気に入られなければ徴税官に取り次いでもらえない。家令は、サライの金色の髪を目にすると、意味ありげな笑みを口元に浮かべた。

「ひと足、遅かったな」

「どういうことだ」とハーヌルは咳き込むように言った。「この者を」

「アガグ様は、お前らに会われないだろうよ」

ハーヌルは家令に多額の金を握らせた。彼は徴税官に取り入るためなら傭い主を欺くことも厭わなかった。

家令は重い口を開いた。「宦官になりたいという少年がついさつき来たところだ」

「何人いてもいいじゃないか」

「バビロニアから毎年、5百人の少年が選ばれて王に献上されているんだ。アガグ様はその者らに優る者を、時期宰相になられるお方にさしあげたいようだ。大きな声では言えないが、ユダヤ州の総督の地位を狙ってられるようだ」

奥の部屋から徴税官が姿を見せたとき、サライは驚きの声を上げた。鼻の先のない男が従えていたのは、薄気味悪い顔貌のクズラだった。垢じみた身なりはこぎれいな衣服で整えられていたが、萎びた老人のような体つきも、眉にかかる白い髪も、蛇に似た灰色の目も変わりなかった。

「どこの馬の骨だ！」徴税官はサライを一瞥し、割れ鐘のような大きな声で問うた。

ハーヌルは片手を地につけ、深々と頭を下げた。「わたしめはナバテア人の商人にございます。閣下におめもじが叶い、光栄に存じます」

「用件を言えッ」

「これに控える少年は未熟ながらアラム語はもとよりユダヤの書物にも詳しく、閣下の期待を裏切らない知識を持ち合わせております。ユダヤ人の宦官どもの鼻をあかせるやも知れませぬ」

「ふむ……」

「美しさにおいてもお連れの方より、はるかに勝っておると存じますが、ペルシアの王族のお気に召すかと」

「見ればわかる」と不機嫌だ。「わしを無学な軍人と侮るなよ。エジプト、バクトリアとの二度にわたる戦役が終わったとたん、シユシヤンの宮廷でわがもの顔にふるまうユダヤ人の宦官どもは法律や財務に精通しておるのをよいことにして、若い王を翻弄し、われわれアマレク人の地位を貶めておる。

近頃では、陛下は7人の顧問官より奴らを頼りにする始末だ。このような事態が長く続けば、帝国に破滅をもたらしかねん。何より忌まましきのは、奴らがわれわれの神・アフラマズタをあなどっておることだ」

「ならば是非、この者をお召し抱えになられてはいかかがと 王

妃のお目に止まるやもしれません」

徴税官はサライに顔を向けた。「バビロニアの言葉は話せるのか」「教えれば、短い月日で習得するかと思われませう」

「ならば考えてやってもよい。宦官になるための施術で死ぬ者も多いのでな。補充要員としてなら」

徴税官の言葉を、サライは遮った。「情けねーな。ユダヤ人の宦官にペルシアの王は牛耳られてんのか」

剥き出しの黒い穴が、ヒューヒューと肌寒くなるような音を立てた。

「王ともあるうもんが、なんで宦官の言いなりになんだよ」と、サライはたたみかけた。

「宦官とは、不思議な生きものでな。王も王妃も、連中を無私の心で仕える者たちだと勘違いしておる」

「なんでだよ？」
「奴隷ごとき者に話してなんになる？」

「どうして、王は勘違いすんだ？」

「卑しき者が、知る必要のないことだが、教えてやろう。ハーレムでは正妻と言わず、側女と言わず、王の寵愛を独り占めしようとして争いが絶えない。この女たちに近づけるのは子種のない宦官しかない。奴らはそれをいいことにして、女たちを使って王の心を自在に操るのだ」

「王に忠告する者はいないのか」

「そんなことをすれば、己れの首が飛ぶ」

「宦官にならなくなったって、俺はまわりのアホどもをあとと言わせる自信があるぜ」

「閣下の前で、何を血迷ったことを」とハーヌルは制止した。

「この者はわざと乱暴な言葉づかいをするのです」

徴税官は目を細めると、「お前は知っているか？ アフラマスタの教えでは、義人は死したのちに己れの分身に出会うそうさ。腕が白く、姿の美しい、すらりとした肢体の15歳の少女になって現わ

れるらしい」

「俺が、分身に見えたのか？」

「一瞬だが、生きながら会えたような気がした」

「笑わせるぜ、おっさん。言っとくが、俺はあんたの分身なんかじゃない！」

「心配するな。お前は、老いた男を歡ばす術を知らぬだろうからな」
アガグはそう言うと、クズラの髪をわし掴みにし、青白い顔を仰向けさせた。「この者の口を見る。歯がない。鼻のないわしと同じように醜いが、年寄の宰相には美醜など問題ではない」

「いつの日か、俺がペルシア王の盾持ちになつたら、あんたやハーヌルが杭に掛けられるように取り計らつてやるぜ。気長に待つてくれよな」

「お前はこのち、傲慢さ故に気が遠くなるような苦しみを味わうだろう。そうしてようやく善悪のなんたるかを知ることになる。しかし、その頃にはもう、その美しさも失われておるだろうな。人間は邪悪な生きものだ。試練に遭えば、さらなる闇に墮ちる」

家令が入ってきた。

「行政長官のエズラ殿がご挨拶にお見えになりました。いかが致しましょう」

サライは身を乗り出した。「ラビ・エズラ！ 聞こえるか！ 返事をしてくれつ。サライだよ」

ハーヌルは拳を振り上げ、サライを叩きのめした。「もう一度、声を出すと、命はないと思えッ」

「命のひとつやふたつ、いつだつてくれてやるぜ」
徴税官は、静かにせんかと一喝し、抜き身の剣をサライの喉首に突きつけた。それから、エズラを通すように言った。音もなく入ってきたラビ・エズラは、この光景を目のあたりにしても何も見えなかつたかのように祝福の言葉を述べた。

「徴税官の上に平安が訪れますように。定めのない時まで健やかであられますように」

「王の友が、徴税官ごときになんの用だ。エルサレムにやってきたばかりの新任の司令官にでも会うほうが、得策じゃないのか」

アガクは家令に椅子を持ってこさせると、剣を手にしたまま腰かけた。

「このたび、こちらの町に伺いましたが、徴税官のご威光を反映して、多くのユダヤ人が感謝して暮らさせていただいている有り様を目にすることができ、この上ない喜びを感じております。つきましては、徴収された税の一部でユダヤ人の集会所の建設をご許可いただきたくまかり越しました」

「わしは王のように、貴公の口舌に騙されんぞ。ユダヤ人は謎の部族だ。エジプトから逃れてきた貴公の先祖は、わしの先祖の土地を侵そうとして撃退されたことを恨みに思っ、報復の機会を待ち続けたのだからな。恐れ入るよ。しかし、貴公の先祖たちが、約束の地と称するカナンの地に至る道中で犯したあまたの殺戮は未来永劫、消えることはない。ペルシア王の書記官である貴公にはなんの関わりもない話と思うだろうが、貴公がユダヤ人だと知れば、信頼を置く気にならん」

「滅相もないお言葉でございます。わたくしは一介の書士にすぎません。徴税官の閣下を欺こうなど夢にも考えたことはありません」
「貴公は、元王妃のエステルの庇護者だったモデルカイを見知っておるはずだ。知らぬとは言わせぬ。同族のよしみでさぞ、親しかったであろうな」

「かつて宰相であられたモデルカイ様は先のクセルクセス王のご聖恩を賜り、お仕えしたと聞き及んでおります。さすれば、わたしより遙かに年長でございます。今もご存命かどうかさえ、わたしは存じあげてませんし、ましてやバビロンで育ちましたわたしと、シユシヤンの宮殿におられたお方と面識があるうはずもございません」
「わしの一族は、モデルカイに宰相の地位を奪われたハマンとは同門になる。これを聞けば、貴公がどんな些細なことも、わしに頼めぬとわかるだろう。違うか！ ユダヤ人はアマレク人のハマンとハ

マンの息子10人だけでは飽き足らず、われわれ一族とそれ近い者たち7万6千人を惨殺したのだ。千年も前の恨みの報復だったのだろが、なんとという連中だ。ご丁寧に、その日を祝いの日(3月初旬)と定めおった」

「仰せの意味が解しかねます。それらの事に関しては、すべて王命によるものと公式の文書にも記録官が記しております」とエズラは言った。そして、千年の時を経て、復讐するなどありえないことだとつけ加えた。

ハーヌルとともに部屋の隅に控えていたサライは、徴税官とエズラのやりとりに耳を澄ました。モーセの五書には、神に導かれたイスラエルの民は神への敬意が足りぬ故に約束の地へ入ることが許されず、アマレク人やカナン人に敗北したと記されている。アンモン人やモアブ人がユダヤ人に土地を焼かれ滅ぼされた時は、神の目に正しくない部族と記述され、男子はもとより女子供に至るまで殺されている。

「文書がどうであろうと、ユダヤ女の諫言で、クセルクセス王の忠実な臣下の多くが極刑に処せられたことは周知の事実だ。すべてモデルカイの入れ知恵だったと、生き残った一門の者は、ユダヤ人にならって一時たりとも恨みは忘れておらぬ」

「書記官としてのわたくしの主たる務めは、過去から未来へ連続とつづく王家がその時代に行なった実績を正しく書き記すことにございます。王の奴隷である者として、政治に口出しをしたことはただの一度もございません」

「貴公も、ユダヤ人であろう！ 今もユダヤ人のために当地にやってきているではないか」

「そのことと先の事件とはなんの関わりもございません。いまここで、お力添えいただけないのでしたら、シュシヤンにおわす陛下にお伝えしなくてはなりません。わたしは王命で、ここに参っております」

「いつか、貴様らユダヤ人を根絶やしにしてやる」と徴税官は語気

を強めた。「わしは黄金より名誉を重んじるのだ。忘れるな」

「重々、承知いたしておりますが、わたしも神と王の義のためなら、いかなる犠牲も厭いません。死をも恐れはいたしません」

間隙を縫うように、サライは大声で言った。「ラビ・エズラ！

俺だよ。ヘブロンで会っただろツ。助けてくれよ。宦官にされそうなんだ」

「こやつの知り合いか」徴税官はエズラに問うた。

「いいえ」

「そうか」

徴税官はやにわに立ち上がると、エズラの前に回りこみ、胸元をめぐけて抜き身の剣をひと振りした。エズラは微動だにしなかった。怜悯な眼差しには一瞬の慄きも見えなかった。そして、一礼するころもなく、部屋を出て行った。

「おい、エズラ、神の子じゃないのか！」サライはその背にむかつて喚いた。「悪人に謀られるのは諦めがつくんだ。お前こそが、人の心を欺くサタンだ！」

神の子の目の端にもサライの姿は映らなかったようだ。

岩山の荒涼とした眺めにやや変化が生じ、赤茶けた草木が岩だらけの谷間を埋めはじめると、いくえにも切り立つ山々にこんもりした樹木が見渡せた。

瓢箪の形をしたエルサレムは周囲に深い谷をもつ丘の上の都市である。旅人はかなり近づかないと、全景を眺望できない。人々は瓢箪の上部にあたる地域をシオンの山と呼び、下部をモリヤの山と呼んでいた。

馬上のジャミールはやる心を抑えかねた。ヤマトを一刻も早く医師に診せたかった。最短距離でエルサレムに向かおうとしたが、南北に走る交易路を荒らしまわる追剥ぎの一団に遭遇し、これを避けるために東西に走る悪路に迂回するはめになり、無駄な日数を費やしてしまった。

「もう少しだから、頑張るのよ」

馬にくくりつけられたヤマトは、かすかにだが呼吸をしている。

生き長らえていること自体が不思議だった。

「ほら、見えるでしょ？」

ターバンで長い茶褐色の巻き毛を包みかくし、男物の衣服を着用したジャミールは反応のないヤマトに語りかける。

黄色っぽい砂礫の丘を一気にくだると、花崗岩の岩棚の間にかくれていた視界が、突如、飛び出したようにひらけた。

聖都が眼前に浮かんだ。

パレスチナの背骨と言われる深い谷の周辺の丘陵には刈り入れの終わった麦畑が広がっていた。枯草の繁る平原には数えきれない天幕が見える。ペルシア軍の宿营地だろう。家畜の群れを追う子供の姿も散見できる。彼らは、イスラエルの民の流刑後に移住してきた北の部族力ナン人のようだ。

「ヘブロンと同じように、オリーブの木やぶどう園があるのよ」

都市の東の方角にはオリーブ山があり、北方にはスコボス山がある。

「でも、なぜかしら、この町を好きになれないの」

平安を意味するエルサレムはかつてカナンと呼ばれ、城塞都市としての機能を果たすうえで必要とされるすべての条件を満たしていると言われていた。戦いともなると、岩石の絶壁（標高750?）は天然の要塞に早がわりし、長期の攻防にも耐えられるはずだったが、ダビデの奇襲攻撃に遭い陥落した。

荒地にいたたく王冠のように、ヒンノムとギデロン両溪谷の合流点の山の頂きをつないで聖なる地はそびえ立っている。流刑地から帰還したユダヤ人が住み着いた地域の範囲をさす言葉として、「ベエルシエバからヒンノムの谷まで」と人々は言った。

ジャミールは手を額に置いて眺めた。

都市の城門はヤコブの12人の息子たちの子孫からなる12部族にちなみ、12門もつけられている。

蛇行する道を上り、ギボンの泉で馬に水を飲ませ、検分の門と呼ばれていた城門の跡地に向かった。

バビロニア軍の去ったあと、石組みの城壁は打ち砕かれたままだ。それでも荷物を山積みにした口バを急ぎ立てる商人たちや、畑に向かう農夫たちや、巡礼たちや、キャラバンの長い列で狭い道は混雑していた。どの顔もユダヤ人ではないように見える。トカゲが這い出るように異民族がどこからかやってきて入りこんでいるようだ。ユダヤ人がカナン人から奪った都市は誰のものともわからない無国籍都市へと変貌していた。

その頃、ベツレヘムで一泊したキャラバンはワジと呼ばれる乾いた川を渡り、渓谷を眼下に見る険しい山道を西へたどっていた。

エルサレムに向かうものと期待していたサライは、小休止をする彼らの様子に神経をとがらせた。

「実はさ、俺の額帯に金貨が縫いこんであるんだ。縄をゆるめてくれたら、くれてやってもいいんだぜ」

見張りの男に耳打ちした。この男は雇われたばかりらしいが、頑健な体躯がハーヌルの目に止まり、サライの額に焼印を押す役目を仰せつかった。

「嘘をつくな」

男はそう言いながらも監視の目を盗み、縄をほんの少し弛めてくれた。裸足のサライは脱力し、その場にうずくまった。焼き印を押された額は夜も眠れないほど痛みで疼いたが、宦官にされる屈辱に比べればなんでもなかった。

「意地を張るからだ」と男は言った。「なぜ、隊長に這いつくばって謝らなかつたんだ？ 焼き印などされずにすんだかもしれないのに」

徴税官の屋敷を後にするやいなや、ハーヌルはサライのサンダルを取り上げ、額に焼き印を押し、ラクダの後ろを裸足で歩かせた。額の焼き印は野獣の崇拜者であり、ユダヤの神に敵対する者とされる。ハーヌルはそれを熟知していて、サライをもつとも低い身分に貶めたのだ。

「隊長の機嫌を損ねると、酷い目に遭うとわかっていたはずだ」

「この先どうなるんだ？」

「鉄の採れる山に送られるか、塩のとれる湖で働かさせるか、船の漕ぎ手に売られるかだろうな」

「喉が乾いたなあ」

「逃げるなよ。お前が逃げるようなことがあったら、俺は殺されかねない」

男はそう言つてサライの手足を自由にしてくれた。サライは皮袋を手にしたとたん、男の胸板を蹴りあげた。男はものの見事にそっくり返つた。サライは火の中を飛ぶ蛇のように斜面に向かつて身を投げ出した。岩間に生えている乾いたブドウ蔓や雑草の上を石くれと一緒に転がり落ちていった。

強い衝撃があつて、体が停止した。

追つ手の男たちの立ち騒ぐ声がすぐ後ろに迫っている。まばらな灌木の間に曲がりくねつた小道が前方に見え隠れしていた。

サライは立ち上がると、追つ手のくる方角に向かつて走つた。荒い息遣いと足音が間近に聞こえる。

手探りで岩を見つけ、力の限り押した。岩は音を立てて転がった。いくつもの人影が岩の行方を追つていった。

地面にへばりついた。とっさにこの方法しか思い浮かばなかった。東の空が白むまで、サライは体を平たくしていた。一夜が1年にも思えたが、どうにか逃げおおせることができたのは、幸運の一語に尽きた。

「ちよろいもんだぜ」

傷ついた手足を下草でぬぐうと、低地に向かつて歩いた。

地図を縫いこんだ額帯は腹に巻いて肌身離さず身につけていた。

……逃げおおせてやる。

何者かに祈るうとは思わなかった。未知なる存在に導かれているという思いを一瞬でも抱けば、心を強く保てない気がしていた。

……俺が頼みとするのは、俺自身しかない。

追つ手を避けるためにふたたび人の通らぬ荒地に踏み入らねばならない。砂漠に劣らぬ不毛の地である。

ベツレヘムの町をのぞむモアブの山々がルビー色に染まる頃、火の海かと思える砂嵐が荒れ果てた丘陵地帯に群生したいばらをくいつくし、小枝を砂塵に舞う短い剣にかえた。「死んでたまるかっ！」

死海の東に位置するモアブは、イスラエルと同族の人々の住む地でありながら不道徳とバアル信仰の故に滅ぼされるとイザヤは予言し、その通りになった。ユダヤの神ヤハウエの計り事である裁きは成就したのだ。

「負けねーぞ」

サライは背を二重に折った。砂嵐が通りすぎたのちも、その姿勢をもとに戻せなかった。身体そのものが自分の意志に逆らっていた。万軍の神、ヤハウエはダビデとともにあったと記されているが、自分とともにあるのがサタンなら、なんと力なき悪神だろう。生と死の境界にいる少年を、みすみす裁きの手にゆだねるのか……。

「どうした？」低い声が頭の上でした。

膝を屈した少年が虚ろな眼差しで目を上げると、廃屋で出会い、両替屋で再会したケバルが目の前に立っていた。フード付きの粗布のマントを着た彼の後ろにはラクダが見える。

サライはゆっくりと顔を上げた。額帯に血がにじんでいた。

ケバルは、どうしたのだと訊いた。

サライは額帯をほどいた。

「蛇に見える焼き印だな。知っているか？ フェニキアの医術の神は蛇なんだぞ」

ヘブライ語のアルファベットの第12字（ラーメド）とそっくりの焼き印だった。詩編作者は8つの節で冒頭にこの文字を用いている（詩編119：89-96）。

「どこへ行くつもりだ」

「……バビロン」

「ロンギマヌス（長い手）の奴隷になりたいのか」

「ロンギマヌス……？」

「ペルシアの王の別名だ。王は右手が左手よりも長いので、そう呼ばれている」

「バビロンに行けば、誰でもロンギマヌスの奴隷にされるのか？」

ケバルは黄色い肌の顔を笑いで歪めた。「バビロンで、何をした

い？」

「書記官になりたい。なってこの恨みを晴らしたいんだ」

「その焼き印は、滅びを受ける立場の者たちにつけられるものだ。ペルシアの書記官になることは、ラクダが針の門をくぐるよりむずかしいだろうな」

ケバルはそう言つて、水の入った皮袋を投げてよこした。「お前、ソロモン王の黄金」の話を知っているか」

「渴きをいやしたサライは、「666タラント（166？）の金のことか？」

「さすがだな」

「たしか、オフィルからヒラムの船で運んできたつて書いてあったな。（列王上10:11）」

「大海に面したツロのヒラムはともかくオフィルの場所がわからない。そこがどこの地か、誰にもわからないんだ」と、ケバルは言った。「もし、何かわかれば、俺に報せてほしい」

「契約の箱といっしょに黄金もあるとすれば、港町の可能性が高いだろうな」

「俺もそう思つて、ビブロスまで行つてみたが無駄足だった」ケバルは裾まである粗布のマントを脱ぎ捨てた。「こいつをお前にやろう。ユダヤの男たちは年に三度、聖地に詣でなくてはならないそうだ。巡礼に化けて、この荒地を乗り越えるんだな。お前とお前の神にその気があれば、いつか目的の地に行きつけるだろう」

喪服でもある粗布のマントを身にまえば、お前でも巡礼に見えるとケバルは言う。

「冗談じゃねーぜ」

「神がお前を守ってくれるさ」

「イスラエルの神は、俺の髻にはなつてくれない」

「お前がお前自身の髻になればいい」

「なぜ、俺を助ける？ ソロモンの黄金のためか」

「愚かだった頃の俺に似ている」ケバルは踵を返しながら、「宮仕

えは、お前が考えてるようなものじゃないが、行って、その憎しみの目で確かめてみることだな」

「おふくろの耳にした話では、黄金はバビロンの地下水路にあるって言ってたぜ」

ケバルは両手を上げ、それはないという仕草をした。「將軍が黄金をバビロンに持ち帰ったのなら、そのことを隠しおおせるはずがない。いまのところ、預言者のイザヤが砂漠に隠したという説がもっとも信憑性がある」「それであちこち、うろついてんのか」

「神は苦しみの炉をもって、預言者を試みられるそうだ。俺たちは預言者ではないが、似たようなもんさ」

俺たち、という言葉にサライは戸惑いを感じた。ケバルと自分の間に何の共通点もないように思えたからだ。

「いつか、黄金をこの手につかんでみせるさ。誰のためでもない俺自身のためにな。おっと忘れるところだった。巡礼に化けるなら頭を刳れよ」

曲がりくねった道が城門跡に近づくに従い、蹄の音にまじって、野太い声がきこえる。ジャミールは眉をひそめる。石積みの崩れた一画に天幕が張られ、その前で、ペルシア軍の見張り番による検問がなされていた。

「通行証のない者だけ列に並べ」

エズラの帰還した前年には見られなかった光景だった。住民がほとんどいなかったせいだ。

ペルシア兵らは砂埃の舞い立つ通路の両脇にならび、積み荷を取り調べている。監察官ティグラネス麾下のメディア人兵士と衣服の違いはなかったが、宗主国の彼らのほうがより奢り高ぶった様子は強かった。

「よし、次」

監察官の発行した通行証を所持するジャミールにはまったく注意を払わなかった。病人を連れてくることも、気にならない様子だった。疫病の流行をまだ知らないのだろうか。そんなはずはない。通達はきているはずだった。

「止まるな」

ジャミールはアラビア人の商人やユダヤ人の奴隷や農夫にまじり、灰色の羊の群れとともに焼けただれた瓦礫の内側へと進んだ。

エズラのエルサレムへの帰還にもなつて、ケバルやハシムとともにジャミールもこの都市に潜入したが、獣も住まないような荒れた町のありさまに辟易したことを覚えている。ところが今では、キヤラバンを率いるアラム人やラクダを連れたベドウィンも人々の列に加わり、途切れることがない。

彼らの足取りは軽く、表情も明るい。

瓦礫を踏み越えると、先の見通せない道に出る。城壁内の道は敵の侵攻を少しでも遅らせるために、わざと折れ曲がっている。凹ん

だ場所に髭面の一団が待ちかまえていた。声高に人々に説教をし、寄進を求めていた。バビロンからやってきたエズラの弟子たちにはいない。

「金がなければ犠牲となる家畜でも、よい。ヤハウエに供え物を捧げよ」

142年前、バビロニア帝国のネブカデネサル王の率いる包囲軍によって壊滅の憂き目を見たイスラエル王国の首都は、次代の覇者ペルシアのキュロス王の発した民族解放令により、エズラに先立って帰還したユダヤ人によって再建を試みられたが、いまだに城壁はおろか、城門さえもなかった。

ジャミールは弟子たちにむかって、「結局は、物乞いなんだ」とうそぶいた。

耳ざとい者がいて色めきたった。

「おい、お前、いまなんと言った！」

「なあーんもゆるてまへん。口は災いのもとでっさかいな」

いつのまに現れたのか、馬の腹の下に隠れてしまいそうなハシムが弟子たちの鼻先でへらへら笑っていた。

「ベドウィンか。お前らの金はいらん」

弟子のひとりは吐き捨てると、城門跡から入ってくる人々にむかって、またもや声をかけた。「神殿を再建するんだ。金のない者はその身を神に捧げよ」

「身にまさる宝なしや。わが身より大事なもんがあつてたまるかいな」

ハシムはジャミールに目くばせをすると、入りくんだ路地に消えた。ジャミールはハシムのあとを追って、迷路のような石畳の道はいくつも曲がり、町の中心部に馬を進めた。両側に建つ建物のいくつかは城壁の残骸を利用して建て直されていた。石段や路地に散乱していた瓦礫も使われたのか、糞尿のたれ流された路面は通行に支障のない程度に片づいていた。

大通りに出ると、鎖につながれた男女の列に出くわした。肌の黒

い者、白い者、茶褐色の者、黄色い者などさまざまだ。

馬の脚が止まった。先を歩いてきたハシムが手綱の一端をとった。先頭の奴隷商人らしきアラビア人がハシムを見て、「どけ、ベドウィン」と言った。

「ペルシア人は陰険でケチや。このケチから税金を取られへんのはアラビア人だけや。あいつらは、こすからい」とハシムは小声で言った。

「アラブ人はひょうきんに見せかけて、騙すのが旨いのよね？」

ジャミールがからかうと、ハシムはアラビア人を振り返り、「油断しとれよ。時と場合によつたら鼠も虎になるんや」

行列の後について歩くと、人声の渦巻く広場があり、そこで首に鎖を巻かれた人間が競りにかけられていた。

奴隷市だった。

ペルシアのどの州でも、家畜と奴隷の売り買いは日常茶飯事に行なわれていた。子供の頃から見聞きしてきたことだったが、少女の目にこのありさまはひどく浅ましく映った。以前に比べて、この町が活況を呈している原因はエズラの帰還もあるが、ペルシア軍の駐留によつて都市の守りが固まり、奴隷市を再開したことによるようだ。

異臭を放つ広場の至る所に武装したペルシア兵の姿があつた。家畜と半裸の男女を鞭で追いついて立っている。彼らの目は一様に虚ろだった。長旅のせいか、疲労と虚脱の中にあることが見てとれる。

「ねえ、ユダの村で、あんたが売った女の子んだけど、どこへ売られたのか知ってる？」

「女の子ゆゑても仰山いてるから、どの子のことか、わからんがな」「赤い縞模様の肩かけをしてた子よ」

「ああ、あの子な。女は化け物やで。化粧したらどこぞのお姫様やゆゑても通るべつぴんになりよつてな。バビロンへ行くキャラバンにええ値で売つた」

物悲しい祈祷の声がどこからともなく聞こえる。巻いた敷物のよ

うになつて馬の背に身を任せるヤマトは、さつきから息さえしていないように見える。頭をめぐらすと、天を切り裂くように突き立った尖塔が視野に入る。少年を助けたいという高揚した気持ちはとくに消え失せていた。

「この子なんだけど、もうすぐ死ぬと思うの。どうすればいい？」

「さつきから不思議に思ってたところや。なんでそないな厄介な荷物を、後生大事に抱えてんのかと」

「あんたがいつも言ってるじゃないの。事のなりゆきなんだって」

「四の五の言わんと、ヒンノムの谷に放り投げたらええがな」

「まだ生きてるんだってば！」

「死ぬほど楽はないんやけどなあ。ほな、神殿跡にでも寝かしといたら、神の下僕とやらがどないかしてくれらんとちやうか」

「ただじゃ無理なんじゃない？」

「冥途の道も金次第ゆーからなあ」

神殿の広場につづく古びた石段では、近隣に住むカナ人らしい肌もあらわな身なりの少年や少女がたむろし、通りすがりのペルシア兵に妖しげな微笑みを投げかけていた。廃墟から蘇った聖都の街路には不道徳がまかり通っていた。

石段をさらに進むと、ひとつの町が入ってしまうほどの神殿前の広場に行き着く。武装した大勢の兵士がそこを埋めていた。

トリタンタイクメス麾下のペルシア軍によって占拠された広場には駐屯軍の戦利品なのか、綴れ織りの壁掛けや金襴の布地などを積んだ馬が大型の二輪戦車とならんで繋がれていた。もはやイスラエルには神の住まう家はなく、国と呼べる地もないように見受けられる。軍隊と奴隷の町と言ったほうが当を得ているかもしれない。

柱廊玄関のあったあたりでは物売りがひしめき、至聖所跡に設けられた天幕（4？四方）の神の家に捧げる鳩や種なしパンを売りつける者がいるかと思えば、瓦礫の山を根城とする娼婦や物乞いまでが子供連れでうるつき、兵士の足を止めようと騒々しい声を張り上げている。特別に免税の対象とされたアラビア人の商人とペルシア

軍の兵士が神殿の広場を跋扈するありさまにも臆するふうはない。

北と南の王国に分裂したのちに周辺の列強諸国によって滅ぼされたイスラエルを神は見捨てたが、見捨てられた民はしぶとく生きぬいているようだ。槍や弓を持つ兵士の間をうろつく人々の多くは痩せこけているが、絶望しているようには見えなかった。彼らを支える無形の存在、神さえも彼らの生きることへの欲求を阻めないかに見える。

ジャミールとハシムはできるだけ人目につかないように神殿の庭にむかった。

羊をほおり、牛を殺し、それら捧げ物を焼く銅製の焼燔台があったが、仔牛の像や、ユーラシア大陸で広く信仰されている地母神イシュタルの像も近くに見える。

1年前、帰還したエズラらの手によって、ことごとく砕かれた異教の神々の彫像がふたたび建てられていることに驚かされる。

前の年のチスリの月（10月の始め頃）に、70年前のゼルベバルの偉業を讃えて祭壇を建てて最初の犠牲を捧げたその場所で、ボロ布をまとった浮浪者があたりかまわず、焚火をしている。厳格な裁き主を待ち望む民がこの町に幾人残っているのだろうか。皆無なのではないかと、疑いたくなる数々の光景だった。ジャミールはエズラの端正だがけっして感情の読むことのできない面差しを思い浮かべた。

はじめてラビ・エズラを目にしたのは2年前の春のことだ。バビロンの宮殿内だった。その頃も、ジャミールはハーレムの女たちと間違われぬように男装をし、宦官に変装していた。

エズラはハーレムの女たちに仕える役目ではなかったが母后アミテイスに気に入られ、王宮にしばしば伺候していた。その傍ら、各州の知事から王に宛てて送られてくる地籍と納税額に関する報告書を仔細に検討し、粘土板に刻むように記録官に命じていた。これらは“城塞文書”と呼ばれ、王の印章が押されたのちにメディアの都エクバタナの文書館に送られていた。また、行政にかかわる書記官

を希望する若者たちにペルシアの諸制度について講義していた。王にとどまらずバビロンの高官たちからの信任の厚かったエズラは、当地の若者たちからも敬愛されていたが、彼に高ぶったところはまったくないという噂をしばしば耳にした。

ジャミールの仕事はエズラに気づかれることなく彼の身边を探ることだったが、ケバルに報告しなければならぬような出来事は皆無だった。ただし、宮殿内の図書館で、古い粘土板を眺めている時のエズラの目は鷹のように鋭いと感じていた。そんな時の彼は物思いに耽る時間が長かった。

その後、アルタクセルクセス王から母国の行政長官に任ぜられたエズラはバビロンの地で高い地位にあつたにもかかわらず、一切をなげうち金、銀、宝石をたずさえた7千人以上の一団をひきつれ、故国イスラエルに立ち帰つたのだつた。

4カ月にわたる危険な旅路の果てにエズラの目にしたのは同胞の背信と神殿の荒廃であつた。契約の御言葉を保存した聖櫃　神の顕現する恵みの御座はもはや至聖所に存在しなかつたのだから、神殿をありし日の姿に装飾する正式の許可を王に与えられながら為すすべもなかつた。

「いつまでこんな暮らしが続くんだろ」

「茨の中にも3年の辛抱ゆーけど、とつくに過ぎてもたなあ」

敷石すら残っていない神殿跡の廊下を通りぬけると、むなししい思いは一層強くなった。聖所を守るはずの石積み障壁は跨げるほどの高さになつていた。その内側にあつたはずの至聖所の跡地には、扉さえなかつた。

栄華と知慧を誇つたソロモン王の時代には用心深く閉ざされ、開かれることはなかつたという2つ折りのその扉には花模様や、なつめやしの木や、ケルビム（み使い）の姿が彫られていた。

「彫りもののうえに金箔が張っつけてあつたそうやで。剥がして溶かしたんやろな」

「こくろつなことね」

「金の祭壇には、金の燭台が備えられてて、床も金で出来てたそうや」

バビロニア軍の掠奪ですべて失われ、雲のような栄光で満たされることはもはや望むべくもないが、エズラが持ち帰ったはずの、キクロス王から返還された神の家への捧げ物を入れる器などは別の場所に保管されているのだろうか。

「ここからだ、いい眺めよね。なんの神を崇めてようと誰にも責められやしない感じがしてさ」

ジャミールは馬から下りると、ハシムに手伝わせて、至聖所跡の天幕に通じる階段にヤマトを寝かせた。聖都そのものが中身のない胡桃のようにジャミールの目に映った。

「小童には、痛い目えに遇わしてもらたさかい、これでお釣りがくるな」

ハシムはニタリと笑いヤキン、ボアズと呼ばれた二本の円柱の跡地を見下ろした。巨大な水盤同様に、精銅製であったために砕かれてバビロンに持ち去られたのだ。

「この子には、何もかもはじめて目にするものばかりだから、神殿の広場を見ただけでも本望よね」

「地獄の間アと見まちごうて、途方にくれるかもしれへんでえ」

すぐ目の前で、書状を手にした男たちが長い列をつくりはじめた。ハシムが、何の行列かと通りすがりの男に訊ねると、神の子の代理人に奇跡を起こしてもらおうのだという答えが返ってきた。それを耳にしたジャミールは立ち上がり、列の先へ駆けた。殺到する人々に取り巻かれた若い男が、人々の輪の中にいた。

エズラではない。

誰だろうと思っただけで見ているうちにも、人垣は増していった。若い男の周囲には猛々しい若者の一群がいて人々を押し戻していた。人々は、若い男をハットシ様と呼んでいた。少しの間に情勢は変わったらしい。

ジャミールはさすがのご様子もとの階段にもどった。言葉を交わした

ことなどない相手に死人同然の少年を押しつけられるはずもないとわかっていたが、心のどこかで、神の子ならヤマトを救えるかもしれないと思っただの。「どないしてんな」とハシムは顎をしゃくる。「いつものジャミールらしいなあ。血も涙もないのが、自慢やったやろ」

膝を抱え、座りこんでいると、長身の若者がヤマトを横たえている石段に歩み寄ってきた。「その少年は眠っているのか？ それとも体の具合がよくないのか？」

堂々とした体躯といい、穏やかな表情といい、見覚えがあった。いつもエズラのそばにいる青年だ。

ジャミールは飛び跳ねるように立ち上がった。「ラビ・エズラの弟子だろ？」

「そうだが……」明るい瞳の色が訝しむ。「なぜ、知っている？」

「弟が死にかけてるんだ。助けてやってくれよ」

「この子の兄か？」

ザドクはしゃがみこむと、ヤマトの傷ついたまぶたに触れ、首の頸部に手を当てたりしていた。

「かろうじて、息はあるようだな」

そう言つと、ザドクは若者たちの集団をちらりと見た。

「とにかく、俺の家へ運ぼう」

「助けてくれるのか！」

ザドクは首肯くと、ヤマトを抱えあげ馬に乗せた。その間にも、人々は、ハットシと一団に向かって押しかけている。護衛役の若者たちは危害を加えるような勢いで、殺到する人垣を遠ざけようとしていた。

ザドクは表情を固くすると、「一日中これだ。どうにもならない」「この連中は何を望んでいるんだ？」

「あらゆることだ。仕事、家……ついでに神だ。お前のように病人を助けるといふ奴も後を立たない」

「真ん中にいるハットシという若い男が、神の子なのか？」

「ダビデの家系だと本人は言っている。尊い系譜のおかげで、今やエルサレムでもっとも人気のある男だ。どうすれば、人の心を惹きつけられるのか、熟知している」

「バビロンから来たのか？」

「あつという間に頭角をあらわし、今では預言者と称している」

「ラビ・エズラは？」

「先生はベツレヘムにいる。神の家の再建には巨額な費用を要する。各州のおえら方に頼んで、財貨を融通してもらわなくてはどうにもならない」

「バビロンから金銀を持ってきたって耳にしたが……」

「いくらあつても足りない。ひどい妨害はあるし、このままだと再建はむずかしいかもしれない」

話している間に、ハシムは無言で姿を消していた。

ザドクは馬の手綱をとると、ジャミールを伴い、神殿の外に出た。

「先に医者に診せてやってほしい。金ならある」

「黙ってついてこい」

夕日に染まったテュロペオンの谷を見下ろす吊り橋をわたると、視界が広がった。

奴隸市を催している広場が眼下に見える。かつては、カナン人の都市であったエルサレムは、ユダ族の英雄ダビデがこれを攻略して首都としたのち、北西に拡張され、テュロペオンの谷をもふくむようになつたと伝えられている。

橋の上から見える、細くくびれた谷を過ぎると、壊れた建物の密集した地域に足を踏み入れた。家畜の糞尿の臭いのしみこんだ石畳の狭い道を歩きつづけていると、ダビデの建てた宮殿のあった場所に出た。瓦礫を踏み越えると、広い階段があり、それを下りるとエメラルド色の実をつけたオリーブの木が繁る一画にたどり着いた。

「ここもエルサレムなの……か?!」

ジャミールの知る廃墟の町ではなかった。「そんなに驚くなよ」
精悍な顔が微笑む。「つい最近、建て直したんだ」

ユダヤ人の多くは都市の周辺に住んでいるとばかりジャミールは思っていた。

「この家だ」と、ザドクは指差した。「俺が召使と住んでいたもとの家はひどいものだったが、フェニキアで暮らしていた母が戻ってきたので、今では“力ある者の家”だ」

玄関の両側の側柱には獅子の像が彫られていたが、右側の柱に巻物を入れる入れ物メスィザが取りつけられているので、ここがユダヤ人の家であることはわかる。しかし、高い門扉を入り、広場のような中庭で働く大勢の男たちの姿を目にすると、ジャミールは緊張した。男たちの多くは武装し、兵士のように統率がとれていた。1個小隊50人はいるだろう。彼らは皆、ザドクに敬意を払っていた。

「わが家は代々、貿易商なんだ」と、彼は言った。「交易に護衛は付き物らしい。バビロン捕囚のさいも、先祖はフェニキアのビブロスにある所有地に逃げて難を逃れたようだ。どうやら要領のいい家系らしくて、ユダヤ人の間では外国人居留者とならんで評判はよくない」

どおりで、ユダヤ人にありがちな陰鬱さが微塵も感じられないとジャミールは得心した。

「お前たち兄弟は孤児なのか？」

「そんなようなものだ」

ジャミールの返事を待っていたように、召使らしい若い女が、ザドクに声をかけた。

「いかがいたしましたしょう？」

「発疹がないので、だいじょうぶだと思うが」

流行り病かもしれないので、使っていない別棟の客間に病人を寝かせるようにと、ザドクは告げた。

「かしこまりました」

しばらくすると、頭から爪先まで白い衣服で身を固めた者たちが数人やってきて、ヤマトをラクダから下ろし運び去った。ザドクは別の使用人に、ただちに医者を呼ぶように命じ、ジャミールには感

染症でないとわかるまで病人に近づかないようにと言った。

四方を二階建の建物で囲んだその屋敷は申し分のない広さを有していた。中庭には円形の噴水があり、そのぐるりには花壇にはありとあらゆる種類のハーブが植えられていた。ジャスミンの香りに誘われ、噴水の前にしつらえた長椅子に腰かけたジャミールは注意深く周囲を見渡した。

若い娘たちの話し声が急に止んだ。彼女たちは色とりどりの衣を身につけていたが、やはり召使のようだった。

「母上だ」とザドクが言った。

柱廊の奥から姿を見せたザドクの母はジャミールに気づくと、うしろに控える召使に下がっているように言った。

嫁いでいる女はベールで髪を隠さなくてはならないが、若い母親は豊かな髪を惜し気もなく肩の上にさらし、ラピスラズリのような青い色の薄絹を肩にかけ背中に流していた。身につけている宝石も、ジャミールがはじめて目にする高価なものばかりだった。

彼女は、少女に言葉をかける前にザドクと言葉を交わした。

アラム語だった。

「お客様？ エズラ先生のお弟子さん？」

「いえ、知りびとです」

夢から覚めたように、ジャミールは立ち上がった。

裾長の青い衣をまとった母親が歩むたびに、首や手首につけた紅玉石や青玉石であたりを眩しくした。

「お名前は？」彼女の声は容姿と同じように艶めいていた。

一瞬、口ごもった。男言葉で話すべきかどうか、迷ったが、

「あたしの名は、ジャミール。連れの男の子はヤマトよ」

ザドクの表情が見る見るうちに赤黒くかわった。

「お前はッ」彼の声は怒りで震えていた。

「あたしは、石臼を回すことと機を織ることだけで一日が過ぎてゆく女とは違うわ。体は女だけど、心は女じゃないわ！」と彼女は抗弁した。

「女じゃないなら、お前は“戒律の子”の儀式（バルミツバ）を受けたとも言っのか？」

「12の時は、バビロンで宦官になりすましてたわね」

「まあ！ バレなかつたの？」

「全然、平気だったわ。あたしは機敏だし、たいていのことは同じ年頃の男の子に遅れをとることはないもの」

「そんなことはどっちでもいい。俺を騙したのか」

答える、とザドクは問いつめた。

「あたしが女だったら、怪我をしてるヤマトを助けなくても言うつもり！ あんたたちの神は死にかけてる子供も見捨てるって教えてんの？ もともと料簡の狭い神だとは思ってたけどさ」

「俺は……少年のことを……言ってるわけじゃない。女が男の身なりをすることは、律法で禁じられている」

「女の身なりで病人を連れて、ヘブロンからここまで無事にやってこれると思ってるの？ もし本気で思ってたったら、あんたの頭の中にある律法とやらは使い勝手が悪すぎるわ」

「よくもぺらぺらと……」

「まあ、まあ、口争いはそれくらいにしてちょうだいな」

アシエラは歌うように言って、ジャミールに着替えるようにすすめた。

彼女はザドクを見据えて、ターバンをとった。埃まみれの衣服の肩にかがやく髪が波打った。

「お前は……少年の姉なのか！」ザドクは叩きつけるように言った。

「ちがうわ。身寄りのない子をほっとけなかつただけよ」

「どうして故郷に帰るようにすすめてやらなかつただ」

「言ったわよ。でもヤマトが嫌がったのよ。姉さんを探したいって嘘じゃないわ。なんだしたら、あんたたちの神に誓ってもいいわよ」

「もうよいではありませんか」

アシエラは召使に命じて大きな器を持ってこさせると、少女の足を洗わせた。

「お年はいくつ？」

「14」

「ザドクは17になったばかりなのよ」

「母上は黙っていてください。どこの国の者かも知れない女を、ここに泊めるわけにはいかない」

「わたくしの屋敷ですよ」アシエラはザドクを黙らせると、「お食事の前に湯浴みをなさい。お顔が汚れて真っ黒よ」

アシエラの言葉に従い、召使の後について広い庭を横切り、四方に位置する回廊を通り、石造りの建物の中に入った。

召使は扉のひとつを開けて言った。「こちらでございます」

円形の浴槽は大理石できており、バラの花びらを散らした乳色の湯があとからあとから溢れ出ていた。数人の召使が金製の鉢と麻の布をひざにおいて、ジャミールの言葉を待っている。

「ひとりでいいわ」

湯浴みの間、召使が浴室に入ることを、ジャミールは拒んだ。塩で体をこすり、湯を浴び、髪を洗い、召使の用意した丈の長い薄もの衣を身にまとった。監察官の耳となって以来、自分の身を守るために宦官にも踊り子にも軽業師にも物乞いにもなった。人を欺くことが課せられた使命だと思っていた。

湯浴みをおえたジャミールが広間にもどると、アシエラは感嘆の声をあげた。

「なんて美しいのでしょう！」

「どうして、イオニア人の衣を着せたりなさるのですか？」ザドクは頬を染めて怒った。「それも男のものではありませんか」

アシエラはまったく意に介さず、絹のクッションを指差した。「さ。ザドクの隣におすわりなさいな。兄弟のようよ。ザドクはあなたのように美しくありませんけれどね」

「母上！」

ジャミールの耳は何も聞いていなかった。「神殿にだって仕えられるわよね？　ねえ、ザドク、そう思うでしょ」

「冗談はお止めください」

テーブルにははじめて目にする形の果物や菓子や木の実が金製の大きな鉢にうず高く積み重ねられていた。透き通って見える容器になみなみとつがれたミルクが置かれている。

「うんとお食べなさい」

蜜入りのミルクを一口のみ、丸い菓子に手をのばした。燭台の灯りが手の甲の上でゆらゆらとゆらめく。

「どこから来たの？」

「いろんなところ」

「イスラエルの民ではないのでしょうか？」

「まあね」

「慌てずに、ゆっくりと召し上げられ」

無我夢中で食物を飲みくだし、一息つくまもなく、オレンジ色の燭台の灯りを花のようだと見惚れたところで目に映る記憶は途切れた。不眠不休で馬を走らせたこの数日間の疲れが一度に襲ってきたのだ。

夢の中で声が聞こえた。

「言い伝えでしか、知りませんが、ダニエル様のようなのですね」

「母上、なんてことを！」

「召使にするつもりなのですか？ そうではないのでしょうか？」

「病気で死にかけている少年を助けて欲しいそうです」

「文字は読めるのですか」

「女に読み書きは必要ありません」

「わたくしは商いをする女よ。読み書きができなくてどうするのよ」
ジャミールは、アラム語とヘブライ語の読み書きを教えてくださいましたケバルに感謝した。

「山の木を焼き尽くし、洪水を起こす魔力をもつ妖怪と、ギルガメツシユとエンキドゥはは鬪うことになったの。すごく嫌がっていたエンキドゥなんだけれど、ギルガメツシユを助けて奮闘したのよ。後世の人々に名を残すためなんかじゃなかったと思うわ。傲慢で自信家のギルガメツシユはエンキドゥが何を言っても聞き入れるような性格じゃないもの。2人は渾身の力を振り絞って、妖怪を倒すの。人間が入り込むことを拒んできた杉の森の妖怪が死んだことを誰よりも悲しんだのはきつとエンキドゥだわ。動物がいなくなつて、森もなくなつて、帰る場所をなくしたエンキドゥは、心に穴が空いてしまつたはずよ。ウルクの人々に歓呼の声で迎えられて、ギルガメツシユは大喜びしたけれど、エンキドゥはちがつたでしょうね。

その思いは伝わらず、英雄と崇められるようになったギルガメツシユはイシュタルの女神の誘惑にのつてしまうの。女神はとても美しくてどんな男も彼女の魅力に勝てなかつたそうよ。でも女神を独り占めしたいギルガメツシユは浮気者の彼女を責め立てるの。彼女は怒り狂つて、天の牛をウルクの町に放つて、たくさんの人を殺させたの。この時もエンキドゥはギルガメツシユを助けて鬪つたのよ。人々にふりかかる災厄を防ぐためだつたんだけど、天の牛を殺したことでエンキドゥは神々に死を宣告されるの。きつと彼は、来るべきものがきたつて思つたはずよ。動物を殺した時からわかつていたと思うの。

翌朝、彼は病気になる、12日後に死んでしまうの。後の世に語り継がれる名誉があれば死など少しも恐くないと思つていたギルガメツシユは、目を覚まさないエンキドゥを前にして絶望するの。友の亡骸に花嫁が着るような薄布をかけ、自分の髪を引き抜いて嘆き悲しんだのよ。ギルガメツシユは耐えられない苦痛をはじめて知つたの。

神を許せないと思うほどによ。ギルガメツシユはなぜ人間は死ななくてはならないか、神に問いただしたいと思ったの。それで旅に出ることにしたの。この時はまだ自分は死なないとギルガメツシユは思っていたでしょうね。神でもないけど、人間でもない存在なんですものね……」

物語る声が途切れたとたん、少年は激痛で目覚めた。

顔に手をやると、布が巻かれていた。

目を開けようとしたが、どちらの目も開かない。

「ヤマト、しっかりして」

「姉さん！」

「あたしよ。ジャミールよ」

「ジャミール……。僕の目はどうなったの。もしかして……」

「治るそうよ」

「ほんと！」

「ええ……。心配しないで」

「ここはどこ？」

「エズラの弟子の家よ。あたしたち、エルサレムにいるのよ」

「弟子って、誰？」

「ザドクよ」

「どうしてここに？」

僕は君に売られたんじゃないのか、とほんとうは聞きたかったが、聞けなかった。首飾りのことも……。

「あのさ、奴隷市があるのよ。あんたの姉さんの名前を教えて。探してみるから」

「……ナンナ」

「きつと見つけてみせるわ」

「目が治ってから自分で探すよ」

もし目が治らないのなら、天と地をつなぐ都を建てる使命など絵空事だ。ナンナにも会いたくないと思った。

ジャミールの気配が消えてしばらくすると、足音が聞こえた。

「気がついたのか」聞き覚えのある声だった。「災難だったな。ペルシアの高官の流れ矢で怪我をしたそうだな。包帯を解くけど、目は開けるなよ」

まぶたに冷たい感触を感じる。

「粉末の目薬を溶いた真水で、目を洗っているのだ。よく効くらしい」

「まぶたしか怪我をしなかったんだけど……」

もしも視力を失うのなら、エンキドゥのように死のうと思った。

「気長に治す気になれば、きっと見えるさ」「どうということなの？」

「医者が言うには、いまはまだ眼球が光に反応しないそうなのだ。」

怪我をした時の衝撃でそうならしい

冥界ハデスの狭間に自分は迷いこんだのかもかもしれない。もしそうなら、看病などいらないとヤマトは思った。

「姉さんを探しているそうだな？」ザドクの声は憐れみに満ちていた。「元気を出せ。かならず見つかるさ」

話す気持ちにならなかった。

「よし！ 母上から聞いた遠い国の話をしてやろう」とザドクは言った。「ダビデのような英雄の話だ。遙かな昔、ウルクという町を建てた若者がいた。たしか、ギルガメッシュという名だったな……」「ギルガメッシュ……」思わず呟いた。

ザドクは少年が興味を抱いたと勘違いしたようだ。意気揚揚と話し始めた。ナンナから聞いた話とほとんど同じだった。ちがっていたのは、彼の話はエンキドゥの死んだところで終わったことだった。「おもしろかったか？」

明日またくると言って、ザドクはいなくなった。

ナンナの語る物語を、頭の中でなぞる。

「最愛の友エンキドゥを想い、ギルガメッシュは1人で旅を続けたの。そしてとうとう天界と冥界にまたがる山にたどりつくの。サソリそっくりの人間が大勢いて、地上に暮らす人間が生きたまま天界に入らないように見張っていたのよ。その姿の恐ろしさにギルガメ

ツシユさえも震え上がったほどだったの。

サソリ人間はギルガメツシユに尋ねたの。お前の目的はなんだつて。彼は、死と命について知りたいと答えたの。サソリ人間は、探す命はけっして見つからないって言うの。ギルガメツシユはどんな悲しみや苦しみがあっても自分は答えを求め続けると言ったのよ。罪もない人間までもが死ななくてはならないわけを、どうしても彼は知りたかったのよ。サソリ人間は彼の意志の固いことを知って励ましたの。この山の入り口はお前のために開かれているって。

ギルガメツシユは臆せず進んで行ったのよ。そして暗闇の世界に行き着いたの。そこには光がないの。前も後ろも見ることができないのよ。でも勇敢な彼は、先へ先へと進んで行ったの……」

苦勞の旅路を重ねたギルガメツシユは、ようやく海の岸边にたどり着く。そこで行き合うすべての人に、永遠の命をもつ者の所在を彼は尋ねるが、知る者はない。人々は言う。神々が人間を創ったとき、死を人間の取り分とし、生命は神々自身の手元に残したのだと。だから、人間は生きているうちに己れの欲を満たせばいいのだとギルガメツシユに教える。昼も夜も、宴を開き、楽しむがいいと。妻や子を愛し、死を考えるな。それが人間のなすべことだと。

「ギルガメツシユはさらに旅を続けるの。諦めきれなかったのね。船頭を雇って死の海を渡ったのよ。そこでとうとう、神から永遠の命を与えられというウータナビシユティムと出会うの。ギルガメツシユは彼に訊くの。人間の眠れる者と死者は似ているけれど、死者はなぜこの世に帰ってこないのかって。

どうしてもエンキドゥを呼び戻したかったのよ。ウータナビシユティムはギルガメツシユを哀れに思っつて、神々の秘密を話してくれたの。大昔に大洪水が起こつて、奢り高ぶったほとんどの人間が死に絶えてしまっただけけれど、神は、正直者の彼ひとりに洪水がくることを知らせてくれたんですって。それでね、彼は大きな箱船を造つて、それに家族や親戚や職人や使用人や、さまざまな動物や植物の種子を乗せて大洪水の難をのがれ生き延びたのよ。

その船の中は、7段に分けられていて6層の甲板を備えていたんです。永遠の命は、神の教えに従ったウータナピシュティムたちだけに与えられたものだったのよ。それを聞いて、ギルガメッシュは納得するどころか、さらに疑問をもったの。神が善良なだけ人間を愛し、勇気や誉れを浴する人間の心を認めないなら、とことん死と闘いたいと思うようになったの……」

僕は、ギルガメッシュのように突き進めないと、ヤマトは思った。

22話

ジャミールは髪を短くした。

「わたしがお手伝いしたことは内緒でございますよ。奥様やザドク様がなんておっしゃいますか」

彼らが折檻するのか、と訊ねると、少女は激しく首をふり、「このお屋敷では、何も不満はありません。だから、ご主人様の不興をかいたくないのです」

「召使なんて家畜の半分の値打ちもないってことね」

「そんなこと、考えたこともありません」少女の声は震えていた。

階下におりると、髪を短く切り、額帯をし、ユダヤ人が身につける男物の丈の短い衣服に着替えたジャミールを目にした女主人は、もっと高貴な衣服のほうが似合うと言った。「馬に乗るのに便利なの」

「ダニエル様は、あなたのようにであったのでしょね。美少年にも美少女にも見えたそうですから」

ザドクは怒りもあらわに、「どういっつもりだ！ そんなことで人の目をごまかせると思ってるのか」

「あたしは、今まで誰にも頼らずに生きてきたわ」

アシエラは感歎の溜息とともに呟いた。「できるだけのことをしてあげるわ。あなたとあなたの神のためにね」

「神なんて信じてないわ」

「裁き主を嘲るのか！」

「だって、あたしはこの国の民でもないもの。あんたたちの言うゲール（外国人居留者）よ」

「何人であろうと、神をないがしろにすることは、許されない」

「そっちがないがしろにしてんでしょ」

「うるさい！」

ザドクは吐き捨てると、飛び出して行った。

「気にしなくていいのよ」アシエラは笑いながら、「堅苦しい子だけど、悪気はないの」と言った。

「悪気があっても平気よ」

ザドクはその日、どこへ行ったのか、夕食にも姿を見せなかった。

「ダニエルって、神の裁き主って意味のあのダニエルのことよね？」
ジャミールはアシエラに訊いた。「ずっと先の事まで予言したそうね？」

「ネブカドネザル王に捕われて、バビロンに連れて行かれたのだから大昔の預言者なだけけれど、ユダヤ人はつい昨日、会った人のことを話すみたいに言うわ」アシエラの口振りは他人事を話すようだった。

「ダニエルも宦官だったんでしょ？ ペルシアにやってくる、占領地の美しい少年たちは誰も彼も陰部を切り取られてるわ」

アシエラは声をひそめた。「その話をユダヤ人の前でしてはだめよ。もちろん、ザドクには内緒にしているね」

「ラビ・エズラだって」

「しっ！」アシエラはジャミールの口を手で押さえた。「みんな薄々気づいているわ。でも、口に出してはいけないの。ザドクはラビを神のように崇めてるわ」

「鈍いのね」

「律法では、去勢された男子は会衆に入れないことになっているのよ」

この家にいればエズラの動きは自然に知れると気づいたジャミールはどうすればユダヤ人の会衆に近づけるのか、アシエラに訊いた。「神殿に仕えるレビ人の少年のひとりに紛れこめば、いつでも会えるわ」アシエラの瞳が妖しく輝いた。「あなたの身の上は想像するしかないけれど、少なくとも神の名で物事を決めたりしないのよ？」

「神があたしのために何かしてくれたって思ったことはないわ」

エズラの身边に不穏な動きがあれば、その時はヤマトを置き去り

にするつもりだった。この家なら少年が盲ていても飢え死にさせることはないはずだ。

ジャミールはアシエラに言った。「おばさんのお役にも立てるかもしれないしね」

「あら、どういふことかしら？」

「なんの見返りもなしに親切にしてくれる者はいないわ」

翌日、アシエラはザドクに頼んでくれた。「ジャミールをごらんなさい。神の賜物をさずかっていると思いませんか？ 神の家に入りするのにこれほどびつたりの子はイスラエル中、探してもいないわ。大祭司が鳴り物入りで預言者を養成すると言っても貧しさのせいで、サムエルやダビデのように美しい少年なんてどこにもいないわ」

ザドクは押し黙った。

「そうそう、忘れるところでした」

アシエラは縁取りのある真新しい緋色のマントを召使に持って来させて、ジャミールの肩にかけた。

「なんてよく似合うの！」アシエラはひとり悦にいった。「アテナイの巫女にも劣らないわ」

「大祭司のところへは、絶対に参りません！」とザドクは頑強に拒んだ。「先生になんと行って叱られるか。叱られるだけではすみません。先生のもとを去らなくてはなりません」

「ラビ・エズラが彼女を受け入れないとわかるから、大祭司に頼むしかないのですよ？」「わたしの立場はどうなるのです」「ザドクはアシエラに詰め寄った。

「あなたの父親はラビ・エズラとは遠縁になるアロンの家系につながるのよ。遠慮することはありません。系譜の怪しい人だって、会衆の中に幾人もいると小耳にはさみましたよ」

「しかし、少年だと偽ったことが露見したとき、どうなると思うのです！ 大祭司だって」

「ジャミールが口をはさむ。」「ザドクもアシエラも、あたしに騙さ

れたことにすればいいのよ」

アシエラは頷くと、「昔は、女預言者だっていたんですからね。ギリシアのデルポイでは、神託をきくのは巫女に限られているわ」「だめです」

「神の家への寄進は不要なのですね」

「母上！」

「最近も、ペルシアの王から川むこうの知事に当てて、ラビ・エズラに資金を援助をするようにという催促の書簡が届いたそうだけれど、なしのつぶてだそうね」

「それは……」ザドクは唇を噛んだ。

「ラビ・エズラは、ユダヤ州内にいる徴税官にも要請していると聞いたわ。果たして、心良く金品を差し出す高官がいるかしらね。」

王がラビに、従わない者たちを裁く権限をお与えになっていると言っても、それは書面上のことです。彼らはバビロンにいる貴族たちと違って皆、ラビに反感を抱いているわ。それに、軍を統括しない者の言うことなど誰も耳を貸さないわ。だから、バビロンから司令長官がいらしたんでしょうけどね」

「母上は、先生を愚弄するのですか。先生は、バビロンにおられる時に“城塞文書”をごらんになられているので、各州の税収額をご存じなのです。それだけではありません。ペルセポリスの建設工事に従事した職人への支払いを記した“宝蔵文書”もお目通しになられ、貴族や高官の不正をご存じなのです。ですから……」

「エズラ様はご立派よ。でも文書を調べ、不正を正せば、物事は進展するのかしら。人間は強欲な生き物よ。悪事を暴かれれば反発するだけよ。各地のユダヤ人も、寄進と称して蓄財を取り上げようとすれば、町をうるつくゴロツキどもをかき集めてでもラビに対抗しようとするわ。」

神より現実を重んじる彼らの言い分にも耳を傾ける必要があるとわたくしは思いますよ。そうでないと、エルサレムの人々と帰還者の間がいまよりさらに険悪になるでしょう」アシエラはジャミール

に向き直ると、「うんと美しくして出かけなさい。尊大な大祭司を驚かしてやればいいわ」

ただし、なるべく口を利かないようにとつけ加えた。

石畳の通りに出ると、目立たないようにかくれて歩くようザドクは言った。漆黒の巻き毛は珍しくないとしても、緋色のマントを風にひるがえして歩くジャミールをすれ違う誰もがふり返った。足元のサンダルにも玉飾りがついている。

「見せ物だな」とザドクは苦々しげに言った。

「褒めてくれてるのね」

ジャミールの目に映るエルサレムの町は数日前とは異なり、たまたまに彩りがあった。みずみずしい緑と果実が黄土色の建物に映えている。すれ違う人々の服装も、神殿の近くで目にした人々とはまったく違っていいほど異なっていた。エルサレムにも豊かに暮らすユダヤ人が少なからずいることを知り、ジャミールは思わず胸のうちに呟いた。

「相当のやり手なんだ」

「何か言ったか」

「きれいなお母さんねって言ったのよ」

丘の上に緑の帽子を載せたような樹木の繁る一角に、崩れかけた歴青の塀に囲まれた住まいはあった。ザドクの屋敷とさほど離れていなかったが、崩れた城壁に面しているせいで一見みすばらしく目に映った。彼はジャミールをふり返ると、固く閉ざされた門扉の前でしばらく立ち止まった。

「期待するな。わかったな」

「ここが、大祭司の家なの？」

「そうだ」

「ラビ・エズラもこんなお屋敷に住んでいるの？」

「まさか！ 先生は貧しい人々に施すことはあってもご自分は決して贅沢をされない。先生は清いお方だ」

「だから、贅沢をしているユダヤ人から再建にかかる費用を絞り取

れないのね。ペルシア王のお気に入りで、律法学者で由緒正しき祭司様なんだからさ、堂々と命令すればいいのにな」

ザドクは眉をしかめる。「大祭司の職務は世襲制なんだ。同じように大祭司アロンの家系であっても、アロンの直系のセラヤの曾孫にあたる先生より、セラヤの子のヨシユアの、その子のヨアキムのほうが権威があるんだ」

「ばっかみたい。そんなくだらないことを覚えるために頭を使ってるから、考えが凝り固まってしまふのよ」

「お前なあ！」

「さつさとお訪ねしようよ。尊い家系のお方がどんなご面相をしてんか、見てみたいからさ」

嚴重に閉じられた扉の横の小窓をザドクが叩いて来意を告げると、門番が中に招き入れてくれた。ザドクとは顔見知りの気配だった。

門を入ると、ザドクの邸宅と変わらぬ美しい庭園が眼前に広がり、堅牢な造りの建物がそのうしろに控えていた。門の周辺だけ、わざと建て直していないようだった。

戸口の前で、端正だが卑しい目つきの少年がひとりで立っていた。ジャミールと同じ年頃に見える。

少年は、慇懃な言葉遣いで神の御名を口にした。ザドクは、門番と取り次ぎの少年に「シユケル銀貨を一枚つつ与えた。

「いずこも同じね」とジャミールは言った。

庭を横切り、控えの部屋に通され、しばらく待つと、花柄の敷物を敷きつめた広間に通された。

「久方ぶりだ」

一段高い正面の椅子に腰かけた大祭司は格子縞の白い長衣を着ていた。

「会衆の推薦状はあるのかね」

驚いたことに大祭司もアラム語で話した。聖都では、ペルシアの公用語がユダヤ人祭司の間でも日常的に使われているようだった。

2人が黙っていると、彼はふさ飾りのある上等の上着をひけらか

すように椅子のクッションに瘦せた上体をあずけた。

「聞こえないのか」

金属と金属をこすり合わせたような不快な声がつすい唇からもれてくる。

「推薦状はありませんが是非、大祭司のもとにある神殿で修業がしたいとこの者が申しております」ザドクは固い声で答えた。

「知恵のある者と共に歩む者は知恵を得る。愚かな者と友になる者は害をうける（箴言13：20）」

大祭司は、ソロモンの言葉を引用した。

「わかっていると思うが、神殿に仕える者となるにはレビ人の家系であることはいうまでもないが、それ相応の期間、祭司のもとで学ばなくてはならない」

「存じております」

「トラーを学ぶ、3歳から12歳までの少年でなくてはならないことは知っているのか」と大祭司は重ねて言った。

「この者はすでに14歳になりますが、今からでも十分に務めを果たせるものと確信しております」

「美貌を武器にこの地でのしあがるつもりらしいが、のぼせあがってはいけない」

そう言って立ち上がった大祭司は、広間の端に控えているジャミールとザドクのそばに歩み寄った。

「申命記にあるように、モーセを指導者と仰ぐレビ人の系譜につらなるには、父と兄弟を捨てねばならない」

大祭司の声は、ジャミールにまわりついた。エズラも感情をおもてに現さなかったが、この男のようではなかった。この男には正体の知れない翳りが感じられる。

「この者の一族はバビロンで育つたために、父も兄弟も祭司の職につけなかったそうにございます」

「バビロンの者ならなぜ、あちらへ行かない？ いくら、いまをときめくアシェラ殿の子息だからと申しても何者とも知れぬ少年を、

このわたしに押しつけるのは非礼ではないのか。ましてや、神殿に仕える者になりたいなど正気とは思えぬ。アシェラ殿がじかに来られれば話は別だが、ご子息ともどもバビロンから帰ってきた者がお気に召されておるようだからな」

大祭司は、行政長官の地位を得て帰還者を統率するエズラによい感情をもっていないようだった。反目していると言ったほうが当たっているかもしれない。

「神殿に仕える者は大祭司の許しがなくてはなりません」とザドクは言った。

大祭司はかすかに笑うと、ジャミールの耳元にうすい唇を寄せた。「たしかに、わたしの承諾があれば祭司としての修業を受けることも叶わぬではない。ただし、しばらくはわたしの下僕として仕えてもらおう。どうだ。ここにいてよいのだ。それなら、引き受けてもよい。新任の司令長官は、美童の側近を求めていると仄聞しておるのでな」

「神殿で仕えたいのです」とジャミールは答えた。

「預言者にでもなりたいと申すのか」

ジャミールは微笑んだ。「お許しただけのなら」

神殿そのものは破壊されて失われていたが、跡地にエズラの建てた焼燔台があり、その近くに移動式の幕屋テントがある。そこでレビ人の少年たちは寝起きし、犠牲を受け取る祭司たちの手伝いをしていた。彼らはここで育った少年たちばかりだった。大祭司はエズラの建てた焼燔台を、わが物としているようだった。

「イシユタルの女神を祀る祭場でなら問題ない」と大祭司はうそぶいた。

ザドクは憮然とし、「異教の神に仕えさせるわけにはまいりません」

「まことのレビ人でない者には、それが相応だろう」

ザドクは短いあいさつの言葉を述べると、ジャミールを急ぎ立てるようにして大祭司の屋敷を後にした。

ジャミールは不思議だった。「あの男がほんとうに、レビ人の中で一番えらい大祭司なの？ 神に選ばれた人なの？」

「大祭司は、嫌がらせで、ああ言ったんだ」とザドクは言ったとたん、「まさか、下僕になるつもりだったのか」

万が一にもあの場に捨て置かれるような事態に陥ったなら、どうやってあの男を殺めたものかと思案したとジャミールが答えると、ザドクは声を上げて笑った。

「ぶっそうなダニエル様だ」

「ダニエルって、そんなにすごいの？」

ザドクは立ち止まると、「預言者はあまたいる」と言った。「エルサレムの宮殿に仕えていたダニエルは少年の頃、バビロンの王ネブカドネザルに捕らえられたが、王の夢を説き明かして、高い地位についたと言われている。それだけじゃない。バビロンが滅びることさえ予言したんだ。その後は、征服者のダレイオス王やキュロス王にも仕えたんだ」

「あれって、本当に本人だったの？」とジャミールは言った。「捕らえられた時が10歳としても百歳を越えてることになるわ」

「ダニエルの骸を誰も見ていないんだ。一説では日の出の方角東の果ての島にむかったと言い伝えられている」

「東の果てに島があるの？」

「あるらしい。俺の周りで目にした者はないが、インドやシムニ（中国）のもつと東にその島はあるそうだ」

「行ってみたいなあ」

「イザヤの予言によると、アッシリアに囚われて消えた10部族が終わりの日にならず戻ってくるそうだ」

「ダニエルは、その人たちを追っかけて行ったの？」

「彼らは地の果ての島々にいるらしい。神は彼らを選んで捨てなかつたそうだ。（イザヤ41：8 - 14）」

「終わりの日っていつのこと？ ユダヤ人って、すぐに終わりの日を持ち出すんだから。なんでなの？」

「さあ……」

「なんでも知ってるわけじゃないのね。安心したわ」

2人はその足で腐臭のただよう石畳の道を南へくんだり、崩れて洞穴のようになつた建物のならば路地を横切り、シオンの山裾にあたる地区へ向かった。

「どこへ行くのよ？」

「ヤマトの目薬を取りに行くんだ。先に帰ってるか」

ジャミールは首をふつた。「お金は、あたしが払うわ。あの子に片身の狭い思いをさせたくないから」

「金のことなら心配するな。母上はお前を気にいつたらしい」

「神殿に仕えられないと知ったら気持ちも変わるんじゃない？」

「母上は、なんでも自分の思い通りにならないと気がすまないんだ」

「なぜ……お父さんは」

「問いかけて口をつぐんだ。」

「父上はずつと前に死んだんだ」

「……」

「気にするな」

ジャミールとザドクはギリシア人の医師の住む地区へ向かった。

「なんでギリシア人の医者がエルサレムにいるの？」

「アテナイで、まずいことがあつて逃げてきたらしい」

その家は3層に分かれ、窓には金属の格子がはめられていた。ギリシア人は見栄っぱりなのだと言った。

薄暗い戸口を入るとすぐに、小柄な男が足早に出てきた。その男はザドクから用件を聞くと、陰気な顔つきを崩し、あいさつもそこに粉末の薬を棚から下ろした。棚には乾燥した草木が所狭しと並んでいた。部屋中、薬草のにおいがした。

「銀貨で40シユケル」と男は言った。

ザドクが支払う間、ジャミールは人気のない室内を見回した。

男はザドクの背後に控えているジャミールを値踏みするように眺めていたが、

「学んでみないか」

「あたしに言ってるの？」

「その歳から薬学を学べばものになるだろうし、女なら繁盛する」
「薬学って何よ」

「多くの国がなぜ、領土を求めると思う？」
「農地が足りないからでしょ」

ギリシア人は首を横にし、「金属や鉱物のためだ。金、銀、銅をはじめ、鉄、鉛、水銀、丹砂（硫化水銀）を求めてのことだ」

「金、銀、銅や鉄はわかるけど……」

「丹砂からは砒素がとれる」

「何に使うのさ」

「邪魔者を人知れず殺めることができる」

「恐ろしいことを言うんだな」ザドクは眉をしかめた。

「お金がかかるんでしょ？」

ジャミールは訊ねると、

「ダレイコス金貨で90シユケル。それで手を打とう」

「そんなお金、ないわ」

ギリシア人は教授料を値下げした。「70枚で手を打とう。ただし、ヒポクラテスの理法と解剖学の講義には特別料金を払ってもらわねばならんが アテナイの学舎ではこの10倍はかかる」

帰途、ザドクとジャミールはどちらからともなく言った。

「あの男は信用おけない」

ジャミールは、ケバルの丸薬しか知らなかったもので、バビロンの医師の間では使われているらしい毒薬の処方に興味があったが、習う金の算段がつかないと思った。「ねえ、ほんとにそんな薬があるの？ そんな薬があるのに、ヤマトを治せる薬はないのかな」

ザドクは目をむいた。「毒薬なんてとんでもないよ。そんなものを手にする人間はサタンの手下に決まっている」

その夜、

アシエラはザドクの話に耳を傾けながら、いかにも楽しげに笑っ

た。ジャミールは、ふっくら焼き上がった甘いパンをちぎり、小羊の炒り肉といっしょに口の中にはこんだ。

縞大理石で造られた広いテーブルは香辛料の匂いが満ちて、ジャミールの食欲をいっしょにも増して刺激した。

アシエラは羽根扇の影で笑みを浮かべると、「医学を習うなんて無駄なことよ。お医者様なんて儲からない仕事よ。病気はうつされるし、女の子のすることじゃないわ。ジャミールは、神殿に仕えるのがいちばん似合っているわ」

「大祭司には、断られました」とザドクは言った。「諦めてください」

「ラビ・エズラにここへきていただきましょう。それで、あちらで学べるようにお願いすればいいわ」

「母上！ 系譜のはっきりしない者を先生に会わせられません！」

「身元などいくらでもごまかせます。わたくしの親戚ということにしましょう。あなたも噂で知ってるでしょ？ 先代のペルシア王に取り立てられたモデルカイ様は、孤児だった女の子を娘と偽ってハレムに送りこんだのですよ」

「その噂なら、あたしも聞いたことがあるわ。女の子は王妃になったのでしょ？ ヘブライ語ではハダサだけど、アラム語でエステルって呼ばれていたって聞いたわ。ハダサって、白い花が咲いてとってもいい香りがするキンバイカのことでしょ？」

「なんでも知ってるのね。たのしいわ」

ザドクはたまりかねたように、「偽ったものではありません。兄の娘を養子にしたのです。先生がお聞きになられたら烈火のごときお怒りになりますよ」

「あなたの頑固にも困りましたね。ユダヤ人の欠点は神の名を借りて、民と自らの目を塞ぐことですよ」

「母上もユダヤ人じゃありませんか！」

「そうだったかしら」

すっかり忘れていたわとアシエラは口の中で呟いて、薄桃色に輝

く瑪瑙の指輪をした手を頬にあてがい、「ジャミール、あなたのために衣裳箱を買ったのよ。だから、そのお食事の仕方だけは改めなくてはなりませんよ。せつかくの美しい衣裳や宝石が台無しになるわ。学問も大切ですが、お行儀をまず学ばなくては　ね」

ジャミールはもつともなことだというふうに首肯してみせたが、「宦官みたいにくねくねできないわ」と言い放った。

アシエラは羽根扇をとり落として笑った。黄金の燭台よりもあかるい笑い声だった。明かりが幸せをもたらすことをジャミールは生まれてはじめて知った。

食事の後、藍色のとばりのおりた屋上に出ると、隣の屋敷のよるい戸が見えた。開け放たれた窓の向こうに召使の立ち働く姿が影絵のように揺れ動いていた。

「あれはおまえだ、ジャミール……」

どこからか、くぐもつた声が聞こえた。

どこまで逃げれば、監察官から自由になれるのだろう。監察官の目や耳であることにこれほど嫌悪感を感じたことはかつてなかった。

まぶたの傷はなんとか癒えたが、ヤマトの左目の視力は回復しなかった。ギリシア人の医師に言わせると、遠近距離は両目が見えてこそ、正しく認識されるのだという。慣れれば生活に不自由はないが、弓を射られるようになるかどうかは本人の意志によると言った。ザドクは、この家に居たいだけいるといいと言ってくれたが、なるべく早く立ち去りたいとヤマトは思った。屋敷内を歩けるようになった頃からジャミールの姿を目にすることは少なくなった。毎日どこへ出かけているのか、彼女は一言も話さないが、あんたのことはまかせてちょうだいと言う。

「僕のは気にかけないで」

「そういうわけにはいかないわ。このまま放り出すなんて、あんたに死ねというのに等しいもの」

「姉さんに会うまでは、どんなことがあっても僕は死なない」

「奴隷市で訊ね歩いたけれど、何もわからなかったわ」

「僕は、姉さんを探して旅に出なければ……」

「人は皆、ひとりで生きるものよ。あんたの姉さんもきつとひとりで頑張ってるわ。あたしのようにな」

「僕は諦めない」

ジャミールは、ヤマトの黒い瞳を見つめた。「あたしを姉さんだと思いなさいよ」

ヤマトは首をふり、「君のように姉さんは強くない」と言った。

数日後、旅支度をしていると、ザドクの母アシエラが部屋に入ってきた。

「召使が心配するので来てみたのよ。何をしてるの？」

「姉さんを探しに行こうと思って……」

ヤマトは召使の作ってくれた黒い額帯で左目をおおい隠し、この家に運ばれた時に着ていた衣類に着替えていた。物乞いにしか見え

ない出で立ちだった。

「お金はあるの？」

ヤマトは首を横にふった。

「それでどうやって、旅に出られるの？ こうして命があることすら不思議なくらいなのよ。いくらお姉さんが恋しくってもなんの手がかりもなしに飛び出して行ってどうにかなると思うほど幼くはないでしょ？ 神の思召したと思って、お姉さんのことがわかるまでこの屋敷に滞在なさい。いいわね」

「僕は、ユダヤ人じゃないし、それにジャミールの足手まといになりたくない……」

「そんなことはどうでもいいことよ。何かしたいことがあればおっしゃい」

「剣の使い方学びたい」

「いい先生がいるわ。信頼の置ける人よ。明日から習うといいわ」

「僕　ここで働くよ」

「数は読めるの？」

ヤマトが首肯くと、

「キャラバンが運んでくる積み荷の点検をしてもらっわ。重要な仕事だから手抜きなくやってちょうだいね」

翌日、ヤマトの部屋を訪れた剣術の教師は小柄で痩せた老人だった。ひと目見て落胆した。少年のヤマトと同じ背丈しかない老人は兵士のように殺気立ってもいず、ユダヤ人祭司のように聡明にも見えない。頭髪も顎ひげもなく、凹凸のほとんどない丸い顔をしていた。その上、前を合わせる奇妙な衣を着て、杖をついていた。

「わしは、シンドバード」と名乗ったきり、老人は口を閉ざした。

ヤマトは1つしかない椅子を老人に差し出すと、手持ち無沙汰を装って余所見をしていた。

「お前はなぜ、自分から名乗らない？ いつもそうやって相手の出方を観察してからしか自分の態度を決められないのか？ もしそれがお前の生まれながらの気質なら真の戦士にはなれない。羊飼いに

なるか、田畑を耕すほうが性に合ってる」

ヤマトは急いで自分の名を言った。

老人は少年の名を聞くと、目を見開いて絶句した。ヤマトははじめて老人が自分と同じ黒い瞳をしていることに気づいた。

「ヤマトという名は、海の王子・ティアマトに由来しておる。われたちは、海の男たちのことをアマトと言う。ヤマトはティアマトとアマトのふたつから名づけられたのだ」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「わしの名は海を表わすシンドオ、そして、われわれの祖先の建てた都市の名バドウテイビラにちなんでいる。お前もわしも否が応でもシュメール人の末裔ということになるらしいな」

探している姉のナンナに青い首飾りをもらい、ティアマトの子だと言われたことを話した。

「首飾りはなくしてしまっただけねど……」

「ナンナという名はシュメール語ではスエンと言って、月の女神をさすのだ。お前のために命も捨てる覚悟でいたのだろう」

「ユダの村で、僕らを育ててくれたイサを探すように姉さんは言っていた。それで、ほんとうの父さんと母さんの名前を訊ねるようにして」

「イサ……？」

老人はなんの特徴もない平板な顔をしかめると、考え込んでいるふうだった。

「シュメール人って、いまどこにいるの？」とヤマトは訊いた。「そこに行けば何かわかるかもしれない」

老人は微笑んだ。

「われわれの祖先は今から3千年よりもっと以前に大洪水に遭遇し、天空の都からメソポタミア周辺へ南下し、ウルクをはじめ各地に都を建て高い文明を誇ったのだ。しかし、ラクダと羊をつれた遊牧民を先祖にもつアカド人のサルゴン王に侵略され、その支配下に置かれてしまった。」

最後のシュメールのスメル（王）は殺されたが、その子ティアマトは部下とともに海に逃れ、都を奪還しようとサルゴン王に闘いを挑んだのだ。まだ成人に達していなかったが、王子は男たちの先頭に立ち、ギルガメツシュのように叶わぬ相手　死と闘ったのだよ」

「死　サルゴン王との戦いでしょ？」

老人は大きく首を横にすると、「いや。死だよ。多くの民を巻き込む戦闘は死を人々に強要することになる。無益なことだが、人間が生き続けるには困難に立ち向かう勇猛果敢さがどうしてもいる。死を賭しても、戦わなくてはならないと悟ったシュメールの王子・ティアマトは、海人「アマトとなり、サルゴンに奪われた都を攻め続けたのだ」

「それでどうなったの？」

「もう少して都を取り戻すところまで勝ち進んだのだが……、味方であるはずのシュメール人に裏切られた」

「なんで！」

「多くの者たちは、王がアッカド人であっても、日々の暮らしに差し支えがなければそれでいいと思っている。今もほとんどの人間が生きられさえすれば、誰が王になろうと何も変わらないと思っておる」

「違うの？」

「いつの日か、お前が自分で答えを見出す日がくるだろう」

「ティアマトはどうなったの？」

「サルゴンは城壁内のシュメール人の美しい娘に助けを求めさせたのだ。ティアマトは娘のかざす灯りをめざしてたった一人で城壁を登って行った。しかし、待っていたのは娘ではなくサルゴン王だった。奴の放った2本の矢がティアマトの腹に穴を開け、内蔵を裂き、心臓を貫いたのだ」

「ああッ！」ヤマトは悲鳴を上げた。

「サルゴン王は、ティアマトの頭の骨を打ち砕き、死体を半分に切り裂き、干し魚のように城壁に吊るしたのだ。そして、嘆き悲しむ

ティアマトの部下たちを縛り上げ、彼らの武器を壊し、斬り刻んで殺したのだ」

「みんな、死んでしまったんだね」

「いや、娘は生き残った。その娘を守るために神官だったわしの祖先是サルゴン王にへつらうことで生き延びた」

「なんで裏切り者のために？」

「娘は身籠もっておったのだ。ティアマトの子をな」

生まれたのは女の子だったという。もし男の子なら命はなかった。僕は、その女の子と関係があるの？」

「そうだ」と老人は頷き、「何代もかかって、お前へと命が引き継がれたのだ」

その子の子もまた女の子だったという。

「わしの祖先はその時になって、自分たちの信じていた月と太陽と金星と愛の神々がアツカド人のマルドウク神に取って代られたことがどういうことなのか、思い知ったのだ。

しかし、シュメールの神々は、ティアマトの後継者をそう易々と授けてはくたさらなかった。人間は過ぎてしまわなければ、物事の真実を見極められない生きものなのだ」

「真実？」とヤマトは訊き返した。

「アツカド人の支配もそう長く続かなかった。彼らもシュメール人のように繁栄を謳歌するようになると戦闘に倦み、理性を重んじるようになる。周辺の敵と和平を結べると安易に考えるようになったのだ。

飢えた敵を説得することはできない。自らの過去の行いを敵が繰り返すと考えないのが、愚かな人間の宿命なのだ。アツカド人の建てた国も遊牧民に侵略され、弱体化し、内乱が絶えなくなっていた。

そうなってようやくシュメール人の若者は、かつてのティアマトとその部下たちのようにアラビアの海に逃れ、自由を得た。しかし、彼らには命を賭けても惜しくない到達すべきものが何もなかった。

そんな彼らのうちのある者は船を操り、地の果てに向かつて旅立って行った。別の者は港を根城にし、数々の町を襲い、掠奪を働くようになった。目的のない者たちは大陸に定住しようと考えなかったようだ。国を建てる意味を見い出せなかったのだらう。イサという男もそんな祖先をもったひとりだったようだな」

致し方ない、と老人は呟いた。

「他の多くの者はアツカド人が滅んだのちはバビロニア人に同化し、乾いた葉が朽ちることく己れがシュメール人であったことすら忘れ去ったのだ。

神官の家系に生まれ、ウルで育ったわたしは、シュメール人の物語をいやというほど聞かされた。だが長い間、父親の繰り言だと思っていた。『いつかかならずティアマトの子　メス・バツダ（神の申し子）が現われ、天と地をつなぐ都を建てる』と神官の父は堅く信じていた」

己れの運命に逆らうことはできないものだと言った。ユダヤ人が先祖と仰ぐアブラハムもウルの出身者だと老人は言った。

「父親に戦士としての訓練を受けるたびに歯向かっていたのだよ。家を飛び出し、大海を渡る航海士になって紅海やアラビアを旅してきたが、結局は先祖の意図する道に導かれてしまったようだ。ここで、神の申し子と出会うことは天命だったのだらう」

「姉さんは、僕はティアマトの子だって言ってたけれど……僕は信じられない」

「黒い瞳と髪、それに象牙色の美しい肌の色が何よりの徴だ」と老人は言った。だから、自分は、父のように神官にもどらなくてはならないと言った。

「神官に？」

「そうだ。神官は、王子を教育する役目も担っておるのだ」

「教育？」

「ティアマトの子はわれわれのうちで、もっとも勇敢な戦士とならねばならない。なぜなら、掌中の玉のような存在でありながらも冷

酷な指導者とならなくてはならないからだ。何者の支配も受けず、信義を重んじ、誇り高く生涯戦い続ける運命を負っているのじゃ」

老人はそう言うのと、自分の杖をヤマトに投げて寄こした。どこからでも打てと言う。躊躇っている、老人は懐から小石を取り出し、少年に向かつて投げつけた。避けようとしたが、小石はヤマトの額を直撃した。遠近感をなくしているせいだ。

「それが頭に当たるうちはなんと打ち込んでも、わしに触れることはない」

それならばと、ヤマトは重い杖を老人に向かつて振り下ろした。手に衝撃を感じたが、敷石の床を叩いせいだ。いつ身を翻したのか、老人は数歩先に立っている。

「瞬時に、相手の気配を察知できるようにならないと己れの命を守れないと知れ」

「はい、師匠」

「わしのごとは、シンドオと呼べ」

「はい、シンドオ」

「たとえ目を閉じていても咄嗟の攻撃から身を守るように鍛練しなくてはならない。片目であつても、相手から目をそらすな。相手の動きに合わせて呼吸すれば勝機はかならずある」

あくる日から、シンドオと名乗る老人は一日も休むことなく屋敷を訪れた。ユダヤ人ではないので安息日などはいらないと言うのだが、しかし、キャラバンの到着した日は、数量の確認をしなければならなかった。

少年と老人とは一日の大半をともに過ごした。老人はどこに住んでいるのか、夜明け前に家を出て、月が出る頃に帰り着くと言っていた。屋敷にいる間、老人は飲み物しか摂らなかつた。むろん、少年にも食事の時間を与えなかつた。

日課は決まっていた。東から昇った太陽が真上にくるまで地形の見方を学び、太陽が西の空を赤く染める頃までが実戦の訓練だった。剣術の他に馬術と槍術が加わった。

「戦いに勝利するには、まず第一に過去における名立たる戦闘を検証してみなくてはならない。勝敗は神の加護などで決まらない。人間の知恵と勇気が戦いの行方を決するのだ。このことをけっして忘れてはならない」と老人は言った。「ダレイオス王の治世の32年のことだ。今から数えると、23年前になる。ギリシアの都市国家のひとつに過ぎないアテナイと世界最強と自他共に認めるペルシア帝国との戦闘において、なぜ、圧倒的な軍備を誇るペルシアが小国に敗れたのか？ お前はと思う？」

「ギルガメツシュがエンキドゥを誘い出したようにアテナイが策略を用いたんだね」

「そうだ。ギルガメツシュは女でエンキドゥを釣ったが、これは戦いが始まるまでに用いる計りごととしては効果がある。つまり平時には謀略が功を奏する。しかし一旦、戦端が開かれれば、敵の戦力と味方の戦力を冷静に分析し、その上で戦略を立てた側に分があるのだ」

老人は羊皮紙を広げた。

「なんて書いてあるの？」

「文字が読めないのか」

「姉さんに少し習ったけれど……」

「これは地図だ。どこが山で、海で、陸地かを記してある」と老人は言った。「どの国の王も託宣者にお伺いを立てて戦いを始めるが、愚かなことだ」

老人は、詳細に書き入れられた地名に沿って指先を動かした。

「誰が書いたの？」

「ひとかどの船乗りなら、誰でも地図くらいは書けるようになる」

「すごいんだね」

老人は少年の頭に手を置いた。「読めないなら、耳を澄ましてよく聞くのだぞ。そして一度で記憶するのだ」

「無理だよ」

「文字に記されたとたん、人々は記憶しなくていいと思ってしまう。」

お前の姉さんは、語ることでお前の心と頭にけっして消えない記憶を残したのだ」

老人は指差した。「ここだ。ペルシアとギリシアの間にあるダーダネルス海峡　これを挟んで、左の陸地がギリシアだ。右がペルシアに服従する地域で、この半島の先端部分が、アテナイの植民市だったイオニアだ」

もとはひとつだったが、何かの拍子で引き千切られたような形のふたつの向かい合う半島は鋸の歯のように入り組んだ線で描かれていた。ポツポツとある丸い点々は島だという。

「ペルシアはイオニアの反乱を抑えるために、海岸線から少し入ったところの都市サルデイスに軍と総督をおいて見張らせていた」

「僕たちのいるエルサレムはどこなの？」

「この地図では描ききれない場所にある。世界は、お前が想像するよりも広大無辺だ。しかし星の世界に比べれば卑小だ。つまりこういうことだ。お前よりずっと大きな男も、エルサレムから見えるスコボス山と比較すれば塵のようなものだ」

ヤマトは驚きで言葉もなかった。

「さてと　、イオニア人が多く住むこの地方を隷属させたペルシア軍はここを足場に2万5千の兵と600隻の3段櫂船　船を漕ぐ櫂が3段ある船のことだ　それらを擁し、エーゲ海に浮かぶ島々を次々に攻略し、その地を兵担基地にして水と食料を補充しつつ、エルボイア半島のエレクトリアに向かった。水と土を献上させるためにな」

「水と土？」

「服属国になれという意味だ」

「どうしてそんなにたくさん土や水が欲しいの？」

「身に余る贅沢がしたいからだろうな」

「金貨が欲しいんだね？」

老人は少年を黙らせるために、静かにと言ったが、効き目はなかった。

「金貨がたくさんあればどうなるの？」

「大勢の人間を思い通りにできる。生かすも殺すも思いのままだ。お前の姉さんが力づくで連れ去られたように、権力を手にした者たちは人々の自由を奪うのだ」

口をつぐむ少年に、老人は、嘆く気持ちを意志の力に変えるように言った。そして、

「ペルシアの軍団を迎え撃つ、ギリシア側のエレクトリアでは籠城して戦おうという者たちと、ペルシア帝国に恭順の意を表し、彼らを城に迎え入れようという者たちで国論は真つ二つに分かれていた。

結局、籠城することになり、6日間の戦闘の末に多くの戦死者を出し、生き残った者たちはダレイオス王のいるシュシャンに連行されたのだ。大軍を擁するペルシア軍の指揮官ダデイスは大いに気を吐いたろう。アテナイで建てるつもりでの記念碑の大理石を船に積み込んでいたほどだからな」

少年は聞き入った。

「一方、刻一刻と近づいてくるペルシアの艦隊に右往左往するアテナイでも国論は二分していた。10人いる指揮官のうち5人は1万の兵力で、2万5千のペルシア軍を迎え撃つのは無謀だとし、城壁に身をひそめた上で、他のギリシアの都市国家コリントやスパルタなどに援軍を要請しようと主張した。

片やミルティアデイスをふくむ5人の指揮官は上陸してくるペルシア軍と交戦すべしと主張した。ミルティアデイスは決定権をもつ軍事長官を説いた。『アテナイを隷属の地位におとしめるか、あるいは全都市国家の盟主たるか』と迫り、『かつて自由の戦士と讃えられた者たちすら残し得なかったような金字塔をうち建ててこれを万世に伝えるか、一にかかつてあなたにある』と言ったのだ」

「ギルガメッシュが妖怪を退治する時に、エンキドゥに言った言葉と似てるね」

「限られた日数しか生きられぬ人間が名誉にこだわるのは、後の世に生きる人々へ物語を残すしか希望を託せるものがないのかもしれない

んな」

平和な時代において愛される者は軍事能力の高い戦士になれないと老人は言う。ミルティアデイスはイオニアの君主であった時代、暴君であったために民衆に疎まれていた。ペルシア軍に攻め落とされたのちはペルシア軍の傭兵となり、北方のスキュタイと戦ったがこれを裏切つてアテナイに逃げ込み、死刑を宣告された。イオニアでの圧政がその理由だったが、ペルシア軍の内情に詳しいことが幸いして、指揮官に抜擢された。

「多くの者は名もなく生き、名もなく死するが英雄となる彼らは死後、讃えられるために生まれるのだ」

「天の命令なの？」

「神なる存在に意志があるのかないのか、わしにはわからぬが、この世界がここに存在しているのだから、わしらは生きるしかない。それぞれの宿命に従つてな」

老人の帰つたあと、奴隷女のいる台所でパンにオリーブ油を塗つて食べていると、ザドクが入ってきた。

「何を習っている？」と訊ねられ、「マラトンの戦い」と答えると、彼は怪訝な顔をした。

「ギリシアとペルシアの戦争の話などなんの役に立つのだ？ 片目が不自由なので護身のために剣術を習うのは仕方がないが、戦争の話などお前の年頃の者が耳にすれば、物事を武力で解決しようとする危険な考えに染まるだけだ」

ヤマトは反論しなかった。

「俺が母上に言つて、もっと有益なことを教えるように話してやるう」

「今のままでいい！」

「イスラエル各地で騒いでいる戦士にでもなるつもりなのか？ そんな考えは即刻やめておけ。いいな」

ザドクの明るい瞳の色はけつして濁ることはない。彼の好意を無にしたくないと思う感情が、自分の思うところを述べさせないのか

？ いや違う。ヤハウエに絶対的な信仰を置く彼とはどんなに話し合っても理解し合えないと内心でわかっているからだ。

シンドオは言う。

「戦いを始めるさいにもっとも考慮しなくてはならないのはどの地点に軍を集結させるかということなのだ。

ペルシアの指揮官ダデイスはアテナイを焦土と化す使命に燃えていたが、海から上陸し攻撃を仕掛けても城壁に守られたアテナイを攻め落とすには長期を要すると判断した彼は陸地での戦い、つまり地上戦を選択した。持久戦を嫌ったのだ。

勇猛果敢な王として知られるバビロニア帝国のネブカドネザル王がエルサレムを完全に攻め落とすのに2年かかっている。防備のしつかりした都市をまともに攻撃してもなかなか陥落しないものだ」

短期決戦には戦略があると老人は言った。「バビロニアの首都バビロンは高大な城壁に囲まれ、大河ユーフラテスが都市の中央を流れ、難攻不落と称されていたが、メディア^{II}ペルシアの連合軍を率いるキュロス王はこれを一夜にして攻略した」

「ほんとに？ どうやって？」

「キュロスは軍隊の一部を川が市内に流れこむ地点に配置し、別の一隊を川の水が流れ出るところに配置し、水が引いて浅くなるや直ちに川床を伝って町に侵入するように命じたのだ」

「川の水を堰き止めることなんて、できるの？」

「キュロスは、兵士を渡河させるために掘割り 地面を掘って作った水路のことだ。これを利用して、川の水を沼地に流し、水位を下げたのだ」

「自分たちで掘ったの？ そんなことをすれば、城壁内の兵士に見つかってしまうでしょ？」

「バビロンの住人は攻め滅ぼされることなどないと、過信していたのだ。ユダヤ人はこれを予言の成就だと言うが、果たしてそうなのだろうか」

話をもとに戻そうと老人は言った。そして、書き板に、アテナイ

のある細長い半島を描き、両軍の布陣を書き入れた。

「山岳地を挟んでアテナイの反対側に位置する、マラトン湾のスコイニア海岸に艦隊を停泊させたペルシア軍はマラトン平原に宿営した。そこからアテナイまで徒歩で1日半の道程（約42？）だ。ペルシア軍はアテナイに進軍するには、ブレクシサの沼地を通るか、ブラナ溪谷を行くかしかなかった。騎兵を誇るペルシア軍に選択の余地はなかった」

「溪谷を通ることにしたんだね」

「キュロスもだが、ミルティアデイスのすぐれたところは敵軍が決定した進路であるにもかかわらず、地形を調べ、これを利用したことだ。彼は2方向にしか出口のない溪谷の入り口を塞ぐために、盾で壁をつくるフランクスと呼ばれる密集隊の陣形を兵士にとらせ
た」

老人は長方形の図形を書き入れた。

「総勢1万の重装歩兵が横に隊列を組み、この隊列を何重（通常8列）にも重ねて密集隊を編成する、この陣形は守りと前進に強いが、側面に弱点があった。そこでミルティアデイスは木の枝や丸太を溪谷の斜面に積み上げ、蟻の這い入る隙間もないようにして騎兵を使えないようにしたのだ」

「なぜ、騎兵が使えないの？」

「騎兵の第一の役目は敵兵を蹴散らし、自軍の歩兵が待つ方向へ追いついて立ることなんだ。しかし、溪谷の内側にいるアテナイ軍は壺の中にいるようなものだから追いついて立てられない」

「それでどうなったの？」

「ペルシア軍のダゲイスは3日間、兵を動かさなかったが4日目にしびれをきらし、3千の射手に集中攻撃を命じた。太陽が翳るほど大雨のように矢がギリシア軍の頭上に振り注いだそうだ。しかし、アテナイ軍はものともしなかった」

「どうして！」

「彼らの持っていた盾はポプロンといって、それまでにないものだ

った。丸く大きな木製の表面に精銅が貼られていたんだ。それだけじゃない。持ち手が2ヶ所あり、左腕にしっかりと固定できたのだ」
その下に隠れていれば矢から身を守れると言う。

「つぎにペルシア軍は1万の軽装歩兵を繰り出したが、守りの固いアテナイ軍に撃退された。多くの部族からなるペルシアの兵士は、部隊のほとんどがイオニア人だけのギリシア軍のように一致団結して戦う気概に欠けていたこともあるが、それだけではない。装備が出身地によってまちまちだったことも敗北の原因だ。交易の盛んでない国の兵士たちの多くは武具においてもアテナイ軍に劣っていた。彼らは柳の木で編んだ軽い盾と鎌しか持っていなかった。片や、アテナイの兵士は切っ先が鉄製の長い槍（2?を越す）を持ち、精銅で作った兜をかぶり、ラメラアーマーという亜麻と皮で筋肉をかたどって作られた鎧には、矢を通さないように中に薄い精銅を縫い込んでいた者もいたし、脛当てもしていた」

「ギリシア軍は兵士の装備に、どうしてお金がかげられたの？」

「さだかでないが」と老人は前置きをした。「征服した土地の者を奴隷にして兵士に組み入れているペルシア軍と異なり、アテナイに征服奴隷はいない。債務のある者や買われた者も兵士となれば奴隷の身分から解放される。その当時のアテナイには12万人の市民と3万人の外国人、それは8万人の奴隷を使役していたが、アテナイの兵士の大半は市民で編成されていた。この違いが装備にも影響したのだろう。おそらくアテナイ人の兵士は自費で武具を整えていたと思われる」

「どうして自分で買えるお金があったの？」

「いい質問だ」と老人は言った。「彼らは戦闘があると、どここの国にも雇われて戦うのだ。そして、金を得る。つまり、武具は商売道具なのだ」

「戦うことが仕事なの？」

老人は首肯くと、ヨーロッパとアジアのはじめての戦いに話を戻した。「帝国の威信をかけた戦いだった。なんとしても負けるわけ

にはいかない。総司令官のダイスは残る1万の重装歩兵　顔を頭巾で隠した不死隊を進軍させるしかなかった。彼らはペルシア軍の中にあつて、暗黒から生まれたと称され、もつとも恐れられていた」

「ミルティアデイスは同じ陣形を取り続けたの？」

「いや。重装備の不死隊は何があつても退却しないことで知られていた。軽装歩兵を串刺しにして退却させたようなわけにはいかないことはわかつていた。それにいくら木材を使って隙間を埋めても、戦闘が激しくなればなるほど両脇は空いてくる。そこでミルティアデイスは、溪谷の外へ兵を移動させることにした。これは賭けだったが、重装備なので隊列を乱さずに前進するのは困難を極めただろうが、彼はやってのけた」

「そんなことをしたら騎兵に蹴散らされるよ」

ヤマトは本気で心配した。

「彼はそのためにも両翼に兵を厚く配備した。ペルシア軍は好機と見て中央の手薄の兵を攻めた。すさまじい戦闘だったらしい。中央の兵は後退したが、ミルティアデイスは両翼の兵をけつして動かさなかった。ペルシア軍は次第にミルティアデイスの術中に嵌まつていった」

「どういうこと？」

「袋の中の鼠と言えばわかるか？」

「両翼の兵士が向きを変えて、退路を断つたんだね」

「恐れをなしたペルシア兵は浜辺まで必死に逃げたそうだ。しかし、追撃するアテナイ軍も疲労の余り、敵軍を全滅されられなかった。敵軍の死者は6千名を数えたが、アテナイ軍は、ペルシア軍から7隻の艦隊を奪取するにとどまった。これでは勝利したことにならない。生き残った兵士と馬を艦隊に乗せたペルシア軍が、アテナイの向かうことはわかつていたからだ。」

200名足らずの戦死者を出したアテナイ軍は一時の休息をとることなく、徒歩でアテナイにむかった」

マラトン平原でペルシア軍に勝利したという知らせは伝令が先に伝えた。ペルシアの艦隊はアテナイの城壁が見えるところまで接近したが、勝利を知った市民の意気軒高なさまを遠目に見てそのまま敗走した。

「ミルティアデイスはこうして勝ち目のほとんどない戦いに勝利したのだ」

「ペルシアの王は報復しなかったの？」

「マラトンでの敗戦から10年のち（紀元前480年）、ダレイオスの子クセルクセスは父の無念を晴らそうと、海を覆いつくすほどの艦隊と自国と属国の兵を260万余もかき集めてギリシアに進撃したが、嵐に見舞われたあげくに命知らずのスパルタ兵のせいで苦杯を舐める結果になった」

「スパルタにはペルシアよりたくさん兵士がいたんだね？」

老人は首を横にした。「スパルタの王は服従を受け入れなかった。弱腰の重臣や、降伏せよという神託にも耳をかさず、わずか300人の兵を引き連れて城を後にした」

「ほんとに?!」

「スパルタ軍は周囲を断崖に囲まれた狭い入江に陣を張り、ペルシア軍を迎え撃つことにした。逃げ場のない地形をあえて選び、敵を誘いこむ戦術はミルティアデイスと似ていたが、敵の数が前回とは比較にならなかった。王も兵士も戦う前から死を覚悟していた」

「服従するより死ぬほうがいいと思っただね？」

「ギリシア全土に散らばる都市国家に奮起を促すためだった。ペルシアに隷属するくらいなら、その前に起って戦えと　な」

「でも、死んでしまったら、なんにもならないよ」

「そうだろうか」と老人は言った。「死を恐れず、心をひとつにして戦えば、相手がどれほどの大軍であっても一矢報いることができることをスパルタ軍は示したのだ。そうすることで、敵の進軍速度をゆるめられる」

「戦いを遅らせることが目的なの？」

「この戦闘によって、近隣の都市国家は、ともに戦う意義を見いだしたのだ」

一致団結したギリシア軍はペルシアとの和睦を諦め、サラミスの海戦でペルシア軍を敗ることになる。

「ペルシアは戦うことをやめたの？」

「今のペルシア王も内心では父や兄の宿願を果たしたいと思っっているだろう。しかし現状では、服属国に兵を出すように要請できない。各地の太守も総督も、バクトリアとエジプトへの二度の出兵で疲弊している。それにギリシアと戦っても、得るところが少ないと考えている」

「なぜ？」

「どんな国も新たに興るとき、力が漲っているが、いつしか衰えていく。われわれの国もそうだった。周囲の国々と協定を結び、できるだけ戦いを回避しようとする。しかし、敵はあらゆる策略を用いて、富める国を打ち負かす機会を狙う」

現在はペルシアの領土となっているが、一度はエジプトさえ打ち負かしたヒッタイト王国も強固な城壁を建てて外敵の侵入を防いだが、最後は、内乱で滅んだ」

老人は遠い目をした。「しかし、すべての人々が死に絶えるわけではない。生き延びればいつか、あらたな局面がかならずやってくる。ヒッタイト人の一部はカナンの地に移住し、今日に至っている。ユダヤ人と争いの絶えないカナン人と呼ばれている人々の先祖はヒッタイト人やヒビ人やエブス人やアモリ人など多数の民の集まりなのだ。交じり合わずに暮らすほうがむずかしい」

「じゃあ、国なんて建てないほうがいいね。争いになって滅ぶだけなんですよ？」

「たしかにそうだ。しかし、お前とわしが出会ったことを考えれば、滅びなどないのかもしれない」

老人は少年に手を見せるように言った。「この小さな手で未来を切り開くのだ。物事は常に変化する。どんな苦しみもいつかは終わ

り、山の頂に旗頭を立てる新しい時代がくる。その時がくるまで、諦めてはいけない。わかるか？ 最後の一瞬まで諦めてはならない。それこそがティアマトの子の使命なのだ」

低地平原に風が渡り、誰が吹き鳴らしているのか、角笛のかん高い音を運んできた。

何日待っても、エズラはアシエラの邸宅に姿を見せなかった。ジャミールはがっかりした。このままだと、無為に日を送っていることになる。バビロンから派遣された司令長官の動きを知るためにも別の方法を考えなくてはならない。

彼女は、ユダヤ人の少女の物売りを装って、毎日のようにあちこち出歩いた。ひとりでは危険だとアシエラがどんなに止めても、ジャミールは気にしなかった。いざとなれば、どんな手を使っても逃げおおせる自信があった。それに神殿の広場に行かなくてはハシムとも連絡がとれなかった。

ハシムは日長一日、ナツメヤシの実をかじりながら広場でとぐるを巻いていた。ジャミールが立ち寄ると、彼女から買うふりをして話しかけてくる。

「暇ほど毒はあらへんな。なあーんもすることがないと、このままいつそシリアのダマスコへでも逃げたろかと思うでえ」

「すぐに、ケバルにつかまるわよ」

「ほんでも奴さん、どこへ消えたんか、影も形もないで。ひよつとしてお宝を見つけて、お先に失礼、なあーんことはないやろな」

「それだったら、あたしたちも好き勝手にしていいってことになるじゃないの」

「ジャミールは、今も好きにしてるやないか」

「居候のどこがいいのよ。あの子の面倒も見なくちゃなんないし…」

突然、剣術の稽古をやめさせるとアシエラが言い出した。数量を正しく点検できるので商売を教えこめばすぐに一人前になると言うのだ。キャラバンを任せていた男が誤魔化しているのを、ヤマトが見つけたらしい。

「送り状の数量と荷物の数量が同じでも、袋の中身の重さの違いに

気づいた者はこれまでにいないのよ。ヤマトには商才があるわ」

「お願いだから、剣術の稽古を続けさせてやってよ」

ジャミールは老人への支払いは自分がなんとかすると言った。アシエラは少し不機嫌だった。

「いくら剣術をならつても所詮は護身術にしかないわ。片方の視力を失ったことを考えれば一日も早く商売のコツを覚えさせたほうが本人のためになるのよ」

その通りだったが、ヤマトが商売を覚えるためには広場に頻繁に出入りするようになる。そうなれば、姉のナンナを誘拐したハシムと鉢合わせする危険が高くなる。それに、ヤマトが商売に向いているとはどうしても思えなかった。

ハシムが思い出したように言った。「そやそや、司令長官やけどな、城壁のないエルサレム市内は危ないゆーて、麦畑に天幕を張って宿営してるでえ」

「そこへ行つて、耳寄りな話を聞き出せばいいわけね」

「それがやな、宿営地のすぐ手前にアラビア人の元締めが陣取つてな、さあどうぞというわけにいかんのや」

「元締めにお金を払えばすむことなんでしょ？」

「ちやうんや。元締めの息のかかった連中でしたっぴり固めてるんや。こいつらが悪いやつちやらでな。ナミの悪党では太刀打ちでけんぞえ」

「アラブ人のハシムにも負ける相手がいるわけね」

「多勢に無勢や」と言いながら、落ち窪んだ目の玉をぐるっと回し、

「ジャミール、気づいてるんか？ 小汚い巡礼につけられてんでえ」

「わかつてるわ」

「あの小童とは、わいも少々、行き違いがあつてな。厄介なやつちや。面倒やから金の鞘入りの短刀を返してやつたんや」

「あたしたちの仕事のことも勘づいてるかもしれないわね。でも今はそれどころじゃないわ。なんとかしなきゃね」

ジャミールはそう言うと、籠に入った果物を買い入れた。

こちらから機会をつくるしかない。

刈り入れを終えたばかりの麦畑に下る曲がりくねった坂道の途中で、ひと目でアラビア馬だとわかる白馬に乗った壮年の男が立ち往生していた。ペルシア人との関わりを恐れ、誰も彼も知らぬ顔で行き過ぎてゆく。

身分の高いペルシア人ならかならずと言っていい、錦糸に彩られた帽子を被り、短い戦闘用の上着を着た男は純金製の手甲と脛当てをしていた。馬も人間以上に美しい鎖かたびらや木の鎧で身を覆っている。

馬が前脚を高くあげていなくなつた際に、男は大きな目をさらに見開いて声をかけ、愛馬を落ち着かせようと懸命だ。馬上で均衡をとろうとすると全身に力が入る。男の腕の筋肉は皮膚の下で跳ねるように動いている。

「馬がかわいそう！」とジャミールは声高に言った。

馬上の男は振り向くと、泡粒のような額の汗をぬぐい、「どうしたんだろ？ 突然、馬の機嫌が悪くなつたんだ」

広い額、高い鼻梁、彫りの深い顔立ちはエクバタナの西南にあるベヒストウンの岩山に彫られたダリウス王と瓜ふたつだった。

「見てあげるわ」

ジャミールは引いているラバを止めて、自分だけで馬のぐるりを回った。ごく小さなくさび形の金属片が馬の尻に刺さっていた。「これのせいよ！」

先に白馬を追い越したハシムの仕業なのだ。金属片を取りのぞいてやると、馬はすっかりおとなしくなった。男は喜び、礼になんでも買ってやると言う。ジャミールは、ラバにのせたぶどうの蔓で編んだ籠に焼きたてのパンを満載していた。

「土と水じゃないけど、籠の中身は献上するわ」

男は怪訝な表情をした。

「司令長官なんですよ？」

「なぜ、わたしがトリタンタイクメスとわかる？」

「黄金の脛当てをしてる一兵卒なんて見たことがないわ。それ、本物なんでしょ？」

司令長官は晴れやかな笑い声を上げた。「おもしろい娘だ。よし、お前の望みを聞いてやろう。ただし一度きりだ」

ジャミールは馬を見上げた。「実はあだし、兵隊さんに物を売りたいんだけど、仕切っているアラビア人がいて宿営地に入りさせてもらえないの」

「なんだ。そんなことか。守備隊長に頼んでやろう。ついてくるがいい」

「ほんとうー！」

「それでもペルシア軍の総司令長官なのだ」

ジャミールは身分の高いペルシア人の中にも彼のように屈託のない人間がいることに少なからず驚かされた。

ジャミールとハシムが、額を寄せるようにして話している様子を覗き見たサライは頭を殴られたような衝撃を受けた。そいつは泥棒で人さらいだと喚きたい衝動に一瞬かられたが、しばらく落ち着いて考えると、2人はもとの知り合いだとすぐに気づいた。

「おっさんの言う通り、あのラクダはあんたのものだったってわけかよ。さすがじゃん」 頭を剃り、巡礼の身なりで聖都に入ったとたん、神殿の広場でハシムに出会い、母の形見の短剣を返すように迫った。

「泥棒にも3分の理やなあ」とハシムはうそぶいた。「ラクダを盗んだ餓鬼をかんにんしたるだけやなしに、つり銭までやるうゆるのやから有り難く思えよ」

「大泥棒！」
「馬鹿につける薬はないゆるこつちゃ」と言つて、ハシムは短剣を放り投げた。

どうして自分が泥棒呼ばわりされるのか納得いかなかった。しかし、ジャミールから譲られたラクダが、もとはハシムのものであったのなら彼のとつた行動も突拍子もないことではなかったのだ。

聖都を徘徊するうちに、貧しく力なき者たちが踏みつけにされるさまを、サライは嫌というほど見聞きした。ハシムのように要領よく世渡りするすべてを心得なければ生きていけないと思ひ知らされた。今では、物乞いの子供たちを目にしても手をさしのべる気にならな。哀れみの感情が失せてしまったのかと一時は思ったが、そうではなかった。力のある者の慈悲にすぎり、ひたすら屈伏するしかない者は惨めに生きるしかないのだ。しかしそれはサライ自身の姿に他ならなかった。

「ジャミール お前にとって、俺は目障りなだけなんだろうなあ」
この町について神殿広場の物売りの間を歩くジャミールを目にし

た時、サライは目眩がした。ユダヤ人の少女の身なりをした彼女は、背徳の町ソドムを救うために神から使わされた天使と見紛うほどだった。半月前にはじめて会った時も、眠っている彼女を見て、なんてきれいな少女だろうと思ったが、その時以上に美しく輝いていた。他の娘たちのように身を飾っているわけではない。ジャミールは男たちの目を気にせず、きびきびした身のこなしで誰にでも声をかける。話しかけられたほうは一瞬、身を売っている少女と勘違いするようだがすぐにそうではないことに気づき微笑み返す。

……あの鳶色の瞳に見つめられたい。

サライは、毎日のようにジャミールの後をつけ回した。そして彼女とヤマトが、ザドクの家に寄宿していることを知り、自分のできないことをなんなくやってのけるジャミールへの崇拜をさらに深めた。

鼻のない徴税官の言った、善悪のなんたるかを知った時、すでにお前の美しさは失われているという言葉は間違っていないかった。何日も体を洗わず、路上に寝ていると、己れの内側でいつの頃からかひっそりと息づいていた醜い感情が血管に入りこみ、全身を巡り、何が善で何が悪かを知る前に、胸に渦巻く悪阻で顔貌までも変わってしまったように思う。

手を伸ばせば届く距離にいるジャミールは、ペルシア軍の指揮官らしい男と楽しげに言葉を交わしているが、彼女の唇から発せられるならどのような虚りの言葉も許されると思った。血の通った女であつても、肉をもつ女ではない。それがサライの知るジャミールだった。

娼館で育ったサライはすでに女を知っていた。自分から望んで女と関係したわけではなかった。母がそう仕向けたのだ。そんな母をサライは嫌悪したが、おかげで女への憧憬や恋情で苦しむことなどなかった。女とは男の欲望を静める肉塊のようなものだとずっと思っていた。

……ジャミール、お願いだ。こっちを見てくれよ。

声にならない声で叫び続けたが、白馬にまたがった男とラバを連れたジャミールは坂道をゆっくりと下り、ペルシア兵の宿営している平原に向かつて行った。

転げそうになりながら後を追いかけた。

この道が暗黒の冥府に続いていても突き進む。

植物は枯れ、泉の干上がる季節にもかかわらず、前を行く2人は炎暑も感じないのか、言葉をかわしている。

お前は俺だけのものだ。

遠目に指揮官の姿を認めた兵士たちと数頭の脚の長い犬が天幕から群がり出てきた。

「閣下！ どこへ出かけられていたのです。護衛の者たちがさきほどから大騒ぎをしておりました」

「心配をかけたな」

「おひとりでお出かけになられては困ります！」

訴える若い兵士の声と吠え立てる犬たちの鳴き声が、草原をわたる風に乗ってサライの潜む荒地までに届く。無毛に見えるツヤツヤした犬はくるりと巻いた尻尾を振っている。「ひさしぶりだな」背中で声がした。「生きてたのか」

振り返ると、ハーヌルが立っていた。とっさにどう反応しているのか、戸惑いが先に立つ。額に焼き印を押された時の情景がまざまざと蘇る。

「あの女と 知り合いなのか」

ジャミールはラバに乗せた籠を地面に下ろしながら、じゃれつく犬たちの頭を撫でて何かしきりに言っている。指揮官も笑っている。「さらって、焼き印をして、売るつもりなのか」サライは問いたました。

「キャラバンの仕事はやめたんだ。今じゃ、ここの用心棒だ」とハーヌルは言った。「俺も堕ちたもんさ。あの女の住んでる屋敷に小僧がいてな、そいつのせいでお払い箱さ。荷駄の数が合わねえと言出しやがって」

ジャミールは籠の中のものを売っているらしい。兵士たちは先を争って買っている。

「こないだのことはお互い、痛み分けつてことにしないか」

「焼き印は消えねえ……」 サライは食いしばった歯の間から言った。

「あの女の住んでいる家を教えてやってもいいぜ」

「2度と、声をかけるなっ」

ハーヌルはニタリと笑った。「なんで、大金持ちの家に住みながら、物売りの真似をしてんだろうな。お前、不思議だと思わないか」

サライは押し黙る。ソロモンの黄金を探しているといったケバルの言葉を思い出していた。彼にもらった通行証を見た兵士は、王の密偵には子供もいると言ったことも。

「いったい、何者なんだろうな。ひよっとして王の耳かもしれねえな。司令長官は知らねえんだろうな」

ジャミールは売りさばくと籠を積んだラバにまたがり、巡礼姿のサライとハーヌルの立っているところまで戻ってきた。

小さな顔のすらりとした姿が近づいてくるに従い、サライの胸は矢で射られたような痛みを感じた。

ジャミールはじつとこちらを見ていたが、穏やかだった表情にたちまち陰鬱な翳りが生じた。

ハーヌルから声をかけた。「ねえちゃん、商売に仁義はつきものだ。勝手なマネをされちゃあ、かしらに申し開きができねえ」

ジャミールはラバから降りなかった。「いくら払えばいいの？」

「切り口上な物言いじゃねえか」

「だから、いくら欲しいのって訊いてんでしょ」

「金のことを言っただけじゃねえぜ。筋を通せって言っただけ」

「何様のつもりなのよっ」 ジャミールはラバの首を回すと、宿营地に引き返そうとした。

「司令長官に訴えてもムダだぜ。あいつの頭ン中にあるのは若い男と犬だけだ」

ジャミールはもう一度、ラバの首を回した。「それで……何の用

？」

「用？ 用はきまつてるだろ。俺様にもひと口かませるよ」

「何を？」

「何か、たくらんでるんだろ」

「今、これしかないわ」ジャミールは懐から皮袋を取り出し、投げ
て寄こした。「明日、神殿の広場に来てよ」

「明日をたのしみにしてるぜ。もし来ないようなことがあれば、あ
んたが何者なのか、司令長官に話すからな。おっと、あんたの住ん
でる家にいる小僧の命も無事じゃねえぜ」

ジャミールはラバの腹を蹴り、来た道に戻って行った。粗布をま
とったサライを、彼女は足元の小石ほどにも目につけない。ヤマト
のためになら、大事なラクダさえ手放したというのに。

「お前、あの女に嫌われてんのか？」

サライの噛み締めた歯が鳴った。

「俺に抱かれりゃ、どんな女もコロツと変わるんだがな」とハーヌ
ルは言った。「あいつは男をなめてんだ」

ジャミールにとって、この男は、もつとも危険な存在だ。厚顔で
卑しい心根がその目に現われている。

「俺の好みじゃねえけどな」ハーヌルは踵を返し、背中を見せた。

恐怖にも似た感情が少年を支配した。粗布のマントの下の手が勝
手に動いた。腰帯に差していた短剣を手にし、鼻歌まじりのハーヌ
ルの背中に突き立てた。ハーヌルは何が起きたのか、知るのに一瞬
の間を要したようだ。「てめえ、何をしやがる……」

それだけ言うとハーヌルはサライにつかみかかってきた。息のと
まる前に、サライの首に手をかけ、絞め殺すつもりなのだ。

サライは後退った。うつぶせに倒れた男はぐいっと首をもたげた。
目を剥いている。とっさに、こぶし大の石を拾ったサライはハーヌ
ルの額に投げつけた。

キャラバンを率いていた頑健な男をひと太刀で殺せると思ってい
なかったが、ハーヌルは皮袋を押さえたような声を数回もらし動か

なくなった。

「お前のようなやつに、ジャミールを触れさせるもんか！」

ダビデが、忠誠を誓うヒッタイト人の部下の妻バテシバと密通し、妊娠を隠すために忠実な部下を戦死させたが、この時のダビデに一片の罪の意識もなかった。それに比べれば、ハーヌルを殺す理由は十二分にあつた。

サライは立ち上がり、獣のように咆哮した。「後悔なんかしねぞ！」

しかし、頭にもやがかかったようにぼんやりして、周りの景色がおぼろげにしか見えない。母が殺された時でさえ、これほど足元が揺らがなかった。自分が自分でなくなったようなこの感覚はどこからやってくるのだろう。

酔った者が自分の吐いたものの中でさすらうように、血走った目の少年はジャミールの後を追いかけた。

「お前のためならなんだってできる」とただそれだけを伝えたいがために……。

バテシバを妻としたのちのダビデは度重なる不幸に見舞われる。

預言者ナタンに戒められ、バテシバの夫だった部下の死に対してダビデは神に許しを乞う。

「俺は、誰にも許しを乞わない。敵なら、何十万人殺そうと罪にならないんだ。あいつは、おふくろの仇なんだ」

遠目に見える、ラバに乗ったジャミールはエルサレムに向かう坂道をたどらず、平原を進み、ギデロンの谷を越えて、オリブ山の方角へと向かっていた。

「あんな奴、死んで当然なんだッ」

緑の森がその身を守り隠してくれると思っっているのだろうか、ジャミールは青い実のなるオリブの木立の中へ、風に吹かれるもみからのように消え失せようとしている。

かえり血を浴びた少年は、やみくもに走る。死にやがれ、死にやがれと繰り返し叫びながら……。なぜか、頭のうちでは、ダビデの

歌が聞こえた。『神よ、わたしをあわれんでください。わたしをあわれんでください。わたしの魂はあなたに寄り頼みます。滅びの嵐の過ぎ去るまでは、あなたの翼の陰をわたしの避け所とします。』
詩編57:1』

ようやくジャミールの後ろ姿に追いついたと思ったとたん、サライの目に移ったのは、左の目に黒い眼帯をした少年の姿だった。

ヤマトは細身の抜き身の剣を斜めに構え、杖をついた老人と向かい合っていた。剣の稽古をしているらしいが、扁平な顔立ちの老人にも、髪を束ねたヤマトにも殺気立った気配がまるでない。

ジャミールはサライが追ってきたことも気づかないのか、木陰から彼らを盗み見ている。けっして声をかけようとしなない。

血で汚れた手を、サライは慌ててマントの裾で拭った。

しばらく見ない間に、ヤマトは幼さの残る顎の線が痩せて鋭角になっていった。黒髪を後ろに束ねているせいだろうか、背丈も自分と同じくらいになっているように見える。

何かに持ち上げられるようにヤマトはふわりと舞い上がり、倍の速度でヒラリと降り立った。ペルシア人のようにズボンを着いているせいなのか、物音一つしない跳躍だったが浮き上がっただけではなかった。老人の顔の前で、防御に使ったらしい杖は真つ二つに切れていた。

「遠慮はいらぬ」

そう言うやいなや、老人は半分になった杖をヤマトの喉首にピタリと当てていた。目にも止まらない早業とはこのことなのか、老人がいつのまにヤマトに接近したのか、サライの視覚では捉えられなかった。

「今日は、この辺で止めておこう」

「はい、シンドオ」ヤマトの声は涼しげだった。

なんのわだかまりも感じられない、その声の響きに、サライはその場に座りこむほどの衝撃を受けた。

「あいつめ、あいつめ……」口の中で何度も呟いた。

ジャミールに聞こえているはずなのに、彼女は老人とヤマトが見えなくなるまで同じ場所にじっと佇んでいる。サライが彼女の前にまわり、視野をさえぎっても、長いまつげの下の鷲色の目を見開き茫然自失の表情に変化はない。

ここで彼女に声をかけなければ、もう一生話せないような気がしたサライは平静を装いながらも、震える声で言った。「何を見てんだよ。お前のすることはわけがわかんねーな」

ようやくサライのいることに気づいたらしいジャミールは、すぐに弓型の眉をしかめた。「しつこいわね。そっちこそなんで付きまとうのよっ」

「なんかして欲しいなんてこれっぽっちも言っただけじゃねーじゃん」

「じゃあ、何よ」

「なにもないよ」

「わかったわ。さつさと話さないよ」ジャミールはラバの手綱をとると、先に歩きだす。

「どうやって、ザドクの家に入りこんだんだ？」

「あんたの望みは何？」

「そんなものねえったら」

ペルシアの書記官になりたいと思ったことなどすっかり忘れていた。そんな途方も無い望みなど物乞いにふさわしくない。

「あんた、ラビ・エズラの弟子になって写字生になりたかったんじゃないの？」

「覚えていてくれたのか！」

ジャミールは溜息をつく、「学びの家に入れるように手配できるかもしれないわ。ただし、条件があるわ。さつきの男を殺して欲しいの」

「さつきの男って……」

「あたしを脅そうなんて、とんでもない男だわ。もしかしてあんたも仲間なの？」

あわてて首を横にすると、

「殺ってくれるの？ くれないの？ 返事はふたつにひとつよ」

「殺れば……いいのか」舌がもつれるのが自分でもわかった。

バテシバの産んだ子が死んだ時、ダビデの中で何かが大きく揺らいだ。それまで犯したどんな罪もヤハウエの名のもとに清められたが、忠誠を誓う部下の血を流したのちの王は、たとえ神の許しがあってももはや“油そそがれし者”ではなかった。

「わかつてると思うけど、あんたが選んだことだからね。あたしは命令していないわよ。殺すのはあんた自身よ」

イスラエルの神は、長く生きるために10の戒めをモーセに約束させた。しかし、サライは、『姦淫してはならない』『殺してはならない』という二つの戒めを破った。もはや恐れるものはなかった。「お前がやれって言うことは、なんだってやってみせるよ」

引き返せない道を自分が歩きはじめたことを、サライは自覚した。とんがり帽子のケバルは、ソロモンの黄金を探せと言った。そのケバルやこそ泥のハシムと仲間らしいジャミールは、人を殺せと言う。ジャミールが立ち去った後、サライは呟いた。「人を正しく治める者、神を恐れて、治める者は、朝の光のように、輝き出る太陽のように、地に若草を芽生えさせる雨のように人に臨む（サムエル下23:4）」

死の床でのダビデの言葉だ。彼は王として、わが子ソロモンのために言い残したのだろうか。

ダビデは死にさいし、自らの生き方と信仰に悔いを感じたのではなかったか。

サライはようやく気づいた、ダビデの物語に心惹かれた理由を。 。 どれほど神を恐れる者であっても自制心を忘れ、過ちを犯すと記してあるからだ。権力の維持のためには最愛の息子をも討たなければならなかった彼の苦悩に慰められたからだ。

「俺の頭と心は、ほんとは空っぽだったんだ。だから自分と関係のない物語で埋めようとしたんだ……」

しかし、同じように空っぽに見えるヤマトの前には保護者がつき

つぎと現われ、自分には現われない。

「どうしてなんだよ」

サライは、妬む心とは哀しい心のことだと思い知った。

「あいつに、俺にはない何があるんだ？」

若草を芽生えさせる雨のように人に臨める人間となるには、どんな生き方をすればいいのだろう。

「血の臭いがしたな」と老師は言った。

「血の臭い？」ヤマトは立ち止まって訊き返す。「あの生臭い臭いがそうなのですか」

「いつもやってくるジャミールの他に、後からもうひとり来たことは気づいたか」

「はい」

「その者が血を運んできたようだな」

「わたしたちに危害を加える様子はありませんでした」

「しかし、ただならぬ気配があった」

「まだそこまでは察することができません」

「用心に越したことはない。明日から稽古の場所を変えよう」

「はい」

「お前は素直すぎるのが欠点だ。戦場ではまず遠矢を射かけ、接近すれば剣や槍や斧をふるって戦い、あるいは互いに組み合って死闘を繰り広げる。生死を賭けて戦うとき、どんな卑怯な手を使ってもいいのだ」

「心がけます」

「いいか、善も悪もないと知れ。われわれの生きている世界には絶対的な光もなければ闇も存在しないのだ。恐れこそが悪であり、闇なのだ」

「シンドウはイスラエルの民が信じる神を恐れないのですか」

「彼らが約束の地を得るまでに流した血は、計りしれない。女や子供を殺す恐怖に打ち勝つには、神の名を必要としたのだろう」

翌日、師弟は夜明け前に、神殿のあるモリヤ山とソロモンの宮殿の跡地との境目となるエフライムの門　今では打ち砕かれ、ただの荒れた塚となった所を出て、坂道を下り、ぶどう畑を横切り、荒涼とした低地に向かった。

朝日が広がりはじめた時、そこからの眺めは打ち壊された都市でありながら、想像以上に美しかった。

緑の草木が豊かに生い茂り、果樹や花が谷と谷が出会う場所をおおい、ふつふつと湧く泉があり、壺を頭にのせた女たちがゆっくりと歩いている。

老師はエルサレムの置かれていた地形を丁寧に説明したあとで、籠城する敵を攻める場合の陣の位置と障壁を設けるさいの留意点を話した。

「敵墨の周囲に陣営を張り、塞柵を巡らして攻囲し、攻撃するさいの攻囲柵を築かなくてはならない」

「柵を2重に作るということですか」

老師は首肯くと、「兵糧攻めにし、敵を誘い出すのだ。これには辛抱がいるが、待っていればかならず敵は撃って出てくる」

「どうしてですか」

「餓死するよりいいと思うからだ。しかし、それも自軍の食料の確保があつてこそその戦略だ」

「戦いには、さまざまな要素が必要なのですね」

白兵戦になつた場合の武器についても老師は話した。「どの武器にもそれぞれにもつとも効果的な殺人方法とでもいうべき技法がある。お前は槍にも弓にも熟練しなくてはならない。わけても剣の技法を己れのものにせよ」

ヤマトは首肯いた。

「鎧を着ている敵には槍が第一とされているが、接近戦になればなるほど弓も槍も馬も役立たなくなる。次に起こることを察知しさえすれば重い盾など邪魔になるだけだ。いいかヤマト、お前は己れの剣でどんな相手も倒せるようになれ」

「深く心に刻みます」

老師は微笑むと、ふいによるめいた。

「どうされたのです！」杖をなくしたせいだと思つたヤマトは老師の手を取ろうとした。老師は顔の前で手を振り、「気にせずとも

よい」と言ったが、目鼻立ちのはつきりしない丸い顔に陰がさした。「ご気分が悪いのですか」

「いやいやそうではないのだ。お前の言葉遣いもまともになって、これからという矢先に、若い頃の無茶が祟るようだ。口惜しいが、そろそろお迎えのくる時期かもしれん」

「何をおっしゃるのです！ シンドウにもしものことがあれば……」

「その時は、お前の義理の父親イサに会うがいい」

「どこにいるかもしりません」

「今のお前を見れば、おのずと己れの為すべきことを知るだろう」

「信じられません」

「お前は、考えが未熟だ。己れにやさしく接する者だけを信じるが、人の世はそんなに単純ではない。敵対する者であっても、人に関する判断はそう易々と下すべきではない。」

ユダヤ人の書物では、善人と悪人の差別は明快だが、シユメール人にとって善人と悪人との境はない。この一事をよく心に止めて人と接するのだ。即断ほど愚かで無分別なことはないのだからな」

「はい、シンドウ」

「お前はなんと心地よい声をしているのだろう。その澄んだ目を見つめ、凜凜しい声を耳にできるだけで長生きの甲斐があったというものだ」老師は目を潤ませて言った。「お前のもう一方の目だが、いつかかならず見えるようになるだろう」

「なぜそう思われるのですか」

「青い光の話を聞いて、わしはそう信じるようになった。お前目が開くとき、お前の中の竜王が目覚めるのだ」

ブルの15日(11月初旬)。三日月の美しい夜に、アシエラの邸宅では大宴会が催された。着飾った男女が邸内を埋め尽くし、篝火の焚かれた中庭は昼間のように明るかった。エルサレムの近隣に住む富裕な者たちの集いだといと目でわかる華やきに満ちていた。

ジャミールはあらためてアシエラの力の大きさを知った。

この屋敷に住んで半年が立つ。短く切った漆黒の髪もものように肩に波打っている。司令長官のトリタンタイクメスの計らいで宿営地に入りしていたが、ハシムに伝えるほどの情報もないままに日数を重ねていた。

エルサレムの町はペルシアの守備隊の駐留によって長い停滞期を脱しつつあった。塩の海に至る通商路が整備され、交易によって財をなす者が増えるに従い、市内に移り住む者も多くなった。

「約束を果たさなくては……」

サライに、学びの家への入学を取り計らってやると伝えたままだった。ジャミールを脅したナバテア人を殺したらしいとハシムに伝え聞いてからは、彼の願いを叶えるまでは負い目から解放されないと思っていた。

女主人のアシエラの許しを得て、今夜に限り、サライを召使のひとりに加えてもらっていた。物乞いの格好のサライを屋敷に連れ帰り、身なりを整えさせたが、青い目と金髪の髪の毛のせいで他の召使より目立ってしまう。アシエラに見咎められないかと思いついていたが杞憂のようだった。彼女は商いのことで頭がいっぱいの様子だった。

雨季の前ぶれともいえる先の雨が地面を濡らした後で、司令長官のトリタンタイクメスは愛玩するインド犬、数頭とともに行政長官のラビ・エズラをともなつてやってきた。バビロンの総督でもあるトリタンタイクメスはこの4カ月余り、帰国していた。

今宵は、彼のための宴だった。

花々の咲き乱れる中庭につづく大広間に通されたトリタンタイクメスは、ユダヤ人の高貴な人々が、つぎつぎと上体を屈めて唇を手にあてがうペルシア式の謁見の作法プロスキュネンス（跪拝礼）で敬意を表する様子を満足げに見つめた。

アシエラはジャミールを従えて、トリタンタイクメスの前に額突いた。「お越しいただき、有り難き幸せに存じ上げます」

「招きに感謝する」

今や、エルサレムの最高権力者となった司令長官は明るい声で招かれた礼をのべた。

「どうぞこちらへ」

アシエラは司令長官の手をとらんばかりに大広間の中央に招き入れると、黄金の脚の長椅子をすすめた。

筒型の帽子をかぶり、亜麻布の白い長衣をまとったトリタンタイクメスはこの家の主人のごとく深々と腰かけた。一緒に入ってきたエズラは、司令官の影のように長椅子の後ろに立った。先にやってきていた大祭司のヨアキムや神の子と噂されるハットシも他の来客と並んで控えていた。

大祭司は、ユダヤ人の貴族女性のきらびやかな衣裳を身につけたジャミールを目にしても眉ひとつ動かさなかった。それはトリタンタイクメスも同じで、物売りではなかったのかとも訊かない。貴族階級の者は下々の者がどういふありさまに変化しようと利害にかかわることではなければなんの興味もないのかもしれないと、ジャミールは苦笑した。

「ここでこうしてお目にかかれて、この上ない喜びですわ」

アシエラは満面の笑みで重ねて感謝の意を述べた。ジャミールは、黄金の杯を手にするトリタンタイクメスにナツメヤシの酒をそそいだ。

司令長官はひと口飲み、「バビロンでの晩餐会を思い出す」と言った。

「お世辞が過ぎますわ。ペルシアの王の食卓には毎日、1万7千人の高官が招かれるそうでございますね。一度の食事に銀400タラントン（約264万?）が支出されると聞き及びました」

「わたしは有り難くも、陛下がバビロンに滞在中は昼食をとにもするという荣誉に浴している」

「ご一族の方とだけ、王は食されるそうでございますね?」

「ほんの少人数だ」

「そのようなお方にお出でいたたけるとは、どのような謝辞の言葉を用いまでもいまの気持ちをお伝えできませんわ」

トリタンタイクメスは形のいい眉をひらき、精悍な顔立ちに屈託のない微笑をうかべた。

「お食事の前に、余興をご覧ただこうと準備致しております」

大広間のひと隅に座す楽士たちによる演奏がはじまった。豎琴やフルートなどの楽器がかき鳴らされると、ジャミールは緊張で胸が高鳴った。

大きな扇を両手にもった、胸当てと腰布だけの女たちが中庭から大広間へとなだれこんできた。

駝鳥の羽で作られた扇からは花の香りが漂い、人々の目は、長い手足で優雅に舞い踊る美女たちに惹き寄せられる。彼女たちは円形になると、中心に扇を重ねていった。花びらがひらくように扇が広げられた瞬間、輪の中から光沢のある薄絹の衣裳をまとった少年が司令長官の前に躍り出た。

「おおっ!」

護衛の兵士が色めき立った。純白のターバンをかぶったヤマトは黒い眼帯をし、抜き身の半月刀を手にしていた。司令長官は一瞬たじろいだふうだったが、すぐに笑顔にもどった。月の化身のような気高さとハヤブサの酷薄さを兼ね備えた容姿の少年に興味を惹かれたようだった。

教えた通りに舞って、とジャミールは念じた。

インド人の王族の衣裳を身につけたヤマトはやわらかい身のこな

しで大広間を縦横に舞い踊り、最後に半月刀を真上に放り投げ、自身も宙返りし、垂直に落下してきた半月刀の柄を苦もなくつかんだ。感嘆の音がそこかしこからもれた。

「お気に召しましたでしょうか」

「申し分ない。褒美をとらせるので、あの者を近くに」

ヤマトは息を乱すことなく、抜き身の半月刀を後ろ手にもち片膝をついて頭を低めた。「なんなりと、望みを叶えてとらす」トリタインタイクメスは芝居がかった声で言った。

「何もございません」

「なぜだ」

「お話は別室で」とアシエラはとりなすように言葉を添えた。

尻尾をふってはしゃぐ犬らを御供に従えたトリタインタイクメスは、象牙などの高価な調度品で飾られた客間に移った。

大祭司のヨアキム、それにハットシ、エズラがあとにつづいた。

女主人はジャミールとヤマトを引き連れてつき従った。

乳白色の大理石のテーブルにはすでに料理が並べられていた。食事をする時に寝そべる長椅子が壁に沿っていくつも置かれていた。

大広間にも料理が運ばれているのだろう、喧騒が中庭を隔てた客間まで伝わってくる。

トリタインタイクメスが席につくと、給仕係が銀の大皿を目の前に差し出し、円盤のような蓋をあけた。

トリタインタイクメスは感嘆の声をあげた。「これは、アラビアの駝鳥ではないか！」

「お好きとお聞きしましたので」

「焼き具合の色といい、ハーブの香りといい、文句のつけようがない。そう思わないか、行政長官。あとで食するといい」と、トリタインタイクメスは末席についたエズラに話しかけた。

「ありがとうございます」と言いながらも、エズラは手近の料理にさえ手をつけようとしなかった。

「もったいないお言葉を頂戴し、この上ない」

アシエラが言い終わらないうちに、忍び寄るように入ってきた人物がいた。遠く離れていても男の眼光は一瞬でその場の雰囲気を見通すような力があつた。男はユダヤ人の若い従者を連れていた。

「司令長官におかれましては、定めのない時までご健勝であられませうように」

男は身を低め唇に手を当てた。それからエズラに向き直り、「あなたとは、長官の執務室でいつも会っているのです、あらためて挨拶するのもよそよそしいな」

エズラは無言だった。

「この者は、トビヤと申します」と男は従者の名を言った。

ジャミールは少年の眼差しに見覚えがあつた。大祭司の家で見かけた少年だ。

「ふむ」トリタンタイクメスはかるく頷き、「秘書官のスクラだとアシエラに紹介した。」

「存じあげております」とアシエラは立ち上がって身を低めた。

「彼は、かの有名なダレイオス大王の7人の同志のうちでも、もっとも力のあつたオタネスの子孫にあたる」

トリタンタイクメスは駝鳥の肉に舌鼓を打ちながら、「これで、エルサレムの主要な者たちがそろつたことになるな」

犬たちはよだれを垂らし、ご相伴に預かりたいと吠える。司令長官は惜し気もなく駝鳥の肉を投げてやる。飼い主に似たのか、犬たちも健啖家だった。どの皿の料理もガツガツと食い散らした。

トリタンタイクメスは彼らの食欲に賛辞の言葉を惜しまなかつた。「お前たちの食する姿ほど、わたしの心を慰めるものはない」

ご満悦の総督の傍らにはヤマトを、大祭司にはジャミールをはべらせたアシエラは、自らは秘書官の隣の席についた。

ジャミールは、大祭司から漂う形容しがたい臭いに辟易していた。脂身の臭いだと知つたのはずっと後になつてからだった。

「女であつたのか……」

大祭司は先日の横柄な態度とは打って変わり、かん高く細い声で

何やかやとジャミールに話しかけた。「はじめから言ってくれば、扱いもちがったのだぞ」

ようやく、トリタンタイクメスが切り出した。「ヤマト、遠慮せず、希望を申してみよ」

秘書官が口を開いた。「お願いの儀がございます。舞いを披露した少年の願い事につきましては是非、わたしめに権限をお譲りくださいますように」

「わかった。貴君にまかせよう。わたしに異存はない」
トリタンタイクメスと犬たちは家鴨の雛を頬張っているところだった。

秘書官は茶褐色の濃い髭でおおわれた口元を歪めると、大祭司に視線を泳がせ、かすかに嗤った。

ジャミールは背筋が凍った。彼らは何かを企んでいる。

……何を？！

秘書官の役目は、ペルシアの行政機関の長である宰相と総督との連絡係だった。監察官が王の耳なら、秘書官は宰相の耳だった。地方に赴任した司令官や総督はどちらの耳も恐れたが、実質的な権限を掌握する立場にある宰相の耳をより警戒した。

「さてと さきほどのように何もなしなどと申すなよ」と秘書官は言った。

ヤマトはトリタンタイクメスの傍を離れ、秘書官の前に跪いた。

「お言葉に甘え、申し上げます。わたしはここにいるジャミールに命を助けられ、今日まで生き延びてまいりました。できますことなら、わたしではなく、ジャミールの願いをお聞き届けくださいますように」

「殊勝な心がけだ」と秘書官は言った。「ジャミールとやら、なんなりと申してみよ」

ジャミールはここでサライのことを持ち出していいのか悪いのかわからず、目を伏せたままだった。

ヤマトが言った。「ラビ・エズラのお弟子に加えていただきたい

者がおります」

ジャミールは、あっと小さく叫んだ。召使の中にサライが紛れこんでいることを、ヤマトは知っていたのだ。

「恐れ多いことではございますが、ここに呼んでもよろしいでしょうか」

アシエラの顔を見なくても眉をひそめているであろうことは想像がついた。自分から言い出すべきだったと思う反面、ヤマトが許しを得て立ち上がり、中庭にいたサライを連れてくると、ジャミールは覚悟をした。

……もうどうなってもいいわ。

賓客の前に立たされたサライは突然のことにどう対応しているのか、見当もつかない様子だった。跪拝礼きはらいをするどころか棒立ちだった。

「この者か？」秘書官の声には刺があった。「行政長官の弟子になつて、どうしたいのだ？」

「うつつ」とサライは唸った。

ジャミールは目を上げることさえ躊躇われた。

「用件はわかりました」とエズラが静かに言った。

ジャミールは思わず顔を上げた。エズラは正面をむいたまま、次の言葉を発しない。それは、黙れという否定の意味なのか、すべて承知したという肯定の意味なのか、ジャミールには判断がつきかねた。

秘書官はエズラの声など聞こえなかったかのように少しの澱みもなく言った。「神殿で働くレビ人は24の組に組織されている。そのすべての権限は、レビ人の長である大祭司にある」

「わたしもお世話になっております」従者のトビヤは誇らしげに口をはさむ。「スクラ様のおかげです」

「ふむ」と秘書官は頷き、「有為の青少年のためにある、学びの家への入学に関してならば、設立のさいに陛下の金庫から多額の寄付が支出されているのであるからして、われわれペルシア人にも入学

に適する少年を選ぶ権限が多少なりともある」

「ご配慮のほどお願い申し上げます」とヤマトは言った。

「白人奴隷を学ばせてよいものかどうか」と秘書官は言いよんだ。

「大祭司は反対だろうな」

大祭司は鼻をうごめかした。「エルサレムの民でない者に入学は許可できかねます」

平伏した姿勢のヤマトが口を開いた。「恐れながら、トリタンタイクメス閣下に申し上げます」

「申してみよ」トリタンタイクメスの目はカモシカの薫製肉に注がれていたが、ヤマトの声には即座に反応した。

「先のギリシアとの大戦において、閣下は敵軍から脱走したアルカディア人からギリシア人が戦いのさなかであるにもかかわらず、弓や馬の競技をしていると耳にし、賞品が何かお尋ねになられたと伺いました」

トリタンタイクメスは口の中の肉を吐き出した。「そちは、そのような昔のことを知っておるのか！」

「賞品が、オリーブの枝の冠だけだとお知りになって非常に感銘を受けたことも合わせて伺っております」

トリタンタイクメスの表情が今までになく輝いた。テーブルから身を乗り出し、「先代のクセルクセス王には臆病者とのそしりを受けたが、今もその時の思いは変わらぬ」

歴戦の勇士の顔にもどったトリタンタイクメスは頬を紅潮させて語る。

「プラタイアにおいて戦死したマルドニオスの死を惜しむからだ。生涯の友であった彼は全軍の指揮官として立派に戦ったが、無念にもスパルタ兵の手にかかった。気迫において、ペルシアの指揮官がギリシア軍の將兵に劣っていたとは断じて思わぬ。しかし、金品ではなく、名誉のために戦う兵士ほど強き者はないことも疑いようのない事実なのだ」

トリタンタイクメスはそう言うとしばし絶句し、はらはらと涙を

こぼした。

「マルドニオスほどの勇者に二度と会いまみえることはない」

客間は一瞬、水を打ったように静かになった。

ヤマトは沈黙をやぶり、「身分にかかわらず学びたいから学ぶ。

そして得た知識を己れの誇りのために生かす。神を崇めるためにも信ずるにたる証しを学ぶ者　これを排除すべきではないと存じます」

「知識もまた名誉のためにあると申すか」とトリタンタイクメスはひととき大きな声で言った。「ヤマト、そちの言葉に偽りはないか」「この者の知識はユダヤ人に引けをとりません。ユダヤの書物について、なんなりとお尋ねくださいますように」

「わたしはユダヤ人の書物に詳しくないので、その役目は大祭司にまかせよう。行政長官は反対のようなのでな」

「そう申されましたも、たかが子供のことでですので、わたしの質問に答えられるとは思えません」と大祭司は言った。

「どうぞ、お尋ねくださいますように」とヤマトは引き下がらなかつた。

大祭司は空咳をひとつすると、「民数記のどこでもいいから暗唱しなさい」と言った。

いかにも思いつきで言ったという顔つきであった。

ジャミールは祈るような気持ちでサライを見つめた。

サライの表情にやや余裕が生じた。

「契約の箱の進むときモーセは言った。『主よ、立ち上がってください。あなたの敵は打ち散らされ、あなたを憎む者どもは、あなたのみ前から逃げ去りますように』。またそれ（契約の箱）がとまるとき、彼は言った。『主よ、帰ってきてください、イスラエルのよるず（千万）の人に』。（民数10：35 - 36）」

大祭司は気色ばんだ。ペルシアの司令長官を前にして、イスラエルの民の戦意高揚を促すような聖句はふさわしくないと考えたのだらう。

「もつと差し障りのない、そうだ！ レビびとに関する箇所を」
「あなたはレビびとを、アロンとその子たちとに与えなければならぬ。彼らはイスラエルの人々のうちから、全くアロンに与えられたものである。あなたはアロンとその子たちとを立てて、祭司の職を守らなければならぬ。ほかの人で近づくものは殺されるであろう。（民数3：9 - 10）」

大祭司をはじめ、ハットシ、トビヤの顔がひとしく歪んだ。年齢はまちまちであるのに、レビ人たちの目は憎悪のひと色に染まった。トリタンタイクメスは破顔した。「その方の反骨精神に免じて、神に選ばれし大祭司への非礼を許そう」

サライは低頭し、礼を述べた。「閣下のご温情に報いるためにも、かならず写字生となります」

「よしとしよう」トリタンタイクメスは大きく頷いた。

秘書官が口をはさむ。「日頃のアシエラ殿のわれわれへの献身を思えばこれしきのことは何程のこともない」

ジャミールはこのままではすまないと本能的に感じた。彼らの企みは、王からの信任の厚いトリタンタイクメスとエズラの失脚にあるようだった。

「どうだろう？」と秘書官が言った。「ヤマトとやら、その機敏な立ち居振る舞いから察するに剣の腕前に自信がありそうだな。そこでだ、わたしの護衛兵士と立ち合ってみないか。閣下いかがでございますしょう」

「それはおもしろい！ ただし競技だ。殺し合うのではない。よいな」

「祝宴を血で汚すようなことは致しません」と秘書官は鹿爪らしく言った。「そなたが勝てば、報奨を与えよう」

「舞いの半月刀ではなく、自らの剣を用いてよろしいのでしょうか」トリタンタイクメスが首肯くと、ヤマトは控えの間から剣を持ち出した。

秘書官が手をあげた。

腰に剣を帯びた長身の兵士が立ち現れた。「狭い場所だ。剣を交えて、優勢と見えたほうを勝ちとしよう」トリタンタイクメスは健気な少年が打ちのめされる姿を見たくない口ぶりだった。

護衛兵士は総督の意をくんでか、秘書官から「はじめよ」と命じられても、剣を抜くことに躊躇いを見せた。相手が少年では、倒しても名誉にならないと思っっているようだった。眉を眉間に寄せてじつと動かない。

「お止めください！」

兵士の前に飛び出しそうとしたジャミールをアシエラが叱責した。「見苦しい振る舞いはおやめなさい！」

大広間の客たちにも客間のただならぬ気配が伝わったのだろう。見物しようと、ぞろぞろと中庭に出てきた。

ヤマトは眼帯をしている左目の前で剣を構えた。そして、兵士との間合いを少しづつ詰めていった。

兵士がようやくやく剣を抜いた。

音という音がこの世から消えた。

兵士の剣はギリシアからメソポタミア一帯にかけて広く使われている両刃のつるぎだった。均整がとれ、突くことに勝れているが重量がある。ヤマトの鉄製の剣は、シンドウが特別に作らせたもので片刃だったが細身なので比較すれば格段に軽かった。ただし、手入れを怠ればすぐに錆びる。

兵士は両腕を肩のあたりまであげて身構えると、空間を切断するように左手の剣を突き出した。

両手で支えるヤマトの剣は一瞬きらめいて、元の鞘におさまった。試合が終わったと思う者はひとりもいなかった。ヤマトが恐れをなして降参したと思ったようだ。トビヤが拍手をしようとした刹那、兵士の剣がふたつに切れて上半分が落下した。虚を突かれた兵士は剣を捨てヤマトに飛びかかろうとしたが、その喉首にヤマトの剣の切っ先がピタリと当てられた。「褒美をとらず！」とトリタンタイクメスは喚くように言った。

ヤマトは辞退した。「すでにいただきました」

「そなたこそ、年少ながら名誉を重んじる真の勇士だ」

トリタンタイクメスの興奮はひと晩中続くのではないかと思われるほどだった。

宴は、夜明けまで続いた。

エズラは辛抱強く席についていたが、トリタンタイクメスがヤマトを献酌官を見立てて、したたかに飲んだあげくに前後不覚に酔っ払ったのをしおに席を立った。秘書官と大祭司に一礼し、女主人の見送りを断り、玄関に送って出たザドクとジャミールに声をかけた。「わたしは会いませんが、明日からあの者に学びの家に来るように告げなさい」

ザドクは即座に言った。「ともに行くのは嫌です！」

「総督の命令でも断るのね」とジャミールは言った。「宴会の席に出なかつたのは、跪拝礼をしたくなかつたからでしょ」

唯一の神ヤハウエの神に仕える身のエズラも大祭司もハットシも巧妙に跪拝礼を避けていたのを、ジャミールは見逃さなかつた。

後から、その話を耳にしたアシエラは、「いなくなったと思つたら、なんて子なの！」と鈴の音のような声でザドクを戒めた。叱つている、というよりも宥めているといったほうが当たっていた。

「ラビ・エズラや大祭司はユダヤ人の目があつて致し方ないとしても、頼みの綱のあなたがそれでは、わが家も安泰ではありませんねえ、ジャミール、あなたもそう思うでしょ？」

ジャミールは黙っていた。エズラの真意を図りかねていたのだ。サライは住民登録の書類なんて何も持つてない。本当に入学させてもらえるのかどうか……。

「あの者の系譜については、誰にも話してはなりませんよ。いいわね」

メディア州の都エクバタナからやってきた少年ということにしないでとアシエラは言うが、青い目のメディア人などいるのだろうか。「楽器を学ばせなさい。白人奴隷の身分で、写字生を志すなんて恐

れ多いですからね」

「本人が承知しないとします」

エズラの時代、帝国内の書記たちはすでに傑出したものとなっていた。聖職者として高い地位に着くにはどの国にあっても家柄が求められたが、身分の低い者たちが高位にのぼるには書記官として認められることが第一であった。

「ラビを困らせてはなりませんよ」アシエラはジャミールをたしなめた。「許可なさりたくなかったはずですから」

「先生はどういうおつもりなのか……」ザドクは独りごちた。「俺にはわからん」

「ジャミール」とアシエラは呼びかけた。「あなたのことはわたくしにまかせてちょうだいね。ヤマトのかわりに物売りをして働いても、シンドウ先生に支払う教授料にしかならないわ」

ジャミールは唇を噛みしめた。

「神殿に仕える巫女におなりなさい」

「母上は何をお考えなのです！ 神殿がどこにあるのです。再建されてもいない神殿にどうやって仕えるのです」

「イスラエルの民はあなたやラビの考え通りに動かないわ」

アシエラの声の響きはジャミールのはじめて耳にするものだった。「このままでは、農民あがりの戦士と称する連中が何をしてくるかわかったものじゃないわ。わたしたちイスラエルの貴族は、用心にも用心を重ねてあらゆる方法で情報を得なくてはならないのですよ。暴動でもあれば、今の暮らしなんてすぐに失ってしまいます」

エズラの帰還当時、イスラエルの人々は狂喜乱舞して神殿と城壁の再建を誓ったが、資金不足ということもあり、無償の労役を求められたあげくに異国の妻子を離別せよという命令は歓迎の熱気を冷まし、先に帰還していた同じ目的の者たちさえも再建工事について口にしなくなっていた。

「あなたは世間を知らなさすぎます」

人々は救い主の出現をひたすら待ちわびていた。モーセやダビデ

が成し遂げた奇跡をいま一度待ち望んでいたのだ。そこへ、エズラが帰還した。ユダヤ人の誰もがエズラに奇跡を期待した。モーセがエジプトからの脱出を可能にしたような奇跡を、ダビデがペリシテ人を撃ち負かしたような奇跡を、神の子にだけに可能な大いなる奇跡をエズラに望んだことは想像に難くない。しかし、エズラが真っ先に民に求めたことは他の民族との隔離であつた。

レビ人の祭司までが、カナン人の女を妻にしていた事実もあり、エズラの求めはイスラエルの民にとって重すぎる決断を強いていた。地方に住む土地所有者の中にも、エズラに対する不満や反感を抱く者が多くいた。彼らは神殿再建にも執拗に反対した。自由農民からなる彼らはサウルやダビデの時代から常に武装し、収奪者である都市生活者を脅かし続けていた。納税にひとしいレビ人祭司への貢ぎ物を求める規定に対する不満が一因と見られた。

その夜、ジャミールは、夢の中で声を聞いた。

「どこへ往こうとわたしはお前を捜し出す……」

監察官の青灰色の目が背後に迫っているような気がした。いつまでもこのままの状態でいられないことは痛いほどわかっていた。でも、なんとかして監察官の手の中から逃げおおせたいという欲求が日毎に高まっていた。

安息日をのぞいて、神殿の北にあたる、羊の門近くの、学びの家にサライはひとりを通うことになった。

「すぐに放り出されるさ」

サライはジャミールからもらった派手なマントを着て羊の門に向かった。

3日前、腹を空かし、神殿の広場で野宿をしていたサライにジャミールのほうから声をかけてきた。

「屋敷に来て」

「どういうことだよ」

「黙って言う通りにすればいいのよ」

ジャミールはサライをザドクの家連れていき、彼女の下僕として使用人の住む部屋で寝るように言った。この家の女主人にも了解をとってあると言う。

「宴会があるの。そこで、あんたを、ラビ・エズラに合わせるわ」

「そんなことができるのか！ 恐ろしい女だな」

ジャミールには非難めいて聞こえたかもしれないが、サライにとつては賛辞にひとしい言葉だった。どんなむずかしい聖句でもよどみなくスラスラ言えるのに、自分の気持ちの的確に伝えられる言葉を知らないことを悔やむばかりだった。

顔と手足を洗った後、ユダヤ人の少年なら誰でも着る粗末な衣服のひとつ揃えと緋色のマントをもらい、「額の焼き印だけど、額帯をしっかりして見られないようにしなさいよ。それでなくなってみつともないんだから」と言われ、思わず口をとがらせたサライは、「これでも、宦官になれって言った野郎もいたんだぜ」と言い返すと、「少しは考えてしゃべんなさいよ。宦官になつてたら、屁理屈の多いあんななんか3日のうちに殺されてるわよ。ペルシアの貴族にとつて、宦官の命なんて馬以下なんだからね」

言い負かされながら、サライの胸は喜びで震えていた。

「刃物は預かっておくわ」

短剣を彼女に差し出すと、ハーヌルを殺めた記憶が薄れるような気がした。

邸宅内は広く、四方に2層の建物があり、回廊でつながっていた。北側に女主人とザドクの住まいがあり、東側と西側に大広間と客間があり、南側に既に使用人の住まいがあった。

サライは使用人の部屋で寝起きするようにと言われた。ジャミーとヤマトは西側の客間にいるようだったが、建物内に入ることは禁じられた。当然、女主人はおろかザドクとも顔を合わすことはなかった。彼らが顔を合わす使用人は限られていて新入りのサライなど影すら踏めないということがすぐにわかった。

使用人といえども身分の差があったのだ。召使と聞いていたのでジャミーとは毎日のように会えるのかと期待していたが、これも考え違いだった。サライの仕事は、馬の世話をすることだった。出入りも裏門からと定められていた。

「俺様を舐めんじゃねーぞ」

いまに目にももの見せてやると、サライは使用人ばかりが眠る藁敷きの大部屋でぶつぶつ言った。小声で言っただつたが、年配の男に叱り飛ばされた。

「おい、坊主、白人奴隷はいちばん下っぱってことになってんだ。怪我をしたくなかったら気をつけてものを言えよ」

次の日から、サライを名前で呼ぶ者などいなかった。「おい、坊主」か、「その白いの」に限られた。

今朝、目覚めたとき、「白いの、学びの家に行けたとよ」と言われ、追い出されるようにして出てきた。聞くところによると、ヤマトには家庭教師までついているという。

「くそっ！！ ちよつとばかり、腕がたつようになったからって、えらそうに能書きをたれやがって、ただじゃおかねーぞ」

内心ではいきり立っていたが、羊の門が近くなるにつれ、不安が

いやました。乾したイチジクを皮ごとかじりながら、なんと入って行けばいいのか思索した。

一旦、剃り上げた頭だが、今では肩にかかるくらいに金色の髪が伸びていた。野アザミのように青い瞳もどうやっても隠せない。容姿のことでまたあれこれ言われるのかと思うと足取りは自然に重くなった。

迷路をさまよう気分だった。

学びの家の建物はザドクの邸宅と異なり、壁は剥げ落ち、玄関の扉も窓枠も壊れて用をなさなかった。もとはイスラエルの兵士が常駐する城塞だったらしいが、いまでは面影すらない。それでも、バピロンから帰国した離散の民で構成する教団の本部もかねていたの
で、狭い屋内を大勢の若者でひしめいていた。

右も左もわからないサライは建物の中に入ると、自分がどこに行けばいいのかと訊ねる相手を探したが誰ひとり、サライに目を止め、耳を傾けてくれる者はいなかった。異形の容姿も効果はなかった。中庭に通じる廊下に出ると、髭を短く刈りこんだ大柄な男が立っていた。

門番らしい。疑り深い目つきが度量の狭い気質を如実に現していた。使用人部屋の噂では、この男だけが妻子を離別したと聞いているた。

「なんだ、お前は」

名前を問いただされたあと、門番は中庭に面した部屋へ行き、戻つてくると、褐色と白の塗料を塗った壁の他はなんの飾りつけもない狭い部屋に連れていかれた。しばらく待つと、かん高い声の集団が押し込むように入ってきた。

騒ぎは一瞬で静まった。

13歳で受けるバルミツバの成人式を終えていない少年たちは異形の闖入者を目にすると、驚きの声を上げた。青い目と金色の髪もだが、ジャミールにもらった緋色のマントが肌の白さを際立たせていたせいもあった。

10前後の少年たちは全身を目にして新入りの少年を見つめた。睨みかえした。

彼らはサライを遠巻きにしておのおの好き勝手に腰をおろした。しばらくすると、少年たちの半数は備え付けの棚から楽器を持ち出してきた。残る半数は、「あーあーあー」と高い声を出した。

年若い奏者は入ってくると、サライに横笛を手渡した。サライは真似事のように唇に当てた。将来、歌うたいや楽士になる子供らに交じって楽器を習う気など毛頭なかった。

ダビデの詩歌を歌う半数の少年たちの声に合わせて、残りの少年たちの奏でる楽器の音色がひとつに合わさっていった。

「楽じゃん」

働かずに、居眠っていればいいのだからこれも、わるくないと思っただ。

その頃、ヤマトは、剣を作ってくれた鍛冶屋に代金を支払うために“灰色の山の門”のあったという場所に向かっていた。シンドウの命令だった。この門は“糞の門”と呼ばれ、市の城壁の南東の隅にあり、テユペロンの谷との合流点の近くでヒンノムの谷に通じていた。以前はこの辺りに陶工が多く住んでいたらしいが、今は灰土にまみれた城壁の残骸があるだけだった。

谷を降りて行った。

物乞いの住居が密集していて悪臭を放っていた。その中の一軒から金属を叩く音が聞こえた。入って行くと、真っ赤に焼けた刀剣を金槌で打っている男がいた。

イサだった。

ヤマトを見あげて、「とうとう」と呟いた。

どうということかと訊くと、「あなた様を助けた日からこの日がくることを長く待ちわびていました」と言った。そして、「最後の賭けでした。息子の嫁に言えばナンナ様があなた様を手放すと目論んだのです……」

寝呆け眼のサライは追い立てられた。

熱心でない学習態度に業をにやした奏者は、神殿でハツトシを警護している若者のもとに不屈き者を行かせることにしたのだ。

廊下をうるつき、10代後半から20前半の若者たちで占められている教室に入っていくと、マラキが待っていた。

彼は、サライがヘブロンで集会所で騒ぎを起こした少年だと気づいているはずだが、そのことはけっして口にしなかった。

根回しはできているようだった。

将来、祭司となるレビ人の若者たちの学ぶことは、「焼燔の捧げ物の捧げ方について」などが記述してある、モーセの五書の『レビ記』が中心のようだ。サライがもっとも退屈だと感じる箇所だ。

「神の律法は、祭司の務めや神殿で犠牲を捧げる手順を明確に示している、一字一句たりとも読み違えてはならない」マラキの説教は恫喝にひとしかった。「人々の罪を許すための神の備えを表している犠牲を捧げることによって、人は神のみ前で清くなり、神の祝福や導きを受けることができる」

サライは胸の内を反駁した。「罪をあがなうために捧げ物せよ、か。冗談じゃねーぜ。てめえらが食うためにさせてんだろーが」

モーセの親衛隊だったレビ人は、モーセの命を受けて同族の粛正を行なった。その報奨が、千年の時を経た今も続いている。

「律法では、捧げ物の肉のどの部分が食用として祭司へわたるかを定めている（申命18:3）。また、捧げ物をするときの祭司の服も定められている（レビ5:10）。その時の下着の股引は亜麻布でなくてはならない」

「なぜですか」とサライは問うた。「綿布では、なぜいけないのです?」

「お前の能力では、この組に属すことは無理だ」とマラキは吐き捨

てた。

別の組に行けと言われ、喜び勇んで隣の教室をのぞくと、いかにも利発そうな少年たちの一団が声高に聖句を暗唱していたが、明らかに12歳以下の少年たちしかいない。しかし棚には、多くの巻き物（書物）があった。

サライよりやや年長らしい少年が遅れて部屋に入ってきた。暗い表情が少年を大人びて見せていたが、同じ年頃なのかもしれないとサライは思った。

皆が少年をエライジャと呼んだ。エライジャはサライを目にするのと、「おい、白いの」と言った。聞こえないふりをしようと思ったが、気がつけば相手に殴りかかっていた。

ふいをつかれた少年は転倒した。そこへ、狭い額のわりに鼻から下の長い若者が入って来た。なんの病を患ったのか、顔中にできものの痕があり、皮がめくれている。

エライジャは弾かれたように立ち上がった。

「ラビ・エリアシブ！」

少年たちは声をそろえて、若者に呼びかけた。エリアシブが首肯くと、少年らは背もたれのない粗末な長椅子に腰かけた。

説教者の常として、エリアシブはまずはじめに神への祈りを捧げ、聖句を口にした。サライのよく知っているものだった。

「つづきを エライジャ」暗唱するようにエリアシブは指名した。「モーセが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風をもつて海を退かせ、海を陸地とされ、水は分かれた。イスラエルの人々は海の中の乾いた地を行ったが、水は彼らの右と左に、垣とまった。（出エジプト14：21-22）。そして……」

そこから先は暗記していないようだった。「よろしい」

エリアシブは蠟を塗った板を持ち出すと、自分と少年が暗唱した文章をヘブライ語とアラム語の両方で記述し、少年たちに声を出して読むように命じた。

サライは従わなかった。

「読めないのか？」 エリアシブはサライに訊いた。

サライは立ち上がり、アラム語で言った。「読めますが、納得できません」

皆がサライを見上げた。

「聞いた話では、海の水には満ち引きがあつて、潮が引くと渡れる箇所ができるそうです。モーセはそこを渡つたのではないのでしょうか。彼は、シナイ半島の地形を熟知していたので、奇跡が可能になつたのではないかと思ひます」

いつも感じていた疑問を口にした。心とは裏腹の丁寧な口調で話すことに大きな抵抗があつたが、このさい止む終えなかつた。

「お前は今、なんと言つた！」

「陸地より広い海が、分かれるはずはないと言いました」

エリアシブはサライは問うた。「お前の親は、レビ人とはどういふ存在なのか、話さなかつたのか」

「わたしは、レビ人とソグド人との混血ですから、教育を受ける機会がなかつたのです」前もつて用意していた嘘をついた。

「レビ人とは、神殿で奉仕する部族ゆえに土地は与えられなかつたが、12の部族からの捧げ物で暮らすようにとモーセから定められているのだ。神殿さえない、このような時代ゆえに組織は弱体化しているが、われわれは誇りを持って祭司としての務めを果たすために幼少より学んでいる。そのわたしを屈辱するのかッ」

「モーセの五書をぜんぶ暗唱できなくとも、レビ人であれば祭司となれると聞いています。神の掟とはそのようなものなのですか」

若い説教者は怒りで首まで赤くした。

「余所者のお前は今後、説教師であるわたしに対し、口をきいてはならない」

「わたしは総督の許可を得ています。それに神の言葉を伝える者とは、一方的に話す者のことを言うのですか。そうでないなら、いつ、話せるようになるのです？」

「そのような時は永遠にこない」彼は言下に言った。

サライは重ねてエリアシブに問うた。「永遠とはどのくらいの時間をさしているのです?」

近隣の村々から上ってきたレビ人の少年たちにとって、疑問に思っていることを立ち上がって質問するサライは理解の範疇を越える存在だった。

説教師としては破格の若さのエリアシブを、サライは質問責めにした。神のご意志に誤りはないのか。誤りのない神がなぜ、誤りの多い人をつくったのか。神は、神の目に正しくないとせば、女子供もふくめて部族全員を殺すことをなぜ許すのか。それほど悪を憎む神はなぜ、ただちにサタンを滅ぼさないのか……。

エリアシブは言った。「サタンのごとく、愛ある神に疑問を呈しなくてはならない」

「不可解に感じることはいけないことなのですか」とサライは問う。「神は人が自ら考えることを、お許しならないのですか。ヤハウエとは心の狭いお方なのですね」

「神のみ名をみだりに口にしてはならないように、まちがった卑俗な知識で神を推し図ってはならない」

エリアシブはヨブの大いなる忍耐について説いた。とがめなく、廉直で、神を恐れ、悪から離れていた人、ヨブはおびただしい羊や牛を所有し、幸福に暮らしていた。しかしある時、悪魔は神に挑戦した。ヨブが神に仕えるのは、物質的な益のためであるとサタンは神を非難した。もし、神がそれらのものを奪い去ることをサタンに許すなら、ヨブはその忠誠の道から離れることになるというものであった。

神はこの挑戦を受け入れた。疑うことをしないヨブにさまざまの災いが降りかかった。富を失い、息子や娘たちを嵐によって殺され、自らも恐ろしい病いに倒れる。ヨブの皮膚は黒くなって剥がれ落ちた。一方、妻からは、神を呪って死ねとまで言われる。しかし、ヨブは、その唇をもって罪を犯すようなことをしなかった。神を讃えつづけた。にもかかわらず、ヨブへの厳しい試練は止まない。ヨブ

は死を願うようになる。神はその時、ヨブに答えられる。『わたしが地の基を置いたとき、あなたはどこにいたのか……』と。

ヨブは謙虚に認めた。わたしは取るにたりない者です。わたしの手をわたしは口に当てます、と。

エリアシブはおごそかに告げた。「信仰は義務だ。神のみ言葉を聞くものは、生きている限り、神の掟に忠実でなくてはならない。あらがう者には鉄槌がくだされるのだ」

その言葉はサライの耳に虚しく聞こえた。ヨブの物語を、彼自身の慰めに行っているとしか思えなかった。

サライはヨブ記の中の聖句を思い返す。『神はひとつの方法によって語られ、またふたつの方法によって語られるが、人はそれを悟らないのだ。人々が熟睡するとき、または床にまどろむとき、夢あるいは夜の幻のうちで、彼は人々の耳を開き、警告をもって彼らを恐れさせる。』（ヨブ33：14 - 16）』

その夜

「俺は、夢も夜の幻もけっして見ない」

警告を恐れてなるものかと、サライは己れに強く言い聞かせた。

31話

ヤマトはアシエラに命じられ、司令長官の宿営する草原に向かっていた。

シンドウは体調がよくないのか、屋敷にやって来なくなった。住んでいるところがわからないので訪ねることもできない。

心配でたまらなかった。

……アシエラも何も教えてくれないし、どうすればいいんだろう。

その時、白い衣をまとった少年たちの行列が遠目に見えた。先頭には、香と聖水を携えたザドクがいる。サライひとり、最後尾をとぼとぼ歩いている。彼らの仲間として受け入れられていないのだろう。彼らが、サライを汚れた者としてあつかっていることはヤマトにも想像がついた。

今朝早くに、ヤマトが馬に餌をやっていると、サライがふらりとやってきた。

「なんてことないんだけどさ」とサライは金色の髪をかきあげながら言った。「学びの家の連中の頭は、ひよっとして良くないんじゃないのかって思っわけよ」

「サライより頭のいいやつなんてめったにいないよ」

「理に合わない言葉の繰り返しによく飽きねーと感心するよ。あいつらには心に響く言葉と退屈な言葉の区別がないらしいんだ。俺が選り好みしすぎるのかなア」

ヤマトは笑った。

「何がおかしんだよ」

「ジャミールは、サライが立派な写字生になることを願ってると思っよ」

サライは照れ笑いを見せると、「あいつがお前に、俺を学びの家に入れてもらえるようと頼んだんだろ？」

「そっだよ」

「無理しなくたっていいのにさ」

「ジャミールはとても親切なんだ。僕もいつも感謝してるよ」

サライはむっとした表情になり、「お前さ、ごたいそんな連中の前に出ると、口のきき方もゴロツと変えて別人になるんだな。なんかこう、とってつけたようで自分が恥ずかしくならないか」

「恥ずかしいけど、シンドウがそうしろってきつく言うんだ。僕もそうするしかないなって近頃、思うしさ」

「なんでだよ。俺は、『僕』でも、『わたし』でもなく、俺って言うたいんだ。でなきゃあ、自分の心を偽ってる気がするんだ」

「わかるよ。僕だって、『わたし』って言った瞬間、誰が話してるのかって思うもの」

「だろ？ お前、まんざら馬鹿じゃないな。いくさのことにまやけに詳しいし」

「シンドウに習ったことを話ただけだよ。サライのように文字がスラスラ読めないし、書物を読んだわけじゃないから、なんにも知らないのと同じだよ」

サライはうんうんと頷くと、「ずっと学びたいと思ってたけど、道を間違えたような気がするんだ。おふくろの言うように、フェニキアあたりで修業して金細工職人にもなってたほうがよかったのかもしれないな」

「どうして？ サライはとっても頭がいいから、もっともつと学ぶほうがいいよ。僕はほら片目なもの。自分で自分を守るのさえたいへんだから役立つことを習っているんだ」

「今日も野っ原で剣術の稽古か」
ヤマトは首を横にし、「アシエラのお使いで、総督に手紙を届けるんだ」

「俺は、学びの家の連中と神殿跡に出かけるんだ。犠牲を捧げるんだとさ」

サライはいきなり跪くと、両手を高く上げた。「神よ、わたしをお救いください。大水が流れ来て、わたしの首にまで達しました。」

わたしは足がかりもない深い泥の中に沈みました。わたしは深い水に陥り、大水がわたしの流れ過ぎました。（詩編 69：1 - 2）

そして、ゆっくりと立ち上がり、馬小屋を出て行った。

あんなにぐずぐずしていたのは、神の家に詣でることが嫌だったせいなのかと、ヤマトは合点がいった。神の家といっても、かつての神殿とは比べものにならない建物だが、ユダヤ人はしばしば捧げ物をもって詣でているようだ。

ヤマトはサライに声をかけたいと思ったが、遅れないようにと言われているので急いで広場を横切った。

突然、天地が裂けるような雷鳴がひびき、頭上と言わず空一面を黒雲がおおった。

目をあげると、閃光が走った。

雨季の到来を告げる落雷だった。

ジャミールは、神の家と少し離れた場所に設けられた石造りの祭場での務めを終えると白い衣からを脱いで、バラ水のしずくを顔にふりかけ、うす紫の花模様の衣服に同じ色のベールをかぶって広場に向かった。

ハシムに会うためだった。

軍隊が広場から町の外に移ると、各地からやってきた巡礼や行商人で広場はひしめきあうようになった。近頃では連日、枝編みの籠を肩にかついだ女たちや皮を剥いだ家畜の肉を肩にぶらさげた男たちでこったがえしていた。売り手と買い手のあいだには珍しい形の壺や、土器の水差しや、陶器や、酒や、香料や、羊肉や乾物が山積みされていた。

これらの品は遠い異国から運ばれてきていた。胡瓜、林檎、ぶどう、杏、イチジクなど色とりどりの果物や野菜も所狭しと並んでいる。いつしか、時の経つを忘れていた。腹立ちも悔しさもどこかに消え、口にしたことのない食物の匂いをかぎながらひとつひとつ品物を手に取って眺めた。

「なんぞ、ええことでもあったんか」

ハシムが背中中にも立っていた。

「あるはずないわよッ」ジャミールは振り向きざまに怒鳴った。

「いきなり怒り出すやなんて、びっくりするやないか」

「だって……」

「巫女に化けるのも、嘘八百を並べたてんならんから難儀やる？」

ジャミールは首を振る。イシュタルの女神を祀る祭場での彼女の役目は至極、簡単だった。香を焚き、ヒラヒラした衣裳を身につけ、おごそかな声で、なん通りかある決まりきった宣託のひとつを思いつくままに発すればいいことになっている。聞いた側がなんとでも解釈できるような言葉の羅列だったので、すぐに覚えられた。

「嘘は慣れてるわ」

どこの民であれ、エルサレムに上ってくる貴族や金持ち連中は常にさらなる幸運を求めて、巫女に悩みごとの相談をし、お告げを聞ききたがる。そうして多額の金を寄進する。ジャミールは大祭司の私利私欲を満足させるために日々、意味のない言葉を吐き続ける。

「子供の世話もほどほどにせんとあかんでえ。麝香鹿の雄は繁殖期になるとええ匂いがするから命をとられる。ジャミールは女やから当てはまらんけど、深情けは命取りになる恐れがあるんやでえ」

「あの子のことなんて、これっぽっちも気にかけてないわ」

ジャミールの務めは別にあつた。相談内容を聞き取り、アシエラに伝えることだった。彼女はそれによって世間の動きを知り、商談に生かしていた。大祭司には金が入り、アシエラは情報を得る。

今となつてはアシエラがなんの目論みもなしに、自分とヤマトを庇護してくれたのではないとしれる。しかし、彼女の要求は度を越してきていた。あからさまになつてきたというほうが正確かもしれない。

「あたしき、ずーっとハシムに守ってもらつてたつてやつとわかつたの」

「気色わりいな。なにがあつたんや？」

「なんでもない」

ジャミールは広場の雑踏に目をそらした。

昼すぎ、瓜を食べていると、秘書官のスクラの訪問があつた。お告げの所望かと思つていたところ、トリタンタイクメスの親衛隊の一員として、ヤマトを司令長官の宿舎に出仕させることにしたと言ふ。

「アシエラ殿にも伝えてある」

「まだほんの子供です」

「もうすぐ13になると聞いた」

たしかにこの半年で、ヤマトは大きく成長した。背丈もジャミールを追い越し、彼女に見せる気遣いはまるで兄のようだった。

「お前は、大祭司の妾になることに決まった」

耳にした瞬間、おぞましさを常軌を逸しそうになった。

「お断わりよ！」

「バビロンの神殿に仕える巫女の多くは貴人の相手をしておる」

彼女たちは、神殿娼婦と呼ばれていた。

エズラは帰還後、巫女と称する娼婦らを神殿の跡地から一掃しようとした。大祭司をはじめ、祭司職のレビ人すべてに求めたが、彼らは為政者でない自分たちにその権限はないと言って譲らず放置されたままだ。

「大祭司ひとりを慰めればいいのだ」と秘書官は言った。「はしため風情のお前が大勢の男の相手をしなくともよいのは、ひと重にアシエラ殿のおかげだ。感謝せよ」

ジャミールは足元が崩れるような衝撃をうけた。

「断れば、ヤマトの命は保障しない」

アシエラは、ジャミールが屋敷にやってきた日から神殿娼婦にする魂胆だったのだ。アシエラの情報収集のやり方は監察官よりひどかった。

「蜘蛛は大風の吹く前に巣をたたむ、ゆーからな。ほんまは、トンズラしたいところやけど、ケバルから連絡がきたんや」

ジャミールは微かに頬をゆるめると、店先からぶどうの房を手にとった。

「イスラエルのあっちゃこっちゃから、戦士やゆー百姓どもが鎌や斧を手にもって、エルサレムに向かつてるちゆう噂や」

神の子と騒がれているハットシの周りには、兵士のような若者の集団が張りついていて、日毎にその数をふやしていた。

「神殿の奴らと地方の百姓とは手を結べん。ペルシア人の思うツボや。連中の腹の底はどっちにも適当にええ顔をして、どっちも潰す気いや」

「そつみたいね……」

頷きながら、手にしたぶどうをヤマトに食べさせたいとジャミール

ルは思う。

物売りからぶどうを買い、ケバルの待つ場所へ行こうとしたその時だった。神の怒りと信じられている雷鳴が天地を揺るがした。またたくうちに日は陰り、刺すような大粒の雨が音をたてて降ってきた。

「とうとうきやがったな」

「砂漠のにおいが恋しいわ」

「町にいてると頭が腐ってくるなあ」

2人は右と左に別れ、雨の中を駆けた。

満水の川の水を流したほどの雨が地上に降りそそぐと、石畳の街路という街路は濁流の川床となり、瓦礫の山を押し流した。

ヤマトは行く手をさえぎる鉄砲水に足をとられ、なんどもころんだ。目の前を学びの家の一群が通りかかった。

「ヤマトツ」サライの大きな声が聞こえた。

道を隔てたところにザドクもいる。

「こつちへ来いっ」と彼らは同時に怒鳴る。

壁づたいに立ち上がったヤマトは2人とは反対の方角へ足をとられた。目の端に、ナンナの肩かけが見えた。

泥水の流れに沿って小石の埋まった坂下の路地奥へと、頭に巻いた肩かけが走っていく。後を追って、壊れた建物の中に入っていくと、人陰が見えた。誰かがしきり戸を背に立っている。

「ケバル、あたしもう嫌なの」ジャミールの声だった。

「神殿の巫女とはよく考えついたな。契約の箱のありかも知れるかもな。なあ、ハシム」ベドウインの盗賊を、斧の一撃で倒した赤毛の男が、姉の肩かけをターバンにした小男に話しかけた。

「ジャミール、お前の母親も、ペルシアの高官の側女だった。妾は側女同様、妻に劣るが、一夜かぎりの女と違って、暮らしの面倒はみてもらえる」

「妾とはなあ」

「そろそろ決まった男のものになってもいい年頃だ」

「いやよ、いや、絶対にいやッ！」

ヤマトは、斧を自在に操るケバルの力量を値踏みした。素手では勝てない……。

「お前は、もしかして、ヤマトとかいう小僧に気があるんじゃないだろうな」

「あの子は、殺された弟の身代わりよ」

「そうや」ハシムの声が聞こえる。

「ついでに、エズラの下にいるエリアシブという奴にも取り入っておけ。奴は、大祭司の長子だ。いまは親父に逆らって、エズラにくつついてるような顔をしてるが、おそらく表向きのことだろう」

「親子を相手にしろっていうの」「ジャミールの口調は投げやりだった。

「大祭司は、エズラのかき集めた金を吸い上げる腹づもりでいる。知りたいのはその手口だ。お前が大祭司の妾になれば願ったり叶ったりだな」

近いうちに、大祭司の情報をもってこいと言って、ケバルは立ち去った。

ジャミールはその場にうずくまった。石のように動かない。ハシムが小声で慰めている。

「ケバルも、あーゆうしかないんや」

ヤマトは足音を忍ばせて建物の外へ出た。

その足で、大祭司のいる神の家にむかった。

渡りガラスの鳴き声が街路の乾いたことを告げる。激しい雨は止み、黒雲は消えていた。長身の青年と金髪の少年は前後になりながら、瓦礫の山が所々残っている広い通りを同じ方角に向かっていった。「ヤマトのやつ、どこへ消えたんだろ」サライは独り言のように言った。

「お前はなぜ、まっすぐ屋敷に帰らないんだ。言い付けられた仕事はないのか」

ザドクはなぜか感情を害している。学びの家の一行とはぐれ、サライと2人きりになったことがよほど腹立たしいようだ。

「若旦那様のお言い付けに従わず、申し訳ござえませんが、でも言えば、いいのか」

「お前は、召使として、屋敷にいることを忘れたのか」

「だから、俺だけ、神殿の跡地まで出かけて行って、祭壇に詣でられないのか」

「イスラエルの民じゃないだろ、お前は」

「学びの家に入ったってことは、イスラエルの民でなくたって、詣でることくらいしてもいいってことになんないのか」

「それは、律法に反する」

「わけわかんねーよ。詣でる、詣でないはともかくとして、祭壇に犠牲と供え物を捧げられるのはレビ人の祭司だけだつーつまり決まり自体がおかしかねえか。お前だってほんとは納得してないだろ？」

「黙れ！」ザドクは一喝した。「汚れを取りのぞくみそぎは、レビ人の祭司にしか許されていない」

「連中が脂臭いのは、捧げ物の肉を焼く前に横取りしてるからなんだぜ」サライは言いつのる。「律法にそむくことになんないのか？」

「なんでやつらだけが、特別なんだよ」

「ヤハウエがそう定められたのだ。五書に詳しいお前なら知ってい

るだろ」

「モーセは同じユダヤ人を殺せるレビ人しか信用できなかったってことだな。奴らはモーセ直属の殺戮部隊だ」

「お前には、主権者たる神の存在は理解できない」

「主権者に認められた者は、男も女も幼子もひとり残らず殺しても神に祝福されるのか？（申命2：34）」

「われわれ人間を創られた神は、われわれに何が必要なのかつぶさに知っておられる」

「神よ、どうか悪しき者を殺してください。血を流す者をわたしから離れさせてください。（詩編139：19）。俺は近ごろ、自分は何を読んできたんだってつくづく思うようになったよ。学びの家のおかげだな」

「天使の中でもっとも美しい者がサタンとなった。お前はサタンだな」

「俺は、サタンと呼ばれても、かまわない。疑問が説き明かされるならな」

黄ばんだ夕闇が迫っていた。

見慣れた一画の通りをまがったところで、彼らは路地から出てきたジャミールと行き会った。

3人とも衣服は濡れていたが、中でもジャミールがひどかった。ベールを通して顔色の悪さが目立つ。

「どうしたんだよ」

ジャミールはひと言も言葉を発しない。ただ胸に抱いたぶどうをひと粒も落とさないようにと両手を固く重ねている。

「具合が悪いのか」とザドクが訊いても、首を縦にも横にもふらない。

サライは、ジャミールに何かとんでもないことが起こったと察した。

「困ったことがあるのか」

「なんにもない」

屋敷に帰ったあとも、サライはジャミールのが気懸かりでならなかった。

ヤマトなら事情を何か知っているかもしれないと思いつち、中庭に面した西側の部屋に忍んで行った。

ジャミールのすすり泣く声が聞こえる。「ヤマト……あんたに嫌われたら生きてられないわ」

35話

ジャミールは食事の間中も、口をきかなかつた。アシエラが見咎めると、彼女はうすく笑つた。アシエラはジャミールの無言の理由に思い当つたようで目を逸らした。

「サライは、困つた子のようね」アシエラはジャミールを見ずに言つた。「他の子供たちより年長なのだから、しっかり学ぶように言いなさいよ、ジャミール。あなたの責任ですからね」

「サライにイスラエルの民の学問は向かないのです」とザドクは言つた。「明晰だが、頑固で困る」

ザドクは召使のささげ持つ器で手を洗いおえると、話があるとジャミールに言つた。

2人は屋上へ出た。

渴いた風が上質の衣を静かに洗い、ジャミールの頬をなぶつた。

「これ以上、サライを学びの家に置けない」「どうすればいいの」

「とにかく皆が困つている。来させないでほしい」

「ラビ・エズラがそう言つてるの?」

「いや　しかし、苦情はぜんぶ、俺にくる」

「そんなに追い出したいなら、学びの家の玄関から中に入れないようにしなさいよ。なんなら寄つてたかつて殴ればいいじゃない。そつよ、そうすればいいわ。神の子だと言つてる、ハットシを信奉している連中にやらせればいいのよ。わざわざ手を汚さなくても思い通りになるわ」

「俺は何も……」

「あなたたち親子はユダヤ人の中では並ぶことのない力をもっているのだから、人の運命をもてあそぶことなんて、なんでもないですよ」

ジャミールはザドクと話しているうちに、覚悟のようなものができていた。ハシムとケバルがいなければ、子供だった自分とはつく

の昔に死んでいただろう。死人が生きていると思えばどんなことも耐えられる。

「話にならない」とザドクは言い捨てて、階下へ下りて行った。

ジャミールは、エルサレムに戻ってきて1年と経っていなかったが、10年もたったような気がした。

砂漠のにおいがしないからだ。

翌朝、アシエラはいつにも増して、ジャミールのためにさまざまな衣装を用意した。

「どれもぴったり！ わたくしの若い頃のように」

ザトクは、色鮮やかな長衣に身をつつんだジャミールを目にする
と激怒した。

「母上は、ジャミールに何をさせようとなさっているのです！」

「とてもよく似合っているでしょ？」

「ジャミールは巫女などにむいていません」「では聞きますけど、
何になら向いていると思うのです？」

「どういうことですか？」

「あなたの妻には、どんなことがあってもなれないのですよ。あなたには、アロンの家系の娘がふさわしいのです」

ザドクは頬を赤くした。「母上……わたしは一生、妻など娶りません」

「この家の財産を誰が引き継ぐのです。まさか、すべてラビ・エズラに捧げるつもりではないでしょうね？ そんなことをするのなら即刻、この屋敷を焼き払いますよ」

「お気のすむようになさってください。わたしはただの一度たりとも財貨を望んだことはありません」

ジャミールは親子の口論をぼんやり眺めていた。

サライは、エズラの部屋に呼ばれ、しばらく書物庫で自習するようにと言われた。よろこんでラビのことばに従った。五書の暗唱には辟易していた。

「学問には忍耐がいります。ザドクについてそのことを学びなさい」
エズラの言葉を天の声ときいたが、意気揚揚と出かけて行った崩れた城門に面した建物の一室にある書物庫にはまったくといっていいほど人気がなかった。ザドクに学ぼうにも、本人はいつさい姿を見せなかった。

暇にあかして、大きな壺に放りこまれた書状の写しに目を通した。エズラの言葉をザドクが記録した公文書が大半だった。川向こうの州を統治する総督や秘書官に宛てたものだった。専門用語が多いので最初は読み通すのに苦労したが、単語を覚えるとかなり早く読めるようになった。

興味を持てる内容ではなかったが、ひたすら読むうちにあることに気づいた。エズラは預言や奇跡でイスラエル人の心をひとつに結びつけようとしているのではない、ということだった。神の律法を信ずることによって、民族の存続を図ろうとしているのだと。

彼はいくさや奇跡など望んでいない。

表向きは堅苦しい文面だが、内実は懇願にひとしかった。

『シリア州知事閣下へ、王と神のしもべである写字生エズラよりご挨拶を申しあげます。どうか、とこしえに平安であられますように。さてこの度、閣下より書状にてご下問のありました、神殿の再建によってエルサレムの王となるつもりなのかという一文に心底驚愕しました。近隣の部族長たちの讒言に閣下も耳を貸さぬわけにはいかず、直々にお尋ねくだすったものと存じますが、王の王たるアルタクセルクセス陛下のご厚情を裏切るような所業はわたしのもっとも厭うべき行いであるとだけ申し上げておきます。

祭司職のレビ人に貢ぎ物を規定したことで、陛下へ収めるべき税を民が滞納し、帝国に齒向かう備えとする企みではないかと疑いの様子でございますが、神に誓ってレビ人への貢ぎ物に手をつけることはございません。世襲所有地をもたぬ彼らは神殿に仕えることを神から定められた者たちでございます。もしこの者たちから収奪することがあれば、わたしの神への信仰は虚偽となりましょう。

わたしは未来永劫、神の言葉を書き記す写字生として働き続けたいと念じています。それがまた陛下のご聖恩に報いるただひとつの行いであると信じております。

閣下におかれまして、定めのない時に至るまでご健勝であられることをお祈り申し上げます」

このことを誰かに話したいとサライは思った。学びの家の中庭でザドクを見かけ、思わず声をかけた。

「ラビ・エズラは、本物の神の子かもしれないな」

「何を突然、言い出すのだ」

「思い違いをしてたかもしれないと思ってさ。ちょっと言ってみたかったんだ」

ザドクは、「少しはわかったか」と言った。

37話

雨は3日に一度に降るようになり、日毎に激しさを増していった。同時に、朝夕の寒さも増した。

ジャミールは不思議でならなかった。

ヤマトは司令長官の宿営地に行かないし、アシエラもそのことに触れない。

それだけではない。何日経っても、大祭司は何も言ってこなかった。アシエラはそのことも知らないようで毎日、衣裳選びに余念がない。何がどうなっているのかと思うが、アシエラに問いただしてそれがもとで大祭司の気が変わり、ジャミールを求めるようにでもなれば、ヤマトに何も告げず去らなくてはならない。

……どんなことがあっても、あの子のことだけは守りたい。

ジャミールは、つかの間かもしれない平安に戸惑いながらも沸き起こる疑念と不安を懸命に打ち消していた。

サライが書状を読みふけっていると、ザドクが書物庫にやってきた。「いくら言ったらわかるんだ！」

サライは首をすくめた。ザドクが何をさして言っているのか、わからなかったのではない。どうして自分の行いを、ザドクが逐一知っているのかが不思議だったのだ。

「お前をかばうにも限度というものがある」「ラビ・エズラも、そう言ってるなら考えないとなあ……」

前の日の午後のことだった。

サライはエズラの許可がおりて、しばらくぶりに中庭の見える教室に戻った。ちょうど少年たちがエリアシブの後について、レビ記を暗唱していたところだった。

皮膚病に関する記述だった。

祭司が病を見分けるさいの注意が詳しく述べられている。「皮膚に白い発疹があり、それが毛を白くし、生きた肉の赤膚がその発疹のなかにあれば、それはその肉の皮膚における慢性の皮膚病である」となどと子細に観察されている。「異常な脱毛が皮膚に紛れもなく広がるならば、祭司はその者をよく見るように。そこに黄色い毛が生えているなら、その者は汚れている」。また、「男で、その頭が異様に脱毛し、そこに黒い毛が生えている場合、それは禿である。その者は清い」とあり、禿と皮膚病のちがいが述べられている。

サライは声を上げて笑った。エリアシブに聞き咎められたので、いけないと思いつつも笑いながら暗唱した。

「その頭が上の正面のところまで禿てくるなら、それは額禿である。その者は清い」

エリアシブとエライジャをのぞいて、誰もが笑った。そこへ、エズラが入ってきた。

エリアシブはこの時とばかりに、サライの不真面目な態度をエズ

ラに言い立てたが、ラビは美しい灰色の目をなごませると、おだやかな声で言った。

「み言葉を暗唱して笑うことはいけません、思わず笑いがこぼれることもあるでしょう。許しておやりなさい」

思いがけないエズラの言葉にエリアシブは憤り、ラビが立ち去るやいなや、サライの手を鞭で打った。それを見て、エライジャが足を踏みならして喜んだ。サライはとっさにエリアシブから鞭を奪い取り、エライジャの顔面を打った。

サライはただちに教室を追い出された。ザドクはその時のことを責めている気配だ。

「真面目に勉学しろよ」

「邪魔なんかしてないよ」

「お前は教師であるエリアシブに対して敬意がないと言っている。

それだけじゃない。お前が教団にやってくるかぎり、エライジャは来ない、と言っているそうさ」

いつも暗い顔で教団にやってくる彼を、サライは通路でからかったことがある。煉瓦といっしょにその表面を窯で焼いてはどうかと言ったのだ。

ザドクは溜め息まじりに、「お前のように規律を乱すと、先生も俺もそうそう庇ってやれなくなる」

庇ってなどいらない、と心のうちで言った。エリアシブのように杓子定規に物事を考えられればと思うこともある。だが、可笑しいことは可笑しい。笑ってどこがわるい、とサライは思っている。

くる日もくる日も、たったひとりで書状の黙読。いったい、いつになったら真新しい羊皮紙に文字を写させてくれるのか。

「写字生になりたいだけなんだよ」

「写字生にもつとも必要とされる注意深さと忍耐力がお前には足りない。たとえアラム語の読み書きができて、原本から1文字足りとも逸脱してはならない作業にお前が適するとは思えない」

サライは肩を落とした。

読み書きの能力は古代イスラエルに広範に広がっていたが、当時の国際語であるアラム語を理解するイスラエル人は帰還者か、知的エリートに限られていた。サライにあつてはそれも役立たない。

「どうして、真剣に学ぼうとしないんだ」

返すことばに窮した。興味のあることにしか、意識を集中することができないのだ。

「エライジャに謝つてもかまわない。なんなら、家に行つてもいいぜ」

ザドクはお手上げの顔で言った。お前は真つ先にしなくてはいけないことに目をむけず、どうでもいいことにしか興味を示さないと。次の日、サライとザドクは崩れた城壁の外へ出かけた。ギデロンの谷の向こうに広がるオリーブ畑の一隅に、煉瓦職人のエライジャの働く工房があつた。

ザドクとサライは灌木の茂る谷を降りると、小麦畑を歩いた。

刈り入れはまだ先だが、麦の穂は青々と豊かになびいていた。たわなに実つたオリーブの紫色の実を摘む人々の間近では、草をはむ羊の群れを追う子供や犬が野山を駆けるように駆けていた。

まだまだ多くの人々がエルサレム市内には住まず、周辺の田畑や牧草地に掘つ立て小屋を建てて暮らしていた。

エライジャもそのひとりのようにだった。

小高い丘の薄暗い作業場にエライジャはいた。

故郷で、サライは人々に入れられなかったが、糧を得るために働くことはなかった。

作業場のある丘にのぼると、牧草地が見渡せる。なすこともなく野山を散策した日々のがつい昨日の事のようにサライの脳裏によみがえつた。

数人の男にまじつて、エライジャは立ち働いていた。

「エライジャ」

ザドクがためらいがちに声をかけると、せわしげに鼻をすする年嵩の男が、奥に向かって目配せをした。エライジャは爪にくいこん

だ粘土を粗布で拭いながら外へ出てきた。

のろのろと歩をはこぶ、妙に落着き払った仕草にサライはいつもの馴染めないものを感じた。

「貧乏を、笑いにきたのか」

エライジヤの突然の言いがかりに、ザドクは戸惑いを隠せないようにうた。

「謝りにきた」とザドクは、サライにかわって言った。

「謝る？ 誰が？」

エライジヤはしかめっ面でサライを見た。「一応、俺だ」胸を張って言った。

「お前がか？」

エライジヤは、どうやって謝るのだと問い詰めた。

「詫びのかわりに、煉瓦造りをやらせてみないか？」

「何を言いだすんだ」ザドクは気色ばんだ。「お前にはできない」とエライジヤは言った。

「やってみないとわからねーじゃん」

ちようどそこへ、下働きをしているエライジヤの妹、アイシャが顔を見せた。

身なりは粗末だが、愁いをふくんだ瞳は気品があった。田畑を耕したり、家畜の世話をしながら育ったのではないと察させられた。

ザドクとは顔見知りの様子で彼に気づくと、彼女は恥じらうように薄いまぶたを伏せた。

エライジヤがサライの気紛れを話すと、アイシャはかすかに首肯いて、作業場の奥へ消えた。

しばらくすると、作業場の親方がアイシャと連れ立って戻ってきた。親方はザドクを目にすると歯を剥いて笑った。「お屋敷のお坊つちやまがわざわざなんのご用でいらしたんですかい？ 奥様に叱られねえですか」

「いや、わたしは教団の生徒だ」

「そついうことにおきやしょう」

親方は笑いを噛み殺しながらエライジャの隣に場所をあけてくれた。

ザドクははじめ、「お前ひとりでやれ」と突き放すように言ったが、サライが粘土に手をつけると作業場に入ってきた。

2人はエライジャやアイシャのする手作業を真似たが、たやすい作業ではなかった。

麦藁と砂をこね合わせた粘土を木枠に流しこみ、へらで余分な粘土をとりのぞく。そのあと粘土を木枠から外し、雨の合間をぬい、吹きさらしの平原にしつらえた板の棚にのせ、天日で乾燥させる。それがすむと、窯に運び熱を加え出来上がる。工程は簡単だが、四隅をのこさず粘土を木枠に埋める作業は骨が折れた。なんどやってもきつちり長方形にならない。ザドクは見る間に上達したがサライは半日かかっても、ひとつとして満足にできなかった。

「口ほどにもないな」

エライジャは乾いた煉瓦を積み上げながら言った。サライもザドクも衣が泥だらけになっていた。

エライジャはじめて笑顔を見せた。「頭の形が変わるのじゃないかと思うほど親方になぐられて覚えたんだ。そのかわり、教団に行かせてもらっている」

彼は教団で見るほど陰険ではなかった。そればかりか、「ヒンノムの谷におもしろい話をする男がきてるそうだから、いっしょ行こう」と誘う。

小屋の外に出ると、牧草のしげる低い丘は、日没とともにくすみはじめていた。

「いまから行くのか？」ザドクは気乗りのしない声で訊いた。

「嫌なのか？」エライジャは侮る口調で言った。

いつもの彼だった。ザドクとサライは顔を見合わせた。南の谷、ヒンノムは別名“ゲヘナ”とも呼ばれ、イスラエルの暗黒時代には異教の神モレクの生け贄に子供が供せられたと言われている。今では、罪人の死体を捨てる埋葬所になっていた。

サライはナバテア人のハーヌルを思い出した。彼を殺し、そのまま逃げたが、もしかすると、ハーヌルはそこに捨てられたかもしれない。そう思うと胸がわるくなつたが、怯えているとエライジャに勘繰られたくなかつた。ザドクも同じ考えなのか、2人は同時に首肯していた。

アイシヤは引き止めたが、エライジャは吐き捨てた。「墓場も、たまにはいいもんだ」

彼女は助けを求めるようにザドクを見あげた。

ザドクは悪いことでもしたように言葉に詰まっていた。それから、ザドクは小屋の中にいる親方に礼を言つて、帰ることを告げた。親方は手間賃のかわりのつもりだろう、ひと握りほどの小麦を持って出てきた。ザドクはそれをアイシヤに手渡した。

アイシヤは受けとると、ありがとうと小さく言った。

彼女の澄んだ瞳は濡れていた。

ザドクはサライをうながし、足早にその場を離れるとエライジャの後について行った。エライジャは気持がはやるのか、跳びはねるような格好で草地を先に立って歩いた。

何かに取り憑かれたようなエライジャを、サライは背後から眺めた。

……こいつ、相当いかれてるなあ。

日没から2つ時半（2時間半）たっていた。

エライジャはギボンの泉までくると、清水を両手ですくい、後からくるサライとザドクを見てニタニタ笑つた。目のふちが赤らんでいる。さっきまでの暗い顔つきとは打って変わったエライジャの表情にサライは言い知れぬ不快を感じた。

城壁跡に沿い、朽ち果てたダビデの埋葬所をすぎると、瓦礫にしか見えない泉の門がある。ザドクの屋敷はここからそう遠くはない。帰ると言えばいいことなのだが、サライやエライジャより年長のザドクは口をつぐんだままだ。

3人は、王の園を通り灰の山の門からヒンノムの谷に降りた。

エライジヤは丸石で密封された罪人の墓を指差した。「いつかあそこへ行くがかまやしないさ。羊飼いや煉瓦職人になって一生をおわるくらいなら切り刻まれたほうがいい」

サライは気まずい思いでエライジヤの言葉を聞いた。それはサライの内心の声でもあったからだ。しかし、言葉にして声に出すと、なんとおぞましく聞こえるのだろうか。

碑銘もない無縁墓地をさらに行くとき、檜の木の森があり、エライジヤを先頭に森のはずれの崖下を滑り降りた。

大きな墓穴がぽっかりと口を開けていた。

中から男たちの低い声が聞こえる。

エライジヤは目で、サライとザドクを促した。

ザドクはサライを振りかえると、首肯してみせた。

入り口には、戸板のかわりに粗布が掛けてあった。

中に入ると、洞窟の内部は男たちの熱気で蒸せかえるようだった。ザドクの緊張する様子がサライにも伝わる。目をこらすと、火取り皿のゆらめく炎が真ん中に突立っている男の顔を浮き上がらせた。「行政長官だと言ってえらそうにふんぞりかえってはいるが、やつに何ができる？ 何もできん。異国の女を娶ってはならぬだと？ 笑わせるな。律法など屁の突っ張りにもならん！ 神に祈れば、穀物を挽き、家畜の面倒をみる女をあてがってくれるというのか。とどのつまり、やつの言いなりになったのは独り身の者か、偏屈の門番だけだ」

男は無言を言わせぬ口調で言い散らすと、まなじりをあげた。

「ひとたび旱魃があればわたしたちは飢える。やつという神は助けてくれるか？ いいや、わたしたちを救えるのは、川向こうの総督のお慈悲だけだ」

聴衆のひとりが野次った。

「お前のいう総督は、ラビ・エズラよりえらいのか」

「エズラどころか王よりえらい！ 総督はペルシヤの王のように臆病ではないぞ。わしらに御託をならべる行政長官様に一族の平安を

祈ってもらわなくては、父親と兄を殺した王は、寝床にてんてんとして夜もおちおち眠れぬそうだ」

男は舐めるように人々を見回した。サライの前で、男の視線が止まった。

「噂の白人奴隷もきてるぞ。大理石のような肌の色が、行政長官様のお気にいりらしいぜ」

周囲の目が、うしろに向いた。出口に近い岩の壁にもたれていたザドクはとっさに上体をずらし、サライの前に立った。

男はせせら笑いながら、「あるがままにこの世を生きるだけでは罪科になるというのか。現状に満足しては神は怒るのか。神のために戦ったり、祈ったり、賛美したりなどと、わしは御免こうむる。この世の終わりがきて始末がつくまで、いまの暮らしむきを余所者にふり回されるのは真つ平だ。そうだろ？ 何よりもやつは、ここで生まれた人間じゃねえからな」

痩けた頬と窪んだ眼は男を狡猾に見せた。最初の人間アダムの妻イブをたぶらかした蛇のような男だと思った。

暗闇に控えていた老人がふいに立ち上がり、黒衣の姿を現した。

「あの男は」「ザドクは声を上げた。ヘブロンの会堂で出会った老祭司だった。

「エズラは王の密偵だ！」と老祭司は叫んだ。

聴衆からはいまにも爆発しそうな感情の嵐が感じられた。

「ここを出よう」とザドクは囁いた。

「最後まで、話をきこう」と言っただち上がった若い男がいた。

こんどはサライが驚きの声をあげた。母を死に追いやった収税人だった。

「あいつはッ！」

飛び出そうとするサライの腕を、ザドクはつかむとエライジヤを急かし、洞窟を出た。エライジヤは突然興奮した口調で言いつつ、「あの男の言う通りだ。先生は俺たちに律法を唱えさせるだけだ。肝心なことは何もやらせてくれない」

自分の思っている不満を人から聞くと、感情が倍增する時とそうでない時がある。

サライはなんとか感情を鎮めた。

ザドクは何気ない口振りで、「あの男は、どうして俺たちのことを知っているんだ？」

エライジヤは記憶をさぐるような顔つきになり、演説をしていた男のことを言った。「あいつは奴隷商人だ」

「ユダヤ人か？」

「わからん。イスラエルの女をペルシアの高官に売っているという噂だ」とエライジヤは言った。「ユダヤ人だと言ってるが、ほんとうはアンモン人らしいぜ」

母親がアンモン人なので、サライは自分と男とは同族になると思つた。モーセはその書の中で、アンモン人とモアブ人とは、定めのない時まで神の会衆入つてはならないとしている。律法書への違和感はもしかすると、自分がアンモン人の血を引くせいかもしれない。そう思うと、男の口走る汚れた言葉は自分の発する言葉となる。すでに人ひとりを殺めている。それが何人になっても、神の怒りに変わりはない。

「頼みになる男だ」と言うエライジヤをザドクは怪しんだ。

「あの男と何か約束でもしたのか」

エライジヤは、立ち止まるザドクの胸を押し退けると、青黒い顔になつた。

「律法は俺たちに好運をもたらさない。ちがうか！ 神は俺たち貧しい者を罰するばかりだ。神に選ばれた民なら、なぜ、日々の労苦から解き放ってくれないのだ。もううんざりだ」

エライジヤは勝ち誇つたように胸をそらした。眉をつり、話すべきことは全部言つたという顔つきだった。白い月明かりにもそれは見てとれた。

サライとザドクは森をぬけ、馬の門の手前でエライジヤと別れた。「アイシヤとエライジヤは、バビロンからやってきてすぐに両親が

亡くなったのだ……」彼らきょうだいのお話をするザドクの眼差しは哀しげだった。「俺だって、あいつのような身の上になると、どうなるか……。自分が恵まれていることが恥ずかしいと思える時がある」

その夜は、満月が照り輝いていたが、焼け崩れた門をくぐると、どろ煉瓦の家々をめぐる狭い路地は闇に支配されていた。

「お前も、エライジャとおなじ考えなんだろ？」とザドクが言った。サライは何かを探るように足元を見つめた。エズラが、バビロンにいるモデルカイという人物に宛てた書状を思い出していた。

『囚われ人を解放したペルシャの王も掠奪を繰り返したバビロンの王となんら変わるところはありません。なぜなら彼らはわれわれから貪ることしか考えていないからです。この惨めな状態からわれわれはどうすれば脱することができるのでしょうか。鋼のような強い信念をわたしは保ち続けられるかどうかと耐えず自らに問うています』

エズラでさえ、己れの無力を嘆いている。「疑問だらけだが、律法があつたから、ここにこうしている気がするよ」

サライが答えたその時、

「坊やたち、どこへ行くの？」

髪が乱れた女に声をかけられ、2人は立ち止まった。女はザドクのそばに身をすり寄せた。ザドクはサライの腕をとると、女の前を足早に通り返すようにした。

「エズラにいつとくれ。弟子に金を払わせろってね。ペルシャのご機嫌とりの、ろくでなし野郎にさ」

捨て台詞を吐いて、女が離れていったそのあとに、ザドクは言った。

「あの女は、門番の妻だったんだ」

「学びの家のか？」

ザドクは苦々しげに呟いた。「先生が神のみ言葉を聞くことは事実だが、のぞみのままに金銀を降らせるわけじゃない。だから真意があつたわらない」

「先生は、困っておられるのか？」

「たぶんな。金のあるなしの基準で言うなら、俺のおふくろよりも無力だ」ザドクは自嘲気味に言った。「先生は神のご意思を人々に知らしめようと努力しているのだが、それがかならずしも効をそうしていない」

「お前んちは、何を生業にしているんだ？」「なんだと思う？」

「泥棒か？」

「エライジャにももう少し、お前のような呑気さがあればいいんだが……」

屋敷に戻ると、サライとザドクはアシエラにひどく叱られた。馬の世話をしなかったせいかと思っただがそうではなかった。日が暮れてから出歩いては危険だと言うのだ。ペルシア軍の守備隊がいても近ごろのエルサレムは物盗りがひんばんに横行し、豊かな人々の暮らしを脅かしていると言う。

「会衆から離れた人たちもいるのですよ」とアシエラは言う。

捕われ人だった人々の持ち帰った金銀を目当てに、各地からいかがわしい連中が集まり、街中をうろついているらしい。洞窟にいた収税人も仲間のひとりにちがいない。サライは今さらながらエズラの苦衷に思いをきたした。

異国の女を夫のもとから去らせるだけではエルサレムに安らかな日々は訪れない。イスラエル人のある者は金のために同胞を痛めつけ、またある者は貧苦に喘いでいる。

聖なる方の真意は図りしれないと、エズラは教え諭すけれど、真意も義も目にとどかない。それは誰もが感じていた。

「大雨の日の大会を覚えている？」とアシエラは言った。「ペルシヤからの帰還者をむりやり神殿跡に呼び集めたでしょ」

「神の燃える怒りを沈めるためです」ザドクは反駁した。

「脅しているように見えたわ」

「神に背いた彼らに非があるのです」

前の年のことだった。

エズラの名において流刑地のバビロンから帰還した者はみな、キスレウの月の20日（12月の初旬）にエルサレムの神の家に集合するようにとイスラエル全土に御触れが出た。命令に従わない者は会衆から取り分けられ、すべての財産を没収するという内容だった。「従った人々のほうがずっと多かった」

「お金を取り上げられては大変だからよ」

エリアシブとその仲間達は強盗と同じだとアシエラは言う。

ニサンの月の1日（3月頃）までに、異国の妻をめぐって住まわせていた男たちを調べ出し、その者が加わっている会衆の長老にそのむねを勧告せよ、とエリアシブはザドクにも命じた。

「あなただって、ほんとうは不満だったでしょ？」

「母上は、先生に敵対するのですか」

「あの方は形のないものに莫大なお金を必要としています。もちろん、私服を肥やす方ではないことはよく存じています。でも、そう思わない人も世間には大勢いるのですよ」

「神殿を形のないものとおっしゃるのですか」

「神殿は消えても、エルサレムは滅んでないわ。ろくでもない連中に大きな態度をされなくたって、そうじゃなくて？ 神殿の建設の名目で、わたくしたちから財貨を奪おうとしているとしか受け取れないの」

アシエラの言う通り、エルサレムは物を売り買いすることにおいてなら、かつてないほどに繁栄していた。あらゆる国の部族がここを拠点に集まり、共存協栄していた。そのことが事実であることは疑いようがなかった。しかし地方では起こりえないことがここでは日常茶飯事に起きていた。

39話

ケバルはなぜ、ジャミールを自由にさせてやってほしいと言う少年の言葉に耳を傾けたのか自分でもわからない。

「大祭司はご承諾くださいました」

「どうやって……」

ヤマトが、祭壇に額突く大祭司の胸あてを切り裂き、鈴なりについている宝石を床に飛ばしたと知り、驚愕した。神を恐れぬ敵に遭遇したことがなかったのだ。

「誰かに命令されたのか」

「ジャミールには恩義があります」

思わず、お前に従う時がくるかもしれないと口走った。

ヤマトには、権力や黄金を求める者たちが発する邪悪な臭いがまったくなかった。

サライはエズラから各地の会堂へ送る書状をしたためるザドクを手伝うように言われ、はじめて書記室に入った。

ザドクはいつ訓練をうけたのかと思うほどスラスラとヘブライ語とアラム語とギリシア語で羊皮紙に文字を綴った。

ペルシアからシリヤ、アラビアにかけての共通語であるアラム語はべつとして、ギリシア語の読み書きのできる者はエルサレムにおいてそう多くない。

遠い海の彼方の言葉だった。この地に住む多数の者にとっては縁もゆかりもないといってよかった。

彼の手元を見た。

ザドクは口の端で微笑いながら、「エジプトで仕入れた穀物をシリアやギリシアに売り、ふたつの国からはユダヤ人の好きな黄金や宝石、アラビアからは黄金より価値のある乳香を仕入れるんだ」

貿易には勘定書がある。領収書や覚え書きもいる。ザドクはアシエラの手助けをさせられるうちに各国の文字を正確に書くことに別段不自由はなくなったと言う。

「信仰なんて、証拠もないのに正しいと喚く馬鹿な連中のすることだと、辛辣な母上は思ってるのさ」

「なんで教団に？」

「商いは性にあわない」

「おふくろさんは見過ごしてくれんのか」

「そのうちに気がかわると思うてるのかな。乳母を“中の谷”へ追っばらったところを見ると、そうでもないな」ザドクは目を細めると、「子供の頃、乳母を本当の母だと思っていた。今も、母上には内緒でときどき訪ねることがあるんだ。母上は聡明すぎてかなわん」

「おぼっちゃまにも苦勞があるんだな」

サライは、はじめてザドクに親しみを感じた。

翌くる日、サライはザドクのいる書記室に出かけた。母を売った
収税人について知っていることがあれば聞き出したかったのだ。

「洞窟の中にいたひよる長い顔の男の居所を知らないか」

はじめ、ザドクは誰のことをさして言ってるのか、わからない様
子だったが、サライが収税人の名を言うと、ああと頷いた。

「ウリのことか。彼はつい最近、お前と同じ南部からやってきたと
聞いているが、どうかしたのか」

「どこに住んでいるんだ？」

「それは知らないが、なんでもここで書士の仕事を始めるらしい。
ここに住む外国人で文字の書ける人間は少ないから商売になるらし
い」

その時、ラビ・エズラが書記室に入ってきた。エズラはサライを
目にする、穏やかな口調で言った。「時を無駄にしているのです
か。あなたの年齢で、ザドクに負けない写字生となるには考える以
上に根気がいりますよ」

「罪人でもなれるんでしょ？」

サライは幼い頃、集会所で盗み見た巻き物の巻末に、“罪人メナ
ハム”と記してあったと話した。

エズラは微笑みながら、写字生は誰でも巻末にそう記すのだと教
えてくれた。

「それで写字生になりたいと思ったのか」とザドクは呆れた声で言
った。「儀礼的に書いてあるだけだ」

「人は神に忠実であるべきですが、罪のない者などいませんからね」

サライは落胆した。「系譜の正しくない者も写字生になれるとい
う意味じゃないのか」エズラは慰めるように、「モーセのしたた
めた律法書は創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五
巻からなっています」と言った。

「わかっているよ、そんなことくらい」

「すべて神のみ言葉を写しとったものですよ。したがって、一字一
句たりとも誤記があってはならないのです」

「やらせてもくれないうちから、言われてもなア」

「写本を作成した後は、部分部分で単語数を確認し、巻毎に文字数を確認しなければなりません。ちなみに創世記は、7万8064文字あります」

「誰が数えたかしらないが、暇なやつがいるもんだな」

「さらにヘブライ語の場合はアルファベットのアレフが何個、ベータが何個とすべてのアルファベットの数を確認さえしています」

「マジかよ」

「あなたにはあなたの為すべきことがあるはずです。神は、人それぞれに賜物をお与えになられていますからね。ひとりとして、同じではないのです」

サライは遠くを見るような眼差しになった。「なんて言えばいいのかなあ…。俺は、俺自身が気に入った聖句を、誰かに伝えるために書き写したいんだ」

「それは、写字生の務めではありません。感情ではなく、事実を正確に伝えることが写字生には何よりも求められます」

「自分勝手に解釈して、都合のいいように書き写すと、邪悪な罪人ってことになるんだろうな……。俺に合う書物はこの世のどこにもないってことか」

「自分に都合のいい学問なんて、あるわけないだろ」とザドクは言った。「お前は、学問そのものではなく、学問をしているまやかしの自分にあこがれてるだけなんだ」

悔しいが言い当てられている気がした。

その日の午後、サライはザドクからギリシア語の基本形を習った。「あなたの求めるものが、ギリシア語を通して得られるかもしれないよ」とエズラが助言してくれたせいだ。

「ギリシア語とヘブライ語はそんなに違っているのか」

「イスラエル人にとって、神は唯一無二の存在だが、ギリシア人にとって、神はあまたいるのだ。美の神、酒の神、伝令の神というふうにな」

「ペルシア人のアフラマズタやカナン人の信じるバアルの神とも違うのか」

「ギリシアの神々は、神というより人間に近い。愛し、憎み、戦い、呪う」

「憎み、戦うことはヤハウエも同じじゃないか」

ザドクは慚然とした。「違いをひと言で説明することは不可能だ。ギリシア語を学び、自分で読んでみることだな」

「お前は読んだのか」

「多少な」

「おもしろいのか」

ザドクは困った顔になった。「だから読まないようにしている。夢中になると、勉強がおろそかになるからな」

サライは頭をかしげた。

門番が入ってきた。トリタンタイクメスが使いの者をよこしたと告げる。

ザドクは机上の書類を片づけると、立ち上がった。

使者は、彼らの前で、胸に手を当て口上を述べた。「司令長官閣下はこのたび、白人奴隷サライに目通りを許すとおっしゃられています」

「会いたいなんて、俺はこれっぽっちも言っただけ。ラビ・エズラか、ラビ・エリアシブの間違いだろ？」

ザドクが咳払いをし、サライにむかって目配せをした。しかし、サライは、

「ラビ・エリアシブにヨブ記を語らせたなら、閣下の退屈もふつとぶと思うけどなア」

「閣下は、お前のために着替えの衣服まで用意してくださっている」と使者は言った。

「いらねーって！」

使者の顔面が青くなる。連れ帰らないと困ったことになるようだ。「なんだよ？ その顔は。俺はいまお勉強に忙しいんだよ」

ザドクはサライの袖を引っ張り、耳のそばで囁いた。「ペルシヤ王から任命されている司令長官に逆らえる者はエルサレムにはいない」

「なんのために呼ばれてんのか、皆目わかんねーじゃん。首を刎ねられてからじゃ、文句のひとつも言えないだろ？ 俺、やっぱやめとくわ」

「客人として、お迎えにあがりました」使者は必死の形相で言った。「わりいな。司令長官様の客にご招待いただけるような身分じゃないんだ。閣下には、煮ても焼いても食えない野郎だったって伝えてくれよ」

サライは腕組みをし、椅子に座った。

正装したエズラが突然、書記室に入ってきた。

「ともに行きましょう」

ザドクがほつとした表情で、「わたしもまいります」

「いえ、感情の起伏は激しい方ですが、無茶はしない」とエズラは言った。

「きっぱり断ったのに、なんでお節介するんだよ……」

「学びの家で学ぶ以上、これは、あなたに課せられた義務だと思ってください」

義務？ 正式の弟子でもないのに義務だけはあるのかとエズラに問いかけたかったが、彼らを困らせることは本意ではなかった。

エズラにともなわれたサライは司令長官から使わされた馬に乗り、教団のさらに北に位置する要塞に出向いた。エルサレムで唯一、破壊をまぬがれた場所である。

草原の宿営地に向かうとばかり思っていたサライは強い警戒心で頬が強ばった。

「なんだってんだ。まさか、額帯の地図のことじゃないだろうな……」

「何をぶつぶつ言っているのですか」

「せつかく今日まで生き延びたのに、つまんねーことで命を落とす
たくないと思つてさ」「安心なさい。わたしがついてます」

「ロトの嫁みたいに、塩の柱にされてからじゃ、遅いんだよ……」

「聞こえないように呟いたつもりだったが、エズラはふりむくと、
司令長官の処罰と、われわれの愛ある神のなざる裁きとは大きく
異なっています。司令長官はわたしたちの首を剣で刎ねられても、
塩の柱に変える力はありません」

「跳ね橋のかかった門を入ると、ペルシア兵の守備部隊が出入口に
集結していた。」

「武器庫と思われる建物の前では、いかめしい顔つきの兵士たちが
戦闘訓練を繰り返し行なっていた。」

「エズラはふり返ると、いまいちど安心するようにと言った。」

「彼らは、帰還したわたしたちを守るためにここにいるのですよ」

「俺は、あんたみたいに呑気に考えられないんだよ」

「2人を出迎えたのは、武装した兵士ではなく、秘書官のスクラだ
った。」

「あなたもご一緒ですか」

「秘書官は、エズラとサライを見比べると、目を細めた。」

「わたしの護衛役を務めていた部下が何を思ったのか、自害しまし
てね」

「ヤマトと試合をした兵士のことだと、すぐにわかった。」

「理由がふるっているんです。司令長官が親衛隊の一員としてヤマ
トに出仕するように命じたところ、そやつは、ここで顔を合わす恥
辱に耐えられないと言って、いきなり頸動脈をかき切ったのです。
剣をたのんで生きる者の為すことは理解に苦しみます。ひと太刀も
浴びせずに負けた夜に死なずに、今頃になって死ぬとは、愚かとし
か言いようがありません」

「司令長官はその者の死を憐れまれ、ヤマトへの出仕要請を取り下
げられたとうかがっています」

「それで、お鉢がその者に回ったようですよ。物好きにも程度があ

ると思いませんか。たかが少年ひとり、白人奴隷の衣裳まで見繕うとは」

「衣なら、たつたいま返すよ！」

思わず口をはさむサライを、「静かに」とエズラは制した。

「衣などいらぬ仕事だ」と秘書官は言った。ペルシアの高官の盾もちになりたいと広言していたことなど、サライはすっかり忘れていた。

エズラと少年は、皮肉な笑みを浮かべた秘書官について広場を横切り、要塞の玄関ともいえる石積みのお壁の中側に入った。

真昼であつたが、建物をめぐる回廊は松明がなくては数歩先も見えない。戦いを想定して建てられていることがわかる。

兵士のふくらツパの音が耳元で鳴った。サライが驚きの声を発すると、エズラは立ち止まり、「歓迎してくだつているのだ」と言った。

彼らは、北のユダ国の最後の王ゼデキヤが君臨したであろう広間に通された。

要塞の中心部に王の一室が設けられていた。古来より、東西南北のうち、北は聖なる方角とされている。不動の北斗七星が位置しているからだ。

トリタンタイクメスは戦闘用のひざ丈までの衣をまとい、玉座に座していた。足下には、インド犬がながながと寝そべっている。端正な容姿の司令長官には微塵の卑しさもなく、富の徴収人と思えない風格があつた。

「わたしの贈り物は、気に入ってもらえたかな」

サライは使者の持参した裾の長い、飾りのある重い衣装を身につけていた。

「高貴な風貌の者にはそれらしい装いが必要だとかねがね感じていた。これならバビロンの宮廷に出しても恥ずかしくない」

トリタンタイクメスは、ひと回りするように指で指図した。サライは従つた。

「この者が着飾り、神殿跡の天幕に出入りすれば押すな、押すなの盛況となるうな。なぜ、人集めにつかわぬ」

「モーセの五書を満足に暗唱できない未熟者ですので、人目にさらすことはどうかと……」

「このわたしが許す」

「神殿の再建がまず第一かと、陛下からもそのように申しつかつております」

「陛下か……都合のよい隠れ蓑だな」

トリタンタイクメスは微笑むと、「この者が気に入った。明日から、こちらへ使わすように」

エズラはおうむ返しに、「こちらで何を？」

「そなたが不要ならば、わたしのほうで取り立てようと思う」

「この者はレビ人でございます。エルサレムの神殿に楽士として仕えさせるために、バビロンより連れてまいりました」

「わたしに虚偽は通用せぬ！」トリタンタイクメスの声はあたりをゆるがした。「学びの家への入学さえも拒否しておいて、いまさらレビ人だと申すのか！

しかもバビロンから連れ帰っただと。この者が、バビロンにいればとつくにわたしの知るところとなっていた。お前たちユダヤ人には、美を解する心など微塵もないのだからな」

「わたしどもの神は、美しき少年を愛でることを固く禁じております」

トリタンタイクメスの形相が一変した。「行政長官であるそなたが、くだらぬことにかまけておるうちに、ここの情勢は悪くなる一方だ。物乞いばかりがふえて、帝国の一翼を担う気概をもつユダヤ人の若者など皆無だ。異国の女を夫のもとから去らせるばかりがそなたの役目ではなかるう」

エズラは身を低くした。「閣下のご不興をかいましましたことは深くお詫び申し上げます。しかしながら、わたしの大きなお役目のひとつとして、陛下のためのご祈願があります。アルタクセルクセス大

王のとしえの平安を日毎夜毎、わが神に祈っております」

トリタンタイクメスは嘆息すると、「目上の者の気持ちに心を砕くことも部下としての務めだとは思わぬか。この者を側近の1人に加えたいと言っておるのだ」

エズラは即座に言った。「仰せには従いかねます」

「なんと申した！」

「この者には、イスラエルの民としての務めがございます」

「エズラ、お前は太祭司のいる前では、宝石のついた祭服を着られないそうだな。囚われ人だったお前の力など高がしれている」

トリタンタイクメスは玉座から立ち上がり、部下の兵士に命じ、1人の男を呼び入れた。収税人のウリだった。サライはようやく司令長官の意図するところが読めた。気に入ったから側近に取り立てるといのは口実に過ぎない。黄金のありかが知りたいだけなのだ。「その者を拷問にかけてもいいのだぞ」

「なんの罪状でございましょう？」

「この男の証言によると、その者の母親はアンモン人で娼館の女主人だったということだ。多くの罪を犯し、ユダヤ人から石打ちの刑に処せられたときいた」

「それで？」とエズラは言った。

「貴様の話が虚偽である証しだと言ってるのだ！」

「わたしから、その男に訊ねてもよろしいでしょうか」

「許可する」と言つて、司令長官は浮かした腰を玉座にもどした。一旦、立ち上がった犬がまた座った。

エズラはウリに言った。「わたしはあなたと同じ、ヤコブの家の者です。わが神は闇を照らされます。滅びの日には、どのような悪事も神のみにあつては明らかとなります。承知していますか」

ウリは平伏し、エズラの衣服の裾に口づけた。「ラビ・エズラ、どうか、わたしを祝福してください」

「あなたは偽りの証言をしましたね？」

「お許しを、お許しを」

エズラはウリの頭に手を置いた。「あなたを祝福します」

「こやつを処刑する」

「ユダヤ人の罪人の処罰の権限は、行政長官の役目を仰せ使っています、わたしにあります」

「わたしの負けだな」

司令長官は呵呵大笑すると、玉座から立ち去った。エズラはウリに、故郷に帰るように言った。ウリは首肯くと、逃げるように広間から出て行った。

帰途、ウリへの恨みを晴らせなかった悔しさが、サライの頭を悩ました。しかし、礼を言うべきなのか……？

どう言えば、自分の気持ちを正しく言い表わせるのか、わからなかった。

そしてとうとう前に行く馬上のエズラを呼び止めた。「話があるんだけど」

エズラはふりむかない。「教団にもどってから話しましょう」

「俺さ、身に余る光栄という言葉の意味にやっと気づいたような気がするよ」

エズラは馬を止めた。

サライはくつわを並べながら、「それに俺は、学びの家にふさわしくないってことも、つくづく思ったよ」

「レビ人ではないからですか」

「正直に言うと、神の戒めを破ったことがあるんだ……もしかしたら……これからも……破るかもしれない」

「人を殺めたことですか」エズラの声にほんの少しの乱れもなかった。

サライは呼吸が一瞬、止まったように感じられた。「なんで知ってんだよッ」

「小さな町です。ナバテア人が白人奴隷に刺されたという噂はすぐに広まります。あなたは目立ちますからね」

「じゃあ、なんで……」

「ジャミールという少女のためだったのでしょうか？ だから彼女はヤマトという少年に頼んで、あなたを学びの家に入れてくれと願いました。違いますか」

「先生！」サライは馬をおりて、エズラの前にひれ伏した。「おふくろを殺したウリをどうしても許せないんだ」

「殺したいのですか」とエズラは言った。「どのような事情があれ、罪を犯したのであればあなた自身が避難都市のいずれかに逃げなくてはなりませんね。ケディシユか、ゴランか、シユケムでしょうか。それでない、殺した相手の親族から復讐されるかもしれませんよ」

「俺は避難都市に出かけて行って、ユダヤ人の長老が裁き人の裁判なんて受ける気はない。あんなものは正義でもなんでもない」

「あなたが自分の罪を罪だと認められる日まで、復讐など考えずここで学ぶといいでしょう」

「許せないんだ、どうしても」

「神の真のご意志を、学びなさい。わたしたち人間は無知で傲慢です。それでも創造主は、わたしたちを憐れみ『わたしの骨の骨、わたしの肉の肉』とおっしゃってくださいます。いまは理不尽に思える事柄も、すべては神の深い愛から発せられたことなのだといずれあなた自身の目で知るでしょう。」

その時がくるまであなたは何人も裁いてはならないのです。いいですか？ 誓ってください。二度と人を殺めたりしないと。神の裁きと私たちが人を裁くこととは、同じように見えて同じではないのです」

「俺には律法がわからない！ でも先生の弟子になりたい！ 弟子のひとりと思ってもいいのわ！」

「あなたが、学びの家に来た日からそのつもりですよ。いえ、ヘブロン集会所で出会った時から、あなたと私の魂とは結ばれていました。諸々の事情で受け入れるのに時をかけなくてはなりませんでしたが、許してください」

「二度と殺さないと誓うよ」

エズラは微笑した。「聖なる方への信仰があれば、罪が絆のようであっても、雪のように白くされるとイザヤは言ってます。あなたの罪はこの瞬間に贖われたのです」

「ヤハウエはイザヤに、『あなたがたは繰り返し聞きがよい。しかし、悟ってはならない。あなたがたは繰り返し見るがよい。しかし、わかつてはならない。(イザヤ6:9)』と言ってる。でも、俺は理解したいし、知識を得たいんだ。写字生にもなりたい」

「決められた文字を筆者するのではなく、あなたはあなたの知りた
い事柄を学び、それを大勢の人が読めるように書き表わしなさい。
神のみに叶うことであれば、どんな内容でもいいのですよ」

「理解してもいいのかッ。知識を得てもいいのかッ」

エズラは首肯いた。凍っていた心を熱いものが満たした。

41話

シンドウはヒンノムの谷に住んでいた。ヤマトはもう何日も会っていないかった。

すぐ近くの廃屋にいとイサに知らされた時、驚きよりも悲しみで心が塞がれた。

なぜもっと早く教えてくれなかったのかとイサを責めても、彼のせいではないと重々わかっていた。やまいに伏す姿を、ヤマトに見られたくないとしんどウが言ったであろうことは容易に想像がついた。

板小屋の日の射さない藁床の中で、シンドウは終わりの時を迎えようとしていた。

「ヤマト……ティアマトの子よ」

その声には力はなく、小柄な体は痩せてさらに小さくなっていった。

「お前と出会ってからは、つまらぬと感じた日は一日たりともなかった」

「シンドウ、これからは、ともに過ごしましょう。わたしがお世話を致します」

「イサが充分すぎるほどよくしてくれたので、もはや何も望むことがない」

「賜ったご恩に何ひとつとして報いておりません」

「シユメールの王子と相見ることがなければ、わしの一生は希望のないまま闇の中で終えなくてはならなかった。ギルガメツシユの伝説のようにな」

「何をおっしゃるのです」

「竜のように強い7人の男がかならず現れる。その者たちを従える王子を、この目にできないことだけが心残りだが、それも定めだとわかっている。己れの役目を終えた時に命が尽きる。それでいい。それでなくてはならない」

「わたしを独りにしないでください」

シンドウは荒い息をすると、義と誇りに生きよと言った。そして、「どれほど高邁な理念であっても信義と矜持のないところに目指すものは見つからない。義とは己れの信ずる道だ。誇りとはいかなる事態にも責任は己れにあると認める心だ。このふたつを忘れるな。そして、ともに歩む者たちを、何が起きようと信じきるのだ。よいな」

「師の教えを生涯つらぬくことをお誓いします」

「祖先のティアマトは女を信じて裏切られたが、それもお前がこの世に誕生するために必要な出来事であった。幸運だけを願って何も為さぬ王になるくらいなら、物乞いとなるほうがいい」

シンドウはそう言って手をのばした。その手を握ると、体温が感じられなかった。

「寝床の下に、ジャミールがわしにくれた金が隠してある。それを持って、イサとともにこの地を去れ。ここには、お前の助けとなる者がもはやいない」

「いまはまだ……」

「お前が考えるより世界は広いと教えたが、ほんとうは狭いのだ。わしは若い頃、どのような生き方をしようとすべては無に帰すると思つと、ただじつと死を待つだけの人生に耐えられなかった」

「……」

「妻子を捨てて旅に出たが、己れが何を浴しているのかさえも長く知り得なかった。自分なりに、なんとかして無を越えようとしたのだと思う。しかしある時、それは狂気へ向かう道だと悟つたのだ」

「……」

「いまのお前には、何を言っているのか、わからないだろうな」

「……」

「はじめて会った日も、お前は黙りこくっていたな。しかし、ひとつしかない椅子をわしに差し出してくれた。名前を聞く前に心は決まっていたのだよ。わしの知ってることはすべて教えようとな」

「シンドウ……」

「くどいようだがいまひとつ、伝えておきたいことがある。戦場のことだ。お前はかならず軍を率いるようになる。そうなった時にもっとも大事なことはいかに兵士に死を覚悟させるか、だ。つまりぬ憐憫は彼らを救わぬ。いいか、率いる兵士に戦略戦術の説明をしても勝利に役立たない。軍の移動時期はむろんのこと、地形についても話す必要はない。敵の領内に侵攻したら、弦をはなれた弓のように進み、羊を追うように兵士を働かせるのだ。それが軍を統率する指揮官の務めだと思え。兵士の命を思うなら非情にならなくてはならない」

ヤマトが深く首肯くと、

「ギルガメツシュの最期を話してくれ。聞きながら、ゆっくり眠りたい」

生と死の境界にいる老師の表情は粗末な床にあっても安らぎに満ちていた。

ヤマトは、こうべをたれた。

「最愛の友・エンキドウを失ったギルガメツシュは永遠の命を求めて、案内の船頭とともにさらなる旅を続けていました。気持ちを引き締めようと、額帯も衣服も新しくしましたが、少しづつギルガメツシュの心も体も疲労で病んでいったのです。その時、いちどはギルガメツシュを去らせたウータナビシュティムが現れたのです。神から永遠の命を与えられたウータナビシュティムは、苦労を重ねて自分たちのところへやってきたギルガメツシュを憐れむ妻の言葉に耳を貸し、神々の秘密を教えることにしたのです。ウータナビシュティムは、『海の底にバラのような刺のある草があつて、それを食べれば永遠の命が得られる』と教えました。

ギルガメツシュはすぐさま重い石を足につけて深い深い海の中に飛び込んだのです。そしてその草を見つけました。草を取ったとき、刺が彼の手を刺したのです。そのとたん、長旅で萎えかけていたギルガメツシュの精神が蘇ったのです。彼は『この草は命を新しくす

る』と言って喜びます。そして、この草を、ウルクの城に持ち帰り、たいせつな人々に食べさせようと考えました。その中には、黄泉の国にいるギルガメツシュも含まれていたのかもしれませんが。

しかし帰国の途中、湖で水浴びをしている間に、忍び寄ってきた蛇に草を食べられてしまったのです。ギルガメツシュは泣き崩れ、『誰のためにわが心の血は使われたのだ。私自身はついに恵みが得られなかった。大地の蛇どもに、恵みを与えてしまった』と悔やみますが、もうどうにもならないと知ります。そうして、ギルガメツシュはついに諦めます。『私への合図として、神が置かれたものを、私が見たからには、私は退こう。そして小舟を岸に残そう』と言って……」

ヤマトの声は途切れた。

「よく聞こえないので、もっと大きな声で話しておくれ」とシンドウは言った。「なぜ、ギルガメツシュが戦うことをやめ、神の定めた死を受け入れる気になったのか、眠りに入る間際の一瞬まで考えたいのでな」

シンドウの耳元に口を近づけたヤマトは救いのない物語の結末を語った。

「国に帰ったギルガメツシュは絶えず死への恐怖にかられるようになりまし。生涯の友エンキドウの霊を呼び出し、永遠の命を得る法を教わろうとまでします。エンキドウは冥界に閉じこめられている者たちの悲惨な状況は話しますが、生き続ける法には触れません。ギルガメツシュは悲嘆にくれたまま老いていったのです。そしてとうとう死が訪れました。彼が何よりも恐れ憎んだ、誰もが至り、二度と戻らない闇の世界へと旅立ったのです……」

シンドウは規則正しい寝息をたてはじめた。頬にも赤みがさし、握りしめている手にも温もりを感じ、ヤマトは安堵した。

小屋の外からイサの声が聞こえた。「ヤマト様、まいりましょう」「何を言う！ シンドウは元気になろうとしている」

旅支度をしたイサは中に入ってくると、「ヤマト様を安心させる

ために最期の力をふりしぼって息を整えているのです。これ以上、ここにいれば、シンドウを苦しめます」

「嫌だ！ 看取らなくては」

「いつか、すべての人と別れなくてはなりません。シンドウはいま、そのことをあなた様に教えているのですよ。さ、立つてください。」

そしてここを出てください。後のことはこのイサにお任せください」
赤く染まった夕暮の路地へ、ヤマトは重い心で踏み出した。ほどなく姿を見せたイサはシンドウの杖を手にしていた。

「平安のうちに旅立たれました」

イサは告げると、板小屋に火を放った。ともしび用のオリーブ油を撒いたのだろう。すぐに燃え上がった。夜空に溶け入るように、うつし身のシンドウは消え去った。

……あなたへの感謝の気持ちは永遠に消えることはありません。

もはや師はこの世にいない。しかし、師の語った言葉が記憶にあるかぎり、彼の魂と一体であると実感できた。

師は、旅立てと言った。

従わなくてはならない。

イサは馬を用意していた。

「世話になったジャミールにひと言だけ、別れを言いたいのだけだ
ど……」

「なりません」

イサと再会して以後、彼は妻子のことをいっさい口にしなかった。一度だけ、ヤマトが見知ったことを話そうとした。その時、イサは言った。

「わたしはユダヤ人を装っていましたが、心はいかなる時もシユメール人でした。あの村がベドウィンに襲われたのは、わたしが村の場所を彼らに教えたからです。もし、それで、あなた様が命を落とすのであれば、ティアマトの子ではなかったと思つたでしょう」

「そんな……」

「長きにわたって、あなた様にひどい仕打ちをしましたが、どうし

ても強くなっていたただきたかったからです」

「それほどまでして、なんのために！」

「ご存じのほずです。天と地をつなぐ、われわれの都を建てるためです」

ヤマトは首肯く。

「苦難を生きることでは人は成長します」

「努力するよ」

「ナンナ様にも、いつか会える日がきます、かならず」

ヒンノムの谷からベテルの平地へ向かう道をたどる間も、イサは旅の行き先を言わない。ヤマトも尋ねなかった。そんなことはどうでもいいことなのだ。

いま居る場所から彼方へ……。

シンドウは言いたかったにちがいない。神の定めた死を越えられる人間などいないからこそ、進まなくてはならないと。生きる意味など一生かかってもわからないが、それでも義と誇りを失わずに生きよと。

ヤマトとイサはその夜のうちに、エルサレムを後にした。

42話

屋敷内にいつもの活気がないことにサライは気づいていたが、急いで教団に出かけ、ザドクのいる書記室に入った。

「先生は無事か」

そのことが何より気懸かりだった。

ザドクは笑った。「先生の偉大さを思い知ったようだな」

サライは赤面しながらも、「本気で、心配しているんだ」

要塞でのトリタンタイクメスとエズラとの言葉の応酬は強い衝撃をサライに与えた。ザドクに一部始終を話さなくては気が静まらない。しかし、ザドクはいつものように書き物に忙しく、そのことにはひと言もふれようとしない。

「なんでそんなに、しらつとしてんだよッ。先生の身が心配じゃないのか」机に向かうザドクに噛みつくように言った。

「先生はエルサレムに来る前からペルシア人の高官と争ってこられたと仄聞している。俺が先生にはじめてお目にかかった時も、大祭司との間でいろいろあった後だったが、そのことについて一片の愚痴もこぼされなかった。聡明で忍耐強く、心の広い方だと思ったから俺は先生についていくことにしたんだ。神の子だと思ったからじゃない」

「そうだったのか……」

「お前は、頭は悪くないが、短気で考えが浅い。今後は先生の弟子として気をつけるんだな」

「うん」

「お前が素直だと気味がわるいよ」

「俺さ、先生の役に立つように心を入れ替えて学ぶよ」

「さつさとギリシア語の教本を勉強しろ」

ザドクから教本を受け取るうとしたその時だった。エリアシブとその仲間が書記室に押しかけてきた。そして、サライを目にしたと

たん「ここから出て行け！」とののしつた。「うつせえよ」

どこで聞き付けたのか、エズラが司令長官の求めを断り、サライを弟子にしたことをエリアシブは知っていた。

「先生のお決めになったことだ」とザドクは言った。

「こんなやつは弟子でもなんでもない。第一に、レビ人ではない」

「俺もレビ人じゃないが、先生の弟子だ」ザドクは弁護した。「ちがうか？」

「お前の場合は……」エリアシブは口ごもった。

そこへ、誰が知らせたのか、エズラがやってきた。

「ラビ・エズラ」と皆が叫んだが、エズラはいつものかわらない穏やかな表情で何事かと訊いた。

エリアシブは詰め寄った。「なぜ、司令長官と反目するんですか。いい迷惑ですよ」

エズラに対する敬意など微塵も感じられない、居丈高な言葉遣いだった。

「誰がそのようなことを言いましたか」

「エルサレム中の噂ですよ。ラビ・エズラはたったひとりの弟子のために教団の存続を危うくするとね」

徒党をくんで押し入ってきた他の連中はエリアシブの発するひと言ひと言に首肯き、サライを睨んだ。彼らの頭は風の命ずるままに同じ向きに揺れ動く麦の穂のようだった。

「あなた方にご心配いただくことはありません」エズラは一蹴した。

「レビ人がなんたるかも知らぬ白人奴隷のせい、イスラエルの民そのものが侮られてもいいのですか。それだけではない。他の者へは厳しい戒めを求めながら、この者だけ特別扱いなさるおつもりなのでしょうか」

「あなたは、何か勘違いをしているのではないか」とエズラは言った。「たしかにわたしは、異国の女とその女から生まれた子供たちを夫のもとから去らせました。なぜか、わかりますか？ 彼らは異

教の神を信じ、ユダヤ人の夫にもその信仰を強く求めていたからです。夫の気持ちがどうあるかと、妻たちは改宗したいと思っていませんでした。その証拠に、彼らのうちの多くの子供がヘブライ語を話せないばかりか、学びたいとも思っていないませんでした。

彼らにとつて、ヤハウエへの信仰は重荷なのです。去ることで、彼らなりの平安を得たであろうと思っっています。わたしはそれではないと思っっているのです。奴隷であるユダヤ人であるよりも、妻子の国へ行き、自由の民となつて生きる道を選ぶ者たちを止めてはならないのです」

「詭弁だツ。ラビ・エズラは詭弁をろうして、この者を手元に置くとしてゐる」

「あなたは知らないが、わたしはサライの信仰を何度も試しました」とエズラは言つた。「将来、サライは、唇の清くない者たちより神に愛されるでしょう」

エリアシブは青ざめた。「屈辱されたくない！」

「災いなるかな、彼らは偽りの縄をもつて悪を引きよせ、車の綱をもつてするように罪を引きよせる。(イザヤ5:18)」

エリアシブは唇を震わせた。

「あなたは父上の元にお帰りなさい」

「われわれエルサレムに残つた者たちこそが、神にとつて聖なる者と言われるのだ！ 流刑地の者たちは神のご意志で裁かれるのだ」

「律法書のどこにそのような言葉がありますか」

サライとザドクは、エリアシブが扉を叩きつけて出て行つた後でも事態がよく飲み込めなかつた。

「先生、父の元へ帰れとはどういふことなのでしょう」とザドクは尋ねた。

「彼らの魂は災いです。彼らは己れ自身に災いをもたらすでしょう」

「俺は、立派な弟子になるよ！」

「時を惜しんで学ばなくてはなりませんよ」「まかすとけつて」

「先生！」ザドクは驚きをあらわにした。「サライを弟子にすると

広言すれば、エリアシブの言ったように困難な状況を招きます。それでもよろしいのですか」

「ザドク、あなたほど優れた弟子は得られないと諦めていました。彼らのほとんどは信仰のなんたるかを知るには余りにも考えが足りません。」

物事の表層しかとらえられない者たちにわたしの真意は伝わらないでしょう。わたしたちに祖国はありません。それでもなお自らをイスラエルの民であると自覚し続けるには鋼のような意志がなくてはならないのです。わたしは人々が己れが何者であるのかを知るために、神の言葉を伝えているのです」

サライは話を聞くうちに、ラビ・エズラこそが神の子であると信じることができた。

その日、ザドクについて屋敷に帰ると早速、アシエラから出ていくように言われた。ザドクが思い止まるようにとりなしても、司令長官に逆らった者を、わが家に留め置くことはできないと彼女は言った。

「ジャミールにあいさつだけさせてくれよ、おばさん」

「彼女なら先に出て行きましたよ」

「どういうことだよ」

「母上、それはまことのことなのですか」

ザドクはアシエラを問い詰めた。

「ヤマトがいなくなつたと言つて半狂乱になつてしまつて大変な騒ぎだったのよ。引き止めたけれど、耳を貸さないのよ。ほとほと疲れました」

サライはジャミールのいた客間に行った。

手掛りになるものは何もなかった。もともと荷物があつたわけではない。着のみ着のままといつていい暮らしを、彼女は長く生きていた。

「黙つていなくなるようなやつのために、どこへ行つてしまつたんだよ」

一瞬、後を追うことも考えた。

彼女の姿をひと目も見ることができない毎日などいらなと思った。

屋敷から何かが失われていると感じたのはまちがっていないからのだ。

……ジャミール、どうして……。でも、後を追えない。

エズラの弟子になり、学問がしたいという思いのほづが強かった。

43話

ジャミールは、ダマスコを經由してバビロンに向かうキャラバンに自分をくわえて欲しいとケバルに頼んだ。

ケバルは諦め顔で言った。「お前が行くと言えばハシムも行くと言うだろう。監察官の手前、俺としては見過ごしにできない。そんなことをすれば俺たち3人とも命をなくしかねない」

「誓って、ひとりで行くわ」

「ハシムに黙って行くつもりか？」

ジャミールが首肯くと、

「やつはすぐに勘付いて後を追うだろうな。それも運命か」

「ごめんなさい……」

「謝ることはない。追っ手の1人になって、お前を殺す日がくるかもしれないんだからな」

「あたしは、誰かの言いなりになって生きるしかない思っていたわ。諦めてた。でも、心のどこかで、自由になりたかったの」

「いいさ。ヤマトと出会った日から、お前の行く道は誰にも止められなくなってたんだ。それで、どうしたいんだ？」

「ヤマトの姉さんを探したいの。ヤマトもきつとそうするはずだから」

「あいつの姉さんを見つけて、そこでやつを待つ腹づもりなんだな？ そうつまく事が運ぶかな」

「それしかヤマトに会える方法がないもの」「会ってどうするんだよ。あいつはお前に黙っていなくなったんだぞ」

「先のことは、わからないわ。いま、したいようにするだけ……」「ダマスコでもっとも力のある男のところへ行け。高値のつく女奴隷は一旦、そいつのもとに集められる」

「奴隷商人なの？」

「いや、ちがう。やつが気に入れば、どこの国の王よりも高値で女

を買つ」

「やつぱり奴隷商人じゃないの」

「いや。やつは女を売らない。どこの国の王宮にも出入りできるように女を磨きあげ、これと思う人間に献上するんだ。そうやって、塩や鉱石の利権を得て、莫大な利益を上げている」

「そこに行けば、手がかりがあるのね？」

ケバルはジャミールの手を取ると、金貨の入った皮袋をよこした。「いままで、よくやった」

月も姿を消す夜更け、ジャミールは屋敷を去り、ケバルの手配したキャラバンにバビロンの王宮に仕える巫女だという触れ込みでまぎれこんだ。

ヤマトがどこへ向かったのか想像するしかなかった。

南に向かうことはあり得ない。姉を探す旅なら北に向かうはずだ。それも奴隷市のある大きな町だ。

シリアのダマスコシかない。

44話

ジャミールがエルサレムからいなくなった数日後、サライは浮かない顔をするが多くなつた。ここで学ぶといちどは決心したが、しばしば虚脱感に襲われて勉学に身が入らなかつた。学びの家の寒々とした空き部屋で寝起きし、食事は門番と一緒に摂つたが、妻子と離別した男は恐ろしく無口で沈んだ気持ちが増すばかりだつた。たまに口を開けば祈りの言葉だつた。

「ヤハウエよ、あなたはわたしの神です。わたしはあなたを高め、あなたのみ名をたたえます。アーメン」

モーセの後継者のヨシユアは、「あなたがたの神、ヤハウエが、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、ひとつも欠けたものはなかつた。(ヨシユア23:14)」と述べている。つまり目的とされる事柄はみな実現する、ということらしい。サライは男の深い皺を眺め、彼は得たものより失つたもののほうが遥かに大きいのではないかと思つたりした。

パンをかじりながら書記室に行くと、エズラがやって来て窓の外を指差した。

「エライジャの様子がいつもとちがっていますね。どうかしたのでしょうか」

先に来ていたザドクと並んでサライも窓の外をのぞいた。

エライジャが何やら喚いている。ひどく怒っている様子だつた。

「神は時に、自分の愛する者を懲らしめられるのです」とエズラは言った。「ヤハウエの愛の証拠です」

大勢の若者が取り押さえようと、エライジャを取り囲んでいる。エズラに見てくるように言われ、ザドクとサライが出ていくと、マラキだけはそそくさと教室に戻つて行つた。残つた若者たちは、教団を去つたはずのエリアシブとその仲間だつた。

「何事だ!？」

ザドクが問いかけると、エリアシブは仲間にも暴れるエライジヤを連れ去るように命じた。ザドクの目から隠そうと躍起になっているようだった。

「エライジヤは教団の者だ」とザドクが止めに入った。

「お前に用はない」とエリアシブは言った。「アイシャーツ」

エライジヤは髪をふり乱し、妹の名を叫び、教団の前庭からいなくなつた。それを見たサライは、「エライジヤはいつもあんな風にトチ狂うのか？」と訊いた。

ザドクは首を横にした。「いや。こんなことははじめてた」

サライはエリアシブを見据えた。「てめえら、なんなんだよ。ここを辞めたんじゃないのか！」

「こんな建物、いまに潰してやる」エリアシブは言い捨てると、仲間同志で頷き合い、前庭から外へ出て行った。

サライとザドクは彼らの後を追うように門を出ると、エライジヤの姿を探した。芥子粒のように小さい彼を目のはしに止めると、彼らは駆け出した。

神殿の広場で追いついたが、声をかける前に、エライジヤが物売りのテントを片端から打ち壊しはじめた。

たちまち、エライジヤは数人のアラビア人に打ち据えられた。追いついたザドクまで彼らに打たれている。

サライはペルシャ兵の乗っている馬の尻に小石を投げた。馬はひと声いななき、人垣を蹴散らした。

「逃げろっ」

取り囲む人の輪を逃れたザドクに、サライは人込みの中から短く声をかけると、鼻血で顔面が真っ赤になったエライジヤをザドクと両脇から助け起こし、入りくんだ路地に向って走った。

馬に乗ったペルシャ人の兵士は砂けむりをたてて、後を追ってきた。

「どうなってんでよ！」

「ふた手に別れよう。お前が兵士を巻いてくれ」

ザドクはサライに落ち合う場所を耳打ちし、エライジヤを引きずって路地に消えた。サライは広い通りを懸命に走った。馬とまとも競争しても勝ち目はない。物売りの荷台で道を塞ぐように駆けぬけた。

腕力には自信はないが、昔から逃げ足は速かった。

なんとか追っ手を巻いて、ザドクの乳母だった女の家を捜すために、町をつらぬくテュロペオンの谷へと走った。

灰色の麦打ち場を過ぎ、日干し煉瓦の家の密集した地区に駆けこんだが、異形のサライは人目についた。人々の好奇心を煽るばかりで、近寄る者がなかった。

「これだから、いやなんだ」

長い間かかって、サライは目指す家を探し当てた。人々が警戒し、乳母の居所をなかなか口にできなかったからだ。

戸板を打ちつけただけの戸口に入るなり、サライは大声で言った。

「何がどうなってるのか、まずは説明しろよな」

「今頃やってきて、えらそうに言うなよ」

ザドクはサライを目にすると、安堵した口ぶりで遅かったことを責めた。部屋の奥の粗末な寝床に横になったエライジヤは、荒い息遣いで背をまるめていた。

「あいつ、なんで芋虫みたいに縮んでんだよ」

ザドクの乳母の家に逃げ込んだあとも、エライジヤはぶるぶる震え通しに震えていたらしい。恐怖のためかと思ったのはまちがいで、憤りで青くなっているという。

「頭にきただけにしては、おおげさじゃないのか」

「アイシャに迎えに来てもらったほうがいいな」

ザドクが彼の妹を呼びにやろうとすると、エライジヤは目をつり上げ、髪をかきむしった。エライジヤの肩を抱くようにして、ザドクは訳を訊ねた。

「何があっただんだ？」

「妹が、妹が……」

エライジヤは声を詰まらせながら、アイシヤはバビロンへ行つたと言ふ。その日暮らしのきょうだいを見兼ねた煉瓦工場の親方にお為こかしに身売りの話をもちかけられ、貧しさに耐えかねたアイシヤが口車に乗ってしまったと言ふのだ。

「そんな子じゃない」

「アイシヤは毎日のように暮らし向きのつらいことを嘆いていた……それで、たぶん」

「嘘だ！」

ザドクはエライジヤを突き放すと、彼の涙声をさえぎった。

「お前は嘘をついている。ヒンノムの墓場で見かけた男に妹を売つたのだ」

エライジヤは声を放って泣いた。

サライの脳裏に、不安げに大きく見開かれたアイシヤの瞳がよぎつた。

エライジヤは身をもんで懇願した。「助けてくれ、ザドク」

「肉親を売った金で、何をするつもりだったんだ」

「バビロンからエルサレムにやってきて、いいことなんてひとつもなかった。両親は死んでしまうし……。だから、レビ人の子供のように神殿で働かせてもらいたかったんだ」

「エリアシブに金を渡したのか。そうなんだな」

「……約束だったのに、いまになって、だめだと言われて……」

「エリアシブたちはもう先生の弟子じゃない」

「えっ?!」エライジヤは絶句した。

「知らなかったのか」

エライジヤが石を飲みこむように首肯くと、ザドクは肩を落とすた。

「エリアシブたちを咎めても、われわれのほうこそ寄付金を受け取る正統な組織だと彼らは言い逃れるだろうな」

「アイシヤは、どうなってしまっただろ?」エライジヤはザドクに泣いてすがった。

「エルサレムにはもういないだろうな」ザドクはアイシャの身の上を嘆いた。「かわいいそうに……」

「どうしてわかんだよ」サライは詰問するように言った。

「奴隷商人は、4日もあればシリアのダマスコに行ける。そこで売られてしまつともう探しだす手立てがなくなる」

「身も蓋もない言い方をすんなよ」

「お前が徒歩で砂漠を越えたような奇跡は何度も起らない」

「なんとかなるかもしれないだろ？」

ザドクは乳母にエライジャの面倒をみてくれるように頼むと、サライを外に連れ出した。

「いい加減なことは口走るな」

「何も言つてねーじゃん」

「おまえの考えていることくらい、俺にはわかる」

「たださあ、先生の言うように、懲らしめられるのも愛している証拠だなんて思えないだけなんだ」

「神がエライジャを懲らしめているんじゃない。強欲な人間どもを懲らしめるのだ」

エライジャの妹アイシャの行方がわからなくなつてまもなく、エズラが暴漢に襲われるという事件がおきた。かるい怪我ですんだが、教団に属する者の多くは、ザドクをのぞいて、エズラが襲われた原因はサライにあると考えたようだ。

「異分子は排除されなくてはならない。われわれの使命は、イスラエルの民の結束をうながすことだ」

エリアシブに追隨していたマラキは公然とサライを非難した。

ザドクは弁護した。「何をもって、異分子と既定するのか」

マラキはサライとザドクを前にして、冷ややかに言った。

「衆知の事実をことさら説明することは避けまるが、無能な総督の諫言ひとつで、有能な指揮官の首がとぶことを言っているのだ。エズラ先生は指揮官の比ではない。われわれにとつては、王にもひとしい方だ。そのお方をお守りするのがわれわれ弟子の務めだ」

マラキとその同調者とはエズラの暗殺をトリタンタイムクスがもくろんでいると言つて譲らなかつた。

「暗殺を未然にふせぐ手立てのひとつとして、サライは司令長官のもとになんとしても行くべきだ。それが弟子としてのあるべき姿ではないのか」

「その話は終わったことだ」とザドクが抗弁しても、マラキは聞く耳を持たなかつた。

「お前はどう思っているかshれないがこのままでは、大祭司を頂点とするレビ人祭司たちと、先生につき従う帰還者の教団とは反目するしかなくなる。そんな事態になれば、神殿の再建はおろか、至聖所に詣でることさえかなわなくなる恐れさえ生じる」

「俺がいなくなりや、それですむことなんだろう？ いなくなつてやるよ。てめえらみたいにくツの穴の小さい連中のいる学びの家になんか、なんの未練もない」

サライは吐き捨てると、きびすを返した。一旦、口に出してしまえば、後戻りできない。

「サライ！」ザドクが呼び止めた。「先生になんて言つつもりだ」「黙つて行くさ」

「先生の恩義を忘れたのか！」

「もともと学問なんてむいてないんだ」

「なんて愚かなやつだ」

「辛気臭い連中とはこれつきりだぜ」

あんたの小言が聞けなくなるのは淋しいと言つ言葉は飲みこんだ。サライは駆け出すようにして、神殿の広場に向かつた。

ハシムならジャミールの行き先を知っているはずだ。

宝探しの話を持ち出せば、喜んで乗ってくるだろう。久しぶりに心の重荷がとれた気分だつた。

「呼ばれる者の声がある。荒野に主の道を備え、砂漠に、われわれの神のために、大路をまつすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、陰

しいところは平地となる。(イザヤ40:3)
「サライはごぶしを空にむかって突き上げた。」

目を閉じていた。

薄目をあけると、月の光が輪になってひろがり、西と東のふたつの地平線を照らし出していた。目を閉じると、砂地をふむラクダの足音が胸にひびく。獲物を求めてうるつく狼の遠吠えも、砂塵のざわめきも、いまのジャミールには届かない。

キャラバンの隊長アリは、ラツパの音を響きわたらすような声で言った。

「巫女様」

そんな呼ばれ方をされた覚えのないジャミールは、ラクダの上でのけぞった。

「3日の間、休むことなしに旅をつづけたんで、くたびれやしたか」とアリは心配そうにのぞきこむ。何日も体を洗っていないのだろう、異臭がする。

「もうそろそろ着くものではありませんか」ジャミールは鼻を押さえ、て訊いた。

アリは、褐色の短い首に太いあごをつけて、へいと大きく頷いた。その人柄に似て、体全体が丸々と太っているので、はじめて会ったときの滑稽な印象がぬぐえない。

……アラブ人はラクダのおしっこで、頭を洗うからしかたないわ。

ベドウィンの掠奪が日常茶飯事の交易路では護衛がないと、身の安全が守れない。ケバルが雇ったらしいが、ベドウィンとは部族を異にするというアラブ人のアリとその部下に戦闘的な気概は見られなかった。

「追剥ぎどもにつけ入られるようなへまはしやしません」

アリは自信满满だが、中央渓谷によってふたつに分割された地平線に目をそそぐと、不安はぬぐえなかった。ハゲタカの出没しそうな場所は無数にあるように思えた。

シリアのダマスコへむかうキャラバンは通常、サマリアの山岳地とギレアデの地を隔てて蛇行するヨルダン川をガラリヤの海に沿いに迂回し、谷間の交易路を北へ進む。

この地溝にはいくつかの泉がある。たびかさなる旱魃で、干上がった泉もあるが泉の線をたよりに進むと、扇型の水溜りに行き着ける。しかし、雨季に忽然と現れる水源なので、この水を求めて誰が現れるかわからないのだ。

一行は小休止をとり、ヘルモン山（海拔2814？）の東の麓からはじまるフルレ地区の盆地に入った。約束の地の北限にあたり、ヘルモン山の頂は一年中雪に覆われている。標高がさがると、野草と茶色っぽい緑の灌木が密になり、大きなオアシスが近いことが知れる。この地にはかつてヒビ人が住んでいたが、モーセの後継者ヨシユアによって撃ち破られた。

キャラバンは“王の道”を北上し一路、ダマスコへ向かった。

古代都市は農耕地帯の中心に発生することが多いが、砂漠地帯で水の便のよい所は古くから往来するキャラバンが利用するので、いつのまにか食料、水、宿舎を提供する都市が発生した。

砂漠の宝石と称されるダマスコ（現在のダマスカス）は高原地帯にあり、地中海東部の土地、メソポタミアの国々、および東部アジアとのあいだをつなぐ古代の軍用路や通商路の要衝だった。気候も快適で、市街に隊列を進めると、緑のしたたる肥沃な土地がゆっくと広がり、旅人の目を洗った。

アリはこの地で生まれたと自慢した。「春になると、丘の斜面はアマンドの白い花でいっぱいになるんですぜ」

この町を侵略するやつらはかならず手痛い目に遭うと胸を張って言うアリは、丘の向こうをすかし見る。

「ペルシア軍の守備隊なんぞ邪魔なだけだ」「でも、鞍をおいた馬はいなくならないわ」

ジャミールが皮肉ると、

「ここは、あつしらの町だ。ペルシア人に大きな顔はさせねえ」

遊牧民の交易の中心地として自然にできあがったこの都市まちは、いくたびの戦乱を乗り越え商業によって繁栄してきた。恵まれた気候のおかげで果樹園には杏、桃、イチジクなど夏の果物を多く産出すると同時に山々にはレバノン杉がうっそうと生い茂り、侵略者への貢ぎ物には事欠かなかった。

アリは、ジャミールの隣にラクダを並べると、「ダマスコの総督はシリアのかしらを恐れてますぜ」と言った。

「シリアのかしらって、太守のことなの？」「ここにそんなややこしい者はいねえ。ここはずっと昔から、わしらカイス族のもんだ」「アラブ人も北と南ではちがうのね？」

「アブラハムの子のイシュマエルの子孫が、わしら一族で　ユダヤ人は、自分たちだけがアブラハムの子孫だとぬかしておりやすが大嘘ですぜ」

誰が誰の子供でも、一つ穴の貉むじなだと言いたかったが、やめておいた。そんな些末なことよりも、灌漑によって豊かなオアシスをもつダマスコを目前にして、ジャミールは一抹の淋しさを噛みしめていた。赤茶けた砂礫の町エルサレムから遠く離れたことをいまさらながら思い知らされた気がした。……お節介なサライはどうしてるかしら。ハシムは怒ってるわね、きつと。

一行は速度を速め、町の門に通じるゆるやかな広い道をたどった。外周の大通りと都市とは、巨大な石を一分の狂いなく積み上げられた高い防壁（高さ9？幅4？）によって遮られていた。内部の様子をうかがいしることができない造りになっているが、町の外には家畜の群れと新鮮な土の香りと植物の穢りとがあった。

枝もたわわに実ったぶどう、くるみ、杏などの果樹園が果てしなくひろがり、町に住めない者たちの天幕や板小屋が牧草地と田畑の隙間を埋めていた。彼らの飼っている羊や山羊の鳴き声が、この町を守っているかのようにどこまでも聞こえる。城壁内から立ちのぼるかまどの煙が虹にかかり、棚びく雨雲にとけこんでいくさまは、砂漠の蜃気楼のようにジャミールには思えた。

「エルサレムなんて、ここに比べると、塵芥ちりあくたの廢墟ですぜ」とアリは言った。

言葉通り、大理石のアーチのある堅牢な城門をくぐると、町を斜めに貫く広い中通りに入るまでに路地や袋小路が曲がりくねってつづき、隙間なく建っている民家からは人々ののどかな話し声が聞こえてきた。その道を進むとスークと呼ばれる市場があり、露天商の威勢のいい声がこだまする。その背後には窓に格子のはまった化粧造りの建物もあり、ここを訪れる者たちに栄華を見せつけていた。武装したペルシア兵の姿もそこかしこに見えたが、町並みに溶け込み際立つて目につくことはなかった。子供たちはまるまると肥え、門のうちとそとを自由に行き来していた。

街角の至る所で、どこの国の者とも知れない身なりの若い男女がたむろし、歌い、踊り、奇声を発していた。

エジプトの王に、フアラオ征服された当時はどうだったのだろうか。

キャラバンの一行は顔をおおったジャミールを護衛して、大勢で賑わう広場に面した宿屋に向かった。

壮麗な造りの建物だった。旅の商人やキャラバンの泊まる隊商宿ではないようだった。砂漠と山中を旅したあとでは、ソロモンの王宮もかくやと思われた。

水晶のランプの吊り下がった門をはいると、モザイク画になった青いタイル敷の庭がひろがっていた。真ん中に満々と水を張った貯水池があり、三方にそれぞれ別の建物が建っており、いくつかの円柱が高くそびえていた。残る一方は厩舎になっていたが、家畜の声はせず、広場の喧騒が嘘のようであった。

鍵の束を手にした黒人の女がどこからともなく現われた。女が近寄ると、不可思議なおいがした。バビロンの王宮にも同じ香りが常に漂っていた。

「お待ちいたしておりました」

うやうやしく一行を迎えた黒人の召使に案内されて先へ進むと、ハーリヤ サンタル アンバル香油に白檀と竜涎香を混ぜ合わせたような香りがした。眩しい光を

感じて目を上げると、星の模様をきざんだ金色の円蓋が頭上をおおった。その中を、原色の小鳥が数えきれないほど飛び交っている。ダマスコを訪れるのは初めてではなかったが、ケバルについて潜入したさいに目にした場所は限られていた。総督邸の暗い一室と、人通りの絶えた夜道だった。

開け放たれた小窓から射しこむ木漏れ陽のちらつく木枝には、青いくちばしの鳥が金の鎖につながれて羽を休めている。

「なんてきれいな！」思わず声をもらした。

見惚れながら浅黄色のタイルの回廊を通り、深紅の絨毯を敷きつめた部屋に通された。夢の中にいるようだった。

「これが宿なの？」

黒檀の扉が、さつと後ろに押し開かれると、奥から、頭に白い頭巾を低くまき、同じように白の長い衣服をまとい、そのうえに様子のいい黒の上衣をはおった男が姿を見せた。アラブ人やユダヤのように顎髭を生やしていない。エジプト人だとアリから聞いていなければ宦官と思っただろう。

男はジャミールのそばに静かに歩み寄り、高い背をかがめ、手のひらを開いて彼女の手をとった。男からは、えもいわれぬ薫香がした。

「よくおいでくださいました。あなたのことは早馬で、うかがっています」男は流暢なアラム語を話した。「シシャクと申します。お力になれるとよろしいのですが……」

いかにも相手に関心があるふうに話した。宿屋を営む商人というより王侯貴族の雰囲気があった。かつてシリアを支配したエジプトのパロ王の末裔かもしれない。

シシャクはそばに控えているアリにも、旅の安否をたずねた。

アリは頭を上げると、「ケバルの旦那がくれぐれもよろしくと言っておりやした」

「監察官と懇意のお方を粗略に扱うはがありません」とシシャクは言った。そして、微笑みながら「監察官はお元気ですか？」とジ

ヤミールに訊いた。

ベールで顔を隠していたので表情を読まれる心配はなかったが、ジャミールは一瞬たじろいだ。

シシャクは、口をつぐむジャミールに獅子の彫り物のある椅子をすすめた。しばらくすると、熱い飲み物と菓子が出された。

「イシユタルの神に仕える巫女殿に、お顔を見せてくださいと申し上げては失礼でしょうか？」

「尋ねたいことがあるの」ジャミールは用件を切りだした。「ケバールが書状で依頼しているはずですが、ナンナという名の娘を目にしたことがありますか」

「はてさて……記録を調べてみないことには」

「売られた先を教えて欲しいの」

「ごゆっくり、ご相談いたしましょう」

シシャクはそう言うと、扇で風を送らせている召使に何事か指図した。さっきの黒人女が、扉の奥から呼び出された。

女はジャミールに、立つように促した。

「ゆっくりする時間はないの。知らないならそう言ってちょうだい。別の町で探すわ」シシャクは口添えた。「まず、旅の汚れを落としてください」

女の後について、ジャミールは大理石の手摺りのある階段をのぼった。

……あの男を信じていいのかしら……。

階上には、むせかえるような香料のにおいが漂う踊り場があり、長い廊下を行くと、薄物の布地で仕切られたいくつもの部屋が左右に見えた。その前を通ると、女たちの忍び笑いや囁く声が聞こえた。シシャクの妻や側女たちだろう。ジャミールには、彼女らの放つにおいが悪臭に思えた。

扉のある突き当たりの部屋に通された。

天井は平らで、木材で作っており、寄木細工を敷きつめた床には綾織りの敷物が敷いてあった。衝立てのむこう側はと見ると、黄金

の色模様のある見事な絹の垂れ布の吊り下がった寝台があった。

ジャミールは女を下がらせた。

黒人の女は、部屋の外で控えていたが、湯浴みをおえると、覗き見をしていたように現われた。

「おまかせください」と言う。

「なにを……」

女はにっこり笑うと、緋色の長衣に白い衣に刺繍のある半袖の上衣をジャミールに着せかけた。それから、黒く縮れた髪に真珠の網細工を飾り、目のふちを黒々とくまどり、赤い化粧用の染料を唇にひいた。

珊瑚の飾りのついた踵の高い履物を用意した女は、「いかがでございますか」と上目遣いに言った。

さらに、「胸に、香り袋をお付けいたしましたよね。殿方がよろこびますわ」

「いらないわ、そんなもの」
ジャミールは女の手を借りずに部屋を出ると、階下の広間に戻った。

アリは、ジャミールの着飾った姿を目にすると、椅子から立ち上がり、アーツと驚きの声をあげた。

「噂にたがわぬお美しさ……あなたとなら地の果てへでもまいりましょう」

シシヤクは、ジャミールの手をとろうとしたが、彼女は拒んだ。

「階上の女たちはどうなさるの」

シシヤクは耳打ちした。「わが館の女主人になってくださるとうれしいのですが… 望むものはすべて差し上げます」

「じゃあ、先にナンナを探して」

シシヤクはやれやれという顔つきで、ジャミールの知りたがっている情報を話した。「いま、人を使って奴隷女をあつかう商人あきんどのジトを探っているところです。近いうちに連絡が入るはずですよ」

「見つかったら、あたしとナンナを、交換してほしいと言ってちょ

うだい」

「むちゃだ」とアリは呆れ、シシヤクは勇気のある方だと言った。

ジャミールは部屋には戻らず、建物の最上階にある楼閣に登り、そこから町の大通りを眺めた。まだ日は高く、路上には通行人と物売りがひしめいていた。服装もまちまちで商人、遊牧民、農民、男女の別もない。

町の賑わいがジャミールのいるところまでじかに伝わってくるようだった。

……この町のどこかにヤマトがいてくれたなら、どんなに嬉しいかしら。

やがて日が沈むと、シシヤクは、野卑な風体の男をともなって、ジャミールの部屋を訪れた。盗賊だとひと目でわかるような顔つきの男は、ジャミールを自分の目の前に立たせると、舐めるように見つめ、床の敷物に唾を吐いた。

「わるくねえ。いくら欲しい？」

シシヤクは用心深く答えた。「お前のかしらが、ハシムという男から買った女奴隷と交換できないか？」

「それは、できねえ相談だ」

「なぜだ」

「旦那には、たしかに造作もないと言ったが考えても見てくれよ。もうずいぶん前のことだ。いつまでも手元に置いておけねえ」

ナンナはすでに人手に渡っていると男は言う。

「話がちがうじゃないか」シシヤクは気色ばんだ。

「あたしはあの女より何倍も値打ちがあるわ」とジャミールは言った。

「おもしれえ。気風のいい女は、泣き女と違って、ひとつの町が買えるくらいの値打ちがある」

男はそう言うと、ジャミールの手をつかんだ。「さ。行こうか」「だめだ」アリが突然、声を荒げた。「目の前での交換でないと、信用できねえ」

「しばらく待つてくれ」

男は言うが早いか、おかしらに話をつけてくると言い残し、引き上げた。

シシヤクは険しい表情になった。「あなたを、このような目にあわせるケバルの気持ちかわからない」

「ケバルとは関係ないわ。自分で望んだことよ」

シシヤクはジャミールの目を見つめると、「正直に申し上げるとあなたが苦しむ姿を見たいと思う気持ちも隠せません。理由はお尋ねにならないでください」

「あなたのために苦しむことは、金輪際ないわ」

「交換の場に、わたしも同行させていただけますか？」

「面倒だから来ないで」

翌朝、広間に下りると、アリはいなかった。シシヤクはジャミールを庭に連れ出し、見事なアラビア馬を引いてくると、心ばかりの贈り物です、受け取ってくださいと言った。「この馬を？」

「かならず、あなたのお役にたつてくれるでしょう」

それから、乗馬用にと裾の短い衣をジャミールに差し出し、「着替えてください」とすすめた。

「どうして？」

「この町を案内したいのです」

赤いふさ飾りのついた漆黒の馬に乗り、宿の外に出ると、広い通りいっぱいいたむろする人々が彼らを羨望の眼差しで見上げた。

かきわけるようにして馬をすすめたが、迷惑がる者などいなかった。興味は惹かれても、人々はおのおのの商売に忙しく一時も手を休めない。

“すすぐ”という名の広い通りがダマスコの町を貫いていた。この通りは、21世紀のいまも市の中央通りであり、古い屋根つきの市場である。

エルサレムでしばしば耳にした祈祷の声は聞こえない。そのせいか、堅苦しい雰囲気を感じられなかった。

そのことをシシャクに話すと、馬上の彼はかすかに笑った。

「人は往々にして、死んだほうがよい。生まれてこなかったほうがよかつたと思うものですが、それは、神の力にすがっても、どうにもならない感情なのです」

「ここでは信仰は必要ないと？」

「人々はそれぞれ好き勝手に偶像を崇拜していますよ。祭壇もあります」

「でも、エルサレムとは何かが違うわ」「神の名によって、打ちめされたくないのです」

「……？」

「この世での幸福をもたらしてくれる存在が、ダマスコに住む者たちにとっての王であり、神なのです」

わたしたち人の心はユダヤの神の思い通りにならない、従って彼らのいう天罰も恐れないとシシャクは言った。

「何も信じないってことなの？」

彼は目を細め、「さあ？ あなたはどうなのですか？」

そう言つて、手綱とあぶみにかけてた足をつかつて馬の首を回した。中通りを外れた地区にむかつた。高い塔があり、それにのぼると、ダマスコの町が一望できた。

シシャクは空を映す泉や浴場の建物を皮の鞭で指し示した。「目がくらむわ」とジャミールは呟いた。

「あなたにファラオの墓やテーベの神殿を見せたい。壮麗無比な建物です」

「じゃあ、どうしてこの町に？ 女を売り買いするのに便利だから？」

「男をからかったりすると、揉めごとの種になりますよ。男の心は一度こわれると、もとに戻らないものなのです」

「言つとおりなら、男の心は、陶器のようなものね」

「壊れやすいからこそ、男の心の奥にはすべからく悪が宿っていると、わたしは思っています」

「人によるわ」

シシャクは少し、間をおいて、「男には使命があると昔から言われています。それは、この地を人の子で満たすという重大な仕事だそです。物を売ったり、買ったりは、付け足しなんだとね。わたしは、そうは思えない」

男という生き物が脆弱だから、神から使命を与えられるか、あくなき欲望がなければ生き延びられないとシシャクは言った。

「付け足して生きている男を大勢見てきたわ。心が、つまんないものばかりにとらわれてるのよね……」

「あなたは辛辣ですね」シシャクの目に悲哀が宿った。

46話

一方エルサレムでは

ラビ・エズラの立場はサライがいなくなることでよくなるはずだった。しかし、そう考えたのはザドクひとりだったかもしれない。

貧しき者と富める者との差が著しくなるにしたがい、民衆の怒りは聖都の治安を守る司令長官のトリタンイクメスに向かわず、同族でありながら行政の長であるエズラに向けられた。名目だけの地位にすぎないことをユダヤ人は理解しつつも承服しなかった。何よりも、多額の費用をかけながら城壁が手付かずの状態に近いことに人々の不満は集中した。エズラが金品を着服していると疑ぐる者さえいた。事實は、レビ人祭司たちの強欲さと彼らに命令された者たちによる工事への妨害が主たる原因であった。

特権階級である祭司職の彼らはこれまでも民衆が傾倒する預言者が現れるつど、あらゆる手段を用いて排除してきた。人々の罪をあがなうことができるのは、レビ人祭司に限られていなければならなかったからだ。

地方の戦士は農民や牧羊者から収奪することにおいて^{アム・ハーアレーツ}レビ人と利益を分け合っていたが、レビ人が征服者であるペルシア人に迎合することで対立していた。したがって、エズラに対しても彼がペルシア王の利益を計るためにバビロンから帰還したと考えていた。そのため、徒党をくんで、ぞくぞくと都に上ってきていた。エルサレムを防衛する役目のペルシア軍は彼らとの戦闘をさけ、エルサレム郊外の宿営地から動かなかった。

ザドクの母・アシエラは、ようやく上向きかけた都の繁栄を地方の乱暴者たちによって元の木阿弥にされることをもつとも恐れた。

「しばらく、フェニキアに移り住むほうが安全のようね」

「母上は思うようになさってください。わたしは先生の御供をしてダマスコに陳情にまいります」

「陳情ですって！ どれほど懇願しても総督の心を動かせないとお分かりにならないのね。大祭司のように祈願の護符でも売ればすぐにお金は集まるわ」

「神殿の再建にそのような誤った手立てを用いれば、人々の神への信仰をつなぎとめることは永遠に望めなくなりませう」

「ラビに従いつづければいずれ命を失うかもしれないですよ。無知で野蛮な者たちに言葉だけで、神の教えを説いても通じないわ。彼らはイスラエルの民が故国を失ったことさえ理解していないわ。それはラビ・エズラも同じなのでしょうけどね。もうわたしたちに国は存在しないの！」アシエラの声は苛立っていた。

「神は、わたしたちがふたたびこの国の主人となる日が訪れると予言しています」

「頑固者ね。わたしは近いうちに使用人を連れてビブロスに出立します。聞くところによると、あそこなら、永久に税を免除される特典を得られるかもしれないですよ。あなたの学問にも」

「母上に、神の存在を説いても竜のひげを蟻がねらうようなものですね。どんな汚い手立てを使っても、十分の一税を免除されるほうが、よほど重要なご様子ですから」

「あなたは自分の身が恐ろしい目に遭わないと、貧しい者たちがどれほど酷い仕打ちをうけるか、わからないのよ。今でこそ、わたしはこのような身の上になりましたが、その昔は、他人には言えない苦勞を重ねました」「ジャミールになさったことを見れば、母上がどのようにして父上と結婚されたのか、想像がつかます。おかげで、罪もない者への報いがどのようなものかも充分に思い知りました」

「わたくしを侮蔑するのね。誰のおかげでここまで」「アシエラは終わりまで言わずに、美しい顔をそむけた。「どこへでもお行きなさい。二度とわたくしの援助を請わない覚悟でね」

「母上に神のご加護があらんことを、祈っております」

ザドクは母のもとから去った。

ふたたび会いまみえることはないかもしれなかったが、悲しみは
なかった。母の非を責めながらも、心のうちでは何人も救い得ない
己れの無力と優柔不断を彼は恥じていた。

47話

ジャミールが奴隷商人と会えたのは10日余りものちのことだった。

黒人の召使がアラビア人の好むお茶を運んでくると、シシャクが別室から現われた。彼は金の盆にのせた水差しから、褐色の液体を小さめの器に注いだ。

「思いとどまってください。煮ても焼いても、食えない連中ですよ。承知しているのか、とシシャクはジャミールを見つめて言った。

「あたしも似たようなものよ」

広間には女性の胸像や、記号のような鳥や獣の姿を描いたレリーフがあつた。彼女はそれらに見入っていた。ペルシア人は王族や戦士は描いても女性を描くことがなかった。人格神・ヤハウエを信仰するイスラエルの民もまた人物を描くことを神に許されていない。エジプト人はそのどちらとも違っていた。

シシャクは問いつめるように、「逃げのびる自信はあるのですか？」

「さあ、出たとこ勝負ね」

召使が、男がやってきたことを告げた。

シシャクはジャミールを男の視線から遠避けるために、カーテンの影に立たせようとした。

「いいの」と彼女は拒んだ。

男は、入つて来ると、ジャミールが口をつけなかつたお茶をひと息で飲み干し、いますぐ門の外まで行くと言った。

「そこでナンナを引き渡す」

「まちがないいな」とアリは念を押した。「交換する女はナンナという名なのだな？」

男は、つながった眉間を寄せて啖呵をきつた。「シシャクの旦那と知り合いの俺が、まさか騙すわけがねえ。それほど信用できねえ

なら、この話はなかったことにしようぜ」

「ラクダを用意しましょう」とシシャクは言った。

男は腰をうかし、先方がお待ちかねだと言った。

ジャミールはしばらく待つて欲しいと言つて階上にあがった。頭に額帯を巻いて髪をまとめ、男の身なりをし、寝台に掛けてあつた大きな一枚の布をはがし、それで全身をおおった。

「これで身軽になつたわ」

ジャミールはアリのまたがるラクダの背に乗せられ、男に従つて入り組んだ街路を西へ向かった。徒歩の男は歩きながら、アリに不従順な女奴隷の仕付け方をとうとうと説いた。酔つ払つていゝような口調が耳障りだった。

「鞭をくれてやるのが、一番でさあ」

アリは頷くだけで一向に話にのらなかつた。「前を見て、しっかりと歩け」

男の足元がふらついているほうが、よほど気がかりの様子だった。男は踊り出すのではないかと見えるほど上機嫌だった。

「ここに女がいりゃあなあ、すぐにでも押し倒すんだが……」

ジャミールは男の変化に不快な思いを抱く一方で疑念が生じた。外への大通りに抜ける門は3ヶ所あつたが、どの門も夜間は固く閉じられていた。しかし、男が夜警の兵士にシシャクの名前を出すと、西の門近くへの厩舎の奥につくられた抜け道に案内された。特別の事情がないかぎり、この道は使用されないということだった。道に入る鉄の扉から出口に出ると、松明を手にした別の男が待つていた。

ナンナとおぼしき女の姿は見えない。

「話がちがう」と言うアリに、男は動揺した気配を微塵も見せず、先を急いだ。引き返す判断をつけられないでいるアリはいくとも後ろをふり返つた。ジャミールは心を決めていたので、ラクダをすめるように目で合図した。

町を後にし、白い樹皮のオリーブの林をぬけると、なだらかな坂

を下った。3人は、太陽の沈んだ方角に向かって進んだ。

黒々した小石だらけの道は、岩山のはるか向こうまで月の光で見通せた。

陽炎の燃える昼間の大通りとは違ってかわった静謐なたたずまいだった。

大雨の日にはほとばしるのだろう、泥水でけずられた崖下を通り、風化した岩の丘と丘の間をぬけ、どこもしれない場所へと向かった。

厳しい寒さではなかったが、月灯りが岩だらけの白い道に跳ね返るたびに、ジャミールは頭からすっぽりかぶった布の端を押さえた。布地の下には、サライから取り上げた短剣を忍ばせていた。

「着きやした」

松明を持った男はそう言って、いばらと灌木の荒地を指差した。

銀を溶かしたような月が星で埋まった中天にかかっていた。

「ここで落ち合う手筈なのか？」アリは男に問うた。

周辺は、すべての音を飲みこむようにしんと静まっている。

男は、へえと言ったきり黙っている。

乾いた地面が突然、揺れ動いた。覆面をした男たちが地中から沸き出るように踊り出た。彼らは凹地に這っていたようだ。

「何をする気だ！ おまえたちの神に恥ずかしくないのかッ」アリは声を荒げた。

男は声を飲んで笑った。「ウツザー様は、下衆野郎を殺めてもいいとおっしゃっている。殺せ、と今朝もお告げがあつてな。いいか、命はないものと思え！」

アカシアの木に宿るとされる、土着の神ウツザーを信仰している男が吐き捨てて口をつぐむか、つぐまなうちに男たちは半月刀をぎらつかせた。

ラクダは後退り、全身をぶるつと身震いさせた。そのまま、じつと動かない。

……馬をもらつとくんだったわ。

男たちは雄叫びをあげると、ラクダを取り囲んだ。アリは長剣を抜いて彼らに立ち向かったが、戦闘に不慣れなのか、防戦一方だった。

ジャミールは体に巻き付けた大きな布を脱ぎ捨てると、男たちの頭上を一瞬の間で飛びこし、地面に降り立った。アリに代わってラクダを走らせるつもりだった。

男たちは、アリに斬りかかった。アリは剣を振り回していたが体勢をくずし、ラクダから転がり落ちた。

「なんて無様なの！」ジャミールは、暗目でも草を食んでいるラクダに向かって走った。シュシュ……と耳のそばで風をきる音がした。

危険を感じた瞬間、闇の中からまっすぐに伸びてきた細いものがジャミールの首にからまった。皮製の長い紐だった。まるで意志をもった生き物のように喉首にくいこんだ。

ジャミールは大きく前にのけぞり、うつぶせに倒れた。その拍子に石ころにあたって、眉が切れた。アリに助けを求めようとした。

……声が出ない。

目に血が沁みいる。覆面をした皮紐の持ち主は魚を釣り上げるようにジャミールを手元に引き寄せた。短剣で皮紐を切り離そうとしたが、相手はジャミールの動きを抱きかかえることで阻んだ。麝香ムス鹿の強いにおいがした。

皮紐が締めまり、無の状態に入る一瞬前に、月明かりに照らし出された金色の髪が見えた。

……サライなの？！

ジャミールの消息を尋ね歩いて、ようやくここまでたどり着いたというのに、彼女は闇の中に消えてしまった。後に残った男はサライ同様、戦いに適さないアラブ人の男がひとり。「えらいことになった」と言いながらも、あわてた様子は微塵もない。何事も神の思召しと考えているのか、肥った体をもてあまし気味に大きく息をついている。

「追剥ぎどもは追っ払ったんだがなア」

「勝手に、逃げていったただけだろ」サライは吐き捨てた。「俺たちはなんの役にも立たなかつたんだよ」

「お前は何者だ？ 白人奴隷か」

「ちがうッ」

「ジャミールをどうして知っているんだ？」「あいつを、助けにきたんだよ」

「ほお、どうして？」

「あなたに関係ねーだろ」

「そうだな」と頷いたアラブ人は、「一旦、帰るしかない」と独り言を呟くが早いか、ラクダに乗って立ち去ろうとした。

「後を追わないのかッ」

「どっちに逃げたか、お前、わかるのか？」「おっさんはジャミールの護衛役じゃないのか！」

「こういう場合は戻って手勢をかき集めなきゃならん」

待ってくれと引き止めたが、白人奴隷に親切する義理はないとアラブ人は言った。

「なんて野郎だ！」

怒りに震えながら呆然と立ち尽くすサライの目に黄金のきらめきが映った。サライの短剣だった。

「ジャミール、ジャミール……」

サライの声が暗やみの岩間にこだました。「畜生！ お前を拉致した連中を 俺は地の塵のように細かく砕いて、巷の泥のように踏みつぶしてやる。（サムエル記下22：43）」

ダビデがフィリスティア人と戦った時の言葉を借りると、彼のように神から高く挙げられた者になった気がした。

気づくと、人さらいの連中に捕らえられたジャミールは足枷をか
けられたうえに後ろ手に縛られ、板敷きの部屋に投げこまれていた。
短剣はなくなっている。

騒々しい酒盛りの声にまじって、低くやさしい豎琴のしらべが、
どこからともなく伝わってくる。

耳を澄ました。

……ナンナかしら？

よろけながら立って、辺りを見回した。扉の鉄格子からは、松明
の灯った廊下が見えた。

切れた眉の血は固まっていたが、体のあちこちが痛む。

豎琴の音色はいつまでも続いた。ナンナが弾いているのかもしれ
ないと思った。

……これじゃあ、助けようがないわ。

ジャミールは廊下の様子をうかがった。

「気がついたかあ？」

鉄格子のすき間から、のんびりした声が聞こえた。

「ハシム！」

「へへッ。わいやがな」

猿にそっくりのいつもの顔が見えた。

「どうしてここにいるの？」

「つい最前のことやけどな、事のなりゆきやとゆーても信じるか？
信じへんわなあ」

「奴隷商人の手先になったの」

「一寸の虫にも五分の魂ゆーてな、こつ見えても、わいなりのケジ
メちゆうもんがあるんや」

「ナンナはここにいるの！」

「ナンナ？」

「あんたが売った娘じゃないの！」

「そやつたかいなあ」

「話にならないわ。自分でなんとかする早くここから出してよ」

「そないに右から左に鍵を開けられると思うか。ここの連中の仲間になるんでさえ、ひと苦労やったんやからな。ま、顔見知りの旦那がおつたからなんとかなつたんやけどな」

ハシムは、難儀したでえと言って笑った。「なんでもいいから、さっさと逃がしてよ」「急がば回れや」

「のんびり回ってる間に、ナニされるかわからないじゃない！」

「まあ、そうあわてんでも、ゆっくりしたらええがな」

ハシムは齒切れのわるい返答をした。口をもごもご動かしている。「何を、食べてるの」

「生のイナゴや。頭と脚と腹はとってるで、いるか？」

「いらぬい そうだ！ サライを見なかった？ 目の錯覚だったのかしら」

「知らんがな。先の先までお見通しの神サンやあるまいし……」ハシムは松明の火でイナゴを焙りながら、「なんでまたダマスコくんだりまで来たんや」

「話せば長くなるから、はしょって言うけど、ヤマトがいなくなつて、だからあたしも後を追つて」

「方角がちがうがな」

「どういうこと？ あんたあの子の行き先を知ってるの！」

「しらんゆーてるやろ」

「とにかく逃がしてよ」

「そんなことしたら、わいが、砦の奴らにたちまち捕まって、それこそ蛇の口に蠅」ハシムは首を斬られる手真似をした。「お陀仏やがな。万事、天の神の思召し」

ハシムの話の合間に、男たちの笑い声が怒涛のように聞こえてくる。

「あたしはどうなんの」

「さあ？ 沈む瀬もありや、浮かぶ瀬もありや」

「まア、沈むことのほうが多いけどなとハシムは言った。

「もう頼まないわ。自分の頭の上の蠅は自分で追っ払うしかないものね」

ハシムは呆れ顔になり、「何をいまさら、そもそも、すぐに捕まるドジなんはわいのせいやないでえ。ジャミールが先に、わいを見限って勝手にトンスラしたんやないか。それで、困ったら困ったでわいに頼りよる。ダマスコの売娼宿の旦那に頼んでこうなってもたのにやなあ、なんで尻拭いをわいがせんなんのや。だいたい、あのシシャクちゆう男は好き者でなあ。美形でさえありや、女やったら、奴隷女やろつと、人妻やろつとおかまいなしに売りとばす名つての女衞や」

「騙されたってわけ？」

「しつ。誰かくる」

「血は止まりましたか」低い声でした。

「なんとか」ハシムは平身低頭した。「ラクダの小便をぬつときましたよって」

「ええっ！」ジャミールは思わず眉をぬぐった。

鉄格子ごしに清潔で整った顔がのぞいた。声の調子や容貌は宿で会った時のシシャクと寸分の違いもない。物腰に気品があつて、瞳の色は夜の湖のように静かだった。猛々しさはどこにも見えない。

「神殿の巫女という触れ込みでしたが、その姿のほうがあなたらしくて似合っていますね」

シシャクはハシムをふりかえると、「ケバルからの書面には、ジャミールを総督に差し出せと書いてありましたが、その件については承服しかねると彼に伝えてください」

「仰せの通りに」

「ケジメはどーなったのよ」ジャミールはハシムを睨んだ。

ハシムは身をすくめると、「せちがらい世の中やよってなあ、しようない。堪忍やでえ」

「それ相応のものは支払うと、使いの者への伝言につけ加えてください」シシャクの声は耳に心地がよい。「あまたの神殿娼婦と寢所をともしてきました。あなたが、あなたのように美少年と見紛う女性をはじめ、目にしました。聡明で美しい宦官にも劣らないでしょう」

「タマなしの連中といっしょにしないでよ。あたしはあいつらみたいに根性なしじゃないわ」

「生娘きむすめの巫女をものにする、力を得て長生きできるそうですよ」「ほんまでっか？ 初耳やなあ」とハシムはとぼけた声で言った。

「わたしもあるう者が、戯言を吐いてしまいました」

ハシムはすかさず、「これこそ神のご加護による 負け知らずになるという全能の神の有り難い思召かもしれまへんな」

「ペテン師のそいつは、神なんて信じちゃいないわよ」とジャミールは遮った。

「このふてぶてしさはどうでしょう！」シシャクは声をあげて笑った。「これほどの窮地に陥っても、涙ひとつ見せないとは称賛に値しますね」

「こんなところまで連れてこないと、襲えないなんて」「ジャミールは小首をかしげる。「手間暇かけないと、あなたは愉しめないのね？ もしかすると宦官みたいに一物が役に立たないんじゃないの？」

「卑しい口をきくのはおよしなさい。あなたに似つかわしくありませんよ」

「これがあたしの本性なのよ。がっかりした？」

「あなたが陶酔の涙を流して、愛を乞うさまを見たいものです」

「あなたのために涙を流すくらいなら、いさぎよく死ぬわ」

シシャクは鉄格子によりかかると、「あなたが男子ならともに馬で駆け、終生の友となったでしょう」

ハシムはその背に言った。「ほんなら、わいはそろそろ引っ込みますよって」

扉が開き、シシャクが入ってきた。真珠の髪飾りと珊瑚をちりば

めた履物を、手にしている。

「あんたが、シリアのかしらなの？」ジャミールは訊いた。

「そのようですね。ペルシア人の総督ではなく、エジプト人のわたしがシリア一帯の統治者だと民草は思っているようです。交易路の安全な通行も、子供たちがつつがなく暮らせるのも、すべて温情あるわたしの計らいによるとね」

「奴隷商人が影の支配者とはねえ……」

「わたしは奴隷商人ではありません。ただの仲介役です。この砦を起点にして、人買いに励む彼らと、美しい女たちを求める私利私欲に奔走する者たちとの橋渡しをしているのです。むろん、女たちの要望をもっとも考慮しています」

こういうのを慇懃無礼というのだろうか。ジャミールはしげしげとシシャクを見つめた。

「あたしは呪われた女なのよ。何人もの男を手玉にとってきたんだもの、あんたと寝ることなんて、なんともないわ。でも、あたしと寝たがる男は頭がへんになるか、こっぴどいめに会うのよ」

「年端もいかぬあなたの口舌で心を乱すような、わたしではありません」シシャクは不適な笑みをうかべた。「手や足の戒めを解いてほしくないのですか」

「自由にしてくれるわけじゃないんでしょ」「わたしの居室で、これらを身につけていたくださいなのです」シシャクは髪飾りと履物をジャミールの足元においた。

「こんなもの変装の時にしか、役立たないわ」

「とても高価な品なのです。女性なら一度は手にしたいと思うはずなのですが　真珠はアラビアの海で採れたのですよ」

シシャクは近寄ると、「震えていますね、怯えているように見えますよ」

「寒いよ。だって、マントもないのよ」

シシャクは黒い上衣を脱ぎ、ジャミールの肩にかけながら、「生意気な淫売女め！」と囁いた。そして、後ろ手に縛られた縄を解い

た。

「思い通りになると思ったら大間違いよ」

消えたはずのハシムが扉の外からとりなす。「勇者は偉大なり。強者は弱者にお手やわらかにたのんまずう」

ジャミールは壁際に後ずさった。足を動かせば、鉄の輪が足首にくいこむ仕掛けになっている。鎖の先についた重りのせいだ。

「あたしは、あんたみたいに思い上がった男が、反吐が出るほど嫌いなよ」

ジャミールはシシャクの顔に唾を吐きかけた。

シシャクは少しも表情を変えなかった。「わたしはあなたの目にそのように映っているのですね」

残念ですと言って、シシャクは腕をのばし、ジャミールのうなじの痣に触れた。「許してください。傷つけたくはなかったのですよ」

ジャミールは後ずさった。

「あなたと縁えにしが結びたいだけなのです」

シシャクが言ったその時、若い女が扉の中に駆けこんで来た。女は、色鮮やかな衣をいくえにもまとったアイシャだった。エズラの弟子・エライジャの妹と出会う機会などなかったジャミールには見知らぬ女だったが、彼女はシシャクの前に立ちはだかると、おやめくださいと叫んだ。

彼は穏やかな声で言った。「どうして、ここへきたのです?」

アイシャはジャミールをふり返ると、いきなり彼女の頬をはげしく打った。「お前なんか、さっさと死んでおしまい!」

「何すんのよッ」

「巫女のくせに、わたしからシシャク様を盗ろうなんて、なめた真似は許さないわ」

シシャクはいぶかるふうに、「あなたはジャミールを憎んでいたのではないのですか? 彼女の話をした時から、辱めてほしいと懇願したではありませんか。だから、わたしはわざわざ、この皆まで連れてきたのですよ、ペルシア人の総督に召し出さずに」

「ええ、ええ、そうですね、わたしはこの女が死ぬほど嫌いですが、それなのに、シシャク様はわたしにはけっして与えようとなさらない特別の慈しみを、この女にお授けになるおつもりです」

「わたしは……」

「この女を、この男たちにお与えください。そうでないなら、この女を殺して、わたしも死にます」

アイシャは息もつかずに言ったあと、ジャミールにつかみかかった。

「およしなさい」シシャクはアイシャの腕を捉えた。「あなたは、あなたの希望した通りに、メディアの太守の寵姫となり、栄耀栄華を極めればよいのです」

「シシャク様はこの者に心を奪われておいでです。その目を見れば、女のわたしにはわかります」

シシャクは一瞬困惑した表情を見せたが、すぐに平静にもどり、「太守は契約をむすんで、あなたを妻のひとりに迎えてもよいとまですべて言っているのですよ」

「シシャク様こそ唯一無二のお方。どうか、あなた様の妻に」

「なんで、こんな男の妻になりたいのよ」ジャミールは嘲笑した。

「どの国であれ、高貴な者の掟では、女奴隷との正式の婚姻はむずかしいはずだ。」

「シシャク様、お願いがございます。この女をわたしの召使にお下げ渡しくださいます。誰が主人か、はっきりさせるためにも焼き印を押してやりとってくださいます」

アイシャは跪くと、シシャクの手や足に口づけた。シシャクは眉をしかめた。

「一日も早く、あなた様の妻になりとってくださいます」

アイシャは爪先立ってシシャクに唇に接吻した。

シシャクの怜悯な目に嫌悪の色がうかんだ。「所用を思い出ししましたので、しばらくの間、待っていてください」

シシャクの姿が見えなくなると、アイシャは床に置いたままになつてゐる髪飾りと室内用の履物を欲しいと言つた。

ジャミールは頷くとアイシャにただした。「あたしを知つてゐるの？」

「ザドクの家に住んでるでしょ？」

「とつくに出てきたわ」

「わたしは、ザドクをずっと想つていたわ。でもわたしの家は貧しかったし、系譜も彼の家に釣り合わなかつた。でもあんたは、ザドクの家によすやすと入りこんだ」

「何か、勘違いしてるわ。ザドクとあたしはなんの関わりもないわ」「あんたはそうでも、ザドクがあんたを好いてゐるって、あの屋敷の者はみんな噂していたわ」

「あたしを憎んでゐるあんたに、こんなやり方で救つてもらつても、よろこべないわ」

「贅沢は言わないで」アイシャはぴしやりと言つた。

彼女はいやがるジャミールを回廊に連れ出した。足枷をしたままで歩くには回廊は長すぎた。この砦が小さいものでないことがわかる距離でもあつた。

閉じこめられていた部屋とは、真反対に位置する部屋に引きいれられたジャミールは、毛皮の敷物にまず驚いた。象牙の装飾が施された寝台が部屋の真ん中にあり、金のはめこみ細工のある衣装箱がふたつもあつた。窓からは、雲のかかつた夜空を悠々と渡る月を仰ぎ見ることができた。戸口には、鍵もかかつていない。

「けつこう、大切にされてるみたいね」

「シシャクは、わたしに指一本、触れないわ」

アイシャはつぶらな瞳を伏せると、呟いた。「彼の妻になれるなんて素晴らしい幸運よ」

「きつと後悔するわ。相手は奴隷商人じゃないの」

「いいえ。ダマスコでもつとも力のある男だわ」

ジャミールは、シシャクのほんとうの恐ろしさを知らないと言つ

た。

アイシャは涙を流して笑った。「わたしに出し抜かれたから、それが悔しいのね。彼をじらして、結婚にこぎつけようとしたのに邪魔されたからでしょ？」

彼女の自尊心を傷つけない諦めさせ方はないか、とジャミールは思案した。後悔をしたくなるような思い出はない、と言い切るアイシャに、なんとさえいいのだろう。

エジプト人のシシャクに嫁ぐということは、ユダヤの神を捨てることになる。ジャミールは言った。

「彼には妻も側女もないわ。正式の契約書にサインさせるわ」

「外出もままならない女のひとりになりたいの？」

「兄のエライジャに会うことがあれば、伝えてほしいわ。わたしがすこしも怨んでなどいないとだけ……」

「もう、ザドクを想っていないの？」

「思い違いをしないで。わたしは神よりもシシャクを選んだの。その決心をさせてくれたのはあんたよ。わたしのために、ここにこうしている、あんたのおかげよ。ごめんなさいね。あんたを憎いと言えば、買わないと思ったのよ。それがこんなことになってしまった……」

「あたしが、ここへ来たのは、ザドクに頼まれたからよ」

ジャミールは二つの嘘をついた。彼女を助けるためにここに来たのではないこと、ザドクに依頼されていないこと。

「あんたを犠牲にして、ザドクがわたしを助けるはずないわ。それに、わたしはもう、ザドクのことなど、どうでもいいの。わからないかしら。この心にあるのは、シシャクへのたぎる思いだけよ」

「ザドクはあんたを思ってるわ。母親に遠慮を言えなかったのよ」

ジャミールは、アシェラの美しい顔の裏に隠された、もう一つの顔を思い浮かべた。

「もう遅いわ。わたしの一族がすべてを失った時に、なぜ……」

アイシャの両親はエルサレムへたどり着いてすぐに、病いに倒れ、バビロンから持参した金品をすべて神に捧げると言い出した。

エズラにつき従う強行派がそう要求したためだったが、アイシャは心のどこかでザドクの助けをまっていたにちがいない。アイシャは両親にいくとも思い直すように懇願したが、熱病に冒された両親は何かにつかれたように神殿に詣でた。そして、エズラはその行為を誉めたたえ、彼らの財産を神殿に納めた。「それで、どう、神殿はできた？ いいえ。あんたも知っているわよね。城壁も何も無いわ」

「ザドクがラビに背いて、あんたを奴隷として買えばよかったの？」

ザドクは女奴隷を側女にするような男じゃないわ」
ながい沈黙があった。

「ジャミール、あんたを信じていいの？」

アイシャはジャミールを見つめると、「ヤハウエに誓ってくれる？」と言った。

神には誓わないが、約束は守るとジャミールは答えた。それから、見張り番のハシムを呼ぶようにたのんだ。

「さつきあぶないところで、アイシャを寄こしてくれたのは、あんたね？」

ハシムはニタリと笑った。

「足枷を外してよ」

「よっしゃ」ハシムは、武器用の鉄の斧を使い足枷を断ち切ると、外の様子を見てくると言っていなくなった。

アイシャは黒い瞳をきらきらさせて微笑んだ。「胸が高鳴って、宙を舞ってる気分よ」

愛らしい。彼女だけでも逃がしてやりたいと思った。

「ザドクはこんどこそ、わたしを迎え入れてくれるかしら」

「ええ、かならず……」

彼がそうするとは思えなかったが、アイシャを落胆させたくなかった。

酒盛りの終わる頃まで、逃げ出さなくては機会はなくなる。この間にも、シシヤクがアイシヤに求愛するおそれは充分にあった。ペルシアの高官に高値で売り飛ばすために、シシヤクはアイシヤに手をつけなかったようだが、今宵も難を逃れられる保証はどこにもない。

ジャミールは心配を口にした。

「気分がすぐれないと言うわ」アイシヤは肩の房飾りをわざとゆすつて、悪戯っぽい笑みを頬にうかべた。「女ですものね。そのてんは、だいじょうぶ。やさしいシシヤクを騙すなんて簡単だわ」

ジャミールはそれをきいて、シシヤクが多少憐れに思えた。アイシヤの置かれている部屋は奴隷女にあてがわれたというような粗末な代物ではなかった。珍奇な品物や宝石をならべた化粧台はもとより、色つきの蠟燭ひとつとつてみても、エルサレムでの彼女の暮らしとは比較にならないはずだった。

「ねえ、似合う？」

アイシヤは、真夜中なのに、着替えに余念がない。髪飾りを繻子の小袋に入れながら、「あんたは野育ちなので美しい物の値打ちがわからないのよ。ほら、この色、輝き！これ一つで、たいがいの物が買えるわ。わたしはバビロンにいたとき、それはもう贅沢な暮らしをしていたのよ。召使だって何人もいたわ」

「そんなの、いつときのたのしみじゃないの」

ジャミールは宝石が欲しいと思ったことなどないと言った。しかし、アイシヤには聞こえなかったようだ。

「まあ！」彼女は小さく叫んで、珊瑚の玉飾りのついた履物に足を入れた。「なんて、すてきな。ザドクの妻になっても、これほどの品は買ってもらえないわね」

「走りにくいから、逃げるときは脱ぎなさいよ。いまからサンダルに履き変えておいたほうが」

ジャミールの言葉に重なって、床を踏み抜くような騒々しい足音がこちらにむかってきた。

「シシャクだわ。どうしようかしら」アイシャはふふんと笑った。
「あんたには悪いけど、断りたくないわ」

足音はシシャクではないと気づいたが、ジャミールはアイシャの肩に手をおくと、「あんたの魂に真実は宿ってないの？」

やはり、シシャクではなかった。ぶよぶよ肥ったアリは部屋に入るなり、こぶしでドンと胸を叩き、これから婚礼だと言った。

「あんたも仲間だったの？」

「それがどうかしたか」

「あほらしくって、怒る気にもならないわ」「わしこそ、お前を崇めてるふりをするのにおおじょうしたぜい」

アリはうそぶくと、いきなりアイシャを肉厚の肩に担ぎあげた。

驚くジャミールを尻目に、さっさと出て行こうとしたが、扉の外へ出る前に突き出た腹を後ろへ回して言った。「白人奴隷が、お前を心配して追ってきていたが、あれじゃあ、助け出す前に砂漠でおっ死ぬな。どんくせえやつだ」

「似たり寄ったりじゃないの」

そう言っつて、従いて行こうとすると、アリはジャミールを足蹴にし、彼女が転倒している間に鉄の棒を立て掛けて戸締まりをした。

「なんてことするのよ！」ジャミールは声をかぎりに喚いた。「ハシム、ハシム、いるなら返事をして！」

なんの応答もない。床には、繻子の小袋が落ちていた。ジャミールは唇をぎゅっと噛みしめた。

ほどなく涼しげな微笑をうかべたシシャクがやってきた。

「どつという料簡なのよ」ジャミールはシシャクを問い詰めた。「アイシャを妻に迎えるんじゃないの？」

「ひと言でもそんな約束をしましたか」

アリは以前から彼女を側女のひとりに迎えたがっていたという。

「なんて不実な男なの！ あの子はあんたに嫁げると言っつて、どんなに喜んでいたか」

「あなたたちの内緒話は、隣の部屋に筒抜けですよ」

シシャクはジャミールを指さすと、「彼女を酷いめに遭わせた張本人は誰でしょうか。少なくとも、わたしではありませんよ」

「卑怯者っ」

「もし助けたい気持ちがあるのなら」シシャクはジャミールの髪に触れた。「あなたはわたしの思いを受け入れてくださらなくてはなりません」

ジャミールの耳に、アイシャの悲鳴が聞こえた。

「わかったから、アリをとめて」

シシャクは扉の外にいた男に何事か囁いた。男はすぐにいなくなつた。

それから、シシャクはジャミールを隣の小部屋に誘つた。殺風景な部屋だつた。粗末な寝台とニスのを塗つた収納棚に小さなテーブルだけだ。豎琴だけが装飾品だつた。

「ここにきた時だけ、弾くのです」

シシャクは両開きの収納棚を開け、中からいくつもの小瓶を取り出した。

「香料を調合すると、媚薬になることを知っていますか。あなたにと用意したものを、使いの男が間違つて飲んでしまい、あわてました」

額に焼き印のある半裸の奴隷が2人、足音を忍ばせて入ってきた。

「香料入りの蠟燭を灯しなさい」とシシャクは命じた。

夜がしらみはじめる前に、サライは複数の足跡をたどって禿げ山を登っていった。たった1人でジャミールを救い出せるとは露ほども思っていなかったが、そうせずにはいられなかった。

ジャミールがさらわれたと知ったのは、ダマスコに着いた日のことだった。市場で、ジャミールの名と顔かたちを言つて、物売りに尋ね歩いていると、黒人の女がそつと歩み寄り、奴隷商人に捉えられたと告げたのだ。

「なんだつて！」

有り金をぜんぶをやるとサライは言つたが、女は、金を払う値打ちのない女だからいらないと言つたり、金貨ならもらつてもいいと言つたり、言を左右にしてすぐには教えようとしな。じれたサライは、それならいいと言つて立ち去ろうとした。

「わかつたよ」

女は安宿にサライを誘うと、日が暮れるまで、そこで飲み食いした。

酔つ払つた女は涙をぼろぼろ流しながら呟いた。「あの女のどこがそんなにいいのさ。あの程度の娘ならいくらでもいるのにさ」

「いない！」サライは周囲の客が耳をそばだてるような声で言つた。

黒い肌の女はなめらかな頬に流した涙を手のひらで拭くと、「あたしは黒人奴隷だけど、あんたは白人奴隷なんだろ？」

女の同情をかつたほうがいいと判断したサライは黙つて頷いた。

「ひどいめにあつただろ？ あたしなんて、いまのご主人様に買われるまで、水汲みに料理に老人の世話までやらされてね、ユダヤ人の人使いの荒さといつたらないんだ」と愚痴り、「だからさ、いまは何不自由ない暮らしに満足しなきゃ罰があたるつてもなんだよ。でもさ、もうこんな人生、飽き飽きしてるんだよ」

「俺だつてそうさ」と言つたものの、女の気持ちがサライには皆目

わからなかった。飽き飽きする出来事に遭遇したことがないからかもしれないと思った。

「あんたはまだ若いから、そんな思いを知らないんだろっね」女はサライを見つめると、「知ってれば、あの女のためにこんな根掘り葉掘り、あたしに訊かないものね」

サライは正直に言った。「あいつは俺のことを、ラクダの糞ほども思っただけで、俺のほうはあいつのことが気になって、気になっただけで、あいつのことがないんだ」と言っても、どうしようもないから思っただけで、あいつのすることを見ていただけなんだ」

「羨ましいねえ……」女は遠くを見る目になった。「あたしの頼みをきいてくれるかい？」

「どんな頼みだ？」

「あたしの惚れた男が、あんたの大事なジャミールをものにしてるんだよ」

「ほんとうか？」

「妬ましい心が重くってね」

女はシシャクの名を告げると、パピルスに包んだ粉状のものをサライに手渡した。

「事と次第によっちゃ、この媚薬を、シシャクに服ませてほしいんだよ」

「媚薬……？」

「においは竜涎香に似てるんだけど、飲めば血を吐いて死ぬのさ」「毒薬なのか」毛穴という毛穴が粟立つような恐怖をサライは覚えた。

「ジャミールを正式の妻にするようなら、シシャクを殺しておくんだよ。いまの館にいるのは、金持ち相手の娼婦ばかりで、あいつの側女はいやしない。だから、女主人の役目はあたしが担ってるんだ」毒をもるやり方も、城壁の外へ出る方法も女が教えてくれた。サライは毒薬を懐にすると、取引場所にむかって飛び出した。月が昇

る頃になって目的地に行き着いた。しかし、ひと足遅かった。悔や
んでも悔やみきれなかった。手の届く距離にまで近づいて、ジャミ
ールを見失ったのだ。

「相愛の男女は、まずはじめに竜涎香を混ぜたお茶を飲むんですよ」
シシャクがそう言うと、2人の奴隷のうちの1人が、ポットに入れたお茶をジャミールに差し出した。

「わたしも飲みますから、あなたも飲み干してください」

シシャクは閉めきった室内で沈香、麝香、竜涎香を混ぜた香料をつくり、陶器の皿の上で焚いた。刺激の強いにおいに目眩がし、立つていられなくなった。寝台に腰かけた。いくつも灯された蠟燭にも竜涎香が練りこまれているのだろう、ひと呼吸することに、かぐわしい香りがジャミールの心と体を弛緩させてゆく。

「ともに艶麗な神秘の香りを満喫し、恋の戯れにふけりましょう」

……

シシャクが衣服を脱ぎ捨てると、奴隷たちは彼の全身に焚香料を塗った。1人が上半身を、もう1人は下半身を弄ぶように両手を使ってさすった。

「あなたには、わたしが塗ってあげます。バラ水もありますよ」

ジャミールの意識は境界を失いかけていた。羞恥心と自尊心との戦いだった。ジャミールの体はこのまま愉悦をむさぼることを欲していたが、心の声はちがっていた。

……ジャミール、ジャミール……あんたの魂には真実が宿ってないの！

熱い手が胸元にふれた瞬間、彼女の身内に信じられないような力強さが戻ってきた。半身を起こし、忘我の心地でいるシシャクの裸体を押しつけた。

濃密な香りを打ち消すように、馬のいななきが間近に聞こえた。

つづいて、男たちの叫喚が沸き起こった。

「ああ……」シシャクは寝台に沈みこんだ。「このままでいさせてください」

パチパチと弾ける音がした。

ジャミールは音の正体に気づいた。

扉を開けると、回廊はもうもうと立ちこめる煙で何も見えない。奴隷たちはどこに行ったのか？

火炎と煙が回廊の下から這い昇ってくる。

シシャクの頬を叩いたが、正体をなくしていた。ジャミールは、厚手の衣をシシャクにかぶせると、自分は額帯をバラ水で濡らして顔に巻いた。

「ジャミール、無事か！」ケバルの声がした。

斧が見えた。

「誰が、火をつけたのよっ」

「ハシムだ」

ケバルの後ろにいたハシムは、「お手のもんやよつてな。丸焦げにならんうちに退散しようでえ」

「あんたたちのすることって、わけがわかんない」

「こいつは、どないする？」

シシャクは午睡でもしているように平和な顔つきで寝返りをうつた。

ケバルはシシャクを抱き起こすと、ハシムに手伝わせて背中に背負った。

「監察官の命令で殺すことになっているんだが、死んだことにして助けてやつても損はないだろ」

交易路と町を牛耳る人への見せしめとして、監察官はエジプト人のシシャクを血祭りにあげるらしい。

「あっさりダマスコに行かせてくれると思ったら、こういうことだったのね。先に言っというてよね」

「ハシムが斧を使ったときに気がつかないお前さんが、トロいんだよ」

煙幕のおりた回廊に行く。

「アイシャを置いていけないわ」気が動転してすっかり忘れていたのだ。

「何ゆーてんねん！ 三十六計逃げるにしかずやないか」

ジャミールはハシムの止めるのもきかず煙幕をくぐり、回廊をひた走った。

「ジャミール！ どこにいるんだ」

すさまじい熱気と突風が、火の海を突きぬける。

轟音もろとも壁に打ちつけられたサライは、起き上がるうともがくが、煙を吸った体は思うように動かず、床に這いつくばったまま足音のする方向に頭を上げた。

炎の海の中を、ガゼルのような速さの少女が突き進んでくる。

全身の力がぬけていくのがはつきりわかった。

無意識に手を伸ばしていた。

ジャミールは炎を突っ切り、サライを助け起こすと、いつものように怒鳴った。「助けにきて、助けられてどーすんのよ！」

火の粉の舞う中でもたじろいだ様子は微塵も見せない。サライは思わず寄り掛かった。「しっかり歩いてよ」

「お前、ダビデみたいに強いなア」

「あんたが弱すぎるのよ」

2人は命からがら砦から脱出した。

闇の中、焼け落ちる砦にむかって、ジャミールはなんどもアイシヤの名を呼んだ。

まさか、エライジャの妹がここにいると思ってもみなかったサライは、「あの子がここにいたのか」

「そうよ」

「たぶん、生きてねえだろなあ」サライは額帯を手で確かめた。お宝の在処を記した地図を縫いこんであるので、サライにとっては護符のようなものだった。

骨のように白い岩と岩の間をぬって、朝日が広がり、やがて、荒野の東がばら色に染まっていった。

四角いゴロゴロした岩がつらなる斜面に2人は腰をおろした。ジ

ヤミールは煙にいぶされて咳き込むサライの背中を叩いた。

「あんたを助けることになるなんて、思いもしなかったわ」

「わかるかったな」

「いつここへきたの？」

「きのう」

「ラビやザドクともいつしよなの？」

「教団を出てきたんだ」

「戒律だらけの教団に、あんたはむいてないのよ」

「でさ、他に行くところもないし、お前の後を追いかけることにしたんだ。しかし、もうちよつと危なかったな」

サライはそう言うつと岩の上に立ち上がり、ゆらゆらと黒煙のたなびく岩山の稜線に目を注いだ。炎に焼かれた野草と、赤茶けた灌木と、焼けただれた砦跡の木材だけがこの斜面のすべてだった。

どこからともなく現れたカシムが転がるように駆け寄ってきた。体を左右にゆすつて喜びを表し、ジャミールと申し合わせたように岩場に腰を落とした。

「焙り肉の、ええにおいがすんなあ。人間か、岩だぬきか、どつちやるな」

禿山と思つたのはまちがいで、背の低い灌木にまざつて雑草が生えている。

「岩だぬきだったら食べるの？」ジャミールは呆れた声で言った。

ケバルが急勾配の岩山を登つて来た。ハシムはいち早く立ち上がり、手をふつた。シシャクと2人の奴隷も一緒だった。シシャクはジャミールのそばまで来ると、何事もなかったように声をかけた。

「美しい顔が煤で汚れてますよ」

ジャミールは黙つて睨みつけている。

「砦の連中は、ひとり残らず逃げたようですね」

「アイシヤがないのよッ」

「住む場所がなくなつて、さぞ困つていらっしゃるよ」

「その言い草はないんじゃないの」

シシャクは首をかしげた。「わたしはあなたの他、女性をさらったことはありません。彼女を連れてきたのは、あなたの仲間のハシムですよ。わたしは女性から憎まれるようなことはしたくないので
す」

「しかし、ペルシア人には憎まれていた。知らなかったのか」とケバルは言った。「儲けすぎたんだよ」

「アイシャを探さなくては……」ジャミールは苛立った声で言った。サライが口をはさむ。「いいじゃん、もうっ」

「そやな」とハシムは頷いた。「天の思召しや」
「そもそもが、無謀な企てでしたからね」とシシャクは平然と言った。「彼女は、あなたのせいで、寵姫になりそこねましたよ」

ジャミールはシシャクに殴りかかった。彼は彼女の手をつかみ取り、いっしょにダマスコに戻りましようと言った。

サライはその時、ジャミールを妻に迎えるならシシャクを殺してくれと言った黒人女の顔を思い浮かべていた。

「俺たち王の耳だ。ジャミールは行き先を自分では決められない。監察官の命令ひとつでどこへでも行かなくてはならないんだ」

「わたしを助けたことで、監察官の部下ではなくなりましたよ」とシシャクが言った。

「監察官は知らんがな」ハシムが口を尖らせた。「旦那はいまや、生きてる死人やねんでえ」

「今回の件に関しては、すでに王に伝えてあります。わたしに不手際はありません」

「やはりな……」とケバルは呟いた。
「どーゆーこつちゃねん」

「監察官の企みは見抜かれていたということさ。俺たちには、王命がおりたと思わせて、シシャクを消そうとしたんだ」

ケバルが説明すると、シシャクは微笑した。「監察官は宰相の地位を得る資金が欲しくて、わたしを殺め、財産を盗もうとしたのです。しかし、無能な総督は騙せても、聡明な王を欺くことはできま

せん。わたしが王と気脈を通じていることも彼は知らなかったのですからね、彼の情報網もしれています。王は今回のことで非常に立腹されています。彼はおそらく失脚する。宦官あがりの目障りな男でしたから、これでペルシアの高官の多くが枕を高くして眠れるようになるはずです。わたしとしても、総督や彼らに恩を売ったことになりました」

サライの母は収税人の謀りごとから逃れられなかったが、シシャクという男は自らを陥れる陰謀を素早く察知し、それを逆手にとつて政敵を抹殺する術に長けているようだ。

この男がジャミールに執心していることをつぶさに知り、懐の毒薬を捨てるべきではないと思つた。新たな護符になる予感があつた。「で、どうなるの」ジャミールはケバルに訊ねた。

ハシムが引き取つた。「監察官がおらんようになるんやったら、わいらもご用済みになるわけや」

「俺さ、バビロンへ行つてみたいんだ。いつしよに行こうぜ」サライは唐突に言つた。「バビロンはダマスコの比やないで。広いなんてもんやない」

「ペルシア人は能力のある人間を優遇するんだろ？ 思いもかけない幸運に巡りあつかもしれねえじゃん」

「塩の海から真水を汲み出すようなもんやなあ。並大抵の苦勞やない」

ジャミールは黙っていた。迷つてゐる表情がありありと見えた。サライはその彼女に決断を迫るように、塩の海も神の創造物なんだと言つた。

「バビロンでは何に化けるつもりなんです？」シシャクはジャミールに顔を近づけた。「わたしの妻となつて、ここでもに暮らしましょう。そうなさい。すべて、あなたの思いのままです。わたしはあなた以外の女を妻に迎えないと結婚契約書にしたためます」

館にいる女たちは側女ではないので別の場所に移すという。ハシムは、「わいはそつちへ行きたい」と言つた。

サライは思わず、「ジャミールは、そんな虚しい暮らしをしたいなんて思っていないさ」

シシャクは口のはしで笑った。

ジャミールは赤々と燃える朝日を顔にうけながら言った。キャラバンを組織し、バビロンへ旅するつもりだと。

「世間を甘く見てはいけませんよ。何を荷にするのですか」

「穀物をすこし……それにバルサム油や香辛料も……」

「雨期のこの時期にですか。それに隊商となると、危険が倍になります。ベドウインは見逃したりしませんよ」シシャクは言い足した。

「わがままもいい加減になさい」

「そんなやつは誘惑に耳を貸すなよ！」サライは声を荒げた。「売られるかもしれねーだろ」

「わたしは欺瞞をもつとも忌むべきものとおもっています」

サライは焦った。「ヤマトの姉さんを探すんだろ？　ここにいないならバビロンにいるにちがいないさ」

「ひとりでも、行くつもりなのか？」ケバルはジャミールに訊いた。「行くわ」

「そうか、俺たちも行くしかないな」

「ジャミールは言い出したら、きかへんからな」

サライは安堵した。「そ、そうだよ」

その頃、ヤマトはイサとともにフェニキアの海港ビブロスの造船場にいた。

彼らのいるビブロスは、ジャミールのいるシリアのダマスコとは直線距離で測るとエルサレムまでの行程の3分の1にも満たないが、頂に雪をいただくレバノン山脈で隔てられているせいで遥かに遠かった。

イサは鍛冶屋の腕をかわれ、船舶に取り付ける錨を作る責任者にとりたてられたが、隻眼のヤマトは船大工の下働きとして雇われた。温暖な気候の地域だったが、雨期の終わり頃には石積み of 船着場に近い宿舎は夜になると、吹き曝しの岩場にいるように寒かった。

宿舎では、一隻を建造するのに必要な五〇人ほどの男たちが、折り重なるようにして寝起きしていた。

皆が寝静まると、イサはヤマトを浜辺に連れ出し、火を焚いて自分に与えられた肉を焼いて食べさせた。

「ここで作られる船は大きさのわりに航海に非常に適しています。船首と船尾がともに高くなっていて、船幅が広く、帆でも櫂でも進ませることが可能です」

夢中で食べているヤマトを、イサは満足気に見つめながら、「フェニキア人は優れた民です。熟練した航海士と水夫を雇い、はるかタルシシュ（スペイン）の地までも行くことができます」

「シンドウは、タルシシュの向こうにも陸地があるはずだと言っていたよ」

「わたしは行ったことはありませんが、シンドウの言葉に嘘はないでしょう」

海洋貿易民族のフェニキア人は紀元前1200年には大西洋に達していたと言われている。そして紀元前1100年頃にはジブラルタル海峡をぬけてすぐのところガディル（スペインのカジス）に植

民地を築いていた。その地で採掘される銀、鉄、錫、鉛を手に入れるためだった。

「ビブロスの金細工職人は、金や銀のものを鋳たり、鍛造したり、彫りこんだりすることに熟達しているのです」

バビロニアやペルシアによる相次ぐ侵略で主要な海港ティルスやシドンはかつての威勢を失っていたが、ビブロスは交易によって得た富で荒廃を免れていた。町の高台には、はるか昔（紀元前20世紀）に建てられたオベリスク 石の柱が時を経ても超然と林立していた。豊穡の神バアルを信仰するフェニキア人にとって聖なる場所だった。

唯一の神ヤハウエを信仰するユダヤ人は多神教のフェニキア人を忌み嫌ったが、ソロモン王の時代は違った。彼らは王の求めに応じてレバノン杉を献上し、敵対関係にならないようにつとめた。ソロモン王も交易の要衝地であるフェニキア人の領土を攻めなかった。

その中でもビブロスの民は生き残る術を心得ていた。都市は石や土を積み上げて作られた城壁によって守られ、道路や給水など基盤整備も整い、石造りの大きな家々が大海（地中海）を見下ろす丘陵に建ち並んでいた。

「ペルシア人に接收された家もありますが、貿易商人は健在ですし、耐久性のある造船技術もエジプトを圧しています」

エジプトでは葦を編んで結び合わせたものを材料にして、漁師の乗る小舟から外洋を往来する大型の帆船や20本以上の櫂をもつ戦闘用の船舶まで多種多様な船を作っていた。「ここで作られる船には、ねずの木をはじめ、櫂の木やレバノン杉が用いられています」

「なぜ、エジプトは真似をしないの？」

「木材に恵まれていないからです」

「だから、ペルシア軍に負けたんだね？」

「彼らペルシア人は山岳地の民ですから馬に乗れても海の民のように船を作れません。フェニキア人に作らせた船で戦ったのです」

「なら、どうして、ギリシアの船に負けたの？」

イサは少し困った顔をした。「輸送を主たる目的に作られた船と戦闘用の船では作りがまったく異なります。ギリシアの軍船は權が3段になっていて、200人ほどの乗船員の8割が漕ぎ手なのです」「戦士は少ししか乗っていないのにどうして勝てたんだろ？」

「ギリシアは、精銅の突起のついた船首を敵船に激突させて船腹に穴をあけ沈没させる戦法をとっていたのです」

「漕ぎ手は敵の船に乗り移れば、戦士にもなつたんだね！」

イサは大きく首肯くと、「彼らは財産をもたない無産市民でしたから、自分たちの地位を高めるために命を賭けて戦つたのです」

「ギリシア人はすごいなあ」

「そうでしょうか」イサは疑問を投げかけた。「都市国家の集まりのギリシアでは、理念を重んじるアテナイと軍事を最優先するスパルタとは相容れない要素が多々あつて意志決定するのに時間がかかります。ペルシアは今後、ふたつの国が同調しないようにあらゆる策略をめぐらすでしょう」

「シンドウはそんなこと言わなかったよ」

「シンドウはアテナイの学舎で学んだことがあるからです」

「船乗りだつて言つてたよ」

「彼は、指揮官として必要なことはすべてアテナイで学んだのです。わたしも、シンドウの去つたあとに、同じ学舎で学びました」

ヤマトは驚きで声も出なかった。

「シンドウもわたしも互いを知らぬままに、ペルシアのさるお方の密命をうけてギリシアに潜入したのです。その方の命令でわたしはその後各地に赴きました。シンドウも同じだったと思います。そして偶然に、いえティアマトの導きで、わたしたちはあなた様に出会つたのです。その瞬間からわたしたちはそれまでとは異なる選択をしたのです」

イサは一旦、言葉をきり、「わたしは長い間、色も匂いもない世界で生きてきました。身を隠すために娶つた妻とその子についても特別の感情をもてませんでした。なぜ、そんなふうになつたのか、

いまもわかりませんが……。あまりに多くの裏切りと死を見たせいでしょう」

「戦いのせいだね」

「真の平和など存在しないのです」

「どうして民と民は殺しあうんだろ？」

「交易で栄える国にとって戦争はなんの利益にもなりません。にもかかわらず、諸国の君主は鬭争を第一義に優先します。男たちも戦いを好みます。相手を滅ぼすことでしか、自分たちの存在がたしかめられないのです」

「フェニキア人は違ってるの？」

「海面に突き出した貿易港として名高いティルスを、バビロニアのネブカドネザル王に13年の長きにわたって包囲された苦い体験もあって、フェニキアの人たちは攻められる前に“水と土”を差し出したほうが得策だと考えるようになったのです」

侵略国の軍門に下りながらも、ビブロスに住む商人はレバノン杉の輸出によって今も莫大な利益を得ていた。レバノン杉は建築材に使われるとともに、その油は防腐剤としても使用され、エジプトのファラオの遺体にも塗られていた。

「商人のうちのもつとも力のある者に取り入らなくてはなりません」

「どうして？」

「船を得るためです」

「船って……そんなの無理だよ」

「方法を考えるのは、あなた自身でなくてはなりません」

町には巨万の富をなした商人が幾人も住んでいた。彼ら貿易商は自身は乗船せず、各地で取引をしていた。たとえば、エジプトで仕入れたパピルスをギリシアに売ることで利益を上げていた。

「大人に取り入るなんて、できないよ。フェニキアの言葉も文字もよくわからないもの」「恐れと躊躇いが己れの運命を閉ざすのです。何よりも厭うべき感情です」

言葉遣いはかつてのイサとは別人かと思えるほど丁寧だったが話

す間中、甘えを許さない厳しい表情が一時たりとも崩れることはな
かった。

54話

シシヤクは、ダマスコに戻るとキャラバンを組織した。バビロニアの首都に向かうとなると、エルサレムからダマスコまでの距離の悠に五倍はある。

「あなたはあなたの価値を知らない。金銀ですむことなら、わたしのすべてを差し上げてもいいのですよ」

シシヤクはジャミールの手首を取ると、そこに宝石を埋め込んだ金の腕輪をはめた。鳥の頭をもち、蛇のからだをした腕輪だった。

「助けが必要なときには使いをよこさない。わたしは王を裏切つてでも、あなたを救うためにどこへでも馳せ参じるでしょう」

「どうしてそんなに……」

「自分でもよくわかりませんが、わたしを拒んだはじめての女性だったからでしょうか」「あたしは女じゃないわ」

「またお目にかかれる日を待っています」

旅立ちの前夜、シシヤクはラクダに積んだ積み荷をいくども点検した。ジャミールに与えた急使用のアラビア馬はむろんのこと、彼女のためだけに強健な口バを2頭用意し、ハーレムの女たちの喜びそうな品物をできるだけ多く積んだ。険しい道を行くのに、口バより適したものはなかったからだ。背中いっぱい荷物を背負って1日に60〜80?の道程を口バは進むことができた。

ヤマトは自分のように何も持たない者が、どうすればイサのいう力のある者に取り入ることができなのか、考えつづけた。

船を所有する商人の邸宅に航海士でもない下働きの少年が訪問できるとは思えない。

……シンドウなら、どうしただろう。

師は言った。「富める者は往々にして、不正な行いに巻きこまれる」と。しかし、「その富める者を恐れては、何事も為し得ないと。」

「このビブロスで、一番豊かな商人は誰なの？」イサに訊いた。

「この船を造らせている、フェニキア人のザイナブです。今宵にでも、屋敷の玄関まで案内しましょう」

「ありがとう」ヤマトは頷くと、「武器を用意してくれるかい？」

夜更け、ヤマトはイサに連れられて、ザイナブ邸を訪問した。門の前で陣取っている警護の男と押問答になった。

「鍛冶屋ふぜいがなんの用だ！ 旦那様がお前ら卑しい者どもに目通りをお許しになるはずがない」

「承知いたしております」イサは担いでいる道具箱をおろし、過分の心付けを男に渡した。男は金貨を目にして、驚いたようだ。

「用件を言え」

「ここに控えますヤマトが、折り入ってお話したいと願ひ出ております」

「この小僧が、か？」男は訝しんだ。「俺の立場では、家令かぶの下の家扶かぶにしかとりつげんが、いったいなんの用だ？」

「それで結構でございます」

しかし、男は、道具箱を怪しんだ。「何が入っているんだ？」

イサは開けて見せた。

「弓に剣じゃないか！」

「さようでございます」

「物売りか」

イサはその問いには答えず、振り向くと、ヤマトに言った。「わたしめはここで失礼しますので、あとはご自分の力でなんとかなさってください」

待つほどに、ひどく痩せた男が出てきた。「こんな夜更けに何用なんだ？」

ヤマトは、イサがあらかじめ道具箱に忍ばせていた金貨を数枚取り出し、家扶に渡した。「主人に取り次いでもらえれば、家令にお渡しするぶんを、あなたに差し上げます」

会計係のこの男は余程、驚いたのか、痩けた頬をふくらませて言った。「わかった！ 家令をはぶいて旦那様に会わせよう」

「このご恩にはかならず報います」ヤマトは頭を低めた。

ヤマトは庭先に通された。

ザイナブは数人の男たちに守られて姿を見せた。「取り次ぎの者に、損はしない話だと言ったそうだな。産毛もぬけていないような子供が、わたしになんの願い事だ。稚児になりたいという希望なら即刻、断る。妻と側女の他は不要なのでな。女衛ではないのでペルシアやギリシアの高官への売り込みも断る」

豪放磊落な気質のようだった。一語一語が明快で直截だった。

そのどちらでもないことを告げたヤマトは、警護の者として雇ってほしいと申し出た。「わたしなら、あなた様を1人でお守りいたします」

ザイナブは肩をゆすって笑った。「昨今、これほどのほら吹きに会ったことがない。実に愉快だ」

男たちも追従して笑い声をあげた。

「お試しいただきとう存じます」

「誰に習ったか知らぬが、礼儀をわきまえた言葉遣いは気に入った。だが、この者たちの誰一人として、隻眼のお前に遅れをとる者はいない」

ヤマトは道具箱の中から剣を持ち出した。「一度に、かかってきてくださってもかまいません」

ザイナブはヤマトが本気であると見てとると、「お前と同じ年頃の息子たちにも見せたいので、少し待て。その勇気には見習うべきものがある」

たちまち、試合場となる場所が庭にしつらえられた。見物は息子たちだけでなく、この家のすべての召使と奴隷、それに妻子まで寄り集まる騒ぎになった。

「剣を交える以上、命を賭ける覚悟で参っているであろうな」とザイナブは言った。「わたしの護衛となれば、怪しい者を即座に斬り捨てなくてはならない。容赦はないぞ」

ヤマトは首肯した。

警護の男たちは日夜鍛練しているだけのことはあって、ヤマトの発するただならぬ気配から油断ならないと察したようだ。彼らはヤマトの希望した通り、1人づつ順に立ち合うのではなく、少年の息の根をひと思いに止めることにしたのだろう、全員が槍を手にヤマトのぐるりを囲んだ。

蟻の這い出る隙も作らない作戦のようだ。

掛け声をかけたたん、槍の刃先がヤマトに向かって集中した。

女たちは目をおおった。誰もが、少年が串刺しになったと思った瞬間に、小柄な体がひらりと舞い上がった。

「おおっ！」見物人の感嘆の声が一斉にもれた。

次の一瞬、ザイナブの眼前に舞い降りたヤマトは振り向きざまに真後ろにいた男の首を刎ねていた。血しぶきがあたり、首のなくなった胴体が八方にひろがった槍の上につつむきに倒れこんだ。

生き残った者たちは戦意を失い、呆然と立ち尽くしたままだ。

「父上！」息子の1人が言った。「この者は、トリタンタイクメス総督の前で、剣を披露した者に相違ありません」

「なぜ気づかなかったのか！」ザイナブが膝を打った。「その者の噂ならとうに知っていた。総督が親衛隊の1人に加えようとしたが、

断つたと耳にした」

ヤマトは抜き身の剣を後ろ手にすると、片膝をついて言った。「あなた様の警護を致しますかわりに、船を一艘、わたしにお貸しくださいませんか」

ザイナブは破顔した。「そうか、そういうことだったのか。いいだろう。お前に、わたしの息子たちと財産を賭けてみよう」

「ありがたき幸せに存じます」

しじまに漂う血の臭いを嗅いでも、ヤマトの心に悔恨の情は寸毫も起きなかった。

くれぐれも出自をさとられてはならない、とシシヤクはサライに忠告した。パレスチナを神の約束の地と信じるイスラエルの民と大地は自由に行き来するものと考える遊牧民とは永久に理解し得ないとエジプト人の彼は言う。事と次第によっては情け容赦なく惨殺される。身を守る唯一の方法は、どちらの民にも見えない、そのことを利用することだ、と。

「なんと言えばいいんだよ」

「ケルト人だと名乗ればいい」

「白人奴隷のことか？」

シシヤクは首を横にし、「ヨーロッパの北に住む部族のことだ。

彼らは高い知識を持っている。それだけでなく、彼らの支配する国には錫の鉱山がある」

「ケルト人だと言ってバレねえのか？」

「彼らも金色の髪と青い目をしている」

「へえ　じゃあ、そうするよ」

「山岳地に住む遊牧民だったペルシア人は陸に道をつくることには熱心だが、船で航海することは不得手だ。しかし、金や錫や銅などの鉱物を得たいから、海を渡らなくてはいけない国の事情を知りたがる」

「俺は何も知らない」

シシヤクは、パピルスに記された書物をサライにくれた。ケルトの神々の物語を記してあるという。

「あたしは、いつものようにシバの女王の子孫だって言うわ」とジヤミールが言った。

「バビロニア人の信仰するイシュタルの神に仕える巫女に扮するほうがいいでしょう」

シシヤクはジヤミールに話すときだけ、丁寧な口調になる。彼は

黒人の召使にジャミールの着用する衣を持つてくるように言った。

ジャミールはそれを見て驚いたようだった。「本物よ、これ！」
バピロンの神殿で巫女が身につけているのをで見たことがあるという。

召使はジャミールに手渡しながら、「フェニキアの染め物師が染めた、とても高価な布地の衣です。1個の貝につき1滴の染料しか採れないので、この衣を染めるのに幾千もの貝が使われているのですよ」

その長衣は青みがかった濃い紫をしていた。シシャクは同色の頭巾も持つてこさせると、これで高貴な身分の巫女に見えると言った。「旦那さまはどんな女にも、このような衣をお与えになったことはありません」女の目は羨望と憎悪で濁っていた。

サライは、召使の女からシシャクを殺してくれと依頼されたことを思い出し、ぞっとした。

「ジャミールを守ってほしい」と彼はケバルとハシムに何度も言った。そして、ジャミールには、「つらい旅になると思いますが、強い心があれば思いを遂げることができるでしょう」と力づけた。

「そのつもりよ」
ジャミールには、シシャクの思いを斟酌する気持ちなどまったくない様子だった。

「誰にも頼るつもりはないわ。思い通りにするだけ」

「いつでも戻っていらっしやい。あなたこそ、私のイシス（エジプトの女神）なのですからね」

「あたしはエチオピア人よ。だから」
シシャクは指を立て、もう何も言うてはならないという仕草をし、もしもの時のために衣の下には胸当てと肘当てを忘れないようにとつけ加えた。それからサライに近寄り囁いた。黒人の召使から彼が渡された毒薬に鉛を混ぜると瞬時に人を殺せると。

「どうして……それを」

「あの女は、私が妻に迎えたいと思う女性が現れると、女と私を毒

殺しようとして試みる。それがが習わしなのだ」

「そんな女をどうして身近に置いておくんだ？」

「いいことを教えよう。私はその毒を毎日、少量服用しているので一服もられても死なない。それどころか不死になる」

「不死？」

「いつか、自分が試されることも知らずにあの女は毒をもらうとする」

「あなたは空恐ろしい男だな」

女から預かった包みを返そうとすると、いずれジャミールのために役立ててほしいとシシャクは言った。

雨期の終わるシエバテの月はじめ（1月下旬）、ケバルを隊長とした一行の4人は、シシャクに見送られてダマスコを発った。ジャミール以外の男たちは自分の乗るラクダの他に積み荷を背負ったラクダを1頭づつ引き連れていた。

10日たった。

雲に届きそうな山岳地帯の渓谷を抜け、砂丘が陥没したような隊商路の続くホーム・パルミラ回廊に至った。

この道を境に、草原地帯の北部と砂漠の広がる南部では風景が一变する。道の北側では樹木がないために天井は泥できており、蜂の巣型の家々の村落が一般的である。南の高原では丸石を撒き散らしたような地表に生息するのはサソリや蛇など限られた生きものだった。イスラエルの民は砂漠を恐れ、野心の限界をフェニキアまでに定めていた。

「ユダヤ人の懐にどれほど富が流れこんでも、エジプトやメソポタミアを版図とする国が弱まった時にしか強くなれない。主権は握れないのだ」とケバルは前をむいたまま言った。「神に選ばれた民というのは幻想だ」

独り言のようにも聞こえるが、歩きながら居眠るサライに教えているようにも聞こえた。

「……どういふことだよ」

サライが寝呆けた声で問うと、ケバルはラクダを止めて、振り向いた。

「オアシスに住む民は、水の届く場所を越えて砂漠を征服しようと思わないからだ」

彼らは、目に見えない境界線を引いているとケバルは言う。

「ということは、ユダヤ人の国がもう1度できるなんてことはないのか」

ケバルは首肯いた。

「ダビデやソロモンのような王が現れても、だめってことなのか！」

「神の子のエズラがなんと言おうと、イスラエルは復活しない」

「あんたって、つまらないことに感激すんのね」ジャミールは高いところから笑った。「ユダヤが滅びたのはもつと強い国が余所に来たからじゃないの」

シシャクは、ジャミールの乗るラクダの背にだけ女性用の腰掛けを鞍に取り付けていた。日除けまでついているが、身なりは縞模様の短い衣にラクダの毛の皮のマント、それにターバン。巫女の格好はバビロンに入ってからするという。

「そういう簡単なことじゃないんだ」とサライは言い返した。「ユダヤ人がなぜ属国にされてしまったのか、これでわかった」

「ちやう、ちやう。ユダヤ人は7日にいっぺん休むからいくさに負けるんや」と後方から追いついたハシムが言った。「年に3回も巡礼にいかんなんし、四角四面の難儀な連中やで。わいらは何事も天の思召しのままや」

「ベドウィンみたいなことを言うじゃない？」とジャミールがからかった。「あたしたちが襲われたらベドウィンの味方をする気なんでしょ？」

「早よ、無事につかんかいなあ」

近隣の遊牧民は、春から秋にかけてはシリアの高原で放牧している。が、冬になると、掠奪を生業とする彼らは南下してくる。

ダマスコからバビロンに至る交易路は、20世紀の近年に至るま

で大規模な盗賊団が頻繁に出没し、危険きわまりなかった。充分に武装した大きなキャラバンであっても、簡単に通行できなかつた。「遠くからでも、シシャクの荷だとわかるように積み荷に目印になる旗を立てているので襲つてこない」とケバルは言った。

一行は、1万ダレイコス金貨にも匹敵する量の縞瑪瑙と乳香を積んだラクダ数頭と食料と水を積んだ3頭のロバを引き連れていた。むろん、シシャクから預かつた荷だつた。

「これを換金すれば、軍隊が買える」とケバルは言った。

襲われる危険性は充分にあつたが、ダマスコの影で支配するシシヤクは自らのキャラバンを守るためにベドウインの族長に多額の通行料を秘密裡に支払つていた。本来なら、各都市に駐屯する傭兵部隊が交易路を見回り、治安を維持しなくてはならないのだが、回廊の西のホムスから東のパルミラまでを3百人にも満たない兵で警備することは物理的に不可能だつた。それに帝国の各地から徴募した兵士は団結心に欠け、精強とは言えなかつた。

太陽の沈む前に、一行は隊商都市パルミラに到着した。ダマスコに勝るとも劣らぬ賑わいだつた。町中の店という店に灯火がともされ、昼間のように明るかつた。砂漠の宝石と謳われるパルミラはダマスコ同様、東西をつなぐ交易の中継地であり、軍の兵糧を補給する重要拠点でもあつたが、砂漠の只中に忽然と出現するせいで夢の中にでてくる町ようだつた。誰もが自由で、陽気で、幸せそうだつた。

隊商宿には、どこの国からやつてきたかもわからない奇妙な服装の商人がつかめかけ、大麦酒を酌み交わしながらそれぞれの国の言葉で話していた。通じない時は身振り手振りで伝え合つていた。

「塩の値段や、どの町の税金が一番安いか、情報交換しているんだ」とケバルはサライに耳打ちした。

「こんな人がひしめいていたら、積み荷が危ないんじゃないのか」

「この町で泥棒を働けば、即座に捕えられる」とケバルは炙つた羊の肉を食べながら言った。「積み荷の心配は俺がするから安心しろ」

「ペルシアの雇った兵士が捕縛するのか」

「いや、商人が腕利きの用心棒を雇って町を守っているんだ」

2人の会話にハシムが割り込んできた。

「しょうもない話はやめて吞もう、吞もう」 ケバルが大麦酒を店の主人に頼むと、ハシムは気色ばんだ。「ろくに酔わん酒を飲んでも、話にならん」

そう言つて、瓶かめに入ったナツメヤシの酒を器になみなみと注いでもらい、一気に飲み干した。「ほんでから、旨い食いもんや」

「お前の胃袋には、ラクダなみだな」とケバルは苦笑した。

「だから吞気でいられるのよ」とジャミールは呟いた。「羨ましいわ……」

「そんなにヤマトが気にかかるのか」

サライは口走つた瞬間、後悔した。思った通り、ジャミールの表情は険悪になつた。

「もう少し利口になれよ」とケバルは囁いた。「ヤマトはたいした奴だ。お前の適う相手じゃない」

「そんなはずあるもんかっ」とサライはいきり立つた。「あいつは文字もろくに読めやしないし、どこか薄ぼんやりしている。剣術だつてその道に長けた者に習えば、誰だつて、あれくらいやれるさ」

「文字が読めることが、そんなに自慢なの？ばっかじゃないの。あたしだつて読めるわ」ジャミールは言い返した。「あんたみたいに自惚れが強いと、毒薬でも使わないかぎり、ヤマトに勝てないわね」

「俺がそんな卑怯な奴に見えるのか！」

「臆病者と卑怯者は根っ子が同じなのよ」

「よくも言つたな、あとで謝つても許さねえからな」
誰のために人殺しまでしたんだという言葉が喉まで出かかった。なんとか飲みこんだ。何がなんでもヤマトに負けるものかと、心に誓つた。腰帯に短剣はさしていないが、いざという時のために毒薬といっしょに懐に忍ばせてある。

翌日、一行は曙に染まる交易路を速い速度で進んだ。時おり、交

易路を分断する涸れ谷ワヂェを登ったり、下ったりしたが、これまでにサライが経験した旅に比べればはるかにしのぎやすかった。時おり降る、にわか雨で隊商路は濁流にまみれるが、おかげで水に困らなかつた。しかし、サライの心は熱砂と黄色い土埃の中にいた。ジャミールと仲たがいましたままだったからだ。

……俺はいつかジャミールを憎むようになるかもしれない。

ダビデの息子アムノンは異母妹のタマルを愛していた。しかし彼はタマルを犯したのち、妹を憎む憎しみは恋した恋より大きかったと記されている（サムエル記13：15）。……アムノンはタマルのせいで罪を犯したと思っただ。彼女さえいなければ、自分は神の目に正しい者としてうつつた。

荒地がつきると、大地は潤い、丘陵は緑におおわれ、ラクダは前方に進む仕事よりも、好物の灌木ガターを食べる方に熱心だった。

島や陸地に囲まれた大海（地中海）沿岸の航路は、季節（5月の下旬から9月の中頃）によっては安全に航海できた。しかし、秋から春先にかけては航海は行なうべきではないとされていた。その時にビブロスを出航した船は当然のように激しい嵐に見舞われた。

「船を出す者の少ない、この時季だから先んじられる」と船主のザイナブは言った。

船体は風に舞う木の葉のように波間を旋回した。船尾で舵をとる航海士は、亜麻布の帆を片側に傾けるように指示した。ヤマトとイサは水夫たちにまじり、帆を張るロープを懸命にたぐり寄せた。まだ日中だというのに横なぐりの雨で視界が妨げられ手元しか見えないう。船倉で櫂を漕ぐ奴隷たちは左右の両端で上下二段に分かれ、船内にいる航海士の命令に従って、列を乱すことなく櫂にしがみついている。船底の中央には、十数人の男が乗っていた。商人ではないようだった。

「海が静まるまで、体にロープを巻きつけておくのです」とイサはヤマトに言った。

船酔いで立つことさえまならないザイナブの5人の息子は波にさらわれないようにレバノン杉でできた一本マストにくくりつけられている。一方、ヤマトは海水をかぶるたびに手足が強靱になっていくように感じた。

はじめて船に乗ったが、そんな気がしなかった。貨物を積み込んでいる船の乗組員はどんな天候でも甲板で寝起きしなければならなかった。が、それも苦にならなかった。シンドウが、ヤマトの名は海の民を意味するのだと教えてくれたことをあらためて思い出した。船主のザイナブはただ一人、甲板下の水に濡れない場所に積み上げられた荷の上に、ねずの木の厚板を敷き、そこに陣取っていた。そして、どんなに息子たちが泣きわめいてもかまわず放っていた。

夜になり、嵐はようやくおさまった。月明かりが海面を照らし、金色に輝く波の路をつくると、ザイナブは甲板に上がってきた。そして、半死半生の息子たちに水を飲ませようとしたが、彼らの胃は受け付けないようだった。

「情けない！ 私の子とは言えぬ」

小脇に、煉瓦を5つほど並べた大きさの箱を抱えたザイナブは手提げランプを持つと、イサとヤマトに息子たちを引きずってでも水先案内人のいる船首に連れて来るように命じた。

船の先端はカーブを描いて高い位置にあった。ひと目でフェニキアの船だとわかるように馬の首の彫像が舳先に突き出している。

「さあ、よく目を見開いて満天の星を仰ぎ見るのだ」とザイナブは息子たちに言った。「けっして動かない星がどれかわかるか？」

息子たちは誰一人、口を開かない。

「乗船する前に教えただろ？」

ザイナブはヤマトにも問うた。「お前はわかるか」

北極星がどの星か、ヤマトはシンドウから習っていた。無言で指さすと、ザイナブは大きく頷いた。

「では、船の位置はどうやって知る？」

ヤマトは夜空に向かって手を広げ、指を使って北極星の角度を測った。「海図がないので、位置はわかりません」

水先案内人が海図を見せると、ヤマトはキプロス島の近くを指さした。

「航路に障害物があるか、ないかはどうやって知る？」ザイナブは矢継ぎ早に問う。

「雲の形と波のうねりで知ります」

ザイナブは息子たちに向き直った。

「海路は陸路のようにペルシアの王のものではない。フェニキア人のものだ。われわれの先祖がはるか昔にカルタゴ（チュニジア）やタルシシュ（スペイン）へ至る航路を見つけたのだ。サルゴン王の王宮に使われた杉材も、ソロモン王の黄金もわれわれが船で運んだ

のだ。時代の覇者が誰であろうと、フェニキアに船乗りがいるかぎり、われわれは富を得て栄える。

船倉にいる者たちは、これから向かうカルタゴで下船して、陸地に分け入り、鉱物を採掘する技術者なのだ。今や、カルタゴはかつての宗主国だったフェニキアを凌駕するほど繁栄している。大船団を擁して、想像を絶する海の彼方の国々におもむいている。われわれが喉から手が出るほど欲しい錫も、彼らがケルト人との交易で独占している」

「父上、お話の途中ですが、私は船乗りになどなりたくありません」とザイナブの長子は言った。「船は水夫らに任せればよいのです」「なんとという愚かな息子だ！」ザイナブは声を荒げた。「お前が私の後継者だと思つと、我が家の命運も尽きたも同然だ。ヤマトを見る。隻眼であるにもかかわらず、少しも泣き言は言わない」

「ヤマトと私を比較しないでください。この者は、剣を振りかざして人を殺す使用人ではありませんか。母上も危ないことはけつしてするなとおっしゃいます」

「他の者も同じ考えなのか」とザイナブは訊いた。

それぞれ母親の異なる弟たちはこぞつて首肯した。ザイナブは息子たちに寝るように言った。子供らがそそくさと船倉に消えると、ザイナブは甲板に腰を下ろした。ひどく落胆した様子が、月光の下でもよくわかった。

「あれが後継ぎなのか」と嘆息した。

水先案内人が、「あつしが責任をもつてお育ていたしやす」と言ったが、ザイナブは男に向こうに行つてくれと命じた。そして、イサとヤマトにも座るように言った。

「誰も知らぬことだ」と前置きして、ザイナブは話しはじめた。

「息子らの母親はフェニキア人だが、私はユダヤ人なのだ。父はカナン人の女を娶つたために故郷を捨てなくてはならなかった。私は己れの血筋を偽って生きてきた。そのほうが何かと都合がよかつたからだ。しかし、息子たちの行く末を思うと間違っていた気がする。

自分の先祖が何者なのかわからぬ者の言葉につき従う者などいない。奴隷といえども無知な主人のもとでは身を粉にして働かないからな……」

ヤマトの耳に、波の音が聞こえる。

「この船はカルタゴで連中を下ろしたあと、対岸のマツサリア（マルセイユ）に向かう。そこで、フェニキアで染めた布地やガラス製品や金細工の装飾品を売りさばいて、その金で錫を買い入れる。海にも海賊がいて、なんども死にかけたが、私はこの仕事に誇りをもっている」

「交易で得られた莫大な金銀を、どうなさろうとお考えなのでございますよう」とイサが訊ねた。

ヤマトは驚いた。イサは無駄口をまったくと言っていいほどきかない男だったからだ。「お前ならどうする？」ザイナブは訊き返した。

「命を賭けても惜しくない意義のあることに使います」

「お前たち2人はシュメール人の流れをくむそうだな」

「さようでございます」

「やはり、そうか」ザイナブは頷くと、手提げランプの横に置いていた箱を開いて見せた。中には金属製の器具が入っていた。

「これが何かわかるか」

「おそらく月の満ち欠けを測るものだと思います」とイサが言った。「東西南北はもとより、月や太陽が隠れる日時もそれわかると聞き及びました。シュメールでは預言者や巫女が種蒔きの時季を報せるのではなく、天文学者が教えたそうです」

何枚もの大小の円形の歯車が重なりあつてできている器具には目盛りがあり、それを指す針も3本ある。それらは、黄金と思われる金属と鉄製と思われる金属で造られていた。「これを買ったものの、最初は何に使うものなのか、まるでわからなかった。しかし眺めているうちに使い方はわからないが、何かを計測するものにちがいないと気づいた。だが　イサといったな、お前はこれを見て不思議

に思わないのか。黄金に見えるが、これは黄金ではない。鉄より軽い金属に金を張りつけているのだ。どうすればこのようなことができるのだろうか。それに鉄に見える部分だが、これもわれわれの知らない金属だ。錆びないし、傷つかない」

「私たちが知らないだけなのです。シュメールには、神々は火を吹く大空を飛ぶ金属の乗り物でやってきたという言い伝えがあります」
「ほんとうなのかつ」

「ユダヤ人のあなた様が、驚くほうが私には不思議です」
「どうしてだ？」

「モーセの五書に目を通してごらんなさいませ。良質の金や縞瑪瑙やブドラク（ゴム状の樹脂）のありかを、神は教えています。知らなければ、それらのものに価値があると認められなかったでしょう。その一方で慈悲深いと崇められる神は、エジプトでは疫病を蔓延させ、ソドムとゴモラでは天から火と硫黄を降らせ、何万何千という人々を一瞬にして滅ぼしています。草木も動物も女も子供も容赦なく。ソドムに住んでいたロトの妻は逃げる途中で振り向いたために塩の柱になったと記されています」

「金銀に未練を残すからだ」

「塩の柱をシュメール語に言い換えると、蒸発という言葉になります。ロトの妻は非常に高い熱で焼き尽くされたのです」

「それは神の力が偉大だからだ。人間が罪深いからだ」

「そのような偉大な神が捧げ物を要求するでしょうか？ ほんとうに一度も、あなたはおかしいと感じたことはないのですか？ 神の子らは人間の娘との間に子供をなし、食事までします」

「何が言いたいのだ！」

「シュメールの神々は、人々に文字をもたらし、金属をつくる技術を教え、大麦の栽培を指導したそうです。しかし、神々は人間に奉仕することを求めます。私たちは神の召使のようです」

「よくわからん」

「人間にとって教師であった神は、同時にサタンでもあったのです。」

ユダヤ人は蛇をサタンの化身と忌み嫌いますが、蛇を神と崇める部族は各地にいます。なぜなら人間は、神々から与えられた知恵を使つて、今も神々に挑戦しているからです」

「お前はなんと恐ろしいことを言うのだ。ヤマトにそのようなことを教えて、何をどうしようと考えているのだ」

「ヤマト様は、われわれシュメール人の一筋の希望です。私はヤマト様とともに、神々に支配されない人間の国を造りたいと願っています」

「そんな国がこの世にできるものか」

「私の生きている時代では適わないでしょう」

しかし、いつの日にか、自分たちの子孫が神々のように空を飛ぶ乗り物をつくり、天と地をつなぐ都をこの地上に建てるとイサは言った。そして、神の火を手に入れる日がかならず訪れるとつけ加えた。

「神の火とはなんだ？」

「律法が書かれるはるか以前からある、ギリシアの物語に、巨神族の男が神の火を盗み、人間に与えたとあります。この火こそ、ソドムとゴモラを滅ぼした火と同じものだと思っております」

「そんな恐ろしい火を手にして、どうするといふのだ」

「神々に支配されないためです。そのために都を建てねばなりません。あなた様のお力をお借りしなくてはなりません」

ヤマトは、イサの硬質な横顔を見つめた。姉のナンナがしばしば語った「天と地をつなぐ都」の話を彼も口にしたからだだったが、何かが大きく異なっていた。ナンナのいう都はこの世に存在しないように感じられた。しかし、イサの語る都には真実味があった。それ以上に、ヤマトの心を揺らし、突き動かしたのはイサの全身から発する気力だった。

「それは神に禁じられたものを得ようとする行為だ」とザイナブは言った。

「バベルの塔は人々が神を真似て、天と地をつなぐ乗り物を発進さ

せようと建てたものです。私はそう思っています」

「仮にそんな国を建てられたとしても、バベルの塔が壊されたように神に破壊されるだけだ」

「何度でも挑戦すればいいのです」

「神に見放された人間は、幸せになれるはずがない」

「では、お訊きします。財力にも子宝にも恵まれたあなた様はいま、お幸せなんでしょうか」

ザイナブは答えなかった。

灌木や草の被った砂の丘が、周囲をとりまく玄武岩の黒い谷間を2日ばかりで抜けると、見渡すかぎりの平坦な荒野がひらけた。

地平線には、雪をいただいた山がづらなり、すぎてゆくほどに、村落があることを告げる棕櫚の茂みを彼方に望んだが、そのどこにも立ち寄りなかった。行き着く前にならずと行っていいほど、襲撃の憂き目にあつたキャラバンの残骸を目にしたからだ。

「シシヤクの言つた通りだな。ベドウィンに金を惜しむ一団に加わつていれば、命はなかつた」

ケバルはラクダを休ませると、「しかし、どこかで水を補給しなくちゃならん」

ハシムは嘆いた。「トカゲを食わんなんのかなあ」

食糧に乏しい砂漠の民は、野生のトカゲを食する習慣があつた。「メディア人の守備隊はどこにいるのだらう。影も形も見えない」とサライは言つた。

ケバルは彼方にも目を配り、安全だとわかると、ジャミールにラクダから降りるように命じた。

「今夜は、ここで野宿しよう」

「こんなところで？」

「お前のせいで、俺たちはこんな目にあつてるんだ。その言い草はないだろ」とサライに言つた。

「いつ頼んだ？ 勝手についてきたんじゃないの」

「無駄口をきいてないで、少しでも湿り気のある場所を探せ。雨季なんだから掘れば水の湧き出るところがあるはずだ」

4人はそこら中を掘つた。少量の水が湧き出てきた。

ケバルは皮袋に汲み取つた。ハシムはそれを見て、ラクダにも飲ませたいと言つた。

「そうかて、かわいそうや」

「ラクダの小便を飲むことになるぞ」

ケバルは、火をおこすと早々と寢床をつくり、マントにくるまった。武器の斧と剣は頭元に置いてある。以前は背中に斧しか担いでなかったが、こんどの旅では斧と両刃の剣を交叉して背負っていた。サライは襲われたさいの身の守り方をあれこれ考えてみた。自分のことで精一杯で、ジャミールを助けられないかもしれないと思うと悔しさで舌を噛み切りたいような心境になった。

「お前、いざというときにはさっさと逃げろよ」

ジャミールは、ふと思いついたように、「ザドクはいまも異国の女子供の追い出しに精を出しているのかしら？ あれってほんとにわからないわ。自分たちを何様だと思ってるのかしら」

「そんな話してねえだろっ」

「あんとザドクって、仲がわるかったんじゃないの？」

「あいつは、先生の手伝いで大変な思いをしてるんだ」

罪科のある者を指名し、律法を守れとエズラはくりかえし説いた。忠実な弟子のザドクは当然、師の言葉に従う。彼こそエズラの片腕といつていい。すべてを任されていた。各地から送られてくる訴状に目を通し、律法にそむく者たちの名を書きつらね事実かどうか調べなくてはならない。場合によっては、同族の者さえおとしめる結果になる。融通のきかない、まっすぐな性格のケバルには耐えがたい務めだったことは容易に想像がつく。

「偶像を拝する女が大勢いるからだよ」

さすがに自分の母親もそうだったとは言えなかった。

「そうでない女もいるけど、ユダヤ人じゃないってことだけで、ラビ・エズラは許さないじゃない。あんたはお目こぼしで学びの家に入れたけどね」

「お前だつて、お目こぼしにあずかったから神殿で巫女のふりができたんじゃないか」

「あんと話しても、つまないだけね。もう寝るわ」

サライは慚然として、「ユダヤ人が神に堅くつき従うための犠牲

なんだろ、きつと」

ジャミールは起き上がり、「犠牲がないとつき従えない神様なの？」

「神は憐れみと慈しみに富み、怒ること遅く、愛ある親切に満ちておられると、詩編には記してある」

「神様つて、公平な世界なんて望んでないのよ」

ケバルはぴしりと言いつつ放った。「神なんて、俺たちに関係ない。静かに寝ろ」

2人は押し黙った。エルサレムを発つ前に、エズラに許しを得なかつたことが今も気にかかるサライにとつて、ジャミールの言葉は暴言にしか思えなかつた。無論、エズラの教えを全面的に肯定しているわけではなかつた。がしかし、ジャミールのようにエズラやザドクを侮るような言葉を平気で吐く者に対して強い憤りを感じた。サライの心の底には、自分はエズラの立場を守るために学びの家を去つたのだという思いが少なからずある。こうして遠く離れてみると、父親の顔を知らないサライとつてエズラは師というより父のような存在に感じられるから余計、そう思えるのだった。

サライはハシムに語りかけた。「ラビ・エズラは今も困っていると思うか？」

「仮にも神の子やと言われる男や。難儀するはずないやろ。しかしまあ、昔から学者の取つた天下はないよつてな。屁理屈で世の中は回らんちゆうことを、そろそろ思い知つてる頃やるなあ」

神の教えを、ハシムは屁理屈と言いつつ表した。眠っているはずのジャミールとケバルが声を上げて笑つた。サライもつられて笑つてしまった。

翌日、日没のすこし前、交易路を跨ぐようにして建つ要塞が視界に入った。

かなりの距離があるのに、石積みのお壁が夕焼けに染まって発光したように輝いている。

周囲に天幕はない。

「俺とサライとで様子を見てくる」とケバルは言った。「涸れ谷を見つけて、身を隠して待っていてくれ。もし夜が明けても戻らなかつたら、俺たちにかまわず旅立つんだ」

ケバルとサライは、積み荷を背負った2頭のラクダをジャミールとハシムに託すと、ジャミールとサライが安全な場所を捜し当ててから要塞が見下ろせる砂丘に移動した。

2人は摺り鉢の底を眺めるようにラクダから身を乗り出した。

「はじめて目にする砦だな」とケバルは頭を傾げる。「いつ建ったのか……」

「バビロンから余所の国へ行き来しているあんたが知らないなんて、おかしいじゃん」

「このあたりにくるのは1年ぶりになるからなあ」

ひと目で堅牢とわかる建物を俯瞰すると、塁壁の幅が2・5リード（約8メートル）ほどもあり、幾人もの警備兵が狭間で見張り番をしている。そして砦の広場には武器を備えた戦車が並び、兵士らが戦闘の訓練をしていた。

「総勢、千人はいるな。しかし」とケバルは言葉を切り、「これほどの軍隊が、こんな辺鄙な場所になぜいるのか」

「通行税をとる気なんだろ」

キャラバンや旅の商人を通過させるために東西の門は開かれているが、南北にある閉じられた門には向かい合うように四角い塔が高くそびえていた。

「迂回すべきなんだが、相手はもう気づいている。このままじつとしているしかないな。ジタバタすると、ジャミールたちまで捕まってしまう」

ケバルは丘陵の斜面を手綱の先で指した。「見張り小屋まである」

2人はラクダに乗ったままだった。前方に戦車が見えた。2頭の毛並みのいい馬のうしろに車をつけた台座があり、その台座に武装した男が2人乗り、砂塵を舞い上げ突進してきた。

「1人はメディアア人のようだな……」ケバルは口の中で言った。

遠目にも、男たちの身なりの立派なことが見てとれた。髪を短く
かりこんだ若い方の男は弓矢を持ち、ひざのあたりまであるぴった
りした長袖の上着とズボンの上に赤い布地の胴着をまとい、腰には
金のつかの長剣を帯びていた。もう一人は槍を持ち、鎧、兜を身に
つけているようだった。

サライとケバルは相手の出方を待つ武将のように彼らと対峙した。
「名乗れ」鎧の男は戦車を下りると、詰問するように言った。

「ケバルと申します。イシュタルの神殿に仕える少年の護衛役です」
「サライです。異郷よりまかりこした」

2人が名乗ると、

「神に仕える客人をわが城へ招きしたい」と若い男がアラム語で言
った。

「ありがとうございます。旅の者へのご温情に感謝いたします」

ケバルは言葉少なに礼をのべると、敵意のないしるしに、ラクダ
から下り立った。サライも同じようにした。若い男は持参した皮袋
をケバルに手渡した。

友好のしるしであった。

ケバルのあとで、口をつけると、なつめやしでつくった飲料がサ
ライの喉ごしにしみいった。

「案内しよう」

若い男はサライの目の前にやってくると、「積み荷はないのか」
「盗賊に盗まれ困っていたところですよ」とケバルが答えた。

「もし、われわれ守備隊の目に止まらなければお前たちは死んでい
るところだな」と鎧の男は言った。

サライとケバルは、戦車に追い立てられるようにして要塞に向か
った。

逃亡は不可能に思えた。平原を分ける一本の道筋の果てに、防壁
に囲まれた大がかりな砦があるだけで、姿を隠す場所を見つけられ
そうになかった。どの方角にむかって逃亡を企てても、追撃の手を
のがれるすべはなさそうだった。

「わが城だ」と若い男は誇らしげに言った。鎧の男は苦笑をもらした。

近づくにしたがい、門の外へ将兵が群がり出てきた。その目に好奇心がありありと見える。ケバルの横顔に緊張の色が走った。サライは彼らと視線を合わせないように気を配った。

門を入ったところにも、地面をおおいつくす馬と兵士が控えていた。楔型の経帷子と所持する剣がひとかたまりに連なり、いくえにも重なった盾のように目に見えた。彼らの兵舎は壘壁の中にあるようだった。

「太守がお待ちかねだ」

鎧の男が侮るような口調で言うと、若い男は無表情に馬の首を回し、砦の外へ駆け去った。

太守という尊称に、サライとケバルは顔を見合わせた。

「ここは、メディア軍の前哨基地だ」

鎧の男は2人をふりむき、路銀を持っているなら預かると短く言った。

「盗られました」とケバルが答えると、男は「軍役にでもつくか」と言った。

サライとケバルは男に従い、塔の中に入った。

「太守に謁見するんだ。武器は預かる」

男は、ケバルの背中の斧と剣は取り上げると、衣服の上からも武器を隠し持っていないか確かめた。サライにも同じ扱いをしたが、ついさつき短剣をサンダルに差し入れたので気づかれないですんだ。「こつちだ」男は顎をしゃくった。

前後左右、隙間なく、兵士の目がある。篝火が足元を照らす。塔の中の通路は暗く、長く、足音が石の壁にこだました。サライとケバルは暗黙のうちに肩をならべて歩いた。石段を登り、立ち止まった。

鉄を打った扉を武装した警護の兵士が開けると、男は先に中に入るように言った。

一段高い正面の椅子に老人が座っていた。その膝の上に黄灰色の髪の色をした少女が、座っていた。武装した兵士がすぐ後ろに控えている。側近というより、監視役のように見える。というのも、老人は抱きかかえた少女の目を背後に向けさせないように配慮しているさまが見てとれたからだ。

「その者らは何者じゃ」と老人は力のない声で訊ねた。

「神殿に仕える者です」

サライは答えると、ぶしつけにならない程度に老人を観察した。

エズラの書状にしばしば登場する川向ここの太守とはこの老人のことなのかと一瞬思った。

「どこから来た？」しゃがれた声が訊ねる。「ダマスコよりまかりこしました」ケバルが丁寧に答えると、老人は目を糸のように細めた。

「ダマスコは今頃、アーモンドの花が咲いておるだろうな」

ケバルは低頭した。

老人は不思議そうにサライを見つめていたが、ターバンをとるように言った。金色の髪があらわになると、そばに控える兵士たちの間から、驚きの声があがった。

「バクトリアでもよく見かける、ソグド人の少年か」

「いいえ、ケルト人です」とサライは言った。

「ほお、ケルト人か？ はじめて耳にするな。どのような国なのだろうか？」

「おもしろい物語が多くある北の国です」

扉が開き、さきほどの若い男が入ってきた。彼は、老人と少女の座る椅子のそばに立った。「おお、バガバイオス」と老人は若い男をそう呼ぶと、「わしの孫だ」と言った。

「早くお国の話をして」と少女は急かした。「それでは、『知恵の鮭』を食べて全てを予見する能力授かった少年の物語を致しましよ」

少女はつぶらな瞳を懲らした。

サライは、シシャクのくれた書物で読んだ話を適当につなぎ合わせて話した。

「少年の名はフィン。フィンの父親は軍を引き連れた騎士で、母親は神々と妖精の間に生まれた女性でした。しかし、幼い頃に父を殺され、母を再婚で失ったフィンは魔女に育てられ、盗賊から剣術を習いました」

「お父さんもお母さんもない、その子はどうなったの」

「フィンは巨人の国に行き、海に住む怪物の親子の首を斬り、地下の魔界からやってきた魔王の孫も退治します。その功績で、亡き父の騎士団を引き継いだのです」

「ギリシアの物語と似ておるのう」と老人は言った。「洞窟に棲み、富をためこみ、人を喰らい、女をかどわかす狂暴な巨人を退治する話はそこら中にある」

バガバイオスはサライに目を止めたまま、「見習いたい話だな」と言った。

「恐れ入ります」

ケバルがサライにかわって恭しく答えると、バガバイオスは鎧の男を一瞥した。

男は口元を歪めると、「客人はお疲れのご様子ですな。食事の用意がとこのうまで休んでもらいますよ」と言った。

その時、老人の腕の中にいた少女が、その膝をすべり降りると、サライの前にやってきた。

「砂漠から来たの？」

少女の問いに、サライが黙ってうなずくと、「お兄さまは、外に連れて行ってくださらないの。お前はどうか？ わたくしと行かぬか？」

サライが返事に窮していると、男が耳打ちした。「いずれ、と言え」

「お黙り！」

ラクシャスを叱責する少女の声にバガバイオスの口元がほころん

だ。「パリサティス、駄々をこねてはいけないよ。この要塞は、バクトリアの太守だったお爺さまに王の母妃がくだされたものだけだ、僕たちに自由はないのだからね」

整った顔立ちの少女は、巻き毛の前髪を無造作にかきあげると甲高い声を出した。

「わたくしはバクトラ（バクトリアの都）のお城に帰りたいの！」「だめだよ。父上は、王で在らせられる叔父上のご不興をかって、そこにいる親衛隊長のラクシャスに殺されてしまったのだから。母上はメディアの貴族に無理遣り嫁がされてしまったしね。さつき、この者が語ったケルトの物語と僕らの運命はそっくりなんだよ」

「なんとということをおっしゃるのです。私の口添えがなければ、お3方とも生き延びられなかったのですぞ。お父上は現王の即位をよしとされず、反乱軍を組織された故にあのような最期を余儀なくされたのです」

「父上は次男ながら、先のクセルクセス王からもっとも信頼されていた」

「ですから、その子であられるあなた様は成人されるまで、この砦でお過ごしになるようにと、おふたかたのお祖母さまでもあられるアメストリス様から私が直々に申しつかっているのです」

老人は涙をこぼした。「この子らの命を助けてもらえたことには、深く感謝してある」ラクシャスは勝ち誇ったように、「さすが太守。陛下のご聖恩をよく理解されておられる」

「もうよい！」バガバイオスは声高に言った。「お前の説教など聞きたくもない」

「あなたが逆らえば逆らうほど、太守の立場もむずかしくなられる」ラクシャスは少女の背を押し一段高い椅子にもどした。老人は少女の細い肩を抱いて嗚咽をもらした。

「年寄りも涙もろくていかん」老人は頬につたう涙をぬぐった。

少女はすっかりした口調で言った。「どうか、もう泣かないでくださいまし。わがままは申しませんから」

この兄妹と老人は人質のようだった。現王の兄の子供なら、王位にもつける立場の者たちのはずだ。

ケバルは長居は無用とばかりに、「叶うことならバビロンにおられる王にお目にかかり、恭順の意を表したいのですが……」と申し出た。

ラクシャスは面倒そうに、「それは結構だが、なんの献上品も所持せぬ者と陛下が謁見なさるはずがない。私の紹介状でもあれば、話はべつだが」

メディア人は、ペルシャ人と手を携えてバビロニアを攻略したが、帝国の実権はペルシアに譲っていた。しかし彼らは共同統治者の位置にあるという考えを捨てていなかった。「お前たちのように得体の知れぬ者らが謁見できると思うのか？ 思い上りもはなはだしいとつけ加えることも忘れなかった。」

「ペルシアのアルタクセルクセス王は学識のあるお方と仄聞しております。守備隊長の紹介状で、お目にかかれるのでしょうか。それに陛下は、イスラエル人のエズラなる者の言葉にもっともよく耳をお貸しなるとうかがっております。ここにありますサライは以前、ラビ・エズラの弟子でした。学識も若輩ながら並はずれております。陛下のお側に仕えても充分にとまりましょう」

「お前たち、何を企んでおるのだ」とラクシャスが詰問した。「イシュタルの女神に仕えたいというのは嘘なのか」

「企みや嘘などではございません」とケバルは言った。「人には、野心がございます。神殿に仕える者は多数おりますが、王の側で仕えられる者は少数です。望みは高く」

その時突然、少女がサライを指差した。「お爺さま、お願い。あの者を、わたくしの遊び相手に欲しいの」

老人はひざの間の少女をのぞきこむと、「それは妙案だ」

「おたわむれを。この者は神の宣託により、イシュタルの女神に仕えるためにわざわざヨーロッパの北よりまいった者にございます」ケバルは老人の言葉をさえぎった。

「神の宣託と云えば、わしが怖れると思うのか！」老人は威嚇するように声を荒げた。「そなた、1人でバビロンへ参れ。心もとないようなら、すぐにこちらに戻るよう、孫のガババイオスを供につけてもよい」

「仰せの通りに」とケバルが承知すると、ラクシャスはとたんに剣呑な表情になった。「陛下への貢ぎ物はあるのか？」

「この者にございます」

「この者が？」

「毎年、何百人もの宦官が採用されます。この者も、そのうちの1人です」

「お前たちの真の目的は他にあるのだらう。どうなんだ！」

サライは口をはさむ。「イシユタルの神に詣でて宣託をいただき、そして仕えることこそ、私の終生の願いにございます」

「そうは見えぬ。お前からは白人奴隷のにおいがする」

ラクシャスはそう言うと、サライとケバルを広間から廊下に連れ出した。

「立ち去つてよろしいでしょうか」とケバルが訊ねると、「不審なお前たちを簡単に見逃すわけにはいかん」とラクシャスは無表情に言った。

そのことば通り、武器を身に帯びた兵士が数人、サライとケバルの前後を固めた。そのまま、塔の階段を下へ下へとぐるぐる巡り、身の丈ほどの扉の前に引き立てられた。

「お前、ここで待て」

「一緒ではないのか？」

問いかけるケバルに、ラクシャスは、サライには外へと言った。ケバルが身構える前に兵士たちは扉の中に押し込めた。

ケバルの怒った声がもれきこえる。

ラクシャスはうすら笑いをうかべ、「サカ人は短気だな」と言った。
サライはラクシャスのあとに従った。

ラクシャスは暗い通路を逆戻りし、入った門とは別の門から外へ出た。松明をかざした兵士が先導するあとについて行くと、来る時の道からは死角になる天幕の一つに招き入れられた。黒い天幕は闇にまぎれてよく見えないが、一つきりではないようだった。

バガバイオスが、立ってサライを出迎えた。ラクシャスは皮肉な笑みをもらすと、闇の中に姿を消した。

天幕の中は、赤々と火が燃やされていた。「バクトリア総督ヒュスタスベスの長子、バガバイオス王子だ」

「総督の息子なのか」とサライは訊いた。

王子は獣の皮を敷いた長椅子に腰かけると、サライにも向かいの椅子に座るように言った。

「本来ならペルシア王には、父が即位することになっていた」

バガバイオス王子は、帝国東部の最重要拠点、軍旗が高く翻るバクトリア州だという。

「州都にはペルシア軍が常駐し、騎馬民族のスキタイ人や遊牧民のサカ人の反乱を抑える役目を担っている。またホータン（崑崙山脈北麓の都市）やグジャラート（インド）への交易路の確保にも務めている。」

祖父のクセルクセス王は長子のダリウスではなく、次男のわが父ヒュスタスベスを総督に任じたのだ。王子の中でもっとも勇敢で賢明な者が、バクトリアの総督となる。そしてその者が王位を継ぐと決まっていた」

「オヤジが王にならなかつたから、捕虜になつてるのか」

王子は不機嫌になった。

「で、俺になんの用なんだよ」

「お前、先程とはうってかわって横柄な口をきくんだな」

「あんたの家来じゃないぜ」

王子は子供っぽい笑顔を見せた。「話をしたかったのだ」

「俺と？」

「生き残った母方の祖父と私と妹は王の勘気をことうむらないように

息を殺して暮らしているんだ。バクトリア貴族の家系の祖父は帝国から太守に任ぜられる以前から、広大な領地を有していたが、それも接収されてしまった。酷いと思わないか」

サライは返事をしなかった。貴族の不幸になんの関心もなかった。総督として赴任してきた父に嫁いだ母は、私と妹をもうけたが、今では新たに任命されたメディア人総督の側女だ。すべてはクセルクセス王の暗殺で状況は一変したのだ」

「先の王は暗殺されたのか」ちよつと興味が出てきた。「どんな方法で？」

「寝込みを襲われたと聞いている。直接、手を下したのは宦官らしい。それに司令長官と娘婿が手を貸したようだ。父の兄である、伯父のダリウスが命じたと噂されているが、私は信じない」

「長子だし、当然、王になりたかつたんだろ？」

「いや、そうではない」王子は眉をしかめた。「王は、息子の妻に懸想して、奪つたのだ。伯父は非常に立腹して……、腹黒い奴にそのかされたのだ」

「現王が、黒幕なのか」

「おそらくな。その証拠に伯父のダリウスは父親殺しの罪で処刑された。ついでに王位継承者の父を反乱罪で捕えて殺し、その後、陰謀にかかわつた宦官はもとより、司令長官とその子3人にも死罪を命じている。さすがに義兄にあたるメガピュゾスだけは殺せず追放処分にしたが、愚かなメガピュゾスは業病を患い、シュシヤンにもどり、宮殿内に幽閉されている」

王子はいきなり頭を後ろへそらした。

炎のゆらめきにあぶり出されるように、眼前に人を形どつた奇怪な像がサライの目に迫ってきた。口が耳まで裂け、つぶれた鼻の左右にららんと光る目、そのうえまがまがしい角と羽のような耳がある。

王子はその像に視線を当てながら、「悪鬼テラコッタだ」と言った。

「バアルの神と似ているな」

「美しいものと醜いものはどちらも人の目を引き付ける。ソドムとゴモラの町が滅びるまえに、イスラエルの神の、み使いが現われたそうだな。非常に美しかった、と律法書トーラーにしたためてある」

「イスラエル人の戒律をしたためたトーラーをなぜ、知っているんだ」

「興味があつたのだ。ソドムの男たちは、ロトの家に訪れたみ使いを辱めようと殺到したとある。み使いは、お前のようだったにちがいない」

「俺は幼い頃から皆に疎まれ、石さえ、投げられた」

「土地にしがみつくと百姓どもは、己れの所業を理解しない。お前の連れの、サカ人のようにな」

「サライは一瞬青ざめた。「まさか、ケバルを」

「殺させやしない。囚われの身とはいえ、国王の甥なのだ。そのくらしいの権限はある」と王子は微笑し、「案じるな。ダビデの子、ソロモンが王国の運命を左右する指輪を悪魔に盗まれるが、預言者スライスマンの叡知によって、無事に指輪をとりもどすという物語がある。知っているか？」

「サライが無視すると、王子は立ち上がり、「お前は運命を左右する宝石なのだ」

「そう言つてサライに近寄り、腕をとろうとした。サライが拒むと、王子は、テラコッタの赤い目を指さした。」

「血の色をしている目はルビーでできている。ロンギマヌス（アルタクセルクセス）は善の神アフラマスタを信じているというが、ばかばかしい。奴こそ悪鬼なのだ」

「あなたはこのままここで、くすぶってるだけか。しょうがねえよな、王子様なんだから」

「私は臆病者などではない！」

王子は言い捨てると、大股に天幕を出ていった。待つほどに、ケバルをともなつてもどつてきた。

塔の地下に閉じこめられていたケバルは、憤りを隠さなかった。王子に対しても、恭順の意を表すどころか、いまにも戦いを挑みそうな気配だった。

サライはわざと、明るい声で言った。「命の縮む思いをしたか」王子は何も聞こえなかったように、「ここをそなたたちに提供しよう。長く、逗留し、たのしんで行くがよい」

「そんな暇は俺たちにはない！」とケバルは言った。

「急がずとも、バビロンからイシュタルの女神は逃げたりしないと王子は言った。

ジャミールは、ケバルとサライを残して逃げるつもりはなかったが、こつも簡単に捕えられるとは夢にも思っていなかった。

彼らは松明をともさずにやってきた。

忽然と姿を見せた男たちは盗賊などではなく、れつきとしたメデアの正規軍だった。捕えられるような行為は何も犯していないとジャミールは指揮官に訴えたが、聞く耳はもっていないようだった。逃げ出そうにも、先に積み荷を抑えられてはどうにもならない。

王から砦を任されているという男はジャミールが女だとすぐに見破った。男装の女を嫌悪しているふしを感じられた。しかし、ジャミールの手首のブレスレットを目にすると表情を変えた。

「それをどこで手に入れたのだ！」

「ダマスコの宿で……」ジャミールはシシャクの名を口にした。

男は口惜しそうに、「命は助けよう。アフラマスタの神にかけて誓ってもいい。シシャクの積み荷には手が出せない」

霊験あらたかな腕輪だった。

「おおきに」

ハシムは地面に頭をこすりつけたあとで、すぐさま居直った。

「シシャク旦那の手下に怪我さしたら、どないな目えにあうか、承知しとるやろうな」

「あの男の気質は知っている。ユダヤ人の神のように復讐心の強い男だ」

男は、ラクシャスと名乗り、ケバルとサライが砦に捕えられていると告げた。

ハシムとジャミールは兵士らに聞こえない場所で相談した。

「ほつたらかして行くか？」

「それでもいいけど、見捨てて行くのも薄情すぎるんじゃないの？」

「助けに行っても、2人ではどないにもならない」

「そつよねえ……」

ぶつぶつ言っていると、ラクシャスが、ものは相談だがと話しかけてきた。

「どうだろう？ ラクダ1頭ぶんの積み荷で手を打たないか？ それで仲間の命は保障する」

ジャミールとハシムは顔を見合らし、頷き合った。

今夜の宴に、ジャミールも招かれることになった。

ラクシャスの客人として宴に加わり、隙を見て抜け出せばいいと彼は甘言をろうした。信用のおける男と思えなかったが、ケバルとサライを救うにはその方法しかなさそうだった。

ジャミールは、ハシムに耳打ちした。「あたしまで戻らない、そのときは、ダマスコに引き返してシシャクに助けを求めてよ。なんとかしてくれるはずよ」

ハシムはつながった眉を毛羽立てて、合点承知と言った。

ジャミールは兵士から馬を借りて、砦に向かった。シシャクには、積み荷を背負ったラクダを1頭あたえた。

「あたしたちを皆殺しにすれば、シシャクに知れることもないわ」
ラクシャクに言つと、

「あの男の耳は王の耳に勝る。地獄耳だから心配するな。その腕輪をお前がもらったということは、奴の執心の程がわかる。それほど危険をおかす気はない」

ジャミールはこの男なら監視官のティグラネスがどうなったのか知っているだろうと思った。

「ティグラネス監視官は処刑されたの？」

監視官と同じメディアア人のラクシャスはしばらく考えていたが、まだ生きていただけ答えた。

「力関係は一方に傾いているように見えても、いつ情勢が変わるか、天のみぞ知るだ。もしも、お前たちが監視官の密偵だったのならバピロンでは気をつけることだな。王の不興をかっても生き延びるスベは残されているが、監視官の怒りを持った者は生きながら皮を剥

がれる」

「へえ、そうなんだ」

「われわれメディア人は、ペルシア人の手足ではないと覚えておけ」
ジャミールはティグラネスの蛇のような目を思い出していた。夜の砂漠にも、あの男の監視の目が張り巡らされているような気がした。

広間で始まった宴には太守をはじめ、砦の主立った兵士が招かれていた。しかし彼らのうちの誰1人として、王子に敬意を払う者はいなかった。砦にいる娼婦たちについて、あれこれ取り沙汰していた。

「あれだから、高貴な者の存在を憎むのだ」と王子はサライに言った。

「高貴な者は男が好きなのか」

ケバルが揶揄すると、王子は、

「砂漠に生きる男は愛する男しか信じない」「ペルシア人は挨拶と称して男同士で口を顔になんどもつけるが、目にするだけで寒気がするぜ」

同盟国のサカ人と知りながら丁重に扱われなかったことにケバルは腹を立てているようだった。

「メディア人もペルシア人も、自分たちだけで国を動かしている気であるが、大間違いだ。いつまでもお前たちに従っていると思うなよ」

「承知しているさ。しかし、われわれは地の利に恵まれていない故に強靱なのだ。欠けているものを求めているにすぎない。この地を見よ。まばらに散在するオアシスをのぞいて、砂漠と荒れた岩山だ。肥沃な地に食指をのばして当然だと思わないか」

「それが侵略の正当な理由か」

「お前たちの祖先も掠奪をかさねて、南下してきたではないか。われわれに恭順したからといって、恥ではない」

ケバルと王子はいつまでも口論していた。兵士らは酔うほどに騒がしくなり、器を壊す者や剣を振り回す者など至るところで争いがはじまった。

王子はサライにも酒を飲むように強要した。

「俺はお前の言いなりにならない」

王子は高らかに笑い、おまえはそれを誇りにしているのかと言った。答えないサライに、王子は、お前たちの命など禿鷹にも価値がないと言った。

そこへ、ラクシャスがジャミールを従えて入ってきた。

サライは声を上げそうになった。

「仲間なのか」

王子はそう言うと、感に絶えぬふうにはジャミールを見上げた。

「なんと美しい少年だろう……」

王子はかさねて、「女、百人と交換しても惜しくない」

ケバルは笑った。

「何がおかしいのだ！」王子は口走った。「なんとしても、あの少年をもらいうける。サライ、そんな顔はやめる。お前の思い人なのか？ それでお前は私を拒んだのだな。よくわかった。」

ユダヤ人の律法では、男と男は寝てはならないなどと言うが、くだらない規範だ。テラコツタは、人の自然な欲求をけつして阻んだりしない。欲求こそ、狩りとともに生きるうえに必要な不可欠のものだ。女に子供を産ませ、畑を耕すことに一生を費やすのは、つよい男の誇りを無益なものとするだけだ」

王子は杯をかさねながら、とくとくと弁じた。

ラクシャスが立ち上がり、客人の仲間の少年が剣の舞いを披露すると言った。

エルサレムのアシエラの屋敷でヤマトが舞った踊りを、ジャミールは舞った。

しなやかな肢体は、酔って騒いでいた兵士らの口と目を彼女ひとりに集中させた。

「あの者を私の所有物にできるなら、命も惜しくない」王子はうわごとのように呟いた。舞い終えたジャミールは一礼すると、ラクシャスの隣に座ろうとした。王子は血走った目で立ち上がり、引き寄せられるようにジャミールのそばにふらふらと歩み寄った。

「どうされたのです」ラクシャスは王子の前に立ちはだかった。

「私は王子だぞ。バクトリア総督の長子だ」ラクシャスは周囲に聞こえるように、「なんの権限もなければ、王子であっても兵士となんらかわらないのですよ」

兵士たちは大声で笑った。

「お前の魂胆はわかってている。宰相に取り入って、この国を乗っ取る腹つもりでいるんだ」

「王子ともあるう者が、まっすぐに立てないほど酔ってどうするのですか」

「そんなことはどうでもいい」と王子は言い、ジャミールを寄せせとしつこく言う。

サライは立ち上がり、「売り物じゃねーっ」と怒鳴った。

王子は赤らんだ顔をしかめると、「カづくという事態になるな」

「てめえ……」

「明日、剣による腕だめしをしよう。お前も出る。私は受けて立つぞ」

「わかった」とケバルが言った。「そのかわり、今夜はもう引き取らせてもらっぜ」

ケバルはジャミールとサライに目配せすると、足早に広間から出て行った。

ケバルたち3人は、わが家のような顔をして天幕へ戻った。

開口一番、ケバルは言った。

「お前は馬鹿か！」

サライは一瞬、自分ことを言っていると思わなかった。

「なんだよ」

「ジャミールは、ラクシャスと話をつけたから来たとなぜ、わからないんだ！」

「ラクダ1頭の積み荷で話がついてたのに」とジャミールもがっかりした声で言う。「あんたって、ほんとに先が読めないのね」

サライは兵士のしつらえた寢床に倒れこんだ。「ああ、俺は低能

だよ。お前らみたいに密偵じゃなかったからな、策略なんて考えられないんだよ」

夜ともなると、昼間の温度が信じられないほど冷える。ジャミールとケバルは火のそばの身を寄せ合い、小声で明日の手筈を話し合っている。サライにはまったく相談しない。なんの役にも立たないと思われるのだ。サライは口惜しくてならない。

「なんで、俺ばっかりが悪いように言うんだよ。もともとは、ジャミールがバビロンへ行くって言い出したせいだろ？俺だって危ない目にあってるんだ。一度でも、俺の身になってみる……」

「弱いくせに強がつて見せるからこんなことになるんでしょうが」「いつ、おれが。ま、いい、今宵かぎりの命かと思うと、諦めもつきやすい。ついでに、お前の顔がテラコッタに見えてくるよ」

「何よ、それ」

「悪鬼だ」

「あんたねー、明日は、あたしたちだけで逃げるから覚悟してなさいよ」

「好きにしるよ。なんなら、今夜にでも2人で逃げりゃいい」

天幕の外には見張りの兵士が数人いた。持ち物はすべて取り上げられている。この場を逃れるすべはなさそうだった。

「俺たちにはなんの武器もないんだぞ」とケバルは言った。「明日、どうやって奴らから武器を奪うか知恵を絞っているんだから静かにしてろ」

サライはサンダルに手をのばすと、隠していた短剣を抜き取り、ケバルに手渡した。ケバルは受け取ると、短剣を鞘から抜いた。

「これは！」とケバルは目を懲らした。

「俺がおふくろからもらった、たった一つの形見だ」

「柄は黄金に見えるがそうじゃないな。刃も鉄じゃない」

「だから軽かったのね」とジャミールが言った。

「見たことがあるのか」とケバルが訊く。

「ハシムだってあるわよ。黄金じゃないから、あっさり返したのよ。」

これで納得したわ」 形見の短剣まで腐されて、サライは心底落胆した。

「こんな金属は見たことがない」とケバルは言う。

「どういうことだよ？」サライが訊ねる。

「言い伝えて聞いたことがある。不思議な金属の話を 錆びないし、折れない 　しかし、人を何人でも殺せるということだ。お前、これで人を傷つけたことはあるか」

「一度もない」

ケバルは自分の手のひらに剣の先を這わせた。皮膚の表面にはなんの変化もなかった。しかし、ケバルが指で手のひらをなぞると、薄皮が切れていた。

「明日がたのしみになってきたな」とケバルは言った。

翌朝

澄み切った光が天幕をおおくと、サライとケバルジャミールは、客というよりも罪人のように砦の庭に引き出された。

並み居る騎馬兵が3人を出迎えた。

見渡すかぎり、鉄兜と楯の海が波打ち、彼らの喚声が砦中にとどるきわたっていた。

顔をおおった女たちが口笛に似た喉からの声を鳴らすとヒュルヒュルと泣いているように聞こえる。

「客人の勇気を皆で讃えよ」

太守は、塔のバルコニーからしゃがれた声を発した。太守の隣には少女もいる。サライは緊張で目眩がしそうだった。物見のための櫓には、王子が立っていた。

王子は隊列をくむ兵士にむかって雄叫びをあげた。兵士らも喚声をあげ、王子に応える。金色のきらびやかな軍服に身をつつんだ王子は、王の甥にふさわしい出で立ちでサライたち3人を見下ろした。ケバルは、茫然とするサライを叱りつけるように言った。「しっかり前を見ている。隙があれば、太守の孫娘をかつさらえ。失敗しても俺やジャミールにかまわず逃げる。いいな」

見物する鈴なりの兵士の只中にラクシャスの非情な目が光っていた。

騒然とする砦の広場で、彼だけが冷静だった。こぶしをふり上げる兵士をかき分けるようにして前へ進み出たラクシャスは、ひと声張り上げた。

「はじめよ！」

馬のあぶみがサライとケバルとジャミールの目の高さで整列した。統率のとれたさまに3人は目を見張った。ケバルは物見櫓にむかつて怒鳴った。

「お前は戦わないのか」

「騎馬兵の訓練のあとだ」と王子は言った。ケバルは、サライとジャミールをうしろに残して駆け出した。

耳をろうする喚声に押し出されるようにして、武具で身をかためた大男が進み出た。

「いざ！」

大男が掛け声をかけると、騎馬兵らは悠々と馬を進め、ケバルが逃げないように大男とケバルの周囲を駆けた。

馬での円陣だった。

外周にいる兵士の群れは熱狂した。

赤銅色に日焼けした大男は素手に見える相手に立ち向かうを恥としない様子だった。左手に長剣をさげ、右手に槍を持っている。槍の射程距離にケバルをとらえると、大男は上体をたわめた。

ケバルは身を低くした。槍はケバルの頭の上を越していった。

騎馬兵らの失望の溜息がもれた次の一瞬、何が起きたのか、騎馬兵らはもとより大男にもわからなかった。気づいたときには、大男の喉首に短剣が突きたっていたのだ。ひと声も発することなく大男は仰向けに倒れた。地響きがしたとたん、円陣を組む馬たちの足並みが乱れ、砂埃が立った。ケバルは背後の地面に突き刺さっている槍を引き抜くと、騎馬兵の1人に向かって投げた。顔を射抜かれた兵士は馬から転がり落ちた。ケバルは大男の喉首に沈んでい

る短剣も引き抜いた。おびただしい血が吹き出した。

「すげえ……」 サライは感嘆の声をもらした。

隣にいたはずのジャミールがいつのまにかいなくなっていた。どこへ？　と思う間に乗り手のいなくなった馬の背に彼女はまたがつていた。馬はいななき、前脚を高くあげ、見知らぬ騎手を振り落とそうとしたが、ジャミールは手綱を離さない。猛り狂った馬は、目も回らんばかりの速さで人馬の輪の中を暴走した。しかし、馬は次第に新しい主人を気に入ったようだった。ジャミールが手綱を引き締めると、静かに停止した。いつしか、どよめきが喚声にかわった。

「少年ながら見事な手綱さばきだ」ラクシャスは誉めそやした。ついでのように「さあ、王子の出番ですぞ」と大声で言った。

王子の顔面は蒼白だった。

大男の死体が片付けられまで、王子は物見櫓から降りてこなかった。

サライはその間に、ケバルに命じられたことを実行するために塔に急いだ。誰も、サライの動きに気づかなかった。騎馬兵らは馬から降り立ち、兵士らと一緒に見物の側にまわっていた。

広場を染めた血の色に怖気づいたのか、戦車に乗った王子は弓矢を手にしたまま動かない。馬は足踏みの状態にいる。ケバルはゆっくりと戦車の前に進み出た。

兵士らは野次をとばした。「戦え！　それでも、王子かつ」

最前列で腕組みをしたラクシャスは笑いをかみ殺す表情をしていた。

翼を広げた鷲が大空を舞っている。

えびらを背負った王子は弓に矢をつがえた。

期待の目が王子に注がれた。

王子は突然体の向きを変え、矢を放った。胸を押さえたラクシャスの口から呻き声がもれた。

ケバルに命中するものと思っていた兵士らは指揮官が倒れたこと

で理性をなくしたようだった。太守の後ろに控えていた将兵は、「おおっ」とうなって、のけぞった。

兵士のうちの幾人かが、獣のような叫び声を発しながら戦車に向かっていった。

ケバルは王子の戦車に飛び乗り、四方から群がってくる兵士を短剣で斬り裂きながら手綱をとった。王子は矢を射つづけた。ケバルは馬の前脚で兵士らを踏み付けながら戦車を全速力で走らせた。

サライの耳に兵士らの阿鼻叫喚が聞こえる。

「早く下りてきなさいよっ」ジャミールは塔の下にいた。

「まだ……」

姫をさらっていないと言っ前に、当のパリサティスがジャミールの馬をめがけて飛びおりた。ジャミールは咄嗟に抱き留めた。

「パリサティス……」 老太守は衝撃が大きすぎて身を震わすばかりだった。

サライは転げながら塔の階段を下りた。下で待っていたパリサティスは平然と言った。「そなたは思ったより、機敏ではないようね」ジャミールはサライに手を差し伸べた。サライもなんとか乗馬した。

バガバイオスにパリサティスを加えた5人は砦の門を出ると、一目散に北へ向かった。蜂の巣の家々が点在する広々とした草原まで一気に駆け抜けた。

砦からは誰も追ってこなかった。

王子は戦車を止め、5人の運命を決定する権利が自らにあることを誇示するかにようにふるまった。

「ベドウィンの部落に立ち寄ろう。人目を気にせずに隠れていられる」

そして、戦車の手綱をケバルから取り上げると、「私にまかせろ」と言った。

王子の言い草にケバルは苦笑した。「ベドウィンが損得勘定ぬきで人に従うものか。馬を奪われたあげくに殺されるのがオチだ。そ

れがおまえの狙いなのか？」

王子は気色ばんだ。「20年も30年も定まった場所に住みつづけるお前たちに砂漠に生きる男の心はわからぬ。客を遇すことにおいては何ドウインはサカ人の比ではない」

「俺たちは、回り道をしたくない」

「ここは、私の言葉に従ったほうが身もためになる」

「あんたの巻き添えはごめんだぜ」

王子の身も安全とは言えなかった。ラクシャスが死んでも、王子を亡きものにしようと企む勢力がバビロンにはすくなくからずいることは想像にかたくない。

「人質の命令に従えると思うのか」

ケバルが言っても、王子は意に介さない。「このまま逃げおおせるところにいるのか。メディア人の指揮官を殺めたのだ。王のもとへ報告はすぐに届く。悪いことは言わぬ。私の言う通りにしろ」

ケバルは戦車から下りた。ジャミールとサライも馬から降りる。

ケバルはじっと考えている。誰にも相談しない。サライはケバルのような男にも迷うことがあるのかと、不思議に思った。おそらく積み荷の行方を気にしているのだろう。

そそり立つ山岳地帯をまる一日行くと、巨大な円錐形の穴があり、砂に足をとられながらそこをくだると、玄武岩でできた天然の洞窟が狭い抜け道をつくっていた。

先に馬を通し曲がりくねった道をくぐりぬけると、あたりが開け、銀鼠色の雪につつまれた山肌が現われた。土地に通じない者にはけっして見つけられない場所だった。

悪事を働いて放浪する連中にとつては格好の隠れ家でもあった。

ハシムは一旦、隠れ家に向かったが、「こんだけの金目のもんがあつたら、危ないなあ。ベドウインは信用ならんよつてな」

しかし、今となつては、シシャクのもとに戻る気がしなくなった。「ケバルに都合よっこき使われて、ジャミールには面倒のかけられ通しで、わいの得はなあーんもあらへんがな」

ハシムは独りごちると、ニタリと笑い、

「これもみーんな天の思召しや。人の事より我が事や。なんちゅうたかて、わいは善人やよつてな。神さんもよーよー知つてはるのや。ここらで、ラクしてもええ頃やわな」

待てよ、とハシムは思案する。バビロンに向かえばケバルやジャミールと出くわす恐れがある。パルミラで積み荷を売りさばけば噂になつて、たちまちケバルの耳に入る。

「万が一にも、ケバルが追つてきたらすぐに行き先を嗅ぎ付けられる。どないしたらええねん。ここが胸突き八丁や。まずは落ち着いてと　パルミラがあかんとすると、大回りしてフェニキアあたりに出るしかないな。軍隊なんぞ、わいはいらん。船を一艘、買つてエジプトのナイル川から運河を通つて紅海に出たらもうこつちのものや。ソロモンが黄金を見つけた場所を見つけてみせるでえ」

ハシムは独り言をぶつぶつ言いながら断崖のつづく細い山道を北西にむかつて越えていった。積み荷の重さでよろめく3頭ものラク

ダを、たった1人で引き連れているのでキャラバンと出会わない悪路を選んで進むしかなかった。

「金をつかんだら、気のええ嫁を1人でええからもらいたいなあ。子供もほしいなあ。ジャミールみたいな女の子がええ。ほんま、あの子は可愛かった。どんな憎まれ口をきいても憎めんかった」

ハシムの胸中を山岳地の冷気が襲う。いつしか、溜息ばかりをつけていた。後戻りしたいわけではなかった。もっとも大切に育てていたものを、どこかに置き忘れたように思えてならなかった。

「なんで、ヤマトなんかのために自分を犠牲にするんや。ジャミールらしい。お前はお前のことだけ考えて生きるから可愛いんや。ヤマトみたいなわけのわからん餓鬼のために、なんでやねん！」

平野と山、高原と地溝の急速の変化。互いの間の終わることのない闘争は、厳しい寒さから熱帯の暑さへと、どしゃぶりの雨から埃っぽい荒野へとめまぐしくハシムを運ぶ。

自分がいま分岐点にいることを、ハシムは痛切に感じていた。

白骨のように風化した岩山を越えると、草木のない荒涼とした雪景色の中に人家を思わせる集落が散見できた。荒野のはるかかなたに天空をおおいかくす紫色の山脈が横たわっている。植物がほとんど育たない岩石ばかりの光景は無彩色の世界である。逃亡者の一行は日暮れとともに寒さに震えた。

ジャミールは行く手に危惧を抱いた。こんなふうには心細さを覚えることなどかつてなかった。密偵だった自分の中にも複雑な感情があることに気づかされた。

「寒くないか」

轡を並べるサライが気づかってくれるが、「暑いくらいよ」と答えてしまう。

「サライ！」兄の戦車に同乗するパリサティス王女が呼んだ。「わたくしは寒くてたまらないわ」

「ひと休みしよう」

ガバガイオス王子は先頭に行くケバルを引き止めた。

「ここまでは、追ってこないだろう」

ケバルは、険しい道に適さない戦車を壊し、これを焚いて暖をとろうと提案した。王子はしぶしぶ承諾した。

「お腹がすいたわ」と、王女は言う。

ケバルの持つている乾し肉を与えると、王女はひと口噛んで吐き出した。唯一の食料だと知らないのだろう。

ジャミールは王女の頬を叩いた。少女は悲鳴を上げて、サライの胸にすがった。ぶるぶる震えている。

「この女を許さないわ！」

「子供だから、よくわかってないんだ」

サライは王女をかばった。

「寒がつてるからお前のマントを少し裂いてやってくれよ」

ジャミールはマントの下の上衣を裂いて王女に着せかけた。

「奴隷みたいな格好はいやよ」

少女は唇を尖らせた。

「わたくしのお爺さまはペルシアの大王、クセルクセス王よ」

ジャミールは黄灰色の髪を忌ま忌ましい思いで見つめた。

「それがどうしたのよ。あんたも王子も帰る城はないわ」

「お前のような卑しい身分の者とは口をきかないわ」

「けっこうね」

王子は妹のわがまを叱る気配は微塵も見せない。しきりに夜空を見上げ、ケバルに現在の位置を確かめていた。

その夜は月夜で、満月が照り輝いていた。バガバイオス王子はジャミールが女と知って憑物が落ちたように、なんの関心も払わなくなった。これで薄気味の悪い思いをしなくてすむとほっとする反面、兄妹が2人して、サライにまわりつくさまを目にすると腹立ちが増した。何に対しても執着がなかったから殺伐とした世界にいても苦痛や怒りとは無縁だった。翌朝、王女は兄の馬ではなくサライの馬に同乗するといつてきかなかった。

王子は苦笑し、

「したいようにさせてやってくれ」

と言う。ジャミールは思わず、

「なんて、わがまな子なの!」

「わたくしはお前にそのような言われ方をされる覚えはない! もしここが宮廷ならお前は即刻、斬り刻まれているわ。卑しい身分で、わたくしに勝とうなんてむりなのよ」

10歳にも満たない子供の言葉とは思えなかった。

「人影が見える」ケバルが小さな点を指差した。

見つめているうちに雪原に陽炎が燃え立つほどに日は高くなった。王子は大声を発した。その声が岩間に反響すると、こだまのような寄生が返ってきた。待つほどに、ラクダにまたがったベドウィンが姿を見せた。

一行は見張りのベドウィンに連れられ、彼らのキャンプ地に向かった。冬の間、彼らはここに住んで、キャラバンを襲い、その戦利品で暮らしている。

ベドウィンの族長は遠目であつても賓客を目視すると、谷間の洞窟から転がるように駆け出てきた。そのあとを着ぶくれした男たちの一群が湧き出てくる。

「秃鷹は信用できない」

サライが呟やくと、

「お前たち同様、連中も使いようで役に立つ」

王子はそう言つて、ケバルを振り向た。

「サカ人もベドウィンが嫌いか」

「遊牧民は、あんたたちに利用されるほどお人好しじゃない」

「いずれ、王にもなるうかという私だぞ。その私に逆らつて、なんの得がある」

「砂漠に精霊が住むと考えるベドウィンは俺たちより数倍、自由に生きている」

「だから信用できないと言つのか」

「自由な暮らしは人間を怠け者にするか、野放図にするかのどちらかだ」

ジャミールはハシムのことを思い出していた。彼女はいつの頃からか、砂漠に国の境を定めない遊牧民と各地の農民が相争うことに疑問を抱いていた。砂漠の住人である彼らは家畜の餌である草をもとめて集団で移動し、天幕を張つて暮らしている。ところが、同じ地域に住む農民は牧草地を耕し、どこもかしこも田畑に変える。そのために彼らの家畜を飢えさせるものになる。

「多くの者は狭い世界でしか、物事が考えられない」と王子はつぶける。「たしかに、ベドウィンの掠奪は、死と荒廃をもたらす。だが、ユダヤ人のように神の名のもとに異教徒を杭にかける者たちに正義があるとも思えない」

サライは頷いた。「ベドウィンもユダヤ人も似たり寄つたりだが、

ユダヤの神の言葉は美しい」

ジャミールにはサライの気持ちがあった。ユダヤ人の中で育ったサライの心中には彼らに対して憎悪と同じ強さの愛着がある。高い知識と清廉さを合わせもつラビ・エズラとの出会いも大きかったにちがいない。

「私はペルシアの将兵たちというよりベドウィンと過ごすほうが、ずっとたのしい」

王子の言葉通り、族長は王子の足元までやってくると、馬に蹴られそうになるほど近寄り、ひれ伏した。

「こりゃあ、まあ、突然のおなりで面食らいやした。狩りにでもお越しかと？ それならそうと……」

ベドウィン特有の、狡猾な目つきで頭を下げる族長に対し、王子はさっきまでの口ぶりとは裏腹に不快な表情もあらわにした。現ペルシア王の甥にあたるバガバイオス王子はその立場上、遊牧民の中でも卑しく粗暴だと蔑まれてる彼らに慣れ親しまれては威厳が損なわれると思っているふうであった。

「狩りにまいったのではない」王子は族長に告げた。

「ひと休みなさってくださいえ」

王子は即座に承知しない。

「お若いの。お前さんからからも、若様にすすめておくんなせえ」

族長はサライに声をかけた。

「わしらは光栄におもっているんでさあ。今夜はたつぷりと食ってもらいやすぜ」

砂埃でくすんだ顔色の族長は太っ腹のところを見せた。ベドウィンは客を大切にすることでも有名だった。

王子は渋い顔つきのまま、「ものをねだられても旅先のことでも所持していない」

「わしらが、そんな厚かましいお願いをするはずがねえ」

王子はサライとケバルに頷いて見せると、馬を彼らに預けるように言った。ジャミールは大切な馬を手元から離すことに一抹の不安

を感じた。

族長はへらへら笑うと、ジャミールにむかって言った。

「すまねえが、一服おくんせえ」

ジャミールにかわって王子は、あとだと言った。

午睡のあと、王子は遊牧民の男たちの多くが愛飲している大麻を、ゆっくりとくゆらしながらサライとジャミールに話した。

「子供の頃、書物をひもとくひとときが何より幸せだった。ところが父は、側近に命じて、私から書物を取り上げようとした。頑強に拒んだので、父も諦めた。しかし、父を殺され、母の嫁ぐ姿を目のあたりにして、書物に費やした時間がなんの意味もなかったと思いつたのだ。なぜ、もっと軍事について学ばなかったかと今では後悔している」

「書物と軍事は関係ないのか？」とサライは訊いた。「俺の知っている奴は、過去の戦歴を学んでいたようだけどな。たとえば、ペルシアとギリシアの戦いのありさまなんかを」

「ペルシアでは、ギリシアとの戦争を語ることは許されていない」「負けいくさだからか」

「われわれには、勝利の女神がついている」ジャミールは今頃、ヤマトが何を学んでいるのか想像もつかなかったが、ガバガイオス王子のようではないことだけは確信できた。気持ちの安らぐ夕暮れが訪れると、王子は族長の天幕に皆を連れていった。彼は円座の真ん中に座りながら族長をねぎらった。生まれながらの帝王の気風とはこういうものかとジャミールは思ったが、尊大さよりも必要な何か王子には欠けていた。ヤマトがもっていた何かが……。

ベドウィンたちは天幕の中ではひれ伏すことこそなかったが、王子を賛美する気持ちがジャミールにまで伝わった。

族長はおずおずと、

「太守はどんな按配でやすか？」

「さあ。旅の途中なのでわが城のことはまるでわからないが、おそらく祖父は、余命いくばくもないだろう。何しろ、歳のせいでも

の病いにも気づかない始末だ。私の言葉など祖父には不要なのだ。命さえ危ういというのに。つまるところ、私には腹心の部下というものが無い。いまのままだと、祖父の亡き後は、父を抹殺した叔父の手先の者がすべてを掌握するだろう。それは時間の問題だな。しかし、そうになると、私一人が承知していることも、むろんおまえたちも、安穩に暮らせなくなる……」

王子の言葉に不安を覚えたようすの族長は小さい目を下から上になんども動かした。

「わしらの住みかは、わしらのもんだ。誰にも踏み込ませねえ」「では、戦うしかないな」

奇襲攻撃に慣れている彼らは組織された軍隊による攻防に恐れを抱いてる。しかしそれを王子に悟られたくないようだ。

「ようがす。いままで通り、お味方しやす。あつしらにおまかせくだせえ」

ジャミールはサライと顔を見合わせた。転んでもただでは起きない王子の頭の良さと機転とは王にふさわしいものであった。

彼はペルシア王の意をうけたラクシャスの言いなりになる祖父に見切りをつけ、メディア人の要塞をベドウィン族に襲わせる魂胆なのだ。

「わしらが手を組めば、ペルシアもなんのそのだ。ゲヘナ（地獄）の劫火に焼かれても、この誓いはやぶらねえ！」

族長は胸を張った。

「おまえと一族の者を信じよう」王子は鷹揚に答えた。

族長は両手を広げて肩の上にあげると、いきなり喚いた。

「さ。飯だ、飯だ！」

夕食には生煮えの肉塊が出た。賓客の来訪のためにラクダを一頭屠殺し、脂身ごと大釜で煮たものだ。一族の男たちが大皿に向かつてわれさきに手を出す。

「田舎もんが、礼儀を知らねえでどうする」族長は皆を怒鳴りつけながら真っ先に肉塊にかじりついた。汚い手がつぎつぎにのびる。

寄つてたかつて、禿鷹や野犬があさるように骨までこそげる彼らのさまに王子は眉をしかめつつも満足気にながめていた。

すっかり日がかげると、漆黒の闇夜に天幕はつつまれた。砂漠の民は天地に祈りをささげると、口々に一日の出来事を語りながら眠りについた。

「彼らはまとこの神を知らない。真理を求めようとしないのだ」

王子の言葉に、ケバルは冷笑した。

「あんたの言うまことの神とはなんだ」

「アフラマズタの神だ。他に神はいない」

イスラム教発生以前の遊牧民は自然物を崇拜し、あまたの神や霊の存在を信じていた。彼らが神と考えたラート、マナート、ウツザなどは神でもなんでもなく一個の偶像に過ぎなかったが、のちの時代が考えたように無知無明などではなく彼らには彼らの法と掟があった。ただし当時から、ヤハウエを絶対視するユダヤ人とは相容れなかった。

翌朝、王子は激しい雷雨にもかかわらず、彼らの本拠地であるバクトリアの城を偵察してくると言い残して去った。

「なんで俺たちを置き去りにすんだろ？」

不平をもらすサライに、ケバルは言った。「王子が万一、バクトリアを掌握するようなことがあれば、王の立場は芳しいものでなくなる」

「俺たちの知ったことじゃない」

「ペルシアの宮廷で湯水のごとく使われている黄金とラピスラズリの大半はバクトリアからの献上品だ。王は宝の山を何がなんでも死守する」

「サライの言う通りよ。王族が何をどう考えようとあたしたちに関係ないじゃない。どうでもいいじゃない。あたしたちだけで出発しようよ」

ジャミールはケバルを急かした。

ケバルは首を横にし、「俺たちの手の中に、ロンギマヌスの姪が

いるんだぞ。奴にとって、おのれに齒向かうバガバイオスは邪魔でも、クセルクセス王の血を引くパリサティスは息子の嫁にのぞむはずだ。わかるか？ 思ってもない幸運を俺たちはつかみかけているんだ」

「密偵だったあんたがいま何を企んでるのか、てんでわからないわ」
ジャミールはケバルに対して不審の念を抱いていた。

サライは訊ねた。「あんたは求めているのは地位なのか？ 金なのか？」

「どちらもだ。密偵だったからって、この俺が、一国の主人となることを望んで悪いはずはない」

ジャミールは、ヤマトと自分との距離が果てしなく離れていくように思えたのだ。やはりひとり旅に出るべきだったと今さらながら悔いた。いつもケバルやハシムに守られてきたことが、独りでも生き抜く強さを奪ったのだとようやく気づかされた。

1本マストと四角い帆の船は、乳香や没薬や染め布などの積み荷と鉱山で働く男たちをカルタゴで下ろしたのち、対岸のマツサリアでブリタニアの錫や黒海沿岸の琥珀を買いつけたあと、ビブロスに向かう商人を乗船させた。

帰港の途につくことになった。

漕ぎ手は百人余り、乗組員は用心棒のヤマトとイサを含めて25人。あとはザイナブと息子たちだ。この船では、船長が水先案内人を兼ねていた。それだけ荷主の信頼が厚いのだろう。

潮と風を待っている間、ザイナブはイサに問うた。

「お前たちは、どこにたどり着こうとしているのだ。地の果てまで行って何があるというのだ？」

「ギリシアの学舎で、私はさまざまのことを学びました」

イサの声は低かった。

「物体の完全な形は球体であることも、その中の一つです。従って、この地も月も太陽も球体であると教わりました」

「丸いのか!？」

「ご存じ思いますが、地平線の彼方からやってくる船は舳先ではなく、マストの先端から見えます」

「そうだと」

「これはこの地が丸いことを示しています」

「では、どうして海水は天空に零れ落ちないのだ」

「おそらく、この世界にあるすべての物は地中の中心に向かって引き寄せられているものと思われれます。そうでなければ海水は地表から離れ去ってしまうはず」

「お前の話すことは奇想天外で、私には今一つ信じられないが、大洪水のあったことだけはたしかなようだ」

イサはいつ作ったのか、木彫りの球体を持ち出して説明した。

「船が一点から果てしなくつき進んだとします」

イサは球体を動かさず指を動かした。

「このようにまっすぐに進めば、もとの港へ帰ってこられます」

「私の船は大海（地中海）の外へ出たことはないが、大昔のフェニキア人は紅海を出発し、ヘラクレスの列柱（ジブラルタル海峡）を越えてマウレタリア（アフリカの北部沿岸）に沿って巨大な陸地を一周したという言い伝えがある」

「海水は一定の方向に流れる川のようなものです。この海の流れをうまく利用すれば、大航海ができます」

「お前は私にどうしてほしいのだ」

「まず長期の航海に耐え得る大型の船を建造し、その船で、ナイル川の灌漑水路から紅海にぬけ、半島伝いにインドに至り、その地よりさらに東に向かいたいと思っております。陸路ではすでにゾグト人が東の大国との交易で莫大な利益を得ています。私は海路で、未踏の地に至りたいのです。預言者イザヤの言うところの、東の果ての島々にです」

「エレミヤが砂漠に隠したと言われている契約の箱はその島のどこかに隠されているという噂もある。はてさて、信じてよいものかどうか」

「ご存じでしたか」

「表向きはどうあろうと、私はユダヤ人だからな。書物にも目を通して見る」

「ダビデ王はいかなるいくさにも、契約の箱を持参したそうでございます」

「私は商人だ。いくさに役立つものなどいらぬ」

「他の商人に先んじて新たな航路を開拓すれば珍奇な品物や食料はもとより、黄金を産する国をも発見できるかと存じます」

「しかし、それには大きな代償が必要だ。船が沈没しては元も子もなくする危険性が高い」

「おっしゃる通りです。常人なら、黄金を見つける可能性より、投

じた資金をすべて失うと予測するでしょう」

「私は金儲けに長けた、ただの男にすぎない。目端はきくがな」

「そうであれば、なぜヤマト様と私をお雇いになられたのでしょうか」

ザイナブはしばらく考えていたが、そばで控えていたヤマトに声をかけた。

「お前は どう思う？」

「私の名はシユメール語のティアマト（海の水の神）に由来していると姉から聞かされました。その名のように行動したいと常々思っています」

「たしかに海はいい。未知の海であればあるほどいい。国境もなければ、ペルシアの王の権力も及ばない」

ザイナブは立ち上がると、

「そろそろ風が出てきたな。月も雲にかくれてしまった。ひと荒れくるな。海賊に出くわす心配がない季節は、天候が敵になる」

息子たちの船酔いはいまだに回復せず、船底で横になり喘いでいる。とくに長子の具合が悪く、発熱までしていた。

「おのれの一生を賭けて交易に携わってきたが、後継ぎがないも同然だ。この先、どれほど商いで稼いで倉に黄金を積み上げようと、子孫の放蕩によって失われるのが関の山だろう。情けないが、私の夢を引き継ぐ者はいない。今一度、カルタゴを凌駕し、フェニキアにかつての栄光を取り戻したいと夢見てきたが……、しかし大きな賭けに出る年齢はとつきに過ぎている」

「ヤマト様を、船乗りではなく、あなた様のお子でもあるとお考えください」

イサはそう言って平伏した。「かならずや、ご期待を裏切らないとお約束いたします」 漆黒の天空に稲妻が走った。

落雷の轟きにも、3人は身じろぎもしなかった。

2本のオール舵をとる船長と部下の航海士は大慌てでやってきた。「嵐から船を遠ざけます」

ザイナブの息子たちは悲鳴を上げている。

イサとヤマトは船尾に走り、帆の向きを変えるためにもづなを引っ張った。

稲妻が雲を切り裂いた。

数人の航海士が声を上げた。「竜だっ」

雷鳴とともに竜巻のような荒波が海面を走ってきた。

天然のアスファルトをぬった船体はあっという間に飲みこまれた。誰もが死を覚悟したが一瞬ののちに直立した波はかき消え、マストのてっぺんに掲げられたフェニキアの旗は何事もなかったようにはためいていた。

「どういうことだ……」ザイナブは茫然としている。「夢の中の出来事のようなだ」

次の刹那、黒雲の隙間から青い雷光が船尾をめがけて落ちてきた。

「ヤマト様ーっ」イサが絶叫した。

甲板いた者たちで、雷に打たれたヤマトが生存していると思った者は誰一人いなかった。

ヤマトが、立ち上がった時、眼帯がとれていた。

「見える。両の目が見える！」ヤマトは大声で言った。

「神の子だ！」

「ティアマトだっ」

男たちの驚きの声は畏怖の声に変わった。

チイギリス河とイラン高原を隔てるザクロス山脈の冬は雷が鳴り、雷が降る。何一つ楽しみがない洞窟での暮らしが続いていた。

バガバイオスはアダルの月の半ば（2月下旬）を過ぎても戻ってこない。

パリサティス王女はサライに、ケルトの物語を語ってくれと言ってつきまとった。

サライは焚火で暖をとりながら、

「高慢な王女の話をしてやるよ」

「早く、話して」

パリサティスは小さな手を火にかざす。きれいに整えられていた黄灰色の髪はキンポウゲのようになり、顔も煙のせいで汚れている。「たいへん立派な王様がいて、その王様にはとても美しい娘がいたんだ」

「わたくしのようね」

「でも、このお姫さまは、気位が高くて、どんな結婚相手も気に入らなくて断ってしまう。そこで困った王様は怒って、歌うたいのみすばらしい浮浪者にお姫さまを嫁がせることにしたんだ」

「わたくしなら父上の思い通りにならないわ」

「ぼろをまとった男の国に連れていかれたお姫さまはさんざん泣いたあとで、男に命じられて何も無い粗末な家の中を掃除し、食事の支度をすることにしたんだ」

「いやよ、そんなこと！」

「しかし、何をやってもお姫さまはきちんとできないんだ。男は、お姫さまに籠づくりや縫い物をやらせたが、これもできないとわかって町に瀬戸物売りにいかせたんだ」

「物売り女になんぞ、わたくしはけっしてならないわ」

「物売りの仕事も失敗して、お姫さまの高慢な鼻はぺしゃんこにな

ってしまった。男はこんどはその国の宮殿の台所でお姫さまを働かせることにしたんだ」

「ひどい男だわ！」

パリサテイスはつぶらな目を釣り上げた。「お姫さまは台所の残り物を持って帰って、男に食べさせた」

「そんな男に食べ物を与えるなんて愚かな女だわ」

「奉公して7日後に、宮殿の王様の結婚式が行なわれることになったんだ。お姫さまが広間をこっそりのぞくと、自分が断った結婚相手の1人がこの国の王様だとわかったんだ。お姫さまは悔やんでも悔やみきれない気持ちになって泣いていると、王様に見つかってしまったんだ。ダンスを踊るように命令されて、踊り出したとたん

「
パリサテイスは明るい表情になった。

「王様のポケットから王女が男に渡した食べ物が転がって落ちたんでしょ？」

「なんだ。知ってたのか」

パリサテイスは首を振り、

「その王様が、ひどい男の本当の姿だったなんて　　ありきたりね。つまらないお話だわ。わたくしが、王女だったら、その男を一生許さないわ」

「そうだろうな。ジャミールも同じことを言うと思うよ」

「ジャミールがわたくしと同じことを言うはずないわ！」

「どうしてだよ」

「だって、ジャミールはお前をなんとも思っていないもの」

サライは大笑いした。

笑い声を聞きつけたジャミールがサライを呼んだ。ケバルも隣に立っている。

「でも彼女、嫉妬しているわ。お前がわたくしに親切なのが気に入らないようよ」

サライは苦笑し、2人のいる場所に行った。揃って、このキャン

ブでもっとも見晴らしのいい岩場に登った。

「あれからひと月だ」ケバルが口火をきった。

「後の雨も終わる頃ね」ジャミールはうんざりした口調だった。「族長に無断で出立できないんだから、雨季が終わろうと、乾季がはじまろうと関係ないわね」

嚴重に監視されている気配は感じられなかったが、交通手段であるラクダや馬がキャンプ地にいなかった。どこに隠されているのか、探る手立てがなかった。鳴き声さえ聞こえない。

ベドウィンの男たちはサライたちを見張ることが仕事なのだろう、日長一日、何をするでもなくのんびりと暮らしている。女と子供が山麓の荒野で羊の世話をし、食事の用意をする。時が止まったような毎日だった。

「この女たちは、家畜とかわらないわ。もう一日だって、辛抱できかないわ」

「お前とパリサティスは手伝ってないじゃん。グズグズ言って子供より手に負えない」とサライは言った。

「あんたは、生意気なバカ姫といっしょにいればいいのよ。あたしは歩いてでも山を下りるわ」

「麓には、砂漠があるだけだ。あと少し待ってみよう」ケバルには考えがあるようだった。

翌日、泥まみれのバガバイオス王子が姿を見せた。王子は父の部下だった貴族や兵士を集めにバクトリアに向かったが、反乱の話を持ち掛けても誰も乗ってこなかったようだ。しかし、そのことにはいつさい触れずに、

「ケバルを、わが軍の副官に迎えたい」と王子は言った。

「俺はあんたの下で使われる気は毛頭ない。しかし、助言をしてもいい」

ケバルが答えると、王子はほつと息をつき、小声で言った。

「お前たちは命拾いをしたな。戦いに加わらないと言えば、この場で3人とも処刑するつもりだった」

ケバルはせせら笑うと、

「まず、ベドウィンに味方につける。それには恩賞を約束しなくてはならん」

「私は何も持っていない……」

「ひと山越えれば、メディア軍の城砦がある。そいつを攻め落とし、備蓄している金貨や武器や食料をベドウィンに与えればいい」

「そんなことができるのか」

「やらなきゃ、あんたは殺されるのを待つだけだ」

彼ら一行にベドウィン40人を加えて、メディア軍の前線基地をめざすことになった。話がきまると、栗毛の馬とラクダとラバとはどこからか現れた。妖術のようだとサライは思った。

必要な水と食糧をラバに積みおわると、道案内のベドウィンを先頭にそれぞれラクダにまたがって砂の凹地を出た。

曲がりくねった小道の出口で、王子は馬を反転させると、大声で言った。

「王子バガバイオスは告げる。私の父はヒュスタスベス、ヒュスタスベスの父はクセルクセス、クセルクセスの父はダレイオス。アフラムズタの神はクセルクセスの存命中に、わが父を後継者と欲したもうた！」

いつ何時裏切るかわからないベドウィンであっても1個小隊を率いることになった王子の声は高ぶっていた。

ケバルはそれを見て苦笑した。「勝った気でいるぞ、奴さん」

ジャミールは、「父親も祖父も殺されたのに、神に祈るなんて、ほんとバカだわ」

雪と岩石におおわれた険しい山岳地帯をあとにすると、道案内のベドウィンは偵察のためだろう、煙のように視界から消えた。

一行は前方をふさぐ山脈に向かった。回り道を避けるためだったのちにこの道を若きアレキサンダーもたどることになる。

日の翳るまえにできるだけ遠くへ進む予定だったが、山の尾根が赤く染まる頃になると、荷をはこぶラバの歩みが遅くなった。

「一刻も早く、この尾根を越えたい」王子は焦っていた。

「食事もしなくてはならないし、パリサティスもいるんだ」サライは抗った。

「わかっている。しかし、なんとしても援軍と合流したい」

王子は前もってペルシアの体制に反感をもつ傭兵に戦闘に馳せ参じるよう依頼していた。

「私こそが、王となるべき立場の者だ」と王子は繰り返す。「王となるべき父を殺し、王位を篡奪した叔父は、正当な王位後継者である私によって裁かれなくてはならない」

繰り返しが神に聞き届けられたのか、いくえにも連なる岩の峰のひとつを越えると、メディア人に土地を追われたスキタイ人やクルド人が加わった。その後も、進むに従い、ペルシア帝国が成立する以前から一帯に住む遊牧民の中からも王子の軍に加わる者もいた。それに一帯をさすらう女子供を交えた漂泊民も加わり、たちまち八百人を越えた。1個大隊を上回る軍勢になる。ただし、ラクダに乗る者、馬に乗る者、ラバに乗る者、荷車を引く者などまちまちだった。鎧などの装備もまちまちで弓手と槍手の区別もなければ、歩兵と騎兵の区別もない有象無象の軍隊だった。しかし、当時の傭兵は武器も食料も持参して軍に加わったので兵站の心配はなかった。女たちが加わったこともあり、男たちは欲望のはけ口にも困らなくなった。「私に味方した者たちに、かならず黄金で報いる」

王子が確約したせいで盗賊の一味までが加わった。

一味の頭目はいかめしい風貌をしていた。顔面が崩れ、傷だらけなので、かつてサライが殺めたはずのハーヌルだと気づくのに一瞬の間があった。目を据えて、不適な笑みを浮かべる彼に、サライは恐怖より驚きのほうが先だった。

「生きていたのか……」

「九死に一生つてやつだな。てめえを見つけたして仕返ししねえことには腹の虫がおさまらなくなってるな」

「殺したと思って、俺は……」

「神の掟を破つたと後悔したつて言つつもりなら、とんでもねえお門違いだぜ。おめえは女のために俺をたしかに殺したんだ。忘れるな」

一時、メディアの正規軍にいたというハーヌルに王子は、なぜ軍を離れ、盗賊になつたのか訊ねた。

「金儲けになるからじゃねえか。手下も食わしてやんなきゃなんねえしな」

非情でありながら豪放磊落なおもむきもあるハーヌルは、一味の男たちの信頼を得ているようだった。以前より、戦闘意欲が全身から滲み出ていた。

「ああいう男こそ指揮官にむいている」とケバルは王子に耳打ちした。

兵士らの信望を得られると王子は確信したのかどうか、ハーヌルを野戦司令官に任じた。

「最高指揮官はむろん私である。戦略はケバルが立てる。実際に軍を動かす役目はお前にまかす」

「引き受けてもいいが、俺は俺のやりたいようにしかやらねえぜ」

ハーヌルは、まず8人の指揮官を選んだ。さらに、50人ごとの部隊をもつけ、16人の小隊長を決めた。指揮官1人の下に2人の小隊長と100人ほどの兵士が付き従うことになる。ハーヌルに軍の全権を委ねていいのだろうかとサライは危惧したが、王子もケバルも意に介さないようだった。

王子はサライの隣に轡を並べると意気揚揚と、メディア軍の城砦などひとたまりもないと豪語した。

ジャミールはハーヌルを目にすると、悪魔に見入られたような表情になった。粗暴な男たちが女たちと戯れる姿も目にしたくないのだろう、馬に乗るときもマントで全身をおおい、人目につかないようにしていた。あれほどジャミールに反発していた王女も彼女のマントの中に潜りこんで毛先すら見せなかった。

夜を待たずに、谷底を濁流の川にかえるほどの雨が降った。

ハーヌルは馬を下りて、徒歩になった。ベドウィンと兵士らもそれに従った。先を急ぐ最高司令官より、野戦司令官の判断に兵士らは従った。雨が止むと、野営の準備をするように号令がかかった。サライは、燃やせる雑木を探した。

ケバルは耳打ちした。「パリサティスの面倒だけ、お前は見ていればいい。あの子は、ペルシア王への貢ぎ物だからな。なんとしても死なせてはならない」

「貢ぎ物……？」

「いくさは敗けたときのこと、考えにいれておかなくてはならん」ケバルはそう言つと、ベドウィンに命じて足を痛めたラバを殺させた。彼らは雨の中でも天幕を張って火を熾し、ラバを丸焼きにした。

「あれを越えればなんとかなる」

ケバルは、月明かりに照らされて一際そびえたつ岩山を指して、確信ありげに言う。

「どうやるんだ？」とサライは訊く。

濃淡の差異はあるが、見渡すかぎり岩の山である。

「真つ向から戦いを挑んでみる。攻め落とすのに1年はかかるだろう」

「俺は、そんな悠長なことには加わらない」

「俺だつてそうさ。まともに攻めれば大勢死ぬだけだ。なあ、ジャミール」

ジャミールは口を固く閉ざしたままだった。サライは彼女の頑な様子を訝しんだ。ハーヌルのせいだろうと思っていた。

翌朝、ハーヌルの率いる傭兵部隊は一刻も休まず、進軍した。

サライはたつたひとりで砂漠を旅した日々のがいまでは信じられなかった。同時に武力に劣る自分が軍隊の一員に加わっていることも現実のことと思えなかった。

こうして、雨で地層がむきだしになった岩山で野宿をしたのちに、ようやくメディア軍の城砦が見える場所にたどり着いた。

雨のあがった山野に弓なりの虹がかかると、まばらに生える灌木の葉が命を歌うようにゆれた。

王子はそれらを眺め、アフラマズタの神の祝福を見たのか、
「私は王となるべく生まれた者なのだ」

ペルシア人の好む奇岩の美しさに、王子の心は湧き立つらしい。
「ペルシアの王は長身でなくてはならない。小柄で猫背の叔父は髭も薄く、我が父のように王にたる体躯をしていない。ペルシアの民だけにとどまらず、服属国の民も同じ思いにちがいない」

「お兄さまは、お父さまに似てお髭も立派だわ」パリサティス王女は兄を讚えた。

ケバルはからかうように、「われわれサカ人は、ペルシアとの戦いに敗れ、帝国の礎となったのだから、アフラマズタの神はさぞや靈験あらたかなんだろうさ」

「お前はやはり、異教徒だ。頼りになるのはハーヌルだけだ」
王子の後ろに控えていたハーヌルは、岩山にへばりつくように建てられている城砦の前を横断するように掘られている水路を指さした。

「堀の手前に穴を掘り、堡壘を築こう」

「そんなことをすれば、われわれがここにいることがすぐに知られてしまう」とケバルは反論した。

「では、どうするのだ」と王子は訊ねる。

「ラクダに乗ったベドウィンに城門を攻めさせる。残った兵士で掘りに架ける橋を作ればいい」

「砦に至る険しい坂を見る。あれを登る間に矢がまからどれほど敵の矢が降ってくると思うのだ。ベドウィンは村落の掠奪には慣れているが、軍事行動には不慣れだ」とケバルは言った。

「そんなことはわかっている。しかし、連中は金さえ見せれば、どんな危険も顧みない」「やつらの誰一人、ギリシア人のような精銅製の鎧も盾を持っていない。犬死にさせる気なのか」

ハーヌルは慚然とし、

「人とラクダの死骸は堡壘のかわりになる」

「橋はどうやって作るのだ」と王子は言った。

「灌木を切り倒して、梯子を作ればいいさ。総攻撃するとき役に立つ」

砦によじのぼるために使おうと言う。

「兵士は烏合の衆にすぎん。お前の命令で動くとは思えん」ケバルは気に入らないようだった。

「兵の数もこつちが多い。堡壘から城門に火矢を放てばなんとかなる」

まったく戦いの経験のない王子はきよるきよる余所見をして落ち着かない。どう戦っていいのか、見当もつかない気配だった。

「出入口は城門の一ヶ所だけかどうか、目端のきく兵士に調べさせる。鼠一匹、砦から外に出さすな。戦鬪はそれからだ」

ケバルはそう言うと、地形を調べ、砦に流れこむ地下水路を探せとハーヌルに命じた。

無事、ビブロスに戻ったヤマトとイサは、大航海に耐える船が建造されるまでに有能な水先案内人を探してくるよう、ザイナブから命じられた。

イサは旅立つ前に、この世でもっとも栄えたシュメール人の建てた都のことを学ぶためにバビロニアの都、バビロンに行くと言った。「シュメールの都はバビロンは似ているのか」ヤマトは訊ねた。

「多少なりとも、似ております。メソポタミアに住む者たちはシュメールの建造物や工芸品や書物などあらゆる文物を手本としたのです」

「滅ぼしたのにか」

「二度とふたたび戻ってこない栄華だからこそ、人々は懐かしむのです」

「人間とは不思議なものだな」

イサとヤマトは、フェニキアのビブロスから船で海岸沿いにシリアのウガリトに向かい、そこから馬に乗り陸路でハラブ（現アレツポ）に至った。以前なら3カ月を要した道程だったが、王の道のすべての宿場で馬に乗り換えたおかげで1カ月も要しなかった。

ヤマトはアラブ種の馬のあつかい方をイサから学んだ。

「この優美な生きものを育てたのはベドウィンなのです。彼らに似て激しい気性をしていますが、勇敢で持続力に優れています。ラクダより手間をかけなくてはなりません。胸の中に強靱な肺を持っているので戦いや長距離移動にうってつけなのです」

「ベドウィンとは不思議な部族なんだな」

「狡猾に見えますが、彼らにはユダヤ人やペルシア人になじみ細さがあります。それが馬の心に通じるのでしょうか」

ヤマトはハシムのことを思い出した。最後まで、敵なのか味方なのか判然としなかったが記憶の中のハシムは憎めない存在だった。

ジャミールも彼らこそ自由に生きていたと言った。

旅の途中、砂漠で燃えさかる火をヤマトは目にした。

「どうして地面が燃えているんだ？」

「砂漠に住む者たちは、“永劫の火”と呼んで崇めています。砂嵐で埋まってしまう限り、けっして消えることがないからです」

「永劫の火とは消えない火という意味なのか」

「地面から湧き出る黒い液体が薪の役目をして燃え続けているのです。強い臭気ですが、シュメール人はそれらを利用して食物を煮たり、暖をとったりしていたと言われています。しかし、さらに古い時代のシュメール人はそれとは異なる永劫の火を所有していたそうです。一瞬にして、すべてを焼き尽くす火力であったそうです」

「そのようなものがこの世にあったのか」

「ソドムとゴモラを焼き尽くした火も、インドやシュメールにあったものと同一のものと思われれます」

「お前の話を聞いていると、大昔のほう優れた武器や品々があったように思えるが、そうなのか」

「ザイナブが持っていた羅針盤も、本物はオルハリコンと呼ばれる金属で出来ていたそうです。ダイヤモンドのように光り輝く金属であり、薄く透明で、人の姿を映すこともできたと言及びます」

「それがバビロンには、あるのか」

「残念ながら現存しておりません。しかし、シュメール人の神鏡として何者かの手中にあると聞き及びました」

「神鏡？」

「オルハリコンで造られた鏡でございます。それに、どのような敵にも勝利をもたらすと言われる剣とナンナ様が所持しておられた首飾りを合わせ持つ者こそが、王位を継ぐと伝えられております」

「それほど大切な品だったのか。今では、まったく行方がわからなくなってしまうた」

「観察官だった男が所持しているはずですよ。おそらくバビロンにいると思われれます」

「どうしてわかる？」

「帝国を追われた者が、隠れ住む場所にバビロンほど都合な都市はないからです。誰がどこに住まおうと人々は無関心です。ギリシアの都市との大きな違いは、まつりごとを行なう者が自国の者であるとなかろうと、暮らしに関わりないと人々は思っています」

「なぜ」

「人々を魅了する悪魔の住む都だからです。繁栄と自由と疲弊と腐敗と墮落とが、渾然一体となって街を形づくっています」

交易都市のハラブからユーフラテス河の船着場までは数日の距離だった。

南へ向かって進むうちにたわわに実った赤い実のナツメヤシの林と小麦畠が忽然と現われた。

灌漑のための水路が農地をめぐり、帯状の椰子林が日乾し煉瓦の家々をかこむ、その先に満々と水をたたえた大河が時を忘れたように横たわっていた。

当時のペルシア帝国はバビロニアの四大都市すべてをわがものとしていた。アッシリア地方のヒトからセファルワムを経て、バビロンに至り、カルデア地方のウルまでユーフラテス河を通じて都市と都市はつながっていた。

ユーフラテス河流域に古代都市バビロンがあり、東にはチィグリス河、南にはペルシア湾がある。この二つの河の源流に“エデンの園”があったと言い伝えられている。

馬上のヤマトとイサの主従は葦のしげる河づたいに南下した。

椰子の葉で葺いた小屋の集落が視界に入った。近づくと、木陰から棍棒をもった半裸の男がぬつと顔をだした。イサは、彼らと物々交換をするために毛織の外套を見せようとした。

貧しい身なりの男や女や子供が群がり出たかと思うと、彼らはいっせいに余所者に向かって石を投げつけた。

イサがアラム語で呼びかけたが、彼らは投石をやめない。立ち去るしかなかった。

「伝説の楽園があつたのが、このあたりなのか？」

ヤマトが問うと、イサは苦笑した。「今では、冥界のようですね」
ユーフラテス河は、ラクダの歩みのようにゆったりした速度で水が流れている。いく艘ものいかだと平底の船が往来しているが遅々として進まない。

生まれてはじめて目にする巨大な家畜にヤマトは感嘆の声を上げた。

「大岩のような生きものだな」

「インドから運ばれてきている、象という名の獣です」

象を乗せたいかだの周囲には羊の腸をふくらませた皮袋がいくつもくくり付けられている。しかし河岸が曲線を描いて、河床が盛り上がったところに行き着くと、浅瀬に乗り上げていた。

物見高いヤマトをおいて、イサは、川下に向かう大型の平底船の船頭に声をかけた。

「いくらで乗せる？」

「人間だけか？」

「いや、馬も一緒だ」

「高いぞ、いいのか」

金貨2枚で乗船できることになったが、その船には積み荷が山のようにあつた。若い男たちの奴隷、切り出された木材や石などだ。

船縁が低いので、それらの積み荷にヤマトとイサに馬が2頭加わると、一方に大きく傾いて水没しそうになる。立錐の余地もないありさまで、馬は水を恐れ、足踏みをやめなかつた。

2人は馬体に押されて河に落ちないように踏張っていないければならない。そのうえ、船の後押しもしなくてはならなかつた。

北の山脈から吹きつける風をうけて、船は下流に向かうが思うほど進まない。浅瀬に乗り上げるつど、船頭とその家族と奴隷が河の中に入り、後押しする。便乗者のヤマトとイサも例外ではなかつた。石を投げつけた者たちはこうした船から逃げた者たちの集まりなのかもしれないと、ヤマトは思った。

ほとんど高低さのない平地で、上流からの泥の堆積のため、河床のほうがまわりの平地より高い天井川になっており、雨季にはしばしば氾濫する。しかし、雨季が終われば、船やいかだの航行が困難をきわめる。

何度も浅瀬に乗り上げる船に業を煮やしたイサは船頭に助言した。

「この川は引き潮もある。無闇に動かしてもうまくいかない」

「あつしはこれでもこの道で、長くめしを食ってきたんだ。素人に指図されたかねえ」

イサは舌打ちすると、

「川の流れに逆らっても、水深のある方角に一旦は進むほうがいい」
船頭はうすら笑いをうかべた。

「ずっとそうしてるのが見えねえのか」

水流が増すに従い、流れが速くなった。いかだよりも船のほうが多くなり、一目でペルシア軍の船団と知れる大型船が椰子林にかわって河岸に現われた。船上に兵士の姿も目につく。

「監視部隊です」と、イサは耳打ちした。

船頭はこのようすを見てとると、船賃の増額を求めた。

イサは要求に従がわなかった。

ヤマトは視界を横切る緑地帯の景観に目を奪われ、イサと船頭のやりとりに気をとめなかった。

深夜、敵襲の知らせで、飛び起きたメディア軍の兵士は全員戦闘配置についたが、すでに炎に包まれた城門に向かって押し寄せるベドウィンに肝をつぶし、矢を射る者、槍を投げる者、城門に水をかける者、皆に遮蔽物を立て掛ける者など統率のとれないままに応戦した。

皆は、自然の要害となっているので、そうやすやすと落とされないうが、松明をかざし攻め登ってくるベドウィンの奇声が敵兵の数を見誤らせた。

メディア軍の司令官は人の頭ほどの石を投げ落とすように兵士に命じた。あつという間に、眼下にベドウィンとラクダの骸が折り重なった。

攻撃はすぐにやんだ。味方の負傷者はまだ数えるほどだ。

「何者なんだ?!」

司令官には敵兵の正体がわからないことに苛立った。盗賊団にしては兵の数が多すぎるし、反乱軍にしては少なすぎると思った。

メディアの首都エクバタナから遠く離れ、付近に村落もなく、辺境の地とっていい。ここで戦闘があるなど赴任したときから想像だにしなかった。ペルシアと同盟を結ぶメディアに反旗をひるがえす者などこのメソポタミアにいはずがないからだ。

司令官は歩哨を立てると、一旦、執務室に戻った。食料は十二分にあるが、武器庫にある槍も矢も戦闘には不十分だ。伝令を後方基地の城砦に送らなくてはならない。

司令官は3人の伝令に命じ、急ぎ救援を頼むと伝言した。

しかし、夜が明けると、3人の伝令の首が夜のうちに作られたらしい石積みの上の堡壘の上に、串刺しにされて立てられていた。ベドウィンとラクダの死骸を盾にして、堡壘を築いたようだった。

司令官は身震いした。

敵兵はその日は攻めてこなかった。次の日も。安堵の気分が城砦の兵士に漂いはじめたときだった。兵士の多くが、吐き気と下痢に襲われ、高熱を発したのだ。

物見櫓から見ると、城砦に通じる道という道が高い柵で封鎖されていた。

戦闘のないまま、ひと月近くが経過していた。

ハーヌルは毎日のように総攻撃をけしかけたが、ケバルは許さなかつた。食料が尽きかけた頃、

「ジャミールの出番だな。巫女に化けてくれ」

と言った。ケバルのとうとうとする作戦がジャミールには手に取るようにわかつた。ダビデが王になる以前、サウルがイスラエルの王だった頃のことだ。サウルは女の霊媒術師に戦況を占わせる。女は、サウルがフェリスティア人のかかることを予言した。サウルは卒倒するほど恐れ慄いた。(サムエル上28:7-20)。

もし、霊媒術師がダビデの密偵であつたなら、サウルは敵の術中にまんまとおちたことになる。

「そうしてくれば、互いに無駄死にしないですむ」

ケバルは、ジャミールを送り込む前にすべき準備をとくにすませていた。傭兵軍に従う女たちに、ジャミールの衣を織らせていたのだ。

「あたしはいかないわ。あなたに命じられる筋合いなんてないもの」

「あるさ」とケバルは言った。「お前がヤマトから盗んだ青い首飾りは俺が持っている。お前がうまく敵を丸めこめば、返してやってもいいぜ」

「ケバル……」

「ジャミールと一緒に俺も行くよ。巫女の下僕として」

「あんななんか足手まといよ!」

「そういつなつて。いないよりいるほうがましだろ?」

「王女さまが悲しむわよ」

どんなにジャミールが拒んでも、サライはついていくと言って譲らなかつた。

腐乱した死骸の中を、正装したジャミールとサライは進み、見張

りの兵士にメディアからの使者だと偽った。青い首飾りを目にした兵士はジャミールが女神に見えたようだ。

城門はすぐに開いた。

イシユタルの神に仕える巫女と下僕だというふれこみで2人は城砦の中に入った。

痩せ細った兵士らがジャミールを見つけるとよよろと歩み寄り、マントの裾に口づけた。

「巫女さま、お助けを」と口々に懇願した。ジャミールは一人一人に短い祈りの言葉をかけた。兵士らは涙を流して喜んだ。メディアの兵士の多くはやまいに倒れ、病死した者も数多くいて戦闘意欲を完全に失っていた。今なら攻撃しても難なく砦は落ちるが、ケバルはできるだけ無傷の状態で砦を手に入れようとしていた。

執務室に案内された2人は、反撃する体力も気力も失われた司令官に目通りした。ジャミールたちが敵軍の密偵だと、司令官はうすうすわかっていたようだが、武具もつけず、汚れた衣で椅子に座っていた。1個師団を率いている男にすれば臍甲斐ないともいえるたずまいだったが、もはや身をかまう気もないようだった。しかし、正体不明の敵を率いているのが、バガバイオス王子と知って司令官は動揺した。

「ほんとうのことか。まやかしてはないな」

立ち上がるうとする司令官をサライは押し止めた。

「落ち着いてください」

「王子が反乱を起こされたのなら、私とてご助力いたしましたのに。バクトリア総督のヒュスタスベス殿下は英明なお方であられました。あのようなご最期をとげられるとは、夢にも思いませんでした。私は以前、バクトリアに駐屯するメディア軍におりましたので、事情を知る者として疎まれ、この地に配属された次第です」

「それを聞いて王子も喜ばれるでしょう」

「しかし、今となつては死神が私の背にとりついていきますゆえ、お仕えできず無念でございますとお伝えください」

司令官は泣き崩れると、荒い息の下から、皆の兵士の命だけは救ってほしいと言った。ジャミールは紙包みを差し出した。「これを飲めば、あなたさまも兵士の幾人かも助かるでしょう」

司令官はじつと考えているふうであった。「もしや……地下水に毒を……」

サライもジャミールも答えなかった。

「現皇帝をお恨みするお気持ちは痛いほどわかるが……われわれは長くともに戦ってきた同志とも言うべき間柄……それを……」

司令官は黒ずんだ唇をきつく噛んだ。

「そのようなあさましい行いを平気で命じるお方のもとに馳せ参じることが、メディアの兵士は望まぬ！」

許せん！ 司令官は突然、大声になった。傍らにあった剣をつかむと、ジャミールに斬りかかった。ジャミールは首飾りを両手でかばった。剣は彼女の肩にくいこんだ。

「ジャミール！」サライは司令官を突き倒した。

司令官はよろけながら立ち上がると、兵士を呼び、皆に火を放つように命じた。

「巫女どのがわれわれとともに黄泉の国に旅立ってくださいるそくだ」

川の水をさえぎるように歴青で固定された埠頭にいかだが横づけされると、はじめに石が降ろされ、かわりに半裸の奴隷たちが積み荷を背負って乗りこんできた。

ヤマトとイサも馬を引きつれ、人々の行き交う埠頭を河沿いの城壁にむかって押し流されるようにして進んだ。

「とうとうきたのか」ヤマトはうわずった声で言った。「話にきいたバベルの塔を見てみたい」

「現存しておりませんし、仮に残っていてもウルの都にあったジツグラット（高い峰）の模倣に過ぎません」

イサは果てしなくつづく城壁を見上げながら吐き捨てた。

この有名な古代都市はユーフラテス河をはさんで兩岸に広がっていた。穀物、酒、香辛料などはもとより、あらゆる物資が水上輸送に頼っているバビロンでは町をとりまく運河が都市の最大の防壁となっていた。

敵の本拠地をお目にかけることができてよかった、とイサは言った。

ヤマトは何気なく、「バビロンはわれわれの敵なのか？」

「かつてこれらの都市を支配してたのは誰だろう、シュメール人だからです」

「しかし、負けたのだ」とヤマトは言った。「われわれが時代の覇者であるペルシア人に劣るところがあるとするれば、騎馬民族の彼らが年月をかけて培った荒ぶる力を不要のものと考えようになったことでございます」

古代メソポタミアでその規模の大きさにおいて、バビロンの右に出るものはなかった。厚さ26?、高さ90?、長さ90?に及ぶ外壁が都市を取り囲んでいた。

「人々は平和を享受すればするほどひ弱に変じていきます。バビロ

ニア人もわれわれと同じ轍を踏んだのです。これだけの備えがあれば、攻められないという思い込みが隙をつくり、享樂に明け暮れるようになり、滅ぼされたのです」

ヤマトは天に届くかと思われる外壁を見上げた。

塔で支えられた城門の手前で武装兵士に止められた二人は高額の通行料を徴収された。そこを通りぬけると、広い濠があり、吊り橋がかけられていた。目を上げると、ライオン、牡牛、首と尾の長い竜が描かれている青みがかった厚い壁が空をおおい隠すように立ちふさがっていた。

イシユタルの門だった。

「あの竜こそ、あなたご自身なのです」

ヤマトは呆然と立ちつくした。

「ソロモン王の建てたエルサレムの神殿も壮大な建物でしたが、ネブカドネザル王の建てたこの2重の城門とは比較にならないでしょう」

空気はペルシア湾から吹く風で湿って熱く、河べりを白いもやがおおっていたが、城門は光輝に満ちていた。

2人はもやのたちこめる石畳の通りを人込みにまぎれて進んだ。

城門を入つてすぐの“行列道路”には商店や役所や銀行や図書館がならび、活況を呈していた。そこでは文化の保護と交易と戦争のさいの資金の調達もなされていたはずだと、遺跡に立った後世の探検家カールステン・ニーブルは書き残している。

ラクダやラバにまたがった農民や遊牧民とともに天文学者や土木工事の技師が行き交い、広場では僧侶が説教をし、そのかたわらで売春婦と兵士が戯れていた。

商店には世界中の商品が集まり、派手な色彩が乱舞していた。かつて、ネブカデネザル王の時代には空中庭園も望めたはずだ。

この時代には痕跡をとどめているに過ぎなかったが、栄華を誇つてゐることは変わりなかった。城門と相對している広場に近づくと、至る所に物売りを囲む人垣に行く手をさえぎられた。と同時に、武

装したペルシアの兵士が目についた。彼らは通行人の出入りをきびしく監視していて怪しいと見ると、容赦なく尋問した。暴力をくわえかねないものものしさであった。面倒が起きるまえに、イサはヤマトに頭布で顔を隠すように言った。エルサレムで見えるような廃墟はどこにも見られないかわりにダマスコのような自由気ままな雰囲気はここでは希薄だった。

「それは表向きのことです」とイサは笑った。
糞尿の臭いが鼻をさした。

広場には数十頭のラクダがうづくまっていた。ここから東へ二五〇？余り隔たったスーサ城に伺候する高貴な者たちの乗るラクダだと知ったのは、かなりあとのことだった。イサは馬の首をやさしく叩くと、「宿を捜しましょう」と言った。
「心当たりはあるのか？」

彼らは城壁をつらぬくようにのびた石畳の道路をまっすぐに進んだ。千年の昔に建ったような建造物が両脇にならび、王の栄華をいまに伝えていた。

人々で溢れる街路を右に折れ、高い目隠しの塀によってさえぎられた一画に着いた。

悪臭がさらにひどくなる。

汚水がたれ流され、行き倒れたラクダや人の骸が放置されている。イサに聞くと、浮浪者と異国から来た者は城に近い市街では泊まれないということだった。

「このあたりにいるはずなのだが……」

人垣を見回すほどに銀の輪をはめた杖をもつ、身なりのいい老人がこちらに近づいてきた。イサはヤマトをふり返ると、「口はきいてはなりません」と言った。

「いずれよりお越しなされた？」

老人に問われたイサがフェニキアのビブロスからだと答えると、「ここへはどのような経路で来られたのじゃな？」

イサが手短に答えると、老人はさぐるような目つきで見つめた。

「その者が、噂にきく若者か？」

「どのような噂でございますか？」

「宿場を通過しておいて、われわれが何も知らぬと思うものかのう」

「お願いがございます」

宰相にお目通りしたいと、イサはいきなり申し出た。老人の重々しい動作と身なりから宮廷に近い人物であると彼は察した様子であった。

「よろしかろう」

老人は異国から訪れた者の調査や接待を任務としていた。イサは誰からか老人の存在をきいていたのだらう。これもヤマトはあとで知った。イサが長々と礼を述べ、手持ちの金貨を手渡す間、ヤマトは周りを取り巻く野次馬に目を転じた。

「あつ」と声をあげそうになった。

見物人の中に、ぼろ布をまとったハシムの姿を見つけたのだ。例によって、抜け目のないで顔つきでこっちの様子を窺っている。ハシムのほうでもヤマトが彼に気づいたと知ると、しなびたイチジクのような顔をぱつと輝かせた。

「まいりましたようぞ」

老人が言ったその時、ハシムはサライのそばに来て耳打ちした。

「ジャミールがかわいそうに、あんたを探し回って苦労してるでえ」

「ジャミールが？」

聞き返すヤマトにハシムは、

「あつしもおかげで、えらい目えにおうて、今や文無しやがな。ちよつとでええさかいなんとか都合してくれへんか」

ハシムは小さい目をしばたいて言った。

ヤマトが金を与えると、ハシムは、

「日の出を拝む者はあつても、入り日を拝む者なしや」と言つて黄色い歯むいた。

ヤマトとイサは老人に従い、ラクダの骸が居座る一画を横切り、

袋小路の石積みの門を入った。

「バガバイオス王子に伝えよ！」と司令官は言った。「お前の母親アンディアは、ロンギマヌスの側女になっているとな」

王族に関心のないサライには、司令官の今際のきわの言葉が後継者にとって重要な意味を持つと、まったく解しなかった。傷ついたジャミールをこの場から連れ出すことだけに頭の中が捉われていた。「討伐軍に王子を差し出せ。さすれば命だけは助かる」

サライの目の前で、司令官は自害した。

執務室を後にすると、城砦内部の食料庫と武器庫はすでに炎に包まれていた。司令官に放火を命じられた護衛兵士が油を撒いたのだろう、真つ赤な炎が音を立てて2人に迫ってきた。

やまいに倒れていた者たちは這いずるようになり、兵舎から出てきた。飲み水を求めて、呻き声をあげている。

指揮をとる者などいなかった。

立って歩ける兵士らは最後の力をふり絞って、城門から外へ打って出ようと武器を手にしていった。

厚い層の雲が空全体をおおっていた。

サライは足元に群がる兵士らを踏みしだくようにして、砦から逃げ出した。

砦の外で待ち受けていたのはハーヌルとクルド人の部隊だった。

彼らは、メディア軍の守備隊を蝨潰しに惨殺した。

ケバルは自ら陣頭指揮をとり、食料庫の消失を止めようと、残る兵士を総動員して火消しに躍り上がった。

肝心の王子は眺めているだけだった。

サライは野営地にもどり、

「誰か、治せる者はいないか！」

と大声で叫んだ。

遠くエジプトからきた流れてきたという女が、「これを飲みな」

と言って皮袋の飲み物をジャミールに与えた。

天幕の中に寝かせると、ジャミールはたちまち深い眠りに落ちた。顔は青ざめ、手足は冷たくなり、死人のようになつた。

「何を飲ませたのだ！」

「ケシの花から作った眠り薬だよ」

痛みを和らげる効果があるという。

「ちよつと、どいておくれ」

女はサライを押し退けると、ジャミールの衣を引き剥いだ。小麦色の乳房があらわになつた。サライは思わず目を閉じた。

「ジャミールは死ぬのか？」パリサティスはサライに訊ねる。「息が絶えるようなら首飾りをもらつてもよいな？」

「黙つてろっ」

女は焚火で熱した針で傷口を縫い、噛んだヨモギの葉をすりこみ布で縛つた。

ジャミールの全身から多量の汗があふれた。

「助かるのか」

「この娘の運しだいさ」

懸命に介抱するサライを見て、女は笑つた。「あんたみたいに世話を焼く男は見たことがないよ」

しばらくすると、ジャミールの呼吸が荒くなつた。女は、酒と蜂蜜を調合したなまぬるい飲み物をジャミールに口に流しこんだ。

ジャミールは激しく咳き込み、息を吹き返した。

「だいじょうぶか」

案じるサライに、ジャミールはゆっくりと目を開け、鳶色の瞳をむけた。

「助けたからつて、恩着せがましいことは言わないでよ」

「うつせえっ」サライは怒鳴つた。「死ぬところだつたんだぞ！」

彼女は喉元に手をあてると、「まだ死ねないわ。この首飾りをヤマトに届けるまでは……」

「ヤマト、ヤマト、ヤマト……お前の頭ん中にはそんなくだらねえ

名前しかないのか」

パリサティスはジャミールをのぞきこみ、「その者は、金色の髪の毛のサライより美しいのか？」

「誰よりも美しく凜凜しいわ」

サライは怒りで顔を赤くした。「ヤマトはお前のことなんて、とつくに忘れてるさ」「あたしを忘れても、ヤマトは姉さんと首飾りのことはけっして忘れないわ」

「じゃあ、なんでケバルなんかと一緒にいるんだよ、あんな卑怯な奴と……」

地下水に毒薬を投じていたことなど、サライはまったく知らなかった。メディア軍の司令官が降伏しなかったのは、そのような戦術を厭わしいものと感じたからだ。力と力がぶつかる戦闘に善も悪もないが、毒薬を使い多数の命を奪うやり方は悪魔さえ叶わない思考のようにサライには思えた。

「バビロンの宮廷では毒殺なんて日常茶飯事よ」とジャミールは弱々しい声で言った。「血は流れないし、誰の仕業かもわからない。

エジプト人は毒薬に詳しいわ。シシャクも何人も殺めているはずよ」

「ここは宮廷じゃない」

「あんたの好きなユダヤの物語にだってあるじゃないの」

「そんなものはない！」

五書に毒薬の記述などいっさいない。全能の神を信仰するイスラエルの民に忌まわしい毒物など不要だからだ。

「そうかねえ」女は嗤った。「ユダヤ人の神はその名を全地に知らしめるために、エジプト人の上に窯の煤を撒き散らし、水ぶくれをともなう腫れ物を生じさせたじゃないか（出エジプト記9：8 - 9）」

「窯の煤は、毒物じゃない！」

「ユダヤの神はエジプト人の初子^{ついで}を皆殺しにし、ユダヤ人がエジプトを去る前には、金や銀の品物をエジプト人からはぎ取るように命じてるじゃないか。そんな神が毒を使わないといいきれるのかい？」

だからあたしも同じことをしてやるのさ。地下水に鉛と水銀を入れるように、ケバルに知恵を授けてやったのは、このあたしさ」

サライは一目散に逃走したいと思った。この女やケバルやハーヌルとこれ以上、行動をともしたくなかった。

女とパリサティスが天幕からいなくなると、逃げるなら今しかないと言った。ジャミールは囁いた。

「めずらしく思いが一致したな」

彼女はしっかりと足どりで天幕の外の様子を見た。

「男は1人残らず、出払ってるわ。女たちが残っているだけよ。馬も繋がれたままいるわ。山を下りるあいだは乗れないけどね」

「怪我は、いいのか」

「あんたみたいにヤワじゃないわ」

サライは訊くしかなかった。「どこへ行く？」

「ヤマトのいそくなところよ」

「思い込みもそこまでいくと、立派なもんだな」

ジャミールは片手でズボンをはくと、頭にターバンを巻いてくれと言った。

「この砦を下って西に進めば、ユーフラテス河に出るはずよ」

「エデンの園があるところか！」

「馬鹿ねえ、この世にあるのは荒地だけよ」 外に出た2人が、馬

に近づこうしたとたんだった。岩という岩の影から老人と子供の一団が顔を突き出した。武器は持っていないが皆、飢えた顔つきをしている。ぼろぎれをまとっただけの身なりは物乞いのようなだったが、キャンプの女たちは歓声を上げて駆け寄った。

「どうやら家族のようだな」

「どっちでもいいわよ。さっさと行きなきゃ」

「だめよっ！！」いち早く気配を察知したパリサティスがサライの衣にしがみついた。

ジャミールは王女の横つ面を張り倒した。「ああっ……」

呻き声をあげてしゃがみこんだのは王女ではなく、ジャミールだ

った。

「だいじょうぶか！」

サライは色を失った。縫った傷口が開いたのだ。上着が鮮血で真っ赤に染まった。

「お前はわたくしに2度も手をあげた」とパリサティスは言った。

「この裁きは、お兄さまに下していただくわ」

そのとき、ハーヌルとその部下たちの勝ちどきが岩山に響きわたった。

イサとヤマトの2人を袋小路に案内した老人は、ここで待つようにと、くどいほど言っていると、辺りを素早く見回し四方を囲む城門を出て行った。

帝都のひとつに過ぎないが、高層の建物が目路のかぎり連なっている。

身分の高い者たちの住まうバビロン城内は、運河にかかる橋のまだずつと先にあるということだった。ここからは金色に光る塔の先端が望まれるばかりだった。

2人は一寸先が見えないほど蠅の飛び回る、市場の片隅に腰をおろし、腰巻きひとつの水売りから水を買った。

老人の行く先は見当もつかない。

ヤマトは腰をおろし、同じように人待ち顔の連中の立ち話に耳を貸した。

「三〇と二日目だ」

と言う男がいるかと思うと、

「半年になるが、なんのお沙汰もない」

と嘆く者がいた。

「城におわすのか、どうか……」

ある者は溜息をつき、城門をにらんでいる。そのそばで、地面に広げた布地を売る子供連れの男は頭巾で隠した顔をうつむけ、居眠っていた。

ヤマトはイサに訊ねた。

「ここバビロンでは、トリタンイクメスが支配者なのか、と。」

「本来ならそうです。しかし、犬狂いの総督に実権はありません」

「ないのか？」

「スーサにいる宰相と影の宰相と呼ばれる人物が帝国を牛耳っています」

膨大な帝国領を分割支配するため占領地の軍指揮官と行政長官に命令を下す存在が総督であり、その総督に睨みをきかすのが監察官であり、そのすべてを統括するのが宰相だとイサは説明した。同盟国の君主や太守と呼ばれる貴族は、宰相の動向に常に一喜一憂しているという。

「王に権限はないのか？」

「側近が回り持ちで要職についています。誰が王位につこうと、帝国はゆるがない仕組みになっております。権謀術数にたけた母后を恐れる現王は、国や占領地を円滑に治めることなど眼中にないという巷間の噂です」

「なぜ、母親を恐れるのだ？」

「長子でない現王が帝位につけたのは一重に母后の力によるからです。先の王も、二人の兄も母后の策略で暗殺されたようです」

「夫や子供を殺す女がこの世にいるのか？ そのような国が、多くの国を領土にできるとは不思議なことだな」

「たしかに」

イサは大きな声では言えませんが、と言って囁いた。現状の帝国の経済は衰退の一途をたどっていると。占領地からの流通が途絶えがちで、スークと呼ばれる市場の品物も一見膨大な量に見えるが、かつての栄華を知る者の目からすれば徐々に減っているということだった。

「守備隊の兵士の規律もゆるくなっています」

「それでベドウィンがわがもの顔にオアシスを襲うのか？」

イサは手元の覚え書きを見るような素振りをしながら、

「たしかに占領地の国々は税の支払いを出し渋るばかりか、ペルシア帝国の支配からの独立をもくろんでいます。山岳地のクルド人やイスラエルの民も例外ではありません。しかし、国力の一方のかなめとなる軍の勢力はまだ十分に強大で小国には侮れないものがあります」この時期のペルシャ帝国は北方の同盟国メディアア国と分裂の兆しが見え隠れする一方で、減税を懇願する貴族の反乱があり、

管轄地域のオアシスを放牧民のベドウィンやクルド族などをはじめとする山岳民族に掠奪され、その対策に苦慮していた。

つい先年、東はインダスから西はアッシリヤ、イスラエル、フェニキア、ヒッタイトを攻め取ったばかりか、シナイ半島、紅海をおさえ、エジプト、北スーダンを呑み込み、とどまることを知らない勢いであった。

三大大陸にまたがる大帝国がわずか3代70余年の短期間に実現したのだ。しかしながら、地中海に侵攻し、小アジア沿岸地帯を支配下におさめ、ギリシア本土にまで版図を広げようとしてつまずいた。

ここにきて日の出の勢いが翳りはじめたのである。帝国の礎を築いたダレイオス？世の跡を継いだクセルクス王は野心家ではあったが戦略家としての資質にやや欠けた。歴史家ヘロドトスはクセルクスを残酷で気ままに官能的な人物であると描写している。

クセルクスはヨーロッパ大陸への足掛かりともいえるサラミス湾での戦いにおいて敗れたのちは勝利の女神にみはなされ、新興国ギリシア海軍に壊滅的打撃を与えられる。その痛手にたえかねたのかどうか、王は、軍事よりも王妃選びに余生を費やしギリシアやローマの跳梁するさまを傍観するに至った。

次の世の、アルタクセルクス？世（別名ロンギマヌス）にいたっては、母後のアメストリスの支配下にあった。表向きは帝国に従わないエジプトを討伐するために軍を率いて遠征もしたが、王は後続部隊の親衛隊に守られ何の武功もたてなかった。戦意を問う以前に目に見えない敵の脅威に怯えつづけ、領土内での絶えまないいさかいに神経を消耗していた。

アルタクセルクス王は生来の平和主義とあいまって、反乱者を武力で屈伏させることを由としない気質であった。帝国の運営は宮殿のあるスーサを片時も離れない宰相と宮廷内を跋扈する宦官たちに委ね、王、自らは後宮をおとなうことも稀で、日夜、信ずる神の宣託に耳を貸していると家臣たちに取り沙汰されていた。

「お前の言う影の宰相が会ってくれるとは思えないが……」とヤマトは言った。

「この人物はユダヤ人でありながら晩年のクセルクス王に取り入り、高位にのぼりつめ、影の宰相と呼ばれるまでになったという噂です。先の王の亡き後も、現王とその母親を自在に操っていると言われております。しかし、おおやけの場にはめったなことでは姿を見せないそうです」

「水先案内人を探すのに、どうして、そのような男に会わねばならない？」

「ザイナブがどれほど裕福であっても、ペルシア帝国の宝物庫の金の量とは比較になりません」

「ザイナブを裏切るのか！」

「もつと大がかりな船団を備えたいだけでございます。シユメールの王にふさわしい船団を」

「私は、お前が期待するような者になれぬかもしれない」

「両目がお見えになる以前から、そのような疑いを一瞬たりとも抱いたことはありません」

「この目は、偶然に治ったのだ」

「ティアマトの子たるお方に弱気は禁物でございます。母親の言いなりになっているロンギマヌスなどは格がちがいます」

弱冠26歳のペルシア王は民の目にふれることがほとんどなかった。神秘主義に身を委ねることによって民と帝国の命運からは目をそらし、己れひとりの心のバランスを保っているかのようだった。その王の傍らにあつて、王の話相手となり、時に助言を与えていたのがユダヤ人のエズラであった。そのエズラに去られた王は、寄る辺ない心を持って余っていた。

「どうするのだ？」

「この国を影で操る人物の魂胆を見極めることが先決でしょう」

「お前の言う通りにしよう」

「ご自分の力を信じてください」

イサの言葉にヤマトは首を傾げた。

…… たった2人でどうやればいいというのだ。

イサは、ヤマトの胸のうかが聞こえたかのように、

「どんなことも、あなた様には可能なのです」

イサはそう言うと、急激に気温の下がる夜にそなえ、買い求めたばかりの厚手の布を地面に敷いた。ここで泊まるつもりようだ。

「船頭に口止め料を渡さなかったのは、その人物の耳に届くようにするためでした」

傍らに椰子の枝で作られた小屋があった。そこで寝泊りしている浮浪者は火をおこし、乾し肉をあぶりはじめた。水売りの男たちは妻子を呼びつけると、商売道具を女たちに持たせ、帰り支度をはじめた。女たちは壺の重みで身をたわめ、それでもおしゃべりしながら家路についた。

「いつまで待てばいいのか……」

ヤマトがぼつりと言うと、同じように頭巾で顔をおおった子供連れの男が、ふいに声を発した。

「それがわからないから、わしらもこうして、辛抱強く待つておるのだ」

男の押しつぶされた声は獣が泣くようにしか聞こえなかったが、言葉の意味はとれた。「忍びこめばいいじゃないか？」

ヤマトの言葉を聞きつけた頭巾の男は砂塵をすりつぶすような声で笑った。

「城に忍びこんで生きて帰れた者はおらん。5年でも、10年でも、待つしかない」

時間の観念がこの地では乏しいようだった。途方にくれる表情のヤマトを男は盗み見ると、

「がっかりすることはない」

仮に、影の宰相の側近に会えたところで、願いは聞き入れられないことが大方なのと言う。

「わしくらいの歳になると、これが、苦痛ではなくなる。望みは叶

わなほつが長い人生を愉しめるといふものだ」

そんなふうには達観できるものなのかとヤマトが訝しんでいると、
「わしの部族の者がこの地で囚われびととなつて、かれこれ百五十年になる」

ヤマトは耳をそば立てた。

「あんたは“地の者”ではないな。返辞はいらん」

粗末だが清潔な身なりの男は、ここからさほど遠くないところにあるユダヤ人居留地に住んでいるという。今夜はそこに来ないかと誘つた。旅の話をかかせてもらいたいと言つたのだ。イサは男の好意はありがたいが辞退させていただくと答えた。

男は初老といつていい年齢に見受けられた。ハガイと名乗り、頭巾のヤマトを指差し、危険すぎると言つた。

「いくら頭巾で隠しても、その目の殺気は隠せん。いや殺気ではないな。なんといい表わせばいいのか、よくわからんが、黒曜石のように輝く瞳の色は人の心を惑わす」

ヤマトが目をそらした、そのときだった。「その2人」

フェルト製のやわらかい帽子をかぶり、色とりどりの衣を着た男がヤマトとイサの前に立ちふさがつた。こつちへ来い、と命令する。ここで待つように言われたと言つて、イサは相手にしない。

男は居丈高に言つた。「役人に逆らうと、ためにならんぞ。わしはやんごとなきお方のお言いつけでわざわざ、お前らを呼びつけておるのだ。黙つて、わしについてこい」

「言つとおりにしたほうがいい」

めつたにない機会だ、とハガイはヤマトに素早く耳打ちし、子供を引き立てると、自分も立ち上がった。

イサとヤマトが立ち上がると、初老の男は役人に一礼し、ヤマトの背後にまわり背中を押した。

してやつたりという顔つきになつたイサは、ヤマトに目で合図をすると、役人の後について歩きだした。驚いたことに、ハガイとその子もその後についてきた。

周囲の羨望の眼差しに送られて、城門を出ると、夕暮の黄ばんだ風が足元を吹きぬけた。役人は一度もふり向かない。臭気のただよう塵の塚をすぎ、葦の柵をめぐらした低い家の建ちならぶ川岸までくると、ハガイは足の遅い子供を急かした。

大海かと思えるような、バビロンを縦横に流れる運河が眼前に広がる。ヤマトは口元を引き締めた。等間隔に打たれた杭の前に小舟が一艘、泊まっている。

「乗れ」と役人は言った。4人は急いで乗りこんだ。

役人は船頭に命じ、小舟を出させた。ゆらゆらと2、3度ゆれて小舟は流れにそって漕ぎだされた。

川沿いに立つ建物はヤマトの想像をはるかに越える壮大なものであった。水路の兩岸に連なるユーカリの木は夕日で黄金色に輝き、天と地のあいだにくつきりと浮き上がっていた。

……天と地をつなぐ都にきたのか。

もしかすると、奴隷商人に売られた姉のナンナに会えるかもしれないとヤマトは淡い期待を抱いたが、口には出さなかった。

「私からけっして離れないください」とイサはヤマトに耳打ちした。「目的は、相手から援助の約束を取り付けることなので、ハガイと子供は一言も話さない。子供はしずかに動く水面をじつと見つめ、便乗して小舟に乗ったことが信じがたいといった風情であった。

小舟は運河をめぐり、門番のいる水門を通って、水辺に張りだした欄干つきの露台に横づけした。役人は、くれぐれも、粗相のないようにと念をおし、武器を預けるように言った。イサもヤマトも躊躇ったが、帰りの舟で渡すと言う役人の言葉を信ずるほかなかった。4人は小舟から岸に上がり、物珍しそうに露台につづく庭園を見回した。

石の受水盤をもつ泉が中央にあり、そのまわりに葡萄のやわらかいつるがからまる円形の花壇が見える。そして、いい匂いのする花々が咲き乱れる花壇と花壇を結ぶ人の歩く道には青いタイルが敷か

れていた。

かすかな足音がすると、イサはヤマトをうつむかせた。小柄な痩せた男が姿を見せた。ヤマトは息をつめた。

男は泉のそばに立つと、抑揚のない声で訊ねた。

「旅は安全だったか？」

艶のない顔と鋭い目つきが冷酷な性情をうかがわせる。男は裾の長い衣のうえに青糸の縁と房飾りがついた帽子をかぶっていた。

「つつがなく旅してまいりました」

イサは答えると同時にひざまずいた。男と子供はひれ伏したが、ヤマトは立つたままだった。

控えていた兵士が棕櫚の葉で編まれた椅子を男の後ろに置いて消えた。

男は、人の心を見透かすような冷たい眼差しで言った。「お前が座り、私が立つ日が来るやもしれぬな」

無言でいると、

「被り物をとるがよい。お前が、トリタンタイクメス総督の小姓になることを拒んだ者に相違ないか？」

かわつてイサが答えた。「仰せの通りでございます」

「本来なら総督の地位は世襲であつてはならんと法律で定められておる。しかし、総督は母后のお覚えがめでたい。われわれ側近は、総督の勝手な振る舞いには手を焼いておるといふのに」

「さようでございましたか」

「貿易商のザイナブの目にも止まったそうだな。噂では、ティアマトの子いや、神の子だとも言われておると耳にした」

「そのようなことまでも、お耳に達しておりますか」

男は人差し指を立てると、「ダレイオス陛下の行なつた第一の業績は都のソーサと占領地をむすぶ交易路の建設にあつた。おかげで、どのような噂も日を経ずして知ることができる。良いことも悪いこともすべてな」

「閣下は、ザイナブ様をご存じなのですか」「売り買いのためなら

どんな汚い手も使う男だ」

男はせせら笑い、ふいに表情を固くした。「被り物をとれと言ったのが、聞こえぬのか！」

整った顔かたちとともに、漆黒の長い髪があらわになった。

控えていたハガイが、おおつと声を発した。

「アツカドの最後の王、ナラム・シンとともに滅びた黒頭人（シユメール人）の末裔か。わが国のマルドゥク神にのみこまれた民だが、まあいいだろう。今ではわれわれ同様、ペルシア帝国の一片になったのだからな。その方らの願いを聞こう。叶えてつかわすと確約はできないがな」

「私どもは大船団を組織したいと願っております。そのためにも閣下のお力ぞえをいただきたく参上いたしました」

イサがかしこまって答えると、男はヤマトを凝視したまま言った。「そうは見えぬ。この者からは欲というものが感じられん」

「大船団を擁し、東の国を目指せば、交易において他国を圧することができましょう。つきましては閣下には、利潤の一部を前渡し致します。琥珀などがかと」

一方的に話すイサに向き直った男は、

「お前のような小者に何ができるというのだ」

「戦闘には莫大な戦費がかかりますが、それに比べ、交易に要する費用はたかがしれています」

「東の国々とはゾグド人に許可を与え、交易しておる」

「その結果、多額の税が払えるということとは、彼らの利益が計り知れないということになりますまいか。それに、陸路をとれば安全のために軍隊を配備しなくてはなりません。その費用をも考え合わせれば、利潤は少ないと申せましょう。それにも増して、ラクダによる運搬より、船団で運ぶ荷の量のほうがはるかに勝っています」

軍隊などなくとも、香料、象牙、鋼材、宝石なんでも望みの品を東方の国々から調達するとイサは申し出た。

「そのための貢物か、この者が……」

「いま、なんと申されました?!」

「これまでに黒人、白人、東の者と奴隷はいろいろ見てきたが、この者のように美しい髪と目の色をもった者をいまだかつて見た覚えがない。それに腕も立つそうだな」

ヤマトは半歩すすみ出ると、「何事も閣下の御意に従います」と答えた。男は、「しつけのよい貢ぎ物だ」と満足気に首肯いた。それからイサに、「帰路は案じなくてよい」とつけ加えた。

「帰路と申ししても……」
「おまえは、良い商いをしたな。この者を命と引き替えたのだからな」

男はそう言うと、椅子から立ち上がった。「お待ちください!」
イサはヤマトを押し退け、男の前に進み出た。間隙をぬうようにハガイが擦り切れた声で言上した。

「この娘はヤマト様に仕える者、一緒におそば近くに召し抱えていただきたいとまかりこしました」

虚をつかれたイサがよろけるのもかまわず、ハガイはぼろを着た子供を男の前に突き出した。

「そんなくだらぬことを聞き入れる耳はない」

「途方も無い富と権力を、この子はあなた様にもたらずでしょう」

「たわけたことを」

男は一旦、無視したが立ち止まり、「ヤマトに仕える端な女で、よいのだな?」

ハガイが低頭すると、子供は汚れた顔のあげ、素早くヤマトに寄りそった。

「ついてくるがいい」

男は言い捨て、そばに待機していた兵士にあごをしゃくった。

兵士はヤマトの腕をつかもうとした。

イサが割って入った。「そのようなことは承知いたしかねます。

このお方は私の命より大切な……」

物陰に潜んでいた十数人の兵士が現れ、剣を抜いた。

イサは瞬時に身構えた。素手でも、彼らを倒す決意がありありと見えた。

しかし、ヤマトはイサに、

「私のことは案じるな」

男は口のはしを歪めると、小馬鹿にした口調でヤマトを見つめた。

「お前は恐ろしくないのか」

「何を恐れるのです？」ヤマトは聞き返した。「私は師から、恐れは心の一瞬の状態にすぎないと学びました」

男は兵士にヤマトを引き立てるように命じた。ヤマトは子供の手を取り、男の後に従った。イサはその後を追おうとしたが、兵士が剣の先でさえぎった。

ヤマトは眼差してイサに別れを告げた。ここに至るまでの出来事が、瞬時に頭をよぎった。妻子を捨ててまで、ヤマトに尽くしてくれたイサの意に添わないことを申し訳なく思った。しかし、後宮に潜入することは不可能だろうが、宮殿の内部の様子は知れるだろう。どうしてもナンナの所在をたしかめたかった。

「ヤマト様……くれぐれもお身体をおいといください」イサはヤマトの心を察したのだろう、もはや観念したようだった。

先に立って歩く男はバラのおいしげる庭園の奥へと、むせ返る香りに吞まれるようにかき消えた。ヤマトと子供は男の後ろ姿を追った。

門扉の手前で、男が佇んでいた。

「われわれバビロニア人は、エジプト人のように死後の世界を重要とは考えておらぬ。あの世よりこの世だ」

精銅製の門扉には、水牛や舟の乗る人々が浮き彫りになっていた。「ペルシア人の支配する国で不運というのは、神の目に止まらぬことではない。陛下への目通りが許されぬことだ。メディア人でもエラム人でもないバビロニア人の私が、仮にも神殿長の重職にあつても、陛下にはそうそうお目にかかれるものではない。おりを見て、そなたをお目にかげようと思うが、母后が陛下の身を案じて、信頼

にたる護衛兵士の他は誰も近寄れぬ有様だ」

……この男は、影の宰相ではないのか。

為政者の口振りと態度だったが、男の表情には支配者としての品格に著しく欠けていた。人は地位にふさわしい顔つきをしていると師のシンドウは言っていた。

緊張がやわらぐと同時に、己れの未熟さを恥じた。イサでさえ見誤ったのだから判断できなくて当然だったが、愚弄されたような思いにかられた。

「影の宰相と呼ばれる、もっとも権威のある人物にはいつ会えるのだ」

「横柄な口をきくことは許さぬ」

「この場で、お前を殺し、抜け出すことなど雑作もない」

神殿長は卑屈な笑みを浮かべると、

「お前が、そう望むなら私に異存はないぞ。殺れるものならやってみるがいい。ただし、さるお方の逆鱗に触れば、仲間の命などとたまりもないぞ」

「イサのことなら、あの者は命など惜しまぬ」

「度胸はあるようだな」と神殿長はうそぶいた。「陛下の思召しには叶うとよいがな」

原色の敷石を敷き詰めた回廊は果てしなく続き、天をも恐れぬ白亜の宮殿がそびえ立っている。王の封土に限界はなくその王国には法もないとまでいわれたペルシア帝国の支配するバビロンの宮殿はまるで層気楼のようだった。ネブカドネザル王の築いた帝都は今も現実に存在しているにもかかわらず、かつての栄華が跡形なく消えたように宮殿そのものも不確かな存在に感じられた。

どのような権勢と富も一時のものだとシンドウは言った。しかし、その一時に命を賭す覚悟が常になくはならぬと。

神殿長に従ってさらに奥へ進み、幾何学模様のある城壁に沿い、槍をもった兵士が立っているところまでくると、月を薄く切り取ったような象牙の両開きの扉が突然押し開かれた。

薄暗い室内には、腰布をまとっただけの男がタイル貼りの床にいた。

「この者に、なんなりと命ずるがよい」

神殿長が警備の兵士に扉を閉めるように命じた。ヤマトと子供は神殿長の言う、控えの間にとり残された。

部屋に窓はなく、入り口の扉を外から閉ざされると、どこへも逃げられなかった。

ヤマトは子供の手をほどくと、部屋の中央に立ったが、腰布一枚の男は微動だにしない。動くことも話すことも禁じられている様子であった。体毛の薄い黄色い肌の身体をくねらせるようにして座りこんでいる。名前をたずねたが、無言だった。しかたなく、怯えている子供に名をたずねた。

子供は「マナ」と答えた。

マナは、空腹を訴えた。男にそのむねを伝えたが、やはり、返事がない。

「耳が聞こえないのか！」

手真似で伝えると、男は扉を叩き、外に出て行った。ほどなく食事が運ばれた。テーブルを見ると、旅の途中でさんざん食べた薄焼きパンとナツメヤシの実だった。メソポタミア帯は至る所にナツメヤシの木が生育している。全長2800?あるユーフラテス河が毎年のように氾濫してもナメツヤシは繁茂した。塩害にも強かった。ほとんどの民は少しの穀類と多くのナツメヤシの実で生きていた。

マナは、幾日も食べていなかったようにパンを口いっぱいむさぼった。

「ハガイは父親なのか？」

訊ねると、マナは首をふった。生まれた時から両親はないと言う。親切げな男に見えたが、ハガイという男は孤児を商う奴隷商人のようだった。

マナを不憫に思い、ヤマトは部屋の隅にある寝台でいっしょに眠った。黄色い肌の召使はいつのまにか寝台の下で眠っていた。

ナンナの夢を見た。

「ギルガメツシュの建てたウルクの都はここからそう遠くないウルの町のすぐそばにあったのよ。あんたは海の水の神の子よ。けっして誰にも負けないわ……」

ヤマトはこの1年余りで、見聞を広めていた。学問には縁がなかったが、書物を通さずとも、姉をはじめシンドウやイサの話してくられた物語に偽りのあることはわかっていた。最古のシュメールの神々の王の名はアンであった。アンはウルクの都の守護神であったが、都が政治的覇権を失ったためにエンリルが主神となり、さらに神々の王の座はバビロンの神マルドゥクに取って代わられた。

天空界の覇者となったマルドゥク神は四つ目の女神ティアマトとの戦いで、女神もろともティアマトの産んだ怪獣軍団を八つ裂きにした。

イシュタルの門に描かれた蛇のような獅子のような生き物は2度とふたたび生き返ることはなかった。

バベルの塔が現存しないように、メソポタミアにシュメール人の都の再建など夢のまた夢だった。

しかし、ティアマトの子として生きなければならぬと覚悟していた。

バガバイオス王子の率いる軍が、メディア軍の駐屯する出城を攻略したという噂は日を経ずにメソポタミア一帯に広まり、ペルシア帝国の支配に飽き足らなかつた部族は王子のもとに続々と馳せ参じた。

四方が岩山ばかりの道なき道を、極熱の太陽の下、武器と食料を携えた男たちは列をなして登ってきた。たちまちは万を越す兵士を擁するに至つた。

辺境の地の城砦は山岳民族を威圧するためのものであつたが、今では反乱軍の本拠地になりつつあつた。

ケバルは砦の司令官が使つていた執務室にエジプト人の女を呼び出した。

「また世話にならなくてはならん」

女は、薄く嗤つた。

「それでも、あたしはファラオの神官に仕えていた身です。どのようなご要望にも応えることができますよ」

副官ともいふべき立場についたケバルは日毎に権力欲が高まり、その性格を変貌させていった。以前は、人目につかぬことにすべての神経を注いでいたが、近頃は密偵だつた頃のことなどすっかり忘れ去り、王子の関心を己れに引き付けておくためならどんな悪辣な行爲も恥としなかつた。

「お前が、ジャミールの手当てをしているのか」

「あの娘は手を下さなくとも、近いうちに息絶えます。安静にしていれば助かつたものを、馬鹿な真似をするもんだから傷口が膿んでどうしようもなくなつてますよ」

ケバルは、王子の溺愛する妹のパリサティスの不興をかつたジャミールの命をなきものにしよつとしていた。

「それなら」

「付きつきりで看病してる白人の男に引導をわたすのですか」

「あいつは王女の守役だから生かしておかなくてはならん。殺めてもらいたいのはナバテア人だ」

野戦司令官のハーヌルを、ケバルは目障りだと感じるようになっていた。傲慢な王子はその目で見たままの戦果しか理解しない。つまり物事を正確に見ない気質をしていた。

「野卑なあのお男ですね」

「そつだ、あの男だ」

王子は、毒物で敵の力をそぐやり口を嫌い、剣で戦うハーヌルに好意を寄せていた。異存心を抱いていると言ったほうが的確かもしれない。

「敢えてご主人さまと呼ばせていただきますが、なんの証拠も残さずに一瞬で命を奪うことは容易いですが、あたしの仕業だと一目瞭然です」

女は何事かケバルに耳打ちした。

10日余りがすぎた。ハーヌルは毎日に動作が緩慢になった。その間も、勝利の宴は続いていた。

王子は連日連夜、ナツメヤシで作った酒を浴びるように飲み、これと思う少年たちに夜伽を申しつけていた。拒む少年は1人としてなかった。

夜伽をつとめた少年たちはそうでない少年らよりも優れているかのような態度をとるようになっていた。

ある晩、宴の真つ最中に、王子のお気に入り少年がケバルにむかって、いまに自分の部下になると言った。

「髭面のむさ苦しい男は、王子はお嫌いなんだ」

12、3歳の少年は隣にいる王子に同意を求めように見つめた。

「俺に親衛隊をまかせると約束してくれましたよね？」

兵士らはくつくつと笑い出した。

黙って酒を飲んでたケバルはふいに立ち上がり、用意していた

槍を手にとると、少年の心臓をひと突きに刺し貫いた。

酔っていた王子はその場で気を失った。

ケバルは王子を抱きかかえると、天幕の中に消えた。

翌朝から王子は、大きな耳飾りをし、女物の衣服を身につけるようになった。

ヤマトはマナと片言の会話を交わす他は何もすることがなかった。蒸し暑さと、監禁状態に閉口し、苛立ちが頂点に達したある日、6人の高位高官が居並ぶ建物にヤマトは呼び出される事になった。

気の遠くなるような石段を登り、鋏を打った扉を入り、アーチ型の天井をもつ長方形の広間に通された。室内の正面には、象牙で飾られた台座があり、絨毯の敷きつめられた床より数段高くなっていた。台座の両側には背の高い炉台があり、明々と火が燃え、正面奥にある黄金の像を照らし出していた。

神殿の一室のようだった。

神殿長は台座にもっとも近い位置に立ちその他の者は横ならびに神妙に控えていた。神殿長以外は、頭を剃り、同じ緋色の衣を身につけていた。マジと呼ばれるバビロニアの神官らしい。

中の1人が口をきった。

「気難しい陛下が、お気に召すかどうか」

やや下がったところにいる者たちも、口々に意見を言った。

「立腹されるのではないか」

「この者は信用できませんかな。シュラート殿」

「宰相はおいでにならないが、やはりお伺いを立てる必要があるのではありませんか。シュラート殿」

神殿長は自分の名が口にされるたびにいちいち低い声で頷き、もったいぶった仕草でヤマトをひざまずかせると、

「名を申してみよ
と命じた。

髪をとかさされ、純白の長衣を着せられたヤマトは、神殿に仕える巫女のように寶石で飾り立てられていた。

「ヤマトと申します」

「そのほうは女呪術師か！」

神官の1人は、わざとらしいほどに驚いて見せた。

「いいえ」

「男だと、婦人部屋ハーレムに入れぬではないか！」

「そこで、皆さんにご相談したい」

神殿長はもつたいぶつた口調で言った。

「どうやら、陛下は気の病がもとで、王妃に世継をつくらぬおつもりらしい。絶世の美女をおそばに侍らせても、陛下は眠れぬと申されて一向に関心を示されぬ」

「お子はもういらっしゃるではないか」

「世継にふさわしい男子はいない。これは周知のことだ」

「かと申して……」

「この者をおそばに近づけ、王のお気を紛らせてはどうであろうか。幸い、この者は武勇にすぐれた者ゆえに、汚れを厭う王には警戒心を解かれるであろう。そのうえで、乙女を差し出してどうか」

「おお、それは、よいお考え」

誰かが賛同すると、他の者も待っていたように同調した。神殿長は彼らを見回し、話はそれだけだとばかりに指先で高官たちを下がらせた。

「これで、よしと……」

神殿長のシユラートは独りごとくと、ヤマトを目顔で呼び寄せた。

「お前は、私の意のままにならねばならぬ」「……」

「悪巧みは、諦めるのだな。お前の連れの命は私の手中にある」

「なんと言った」

「馬鹿めが忍びこみおって」

「イサが王宮内にいるというのか」ヤマトは、口早に言った。

「あの者に用はない」

「私が王の目に止まればいいのだな」

「お前と私のあいだには命令と服従があるのみだ。質問したり、理由をきいたりしてはいけない。背けば、お前と部下の命はない。子供の命もだ」

「王に対する、私の役目をたつたいま、聞かせてほしい」

「そのときがくれば嫌でもわかる」

神殿長は従者をよび、玉座のある広間から出て行った。

1人残されたヤマトは嘆息すると、アーチ型の天井を突き抜けそうに見える黄金の像を仰ぎ見た。

火の車に乗る戦士の姿だった。

偶像崇拜をきらうイスラエル人は人をかたどった像は作らない。

天候の神であるバルに走った者たちは斧と雷とを手にした彫像を削り、それを神と崇めたが、これほどきらびやかで巨大ではなかった。人の背丈の3倍はある。バビロンの王、ネブカデネザルが国民に礼拝するよう求めた金の像もこのようであったのか。

醜いと思った。

翌朝、目覚めると、ヤマトとマナとは兵士によって小さな庭に面した別室に移された。庭の周囲はモザイク模様の煉瓦塀で囲まれ、部屋の外を兵士が取り巻くものものしい警備だったが、荒れた庭や空が見えることでヤマトは鬱々とした心をなぐさめた。

言葉の通じない召使は食事を運ぶ以外は、床に寝そべっている。

平板な顔つきの彼には何か、虚ろな部分があり、ヤマトは親しめなかつた。

考えることはイサの安否だった。

……むざむざとイサが囚われるだろうか？

神殿長の言葉が真実とは限らない。

敵の喉元に飛びこむ覚悟をしたサライは、召使とマナが眠つたのを確かめると、扉の外にいる見張りの兵士の様子をうかがった。

柱廊の要所、要所には歩哨が立ち監視の目を光らせているはずだった。

横たわっていた召使がふいに起き上がり、ついてこいと身ぶりで伝えた。

「イサのところへ連れて行ってくれるのか？」

召使はそれには応えず、庭に出た。

月の光が、庭の隅々まで照らしている。

召使は高い塀のそばに立つと、赤い煉瓦のひとつに触れた。

きしむ音がし、塀だとばかり思っていた箇所には扉があり、ゆっく
りと開いたのだ。

口バなら荒地であつても1日80?進める。この城砦から何日か
かればユーフラテス河に達するののか。

サライは懸命に逃げ出す方法を考えた。好都合なことに、ジャミールのやまいをパリサティスに伝染してはならないということ、砦の外の天幕にいることだった。

ジャミールの容態は日を追う毎に悪化している。茶褐色だった肌の色は色を失い、透けるような肌色になっていた。活発だった少女の面影などどこにも見られない。

「今夜あたりが山だね」とエジプト女は平然と言った。

こんこんと眠ってばかりいて、女の処方した煎じ薬も受けつけない。

「頼むから飲んでくれ」サライはジャミールの耳元で懇願した。

「もうそつとしておいてやりな」と女は言った。「冥府の入り口まで行ってるんだよ」

「ジャミールにもしものことがあつたら、お前が毒を盛つたと思つからな。その時はお前を殺す!」

「傷口が膿んで、その毒が全身に回ってるんだよ。それにこの娘を殺す理由なんて、あたしにないことくらい、あんただって百も承知してるだろ」

女の声が聞こえたのか、ジャミールは身を震わせうわごとを言った。「サライ……サライ……逃げて……」

なぜか、ヤマトの名を口にしなかった。もはや死を覚悟しているのか、そう思うと一層、サライの心を砕いた。

「ジャミール、気をたしかにもつてくれ。いつもの元気はどうしたんだよ」

高熱を下げるために、サライは冷たい水でジャミールの顔や手足を懸命に拭いた。

具合はどうだ、と言ってハーヌルが天幕に入ってきた。

女がそそくさと出て行くと、ハーヌルは、「まさか、あの女を信用してないだろうな」「あんたを信用してないのと、同じくらいに信じていないさ」

「あの女は、俺の食い物に毒を盛っている」「まさか！　いくらなんでも……」

「ちいとばかり、顔色が悪くなってるんだろ？」

「知ってる、食べてるのか」

「あらかじめ、少量の毒を飲んでおけば、死なないのさ。具合はよくないけどな」

「ケバルの命令か」

「たぶんな。俺はケバルを油断させるためにせつせと食らってるのさ」

「あんたたちが何をしようとか俺には無関係だ。2人して、みつともない王子を取り合えばいいんだ」

近頃の王子は女装するだけでは飽き足らず、化粧をし、華美な装飾品で身を飾っていた。

「王子は、ケバルの女になりさがってしまった。こうなったら王子を見限ってパリサティスに乗り換えるしかねえ」

「まだ子供じゃないか」

「お前、逃げる算段をしてんだろ？」

黙っていると、

「パリサティスをロンギマヌスのところへ連れて行こう。そうすれば、俺たちの身分は保証されるぜ」

「俺はジャミールを医者に診せただけだ」「これで話はきまった。今夜、パリサティスをおびき出せ。いいな。馬とロバと食糧は俺が用意する」

「断る」

友誼のかけらもないハーヌルと行動をともにする気など毛頭なかった。

「あいかわらず、損得のわからねえ野郎だぜ」

「1度ならず2度までも、あんたに酷い目にあわされたんだ。俺に寝首をかかれただけでもありがたいと、思わないのか」

サライはその夜、クルド人の男から口バを1頭譲り受けると、その背にジャミールをくくりつけて岩山を下ることにした。

支度を終えたところに、ハーヌルがおおきな袋を担いで現れた。

「道案内がいなくちゃ、逃げきれえぜ」

彼の言う通り、雲が月を隠し、ハーヌルの用意した手提げランプがなければ一歩先も見えない。

「簡単に誘い水にのるお前は、相当の馬鹿だな」

ハーヌルはそう言つと、固く口を結んだ袋を口バの背に乗せた。

呻き声が聞こえた。パリサティスを盗んできたハーヌルは言つた。「やろてくれよっ」

「こつなりや、同じ穴のムジナだな」

袋詰めのパリサティスは、ジャミールと同じように口バの腹帯にくくりつけられた。

「平地に出るまでは、こつするしか手はねえ」

サライとハーヌルは闇に吸い込まれるように岩山を後にした。しかし、下りはじめてすぐにケバルの部下に追いつかれた。ハーヌルは少しも慌てなかった。メディア軍の気配を察知した彼らは大慌てで砦にもどつて行つたからだ。

夜陰に乗じて岩陰から登つてくる軍勢は、ディア軍兵士だった。

ヒタヒタと迫りくる足音の数が尋常ではなかった。砦の誰もが恐れていた敵兵の夜襲であることはまちがいがなかった。

その時が、ついにやってきたのだ。

眼下には、星の数ほどの松明が見える。

網の目をかいくぐるようにして、岩影から岩陰へと下つていくしかない。

信ずる道を行けば、かならず切り抜けられるとサライは思った。何があつても、ジャミールを死なせるわけにはいかなかった。

月が雲におおわれていた。

見張りの兵士はこの時を待っていたように開くはずのない扉を開けて暗闇の先を指さした。

ヤマトは目を懲らした。

石灰を固めた白亜の像が闇に浮かび上がるように白衣の者が現れ出た。

王は自ら名乗り、驚かないでくださいと女のような声で言った。

「神殿長の言葉を確かめたかったです」

背後に控えていた警護の兵士に明かりをとすように命じた。いつのまにか召使は消えていた。

庭の各所に赤々と灯りがともされた。

……彼が王なのか……。

宮殿の一室にこもりきりだとイサから聞いていたが、あまりにも貧相な姿を目にして、彼が本物の王かどうか一瞬疑った。長い巻き毛や、日焼けをしない肌は彼が生粋の貴族であることを示していたが、粘膜の薄い窪んだ目や前屈みにあるく姿勢に王の風格は微塵も見られなかった。

王はヤマトの心の動きを察したように口を開いた。

「私はアルタクセルクセスです。安心なさい」

年齢の隔たりはさほど感じなかった。おそらく、三十歳に充たないだろう。

王は庭にある長椅子に腰かけると、立っているヤマトを凝視した。「あなたの目の色は、なんとはいか……、身のまわりを映しながらも拒絶し、善にも悪にも染まらないように見えます」

「陛下の御前に伺候し、光栄に存じます」

「その目は私を哀れんでいるようにしか見えませんよ」

「ペルシアの王を哀れむ者など、この世におりません」

「王であつて王でない。権威はあるが、権力はなく、宰相のあやつる臣下の意のままの王であつてもですか」

王は目を落とすと、

「即位して、9年目になるが、私にある決定権は子をなすことだけです」

「祭司エズラに金銀を与え、エルサレムに帰す権限はおありでした」

「エズラを知っているのですか！」

王は長椅子から立ち上がった。その拍子に、彼の左腕が上衣からだらりと垂れ下った。ロンギマヌスという渾名は、弓の射手として優れているから付けられたものではないようだった。

「親しく言葉を交わしたわけではありません、私はシュメール人です」

ヤマトは用心深く次のことばを探した。

「陛下は、祭司にまつたき信頼を寄せておられると仄聞しました」

「彼は偉大な人物です。私がこれまで出会った学者の中で、最高の知性の持ち主でした。残念ながら彼に匹敵する能力を同族に見いだせません。私の周囲にある者たちの有するのは、欲望と策略のみです」

「権力が学問に劣ると、お考えなのですか？」

「そうは思わないが、王位につくなど私には向いていないのです」

王は長すぎる腕を衣の下に隠すと、うすい唇をかんだ。

「臣下の多くは、神々のうちの最高の神と称する、アフラマズダを信じています。帝国の守護神だと言って……」

「ダリウス？世の霊廟には、善の神アフラマズタを祀つてであると王は言う。」

「しかし、従兄弟のバガバイオス王子は、悪の神アングラマイユを信奉しています」

「悪の神……」

「彼は、人に生きる力を与える存在こそが神の名に価すると言うのです」

王はそう呟くと、長い間うつむいていた。考えをまとめているふうであった。

「あなたは何を信じているのですか？」

「恩師の教えを信じています」

「それをきいて、安堵しました。美しい瞳のあなたの心が汚れていくはずがない。わたしは世界を光明と暗黒、善と悪との戦いの場だ考えたくはないのです。サタンの存在を信ずるエズラに話せば、叱られるでしょうね」

王はヤマトの肩に手を触れると、はにかむように微笑した。それから、王は話し足りない様子で立ち去った。

すると、王の警護の兵士がやってきてヤマトをもとの扉の向こう側 庭に面した部屋に連れ戻した。マナは何も知らず眠ったままだった。召使は何事もなかったように横たわっていた。

翌朝、太陽の昇りきらないうちに、ヤマトは王の執務室に呼ばれた。

母後の侍従長だと名乗る者が案内した。体つきからひと目で宦官だと知れた。

柱廊を通り、いつ果てるともない回廊をいくども曲がり、なんの変哲もない扉の前へ連れていかれた。

ヤマトは突然、幻聴に襲われた。

……ヤマト、行く手を見誤るな……

シンドウの声だった。あまりにもはっきり聞こえたので、周囲を見回したほどだった。部屋に入ると、アルタクセルクス王は亜麻布の衣服に身をつつみ粘土板に目を通していた。光沢をおびた木製の机と椅子のほかは壁をくりぬいた書棚に巻物が積み重なっているだけだった。見るからに簡素な室内の様子であった。

王はわずかに口を開くと、

「この、ネブカデネザルの功績を讃えた楔形文字が私には読み解けない。しかし、エズラには難なく理解できる。そのことが羨ましくてならなかった。彼にある光明が王である私には訪れないのかと。」

それはつまり、彼の知識に私は永遠におよばないということになりはしないのかと」

「知識など、ただの繰り返しにすぎません」 そばから口をはさむ侍従長を王は言下にさえぎった。

「神よ、われに永遠の命を与えよ、とすべての敷石に刻んだネブカデネザルは知識を重んじた故に、預言者ダニエルを手元においたのです」

「ギリシアとの戦いに心血を注がなくてはならぬ陛下には、知識も預言者も不要のものでございます」

王は粘土板を音を立てて置くと、侍従長をけわしい目で見たが口から発したことはため息に近かった。

「そうですね……」

尊大ではない、覇気にかける王はペルシアの人民が為政者にもとめる剛直な資質をまつたくと言っていいほど有していないようにヤマトには見受けられた。

過ぎ去った時の証しをいつも思っていたい、ただそれだけなのですと王は言った。

ヤマトは身を低めると、

「預言者ダニエルについての巻物がここにはあるのですか？」

王は待っていたように、

「ここへくる前に図書館を見ましたか？」

「いいえ」

「それは残念なことをしましたね。あなたの役に立ったかもしれないに……」

「こんどは、この者に預言させるおつもりでございますか」と侍従長は揶揄した。

バビロニア帝国の滅亡を予言したダニエルは、ペルシアの王キュロスのもとでもさまざまの預言を行なったと言い伝えられている。

「誇れるような知識はもとより、未来を予知する力も私にはまったくないと思います。何をもって、お仕えいたせばよいのでしょうか？」

恭しく答えるヤマトに、

「話相手になつてくれれば、それでいい」

と王は温かい声で言った。

侍従長はそれをきいて、不機嫌に押し黙つたまま執務室を出て行った。

「あの者は私の一挙手一投足を母上に報せるのです。子供の頃から、そうだった。何かと言つと、亡くなった祖父や父の武勇談を持ち出して、私の心を萎えさせる」

王宮になどいたくないと王は言い、もやのたちこめる中庭にヤマトを誘つと、

「弓をひくそうですね」

「どうしてご存じなのです？」

王はその問いには応えず、

「武器は人の心を傷つけます」

「時には、心強いと思えますが……」

ヤマトは警備の兵士に目を配つた。

「気に止めることはありません。彼らは、あなたに危害を加えませんが。私が命令をくだせば別ですが」

竜と蛇の姿をした、ごく小さな奇怪な石像がヤマトの目に止まつた。

「好みではありませんが、知をつかさどる神と聞いたので、書棚に置かせました」

王は蛇の腹に触れると、その場をはなれ巻き物をひろげながら、ペルシア帝国に先立つこと二百年余、近隣諸国を従えたアッシリア帝国の興亡について語り聞かせた。エジプトとの戦闘での、猛果敢な戦いぶりについて言葉を尽くす。

「すべて時が美化するのです」

アッシリアがエルサレムを包囲したさいの苛酷な攻防戦についても左腕を衣の下に隠すことも忘れ、ヤマトをともに戦った同志のように語るのだった。ヤマトは王の恍惚とした表情に目を止めた。悪

の神を信奉する従兄弟の王子とこの若い王とはコインの表と裏のよう
に一對の存在であると思った。

物語はいつ果てるともなくつづいた。

ヤマトは辛抱強く耳を傾けた。王の好奇心は過去に限られていた。
長談義のあいまに帝国の現実を語ることは皆無だった。

翌日、侍従長ではなく神殿長がヤマトの居室にやってきた。「忌
憚なく受け答える、お前を王はいたく気に入ったようだ。期待し
ているぞ。事の成った暁には、出城のひとつもくれてやっていい。
どうだ？」

損な話ではないだろう、とシユラートは囁いたが、イサの安否に
ついては何も言わない。ヤマトは黙っていた。まだその時機ではな
いように思えたからだ。

その日も、王の執務室に呼ばれたヤマトは、ひざまづくべきかど
うか迷った末に床にぬかずいた。そして、お願いがありますと切り
だした。

「どうしても、会いたい女がいるのです」

「会ってどうするのです」

「できれば、その女を自由にしていただきたいのです」

「あなたと共に？」

ヤマトは首を振った。イサという男とともに自由にやってほ
しいと答えた。

「イサ？」

王は硬い表情になった。為政者の顔と言ってもよかった。ヤマト
は部下のイサが神殿長に拘束されている事実を告げた。

王は問いつめる。

「女とイサの関係は？」

「女は姉です。ナンナと申します。奴隷商人の手によって売られま
した。もしかすると、王宮にいるのではないかと」

「姉のために、願い出るのですか」

「陛下にも姉君がおられると聞きました」

「くだらない女です。自らの夫を裏切り、ギリシア人の医師に夢中です」

「私にとって、姉のナンナは命に代えても守りたい存在です」

「きょうだいなど皆、敵です。しかし」
「力になりましたよ、と王は請け合った。容姿をたしかめると、探しだすようにと侍従長に命じてくれた。」

「婦人部屋にいるといいのですが」

王はそう言って、微笑んだ。

「あちらには長いあいだ足を向けていませんが、なんとかなるでしょう。私のためにそこはあると皆が口をそろえて言うのですからね」
世界各地から集められたと言われる、おびただしい美女をどうすればもれなく首実検できるか？

ヤマトは困惑した。

王自身は女の出身地はおるか名さえ知らないという。

「夜伽ぎをお命じにならないのですか」

「あなたのためにご婦人のもとに出かけましょう」

その夜、王は武装した従者2人を引き連れ、ヤマトのもとを訪れた。

「ごうしないと、侍従長が承知しないのです」

と王は言い、ヤマトばかりかマナまで後ろ手に縛ると、縄の先を従者にもたせ前を歩かせた。なぜ、マナをと訊ねても王はそれにはひと言も答えない。

「今夜の月を見ましたか？
藍色の空を白い銀が染めているようですね」

マナは王の言葉におびえ、ヤマトを何度も見上げた。

シリア州の北につらなる岩塊の山地を黒しゃこ（鳥類）のように這い上ってくる歩兵の一団を前にして、集団での戦闘に不慣れなハールは浮き足立った。

「どっちへ逃げりゃいいんだ。このさい、パリサティスを渡してしまおう」

サライは首をふった。パリサティスを突入前の兵士にチラつかせても、囚われの少女がペルシア王の従妹にあたるとは誰も信じないだろう。それが手柄になるとも気づかないだろう。

「進むことも戻ることもできない状況じゃねえか。いまさら、ケバルのいる砦には戻れねえし、どうすりゃいいんだよ」

この男は存外、臆病なところがあるのかもしれない。そう思ったサライはハールを置いて、下って行った。砦に残っても、兵糧攻めにあうだけだった。それではジャミールを救えない。

ケバルはメディアの正規軍と戦ってこれを敗れば、もっと多くの反乱分子がいくさに加わると配下の男たちを鼓舞していたが、指揮系統が明確でない軍で統制のとれた正規軍に応戦することはいかに策略にたけたケバルであっても勝ち目はないだろう。

夜間、槍をかまえ、白刃を抜いて、波状攻撃を仕掛けてくるメディア軍に対して、ケバルの率いる山岳民族や漂白民らは所詮、鳥合の衆にすぎない。それぞれが思いのままに石を投げたり、弓を射たりしている。敵兵に届く距離に達してから石や矢で反撃するようにとケバルが声を枯らして命じても、寄せ集めの兵は指揮官の声に耳をかさないばかりか、砦に備蓄している食糧を盗み遁走しようとする者が続出した。

その先陣をきったのが、サライとハールの一行かもしれない。今頃ケバルは、怒りで冷静な判断ができなくなっているだろう。敵の軍勢は両翼を固め、岩山を背にした砦から1人足りとも逃が

さないつもりのようなのだ。

中央の隘路を突破するしかないと思ったサライはハーヌルに別の道を下るように言った。二手に別れたほうが逃げ延びる確率が高いと思ったからだ、ハーヌルは同意しなかった。

「お姫さまはお前の言うことしか信用しねえ」というのが、その理由だった。

「お前が俺たちと同行しないと言うんなら、俺はパリサティスを盾がわりにして歩くぞ」言うが早い、ハーヌルは袋詰めにしたパリサティスを引っ張り出そうとした。

袋の口から黄灰色の髪がのぞいた。小さな悲鳴が聞こえた。

「やめろ！」

サライが叫んだ、そのときだった。

死人のように意識をなくしていたジャミールが突如、口バから降り立った。

「お前……」ハーヌルは絶句した。

身体の厚みなどほとんどないほど痩せ細っていたが、彼女は誰の手も借りずに立って歩いた。

サライが駆けよると、

「われは、いま深い眠りより目覚めた」

その声はジャミールのものにちがいはなかったが、言葉遣いが異なると別人が話しているののように聞こえた。

気が触れたと思ったサライは、

「どうしたんだよ!？」

ジャミールはサライに一瞥もくれず、静かに歩をすすめた。

「殺されるじゃないかっ」

砦に立てかけ、駆け登るための梯子を担いだ歩兵の一個大隊が、夜目にもわかる砂塵を巻きあげ押し寄せてくる。

「事を急ぎ立てるようなことをしてはならない」

彼女はそう言って、瘦身の身ひとつで彼らに立ち向かう。サライが立ちほだかるうとすると、両腕を左右に大きく開いた。

「わが道を開けよ！」その声には何人も逆らえない威厳があった。エズラにも揺るぎない信念を感じることはあったが、ジャミールから発せられる犯しがたい威光は人知を越えるものだった。

最前列の歩兵の一団は彼女の妖気に呆気にとられたのか、前進する足を止めた。後ろからくる兵士らが、早く進めと口々に不平をもらし、停滞する兵士らの背を押した。

「毛深い雄のやぎは雄の羊を打ち倒す。そのとき、雄の羊に手を貸す者はいないだろう」ジャミールの言葉の意味を解する者は誰もいなかったが、自分たちにとって不吉な予言だと感じた兵士は少なくなかったのだろう。じりじりと後ずさった。しかし、1人の射手がジャミールにむかって矢を放った。

その矢は、彼女の襟元の首飾りが七色に光り輝いたとたん、何かに打たれたように地に落ちた。

兵士らはその光景を目にしたとたん、どよめき戦意を喪失したように、両腕を脇の下に下ろした。

「信じられない……」とハーヌルは怯えた声で呟いた。

つきさつきまで生死の境をさ迷っていたジャミールは背中に羽が生えたように兵士の群がる岩だらけの山道を下りていく。ロバと馬を引き連れたサライとハーヌルは転げながらあとを追いかけた。

「どうなってんだ！あの女は仮病だったのか」

「いや、たしかに高熱でうなされていた」

エジプト女も余命いくばくもないように言っていた。しかし、今のジャミールを引き止められる者は何人もいない。それどころか、彼女の青い衣に触れるとただちに命を吸いとられるような錯覚を抱かせるのだ。そのような霊力が彼女の身内から発せられることに、サライは驚嘆し、脇腹がぶるぶる震えた。

神の恩寵なのか、悪魔のなせる業なのか。

ひと太刀、浴びせられればひとたまりもない距離に兵士らは群れていた。だが、ジャミールを目をするやいなや、脱力したようにその場に座りこんでしまう。鎧兜に身をつつみ進撃してくる将兵らの

中には、武器を置いて彼女の歩いた足跡に口づけする者までいた。「このような呪術をついぞ見たことがない。お前はあるのか」とハーヌルが問いかけた。「まさか」とサライは言った。「あるわけないだろ」

以前、エズラの祭服の宝石が光ったが、あれは燭台の明かりを使った単純なたくらみだった。学識には優れていたが、エズラその人は、神の子と崇められていたが人間の力を越えた奇蹟を見せることはなかった。

ジャミールはもはや常人ではなくなっているのだろうか……。

後続部隊の将兵を目にすると、一段高い岩に昇り、ジャミールは宣言した。

「お前たちの国など砂上の楼閣なのだ。神の国が訪れる終わりの日まで、乾いた大地に繁栄が築かれることは二度とないであろう。キロス王の拝火神殿ハサルカタエがダリウス王の時代に廃墟と化したようにバビロンもスーサもペルセポリスも時を経ずに荒廃するであろう」
敵の将兵は、凜々と響く声に恐れをなし、歯向かう者は1人としていなかった。

一行が無事に下山し、麓の草原にたどり着いたとたん、ジャミールは気を失った。

それを見計らったように、砦での攻防が本格化した。

「1万の兵で攻められれば、3月ともたないだろうな。準備が整いしだい、焼けた石を投げこまれるぞ」とハーヌルは嬉しげに言った。「女になったバガバイオスも焼け死ぬさ」「ケバルはしたたかだから、易々と根をあげない」とサライは言った。「それにクルド人は山間の戦闘に慣れている。砦の周囲の隠れ場所も多く知っているしな」

「小僧のくせに、わかったようなことを言うじゃねえか」

ハーヌルは、ふたたび人事不省に陥ったジャミールを見て、フンと鼻をならした。

「いつこの女の怒りに触れてお陀仏になるか、お前は不安じゃない

のか。俺はこんな恐ろしい女と旅をするのはごめんだ。パリサティスはもらっていくぜ」

ハーヌルは、地平線の見え隠れする草地で陣を張るメディア軍の指揮官に取り次いでもらうと、サライとジャミールを見限るようにふたりとは別の天幕を用意してもらった。それから1カ月、攻める側も守る側も死闘を繰り広げた。毒矢のせいで負傷者の数はメディア軍のほうが多く、百名を越えた。指揮官がジャミールに呪術を求めたが、呼吸をしているのかいないのかさだかでない彼女を見て諦めたようだった。

もはや瀕死のジャミールに興味を示す将兵はいなかった。同じ夢を見ていた者たちが一斉に目覚めたかのようだった。

サライは医学の心得のある兵士にジャミールの容態を診てもらった。兵士はそばに寄ることさえも拒んだが、遠目にちらりと見て

「眠っているだけだ」と診断した。

「いつ目が覚めるんだ？」

「そんなことは神にしかわからん」

ジャミールはそのうち10日近く眠り続けた。

その間に、ケバルの率いる軍は形勢不利と見たのか、伝令が麓の陣地に送られてきた。バガバイオス王子を差し出すので自分たちの退路を塞がないでほしいと言うことだった。「王子を生け捕りにせよ」という命令を受けていなければ、皆殺しにしてやるのだが」と指揮官は悔しがった。

ケバルは早々と逃走し、集まってきた男たちが去ったのち、山岳民族は散々に逃げ去った。反乱軍の鎮圧に成功したメディア軍は、何事もなかったかのようにふたたび皆を自国のもものとした。意気揚揚と、皆に入城すると、女装をした王子が1人、取り残されていた。ハーヌルは王子を見つけると、衣服を整えさせようとしたが、バガバイオスは頑なに聞き入れなかった。自分を捨てたケバルが戻ってくることを一日千秋の思いで待っているようだった。

ハーレムで育つペルシアの貴族の間では女装することは稀ではな

かった。祖父のクセルクスも化粧をしていた。彼らはそれを退廃とみなさなかつた。美しく装うことは特権だと考えられていた。

屈強な男とみれば、王子は秋波をおくつた。王子は将兵らの物笑いの種となつたが、そのことさえもうれしい素振りを見せて男たちの関心をかおうとした。

王子のあまりの変わりように、サライは肌が粟立つ思いがした。王子はサライと顔を合わせてもなんの感情も現さないばかりか、たえず口の中で何事か呟いている。そして朝な夕な髪をくしけずり、白粉と紅を顔中に塗り、目の縁に黄緑色の隈取りを入れていた。

一方、王子の妹のパリサティス王女は袋詰めにされたことが余程おそろしかつたのか、ハーヌルと天幕にこもりきりで気配さえ感じさせなかつた。

ある朝、眠りから覚めたジャミールは何も記憶していなかつた。

「どうして、メディア軍の天幕にいるのよ。あんた寝返つたの？」

「お前のおかげで、命拾ひしたんだ」

と言つても、いつもの天の邪鬼にもどつたジャミールは、

「降伏したんなら、そう言えばいいじゃないの。ほんと弱虫なんだから。でも王子のようになるよりはいいけどね」

「これからどうする？」

「きまつてるでしょ。バビロンに行くのよ。夢で見たのよ。イシュタルの門を見上げているヤマトの姿を」

「またはじまつたか」

サライは雅歌を呟いた。「わたしをあなたの心に置いて印のようにし、あなたの腕において印のようにしてください。愛は死のように強く、ねたみは墓のように残酷だからです。そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。（雅歌8：6）」

「嫌味なのね」

何かが胸の中でぐしゃりと折れ曲がつたような気がした。それは徐々に痛みにかわり、サライを混乱させた。

「一緒に来てほしいなんて言つてないわ。あんたはあんたの道を行

けばいいのよ。あたしはあたしの道を行くだけなんだから」

なぜ、彼女はサライに対して忍耐の限界を試みるような言動と振る舞いをするのか。ヤマトへの執着を断ち切ることができないのであればそれはそれでいい。あの単調で抑揚のないヤマトの話ぶりのどこが、自分より勝るといえるのか。

「別の道を行くよ」

彼女への思いが恋情から憎悪に変わる日がやってくるのではないかと、サライは恐れたのだ。

ジャミールの予想する返事ではなかったようだ。彼女はサライの目をのぞきこむと、細身の短剣を胸に突き刺すような言葉を吐いた。「あんたと寝てもいいわ。そのかわり、けっしてあたしから離れないと約束してよ」

「ジャミール……」

「ラピスラズリみたいな目で睨まないでよ。あたしは母と弟を殺された時から奴隷だったのよ。ケバルに命じられるままにバビロン州を皮切りにエラム、シリア、イスラエルの各州を渡り歩いてきたわ。身体を汚されたことも、死にかけてことも1度や2度じゃない。でも平気だった。だって、生きてる気なんてしなかったもの。ずっと色のない世界にいたから、いつたい自分が何をしたいのかなんて、考えたこともなかった」

「俺だって、母親を殺された。しかし、俺はお前のように心を傷つけない。お前は俺の思いを踏みつけてばかりいる。もう、ごめんなんだよ」

ジャミールは鳶色の瞳をしばたいた。そして、涙をにじませた。「どうしたんだよ」サライはうるたえた。

「なんで、あんたを好きになれないのか、自分でもわからないの……。だって嫌いじゃないのよ。あんたがパリサティスと仲良くすると腹が立つくらいだもん。でも、ヤマトに会いたい気持ちで心から追い払えないの。ほんとは自分でもどうしていいのかわからない……」

もし、もしもよ、ヤマトを諦めてしまつたら、また何も感じられなくなるような気がするの。胸が空っぽだった頃にもどる気がするのよ。それが辛い。あんたにはこの気持ち、わからないわよね？自分の心が身体の中にない感覚なんて」

「わかるさ」

わかりすぎるほどよくわかる。ジャミールと出会うまで、書物では埋められない空疎な思いを抱いて生きてきた。どこまでもついで行くしかない。

「じゃあ、一緒に行ってくれるのね」

「ああ……」

「ひとりだと不安なのよ」

傷つけられればられるほど、サライのうちなる感情はジャミールに支配されていく。エズラのもとを去ったときに味わった解放感の代償がこれだったのか。

常人ならあるはずの憤怒や落胆や羨望や悪意の感情を持ち合わせていないかのようなヤマトはサライにとって謎だった。ジャミールにとっても同じなのだろう。しかし彼女は、サライの心に起きる感情をたちまち察知する。それが、胸を焦がす感情を妨げるのだ。

「時々、不思議になるのよ。どうしてヤマトを追っかけるのかって、親も信ずる神もない自分たちには、異能の者を求めることでしか、生きられないのだろうか。」

後の世のハーレムという呼称はまだなかったが、女性隔離の習慣がいつからあったのか？ 妻女たちを宦官によって護るという東ローマ帝国の習慣をはじめて採用したのはイスラム教を興したマホメッドの子孫、ウマイヤ・カリフ朝の創始者であったムアウイア（7世紀）であったと言われている。ということは前五世紀のこの頃、神聖にして犯すべからざる場所というアラビア語のハーレムはまだ、ペルシアに存在しなかったことになる。しかし、聖書のエステル記には、アルタクセルクス（ロンギマヌス）の父、アルタクセス王の後宮の記述が詳しく記されているのでこれをとる。

蒸せかえるような香りの夜だった。

アルタクセルクスは宦官である従者をのぞいて、後宮の者たちに顔を見られたくない気配であった。

王は4人の兵士に抱えられた輿に乗り、王宮内の広い庭園をいずこかへ向かった。縄目をかけられたままのヤマトとマナも、王の輿につき従った。

藍色の薄絹の垂れ幕におおわれたような庭園には、ほのかな灯りがてんと灯っている。透き通るような歌声が風にのって聞こえてくる。ハーブの匂いがただよい、ここが危険な場所でないことが知れた。

マナはヤマトを見上げると、

「どこへ行くのでしょうか」

「おまえは、ユダヤの神を信じる者か？」

「はい」

「では、何も怖れることはない」

ヤマトは自分の言葉に驚いた。師とイサの言葉を指針として生きてきたヤマトにとって、ユダヤの神はなんの意味ももたなかった。

輿が止まった。

従者にうながされてひざまずくと、輿を下りた王の静かに歩む足音が聞こえた。顔をあげると、月明かりをうつす水面が手前にひろがり、傍らのよよい戸が下ろされた板張りの小さな家の壁の隙間から灯りがまだらに見える。

ヤマトとマナは王の従者のささげ持つ手提げランプをたよりに王の立っているところまで歩いた。

水辺にたたずむ王は小声で言った。

「この東屋にはときどき泊まることがあるのですよ。今夜は大切な客を待たせてあるのです。あとで会うことにしましょう」

柱廊のある石造りの建物に向かってきびすを返した王は、軽やかに歩いた。ヤマトとマナは松明に照らされた壮麗な建物に見惚れる間もなく、従者の手によってフード付きの黒いマントを肩に着せられ、人目につかないように宮殿の中へ引き入れられた。

王は迷路のような通路を奥へ奥へと進む。ヤマトとマナも遅れないようにと急かされる。

突然、立ち止まった王はヤマトをふり返り、「イスラエルの王、ソロモンは恋人のいる娘を花嫁にのぞんだが、娘の恋人を想う心根にうたれて思いとどまったそうですね?」「雅歌に記されています」とマナが答えた。「ほお! お前は子供ながら文字が読めるのか」

「はい」

王は振り向かず、

「ソロモン王を賢明な王だと思うか?」

「いいえ」

「どうしてだ?」

「ソロモン王は正直ではないと思います。もしも王が、心から娘を望んだであれば花嫁として迎えればよいのです。だって、王様なんですもの」

アルタクセルクセスは忍び笑うと、従者に命じ、ヤマトとマナの縄目を外した。それから、別の宦官に言いつけて頑丈な鉄の扉を押

し開けさせた。

そこに侍従長のシュラートが控えていた。「お待ちいたしております」

冷え冷えとする声音がヤマトの背筋を寒くした。シュラートはヤマトと目が合うと、意味ありげに笑った。

王は、女たちをサウナと隣り合わせの広間に集めるようにと侍従長に命じると、別室に下がらせた。

「さあ。私たちだけで行きましょう。子供をつくるのが、人としての最大の義務だと信じている3千人の美女たちのところへ」

王の声は、始めも終わりもないような長い廊下につつるに響いた。廊下の中ほどまできたときに、王は立ち止まった。横壁を押すと、地下へと続く階段があった。

「この下には、私に背いた者どもが自害もせず、地を這うようにして生きています。人間とは浅ましい生き物だとつくづく思います。いずれの者たちも兵士や民に恐れられた時期もあったというのに……。武も権力も所詮は、王から授けられたものだということを忘れてたが故の末路です」

その言葉は、ヤマトへの脅迫のようにも聞こえた。

廊下の先にはモザイク模様の床石が円形に広がり、それを取り囲む複数の円柱が樹木のように林立している。明かりは円柱に取り付けられた金具に蝋燭がともっていた。

建物の中は、むっとするような湿った空気が漂っていた。足音を忍ばせて、髪の毛の白い小柄な少年が円柱の影から姿を見せた。なんの装飾もない黒っぽい衣を青白い顔の身にまとい、ひたすら平伏してみせる。時折、顔を上げるが乏しい光のその目は忠実な犬が主人を仰ぎ見るように王に注がれる。あたかもこの一瞬だけに生きがいを感じているかのよう……。

「クズラ、準備は整っておるか」と王は問うた。

「仰せの通りに、わが君さま」

答えるクズラの口元は老人のようにしぼんでいた。歯がないよう

だった。そのせいで息のもれる口調は聞き辛かったが、その声には王への賛美と絶対的服従が感じられた。王が手を打つと、彼は身をひるがえし、控えの間にいたらしい女たちを壁画のある広間に寄せ集めた。

王は屈託のない声でヤマトに問うた。

「尋ね人はいましたか？」

「顔のベールを外すよう、おっしゃっていただけですか」

どの女も両目をのぞいて、顔面を厚い布でおおっていた。クズラは平然と、王にしか見せてはならない決まりになっていると言った。この時代、戸外において女性が男性と一緒に働かなければならない農村などでは、顔や手をおおう習慣はアラブになかったが、ハーレムではべつであった。

「ナンナ！ 姉さん」ヤマトは大声で呼んだ。

返事はなかった。

女たちは微動だにしない。

「ソロモン王の求愛を拒んだ娘は、恋人の羊飼いを想って、わたしは彼のもの、と歌っていますよ、あなたのナンナは無言ですね」

「ナンナ！」もう1度呼んだ。

「およしなさい」

王は、影絵のように表情のない女たちの目に見つめると、ここにこうしていることが不幸だとは限らないと言った。

クズラは大きく首肯いた。

ヤマトは懇願した。「侍従長をいまいちどお呼びください」

帝国内の127州の総督に命じ、もつとも美しい処女たちを探し出す任務は侍従長に与えられていた。

「侍従長なら、ナンナのことを知っているかもしれません」

「この者たちは奴隷ではないのですよ。幼い者たちはここで教育を受けているのです。知らないのですか？」

「姉の身を自由にしてやってください」

「あなたのいう自由の身とはなんです？ 飢えることですか？ さ

すらつことですか？ わたしをはじめ、自由な身の上の者などこの世界には存在しないのです」

少女たちは、王のために、1年間の美容の期間を過ごすときズラは言う。王の目に止まれば、妃となることも夢ではないと。

「そなた」

アルタクセルクセスは突然、マナに声をかけた。火の柱をかたどった浮き彫りのある壁画を指差し、訊ねた。

「ここに住みたいか？」

「はい」

マナは身震いしながらも、はつきりと答えた。クズラがマナの手をとると、王は口のはしに笑みを浮かべた。

「行くがいい。輝きに満ちたお前の未来に向かって」

王の仰々しい言葉にもマナは動ずるところか、しっかりと前を向いて歩きだした。

ヤマトは短く言った。「もどれ！」

「奴隷の子に生まれた私にはこれ以上の幸運はないのです。親切にしていたいたことは忘れません。もしも、ハガイに会うことがあれば約束は果たしますと伝えてください」

マナは別れを告げた。「さようなら、ヤマト様。お姉様が一日も早く見つかることを祈っています」

二つ折れに腰の曲がった老女が進み出ると、マナの肩を小突いた。「えらく貧相な娘だね」

「さあ。どうします？ 私の友として王宮に滞在するか、姉を探すためにここに残るか」「姉を探します」

アルタクセルクセスの象牙色の肌が青黒くになり、ぞっとする眼ざしにかわった。

「それがいい、そうなさい。ナンナとやらも、そのうち見つかるでしょうからね」

王はヤマトを置いて両開きの扉に外へ消えた。扉が閉まる一瞬だが、アルタクセルクセスの右腕が腰帯の下に無造作に伸びるのが見

えた。王の腕には筋力が失われているように見受けられた。

しばらくすると、足音がし、扉が開いた。　白い髪のクズラだ。

「愚かなやつ……」

王の前では放心したような眼差しをしていたが、ヤマトの前では蛇の目のように冷徹だった。

「肉親など王の威光と比べようもない」

ヤマトは、クズラともう1人の宦官によって大理石の柱が天井を支える湯殿の奥に向かって引き立てられた。彼らの命をなからしめることは容易だったが、ナンナを見つけることが先だった。

蒸気の立ち上る中に、裸身の女たちがさんざめいていた。強い香料のにおいに立ちくらみがしそうになった。皆、髪をすき、身体にバルサム油をすりこんでいた。クズラに伴われたヤマトがすぐそばを通っても、眉ひとつ動かさない。ヤマトのことも宦官だと思っっているのだろう。彼女たちの胸元は熟れた果実のようだった。肌の色もまちまちで、女たちの品評会のようだった。マナを探したが見当らなかった。池のように大きい浴槽を横切ると、狭い渡り廊下を通って石の壁でおおわれた小部屋に押しこめられた。

窓のない小部屋は、寝台とも台座ともつかない木製の箱があるだけだった。いったん、扉を閉めると外の様子はまったくわからない。部屋の前を通り過ぎる、低い声が耳についた。

「宦官ばかり増やして陛下はどうなさるおつもりかねえ。それでなくたって、連中は尊大なんだから、この調子だと宦官に賄賂をわたした女たちが王の寝室に召されることになるよ。そうなったら、婦人部屋を取り仕切るあたしら女官の仕事があがったりだよ……」

クズラは声をひそめると、

「お前が私と手を組めば、王の側近に取り立てられることも夢ではなくなる」

「小さな望みだな」

そのとき、逞しい身体つきの男が3人、ヤマトの眼前に現れた。

1人が油を、1人が細い麻紐を携え、真ん中の男は鋼の剃刀を手に

していた。3人もヤマトより身長は高かったが、体毛がない。むろん、口髭も生やしていない。彼らも宦官のようだった。ハーレムを護る戦士として育てられた、生まれながらの宦官だとクズラは言った。そして、

「痛くないように処置してくれる。彼らの腕を信じて大事なものを差し出せ」

「宦官にはならない」

「アルタクセルクセス様のご命令に背ける者はこのペルシアにはいない」

「私は、王の臣下ではない」

「おとなしく言いなりになれば一瞬のうちに終わる。抗えば、それだけ痛みがつづくことになる」

剃刀を手にした男は腕を伸ばし、筋骨をひけらかすように刃先をヤマトの頬にあてがった。「きれいな顔に傷をつけるなというご命令なんだよ」

ヤマトは男の太い手首をつかむと手前に折り曲げた。関節の外れる音がしたとたん、彼は獣のような唸り声を発した。紐と油を持った2人が、それらを投げ捨てると、ヤマトに襲いかかってきた。ヤマトは拾った剃刀で、男たちの喉首を切り裂いた。3人の首から吹き出した鮮血が、クズラ顔面に飛び散った。血の色に染まった彼は戦き、慟哭した。

ヤマトは小部屋を出ると、血に染まった手を浴槽からあふれる湯で洗った。異変を聞きつけたのだろう、女たちはいなくなっていた。王宮を守護する兵士らはハーレムには入れないのでヤマトを捕える自信のあるものはいないようだ。

所々に置かれた寝椅子のひとつに腰を下ろしたヤマトは、傍らのテーブルにあるガラスの器に入ったぶどうや無花果やなしを頬張った。

腹を満たすと、つかのま眠った。

目覚めると、あたりはしんと静まったままだ。浴槽からあふれる

湯の音の他はなんの物音もしない。自分の手がよつやく見えるほどの明るさだった。小部屋に戻ると、血のにおいと蒸気でむせ返るような暑さだったが、クズラは立ち上がれないでいた。さっきと同じ姿勢で座りこんでいる。

「助けを呼びに行かないのか」

クズラは黙って首を横にした。

「ナンナという名の女を知らないか」

クズラは、知らないとかすれる声で答えると、壁を指さした。

見ると、ひっかき傷のような痕があった。ペルシア語で“エステル”へブライ語で“ハダサ”と記されていた。「みずみずしい、きんばいか」という意味だ。ここに囚われ殺された女が爪で書き残したのだろう。ヤマトは塩をはむ者（王に養われている者の意）の悲哀をか細い文字から感じとった。ナンナも同じ運命をたどったのだろうか……。

「ヤマト、わたしよ、ヤマト」

押し殺した声がどこからともなく聞こえる。

「ナンナなのか？」

驚いて振り向くと、ベールで顔をおおった女がいた。

「姉さん！」近づこうとすると、相手は後退りした。

「どうしてきたの？」

声に聞き覚えがあった。

「助けたかった」

「ばかなことを……わたしはもう、ナンナという名さえ捨てたのよ」

「顔を見せてよ」

「わたしは王妃になりたいの」

「王妃に？」

「先の王は妻を離別し、一時はイスラエルの女を王妃に迎えたというわ。だから、わたしだって……」

ヤマトは何から話していいのか、混乱した。

「イサも一緒に来ているんだ」

「イサがここに？ あんな男死ねばいいのよ」

「ちがうんだよ、姉さん。イサは僕や姉さんのために思って育てくれたんだ。それにイサは僕らと同じシユメール人なんだよ」

ここにくるまでのことを逐一話そうとしたが、ナンナは聞く耳を持たなかった。

「さつさとここから出て行ってよ。迷惑なのよ」

「天と地をつなぐ都の話をしてくれたのは、姉さんじゃないか」
ナンナは忍び泣いた。

「あんただけはどんなことがあってもきつと生きてると思っていたわ。それだけでいいのよ。もう都なんて、どうでもいいの。どうせ、夢物語なんだから」

「姉さん……」

「死体は、わたしとクズラでなんとかするわ。一刻も早く逃げて」
どこからともなく、大勢の足音が聞こえる。

「ヤマト、どうしたの？ なぜ、黙ってるの」

王の怒りをかけてしまった以上、もしかすると、ここから生きて出ることはかなわないかもしれない、とヤマトは思った。宦官たちを殺した部屋は、ハーレムで問題を起こした女を処罰したり、宦官になる者たちの処置をするところだったのだらう。エステルという名の女は殺される前に生きた証を欲して壁にその名記したのだらうか。名前を記した文字と並んで、身籠もったことを現す産着の絵が描かれていた。

「先の王の妃となった、その王妃は、エステルという名ではないのか？」

「なぜ、知っているの。いまの王の母君に殺されたときいたわ」

「ここで死んだのか？」

「いいえ。彼女の神、ヤハウエが隠されたという噂よ」
産着に曲線の文様がある。

ヤマトはナンナに立ち去るように言うと、曲線に目をこらした。水牢とっていいほど石の床は湿っていたが寒さは感じなかった。

赤い夕陽は熱く、顔を焦がすように照りつける。西からは白い月が浮かび上がってくる。夕陽と月と湿った風が、大河に悠久の時を刻んでいた。

「すげえ！」サライは感嘆の声をあげた。「五書の記述で、この河のことを読んだが、なんて言ったらいいんだろう。空にある水瓶が雨になって、この河に集まってきてるようだ」

「河口の町、バスラでチグリス河と合流するのよ」

「砂漠が魔物の住む大地だったら、ここには水の神が住んでるような気がするもんな」

「水の神エンキや天に昇る竜が住んでいると言われてるわ。だから毎年のように氾濫しても、みんなここから離れないの。家も田畑も作物も流されて、大勢が死ぬけど、それにかわる稔りをもたらしてくれるからよ」

「民族信仰だな。それしか頼るものがないものな」

「歴代の王が、暴れる河を静めようと、まずは犠牲の家畜を捧げたりしたけど、洪水はやまないから堰をつくったり、地を削って支流をつくったりいろんなことをやったらしいけど、思うようにいかないみたいよ」

「俺の住んでいた町には、向こう岸が見えない河なんてなかったからな」

サライとジャミールは、メディア軍の陣地から馬を盗んで脱走し、ユーフラテス河の船着場まで逃げてきていた。

「ここを舟で下れば、バビロン州よ」

「ネブカドネザル王の建てた都を、この目にできるなんてわくわくするな」

「預言者のダニエルが仕えた王よね？」

「エルサレムを破壊した王は、ユダ族の貴族の子だったダニエルを、

バビロンに連れ帰ったんだ」

「あたしは、ザドクの母親から、ダニエルに似ているって言われたんだよ。『あなたのように美しい少年だったらいい』って」

「えらく昔の話をするじゃん」

「前の雨季のことじゃないの」

「俺は百年も経ったような気がするよ。エルサレムでの出来事は夢だったのかと時々、思うよ」

ジャミールははっと思いついたように、

「ねえ、ダニエルが、王の謎解きをしたってという夢の話をしてよ。国々の未来を予言したんでしょ？」

サライは躊躇った。敵兵の中を下山した時のジャミールを思い出したからだ。熱に浮かされていたのかもしれないが、あの時のジャミールの声には忘れがたい響きがあった。

「……よくわからないよ」

「嘘よ、知ってる顔してるじゃない」

多くの人々は、五書ではないダニエルの物語を伝承でしか知らない。エズラの学びの家でも、ダニエルに関する巻き物メッギラーは目にしなかった。70年前（紀元前536年）にペルシア人の王キュロス？世がバビロニア帝国を打ち破り、民族解放令の布告を出した翌年、ダニエルは百歳を越えて、自らの手記を書き表わしたとされる。ベエルシェバに住んでいた頃、母の客だった収税人の書記官から伝え聞いたが、ダニエルの言葉は比喻が多すぎて真意を推し量れないと彼は言った。サライは旅の間に、ケルト人の伝説を記した書物やギリシア人の物語を知るようになって、人々が語り継ぐ伝承には大きな意味が隠されているように考えるようになった。「ネブカドネザル王の夢を説き明かした話なら知ってるが、次に起こる王国がどこなのか、それはわからない」

ダニエルは、未来に起こる王たちの世とその滅びを予見した。

「さ、乗るわよ」

帆がひとつの、いかだが船着場に着いた。葦を積んだ小舟も行

き来している。

「これに馬も乗るのか」

「まさか馬を手放すつもり？」

青い空と繋がっているように見える河に浮かぶいかだは、一行を乗せると、ゆるゆると流れに沿って下って行った。船賃は、ジャミールが自分の衣を売り捌いた金をあてた。少年の身なりにもどったジャミールはザドクの母が言ったように、少年のようにも少女のようにも見えたと言いつたように、少年のものに見えた。そしてそれは天と大河の他はこの世界に存在しないかのような壮大な光景と相俟って、人間のかかわるすべての事象がなんの意味ももたないように感じられた。「少年だったダニエルが、バビロンの囚われ人になって10年後のことだ。ネブカデネザル王は恐ろしい外観の像の夢を見たんだ。しかしバビロンの賢人たちには、王がどのような夢を見たのか、言いあてられなかった」

ジャミールは手綱を手に、いかだに腰をおろすと、
「ダニエルは10年間も何をしていたの？ 想像はつくけどね。だって、宦官だったんでしょ？ あたしはバビロンの宮廷にしばらく潜伏していたから、計算高くて腹黒い宦官をいやというほど目にしたわ」

サライはジャミールの隣に座り、

「ダニエルは他の者とはちがう。彼は信仰と学問に熱中していたと思う。だから、王の見た夢を解き明かすことができたんだ。夢に現れたのは、とてつもなく大きな像だったらしい。像の頭は良質の金で、胸と腕とは銀、腹と股とは銅、脚部は鉄、足の一部は鉄で、一部は粘土だったそうだ」

「下にいくほど、安直になんのね。人間の王さまも黄金の冠をかぶるけど、足には、純金の靴を履かないもんね」

「ダニエルはネブカデネザル王に召されてこう言ったんだ。『王の王たるあなた様に、天の神は王国を治める権力と尊厳を与えた』と」「じゃあ、金の頭ってわけね」

サライは頷くと、

「像の体のそれぞれの部位は、世界を支配する国の繁栄と衰退を現しているんだ」

「ということは、現在のペルシア帝国は頭の部分の金がなくなっているから胸から下ってこと？」

「正確には、胸と腕　銀の部分ということになる。その下の部分には、また別の帝国が起こることになっている」

「へえ。ペルシアも滅びるんだ。今の王なの？　それとも次？　いつよ？」

「そんなことが、わかるわけないだろ」

「じゃあ、何がわかっているのよ」

「神による最後の審判の日に、主権をもつ王は滅び絶やされるってことだ。そのちに、ヤハウエを信ずる民の国を神がつくり、永遠に続くそうだ」

「ユダヤ人の国ってことよね」とジャミールは言った。「とどのつまりは、自分たちに敵対する外国人に呪いをかけたようなものね」

「ダニエルが呪いを？」

「ペルシアなんて滅びたつて、悲しくもなんともないからかまわないけど、ひとつの民族だけを選ぶ神さまが本物の神さまだったら、あたしは神なんていらない」

「そうだよな」

とところどころ曲がりくねった大河は狂暴な力をうちに秘めて、太古の昔から何一つ変わることもなくメソポタミアの大地を浸蝕しているようだった。

命からがら砦を脱出したケバルもまた、厩に近づいた馬のように
一路、バビロンの都をめざしていた。

「メディア軍をあなどっていたな」

出城のひとつを押さえたところで、メディアとペルシアの連合軍
が支配する帝国に小さな風穴を生じさせることすらおぼつかないと
思い知った。しかし、収穫はあった。武力で攻めるより、内部から
腐らせるほうが有効だと悟ったのだ。それはバガバイオス王子をね
じ伏せて犯すことで、女たちと宦官に溺愛されて育った貴族のもつ
本質的な弱さを目のあたりにしたからだ。

「密偵には、それなりのやり方があるってことだな」

己れの持ち得ぬ、猛々しい男なら誰でも有してる暴力への憧れを
貴族たちは胸の内に秘めているようだ。それが、自らに向けられた
残酷で恥辱に満ちた行為であっても、そこに奇妙な快感を彼らは見
いだすのだろう。ロンギマヌスが噂通りの脆弱な王なら、取り入る
ことはそうむずかしくない。非難と賛辞、牽制と激励、懇願と命令
を適当におりませながら彼らを発奮させたり、落胆させたりすれば
巧みにあやつれる。残る問題は、監察官の手足となつて密告と裏切
りに明け暮れてきた下等な身分の者がどうやって宮廷に出入りでき
るようにするか、だった。

耳にしたところによると、身边を護衛する兵士はペルシア人で固
められているという。サカ人は傭兵として雇われても、王の護衛官
には登用されない。仮に、護衛官の1人となりえても側近にはなれ
ない。王の居室や寝所に入ることができる者はバビロニア人の神官
と一部のユダヤ人だけだ。その中に、各地から集められた美少年の
宦官が含まれることは言うまでもない。王に仕える彼らは大臣や総
督よりも権力を手中にする機会に恵まれる。王の政治的決断につい
て具申することさえ稀ではない。

「なんとしても王宮に潜入する方法を考えなくては……」

財産を没収され、王宮のどこかに囚われているかつての監察官デイグラネスに会うことができれば、事態を好転させることが可能になるとケバルは考えた。デイグラネスももとを質せば宦官だった。

邸宅の平屋根を浮かべたような平底の船は沼沢地を、ひたすら南へと下って行った。乗っているのは2人の船頭と10人ほどの漕ぎ手、それにサライとジャミールと2頭の馬だった。両岸には、葦と粘土で家々が建ち並び、遠景にところどころ砂丘が見える。馬を大人しくさせるのに骨を折ったが、ジャミールは葦の繁る川面をじつと眺めている。

いつになったらバビロンにたどり着くのかと、サライが問いかけても返事もしない。

世の中は、不当な行いを強いる者となんの罪もないのに虐げられる者にと二分される。サライの母の生涯は、不条理な摂理から抜け出そうと懸命にあがいた故の刑死だったが、ジャミールの場合には己れの思いを遂げるためならなんの躊躇いもなく罪を犯すだろう。

……俺はどうすればいい……？

夜のとばりがおけると、川岸に沿って移動する松明の火が水面に赤い帯を引いた。

「なんだ？」

「盗賊よ」とジャミール。

「どうすんだよ！」

「連中が襲ってきたら、あんたとあたしとで船を守るのよ」

「ええっ！」

「ほら」と言つて、ジャミールは船頭から借りた棍棒の1本をサライに手渡した。

「情け容赦なく殴りつけるのよ」

「本気なのか？」

いくつかの松明が浅瀬を走ってくる。相手の顔は見えないが、水音で人間だとわかる。「来たわよ」

ジャミールは棍棒を振りかぶった。

「なんで昼間に乗らないんだよ」

「ユーフラテス河の夕陽とバビロンの朝焼けが好きなのよ」

「そんなくだらない理由かよ」

「この船には、貴重品が積んであるのよ。船頭たちは、あたしの不思議な力でなんとかなると期待してるのよ」

近づいてきた連中を至近距離で見ると、裸の男と少年だった。盗賊という名にふさわしくなかった。その証拠に、彼らは口々に、食べ物をくれと言って手を突き出してくる。困惑するサライを尻目に、船頭は棍棒を振りおろす。彼らは殴られても平気のようだった。それどころか、甲板に乗りこもうとする。

サライは馬に積んでいる乾し肉を恵んでやろうとした。

「やめなさい！」

ジャミールは甲板にしがみついた男の頬を平手で殴った。男は一瞬、めくらましにあったように水中に沈んだ。

「巫女さま、ありがたや」と船頭らはジャミールを拝した。

「……無慈悲な巫女だな」サライは呟いた。「物乞いは五万といいわ。彼らを助けるのは彼ら自身よ」

「そういうお前だって、俺に助けられたこともあるじゃないか」

「恩着せがましいから、写字生にも兵士にもなれないのよ」

「関係ねえだろ」

ジャミールの言葉通り、自分は何者にもなり得ないと薄々感じていた。ジャミールに振り回され、行動も思考も曲線を描くのだ。

「要領が悪すぎるのよ」

ジャミールの声に気遣いが感じられた。

「バビロンでは、好きなだけ勉強できるわ。エルサレムの学びの家と違って、神様がやさしいからね」

「やさしい……？」

「バビロンは昔、神々の門と呼ばれていたそうだけど、人間のすること口出ししないのよ」

「ユダヤ人は、背徳の都だと記している」

「バビロンの門をくぐったユダヤ人に限って、そういうのよ」

「なんでだよ？」

「心を乱す人やものが、たくさんあるからよ」

月を残したまま藍色だった東の空が曙に彩られると、川風をうけ、ふくらんだ帆を上げた船やいかだで河は賑やかになった。

「すげえ！ 船がいっぱいだ」

「バビロンには、何十万人も住んでいるのよ。食糧を運ぶ船だけでも数えきれないわ」

「どうしてそんなに人が住んでいるんだ？ みんなペルシア人なのか？」

ジャミールは首をふり、

「このあたりに暮らす民はどここの国の者でもバビロンに住みたいと思ってるわ。だから、どんどん人が増えるの」

「なんで住みたいんだ？ 奴隷か兵隊にされるんだろ？」

「イスラエルから連れてこられたユダヤ人のほとんどは、帰りたがらないわ。ラビ・エズラにくっついてエルサレムに帰った連中なんて、ほんのひと握りよ」

「ここがほうが暮らしやすいのか？」

「エルサレムには門も城壁もないけどバビロンには監視塔のある2重の城壁と100の門があるわ」

「敵から守られているということか……」

「ペルシア人が新しい都を建てても、バビロンがいまも世界の中心なのよ。肥沃な土地が河沿いにあるだけじゃないわ。善人でも悪人でも、ありのままに暮らせるからよ」

ジャミールが行く手を指さした。

霧が晴れ、川下に巨大都市バビロンがその姿を現した。一瞬、屋気楼かと思っただ。エルサレムもダマスコも比較にならなかった。形容する言葉が見つからない。太陽がほんの少し顔を出し、朝陽が地平線をおおい隠すように林立する高い塔の外壁の黄ばんだ面を明るく照らしている。背景に美しく広がる、数々の建物は何者にも押し

潰されない壮麗さを誇っていた。政治の中心でなくなったバビロンはかつての栄光を喪ったとザドクから聞いていたが、サライの目は繁栄を謳歌しているように映った。

……人間にこんなものが創れるのか！

この都の巨大さそのものが見る者を不安にした。また支配する口ンギマヌスは神のごとき存在であるような気がした。

偉大な英雄として語られるダビデもソロモンも、このような都市を築くことはできなかった。また、ペルシアの歴代の王たちが成し遂げたような広大な領土を支配下におく帝国を建てることもできなかった。自分はもしかすると、書物の中の狭い世界を全世界だと信じていたのかもしれない。学んだトーラーには、天に届こうとしたバベルの塔は神の手によって打ち砕かれたとあった。しかし、現実とは違っていた。たとえば、バベルの塔を壊されても、途轍もない広さと大きさの建造物を人間は築いている。そして、それは幻などではなくサライの眼前に厳然と屹立している。

「お前は、これを見せたかったのか！？」

ジャミールは黙って微笑んだ。

「今宵から、順々に、陛下のおそば近くに参れることになった」
しゃがれた老婆の声があたりに響くと、女たちの歓声が沸きおこった。

「諸王の王、アルタクセルクセス様のご意思は固いそうな。じゃがな、何年もこの日を待った者たちには不服だろうが、年の若い者から先にお目もじする」

女たちは口々に抗議した。

「それでは理に叶いません」

「なんのために、わたしたちは8年も待ったのでしよう!」

「不服な者は、婦人部屋を出ていいそうじゃ。陛下がじきじきにそうおっしゃたでな」老婆は容赦なく言った。

若い女の声が出た。「アルタクセルクセス様は、王として、正式に妃を娶るご決心をされたのでございますか」

別の女が、口を挟む。「コスマルティデネ様やアンディア様のようないではないのですね?」

コスマルティデネはアルタクセルクセスの弟、ダレイオスの妻であった。彼女は男子2人を出産。しかし、偉大な祖父の名を引き継いだダレイオスは幼少より愚鈍であったためにアルタクセルクセスが即位すると同時に暗殺された。もう1人のアンディアは兄のヒュスタスベスの妻であり、バガバイオスとパリサティス兄妹の母親であった。2人の女はともに夫の死後、ハーレムの住人となっていたが、アルタクセルクセスが彼女らのもとをおとなうことはなかった。「あとは磨きをかけるだけだわ!」

1人の女が声高に言うのと、女たちは勝手なおしゃべりを止めた。思うことは一緒だったようだ。人いきれに交じって、衣擦れの音や香油の容器の開けしめする音が湯殿に響いた。湯殿の緊迫した空気は、ヤマトが捉われている小部屋まで伝わり、はめこみ窓から外

の様子をうかがった。

女たちは顔のベールを剥ぎ、薄絹一枚の姿になると、隣り合う女には見向きもせず自らのからだをすみずみまで調べはじめた。もうもうと煙る湯気のせいで、ぼんやりとしか目にうつらないが、王の寝床に参内できることで、ハーレムの女たちは全身から熱気を発散させていた。

半時もしないうちに、従者の呼ばれる声がした。

「マナ。身仕度は整っておるか」

髪に香油を塗っていた女たちから羨望の溜息がもれた。それに呼応するように、マナの澄んだ声がひびいた。待つほどに、「ナンナ」という従者の声が聞こえた。

「姉さん！」

宦官らを殺めたことで、ヤマトは、ハーレムと隣接する牢獄に閉じこめられることになった。従わずに逃走することも考えたが、姉の身の上を案じて王の命に服するにしたのだ。しかし、その姉が、王の夜伽をつとめようとしている。

「姉さん！ 行ってはだめだ。そんなことをすれば、なんのためにここまでできたのかわからなくなる」

見違えるように着飾ったマナとナンナはともにふりかえることなく、湯殿から出て行った。

しばらく経つと、つぎの少女の名が呼びあげられた。女たちの美容熱はますます高まり、広間につづく湯殿の気配が異様な雰囲気に包まれた。ある者は顔の化粧だけでは足りず年老いた女に言って全身を揉み上げさせていた。素肌に香料を染みこませているのだろう。濃密な匂いが、鼻孔をおそった。

はめこみ窓から老婆の顔がのぞく。

「今から、わしの言うことをよく聞け」

「お前は？」

「陛下の姉君アミュステイス様の夫のようにならなければな」
ヤマトは無視した。

「メガビュゾスと申してな、陛下の御為に自ら剣を用いて働いたが、つまらぬことで勘気にふれて、炎熱の島へ追放されたのじゃ。5年の後に業病を患っておると偽って戻ってきたが、お前と同じように囚われの身だ。ここで一生、飼い殺しにされることになっておる」

「妻は夫の命乞いをしないのか」

「アミュステイス様には嫁ぐ前からギリシア人医師の愛人がいてな、もともとメガビュゾスのことなどどうでもよかったのだ。母后の命令で結婚してまでのこと」

腰のまがった老婆は踵をかえすと、湯気の間こうに二つ折りの姿を消した。

……どういうつもりだ？

老婆はおぼつかない足取りで宦官の従者を連れてもどってきた。ヤマトは手首を縛られると、牢の外へ引き出された。老婆は寝そべった女をまたぐと、ついてくるように言った。

「姉の命が惜しければ、暴れてはならんぞ」 霧状にけむる湯気の中を歩いて円形の浴槽の縁に立つと、老婆はヤマトを見つめた。

「お前は己れ自身を、信じておるか？」

そして、白くにごった湯を指さした。「陛下の信頼を勝ち得る方は一つしかない。神々の寵児であると証しせねばならぬ。バビロニア人の神官に勝る者であるとな」

老婆の話によると、義兄は武勇には優れていたが、神々に愛されていないかったという。「何をすればいいのだ」

「湯殿の水は、用水路から引きこみ、薪を燃して温めておる」

用水路は城外の運河に続いていると老婆は囁くように言い、「湯の吹き出し口の真下が、吐き出し口じゃ。すぐ上を熱湯が通るので、少々、熱いが、死にはせん。そこを潜り抜けると、用水路に出られる」

「縄を解いてくれ」

老婆はいきなりヤマトの背を小突いた。ふいをつかれたヤマトはバランスを失い、湯の中に沈んだ。

浴槽は深く、アリ地獄のようにヤマトをのみこんだ。老婆のひきつれた笑い声が聞こえた。「どうじゃ。深いじゃろ」

浮き沈みしながら湯のおもてに顔を上げると、老婆にかわって従者が顔を出した。

手首を縛られているヤマトは必死の形相で浴槽の縁につかまろうと両腕をのばした。が、従者は助けると見せてヤマトの手を払い湯に沈めた。

肺の奥まで、息をみたす余裕はなかった。排水溝の側面からだが触れると、焼けるように熱い。老婆の言う通り、高温の水が近くを通っているのだ。二、三度、湯の中で身体を回転させたが、熱い壁にぶち当たるだけだった。

ヤマトは頭から沈んだ。

老婆の言葉を信じれば、炉にふれないように排水溝を抜けると用水路に出るはずだった。

水面が上下し、老婆と従者の二つの顔が現れては消える。ヤマトは言い知れぬ恐怖に襲われる。胸の鼓動が、こめかみを打つ。冷静になろうとすればするほど、つなかれた手首に衣服がからまり、深みにはまっていく。水温もどんどんあがってゆく。

「……ヤマト……ヤマト……」

声のする方角に向かって顔を上げると、暗闇の中にかすかな光が見える。ヤマトは腕を頭の上にあげた。何かに引かれて、身体が上昇してゆく。

水面から顔が出た。

「だいじょうぶですか。あなたのことだから、死にはしないと思っています」

アルタクセルクセスの澄んだ瞳がそこにあつた。「あなたの額には、神のみ印がありますからね」

力尽きていたが、タイル貼りの床に引き上げられると、ヤマトは無意識に額に触れた。「目には見えません」

王はそう言うと、ヤマトの手首の戒めを解いた。

「わたししか知らない、この抜け穴まで千歩にも充たない距離です
しね」

「殺されるところでした」

「あの女には、あなたを殺すように言っておいたのです」

「……」

「あなたは生まれかわったのです。明日、あなたの超人的な力を侍
従長に話してやるつもりです。そうすれば、あなたの友人を解き放
つでしょう」

「そんなに簡単に事が運ぶと思えない」

「わたしがあなたの友人をもらい受けてきます」

王は濡れそぼったヤマトに黒いマントを着せかけながら、事の次
第の説明をばいいた。ヤマトは、「すべては明日」と言う王に従
うしかなかった。侍従長を操っているという影の宰相との確執に、
ヤマトやイサを利用しようとしていることは明白だが、王の真意が
どこにあるのか、推し量れなかった。

「ナンナとマナのことは安心なさい」

と王は約したが、それも目に見える確証は何もなかった。

足音がした。

「もう一度、もぐってもらわなくてはなりません」

「えっ！」ヤマトは驚きの声を発した。

「死人がここにはいてはおかしいでしょ」

地下の水路を通って、宮殿の外へ出よというのだ。

「やみくもに飛び込むではありません」

アルタクセルクセスはそう言って、透明の皮袋を懐中から取り出
した。

「これを使いなさい」と言う。

「なんです、これは」

「ラクダの腹でつくった息袋です」

王が言うには、

「中程で息継ぎをすればいいのです」

「なんのために？ どうやって使う？」

「あなたには、知恵というものが無いのですか」

皮袋の口に自分の口を隙間のないように接着させ、一気に中の空気を吸いこむとアルタクセルクスは言う。

「馬鹿げたこともためらってはなりません。ひと思いにやるんです」

「いままでに、ためした者はいるのか？」

「います。皆、息が続かずに死にましたが」 ヤマトは目を見開いた。

「早く」と王は急かす。「あなたならできます」

「これは遊びなのか」ヤマトは詰問した。

「かま焚きがこちらにやってきました。早く」

ヤマトは身にまもっているものをすべて脱ぎ捨てると、大きく息を吸った。

アルタクセルクスはけっして後ろを見なかった。ありのままのヤマトの姿を目にすることを王は何より怖れている様子であった。

人影が水面にうつる。

ヤマトはとつさに水中に身をおどらせた。水温が高いので寒くはなかったが、呼吸を止めることの苦しさは並大抵ではなかった。

息袋を口にあてがおうとしたが、つよく握り締めたために空気はたちまち泡になった。硬直する手足を動かすうちに、ふいに、湯殿の壁に描かれていた曲線が脳裏を横切った。記憶を頼りに迷路のように枝分かれした用水路の出口を探した。視界をさえぎる排水がどこからか流れこむ。

……王はもしかすると、出口を知るために……

疑心暗鬼にかられる心を抑えて、水中をかいくぐった。もしそうだとしても、死ぬわけにはいかない。ヤマトは水底にある隙間をくぐり抜けると、無我夢中で頭を上げた。鏡のような水面が割れると、松明の灯りが目を射た。小舟で待機していたアルタクセルクスが笑いながら手を差し伸べた。

「信じていましたよ」

王は事もなげに言ったが、ヤマトの裸身が水面に浮かびあがると、顔をそむけた。

「着替えてください」王の声はうわずっていた。

閉じこめること、解き放つことを通して、王は自分に何をさせるつもりなのか？

ヤマトには王の不安定な心理を理解することは不可能だった。もとより彼は、悩むことを止めていた。シンドウは悩み事で心を煩わすのは愚か者のすることだと言った。まず行動することで苦況を乗り越えよと教えられた。

ユーフラテス河のほとりにバビロンという名の都市が誕生したのは、紀元前19世紀のことだと言われている。エジプト王国が「オシリスのふくらはぎ」と呼ばれる内陸部から湧きだしたナイル河によって発展していったように、メソポタミア地方もユーフラテスとチグリスの2つの大河を利用して都市を形成していった。

遡ること紀元前4千年に栄えたシュメール人の都市国家ウルクがあった。紀元前2千年頃、シュメールは滅び、最後の王イビ・シンから百年後、バビロニア第1王朝の始祖スムアブムは、ユーフラテス河をまたいで不規則に広がったバビロンに首都を建設した。この地は東方と西方の諸民族の間の陸路および海路による交易のための商業上の物資集積場として適していた。また周辺の肥沃な土地を耕して農業ができることや、天然の要塞となる大河によって敵からの防護策をとりやすいことなどから商工業の中心となり、バビロンの船団はペルシア湾やそれよりもはるか遠くの海まで行き来していた。その後、バビロンは歴代の王によって拡大が繰り返される。都市を戦禍から護るために城壁や城郭、そして神殿などが築かれていった。当時、メソポタミアにおける都市国家にはそれぞれの都市を守護する神が定められていたが、百年後の6代目の王ハンムラビによって地域一帯が平定されると、バビロンの守護神マルドゥク神が古代オリエント世界の主神とされるに至る。これはハンムラビ王による、宗教を使った支配戦略であった。バビロンの守護神が神々の頂点に立てば、その神が守護するバビロンがメソポタミアの頂点であると宣言したことになる。かくして、法典が制定され、バビロンはさらなる発展を遂げる。都市を囲む城壁はますます強固なものとなり、神殿はより高く、より華やかになり、多くの人々を魅了し、引き寄せるようになっていった。

時代が下がって、ナボポラッサル王の代になると、他国に侵略さ

れたバビロンを奪還し、息子のネブカドネザル？世によってバビロニアの勢力はますます増大し、エジプト国境とシリア、パレスチナの沿岸部からペルシアに至る広大な地域を支配するに至る。ネブカドネザル？世の銘が刻まれた焼成煉瓦には数々の功績が記されている。空中庭園や竜や獅子の描かれたイシュタルの門の造営、エテメンアンキ（天地の基礎となる家）と呼ばれる巨大なジクラットを建設したと。43もある神殿の修復と拡張、また神像を建て、美しく装飾した。

ネブカドネザル？世はバビロンが永遠に生き続けることを神に願ったのだ。しかし、栄華を極めたバビロンは王の死後、キユロスの率いる軍隊によって一夜で滅んだ。かくして何世紀にもわたって覇権を握っていたセム人が変わって、アリア人による支配が始まった。バビロニア人は二度反逆したが、一度はダレイオス？世によって城壁が破壊され、二度目はクセルクス王によって掠奪の憂き目にあった。バベルの塔を破壊したのはクセルクス王であると言われている。

「いまある城壁は、ロンギマヌスによって修復されたものよ」「ジャミールはサライに教えた。

「すげえ！」

サライはバビロンの威容に圧倒された。

夏の宮殿を囲む城壁を右に見ながら、船は下っていった。

モルタルを使った煉瓦造りの突堤が目に入る前に、青いイシュタルの門が見えた。門と呼ぶには巨大すぎた。

前後二つの青い門のその向こうには、高層の建築物が延々と連なり、岩山や砂漠などの自然の背景が入り込む余地はない。

「ぜんぶ、人間の建てたものか？」

建築物の屋上に植物が見える。

「ほんとの空中庭園はもつと空に近いところに造られていたという話よ。ここにはじめて連れてこられたとき、あたしはほんの子供だったから、自分をほんとにちっぽけに感じたわ。神様の作った園の

ように思えたから」

「だろうな……」

サライとジャミールは、上陸すると、馬に乗り、「王権の玄関」とも呼ばれるイシュタルの門をくぐり、バビロン通りを南に向かって歩いた。

「バビロンは新市街と旧市街に分かれているの」

サライは呆気にとられていた。円形の建物の壁面には、都の歴史がわかるように戦いの図や人物が浮き彫りにされていた。

「これは、美術館よ」

「なんだ、それは？」

「彩色した壺や鉢やガラスの壘を、みなに見せるのよ」

「なんで？」

「あたしたちが乗ってきた船には、女や牡牛の像が積んであったの。ここに展示するためよ」

ユダヤ人の住む町で育ったサライには、ジャミールの話す内容が理解できない。ユダヤ人は人物を描くことも、像を刻むことも神の名によって禁じているからだ。

「何度も滅亡寸前までいったけど、バビロンはけっして滅びないわ」

「予言によると、背徳の町バビロンは滅びることになっているそうだけ」

「ユダヤ人は華やかな都市を背徳の町って言うのね。石工も金細工職人も商人も学者も、エルサレムのような町に住みたいと思わないわ。だって、なんでも祭司が決めてしまうんだもの。絵画も石像も許さないなんて、理解できないわ」とジャミールは言った。「ここは、人間のためにある町なの。宗教のために苦しめられないわ」

「おれはもう、何も信じじゃないが、お前の言うこともよくわからん」

「ペルセポリスもスーサも、バビロンに比べたら豪華だけが取り柄で、なんのたのしみもない都よ。だって、弓矢と乗馬が大好きなペルシア人の男たちが造った町なんだもの」「ペルシア人はこの町

に馴染めないのか?」「たぶんね」

サライは首を傾げるばかりだった。ユダヤ人とペルシア人が似ていると思えなかったからだ。

向こうの城壁がかすんで見えるほど長い石橋までくると、

「さてと、旧市街の隠れ家に行つて、身仕度を整えなくちゃ」

「隠れ家があるのか!　そこで何をするつもりだ」

「宦官になるのよ。バビロンでは、出世の近道よ」

橋を渡り、馬から下りると、ジャミールはラピスラズリの首飾りをサライの首にかけた。

「何すんだよ!」

「ダニエルの再来という触れ込みなら、すぐに王宮に迎えられるわ」
「お前、自分の言ってることがわかってんのか。どうかしてるよ。」

ダニエルは、お前に取りついてるんじゃないのか」

「熱に浮かされて寝込んだけどさ、頭がおかしくなつたわけじゃないわ。ここぞという時の芝居よ、芝居。あたしは巫女でも宦官でもお手のもんなんだから」

「お前とは付き合いきれねえよ。俺は、預言者のふりなんて絶対にしねえからな」

「だって、ユダヤ人の書物にだって詳しいじゃないの。あたしがやるより、ずっととうまく化けられるわよ。善は急げって、ハシムならきつと言つわ」

隠れ家に行けば、ハシムやケバルに会えるかもしれないと彼女は平然と言う。

「いつ裏切るかわからない連中にどうして、わざわざ会いに行くんだよ」

「あんたって、ほんとに頭が悪いのね。状況が変われば、密偵の心も変わるのよ。だいち、ケバルの手引きがないと、王宮には入りこめないわ」

「俺がなんで、王宮に潜りこまなきゃなんねえんだよ」

「イザヤの隠した契約の箱があるかもしれないからよ。ソロモンの黄金だって」

王の従者に変装したヤマトはアルタクセルクスとともに松明で赤々と照らし出された水門まで悠々と歩いた。街路に入ると、3、4階建の家屋の密集した地区に出た。そこには、光の塔が立っていた。

「砂漠でよく見る永劫の火を利用して灯しているのですよ」アルタクセルクスは声は弾んでいた。「バビロニア人の学者は、わたしが驚くようなことを考えだします」

光の塔から、獅子が人間を組み敷く巨大な石像のそばを通りすぎ、宮殿を巡る外苑の運河を王自らが小舟をあやつって越え、冷気のためだよう巨大な石橋に降り立った。

「バビロンは人口の増加にもなつて、市街地が造成されたのです。この長い石橋を通れば、旧市街です」

警備の兵士はお忍びの王に気づいても、あらぬ方角に目をそらし姿を消した。こういうお遊びが、はじめてでないことが兵士の振る舞いから知れた。

「以前、ネブカドネザルの時代には王宮は旧市街にありましたが、今ではまったく使われていません。わたしは貯蔵庫や図書館のある新市街の王宮にいつもいます」

石橋を渡り、縦横にのびた街路をたどっていくうちに、この都市が多くの人を抱えながらも隅々まで整備されていることがいやでもわかる。

建物や、屋根のかかった回廊などが不規則に集まったところに達すると、低い塀をめぐらし、その表に門を持った一軒の家の前でアルタクセルクスは立ち止まり、戸を叩いた。

「おはいりなさいませ」

聞き覚えのある押しつぶされた声が内側からしたと思うと、門を外す音がした。

「陛下のおなりを、いまかいまかとお待ちいたしました」

顔を隠した男はなつかしそうに言った。その声はハガイだった。どういうことかと、理由を問いただすまえに、ヤマトは半裸体の男たちに取り囲まれた。煤で黒くした顔面は彼らが何者なのか判別できないようにしていた。

「1万の不死隊の中でも、わたしがもつとも信頼をおく戦士たちです」

とアルタクセルクセスはヤマトに言った。男たちはまだ非常に若く、痩せて、物腰が猛々しかった。ヤマトが彼らの様子を注意深く眺めていると、王はヤマトの肩を抱いて彼らに言った。

「この者は、平気で人を殺めることができる」

王の言葉にも、若者たちは硬い表情を崩さなかった。

「下働きのハガイと申します」

ハガイはヤマトに対して、はじめて顔を合わせたように丁重に身をかがめ、頭をたれた。

王はそれを見て、

「下々の者だが、信用できる」

と言った。

「ご安心くださいますように」

とハガイは王の言葉を引き取ると、かまどにのった大型の鍋のそばにヤマトを座らせた。

ヤマトはじつと相手の目を見つめた。

ハガイは声をひそめて、「あなたは陛下の客人です。下男のわたしに口をきいてはなりません」

ヤマトも声を低めた。

「王とマナは周知の間柄なのか？」

ハガイの主人がアルタクセルクセスとすると、アルタクセルクセスとマナとは周知の間柄ということにならないのか。ヤマトの疑問に答えるかのように、ハガイは素早く首を横にした。

若者たちと何事かしきりに討論していたアルタクセルクセスがか

まどのそばに来た。

「彼らと話していたのですが、あなたこそ、火の神のみ使いにふさわしいということになりました」

ヤマトが黙っている、王は、

「火の神の予言はすばらしい。イスラエルの神の予言のいくつかは火の神から盗んだものです」

ハガイは王に気づかれないうちに焼けただれた唇をゆがめると、ひと山の薪をかまどにつっこんだ。

王は身振りを交えて言った。「ヤマト、あなたは知っていますか。バビロンは物語の宝庫です。あなたの国、シユメールから引き継いだものですが」

王は腕を広げ、「学問の場があり、あらゆる遊興の場がここにはあります。人々は働くことよりも物語を人が演ずる劇場に出かけることに生きがいを感じています」

「ギリシアにも大きな劇場があると聞きおよびました。こことは比べものにならない小さな代物でしょうが」

ハガイが遠慮がちに呟くと、王の顔から赤みが消えた。

「父の率いる軍勢がなぜ、サラミス湾でギリシア軍に敗れたのか、わたしは物心がついてからずっと考えてきた。戦力はわが軍が勝っていたのです」

敗けるはずのない戦闘だった、と王は唇をかみしめた。

そばに控えていた若者たちも昨日のこのように口々に憤った。

「神々への祈りが足りなかったのだ」

「いや、敵の將軍が姦計をもちいてペルシア軍を狭いサラミス湾に誘い込んだのだ。卑怯なギリシア人めっ」

「われわれ不死隊が上陸できていれば敗れるようなことはなかった。外国人ばかりが乗り込んでいた軍船は役に立たなかったそうだ」「連中は、ペルシアのために戦う気などなかったのだ」

ギリシア軍はアテナイとスパルタの連合軍の通弊で、作戦会議に明け暮れるばかりで決戦を先送りしていた。ペルシア帝国を目の前

にして逃げ腰の自軍を憂えたギリシアの知将テミストクレスは自らの従者をペルシアの艦隊につかわし、つぎのように伝えさせた。「ギリシア海軍はすでに怖じけづいて、目下逃走を企てつつあります」と。

欣喜躍雀したクセルクセス王は、ギリシア軍を包囲した。が、翌日の決戦で大敗を期したのはクセルクセスの率いるペルシア軍であった。テミストクレスの流した味方を欺く情報にペルシアの王は見事にひっかかったのだ。

その間の事情をアルタクセルクセスが預かり知らぬわけがない。ところが、王はそのことにはふれず、「包囲していた同盟軍の傭兵に忠誠心が欠けていた」と言う。

若者たちはうなずき合った。われわれさえいれば、勝利できたのだと。

「用意がととのいました」

ハガイが声をかけると、若い王は火のそばに若者たちを集めた。そして、満足そうに言葉を投げかけた。

「お前たちのような兵士を家臣をもち、わたしは心強く思っている。若者の一人が立ち上がった。「王への愛と神々への信仰の薄い民に、勝利はのぞめません」

ハガイは大鍋に水を注ぐと、煮えたぎる湯をうすめた。若者たちに湯浴みをさせるためのもようだった。王は、燃え上がる炎に食い入るように見つめながら、イシュタルの女神は癩癩持ちでわがままで後先のことを考えもせず、怒りに任せて乱暴すると吐き捨てるように言った。メソポタミアにおいて広く信仰されているイシュタルの女神を、アルタクセルクセスが疎んじていることをヤマトをはじめて知った。シュメール人の言い伝えである英雄ギルガメッシュも彼女を愛したが、そのために親友のエンキドゥを死なせる結果になった。そのことを踏まえて、王は言っているのだろうか？

「再度、戦いを挑むべきかどうか……」王はヤマトを一瞥した。自信なさげな口調だった。「ギリシアの都市国家はそれぞれ政策が異

なり、戦いにおいても、どの国が指揮をとるかで絶えずもめていると聞き及びます」

「そんなことは自明の理だ。もっと斬新な考えはないのか」

「アテナイとスパルタのぞいて、戦力が充実している国はそう多くありません」

「どうすればいいと思う」

「わたしは若輩で指揮官の経験もありませんが、もっとも効果的な方法は、ギリシア人の傭兵を雇うことです。それによって、彼らの戦略を自ずと知れましょう」

「連中に仲間を裏切れと言うのか」

「彼らはそもそも統一国家ではありません。ペルシアという大国に対抗して一時的に同盟を結んだにすぎません。恩賞さえ弾めば、忠実な部下となるでしょう」

「金で動く奴など信用できぬ」

「金でなければ、何をもって相手の真意を計るのです」

若者たちは鍋の湯を少量汲み出すと、それで顔と手を洗いはじめた。祈りを捧げる時間だという。王が洗い終わると、鍋はおろされ、ハガイの差し出す香料がかまどの火に王の手で投げこまれた。それから、束ねられた牛の皮と火種の入った壺を王は若者にもたせると、ハガイに見送られ建物の外に出た。

王も若者たちも人目につかないように黒い頭巾を被っていた。ヤマトも従うよう命じられた。

王を先頭に広い街路を南へむかった。ヒタヒタと聞こえる足音に怯えてか、夜の通りに人気はなかった。ほどなく1基の石の台座のある小高い丘に着いた。大きな重い泥煉瓦を積んだ台座で4段の階段状の上部を支えており、ていねいに漆喰が塗られている。若者が種火を使って火を起こすと、台座は神聖な場所に早変わりした。

アルタクセルクセスは右腕をぐっと伸ばすと、牛の皮を広げた。

「万物の創造は善の神と悪の神との戦いの結果である」と読み上げた。

こういうものが一二〇〇枚あるという。皆は頭を深く下げると、それぞれが口の中で何事か祈った。アルタクセルクセスは王宮にいるときとは違ってかわり、

「教組ゾロアスター（ツアラトウストラ）は、教典にこう記している。空気、水、火、地の四元は、神聖な元素であり、これを汚してはならないと」

ヤマトは、黙って聞いた。アフラマズタとゾロアスターとは同一神なのか、異なるのか？

「火は、神聖であり、神の息吹である。祈れ、祈るのだ！」

あなたも火の神に祈りなさい、とアルタクセルクセスはヤマトに命じた。その時、一人の若者が王に囁いた。

「陛下、夜伽の時刻が迫っております。お急ぎくださいませ。宮殿の宦官どもが焦っていると思われませう」

「わかった」

「従者どもが騒ぎ出しては母后に知られます」

「また、明日、来よう」

彼は王を急かし、石橋のあった北の方角に向かって歩きだした。

若者らはアルタクセルクセスの前後を固めるようにして街路を行っていた。後ろを歩いていたヤマトに寄り添ってくる若者がいた。

「ヤマト様、お忘れでございますか？ 監察官の部下だった者です」

さつき、王に囁いた男の声だ。

「わたしの名はシユルムと申します。ご記憶にないかもしれませんが、乳母のアイナの息子です」

監察官に矢を射られたとき、けっして動くなと助言してくれた若者のいたことを、ヤマトは思い出した。頬に傷があったはずだ。

若者は頭巾をすこしずらして、傷跡を見せた。「あの時は、お助けできず申し訳ございませんでした。今後は命にかえて、あなたをお守り致します。シユメールの再興のために……」

不死隊の一人からそのように言葉を耳にするとは思ってもいなかっ

民族を融和させるために、初代のキュロス王は民族解放令を出し、他の民族の宗教を認めた。しかし、民族とは不可思議な集合体で、人はどれほど同族を憎悪しようと、己れを育んだ種族へと回帰していくのだ。

ジャミールはサライをともなつて、一軒のあばら家に入つて行つた。そこにハガイが住んでいるとは夢にも思つていなかったようだ。

ハガイのほうも、突然の訪問者に驚いたようだった。名前を告げ、ジャミールの前に額突き、手のひらを上にむけた。のっけから焼けただれた顔面を見せられたサライは、げえっと叫び声をもらした。ジャミールは冷淡な眼差しでサライを振り向くと、冷淡な口調で「静かに」と叱責した。それからハガイに向き直り、

「この家はケバルという男の持ち物のはずだが」とジャミールは言つた。

「さようでございます。お貸しくださるということでした……」

「わたしはケバルとは友人なので、この家に泊まらせてもらう」

「あなた様のお名前は……？」

「ジャミール」

「もう一人のお方は？」

「ダニエル」とジャミールは即答した。

サライは目をむいたが、ハガイは後ろにのけぞるほど驚いたようだが、

「あまりによく似ておいでなので、お目にかかった瞬間にそうだとわかりました」

「そんなはずは……」

口ごもるサライにハガイは涙ながらに言った。「わたしめをお忘れでございますか」

「記憶にない」とサライはなんのためらいも見せずに返答した。

「さようでございます。あなた様は神にもひとしいお方、わたしごときがご尊顔を拝することなど不可能でございました。それでも、わたくしはどうしても、お目にかかりたくて幼くして宦官になり、あなた様がダレイオス王のもとにおいでになられたおりにひと

目だけ、柱廊の影からお姿を拝したことがございます。ああ、このような奇跡がこの世にありましようや」

「あなたが、餓鬼の頃に会ったんだったら、俺は今頃、爺いになってねえとおかしいだろ？」

ハガイは自分の衣を引き裂き、かまどの灰を頭からかぶった。

「ダニエル様は歳をとられないと存じております。ユダヤ人の誰一人として、ダニエル様が老いて死んだなど思っておりませぬ」

サライはジャミールに耳打ちした。「この爺さん、ちよつといかれてるぜ」

「ダニエル様、いままで何処におられたのでございますか？」

「どこつて……？」

「エルサレムでございますか」

「食事を頼みたい」とジャミールが口をはさむ。

「ただいますぐに」

ハガイは頭巾で顔を隠し、鍋をかまどにのせ、肉の塊を湯の中へ放りこんだ。

「とうとうお目にかかることができました。生きていてこれほどの喜びにふたたび巡りあえようとは！」

ハガイの興奮はなかなか納まらなかった。「青い目に黄金色の髪に変わられても、わたしめにはあなた様だとわかるのです」

額帯で隠した奴隷の焼印を、見せるべきなのだろうか？

「あなた様の書き記した書物を、わたしは暗記するほどに読みました」

サライとジャミールが食事をする間も、ハガイの話はダニエルことばかりだった。

そして、ハガイは2人の客のために敷物を敷き、寝床を用意した。

サライはハガイと名乗る男の狂信的な言動にユダヤ人特有の強い闘争心と克己心を見た気がした。

ハガイは火にそばに座ると、

「この国では、貧しい者も贅沢に食い散らかす。神の恩寵によって、

食物が得られるとわかっておらんだ。王が食物を与えてくれるものと信じておる。愚かなことだ」

サライは眠い目をこすり、「神のご意志で飢えもするけどな」

ジャミールは寝首をかかれてもいいのか、すぐに眠ってしまった。「エルサレムの神殿を夢にも見たことがないのです、ずいぶん長く生きてきたにもかかわらず」とハガイは話し続ける。「わたしのほんとうの名はモデルカイと言います。同じ宦官のラビ・エズラよりもわたしのほうが、出世をしたと言っても、信じないでしょうね。しかし、真実なのです。わたしはこの国の宰相にまでのぼりつめました」

「宰相に？」

「むかし語りになります、わたしの従妹にエステルという名の少女がいました。美しい娘でした。誰もが一目で心を許しました。先の王までも……。バビロンに暮らすイスラエルの民には、ふた通りあるのです。捕虜の末裔として苦難を耐え、ヤハウエへの信仰を守り通すか、出身国を偽り、この国で名誉ある地位を得るか、成人する前にそのどちらかを選択しなくてはなりません。わたしの両親は後者を選んだのです。ユダヤの多く住む地区を出て、名を変え、ペルシア人の生活を真似たのです。信仰さえも表向きは真似たのです。そうして苦勞の末に、王宮に出入りできる機会を辛抱強く待ちました。待つだけではなく、両親はわたしを家から出しました。学問によって権力の中枢に近づく道をのぞんだのです。バビロンからササにうつり、一〇年間、エラム人にまじってゾロアスター教の神官のもとで修行しました」

ハガイことモデルカイは、過去の辛苦を昨日のことのように語った。それは想像を絶する出来事の数々で聞く者の心胆を寒からしめるはずの物語であったが、サライの心にはなんの感慨ももたらさなかった。単なる自慢話にしか聞こえなかったからだ。

ハガイは物語った。

アルタクセルクセス王の父、クセルクセスの治世の第三年（紀元

前四八四年頃のことだった。

王はギリシア攻略に先立ち、作戦会議を開き、自らの帝国の役人のために盛大な宴会を催した。それは一八〇日間にもおよんだといわれている。

城下の人々すべてのためにも豪華な宴が設けられ、七日間続いた。同時に、王妃アメトリスも婦人部屋の女たちのための宴会を催した。王は自分の富や栄華を誇り、ぶどう酒を飲んで上機嫌になり、后の中でももっとも身分の高いアメトリスを呼びつけた。イシュタルの女神と並び称されるその麗しさをもるもろの民や臣下に見せようと求めたが、気位が高く高慢な王妃は拒んだ。ダレイオス王の娘婿オタネスの娘であったアメトリスは、父親が王を助けてイオニアの反乱を平定したという強い自負があり、クセルクセスの命に従わなかった。

王は面目を失った。悪い手本は、帝国中に王の恥をさらすと指摘する廷臣たちの助言を受けたクセルクセスは、アメトリスを王妃の地位から退かせるために、スーサの女たちすべてに、「その所有者に敬意を表する」ことを求めた文書を出した。むろん、誇り高いアメトリスは署名しなかった。「わたくしは誰の所有物でもありません」と明言した。

怒り狂った王は事務官たちを任じ、帝国内の美しい処女たちを探しだして、スーサの城に連れて来させた。王に正式に紹介する準備として、王宮内で美容処置を施させることにしたのだ。アメトリスより高貴な女を見つけることは不可能だった。せめて、彼女より若く美しい女をと、王は望んだ。王妃を辱めるにはそれしかなかった。娘たちの中に、エステルがいた。スーサ城の宦官の一人にすぎなかったモデルカイはそのことに気づくと、彼女にユダヤ人であることもだが、彼の従妹にあたることも口止めした。

モデルカイは娘たちの監督者である、宦官のヘガイに面会し、エステルにだけこっそり噂にきく特別の美容術を施すように頼んだ。ヘガイはエステルをひと回りさせると、こう言った。「死んだほ

うが楽だと泣き叫ぶことになるがいいのか」

エステルは王の眼鏡に叶うためなら、どんなことでも耐えると答えた。

「どの娘もはじめはそう言う。しかし、いざとなるとたちまち怖じけずく」

永年、王に取り入ろうともくろんできたヘガイは失望の連続だったと言った。どんなに美しい乙女を差し出しても、王はすぐに飽きてしまうのだという。アメトリスはすでに6人の子をなしていたが、容色が衰えないばかりか、王より聡明であった。父親に似て女ながら、戦略家だった。

「王宮の外に住む女たちは、美容術というと化粧のことだと思っている。わしに言わせると、お笑い草だ。話術において、王妃に優る女はいない」

エステルはヘガイの嘲笑を耳にすると、身につけていた物を残さず脱ぎさった。

「王を狂わせることが、あなた様の手にかかればできると聞いております」

エステルのその時に見せた表情を一〇年経つたいまも、けっして忘れないとモデルカイは言った。

ヘガイは全裸のエステルを仰向けに寝かせると、見たこともない金具を埃のかぶった棚から取ってきた。

「……手術のあいだ、エステルは、声ひとつあげなかったのです。一三の少女がです。信じられますか？」

モデルカイは無表情のサライを覗き込むように見つめると、「クセルクセスは引き寄せられました。その身に受けたおぞましい処置などなくとも、エステルなら王妃となったでしょう。だが、ヘガイもわたしも完璧を求めたのです。美貌であること、従順であることのほかに、戦いに臨む王をなくさめるためには、故意に淫らであることが新しい王妃には必要だったのです」

ヘガイとモデルカイの思惑通り、エステルは王の目に止まり、妃

の一人となった。

「夢の第一歩でした」

戴冠式の日、鼻高々のヘガイを先頭に側近たちが王と王妃を取り巻く中、末席のモデルカイはエステルを誰よりも喜んだ。

王国の安泰を象徴しているかのような、エステルの美しさにモデルカイはおのれの将来を託していた。しかしそののち、王の率いるペルシア軍はギリシアの同盟軍に敗れるという事態に至った。

宮廷の動揺はおおきかった。エステルにその責めがあるように言う側近までいた。王は、王妃との寢床を恋しがり、勝利を焦るあまりに戦況を見誤ったと、まことしやかに噂されたのだった。

王は失意落胆して、スーサ城に戻ってきた。めっきり老けこみ、王位を息子に譲ると言い出した。

モデルカイの不安は、日を追って増した。エステルには子供がなかった。この機に乗じて、アメトリスが自分の意のままになる幼いアルタクセルクセスを擁立しようとする動きを彼はもつとも恐れたのだ。

そこで、エステルに負け戦の因があると噂を流したと思われる、高官たちの名をモデルカイはエステルに耳打ちした。

エステルもまた、宮廷内の不穏な空気を感じとっていた。迷うことなく、モデルカイの注進を王に伝えた。

「王を暗殺しようとするたくらみを聞き及びました」

「だれがそんな戯言を申すのだ」

「モデルカイと申す者にございます」

エステルはモデルカイに言われた通り、彼の名を口にしました。

「その者は、クセルクス様こそ王の王たるお方と申しております。権威ならぶ者なき王なくして、帝国は1日たりと立ちいかぬと申しております」

ほどなく、名立たる高官の多くが、木に掛けられ処刑された。

4年後、かつてのユダ国の王、サムエルに打ち殺されたアマレク人の王アガクの子孫、ハマングスーサ城の首相となった。クセルク

セスはハマンを重用し、宮廷内のすべての者たちにハマンの前で身を屈めるよう命じた。その中に、モデルカイも含まれていた。

しかし、モデルカイは、イスラエルの神ヤハウエの敵たちの子孫にそのように敬意を表することを拒んだ。ハマンは激しい怒りに満たされた。モデルカイがユダヤ人であることを奴隷をつかつて探り出すと、陰謀を巡らした。

「ハマンの差し向けた密偵に、祈りを捧げているところを見られたのです」

モデルカイは醜くひきつれた唇をゆがめて、イスラエルの民であることを誇りとしながら、それを周囲に気取られてはならない苦しみは言葉では言い尽せないと苦しげに言った。「ハマンはヤハウエの敵です」

モデルカイはそう言って、火に薪をくべた。

「名門の出だという理由だけで、王の愛顧を受け、文字もろくに読めぬ男にわがもの顔に城内を歩かれては、何十年にもわたる苦労が水の泡だと思いませんか」

捕虜としてバビロンからペルシアに連れて来られたイスラエルの民は、年月を経てこの国で重きをなしつつあった。

文字と計数に長けた民族なので、商いに、役人にと、頭角を現した。しかしそのことは、否応なく、ペルシア人の反感をかった。ハマンは、モデルカイとユダヤ人すべてを根絶やしにするまたとない機会と見て取った。

彼は、宰相の立場を利用して、ペルシア人と偽っていたモデルカイをはじめ、商いの不法行為のかどでユダヤ人を訴え、彼らを滅ぼすことを書面で命じるよう王に願い求めた。

クセルクセスは同意した。王の指輪で印を押された命令書が帝国内の至る所に送られ、アダル（2月頃）の一三日がスーサに住むユダヤ人の集団虐殺の日として定められた。その法律について聞くや、モデルカイをはじめ、ユダヤ人はみな粗布をまとい、灰をかぶって嘆き悲しんだ。

断食と泣き声が各地に起こった。

ユダヤ人の陥っている苦境についてモデルカイから知らされたエステルは、王に彼をとりなすことを躊躇した。招かれないのに王の前に出る者は死刑の処罰を受けたからだ。

「このような時のために、わたしはいままでお前を護ってきたのだ」
モデルカイはエステルをかき口説いた。

エステルは3日間断食し、王妃としての最上の衣装を着けて王の前に出た。

王は黄金の杓を彼女に差し出し、その命を取ることを容赦した。そばに控えるハマンにも、エステルはほほ笑みかけると、

「お二方を宴にお招きしたいと、まかりこしました」と申し出た。

ハマンは大喜びで承知した。エステルのように美しい女を間近で見たのははじめてだったのだ。

ハマンは夢見心地で王のもとを辞すると、王宮の門のそばに処刑の決まったモデルカイが立っていた。

モデルカイは命ごいどころか、すぎる素振りも見せなかった。

ハマンの高揚した気分はたちまち怒りに変わった。そのことを妻や友人に話すと、彼らはモデルカイを高さ50キュビット（1キュビット＝550?）の杭に掛けよ、と口々に言った。

「アマレク人は悪魔の手先なのです」

モデルカイは眉を寄せ、王はその夜、お眠りになれなかったと言った。

王がエステルを寢所に誘うと、彼女ははじめて拒んだという。

「恩に仇で報いるお方にこの身を託すわけにはまいりません」

涙ながらに彼女は言った。王がわけを質すと、エステルは、「モデルカイは、謀反人の名をわたくしに告げて、そのお命をお救い申しあげたではありませんか」と答えた。

「そんなこともあったか」と王は小首を傾げた。忘れた素振りをしたのだ。

次の日、ハマンは虫が花に引き寄せられるようにエステルの催す宴会に出向いたところ、思案顔の王が彼を待っていた。

王は彼に訊ねた。

「王を喜ばせる者には、どのように報いるべきか」

ハマンは王が自分のことを言ってくれているのだと思い、気前よく榮譽を施すための手順をのべた。ところが、王は命じた。

「イスラエル人、モデルカイにそのようにせよ」

ハマンは帝王のような豪華な衣装をモデルカイに着せ、彼を王の馬に乗せ、その前で、「宮廷一の王の守護者」

と呼ばわりながらこれを導いて、城下の広場をぐるぐる回った。

ハマンの妻や友人は慰める言葉もなかったという。

「馬上のわたしは高笑いしたい気分を抑えるのに苦労しました」

モデルカイは、焼けただれた頬を震わすようにして笑った。

「わたしに逆らった時から、ハマンの破滅は定められていたのです。神の敵対者にわれわれを滅ぼすことはできません。神がお許しにならないからです」

嘆きながら王宮にもどったハマンは、美しい王妃の口から王にとりなしてもらおうと、婦人部屋にしのみこみ、彼女にひれ伏した。

寝椅子に腰こけていた王妃は向こう向きになった。ハマンは思いあまつて、王妃の寝椅子ににじり寄った。寝椅子に身体をのせ、哀願した。そこへ、庭にいた王が入ってきた。王は激高し、ハマンがモデルカイのために用意した杭に彼を掛けて処刑するように命じたのだった。

「王はハマンの全財産をエステルに与えました。王妃がわたしとの間柄を正直に明かしたにもかかわらず……」

モデルカイは涙を流し、過去をなつかしむ。垂れ下ったまぶたをぬぐい、

「王につぐ宰相の地位と、陛下の認印つきの指輪を、王はくだされたのです。王はわたしがどういふ人間かようやく気づかれたのでございます」

エステルはふたたび、命の危険を冒して王の前に行き、ユダヤ人を滅ぼすという書面を無効にしていたきたいと願い出た。

しかし、「ペルシアとメディアの法令」は廃止できない。

そこで、王はエステルとモデルカイに、新しい法令を書き記し、王の指輪でそれに印を押す権威を彼に与えた。

書面にしたこの命令は、ハマンが出した以前の命令と同じような仕方帝国の至る所に送られ、ハマンの法令が効力を発するその当日、イスラエルの民に敵意を示そうとする民族や管轄地域の軍勢をみな、小さい者も女たちも滅ぼし尽くし、殺し、その財産を強奪する権利を彼らに与えられた。

アダルの月の一三日（2月の中旬）、イスラエルの民に齒向かう者は一人としてなかった。スーサ城では八〇〇人、帝国内では七五八〇〇人のペルシャ人が殺された。そのなかには、杭に掛けられたハマンの息子一〇人もいた。

「翌々日の一五日は安息日でした。難を逃れたわれわれは盛大な祝宴を王宮の庭で開いたのです。そして、歌をうたい、喜びに浸りました」

ああ、とモデルカイは溜息をもらし、鼻水をすすると、苦渋にみちた表情で懐中から書状を取出した。

「ダニエル様、あなたにわたしとエステルの物語を託したいのです」と言った。

一〇年がかりで書き記した、とモデルカイは拳に力をこめて言った。

「いずれ、エルサレムにお帰りになられるであろう、そのおりに、ラビ・エズラに手渡してもらいたいです。あの者は、膨大な数の巻物とパピルスを集めておるそうです。それらに目を通せば、われわれの過去と未来のすべてが推し量れると伝え聞きました」

エルサレムの学びの家で、ラビ・エズラに会ったことを話した。

「そうか、そうでございましたか！ これこそ神の啓示！」

「エルサレムに帰るかどうか……約束できねえぜ」

モデルカイは書状をサライに押しつけた。「わたしはあなた様を信じております」

「あんたやエステルが王の死後、どんな目に遭わされたのか、おれは知らないし、知ろうとも思わない。それでもいいのか」

「アメトリスの娘婿メガビユソス、宦官のアスベミトス、それに軍の司令官。彼らに、クセルクス王は寝室で惨殺されました。そして、わたしは顔を焼かれ、エステルは水牢に……」

「王に取り入ろうとするからそんなことになんだよ」

「神はわれわれと結んだ契約をかならず果たしてくださいます」

「俺は、神のためになんか生きない。おれ自身のために生きるんだ」
「神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終わりまで見極めることはできない（伝道の書3；

11）」

モデルカイは、ジャミールを王宮に入れるように手筈を整えると言った。

「俺は、あんたがエステルを不幸にしたような真似はけっしてしない」

次の日の早朝。

もつとも北にあたる夏王宮の一室に閉じこめられていたヤマトはシユルムとともに霧のかかった運河に小舟を浮かべると、城外へと急いだ。さるお方のお召しだとシユルムは言った。イサが釈放されるためなら、どんなことでもするつもりだったが、王に弄ばれるよくな前日の出来事を思うと、アヤイナの息子が使いであつても、信用できないと思つた。一度は、行かないと断つたが、王の命令ではないと聞き、応じることにしたのだ。

運河に沿つた土手に灰色のひとこぶラクダが立つてじつと動かない。百年も前からそこにいるようだった。

ヤマトは川岸を見回した。ラクダの持ち主は誰だろう。

金色にきらめく王宮の屋根の見える辻と向きあう運河に、小舟がさしかかったところで、シユルムは櫂を置いた。

対岸に、ふらりとケバルが姿を見せた。酷薄な目つきも赤毛も変わっていない。

ケバルはヤマトを見てとると、瞬時に槍を投げた。

槍は、ヤマトの命を奪いかねない速度だったが、小舟の底に突き立った。

ヤマトとシユルムは小舟から土手に飛び移り、ケバルのいる四辻に向かった。

夜が明けきらない時間だったが、2人の足音は地面が吸い込んだ。

「なぜ、ここにきた？」と先にケバルは訊ねた。

「優秀な水先案内人を探しにきた」

「で、王宮にいるわけか」とケバルは揶揄するように言った。

「いつまでも留まる気はない」

「ロンギマヌスに取り入つたんだろ？」

彼はシユルムに目配せをし、「こいつが手足になつて働くから、

使つてやつてくれよ」と言った。2人は観察官のもとで知り合つたのだらう。

ケバルは、ソロモンの黄金の在処を探つてほしいと言う。

自分には必要がないとヤマトは言った。

「お前には、欲がないのか」とケバルは言った。

「欲……？」

「黄金があれば、思いのままに生きられる」「人の気持ちを換えられるというのか？」　思いのままにしたいと考えたことが、これまでに1度でもあつただらうか。姉のナンナと別れて以来、ジャミールやサライと出会い、シンドウに剣を学び、イサとともに旅をしてきた。怒りを強く感じることも、長く悲しみに浸ることも、喜びを噛みしめることもほとんどなかった。片方の視力を失っている間も、その目がふたたび開かれ、ティアマトの子だと言われても、何かが欠けたままだつた。ようやく会えたナンナは、王の后になりたいと言う。もはや、欲するものなどない。

「王宮内のどこかに黄金は隠されている。契約の箱もな」

「王のものなら、王の手の中にある」と、ヤマトは言った。

ケバルは首を横にした。「ネブカドネザル王の部下だつたラブサリスが隠匿したと言われている。あとからバビロンにやってきたペルシア人が在処を知るはずもない。ユダヤ人はイザヤが隠したとも言つてゐるが、願望に過ぎない」

彼は、監察官の命を受けて、パレスチナの北から南まで捜し回つたが、その痕跡さえ見つけられなかつたと言う。

「宝探など興味はない」

「網の目のように張り巡らされ水路のどこかに隠されているはずだ。しかし、至るところに鉄柵があつて、簡単に通りぬけられないようになっている。王宮に盗みに入った者はかならず溺死している。お前のように通りぬけた者はいない」

「偶然だ」とヤマトは言った。

「どんなことにも偶然はない。お前がシュルムに出会つたことも、

な

「命令なのか？」とヤマトは訊ねた。

「自らの意志です」とシユルムは否定した。ケバルは言った。「ロンギマヌスは気が変わりやすい。お前が力を貸せば、王の寝所からでも盗みだせる」

シユルムが口をはさむ。「不死隊の一員のような顔をしています。私はシユメール人です。黄金を手に入れ、ウルクの都にあった赤色神殿を再興しましょう。城壁こそ失いましたが、ウルクはいまも同じ場所にあるのですから」

ギルガメツシュが建てた都の神殿は血の色をしていたという。

「見たことがあるのか？」

「ヤマト様はお忘れになっただけです。私の母アヤイナのことも覚えておられませんか？」

「私たち姉弟は、ウルクに住んでいたのか」「ご姉弟が連れ去られたあと、焼き討ちにあっっていなければ、お屋敷はいまもあるはずですよ」

記憶の彼方で薄れていくばかりの光景が、現存しているかもしれないとシユルムは告げる。

「お屋敷は城壁の外にあったアキートウ神殿のすぐ近くでしたので難を逃れました」

「お前は、私の両親の行方も知っているのか」

「それは……」シユルムは口ごもる。「私たちシユメール人は、ウルクが占領されたのち、ユダヤ人と同じように兵士や奴隷にされて各地に散らされました。ただし、王族の生き残りの子孫は、同胞の手でひそかに守り育てられたのです」

ケバルは、お前はご大層なご身分なんだなと揶揄した。

シユルムの表情は険しくなった。「ペルシア人の犬になったサカ人に、シユメール人の心ははわからぬ」

「お前と俺のどこがちがうと言うんだ。不死隊の一員になるには、ペルシア人かメディア人に定められている。お前がメディア人だと

偽ることができたのは、誰のおかげだと思っっているんだ」

ケバルは吐きすてると、「王の寵愛を失わないうちに王宮の地図でも手に入れる」

「あんたの指図はうけない」とシュルムは頬を赤くして言った。

王の寵愛という言葉に、ヤマトは不快な思いを抱いた。王宮に入り、ペルシア人同士になると、彼らの習慣には驚かされた。他の部族が恭順の意をこめて手を唇に当て身を屈める跪拝礼は何度も目にしたことはあったが、ペルシア人は気心の知れた男性同士が出会ったおりのあいさつに、口と口をつけていた。人前であつても平気だった。

「選ばれた不死隊は、王の側女だつてもつぱらの噂だぜ」

シュルムはケバルに殴りかかろうとした。ケバルは身をかわずと、ヤマトに言った。「以前、言ったことがあつたな。いつの日にか、お前の命令に従う日がくるかもしれないと、な。どうして俺ともあろう者が、そんな戯言を吐いたか、わかるか？ お前には人間なら誰にもあるべきはずのものが欠落しているからだ」

「あるべきもの？」

「戦つて何かを奪いたいという闘争心がないんだ」

「……？」

「だから、躊躇いなく人が殺せる」

「お前も大勢、殺している」

ケバルは首肯くと、

「本来の俺自身の感覚を麻痺させるよう、長い期間にわたつて訓練されたからだ。お前は違う。生まれながらの殺戮者なんだ」

「ヤマト様は神の子です！」シュルムはさえぎった。「天と地をつなぐ都を建てるお方なのです」

「いつの時代の話をしてんだ。シュメール人の都市が滅びたのちにどれだけの国が起こつて滅びたか、知らねえのか。このバビロンだつて、これまでもこれから先も、何人も主人を代えていくんだ」

この都市のどこにいても目につくイシュタルの門を、ヤマトは見

上げた。ケバルの言う通り、ナンナやイサに対しても塩の砂漠で喉の渴きを覚えたときのような切実な気持ちに欠けていた。本心を明かしてもいいのなら、このまま誰にも知られずにこの町のどこかで静かに暮らしたかった。

ヤマトはシュルムに訊ねた。「監察官の部下だったお前が、不死隊に入ったのは、ケバルの命令なのか」

シュルムは答えない。

ケバルは頬を歪めると、監察官がやすやすと部下を手放すと思うかと聞き返した。

「テイグラネスは失脚したのではないのか」「俺もバビロンに戻って知ったんだが、やつが王の側近を操っている影の宰相だ。あいつは、どんな時も、身の安全をはかるために上手に立ち回るのさ。ロングマヌスより数倍、頭がきれるからな。どちらも非道な点においては人後に落ちないが」

帯状のレリーフの城壁に囲まれた市街をジリジリと焼く太陽がのぼった。天空を圧する高層の建造物を陽炎が包みはじめた。

「帰りましょう」とシュルムが急かした。「遅くなると見張りの兵士に見つかってしまいます」

「先に帰ってくれ」とヤマトは言うが早いか、路上を駆け出した。

「私もともに参ります」

シュルムが追ってくる。

ケバルはついてこなかった。

屋根のある市場の人込みに入ったその時、籠を担いだ小柄な男がそばに歩み寄った。

「背えがたこうなったな。目えも治ったようやし、もう一人前の男やな」

声を聞くまで、あのハシムだと気づかなかった。

ハシムはペツと唾を吐くと、

「犬も歩けば棒にあたるやなあ……まさか、腹心の友を忘れてないやろな」

「ジャミールやサライも無事なのか？」

「へ？ ちよつとは気にしてんのかいな。どこがええのか、ジャミールはお前さんを追っかけて、メソポタミア中を走り回ってるでえ。鬼の攪乱とまでは言わんけど、あの子にとって、あんたは鬼門やな」「どこに行けば会える？」

「わいとケバルの住んでた家にいるようやな。そういう噂や」「無事ならそれでいい」

ヤマトは昨日、王と訪れたハガイの家に向かった。あの男なら、大浴場の壁に印されていたエステルという名の女のことを知っていると想ったからだ。産着に描かれた曲線の模様を記憶していたので、用水路を抜け出すことができた。

エステルは、黄金の隠し場所に気づいたのかもしれない。ティグランスが今も権力の座にあると知って、ヤマトに心にある変化が生じた。

「ヤマト様、裏通りを行きましょう」

旧市街といえども高い防壁がつらなり、歩哨が随所に立ち、用水路や運河からの侵入者があれば警鐘が鳴り、警備兵が飛び出し、戦車が躍り出る仕掛けになっている。

バビロンの守りはいまも堅い。

昼間は閑散とした歓楽街を通りぬけると、貧寒としてうらさみしい路地に出る。さらに立て込んだ路地奥へシユルムとヤマトは駆けた。

王と訪れたあばら家に着くと、先回りをしたのか、入り口にハシムが待ち構えていた。「ここは、わいらのバビロンでの棲み家や」

「お前たちの……？」

きのうと同じように中に入ると、薄暗い屋内であっても誰の目にも止まる、鮮やかな色合いの衣を身に着けたサライが懨然として座っていた。

「ヤマト、お前なのか！」サライは弾かれたように立ち上がった。

「ハシム、あんたも生きてたのか。独り占めした金はどうしたんだ

よ

「いつまでもあると思うな親と金」

ハシムはそう言うと、ジャミールに気づき、痩せたんとちゃうかと心配そうに訊ねた。ジャミールは何も答えない。ヤマトと目があっても、口をきこうとしなかった。

「その首飾りは……どないしてん?!」ハシムはサライの襟元を指さした。

「これか、ジャミールのだ」

「ヤマトの姉さんのものよ」とジャミールは重い口を開いた。

「返していいのか?」

サライはラピスラズリの首飾りを外しかけた。

「もう必要ない」とヤマトは言った。

「バビロンにすれば、会えると思つてたんだろ? どうして黙つてるんだよ」

サライは訝り、ジャミールの手を取り、ヤマトの前に連れて行くとした。彼女はその手を払うと、外へ飛び出していった。

「あいつ、照れてんだな」

サライが呟いたそのとき、部屋の隅から濁った声がした。

「マナはどうなった?」

ハガイが、かまどの前でうずくまっている。

「私の姉とともに、婦人部屋に迎えられた。その後のことは知らぬ」ヤマトが告げると、ハガイは、ひれ伏して泣いた。「どうか陛下

のお眼鏡に叶いますように……」

「お前の姉さん、王の側女になったのか? そのツテでお前もロンギマヌスに気に入られたってわけか」

「そうじゃない」

「女と生まれて、ペルシア王の子を宿したくない女が、この世におりましょうや。こんどこそ……イスラエルの民のために……」とハガイはきれぎれに言った。

「何言うとんねん。ロンギマヌスは美少年がお好みや。そやから王

の側近が国中の乙女のうちでも、特別の美女を探しに走り回ってるんじゃないか」

「やめないかっ」

ハガイは、己れの心の内で蓄めていた感情が爆発したのか、手をぶるぶる震わし、怒鳴った。「出て行けっ。陛下がもうすぐここに来られる。お前らがいては陛下のご機嫌を損じることになる」

「この家は、もともとわいらのもんやでえ」「ここに、ロンギマヌスが来るのか!？」

サライは思案する顔つきになった。

「渡りに船やと思てるな」とハシムは言った。「宦官に化けて、王宮に入り込む魂胆なんか？ ソロモンの黄金を捜し出すには、それが一番の近道やよつてな。昔から、金はあるかないところにある言うからなあ」

頭巾をしたハガイはヤマトの前に額突くと、自分の娘が后に選ばれるように王に頼んでくれと言った。

「そのような権限は、私にはないが、ひとつ聞きたいことがある」

ヤマトは、ハガイにエステルのことを訊ねた。

「話せば長くなる」とハガイは言った。

サライが、あとで教えてやると耳打ちした。

「なあ、わいをのけ者にする魂胆なんか」

「どの道、あんたは王宮に入れない」とサライは言った。

「蛇の道はへびや」

「王宮で仕えることのできる者は限られておる」とハガイは言った。

「料理人にでもなつて、紛れこむしかないなあ」とハシムは言った。

ヤマトは、ジャミールのよそよそしい態度も気にかかったが、それよりも彼らの求める黄金を手に入れば、自分の中で眠っているデアアマトが目覚めるかもしれないとふと思った。

アルタクセルクセスは、王宮からヤマトがいなくなったと警護の兵士から聞かされ、いてもたってもいられなくなつた。シユルムがついているので、居場所が不明になることはなかつたが、それでも黒曜石のように光る瞳が一時でも身辺から消えることは我慢ならなかつた。「王の意に逆らう者など州内のどこにも存在してはならない」と思っているからだ。

ペルシア帝国の王は人間ではない。神なのだから。幼い頃、謁見の間でキダリスと呼ばれる王冠を被り、黄金の杓を手にした父の姿を遠くから覗き見るだけで手足が冷たくなり身体が震えた。母のアメトリスは、アルタクセルクセスの手をとり、囁いた。

「あのキダリスを着用できるのは、お前だけよ」

父のクセルクセスも祖父のダレイオス王の長子ではなかつた。6人いる后から生まれた12人の息子の中からダレイオスの一存によつて後継者に選ばれた。クセルクセスの母親がキュロス王の娘であつたことも、その子が皇太子に選ばれる大きな理由のひとつであつたが、アメトリスの父親・オタネスが軍隊を掌握していなければ、クセルクセスは王位につけなかつた。

「陛下が恩知らずでなければ、わたくしのかわいい息子が次の王になるはずですよ」

アルタクセルクセスは、いつまでも歳をとらない母を魔者のように感じていた。

母はわが子が王位につくのには邪魔となる者たちを、父オタネスの配下を使って次々と暗殺した。証拠などどこにも残さなかつた。

アルタクセルクセスは父の後継者になど選ばれなくなつた。両親に似ず、醜い容貌をしていたこともあるが、神経質で臆病な気質も王にふさわしいものではないと自ら知っていた。祖父のダレイオスは堂々たる体躯に民衆の目をひきつける精悍な顔立ちをし、立派

な髭をたくわえていた。父のクセルクスは晩年、酒色と若い后を溺愛したために威厳を失ったが、若い頃の父王は大勢の將軍に侮られることなどない凜凜しい風貌をしていた。母は、死にたくなければ王位を継がなくてはならないと常にわが子を戒めた。殺さなくては殺されるのだと。母は娘の夫と宦官をそそのかし、寢所にいる父を殺めた。

アルタクセルクスは神よりも母を恐れていた。その母が子をもうけよと命じる。

王である彼が王宮を抜け出して、火の神に祈るのは母の死を願うあまりのことだった。不死隊の幾人かを手なづけたのも、ヤマトを身近に置くのも、いつか母と姉を目の前から抹殺するためだった。姉の夫を王宮の牢獄に閉じこめたように、王家の人間を目の前から消し去りたかった。

部下を連れて、ハガイの家に着くと、驚いたことに、先にヤマトが来ていた。見張り役につけたシュルムもいる。勝手な行動をとったことを叱責すべきであったのに、王は頬をゆるめた。

「きょうもともに祈ろう」と王はヤマトに言った。

「陛下に会わせたい者が、祭壇でお待ちしております」とヤマトは答えた。

アルタクセルクスはきのうと同じように、ハガイに湯をわかすように命じ、部下とともに身体を清め、祭壇にむかった。

そこに青い衣に身を包んだ少年とその従者が待つていた。

親衛隊の面々は、2人の際立った容貌に息をのんだ様子であった。後ろに控えていたヤマトの動揺する息づかいもはつきりと聞こえた。少年は黒い髪に鶯色の目をしていて。従者らしき青年は金色の髪に青い目をし、肌の色も白かった。話にきいた祖父ダレイオスの若い頃の容姿と従者は瓜二つだと思った。ペルシア人はもともと北方の山岳地より移住してきた民族だったがエラム人や、メディア人との混血がすすむにつれ、コーカソイド（白人）の特徴が薄れていったが、祖父は青い目をしていたようだ。

「いずこから来た？」

王に問われ、従者の青年が先に口を開いた。

「ラビ・エズラの弟子、サライと申します。願わくば陛下にまつたき平安がありますように」

「エズラの弟子だと言うのか！」王は喜びをあらわにした。「あの者のように、知恵と知識に満ちておるのだな」

「先生には遠くおよびませんが」

アルタクセルクセスは、瞬きをしないように見える不思議な眼差しで美少年に目を注いだ。「そなたは何者……？」

「わたしの名はダニエル」

「エズラが話してくれた、伝説のダニエルなのか？ バビロニアの王ネブカドネザルの夢を説き明かしたという……」

少年は無言で頷いた。

王は一瞬、めまいがした。

「まさか……百年も前から生きていると申すまか……」

「どのようなことをお知りになりたいのでございましょう」

「ダニエルは、わが帝国の未来を予言したそうだ」

「陛下は何よりも、帝国の安寧をお望みのはず。書き残したと言われる書物が巷に流布しておりますが、それが本物であるのか、ないのか、誰も知り得ません。であるならば、当地のマゴス神官による宣託をお信じなられるべきでございましょう」

「さすがだ。敵をつくらぬほうが得策だと知っておるのか」

「いいえ。真実をお知りになれば、陛下が怖れを抱かれるからでございませぬ」

王は震える声で言った。「王宮にはダニエルに関する資料がある。エズラは解読したようだが、私には、詳細を語らなかつた」

従者が口をはさんだ。「解読できる自信はございませんが、閲覧できますれば、お力になれるかも知れません」

そして、低頭し、「陛下のご時世が、定めのない時まで続きますことを心より念じております。ただし、ご自身の耳となる者たちの

言葉だけをお取りあげになられては時と場合によっては、お考えをあやまることにもなりかねません」

「そなたの申すことが、解せぬ」

サライは、メディア州の要塞での反乱を手短に語った。このような事態は今後、頻繁に起きるだろうと付け加えることも忘れなかった。

「そなたたちもあの地にいたのか？　ところで、幼い王女のお消息を存じておるか」

「おそらく、山賊どもの首領に拉致されたか、あるいは、監察官の部下だった者の手に落ちたと思われる」

王は心のうちで、落胆と安堵の両方を感じた。母がパリサティス王女の生存を知れば、かならず娶れと言い出すに決まっている。母はこれまでの慣例にならない、血族同士の婚姻を望んでいる。彼女の父親を暗殺しているにもかかわらず、王女とわが子の間に生まれた男子を将来の後継者にと考えているのだ。そうすることこそが、アケメネス王家の血筋を絶やさぬためだと母は信じて疑わない。

アルタクセルクセスが即位してまもなく、パリサティスは生まれながら、兄のヒュスタスベスは王宮に王女を召し上げられることを恐れ、バガバイオス王子より年長で、すでに15歳になっていると伝えてきた。その時から、王の心にパリサティスに対する執着が生じた。王女の母親は側女として、婦人部屋にいるが、顔を見たこともなかった。兄の妻だった女と寝る気など毛頭なかった。

「反乱軍の動きについても、そなたたちの知恵を借りたい」と、アルタクセルクセスは2人に言った。ダニエルと名乗る正体不明の少年にも、打てば響くように反応するサライという名の青年の弁舌にも、王は強く心を動かされた。

夜の帳が下りて、歓楽街に灯りがともると、日中の暑さが嘘のように涼しくなった。サライは数日後に王宮を尋ねる約束を王と交わり、ハガイの家を出た。ジャミールとハシムと連れ立って、宿屋に泊まることにした。3人とも商人の格好に身をやつしていた。

「王の母親には、手加減というもんがまったくないらしいでえ。仕えるもんらのもっぱの噂や。そんな恐ろしい女のおるとこへ、男のフリして入りこむやなんて、やめといたほうがええ。バレたらどないな目えに遭うか」

ハシムは壺に入ったビールを飲みながら、ジャミールを引き止めた。

「宦官だった頃のあたしを知ってる者などいないわ。ハガイをのぞいてね」

ジャミールはいつもの彼女にもどっている。

「なんの目的があつて、そんなことするねんな」

「宝探しよ」ジャミールは真顔で言った。

「そんなんは、わいら男にまかशीたらええ。分け前はちゃんとやるよつてな」

サライは、嘘だろと言った。

「あたしね、さっきヤマトに会つてわかつたのよ。どうして、ヤマトがあればど気になつたのかつて……」

「だつたつて、お前、あんなに夢中に……」 驚くよりも呆れるサライに、

「ヤマトがシユメール人で、あたしがダニエルだしたら、いずれ争つことになるよと薄々、感じていたからよ」

ハシムは首を傾げる。「ベッドウインのわいには、さっぱりわからんわ」

「なぜ、出会つてしまったのかしら」

ジャミールはそう言うと、サライに向き直り、「あんたをいじめ
るほうがずっと楽しいのにな」

サライは苦笑した。

「あんだだつて、本気であたしを心配してるわけじゃないでしょ？」

「写字生になりそこなつたときから、欲しいものも、なりた
いものもなくつたからなあ。流れに身を任せてるだけかな」

「気取つてるのね」

「そらそうと、ケバルはどないしてるんや」 ハシムに聞かれ、ジ
ヤミールとサライは口をつぐんだ。

「どないしてんな？ もめ事か」

「そういうわけじゃないんだけどさ、ケバルにはついてけない」と
ジャミールは言った。「そうか」ハシムはそれ以上、何も訊ねな
かつた。

「さてと、王宮に潜りこんだら、凶面を手に入れんな。なんせ、
広いよつてな、そんじよそらの泥棒では、見つけれん」

「黄金は、どこに隠されてるの？」

「さあなあ……。難儀なこつちや。ケバルでさえ見つけ出せんか
たんやからな」

「もちろん、あんたが探つてくれるのよね？」

ハシムは羊の肉をむしり、パンを頬張りながら、「バビロンには、
どこの国の食べ物もあるよつてな。お好み次第や。なんせ、バベル
の塔とやらを再建するらしいよつて、職人もふくめて1万人の奴隷
がかき集められてるからなあ」

「クセルクセスが破壊したと言われているジクラット（塔）のこ
とか？」とサライが聞いた。

「そろそろ取り掛かる時分やろ」とハシムはテーブルを叩き、「お
えらい人のなさることはわけがわからん。親が壊して、息子が建
てなおすやてなあ。その金は誰が払うねん」

「ジクラット……バベルの塔……」

ジャミールは呟くと、頭の前から魂が抜け出たように虚ろになつ

た。サライとハシムが同時に、どうかしたのかと聞いても何も答えずに、店の外へ出て行った。

「メシも食わんと、どこに行くねん？ 憑きもんがついたみたいに突然なつてもて……。なんやしらんけど、さぶうならへんか？」

心配になったサライは自分のマントをつかみ、ジャミールの後を追った。男たちの間を滑るように歩く彼女にようやく追いついて呼び止めた。

「どこに行くんだよ」

「モデルカイのところ」

「お前、あいつがモデルカイという名だといつ知ったんだよ？」

「会ったときから」

サライは不審に思っていたことを口にした。

「てつきり俺は、自分がダニエルに化けるものだとばかり思っていたよ。土壇場になって、どうして急に気が変わったんだよ」

夜目にもはつきりとわかる、ジャミールの大きな瞳の色が妖しく輝いた。

「お前が供でなければ、とつくに帰天したであろう。しかし、死に損なつたおかげか、わたしは本来のわたしに回歸することが可能となった」

「お前さ。ふざけるのもいい加減にしるよな。大病したせいで、頭までおかしくなったのか」

「案ずるほど、長い期間ではない。お前はお前に与えられた賜物を生かし、神に仕えなくてはならない」

ジャミールはヘブライ語で、「神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな。知恵と権能とは神のものである。(ダニエル2:20)」と言った。

サライは鳥肌が立った。「お前、何、たわけたこと言っただよ！ 俺はいまさら法律学者になんぞなりたかねえよ。だいち、俺はお前の従者なんだから、預言者さまを助けることが役目じゃねえか」
ジャミールは笑みをうかべた。

「鉄と粘土とは相混じることがないように、お前とわたしも相合することはない」

「……そうみたいだな」

王の前で、ダニエルと名乗った瞬間、たしかに普段のジャミールではなくなっていた。「お前の友、ヤマトは、その勢力をさかんにし、恐ろしい破壊をなし、そのなすところ成功して、有力な人々を滅ぼすであろう」

「心配すんなつて。俺のほうがあいつより年上なんだから」

「しかし、ついに彼は人の手によらずに滅ぼされる」

「毒にでもあたつて死ぬつてことか」

「お前はこのことを秘密にしておかなくてはならない」

「言つわけねえだろ。早死にするなんて、誰だつて聞きたかねえよ」
ジャミールのやまいは重いとサライは思った。万が一にも何かが憑りついているのだとしたら、呪い師にでも頼めばもとの彼女にもどしてくれるのだろうか。

サライは自らの危惧を打ち消すように、

「2人で、王の心を虜にしてやろうぜ。ついでに黄金を手に入れて、誰も行ったことのない東の果ての国に行こう」

そして、マントでジャミールの身を包むと、涙がこぼれそうになった。見た目よりずっと痩せていた。

「どうした？」

「なんでもねえよ」

「先に帰つて待て」

「わかった」

口では了解したが、彼女を1人で行かせる気はなかった。それに、憑き物の実体を確かめなくてはならないと思った。

先回りをするつもりで、ジャミールとは別の道を懸命に駆けた。

ハガイことモデルカイの家からは、明かりがもれていた。サライは門の扉に耳をつけて内部の様子をうかがい、物音にまぎれて低い塀を乗り越えた。格子窓の下に立つと、話し声が聞こえた。モデル

カイのごった声にまじって、ジャミールの抑えた声が聞こえる。どうして自分より早く、ジャミールが来ているのか！

「あなた様のご命令であれば、何事も従います」

「マナのことは案ずるな」

「お願い致します」

突然、モデルカイのすり切れた声がうめき声にかわった。

驚いたサライは板戸を突きぬける勢いで、家の中に入った。

そこには、刺し傷を負ったモデルカイが倒れていた。

「モデルカイ……」

胸を押さえたモデルカイを前に、ジャミールは立ち尽くしている。

サライはジャミールを一瞥すると、「まさか、お前が殺ったのか。

こいつの口から正体がバレることがそんなに恐ろしいのか！」と詰問した。

「わたしではない」

ジャミールは短く言い残して、煙のように消えた。

倒れたモデルカイを抱え起こすと、途切れがちの息の下から、マナがエステルの娘であることを告げた。

「マナは先の王の子なのか？ 王とマナは兄妹なのか？」

サライが問うと、モデルカイは焼けただれた顔をひきつらせるだけでも答えなかった。

「書き物に……記してある……謎を解け」

モデルカイはそれだけ告げて事切れた。

ハシムも後をつけてきていたのか、サライのそばに腰をおろした。

「ジャミールはどないなってるのやらな」

預かった書状のために、モデルカイは命を落としたのか？ もし

そうだとしても、ジャミールはなんの目的でモデルカイを殺めたのか……。複雑に絡み合った話の糸をどこでどう解きほぐし、繋ぎあ

わせれば辻褄があうのか、懸命に考えた。

「ケバルの命令で殺ったんかいなあ……そんなはずないやろし。まさか、まさかの連続が世間ちゅうもんやよってな、これも天の思召

しやと思っしかないな」

「ジャミールは右利きだ。この傷はジャミールが殺ったんじゃない
！」

「ほんでも現に死んどるやないか」

サライはハシムに手伝わせて、亡骸を家の外へ運びだし、城壁の
外の運河に投げ入れた。

ダニエルと名乗るジャミールが馬に乗り、サライを従えて宮殿を訪れた。

門前にいたヤマトは麗々しく出迎えた。

宮殿内に入ると、王に仕える者たちは、ダニエルの美貌にざわめき立った。

皆、爪先立つようにして、ひと目でも見ようと列をなしている。

ヤマトは、ジャミールを見知っているつもりだったが、目の前の彼女は別人としか言いようがなかった。ジャミールと似ているが、ジャミールのように表情に感情を見せない。黒いフード付きのマントで全身をおおい、足音を立てずに歩くさまはこの世の者に思えなかった。そして、マントの中から放たれる鶯色の双眸の輝きには善とも悪とも判別できない妖気が感じられた。

「何者なの……」人々の声が小波のように広がる。

引き締めた赤い唇からどのような言葉が発せられるのかと、見る者を畏怖させずにおかなかった。

耳障りなドラが鳴りひびき、謁見の間に通すと、玉座には黄金の杓を手にした王と母後のアメトリスが待ち構えていた。

アメトリスは、王の后と言っても過言でないほど、若々しかった。黄金のティアラで髪を飾り、黄金の指輪をし、丈の長い衣の上にゆったりとした袖の薄い緑の上着を着ていた。

「母上、この者は、百年も前から生きていると申す者です」

王が語ると、母後は失笑した。「あなたは30近くになっても、旅の者のあやかしに騙されるのですね。永遠の命などこの世にあるはずがないではありませんか」

母後はそう言つと、さつと手を上げた。広間の天井を支える数えきれない柱の影から兵士らが群がり出てきた。

「母上、何をなさるのです」

「本物のダニエルなら、獅子を手なづけることも、火の炉の中を歩けることも可能なはず。兵士のつるぎにたおれるようでは、預言者とは言えません」

ヤマトは、ダニエルを助けるために身構えた。従者としてつき従っているサライも同じような素振りを見せた。

ダニエルは微笑で返した。そして、「王よ、どうか、とこしえに生き永らえますように」と挨拶の言葉を述べた。

「ほら、とこしえ生き永らえるのは、あの者ではなく、王であるあなた自身なのですよ」 母后はそう言うと、扇でダニエルを指し、「ペルシアの王ともあるうものが、このような詐欺師の口車に乗ってはなりません。あなたに必要なのは、蟻にも等しき者の口舌ではなく、アテネとスパルタの者どもの命をなからしめることです。先の王の恨みを忘れたのですか」

「お望みであれば、いつ、いかなるときにも、この身を献じましょう。ただし、わたしの力をお試しになるためでしたら、無駄なことでございます」

母后は大仰に頷くと、油をダニエルのマントにしみこませて、火をつけるように兵士の1人に命じた。

ヤマトとサライが進み出ようとすするやいなや、ダニエルは2人を制止した。「下がっててください」

「やめろっ!」

大声で怒鳴るサライを兵士らは取り押さえた。

その間に、母后の女官が、ダニエルのマントに油を注いだ。

ヤマトは、ダニエル取り囲む護衛兵士らを飛び越えると、雑壇の真下に舞い降りた。玉座は手の届く距離にあった。

「もし、火を放たれるのであれば、お命を頂戴いたします」

王はヤマトの振る舞いに見惚れていたが、母后は、ヤマトを咎めるように見つめた。

「そなた軽業師なのか……名はなんと申す?」

「ヤマトと申します」

「きょうだいはいるのか」

「はい。姉が、婦人部屋におります」

「名は……」

ナンナと告げると、母后は、気分が悪いので、部屋に戻ると言い出した。

侍女たちが、あわてて母后に手をかし、広間を出て行った。兵士らは、命令を待ったまま、佇んでいる。

王は、ダニエルとヤマトの2人だけを残して、全員、退出するように命じた。

「そなた、火をつけられてもいいと思ったのか」とダニエルに訊ねた。

「御意」とダニエルは答えた。

「ヤマト、お前は、本気で母上を手にかけるつもりであったのか」

「本意ではありませんが……」とヤマトも答えた。

「お前たちはどういう関係なのだ？」

「顔見知りというだけでございます」とダニエルは答えた。

「ヤマトはお前のために母上を殺めようとしたのだぞ」

「わたしの預かり知らぬことでございます。迷惑という他ございません。いまここで、火を放たれても、わたしは死にはしないからです」

「永遠の命などあるはずがない」

「あなたが、わたしの言葉を信ずるなら、帝国の未来を教えましょう」

ウルクの王、ギルガメツシュが探し求めた永遠の命はけっして得られなかったと、シュメールの伝説は伝えている。師のシンドウも、死は平安だと言った。

「バベルの塔を、ふたたび建てなおすことはかなわないでしょう」

ダニエルはよく通る声で言い放った。ヤマトはダニエルの言葉を悪魔の声のように聞いた。

それまで気弱な人物だと思っていた王が、毅然と反論した。

「ユダヤ人の書物にあるバベルの塔という名は、ヘブライ語のバル（乱す）という語に、アッカド語のバル・イリ（偉大な神々の家）を結びつけただけのこと。バビロンでは塔をジクラットと呼ぶ。アツカド語では、エ・テメン・アン・キと言って、天と地の礎の家という意味だ」

ヤマトは驚いて王の顔を拝した。天と地の礎の家……。天と地を繋ぐ都とどう異なるのだろうか？

「メソポタミアでは、神への反逆のためにジクラットを建てたりしない。わが父が先年、バビロニア人の神を崇めるジクラットを打ち壊したのは、反逆の拠点を危惧してのことであつた。いま余が、あらたに建てる神殿は、ペルシア人とメディア人に、バビロニア人を加えて、ひとつの帝国と為すためである」

ヤマトは王には、別の一面があることをはじめて知つた。

「陛下は言うに及ばず、この後、誰が王位を継ごうと、バベルの塔の再建はなりません」ダニエルは譲らなかつた。「神の掟を覆すことは何者にも不可能です」

「設計する者、測量や建築に携わる者もすでに揃つておる。作業工房も、予定の敷地のすぐそばに建つた。春の洪水の前に、1万人でかかれば、完成するだろう」

「天に届くような塔は、わが神ヤハウエが、お許しにならない」

「そのような不遜な言葉を、陛下に対して申しのべるとは！ 心得違いもはなはだしい」母后は立ち上がり、玉座の両脇にある燭台の一方を、手でなぎ倒した。

火の粉が舞い、ダニエルのマントに付着した。

ヤマトはマントを剥ぎ取り、踏みつけて消した。

一方、サライは微動だにしないダニエルの前に立ちはだかり、片膝をついて母后に嘆願した。「なにとぞ、お許しを賜りますように。この者は正気ではありません。悪霊に取り憑かれていますのです」「そうであるうな」と王は頷いた。

しかし、ダニエルの言葉は真つ向から王に刃向かつた。

「日を経た方が天の法廷の裁き主として、栄光のうちに座しておられます。その方に仕えている者は千の数千、その方のすぐ前に立っている者は1万の1万倍います」

従って、神の意に背く者は天罰をうけるとダニエルは昂然と言い放った。

「そのような浅はかな考えではユダヤ人であるエズラを、余がなぜエルサレムに帰還させたのか、永遠にわかるまい」

謁見の間に重苦しい空気が漂った。

王はヤマトを見つめた。「ヤマト、そなたを、ジクラットの建設責任者に任ずる。よいな」

「わたしには知識がございません」

「監督をするだけでよい」

「お役に立てるとは思えませんが、受けたまわりました」

ヤマトは拝命した。人間の知恵を結集して建てるジクラットを、ユダヤの神は何故、阻むのか？ その理由をこの目でたしかめたかった。

護衛兵士に追い出されたサライは夜を待つて、宮殿にとって返した。

ジャミールが昼間、宮殿に向かう橋の上で、「あたしに会いたくなったら、王宮の庭園にある東屋にきて」とサライに告げたことを思い出したのだ。

……なぜ、あいつはあんな無謀な真似をするんだ。

サライは身内から沸き上がる怒りで頭の中が発火しそうだった。

ジャミールはわざと王を挑発しているようにしか見えなかった。

もともとの性格もけっして素直ではなかったが、あのように頑なではなかった。ジャミールに憑依しているらしいダニエルは、宦官であつた故に、人々を恐怖の淵に沈めることに喜びを感じるのだろうか？

宮殿の門前にたどり着いたサライは王に目通りを願ひ出た。門番は狂人と思つたようだったが、サライが頭巾をとり、金色の髪を見せると、即座に上の者を呼びにやった。

すでに何事か命じられていたようで深夜にかかわらず、何重にも閉じられた宮殿内の扉をつぎつぎと通り抜けることができた。

象牙の両開きの扉を召使が押し開けると、王が垂れ幕の向こうから姿を現した。

王はサライを間近に呼び寄せた。

「話すがい」と王は命じる。「どうした臆することはない。あの者の正体をお前は告げにきたのであるう？」

「陛下。お願いがございます。ダニエルに会わせていただけますか」「そのまえに、そなたに会わせたい者がいる」

アルタクセルクセスはそう言うと、長い右腕をかるく上げた。扉がふたたび開いて、エズラがザドクとクズラを従えて玉の前に進み出た。

王はエズラを認めると、「友よ」と言った。

ザドクも思わぬ再会に感激した様子だった。「バビロンにいたのか！」

サライは目を見開いたまま、微動だにしなかった。ザドクはともかく、なぜ、徴税官に売られたクズラをエズラが従えているのか？「そなたは師であるエズラに対して、ひと言のあいさつもないのか」「先生がなぜ、エルサレムではなく、バビロンにいらっしゃるのか。わたしには理解しかねます。そこにおられるお方が先生だと信じがたいのです」

サライは目をまつすぐに上げて言った。

エズラは微笑んだ。「サライ。あなたの疑問はもつともです。至聖所の再建を諦めたわけではけっしてありませんが、わたしの力では、契約の箱のない神殿の完全な修復は叶わないと知りました」

「先生のいまのお言葉は、聞かなかったことにいたします。多くの女と子供が、先生の言葉で夫のもとを去りました。そのことを先生はお忘れでしょうか」

「忘れてはおりません。ただ、わたしにはもつと大切な使命があると知ったのです。そうなのです。夜毎に、神のみ声をこの耳にきくのですよ」

サライは語気を強めた。「わたしの知る者も、時に、なにびとも知らぬ者の声を耳にするようですが、しかし、その声を神だと断定できる根拠などあるのでしょうか。仮に神だとして」

「やめよ」

王はさえぎった。「エズラは眠る時間さえ惜しんで、同族のために奔走したのだ。それを責めることなど誰にもできないはずだ」

「お言葉を返すようですが、イスラエルの民は先生を神の子と崇めております。奇跡を起こす神の子だと」

エズラは穏やかに、「わたしは神の子ではありません。そのことは、はじめからわかっていました。わたしの務めはそのようなことではないのです。あなたにもいわずれ、わかる日が訪れるでしょう。」

天地を創造された神のご意志は人知で推し量れるような浅薄なものではないということが」

「先生は詭弁を弄しておられる。わたしには一生、理解できない」
サライが吐き捨てる、王は微苦笑し、エズラの側に控えるクズラに声をかけた。

「お前は生まれた時から、灰色の髪をしているのか」

クズラはひれ伏して言上した。「わたしは産声をあげずに生まれたそうでございます。このように卑しく醜い姿をしておりますが、陛下のご温情で、お任せさせていただきますれば陛下の足跡すら拝します」

エズラが言いそえた。

「この者は非常に利発でございます。すでに処置もどこしてありますし、陛下のおそばにおいて、宦官として務めさせれば、かならずお役に立つと存じ上げます」

王はしばらく考えている様子だったが、ふと思いついたように、「王宮の宦官として仕えたいのであれば、今後は、ヘブライ語の名をやめ、ファルナウシスと名乗るがよい」と申し渡した。

クズラは口元をわずかに歪めてサライを見上げた。

「サライ、そなたもエズラやファルナウシスのように宦官になればよい。さすれば、王宮と言わず、婦人部屋と言わず、どこにでも自由に入入りできる」

サライは口のはしを歪めた。「ダニエルに会わせていただくまでは、陛下のいかなるご命令にも従えませんが」

「預言者ダニエルのことをお前は言ってるのか」とザドクが口出した。「もうとつくに亡くなられている。馬鹿げたことを言うな」
エズラも首肯くと、

「その者は偽預言者です。エルサレムにも毎年、何人も現れます」
王はわざとらしい高笑いをする、

「そなたのダニエルへの思いは、性急で、余裕のないものだ。エズラの話によると、ダニエルと名乗るあの者は女であるそうだな。」

なぜに、余をあざむく」

そして、独り言のように、「恋のなせるわざか」とつけ加えた。

「もはや、ダニエルは生きていないということでございますか」

「ヤマトもダニエルも死んではおらぬ」

「無事なのですか」

「数日、寛ぐがよい。余やエズラとともに、書物や粘土版に目を通そうではないか」

「わたしに学問は向きません。先生やザドクとはちがいます」

サライは言い捨てると、その場を辞した。扉の外にでると、王を護衛する兵士がサライを取り囲んだ。

その時から囚われ人となった。

数日がすぎ、兵士の警備が手薄になると、彼らの目を盗み東屋に忍んで行ったが、ジャミールの姿はなかった。

その日のうちに、王のもとに呼ばれた。ダニエルやヤマトとの面会をどれほど懇願しても、王は言を左右して彼らの居場所を明かさなかった。エズラやザドクとともに文書庫に行くように命じられた。

サライは、エズラに、王への取り成しを頼みこんだが、エズラは2人の行方を知らないと言うばかりでなんの助力も望めなかった。

「先生、先生は、人の命より、書物のほうが大切なのですか」

「いまは大切です。わたし自身の命よりも重要です。忙しいのです」「手伝わないのなら静かにしている」とザドクは言った。

何万巻とある巻物に埋もれたエズラとザドクは、書物の筆写に余念がなかった。

「そんなことが何になるのです？」

「それを決めるのはわたしではなく、全能の神です」

「もう、先生にはお願いいたしません」

エズラは顔色をかえることもなく、

「サライ。頼みがあります。あなたの所有している書状をわたしに譲ってください。それは、あなたにとって価値のないものでしょうから」

「モデルカイをご存じなのですね？」

「ええ。わたしがあの男に書き物を依頼しました」

エズラは悪怖れなかった。

「先生……もしかして、先生がクズラに命じて……」

「クズラに取りに行かせたのですが、モデルカイは留守だったようです」

「お望みのものは、モデルカイがすでに焼き捨てました」

「残念なことをしました。文字の価値を知っていればそんなことはしないはずなのですが……」

エズラは、別の巻き物に目を転じた。

サライはこぶしを固めた。

……先生は、王のお抱え学者だったのか。

内なる声が聞こえたのか、

「学問は、時流に左右されます。それ故に、苛酷です。時を経ることによって、書物の大半は淘汰される運命にあります。しかし、いまわたしとザドクが取り組んでいることは未来永劫、失われることはありません。なぜなら、唯一の神のみ言葉だからです。真理だからです。ユダヤびとを除いた民は無知ゆえに、八百万の神を信じています。それらは悪霊です。あなたもいつの日かそのことを知るでしょう」

「神などどうでもいいのです。わたしはジャミールの身の上を知りたいのです」

宮殿の庭には、雨期の終わりを告げる透明な光がこぼれていた。

イスラエルではそろそろ小麦の刈り入れがはじまる頃だった。ユーフラテス河を堰き止めようにして建てられたバビロンでは田畑を眺めることはほとんどないが、幾何学模様の庭園はもとより、城壁を囲む街路のそこかしこにも草花が咲き乱れていた。

庭園に出た。

「サライ様」

ふりむくと、クズラが控えていた。

「先生はどれほど、あなたの身を案じておられましたか？」

「なぜ、おれに話しかけるのだ。お前のやったことを内密にしても
らいたいからか」

「モデルカイ様の書状を、わたしにお渡しただかなくてはなりません」

亡霊に出会ったような面持ちで少年を見つめた。まだ一二、三歳の身で、モデルカイを殺めたのだ。茫洋とした顔立ちだが、一筋縄ではないかない意志の強さをその眼の奥に伺わせた。

「クセルクセス王の後となったエステル物語が広くいきわたれば、バビロンやエジプトやアラビアに住む、イスラエルの民の大いなる励みになると先生は申しております」

クスラの声は陰湿だった。「しかしながら、わたしは陛下にお仕える身。またあなた様と同じようにユダヤ人ではありません。モデルカイなる者が宰相にのぼりつめたなどという戯言を、王家の人々が歓迎するはずがありません。どうぞごさいますか？ わたしとあなた様が手を組めば、怖れる者などない位階を手に入れることも夢ではございません」

どこかで耳にした台詞だった。そのハーヌルは今頃、どうしているだろう。

「消失した。事実だ」

クスラはモデルカイのしたためた書状には秘密が隠されていると言った。

「秘密？」

「簡単に解読できないと聞き及んでおります」

サライは花々をわたる熱い風に吹かれながら、思いついたことがあった。しかし、そのことにはふれずに問うた。

「それが、ジャミールを救う条件か？」

クスラは口をつぐんで首肯した。

その足で図書館に出向いた。クスラの話では、文書庫ほどではないが、手に入るかぎりにおいて集めた書物を、バビロンに住む人々

が閲覧できるようにしてあるということだった。

期待はしていなかった。エズラの調べ尽くしたあとだろうから、あるはずはなかった。手当たり次第に巻物を広げた。アラム語の読み書きに不自由はなかったので、なんなく判読できたが目当てのものではなかった。

「捜し物がありましたか？」

丈の短い寛衣のアルタクセスがにこやかに入ってきた。

王は護衛官を下がらせると、

「どうして、わたしが、あなたの求めるものを所持していると思うのです。第一の権力者である影の宰相が隠し持っていると思わないのですか」

王は人前では権威をふりかざすが、人目のないところでは友のようには話した。

「宰相が手に入れたのなら、焼き捨てるでしょう。大方の者は書物に記録以上の価値を認めないでしょうから」

アルタクセスは声を上げて笑った。「あなたの言う通りです。わたしは書物をこよなく愛しています。金銀に代えがたいものだと思っています。イスラエルの民の恐ろしさは書物への偏愛にあります。いつの日か、彼らが世界を大きく変えるでしょう」

「陛下はそれを阻もうとなさっておいでなのですか？」

「エズラを敬愛するわたしがですか？ とんでもありません」

「陛下は歴代の王がそうであつたように、火の神の信者であられる」

「ハガイいやモデルカイも信者のふりをしていましたよ。あなたは何者も神としないようですね。神から離れて、たった一人で、大いなる者の意志に反しようとするのですから真の勇者かもしれませぬ」

「勇者ならダニエルを救うこともできたでしょう」

王は微笑すると、「かつて、ダニエルがネブカドネザル王の夢を解き明かしたように突然、出現したダニエルが過去にしたための書状と同じものを再度、書き表わしてくれるのであれば、わたしの所

持っているすべてのものを与えても惜しくない」

「ダニエル本人の手になる書物は、現存していないのですか」

「伝わる話では、その書はこの世界の終わりの日まで秘匿するように、彼らの神が命じたそうです」

「子供の頃、ユダヤ人の会堂に出入りできなかったわたしは、ユダヤ人書士からイザヤやダニエルの話を教わりましたが、断片的なものでした。しかし、この地にきて、モデルカイを知り、もしかすると、2つの書物を合わせると、多くの者が手にしようとして手にいれられなかったものの在処を知ることができるのではないのでしょうか」

「わたしも、あなたと同じ仮説をたてたのです。ネブカドネザル王の奪った黄金と契約の箱はバビロニアが滅びる時に何者かの手によって、バビロンのどこかに隠されたにちがいない」と。神殿や宮殿が焼け落ちる混乱状態の中で冷静に対処できる者といえば、王にもっとも信任された宦官でありながらバビロニア人を裏切ることに一片の罪悪感も有しない者において他にありません」

バビロンの隆盛と滅びを見たダニエルにはそれが可能だった。時代は下がって、ダニエルと同じようにユダヤ人であったモデルカイは宦官となり王宮に召し抱えられ、そこでエズラと出会い、事実を教えられ、姪のエステルを婦人部屋に送りこみ探索の末、ダニエルの書物を見つけたのだろう。

「陛下は、黄金を欲しておられるのですか。それとも、戦いに勝利すると噂されている契約の箱を所望されているのですか」

「たしかに、そのどちらも望んでいる。しかし、それは自らの栄華のためではない。黄金は従属国を懐柔するために使い、契約の箱は戦いを終わらせるために用いたい。ユダヤ人の信ずる神ヤハウエが彼らの言うように天と地の創造者であるなら何故、争いと破壊を好むのであるう？もし、そのような存在が真の神であるのなら、この世界は不条理なものとならざるを得ない。そう思わぬか」

アルタクセルクセスは踵を返し、立ち去った。

ヤマトは、王の国威振興のための象徴　ジクラット建設の一端を担うことになった。あまたの重臣は、年端もいかぬ者にそのような大事の公共事情の監督がつとまるはずがないと嵐のような反対意見が沸騰した。陛下は気がふれたのだという者までいた。

影の宰相ティグラネスは、侍従長を通して苦言を呈したようだが、王の意向を変えさせることはできなかった。

王はこのような事態を十二分に熟知していたようで、ヤマトを執務室に呼び出すと、本日より、護衛の者と御者をつけるので、その者が案内する現場に行き、工事の進捗状況を正確に把握し、報告書を提出するようと言った。

「陛下、わたしは一介の労働者として汗して働きとう存じます」

「見回ればそれでよい」

戸惑いを隠せないヤマトの前に、イサとシユルムが現れた。

「イサ！」

「ヤマト様、陛下のご聖恩で、この日まで生き長らえました。」

「陛下、ありがとうございます」

「ナンナも元気にしております」

「婦人部屋にいたのでございますか」

「案ずるな。侍女とともにある場所に匿っておる」

「感謝いたします」

シユルムが御者をつとめる2頭立ての戦車にヤマトとイサは乗り、イシュタルの門につづく列柱道路を迂回し、ユーフラテス河に突き出すようにした建てられた城壁に沿って進んだ。途中、船着場があり、穀物の荷おろし作業で大勢の奴隷でこった返していた。下級書記官が積み荷を点検する傍らで、目の色をかえた商人らが発する取り引きの声で喧騒をきわめていた。

宮殿の南に面した、広い敷地に建築資材が山積みされていた。そ

の上に登ると、城壁の外に所々砂丘が見える。その向こうには一面の大平原が広がっていた。

「ヤマト様、バビロニアのネブカデネザル王の時代には、ここから空中庭園が望めたそうでございます」

「空に樹木が生えていたのか」

「高い塔を建て、何層目かには土を運び、植物を植えていたそうです。王は山国のメディアアから嫁いだ王妃を慰めるのために、そのような塔を建てたと言われています」

「王妃を慰めるためにか？」

「それは表向きの理由です。穀物を生産しない都市に住む者たちにはなんらかの仕事を与えて、賃金を払い、それで食い物を購入させなくてはなりません」

「わざと塔を建てるといふことか」

「建造物は己れの名声を後世に残す目的もありますが、人々を飢えから救うためでもあるのです。ほら、ごらん下さい。多くの奴隷が太陽に炒られながら働いています。これを困苦と見るか、労役だと見るかによって、物の見方は大きく変わってきます」

裸同然の男たちは、泥まみれになって煉瓦造りに汗をふりしぼっている。誰一人として戦車をふりむかない。彼らはおし黙って仕事をしていた。

「この光景を地獄絵だと見る者は、都を建てることなど考えないほうがよいのです」

「イサ、わたしはやはり、ここで彼らと働いてみる。陛下への文書は、お前がしたためてくれ」

「どうしてそんなことをなさるのです！」とシウルムは血相を変えた。「陛下にお仕えする、不死隊の一員であるわたしは絶対に手伝いません。奴隷ではないのですから」

「お前がわたしのかわりに、工事現場全体を見回ってくれ。たのむ」
ヤマトは言い捨てると、裸足になり、煉瓦をつくっている者たちの中に入っていった。

日を経て、おおあざみの花がユーフラテス河の土手を埋めつくすと、王は避暑のため、ペルセポリスの宮殿に移ることになった。

臣下の多くもともに移るため、遷都の様相をていしていた。むろん、婦人部屋の女たちも移動する。

サライは彼女たちが輿に乗り移るときを見計らい、ジャミールの様子を知ろうとしたが、長い行列の中からその姿を見つけ出すことは容易ではなかった。

……どこかにいるはずなのだが……。

その時、馬上のザドクが近づいてきた。サライの落ち着かない拳動を見咎めたエズラがザドクに伝えさせたのだろう。「陛下に疑われるような行動はつつしむように」と、彼は、耳打ちした。

サライはエズラへの不信の念をますます強めたが、従うしかなかった。本来なら、王の随行員に加われることなどない状況下にあった。それを、写字生の1人に推挙してくれたのは他でもないエズラだった。

王の一行は、南へ南へと陸路を進み、バビロンを出て三日目に海の見える小高い丘にたどり着いた。入江には、竜の形の軍船や、白い帆の商船がいくつも浮かんでいた。

はじめてアラビアの海を目にしたサライは海面に浮かぶ、いく艘もの軍船に帝国の強大さを実感した。

人々は、船での旅立ちに気を高ぶらせている様子だった。

いつのまに輿から降りた立ったのか、

「どうです？」

アルタクセルクセスは不自由な右手をかばうようにして左手で彼方を差すと、

「海洋の広さに匹敵する砂漠をこの目でたしかめたことはまだありません」

海に対する賛美を惜しまない王の言葉に嘘はないと思ったが、サライは銀を流したような海面から流れる湿気をふくんだ熱い風に閉口していた。

「そなたの目をたのしませると思っていただけが……」

「ダニエルはほんとうに無事なのですか」

「なんと尋ねれば、気がすむのだ」

彼女の安否を確かめないままにペルセポリスに向かうことは、サライにとってもっとも意に反することだった。そのことを告げると、王は片頬で笑った。

「安心するがよい。ダニエルは船で待っている」

「まことですか！」

「侍従長から、そのようなことを耳にしました」

「侍従長は何も知らないと、先日、陛下がおっしゃいました」

「そうだったか？ 思い違いをしたのだ」 煮え切らない王の態度に、もしかすると、彼女は生きていないのかもしれないとサライは疑いはじめた。

おとなしくしていれば、いつか、彼女と会えるかと信じて永遠とも思える数週間を耐えたのだが、その間に彼女の気配さえ感じることさえなかった。

「目を見開いて見るがよい。あれがいまから乗る船である。いくさには役立たないが、王の権威を象徴するにはこれ以上のものはない」
王の所有する船の帆は白い鳥が羽を広げたように美しかった。

「陛下は実用より美をお望みなのですね？ だから、ダニエルを……」

「そうつつかかるものではない」

一行が入江に着くと、漕ぎ手となる奴隷が、牛の糞を張りつけたどろ壁の家々から大勢引き出されてきた。

入江は半裸の男たちで混雑した。

積み荷が先になったため、王の身边を警護する百人余りの騎馬兵士ともども全ての人が乗りこむのに半日要した。

サライは兵士のために船から下ろされた縄梯子を使って乗船した。船は陸地を離れると、水面を滑るように進んだ。水夫たちはマストにのぼり、指揮官の指示に従い、帆の向きをかえた。

エズラやザドクとともに船底に近い船室で寝起きすることになった。幾層にも分かれた船内の狭い一室は窓のないせいか、悪臭がした。

水夫が甲板を洗う作業を見ているほうが気晴らしになったが、海の荒野　ペルシア湾の天候は気紛れだった。穏やかだと見惚れていると、一瞬のうちに高い空に暗雲がたちこめ嵐の様相をていした。風向きも逆方向になった。帆を張った船は酔ったように行きつ戻りつした。船体の下方に突き出た無数のオールを漕ぐ奴隷たちのあえぎが甲板にまで伝わってきた。立っていられないほど風が吹き荒れるとは夢にも思わず、舳先が上下するさまを天地が揺れ動くようだと感心して眺めていた。

「馬鹿なことはよしなさい。死ぬ気なのですか」
嵐がおさまり、船体の揺れが一定すると、エズラはじきじきに顔を見せ、サライを船室に呼び戻した。

ほどなく王に召し出された。
幾何学模様の厚手の布地で仕切られた広い船室のほの暗い灯りの下に、アルタクセルクセスは無言で立つと、穏やかな微笑でサライを見つめた。

その視線を跳ね返すと、王は低く笑い、背後の布地に視線を転じた。

かすかに人の気配がした。

衝立てのかわりをしている一枚の布地を、サライは引き下ろした。物陰の椅子に彼女が腰かけていた。

「ジャミール！」

思わず、本名で呼び駆け寄ったが、面やつれした彼女は無言だった。

「どうしたんだ。俺がわからないのかっ」

彼女の手を握りしめた。しめった手だったが拷問をうけた形跡は手や顔のどこにも見られなかった。ただ、青い首飾りはなくなっていた。

「ジャミールに何をしたのです！」

「やはり、エズラの申す通り、預言者ダニエルではないようだな。スーサには、ダニエルの墓がある」

サライは唇を噛みしめた。「彼女は自分をダニエルだと信じてました」

「余は、神に認められた地界の王である」

アルタクセルクセスは毅然と言った。「ダレイオスの孫にして、クセルクセスの子です。ダニエルの名を騙るこの者は何者だ？」

「彼女は……」

「エズラの話では頭のやまいだそうだ。しかし、こうして痴れ者のふりをしていることも偽りであるかもしれぬ。エズラの助言もあって、皆を近づけないように監視しているのだ。今後、そのつもりだ」

「私が看病します」

「余の許しを得るために、そなたは犠牲を払わなくてはならない。それでもかまわないと申すのか」

「陛下の意のままに従います」

王はジャミールのそばに歩み寄ると、「これでもか！」

いきなりジャミールの頬を打った。

「何をするんです！」

「見るがいい。この者を……」

彼女は幼児のように声を放って泣き出した。

「ジャミール……」

「捉えて以後も、この者はダニエルと称して不可解な文言を口走ったと耳にしている。しかし、エズラとその弟子は何も口にしなければと秘匿している」

サライは、王の真意に気づいた。

「何をすればよいのですか」

「エズラの目論みを探ってほしい」

「目論み？」

「言葉には不思議な力がある。多くの者が帝国に未来がないと信ずれば、わが民は不安にかられ、外国人は希望をもつことになる」

「陛下は先生に疑いの目をもっておられるのですか」

「どうか」

王とサライが話している間、虚ろな鳶色の瞳は涙を流し続ける。

サライはジャミールの手をとった。

「俺はここにいます。ジャミール、安心するんだ。もう誰にも指一本、触れさせやしない」 ジャミールは泣きやまない。

「彼女の理性は無になったのだ。そなたの献身はなんの意味もなさない」

「意味があるかないか、それは私が決めることです」

サライは自分とジャミールのために別室を用意してほしいと懇願した。アルタクセルクセスは受け入れてくれた。

2人きりになると、ジャミールは、首飾りと呟いた。

もともとジクラット建設の陣頭指揮には、バビロン総督のトリタ
ンタイクメスはその任にあたっていた。しかし、ヤマトは人々と
もに汗を流し、煉瓦作りをしてみても総督が何の指令も出していない
ことに気づいた。労働者のほうも一見、黙々と働いているように見
えるがその実、手抜きをしていた。以前より肥え太ったトリタ
ンタイクメスは終日、天幕に陣取り、インド犬と戯れているのだから、
彼の目を欺くことはむずかしくなかった。

挨拶に出向くと、

「この地でふたたび会いまみえるとは夢にも思わなかったぞ」

ペルセポリスに旅立った王命により、ヤマトは直属の部下として
彼の指揮下に入ったが、トリタンタイクメスはヤマトにも見回るだ
けでよいと言った。

「することは何もないぞ。マゴス祭司団のおかげで、工事は一向に
はかどっておらん。切り出した石は船着場に積み上げたままだ。年
寄どもに、煉瓦だけは造らせておるが」

ヤマトが怪訝な顔を見ると、

「王の威命であつても、バビロニアの祭司どもは、マルドゥクとア
フラマズタとイシュタルの神に祈願してからでないと、煉瓦を積む
工事にかかれなうと言つて憚らない。歴代の王が、バビロニア人の
祭司の機嫌をとつたせいで、こんな面倒なことになつてしまつた」

「高塔の神殿建設は祭司団にとつても、長年の願望だと聞き及びま
したが」

「アフラマズタを祀る神殿ならな。連中は陛下が秘かに、火の神の
教組であるゾロアスターに心酔していることを知っているんだ」

「神殿が、火の神のために建てられると疑つていふのですね」

「祭司団にとつては死活問題だからな。先代のクセルクセス王はそ

れまでの王と異なり、バビロニア人の信仰するマルドゥク神の神殿も聖塔も跡形なく破壊したあげくに、金色に輝く神像を鋳溶かしたのだ。その時の恨みのせいかな、建設に従事する職人や奴隷に、工事に手を貸せばマルドゥク神に呪われると吹聴している。皆、本気で怖れて、飢えているくせに本気で建設工事にとりかかろうとしない。強制的に働かせても、毎日のように足場から落ちて死人がでる始末だ」

トリタンタイクメスは、1万人の労働者を差配することに関心がないように見えた。このままの状況が続けば、資材が無駄になるおそれがある。

「閣下の軍の兵士をさいて、建設現場に派遣していただけないでしょうか」

「食糧を盗む奴隷どもを痛めつけるためにか」

「いいえ。工事に従事させます」

「それはならぬ。兵士は、いくさに備えて日々鍛練しておる」

「では、兵士のために貯蔵庫にある穀物を建設に携わる者たちにも分けていただけませんか」

ヤマトはトリタンタイクメスと話すうちに、彼が穀物の横流しをしていることに気づいた。そのせいで、奴隷が真剣に働かないのだ。「抜け駆けしてでも、陛下の機嫌をとりたいのか！」

トリタンタイクメスは気色ばんだ。

「そのような姑息なことはもとより望んでおりません。私は、伝説でしか知らない塔が建ち上がるのをこの目で見てみたいだけなのです」

「バビロンはシュメール人の手によって建てられたとき。メソポタミアそのものが、お前たち祖先の影響を色濃く受け継いでいるが所詮、滅びた民の末裔なのだ。なぜ、陛下がそのような者たちを登用するのか理解に苦しむ」

ヤマトは、トリタンタイクメスに協力を仰ぐことを諦めた。

イサを従え、ジクラットの基礎となるアバダナ（基壇）を設計す

る者を訪問した。シユルムは王の護衛兵士として、ペルセポリスに旅立っていた。

宮殿のある一画に住まう屋敷の壁は、青く輝く煉瓦で飾られていた。

ヤスマハと名乗った彼は、ヤマトを目にしたとたん、客間に引き入れた。

「あなた様が、シユメール人の中で秘かに囁かれているティアマトの子、ヤマトなのですね。いつか、お目にかかれる日がくると固く信じておりました」

「力を貸してほしい」とヤマトは言った。

「造作もないことですが、ここの働き手の多くは、強制移住させられた人々です。彼らは腹をすかしているだけではなく、神殿を建造する喜びを知りません」

「建造する喜び？」

「私たちシユメール人は、立ち働くことに意味と喜びを感じますが、彼らには苦役でしかありません。マゴス祭司団は彼らの気持ちを知り尽くしたうえで、呪いという言葉であおっているのです」

「煉瓦は造っているが……」

「どろ煉瓦をいくら造っても、焼成煉瓦の強度に及びません。それに铸件職人をはじめ、鶴嘴や鑿、測量用の縄を扱える職人がいないと、ジクラットの建設は到底むりです」

「なぜ、職人が配されていないのだ？」

「自由民の職人は、賃金のよい都市を渡り歩きます。おそらく大半がペルセポリスにいるはずですが」

アルタクセルクセス王は、職人のいないバビロンにヤマトを残したことになる。

「私は、なんとしても誰もが驚くほど高い塔を建てたい。イシユタルの門やこの屋敷のような青い煉瓦で塔をかざりたいのだ」

ヤスマハはしばらく考えていたが、わかりましたと答えた。

「ユダヤの神の怒りに触れたと言い伝えられる、天に届くような塔

を建ててみせましょう。シュメール人の誇りを後の世につたえるために」

ヤマトは大きく頷いた。イサは不安な顔色を見せた。

船の旅は順調に進んだ。

サライは昼間、エズラとザドクに与えられた部屋で、筆者の手伝いをした。朝夕、サライはジャミールの看病をした。

彼女は毎朝、衣を絞らなくてはならないほど寝汗をかいた。断続的につづく高熱のせいで絶えず痙攣を起こし、時に飲み物さえ拒んだ。口をこじあけようとすると、顔をそむけるだけでなく暴れるので、彼女の顔色は次第に土気色に変わっていった。

王は護衛兵士も連れず、しばしばジャミールの様子を見にやってきた。

「あいかわらず、病状は回復せぬな」

「陛下……」

「薔薇水を届けさせよう」

王は何くれとなく身辺のことを気づかせてくれた。

専制的な君主の顔は、そこにはなかったが、ヤマトの姉のものだったという首飾りは取り上げたままだった。

「そなたにも是非、ペルセポリスの宮殿をその目で見てもらいたい。世界でもっとも美しい建物だと言っても過言ではない。完成にはまだほど遠いが……。あと百年はかかる」

「陛下は完成をごらんになれないのですか」「百年後を想像するだけで、胸が高鳴る。わが子孫が、先祖の偉業を知り、涙するにちがいない」

歴代の王の夢と野心が託されているというペルセポリスの宮殿は王の思いとは異なり、完成することはなかった。王の死後、約百年後（紀元前330年）に、アレキサンダー大王によって燬くも炎上する。しかし、廃墟と化す運命にあることを見通すことはいかなる王にも不可能であった。

「エズラの書き物に目を通したことがあるか」

「多少ですが……」

「やはり、近い日にペルシアは滅びると預言しているのか？ それ
が定めだと……」

サライが目を上げると、王は、

「意外な顔つきをしないでほしい。過去から将来に起きるあまたの
出来事のすべてが、ユダヤの神の意志にもとづいてなされたものな
のか、どうか……。私はそのことにいつも心をくだいてきた。終わ
りの日に至るとはどういうことなのかと。そして、それは必然なの
か、偶然なのか、余には永遠の謎に思えるのだ。ユダヤ人の神はな
ぜ、わが帝国を、多くの人を滅ぼすのか」

アルタクセルクセスは同意を求めると、サライを見つめた。
「ペルシア帝国を建てたキュロス王は偉大な王であった。8頭の白
馬にひかせた、黄金の金具をつけた太陽神の戦車にのって進軍する
ことをならわしとしていたそうだ」

「ユダヤ人に限らず、囚われびとに対してもっとも寛容な王であつ
たとユダヤの律法書にも書かれています」

王は孤独な笑みをうかべた。「しかし、ユダヤの神はこの帝国が
滅びることを願う。そのためにこの世にユダヤ人を誕生させたかの
ように」

「陛下、私に考えがあります」

「どのような？」

「先生への信望が地に落ちれば、イスラエルの民の信仰も多少は揺
らぐでしょう」

「いまでも、エルサレムでの神殿の再建につまづき、十分に信望は
失っておろうが」

「いえ、まだ充分ではありません。先生が神に選ばれし者でないこ
とを、目に見えるかたちで証明しないことには、人々は心のどこか
で先生によって、奇跡がなされると期待し続けるでしょう。私にお
任せくだされば、陛下の意に添うよう努めます」

「エズラを裏切ると申すのか」

「先生は、ジャミールがダニエルと名乗ることを恐れておいでなのです。なぜなら、先生こそ、ダニエルの後継者たらんと心に期しておられるからです」

どうして、エズラが心に期しているとわかるのかと王は尋ねた。

「先生は、イスラエルの民のために律法書にご自分の考えを書き加えようとなさっています」

「なぜ、そう思う？」

サライは確信をもって答えた。バビロンで教育を受けたからだ。「帝国に伍して文明を築けないのなら、文明そのものを否定するしかないと感じたのです」

「見返りに何を求めるのだ」

「ジャミールが首にかけていた首飾りを、賜りたいのです」

王は承諾した。

煉瓦造りに従事する老人たちを目の前にして、ヤマトは石段に立ち、まず本日より、自分が、トリタンタイクメス総督にかわって工事の指揮をとることを宣言した。そして、

「この仕事は、お前たちにとって、なんの意味もない。弱った足腰をさらに弱めるだけだ」

2千人余の老いた奴隷はどつと笑った。煉瓦造りは老人の仕事だった。残り8千人の若者と壮年の男子はイサの指図で、船着場に集められていた。女たちは労働には従事せず、双方の男たちに弁当や水を配る役割を担っていたが、老人たちに配られる食糧も遅れがちで、女たちの仕事は主に水汲みだった。

「朝早くから夜遅くまでの労働も、老いた身には辛いことだと思う」少年にしか見えない、この若者は何を言いたいのかと、老人らは好奇の目で見た。

「手始めに、人員を4班に分ける。1班と2班は2交替で煉瓦を造る。3班と4班も2交替とし、こちらは煉瓦を焼く。従って、半日しか働かなくてもいい。石を運ぶ者たちも今後は2交替制となる」どよめきが起きた。

「わしらの食糧も半分になるのか！」と声があがった。

後ろに控えてたイサが答えた。「食糧は倍に増やす。ただし、いかなる宗教であろうと呪いを口にする者、あるいはその話に耳を傾ける者は働かなくてもよい。当然、食糧は配布しない」

「お前さんたちは、マゴス神官の言葉を怖れないのか！」

その問いには、設計者のヤスマハが答えた。「いくら堅牢な足場を組んでも、高い場所での仕事に死と怪我はついて回る。マゴス神官の言うように、無事に工事はすまない。しかし、それは呪いなどではない。何かを成し遂げようとすれば、危険はつきものだ」

老人たちは口々に野次った。

「帰れ！」

「息子らに、危ない仕事はさせん」

ヤマトは声を張り上げた。

「私はメソポタミアで随一の高塔を建てたい。建物の外観もかつて誰も目にしたことのない美しいものにするつもりだ。ユダヤのヤハウエやバビロニアの神々が嫉み、怒る建物を建てたいのだ」

「気が触れてるのか」と誰かが言った。「高慢にもほどがある」

「天罰がくだるぞ」

「人々を罰する存在が神であるなら、私は神などいらぬ。神と戦う」
「なんといいおそろしいことを……お前は神と肩を並べようというのか」

「そのような気はない」

「神は、むしろに永遠の命を約束してください」

「永遠の命と引き替えに一生、奴隷でいいのか。王族も貴族も神官も兵士も、われわれと同じ人間なのだ。神に祈っても、軛から解き放たれることはない。神のように永遠に生きたいと多くの人々は願う。それほど、人の命は儂い。しかし、死を覚悟して生きれば、あらゆる軛から自由になることは可能だ」

1人の老人がおずおずと、

「あんたは、約束を守るか？」

「守れないときは、この命をやる。死を怖れるな。私の師は、死は平安だと言った。われわれは神に届く塔を工夫して建てよう。技術を身につければ、お前たちの息子らは高塔を建てる職人となり、自由の民として、己れの行きたい場所に行き、そこで家族と暮らすことができる。お前たちが、息子や娘を説得しろ。神ではなく、自らを頼みとせよと。食糧はかならず充分に与える」

そして、つけ加えた。いかなる神であっても、高みをめざす人間を呪い、罰するのならそれは神の名に値しないと。

「われわれは神と争うのではけっしてない。自らを高めるために、働くのだ」

ヤマトは自分の口から発せられる意図しない数々の言葉にいつしか酔っていた。人を殺めるとき感覚とどこかで共通している。血しぶきをあげて、人がたおれるとき、それが自分の身に起きてもかまわないと思う。何度も突き刺すような殺害方法は好まない。ひと太刀で相手の命をなからしめることはその者にとって悲劇ではない。悲劇とは、奴隷のように家畜のように戦わず死ぬことだ。

チグリス河の河口からペルシア湾を南下した王の船は、ペルセポリスにもっとも近いブジールという港に入ると、一旦、荷をといて数日そこに滞在した。

町の大通りを王の一行が進むと、漁師とおぼしき男たちや家畜を引きつれた男たちが列をなして現われた。彼らは手にした魚や穀物を椰子の葉にのせて王に捧げた。

王は家来に命じ、祝宴に招待するむねを彼らに伝えた。

人々は口々に王の威光をたたえた。

この地に暮らすペルシア人は鬪争心の強い遊牧民と違い、権威ある者に服する民のように見受けられた。肥沃な土地柄にもよるのかもしれないが、イスラエルの民のようにつよい信仰もないかわりに、総じて穏やかであった。

実のなる木立が立ちならび、大きな石で岸を囲った灌漑水路や貯水池が村の至るところに設けられていた。

低木の茂みの間を遊歩道が通じているたたまいは、一行の長旅の疲れを癒し、夕べの宴は、星月夜の下でおそくまでつづいた。

小羊の丸焼きの匂いが人々を饒舌にした。ひどく痩せているが、そのことでより一層高貴な風貌のダニエルを間近に目にした村人たちは、彼女を天上に住む者の生まれ変わりだと土地の言葉で崇めた。そのありさまを目のあたりにした王は、

「首飾りひとつで、やまいが完治するとは、どういふことなのだ」と首をかしげた。

完治したのではないと知っているのは、サライ人だった。ダニエルは、かつて自分が女性であったことや、ジャミールという名であったことなど完全に忘却していた。サライのことは従者として記憶しているようだったが、自らを人知を越えた存在である故に性別についても何の疑いもなく男子だと信じていた。

王は傍らのサライに耳打ちした。

「彼らのはあの者を神のごとく特別の人間だと思っているようだな」

「神のごとくとおっしゃいましたが、それでは、それにふさわしい地位をわれわれにお与えください」

と眉ひとつ動かさずサライは言った。一瞬、傲慢の極みであるように思えたが、口に出してみると至極当然の要望に感じられた。

「そんなことをすれば重臣たちがなんと行ってそしるであろう？

そのまえに、エズラが妬むやもしれぬな」

エズラやザドクの乗るラクダは王の計らいで王の行列とはべつに行程をとり、宴には招かれていなかった。

サライの心を見透かすように王は、

「わが帝国に居住するユダヤ人の、エズラへの信望は絶大であるからな」

「しかし、陛下に軽んじられることが、続けば如何でしょう」

山の幸、海の幸を満喫した王の一行はふたたび長い行列をととのえると、狭い渓谷の道を高地に向かった。人家は果樹園と同様に山の斜面にそい棚状をなしていたが、高度が高くなるにつれて牧草におおわれ樹木は小さな群れをなして至るところに生えていた。

山岳の谷間に足を踏み入れると、木の柵で囲まれた農園が眺望できた。水は清らかで、空気は清浄。非常にしのぎやすかったが、ラクダやラバの歩みははかどらなかつた。途中から雨も加わり、一行は岩だらけの険しい山道と格闘した。

「例年のことなので慣れている」

王は穏やかに言うが、積み荷を下ろさなければ、駄獣が通れない困難な道だった。従者といわず、騎馬兵士といわず、荷を担いだ。侍従長も王の剣を捧げ持って歩いた。行列の中で、輿に乗ったまま移動できるのは、王と婦人部屋の女たちだけであった。そしてもう1人、ジャミールことダニエルがいた。

サライはダニエルの輿のうしろを歩いた。ザクロス山脈の緑の尾根と尾根の間を染める海と同じ色の澄みきつた晴れ間がのぞくと、

綴れ織りの溪谷の道をのぼりつめていた一行の眼前に突如、白亜の城壁が充分に植林された山腹の間に立ち現われた。

兵士たちは声を発して、アフラマスタの神に感謝の祈りを捧げた。彼らは、眼前に広がる肥沃ないつくかの谷や巨大な建造物に恐れおののくかのように涙さえ見せた。

輿に乗った王がサライを呼び寄せると、高ぶった声で言った。

「すばらしい眺めであろう！」

ダレイオス？世の命によって建てられたアケメネス朝の聖なる宮殿は壮麗であると同時に堅固な要塞でもあった。ラマハット山の中腹にある台地いっばいに威容を誇る石造りの城である。周囲を険しい山々に囲まれ、岩間の狭い道が天然の守りとなっている。難攻不落と言っても過言ではなかった。

一行はゆつくりと入城した。

人間の顔をした牡牛の像に迎えられて城門を入ると、天にとどくような高さの石柱がかぎりなくならび、大階段の両脇には同じ衣服の大勢の召使が控えていた。王の輿を先頭に、騎馬兵士がつづき、「クセルクセスの門」をくぐった。

空に映えるいくつもの噴水と四対の真つ青なトルコ石のドームが一行の眼前にそびえていた。

銀の馬車に乗りかえた王は林立する円柱の間をゆつくりと進むと、「入場の間」に降り立ち、出迎えの高官たちにかかるくうなずいて見せた。待ちかねたように、美しいドレスの少女たちの手で花びらがまかれると、歓呼の聲が大広間にこだました。

キダリスを被ったアルタクセルクセスは黄金の杓をもち玉座に座し、手をかろく上げてこれに応えた。

「われわれの神、アフラマスタの祝福をうけ、われわれこそ、永遠に神とともに歩む、唯一のすぐれた民族であることをわたしは皆の者に告げる」

経済的首都はバビロン城に、政治的首都は宰相のいるスーサ城に譲り、即位式をはじめ、重要な儀式はすべてこのペルセポリスの宮

殿で行なわれていた。したがって、ここに住む人々は祭事のために暮らすことが義務づけられているといつていい。

「この宮殿においては、われわれは平和のしもべである」とダレイオス？世のために建てられた謁見の間で、アルタクセルクセスは自信に満ちた声で宣言した。

大理石の柱の上には前後に頭を持ったライオンや牡牛の像が乗っており、壁には朝貢の列を表したレリーフが見られた。磨かれた石が敷きつめられた床には、塵ひとつ落ちていなかった。ダレイオス王は自らの故国を「美しく、馬と人の豊かなところ」と誇らしげに描写している。

いままでに目にしたどの都市も家畜の臭いがしみこみ、足繁く行き交う人間の声とさまざまな騒音が塵芥のようにたちのぼっていた。ヤハウエを知らない民は不潔だと教えられていたサライは、違うと思わず呟いた。

高地に入ってから以来、たびたび息苦しさ襲われたが、ここへきてカルチャー・シヨックも加わり、さらに息苦しくなった。

アルタクセルクセスは、「この宮殿に悪は存在しない」と言った。市の中心には四つの市場と九つの大浴場があり、あふれる湯と笑い声に満ちていた。

王はダニエルとサライを従え、馬車に乗り、市内のあちこちに出かけた。ここでも人々はダニエルを崇めた。

「ベルテシャザルの再来だと思っっているのである」

と王は言った。ベルテシャザルとは、ダニエルの別名だった。

「彼は、バビロンのネブカデネザル王に仕えたのち、メディアびとのダレイオス王にも仕えたと言い伝えられている。ベルテシャザルは老いることなく、いまも生きていると人々に信じられているのだ。不死などこの世にあるはずもないというのに」

「しかし、臣下も民も、陛下に対して、『定めのない時まで生き長らえますように』とご挨拶を申し上げます」

とサライは言った。

「生き長らえるということは、永遠の命を意味しない」

アルタクセルクセスはそう言うと、宮殿にもどり、召使に巻物を持ってこさせた。

「余が手に入れた、生前のダニエルの側近がしたためたと思われる書状には、ダレイオス王に仕えた頃までが綴られている。しかし、エズラが隠し持っている書状には世の終わりの時までが記されているという」

王は、右手に持った巻物を羞かしげに差し出した。

「これをそなたに見せることが未来にどのような影響を及ぼすのか、余にはわからぬが、おそらく、そなたらが余の前に姿を現したことが、すでに運命のような気がしている」

いくども耳にしたダニエルという名の文字がサライの目に飛びこんできた。

「そなたの意見を聞きたい」

「おそらくエズラ先生は、預言者ダニエルの書状に加筆されたのでしよう」

アルタクセルクセスは大きくうなずいた。「終末の預言であることはまちがいないのですが、わたしたちの想像を越える表現なので読み解けません」

「なぜだ？」

「判読しにくくすることで、時の為政者の迫害を恐れたのでしよう」
「それだけだと思うか」

アルタクセルクセスは問いかけた。

「預言者ダニエルが、現実に存在したのか、しなかったのか、律法学者でない私にはわかりかねます。ペルシアとメディアの記録に彼の名はありませんでした。バビロンの文書庫で、それを知り驚きました。しかし、多くのユダヤ人は、彼の恐ろしい預言と比類ない容姿を記憶し、言い伝えていきます」

アルタクセルクセスは別の巻物も差し出した。「この巻物を記した者も、ダニエルと同じようにバビロンの囚われ人であった。彼も

また、世界の終わりを預言している。神の栄光がエルサレムを最終的に離れ去った故に神が全地を破壊するとしたためている。神はど
うあっても、この地を滅ぼしたいらしい……」

王は呟くと、巻物をサライの手から引き取り、

「そなたのかつての同胞は見張り人のようにあらゆる民の滅亡を預
言するというわけだ」「神の前に正しくないからだ、彼らから教
わりました」

王は笑った。

「今宵、そなた1人で、余の居室に来てほしい」

内密な相談があるとアルタクセルクセスは告げると、部屋を出て
行った。

サライはエズラを裏切ることに意を唱えなかった。ジャミールの
本来の心が失われたいま、すべてが虚しく、心ときめかすものは何
ひとつなかった。風を追い、雲を追うようにして彼女とともにこの
地まで来たが、いったい何を得たというのか。ヤハウエは「へり下
った者たちの霊を生き返らせ、打ちひしがれた者たちの心を生き返
らせる」というが、なぜ、ジャミールの心は生き返らないのか……。

その夜、ダニエルは高熱に見舞われ、激しい吐き気に襲われた。

王の居室を訪れなかったために、アルタクセルクセスは召使を寄こ
した。サライは事情を述べて、応じられないと伝えた。

「医師はどうしたのだ!」

サライは、見張りの兵士に怒鳴った。

「ただいま、まいられます」

サライは火のように熱いダニエルの手を堅く握り、囁いた。「お
前は、ほとんど何も話さないが、俺が少しでも傍を離れることを嫌
がるようだ。わかったよ。お前がどんなに変わっても、俺はいつ
までも待ってるよ。もとのお前に戻るまで」

三日間、ダニエルは生死の境をさまよったのちに、意識をとりも
どした。サライが声をかけると、うすくまぶたを開け、口をひらい
た。

「サライ……わたしは、大天使ガブリエルに会った。彼は、幻を見せてくれた……この世の終わりにかわるものだ」

いまいる場所がバビロン城でなく、ペルセポリスの宮殿だと伝えても、ここは、スーサ城のウライ川のほとりだと言って譲らない。

サライは王にダニエルの言葉を報せた。

翌日からアルタクセルクセスは毎日のようにダニエルを見舞った。体力が回復するとともに、ダニエルの言動はさらに不可思議なものになっていった。

王はサライに筆記するように命じた。

2つの角のある雄羊はメディアとペルシアの王で、雄山羊はギリシアの王だとダニエルは言い、その角が4つに折れて、4つの国が起こり、これらの国も滅び、ひとりの邪悪な王が起こり、聖なる民を滅ぼす……。

サライは書き取り、

「つまり、さまざまな王国が起こり、最後の王は神に滅ぼされると言っているようです」 凍りついたように動かないアルタクセルクセスはいつになく苛立った声を出した。

「われわれの次に起こる国はギリシアだということか……」

「そのようです」

サライは王の前に頭をたれると、「しかし、ギリシアにとって代わられないための策がございます」

「どのような策だ」

「ギリシアは都市国家の集まりだと聞き及びました。中でも、アテナイとスパルタとは犬猿の間柄だそうです」

「聞かずともわかっておる」

「どちらの国にも、軍資金を貸し付けては如何かと」

「話にならん。その金でわが領土を攻めてくるにきまっておる」

王はサライを一瞥すると、若輩の考えることはやはり早計だと言い残し、部屋を出て行った。

船着場に陸揚げされた10?を越える岩石が、火の立ち上る煉瓦工場のそばまで運ばれる。木材のソリに載せ、巨大な岩石に太いロープを結んで大勢で引つ張る。ソリの下に枕木を敷き、油を塗りつけ、すべりやすくする。非常な重労働の上に危険がともなった。安全靴もヘルメットもない時代のこのような作業がどのようなものであったのか、想像の域を出ないが、多くの人命を犠牲したことはまちがいない。

ヤマトはどれほど血が流れても妥協しなかった。代償として、食糧は充分に与え、休息もとらせた。支払う賃金は夜陰に乗じて、剣と弓矢を用いて貴族や富裕な者たちの屋敷を襲って得た。イサをはじめ、信頼のおける者たちの手を借りて掠奪を繰り返したのだ。またたくうちにバビロンの富裕層は恐慌をきたした。しかし、ヤスマハのもとには職人が集まり、ヤマトの手足となって戦う者たちが増えていった。

「塔の建設は名目にすぎないのですか」

「いや不機嫌イサにヤマトは答えた。」

「われわれの力を誇示するための必要悪なのだ」

食糧が行き渡るようになると、奴隷はいきいきと働くようになっていった。一日一日と塔は高さを増していった。

トリタンタイクメスはヤマトとその部下の仕業だと知っていたが、自らの軍が警護する食糧庫さえ襲われなければそれで由とした。野盗の横行はいまにはじまったことではなかったからだ。いちいち目くじらを立てていては、王の軍の去ったバビロンでは暮らせなかった。だが、貴族たちは被害をさけるために、トリタンタイクメスに労働者への食糧の配布を迫った。イサは、これでトリタンタイクメスも動くだろうと警戒した。

「われわれの命はいつ何時、総督の手の者に奪われるやしません。」

どうでしょう？ 近頃は、家族で塔に寝泊りする者も増えてまいりました。ヤマト様もそのようになされては 毎朝、上に登っていく時間が増えたいないこともありますが、敵から身を守るには、高い場所は最適です」

しかしヤマトは、いまのまま煉瓦を焼く工場のそばで寝起きすると言った。

「危険すぎます」

「心配するな。おのれの身の安全をはかる者に誰も従いはしない。見よ。近頃では、子供たちまでが、煉瓦を積んでいる」

「高い場所に登る遊びだと思っっているのでしょうか」

この塔の建設が帝国に君臨する王の権威のためのものであっても、名もなき者たちにとっては日々の苦役以上のものではない。しかし彼らの言葉の端々から、宮殿や貴族の屋敷を見下ろすことに愉悦を感じていることが見てとれた。

マゴス神官団が立ち現れては、怪しげなまじないの言葉を記した護符を書きつらね、ひたすら祈祷しても、護符を買う者はなく悪魔に取り憑かれるのは神官のほうだと言うようになった。

問題もあつた。塔が積み上がっていくに従い、高度な技術が要求される。白人奴隷に知識のある者は少なかったが、ユダヤ人の能力の高さは奴隷の中でも群を抜いていた。しかし、ヤスマハは彼らを現場監督に登用せず、バビロンから離れたウルクの町からシユメール人をかき集めてきて主立った仕事は任せた。

「ユダヤ人は土着の民に同化したように見えても、かならずただ一人の神を持ち込む。そして、人々を恐怖に陥れる」ヤスマハのユダヤ人への不信の念は強かった。

「工事がはかどらないのではないのか？」

ヤマトが案じても、

「これでいいのです」とイサも言う。

われわれも彼らを裏切るが、彼らもわれわれを裏切る時がくると彼はいう。

「民族の違いは憎悪を増増させます。どちらに非があるわけでもないのです。血がそうさせるのです」

互いに裏切ることのわかっているユダヤ人に対して、友愛を示すことは罪だとイサは言った。

「私は妻子さえ捨てたのですから……」

その夜、空には星が一面に輝き、空気は冷たかった。

アルタクセルクセスは王宮の自室でサライをお気にいりの椅子の座らせた。

「“学びの家”に入学するときには生涯、身を清く保つことを誓ったのか」

「愚かだった私は、教義に心酔することと学ぶことは同じなのだと誤解していました」

「余も、あらゆる知識を得たいと望んでいる。書物を通してだけ識るのではなく、その道の権威ある者の言葉をじかに聞きたいと思う」アルタクセルクセスは深いため息をもらした。「ギリシアには、さまざまなことを研究する学者が多くいるらしい」

「帝国内から学者を招聘なさればよいのではありませんか」

「重臣や神官がそれを許さない。帝国の基盤が不確かだった頃のほうが、自由に学ぶことができたが、いまでは、王のもっとも重要な職務は神に祈ることになってしまった」

「陛下ご自身のお考えで、火の神に祈っておられるのではないのですか」

「祈っても、祈っても、ギリシアの傭兵を雇い入れなくては帝国に安泰はない」

常に何事か逡巡しているらしいアルタクセルクセスは、この国には余のものだと言いきれるものなどないと言った。

翌日から、サライは一日の大半を図書館ともいえる王の書齋で過ごした。

ダニエルは、王と過ごすことを厭い、与えられた部屋に閉じこもっていた。

エズラやザドクがどこにいるのか、消息を知ることもなかった。

平穏な日々が続いた。

一步、部屋の外に出れば、壮麗な宮殿での生活は贅をきわめていた。建物もだが、女たちの衣装も絹がふんだんに用いられ、裾の長い衣は、さながら蝶が舞うようだった。

宮廷内を我がもの顔に行き交う宦官と同じように、サライはどこへでも自由に出入りすることができた。ペルセポリスに移ってから、侍従長に勝って王の信任を受けると言われ、重臣たちからも丁重にあつかわれた。

宰相ではないが、宰相にかわらぬ立場だと宮廷内の人々は噂した。ペルセポリスでは王と妃のみが、神殿と王宮のある聖域に住むことが許される。臣下や兵士は、東部に広がる低地に屋敷を構えていた。アルタクセルクセスは自らの手で設計した建設中の宮殿にサライとダニエルを住まわすと言い出した。

婦人部屋の女たちは王宮の奥まった建物に集められ、ハーレムをつくっていたが、王の訪れはなく、無聊をかこっていた。

世継をのぞむ者、のぞまぬ者が入り乱れてサライのもとに偵察にやってきた。そのなかの一人に、アイシャもいた。

「おひさしぶりにございます」

彼女は背筋をのばし、物言いたげな瞳をいっぱいに見開いてサライを見上げた。

サライは、盗賊に売られたアイシャの美しく成長した姿に声もなかった。

「兄のメシラムも宦官となり、達者にしております」

「どうして、お前たちがここに……？」

彼女はそれにはひと言も答えずに、

「ジャミールは病気だそうですね？」

うなずくと、うつすらと笑みを浮かべた。

「陛下は、あなたをこの他、お気に入られていると聞きました」

「何が言いたい？」

「そのせいで……エズラ様が気懸かりです」

「先生の居場所を知っているのか？」

「知っております」

彼女はつぶらな黒い瞳を伏せると、話をつづけた。

エズラは王の不興をかい、死を賜わったが、母妃の口添えで命拾いをし、いまでは地下牢に閉じこめられていると言う。彼女とメシユラムとはその口振りから、母妃に仕えているようだとわかった。

「理由はなんだ？」

「エズラ様はジャミールの口走る言葉は、悪霊の為せるわざだと陛下下に申し上げたのです」

「そんなことを……」

「陛下の母君は、エズラ様を哀れんでおられます」

「ザドクはどうしている！ 彼も捉われているのか」

「これ以上は、申し上げることはできません」

アイシヤは急に言葉をにごし、立ち去った。身なりからして、贅沢な暮らしをしてようだったが、彼女の去ったあとには不穏なおいが漂っていた。

サライは王の執務室へ出向いた。

「陛下、エズラ先生は地下牢にいと聞き及びました。会わせていただけますでしょうか」

「あなたのその率直さを、余はこよなく愛しているが、そうすることとで周囲の者を危険に陥れると思わないのか」

「ここにいる何びとも陛下のご命令に逆らえませんが、ということとは、はじめから命など存在しないことになります」

アルタクセルクセスは笑みを浮かべた。「ここにいるすべての者が、死んでいるも同然と言いつけるのか。いいだろう。余は寛大な為政者でありたいと願ってきたが、たった一度の刑罰で、すべてを台無しにしたようだな」

「その逆ではないでしょうか。陛下はそのことで、すべてを手に入れようとなさっている。ユダヤ人を快く思っていない神官や重臣たちの信頼を得られません。ちがいますか？」

「約束してほしい。エズラの姿を見ても決して声は立てないと」

「ザドクは無事ですか」

「欲張つてはならぬ！」

王はサライを一喝すると、宮殿の外に出た。

しばらく歩くと、空き地があり、深く広い穴が掘つてあつた。アルタクセルクセスは屠殺場であることをサライに告げた。エルサレムでは考えられないことだつた。宮殿のすぐそばにこんなものを設けるとは。

「この地方は空気が乾燥していますから、腐臭も苦にならないのだ」
アルタクセルクセスは明るく言った。

エズラは屠殺場の傍にある建物の地下に捕らえられていた。彼は鎖に繋がれ、夜中だというのに臼を挽かされていた。律法書にあるサムソンのように……。

「ユダヤの士師と同じに遇しているのだ」

王の声を耳にして、エズラは手を止めた。番兵の鞭が鳴る。エズラの閉じたまぶたはあらぬ方を探っている。

拷問されたようだつた。

サライは忍び足で近寄り、よろよると立ち上がるエズラの整つた横顔に目をこらした。彼の面差しからは、いかなる場合にも高貴な光が消えることはない、サライはあらためて知つた。

一方のアルタクセルクセスは、ひきつるような愉悦の表情を隠さなかつた。それだけでは足りずに飛びはねるようにして、エズラの周囲をまわつた。

「さあ。あなたの神はどこにいるのでしょうか？ なぜ、忠実な下僕のあなたを助けられないのか。イスラエルの神と民を欺き通した余には栄光をお与えになつたというのに、あなたはどうか。民に裏切られ、王という最大の庇護者にも見捨てられ、鞭打たれるとはなんという悲惨。あなたの愛するヨブと同じ運命、身の上ではありませんか」

アルタクセルクセスはエズラの頬に唇を寄せると、

「トラーと呼ばれる律法書以外の書物に手を加えたのはあなたですか？ただそれだけの問いに答えることをあなたは拒んだ」

王は突然、齒噛みをし、「あなたがたのありがたがる巻物には神の言葉などかかれていない、とわたしは口走ると思つたのですか？ 呪われた民の結束のために山師たちが都合のいいように記し、利用しているだけだ、と」

「陛下は、言葉とは、神から与えられるという真実に目を閉じていられます」

「善良なヨブは罪を犯さなかったが、全身が吹出物でおおわれ、足が萎え、財産も、子も、妻もいつさいを失つたのです。それが事実だ。のちに、神がすべてを戻してくだされたと記述しているが、あれは、あなたのような賢明な者があとから書き加えたのだ」

エズラは諭すように、

「王よ、あなたはかわいそうな方だ。心に真の神をもたない故に、目に触れることのない真実に生涯気づくことがないのです」

アルタクセルクセスは身をよじつた。笑い声が地下牢に虚しくひびいた。

エズラは手探りで挽き臼のそばに座ると、「まちががなく、神の裁きは下されます。神を欺くことは誰ひとりとしてできない。陛下は私や民を操り、神を出し抜いたつもりなのでしょうが、全能の神には通じないと断言できます」

「ダニエルは、ペルシアが滅びるのはずっと先だとすでに預言しているー！」

「言っておきます。ペルシアが滅びるのは、陛下の世ではない。神の裁きはあなたの頭を逸れていく。しかし、あなたへの神の裁きは目に見えないかたちで現われるでしょう。かつてのバビロンが一夜で滅びたように、この宮殿も一夜で滅びますが、そんなことはささいなことだと、思い知る日がやってきます、かならず……」

アルタクセルクセスの顔から血の気が失せた。「あなたは余だけではなく、父王までも侮蔑するような書物をモデルカイの名で書き著そうとしている。これは帝国への反逆です。許されざる罪です」「罪があるかないかは、神がお決めになられます。神の言葉にいつ

さいの虚偽はありません！」

「まだ認めようとしないのでですか！ 私はあなたの優れた学識をこの国の誰よりも理解しているつもりです。幼少より、兄とも思うあなたのようにありたいと願ってきました。しかし、王位を引き継ぐ者となった以上、あなたの信念を打ち砕かなくてはならないのです」

エズラは挽き臼を回しながら、サライの立っている方角に顔を向けると、呟いた。「自分というものがないのか」

アルタクセルクセスは自分への嘲笑だと思い、長い右腕を振り回し、

「あなたの亡骸は晒し者にされ、鳥どもの餌食になる」と吐き捨てた。

「為すべきことがあるはず」

エズラはそうつけ加えると、ふたたび臼を挽くために前屈みになった。そして、彼はもう二度と口を開かなかつた。アルタクセルクセスのエズラをののしることはだけが煉瓦の壁にこだました。王はサライを振り返ると、彼は死を望んでいる、と言った。

「願わくば神が陛下を祝福し、陛下を守られますように。願わくば神がみ顔をもつて陛下を照らし、陛下を恵まれまように。願わくば神がみ顔を陛下にむけ、陛下に平安を賜りますように」

エズラは口の中で反芻した。

アルタクセルクセスは涙を見せた。そして、サライとともに地下牢を後にすると、星がこぼれ落ちそうな宮殿の庭を歩いた。

「余はあの者にとこしえに勝てない」

教団の一室でまなんだヨブの物語をサライは思い出していた。イスラエルの神に忠実であることを貫いたヨブに、もしも、アルタクセルクセスの言ったように悲しみしか訪れなかったのなら、神とはいったい何なのか？

エズラのいまの境遇を見ても、神のみ業を信ずることはできない。神は信ずる者を見捨てたもうではないか。

「余はこの腕が短くなるようにと、あらゆる神に祈った。しかし、

どの神も何も応えてはくれなかった。神など、この世界に存在しないのだ。そう考えるほうがよほど気が休まる」

「なぜ、先生をエルサレムに帰還させたのです」

「奇跡などないことを証明したかった。そして、滅びなどないことを」

「ダニエルはやまいのあとで、人のように見える大天使が終わりの日のことを告げた、と言っていました」

「夜と昼が入れ替わっても、終わりの日はくるようだな」

「エジプトもペルシアもメディアも滅びるそうですが、そうすれば、イスラエルのような小国を支配する国がなくなります」

イスラエルに自由が訪れるという幻想が信仰を生んだと、王は言った。そして、その幻想は、この世界が滅びるまでなくなならないとつけ加えた。

アルタクセルクセス王が華美な行列を仕立てて、新年を迎える行事のためにペルセポリスへと旅立ってひと月が過ぎた。かつてのバベルの塔を真似た円形の建物は都のどの場所からも仰ぎ見ることができるイシュタルの門を越える高さにまで達していた。しかし、高さが増すごとに墜落死する者が続出した。ヤスマハの言葉を借りれば設計上に誤りはないが、前人未到の高所で足場を組む作業なので、危険がともなつて当然であると言つ。

「地上では微風を感じる風も、高所では強風となります。木材や煉瓦を担ぎ上げる作業がどれほど困難なことか、おわかりになると思いますが……」

ヤマトは毎日のように工事現場を見て回っていた。積み上げた煉瓦を補強するために漆喰を使わずアスファルトを用いたが、塗装作業の途中で数えきれないほどの人数の男たちが落下した。下の階に住み着いている家族は夫や息子の無残な骸を目のあたりにし嘆き悲しむと同時に、翌日からの暮らしの不安を訴えた。

「ここを出ても、どこにも住む場所などありません」

働き手を喪つた家族は交替要員となる者とその家族に住居を譲り、路上での生活に移らなくてはならない。地上での仕事より賃金が高いうえに日払いで支払われる、高所での作業を望む若い男たちはいくらでもいたからだ。

ヤマトは寡婦となつた女や子供たちのために、建設資金の増額を王に願ひ出た。

護衛兵士として随行していたシユルムが王の書簡を携えて戻ってきた。ヤマトが王に宛てた嘆願書への返書である。円筒印章の捺印のある書簡をひらくと、塔の進捗状況を尋ねる内容しかしたためられていなかった。ヤマトの願ひに関してはいっさい触れられていない。

「陛下は、塔の建設をとても愉しみにしておられます」

シユルムはそう言って、傷のある顔をほころばせる。監察官の部下だった頃の彼は殺気立っていたが、王の傍近くに仕えるようになってからは、宮廷武官らしく言葉づかいも別人のように変わっていた。

イサは眉を逆立てた。「なぜ、私になんの相談もせず、嘆願書など送ったのです」

設計者のヤスマハも困惑を隠せない様子だった。「これで総督は、ヤマト様を追い落とせると腹の底でほくそ笑んでおりますぞ。まずは工事への妨害も酷くなりますな」

バビロン総督であるトリタンタイクメスとヤマトとの軋轢は日毎に増していた。トリタンタイクメスは資材の購入費用や職人への賃金は王命により出費したが、ヤマトとその仲間が盗みを働く報復措置として奴隷への食糧は出し渋った。そればかりか、傭兵を使って建設半ばの塔への破壊工作を公然と行なった。階段状の塔の一部が壊されたことで落下する頻度がさらに増していた。

イサはもはや、ザイナブのもとに立ち返るべきだと提言した。

「ペルシア湾に詳しい水先案内人を探して、ビブロスへ連れ戻りましょう」

「ここでの仕事がある」

ヤマトはイサの言葉をしりぞけた。

「万を超す奴隷たちの身の安全や暮らしなど気はかけるのはどだい無理な話です。ましてや寡婦へ賃金を支払うために、資金を王に所望するなどもつての他。野盗まがいの手段も、総督の雇ったあらゆる者のおかげで近頃では思うにまかせないのが現状です。われわれの食糧でさえ、ザイナブに無心して羊や酒や小麦を送ってもらいましたが、新年を迎える頃には底をつきます」

「わかっている」

「金を与えなくとも、住むところがなくとも、女子供や老人はどうにかして生き延びます。それが、奴隷なのです」

「餓死する前に、なんとかしてやりたい」

「何かもくろみがあるのですか」と、シュルムが上目遣いにきく。

「ソロモンの黄金を探そうと思う」

「馬鹿な！ おのれのために探すならともかく忠誠心などかけられない連中のために探すなど正気の沙汰ではない！ 第一、これまでに数えきれない者たちが、探索して見つからなかったばかりか、命を失っているのですよ」

「ザイナブのもとには、戻りたくない」

ヤマトの率直な答えにイサは齒噛みし、

「私とあなたとは、ザイナブに雇われているのですよ。船団を率いる司としての見聞をひろめるために、バビロンに遣わされたではありませんか。お忘れですか」

「恩義は忘れてはいないが、もはや何者の命令にも従いたくない」
自分でも思いがけない言葉を発していた。後継者にもと望んでくれる男を自分は裏切ろうとしてるのだから。

「今の私たちは無力です。ザイナブの庇護なくして何事もなりません。ロンギマヌスのわがままに付き合わされるより、ザイナブの船団を率いて交易について学び、近い将来のために備えるべきです」

「将来？ 今ここに、われわれの助けを必要とする者たちが大勢いる」

「何もわかっておられぬ」

イサは、ヤマトが幼いの頃にしばしば見せた冷笑を浮かべた。あの頃、この世でもっとも憎むべき相手であったことを、ヤマトは思い出した。シュルムには告げていないが、彼の母親であり、自分たち姉弟の乳母であったアヤイナを殺した男なのだ。師であるシンドウを介して再会しなければはるか以前に、憎悪を忘れるために存在そのものを脳裏から消し去っていただろう。

「あなたの言う大勢とは、いつも遊び相手をしてやっている子供たちのことも含めて言っているのですか」

ヤマトは、母親の手が離れたばかりの年齢の子供たちに剣の使い

方を教えた。薪にする木で、子供たちは剣術遊びに興じた。

「彼らの大半は文字は書けず、数も読めない。奴隷の子として生まれ、奴隷として生きるしかない宿命なのです」

イサの目にはヤマトが無益な労力を費やしているようにしか映らないようだ。

シユルムがうるんな表情で呟いた。

「ヤマト様につき従う者たちを連れ、ギルガメツシユ王の建てた都われわれの祖国ウルクに行くという案はどうですか」

「ビブロスへ戻らないのなら、そのほうがまだましかもしれません。なんと申しても、あなたはティアマトのお子なので、残り少ない同胞の者たちにとって王の帰還となりましょう。しかし、それには相応の覚悟がいります。ペルシア帝国と敵対することになるのですからね。それならそれで、いいでしょう。あなたをシユメールの王にすることに、私はおのれの夢をかけたのですから、その夢が破れることもまた一興。何しろ、わが王はひと握り兵士と子供とでペルシアの精鋭軍と戦うおつもりのようなのですから。そのようなことをシンドウは教授しましたか」

イサは、ヤマトの変心を責めた。

「私はこの地にくるまで、流されるままに生きてきた気がする」

「シンドウや私の操り人形だったとでも言つつもりなのですかっ」

イサの語気が荒くなった。

「ティアマトの子としてふさわしくあらねばならぬという思いはあったが、ティアマトの子でありたいと思ったことはない」

停滞している建設現場を毎日のように見て回り、塔を破壊する傭兵を見つければ斬り殺している。しかし、寝起きする天幕に戻ると名状しがたい思いに捉われた。いつから自分は、人の命を奪うことになんの躊躇いも感じなくなったのか……と。平常心を保つために日誌を書いた。筆記用具はイグサの刷毛を油煙に浸して用いた。知らず知らずのうちに覚えたアラム語の文章は簡略なものであったが、したためるうちに数々の疑問が生じてきた。イサの言うように真実、

自分はティアマトの子なのか？ 嵐の海で雷に打たれ、傷ついた目の視力が戻つのは偶然にすぎないのではないか？ もしかすると、シユメール人の末裔でさえないので？ ただひとつ、はつきりしていることは、いまも、将来も為すべきことは、天と地をつなぐ都を建てることなどではないということだ。

その思いは日毎に強くなっていた。帝国の各地から駆り集められた奴隷は部族も信仰する神もまちまちだった。言葉さえ通じない者たちもいた。戦いに敗れたために奴隷の身分となった男たちは総督の兵士から厳しく監視されている。美しく若い女は凌辱され、兵士の子供を産む者さえいる。彼らが一時的に工事を遺棄したのはマゴス神官団の呪いのせいなどではない。他に抵抗の方法がなかったのだと今ならわかる。

工事の責任者がトリタンタイクメスからヤマトに替わることで、彼らの考えも変わった。労働に対して支払われる僅かな賃金に大きな喜びを見いだしている気配がありありと伝わってきた。この金でいつか自由の身になれるかもしれないと夢を描いているのだろう。もしいま、塔の建設からヤマトが手をひけば、彼らには苦役しかなくなる。トリタンタイクメスは彼らに餓死しない程度の小麦しか与えないからだ。彼にとって、奴隷はインド犬以下のものであった。「バビロン総督府の税収を知っていますか」とイサは言った。「毎日、1アルタベの銀（55？）麻袋2つ半です。それらがトリタンタイクメスの許に集まるのですよ」

バビロンを中心とした地域一帯が王の必要物資を賄い、直属の軍隊を養っている。他の19州の税収をはるかに上回り、軍事費の4割をバビロニア州でまかっている。

「トリタンタイクメスこそ、王がもつとも警戒を要する相手なのです。塔の建設は総督府の財政を弱めるための王の企みです。あなたは王に利用されているのです。そんなこともわからずに……」

イサはこぶしを固めた。

「従ってくれる者たちを見捨てられない。塔を建てることを彼らに

誓ったのだから」

「彼らへの責務など、あなたには毛筋もありません。私やシユルムのように、自らの意志で、あなたに従っているのではないのですから。彼らの人生は家畜のように食べて働いて眠るだけです。死を賭しても敵と戦おうとは露ほどもない」

ヤマトは首を横にし、

「サカ人もバクトリア人もエジプト人も反旗を翻した　ギリシア人はペルシアに勝利さえした」

「それで帝国は、滅びましたか？　ギリシアは帝国を築きましたか？　ただちに異変が起きると思わないが、この国が、衰退に向かっていることは否めない」

イサは希望的観測にすぎないと言ったあとで、

「王となる野望をもつ者は施しを考える前に、敵となる者をいかに倒すかを考えねばなりません。いくさを仕掛けるばかりが能ではありません。王はスキュタイ軍の進攻に手を焼いて、ギリシア人を傭兵として彼らを雇い入れています。王の側近に知恵者がいれば、近いうちに、ギリシアの各都市は覇権を争い、反目するようになるでしょう」

「王などどうでもいい。塔の建設に携わる者たちの境遇を守ってやりたいと思うことが、それほど間違っているのだろうか」

イサは薄く笑い、

「万が一にも黄金を手に入れて、奴隷に施して、それから何がしたいのです？」

「自由の民にしてやりたい」

「間違っている」とイサは3度、繰り返して言った。

ヤマトは、シユルムに命じた。「監察官の手の者だったケバルとハシムを捜し出してくれ」

「彼らを使って、影の宰相を殺めようとも言つのですか」

イサの言葉による攻撃はやまなかった。

「姿は見せませんが、ティグラネスなら奴隷に施せる大金を十二分

に所有しているでしょう。メディア人の彼は、アカイメネス家の後継者です。本来なら、王とも称される立場です。だからこそ、王もトリタンタイクメスも、ティグラネスの命脈を絶てないのです」

ヤマトは耳を貸さなかった。

「早急に探してくれ。バビロン市内にいるはずだ」

「承知しました」

かつて自らもティグラネスの部下であったシユルムは即座に応じた。

すでに2人の居場所を知っていたのだろう。

シユルムが立ち去ったあと、イサは、無謀な考えを改めるようにと再度、ヤマトを説いた。

「ソロモンの黄金など契約の箱と同じで、ユダヤ人の伝説に過ぎません。なぜ、そのようなありもしないものを得ようとするのですか？ ティグラネスばかりかロンギマヌスも手を尽くして探していると言われています。仮にバビロン城内にあったとしたら、とつくに発見されているはずですよ」

一攫千金を望むような方法では何事も為せないとイサは諭すが、ヤマトは聞き入れなかった。こんなことはかつてなかったことだった。イサの目には怒りと落胆がないまぜになっていた。

「このような無謀なお方だったとは……」

ヤマトは常日頃、思っていることを口にした。

「私のために、お前が妻子を捨てたことを思うと、その言葉を一言一句、聞き入れるのが当然だとよくわかつています」

「奴隷を引き連れて、海を渡った預言者にでもなりたいのですか？」

あなたはメシアでも預言者でもないといサは吐き捨てた。

「知っている。私はつまらぬ人間だ。お前の望む者になることはないだろう」とヤマトは答えた。

その夜、闇にまぎれて2人はやってきた。以前のように、サカ人らしくとんがり帽子をかぶり、斧を背負ったケバルはヤマトと顔を

合わすなり、

「お前もとうとう金の亡者になったか」と笑った。

「世間のことで、金で解決できんことはないよってな」

ベドウインのハシムは干したイチジクを黄色い歯でかじりながら、
「何事も、成るも成らぬも金次第や」

ほんまやでえと自らの言葉に頷き、

「しかし、歳とらん顔やなあ。出おつてからかれこれ3年になるや。髭も生えとらんし、ひよつとして一物を切り落としとるんかいな」

ハシムの戯言を耳にするのは、久方ぶりだった。ヤマトは思わず笑ったが、イサは露骨に嫌な表情をした。

「シユメール人は髭を剃るのが、習わしだ」「あんたは、髭がのうてもしつかり老けてるでえ」

ケバルは2人の間に割って入った。

「まず、計画を言ってみる」

ヤマトは頷くと、あらかじめ書いておいた地図をひろげた。

「水路はくぐり抜けられたが、経路を鮮明に記憶しているわけではない。ただ、牢獄の壁に産着の絵柄があつて、その線を思い浮べて、水の中をたどるうちに外の運河に出たように思う」

「善は急げや。いまから行こうやないか」

はしやぐハシムを見下すように、イサは言った。

「ユダヤ人のダビデが地下水道を通つて、エブス人の支配下にあつたエルサレムのシオンの砦を陥落させたようにうまく事が運ぶとも思っているですか」

「お前なー、何が気にいらんねん！」

「エルサレムとバビロンとは、用水路の規模が比較にならない」とイサは言った。「バビロン市内に網の目状に張り巡らされた運河の数は兩岸を合わせると360余りある。宮殿内に侵入する水路をさぐるだけで1年はかかる」

「そんなことはとづくに承知してるさ」とケバルは険しい声で言い返した。

「黄金を見つける前に溺れ死ぬぞ」

イサの言葉を、ヤマトは無視した。

「城門を通って宮殿に入るとはまず不可能だ。しかし、運河と繋がる排水口を利用すればハーレムの湯殿にかならず忍びこめる。その近くに黄金は隠されているはずだ」

「どうして言い切れるんだ？」

さすがのケバルも、首を傾げた。荒唐無稽な行いであると思っ
ているにちがいない。

「見つけてみせる」

「ティグラネスの命令で、あちこち探して見つからなかったものを
たつた一日で見つけ出すなんてのは、無理じゃねえのか」

「確信がある」とヤマトは言った。

シウルムは、目を輝かせると、

「ハーレムの女たちの大半は今、王に従ってペルセポリスにいます。
残っている女たちは年寄りばかりですから、私が信用のおける者を選
んで案内を頼みます」

と請け負った。

「ついでに小舟と船頭も調達してくれ」とヤマトは言った。

ギルガメツシュは、永遠の命を得るために船頭を雇ったが、自分
は黄金を得るために船頭を雇おうとしている。人々が神と呼ぶ超越
者の目に正しいか、正しくないのか、そんなことはどうでもよかつ
た。自分の命を守るためという名目で狩人が狩りをするように人を
殺めてきた。いまからしようとすることも大きな差はない。ただ異
なることがあるとすれば、姉のナンナが過去を断ち切り自らの生き
る道を選択したように、弟の自分も自らの意志の命ずるままに生き
たいと思つようになつたことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866q/>

天と地をつなぐ都

2011年11月5日19時14分発行